熊本県文化財調査報告第257集

小野原遺跡群

黒川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

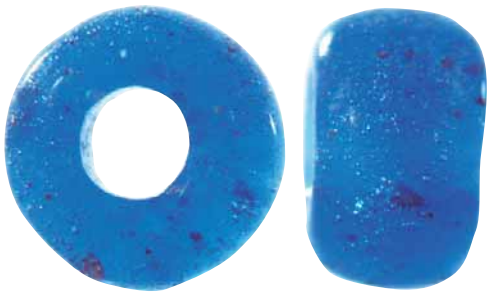
第1分冊

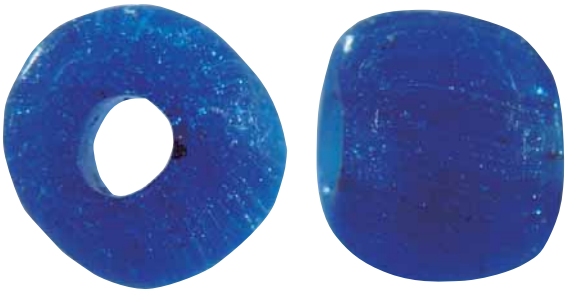
31 March 2010
熊本県教育委員会

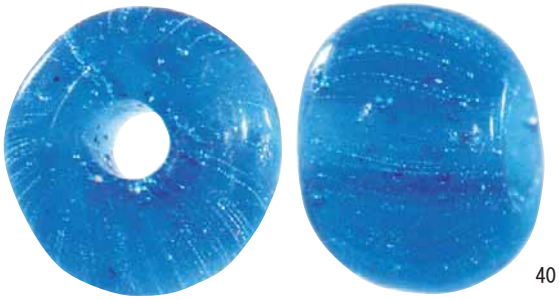
▼　下扇原遺跡　全景

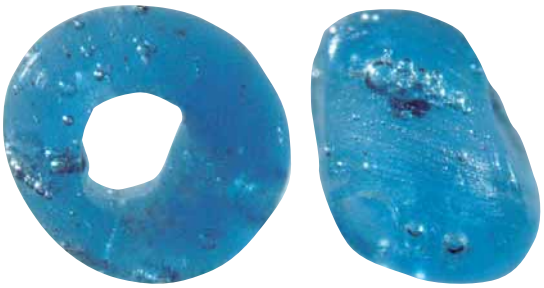
▲　下扇原遺跡　SB30　ベンガラ出土状況
▼　下扇原遺跡　SB30　ベンガラ出土状況

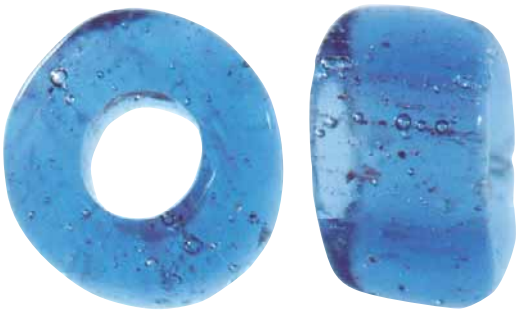
◀　下扇原遺跡　SB155　出土銅釦
▼　下の原Ａ遺跡　出土銅矛


32


36


40


31


5

24

37

20

12

103

ガラス小玉（実体顕微鏡写真 1）

▲ ガラス製玉類
▼ ガラス小玉

▲ 石製玉類
▼ 打製石器

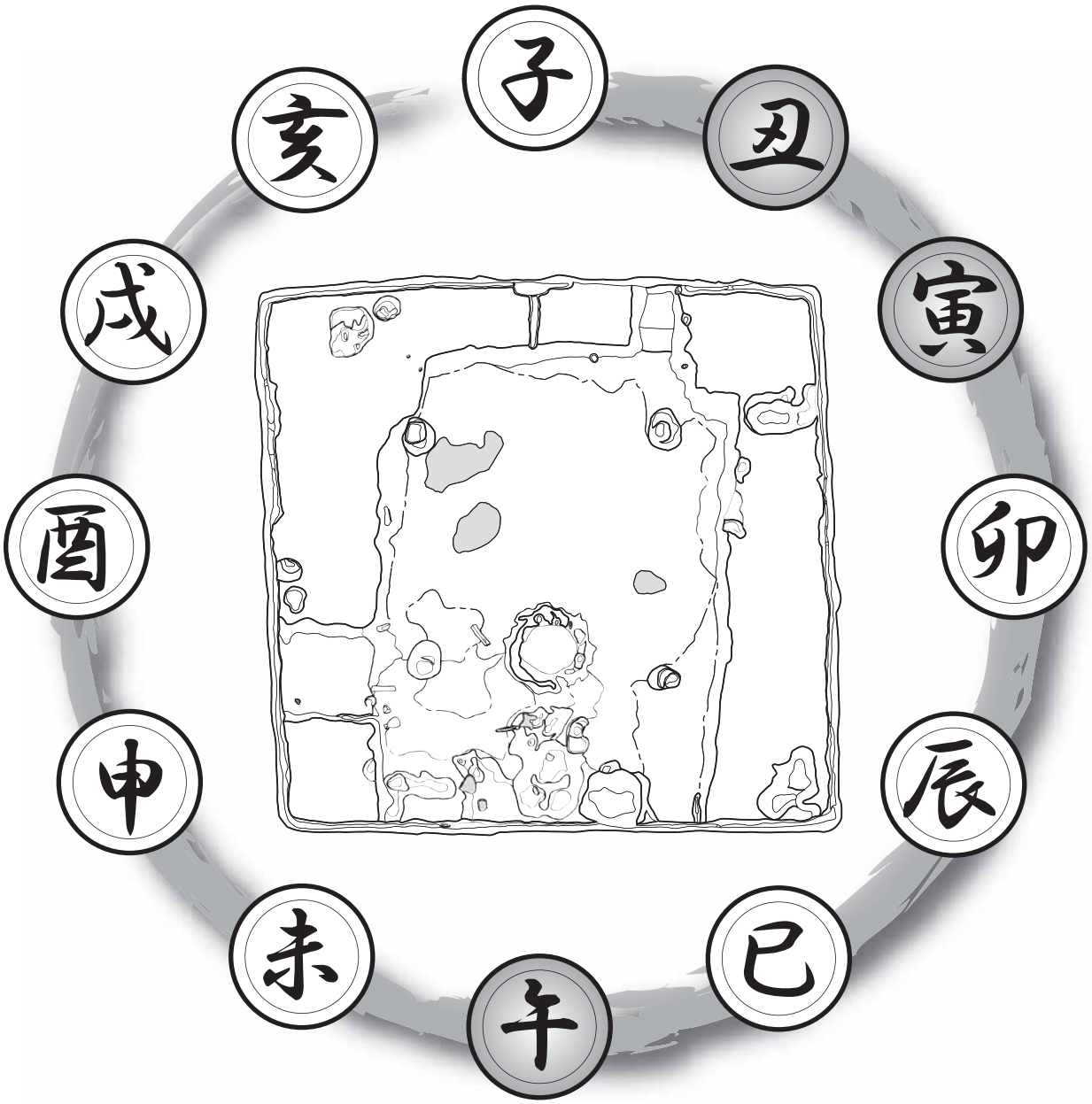
▼ 打製石鏃

▼ 磨製石鏃

熊本県文化財調査報告第257集

小野原遺跡群

黒川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



第一分冊

熊本県教育委員会

● 例言 ●

1　本書は、黒川広域基幹河川改修事業に伴い記録保存を目的として実施した、熊本県阿蘇市狩尾所在の下扇原遺跡及び熊本県阿蘇市三久保所在の小野原A遺跡（共に調査範囲は調査後に滅失）の発掘調査報告書である。

2　当該遺跡の調査は、熊本県教育庁が調査主体となり、熊本県教育庁文化課が調査を担当した。

3　発掘資料の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。なお、記録及び遺物は、熊本県文化財資料室が保管している。

4　下扇原遺跡及び小野原A遺跡を総称して、小野原遺跡群との記述を用いた。

5　本書の編集は、宮崎敬士（熊本県教育庁文化課文化財調査第一係）が担当した。

● Report of prehistoric settlements in the Yayoi period, located in Aso Caldera, Japan. ●

● Table of CONTENTS（volume 1）　　目次（第１分冊）●

口絵	Frontispieces	
例言	Preface	
目次	Contents	
はじめに	Introduction	
1　調査の目的と方法	Purpose and method of excavation at Onobaru sites	1
1－1　発掘調査の概要	Outline of excavation	3
1　概要	Summary	3
2　調査の目的	Purpose of excavation	3
3　調査の経緯	Process of pre-excavation works	3
4　調査体制	Structure of excavation	5
5　調査経過	Process of excavation	6
6　整理体制	Structure of organization	6
7　整理経過	Process of post-excavation works	7
8　保存及び活用	Storage and utilization	7
9　調査協力者	Supervisor and cooperator	8
1－2　遺跡の概要	Background of Onobaru sites	9
1　遺跡の立地と構造	Location and social structure	9
2　自然	Natural environment	12
3　人文	Historic context	14
1－3　調査の方法	Methods of excavation	19
1　調査手順の概要	Arrangements for excavation	19
2　発掘の方法	Principle of excavation	19
3　整理の方法	Principle of organization	19
2　下扇原遺跡の調査	Report of Archaeological excavation at Simo-Ougibaru site	25
はじめに	Introduction	27
2－1　下扇原遺跡１区の調査	Investigation at district 1	31
2－2　下扇原遺跡２区の調査	Investigation at district 2	93
2－3　下扇原遺跡３区の調査	Investigation at district 3	123
2－4　下扇原遺跡４区の調査	Investigation at district 4	171
2－5　下扇原遺跡５区の調査	Investigation at district 5	221
2－6　下扇原遺跡６区の調査	Investigation at district 6	267
附図　下扇原遺跡包含層出土鉄器（RM）	fig. Ironware (in Occupational layers)	331
附表１　下扇原遺跡出土土器一覧	tab. Earthenware	334
附表２　下扇原遺跡出土石器一覧	tab.Stone implement	351
附表３　下扇原遺跡出土鉄器一覧	tab.Ironware (O.lay.)	356

● Continued on the following volume.　　第２分冊に続く●

● Table of CONTENTS（volume 2）　　目次（第２分冊）●

口絵	Frontispieces	
例言	Preface	
目次	Contents	
３　小野原Ａ遺跡の調査	Report of Archaeological excavation at Onobaru-A site	1
３－１　小野原Ａ遺跡１区の調査	Investigation at district 1	3
３－２　小野原Ａ遺跡２区の調査	Investigation at district 2	37
３－３　小野原Ａ遺跡３区の調査	Investigation at district 3	67
３－４　小野原Ａ遺跡４区の調査	Investigation at district 4	75
３－５　小野原Ａ遺跡５区の調査	Investigation at district 5	83
３－６　小野原Ａ遺跡６区の調査	Investigation at district 6	97
３－７　小野原Ａ遺跡８区の調査	Investigation at district 8	109
３－８　小野原Ａ遺跡９区の調査	Investigation at district 9	113
３－９　小野原Ａ遺跡１２区の調査	Investigation at district 12	121
附図　小野原Ａ遺跡出土鉄器（RM）	fig. Ironware	124
附表４　小野原Ａ遺跡出土土器一覧	tab. Earthenware	125
附表５　小野原Ａ遺跡出土石器一覧	tab. Stone implement	128
附表６　小野原Ａ遺跡出土鉄器一覧	tab. Ironware	130
４　分析と考察	Analysis and Studies on Onobaru sites located in Aso Caldera	131
４－１　地学的特性の基礎的研究（１）	長谷義隆	133
４－２　地学的特性の基礎的研究（２）	長谷義隆・奥野充	145
４－３　小野原Ａ遺跡の地震痕跡		147
４－４　下扇原遺跡出土の植物遺存体		151
４－５　下扇原遺跡出土の炭化種実	新山雅広	155
４－６　小野原遺跡群出土の土器	弘中正芳	167
４－７　小野原遺跡群出土のガラス製品	谷澤亜里	181
４－８　小野原遺跡群出土の石製品		207
４－９　下扇原遺跡出土「銅釦」の材質について	村上隆・宮崎敬士	227
４－１０　下扇原遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	大澤正己	231
４－１１　下扇原遺跡出土の鉄製品	村上恭通	241
４－１２　肥後・阿蘇地域における弥生時代後期鉄器の諸問題	村上恭通	283
５　写真図版	Plates	301
下扇原遺跡	Simo-Ougibaru site	301
小野原Ａ遺跡	Onobaru-A site	401
抄録	Abstract	
奥付	Colophon	

● This report was published in two volumes.　　この報告書は2分冊で発行された●

はじめに

阿蘇の地はときに驚くべき歴史情報をもたらす。過酷な自然条件のなかで発掘調査する意義のひとつがその発見にある。

阿蘇市下扇原遺跡、小野原A遺跡の発掘調査は、平成11年8月から平成16年10月まで6年間の長きにわたり実施された。調査の原因は、阿蘇谷を東西に貫く黒川の遊水池建設にともなう事前調査である。熊本県土木部からの調査依頼により熊本県教育委員会が調査を実施した。

調査の結果、黒川の自然堤防上に弥生時代の大規模な集落跡があることが確認され、多種多様の遺物が出土した。その中には全国的にも出土例の少ないガラス製品、一種の飾り具と推定されている「銅釦」、大量の鉄製品等がある。また、弥生時代の家の中から夥しいベンガラが出土し、この地での特別な生産を思わせた。これらの出土文化財は、関係諸機関のご協力を得て分析を行い、その価値を定めるに至っている。

なお、埋蔵文化財活用の観点から地元の小中学生の体験発掘・見学会をおりにふれて実施し、延べ1,000人以上の参加を得た。若い諸君の胸のなかに郷土の歴史の深さが実感されたに相違ない。これらの機会は、阿蘇町教育委員会の皆さんの力なくして実ることはなかった。同時に、地域に根ざした発掘調査は地元の作業員の参加が不可欠であるが、地元の皆さんには長きにわたって調査を支えていただいた。厚く感謝申し上げる。

また、本書の刊行については諸機関のご協力を頂いたが、特に鉄製品について専門的調査を実施して頂いた国立大学法人愛媛大学考古学研究室の諸氏と村上恭通教授に深謝の意を表したい。

この報告書が今後の阿蘇地域の歴史研究に大きく寄与するとともに、阿蘇の世界遺産登録の推進を支えることを祈念するものである。

平成22年3月31日

熊本県教育長　山本隆生

1　調査の目的と方法

下扇原遺跡、小野原Ａ遺跡は、阿蘇カルデラ底を西流する一級河川白川水系黒川に隣接した弥生時代後期の集落遺跡である。両遺跡は自然堤防上端部平坦面に展開し、相互に隣接して位置するも、その狭間を黒川の流れが画している。両遺跡と阿蘇外輪山裾部との間には、近代の開墾以前は千丁無田と呼ばれた後背湿地が広がる。遺跡の周辺には弥生時代後期の集落が群集し、鉄器を始めとする金属製品、石皿、敲石、石鏃等の石製品、土器等が出土する。なかでも赤色顔料ベンガラが、墓葬、竪穴住居において大量に使用される地域である。

熊本県教育委員会は、黒川広域基幹河川改修事業に伴い当該用地内の下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡が滅失するため、記録保存を行うことを目的とした発掘調査を実施した。

両遺跡の調査期間は6年にわたり、調査面積は約39,000㎡である。調査員14名を始めとする242名が調査にあたり、その交代も度々行われた。調査員が変わっても調査の方針や手法が引き継がれるよう調査要項が作成され、各調査員は要項を元に作業の目的を確認し、各々の遺構に張り付いて調査を行った。その結果、集落まるごと2揃という広大な範囲で、1本の調査軸に沿った豊富なデータを得ることができた。

両遺跡の整理期間は5年にわたり、遺物総量は480コンテナである。調査員4名を始めとする44名が整理にあたり、両遺跡を一括して諸々の整理作業を実施した。発掘調査の段階と同様、集落まるごと2揃の調査成果を、1本の調査軸に沿って整えている。

1－1　発掘調査の概要

1　概要

下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡は阿蘇市に所在する弥生時代後期の集落遺跡である。下扇原遺跡は阿蘇市阿蘇町大字三久保に、小野原Ａ遺跡は阿蘇市阿蘇町大字狩尾に所在し、両遺跡間を黒川が流れている。埋蔵文化財の発掘調査は、この黒川の遊水池建設に先立って実施された。調査主体は熊本県教育委員会（以下、熊本県教育庁と記す。）であり、調査期間は平成11年8月23日から平成16年10月12日まで、発掘面積は約39,000㎡である。

調査の結果、下扇原遺跡は住居跡86軒、土壙35基及び円形周溝3基等で構成され、小野原Ａ遺跡は住居跡21軒、溝11条及び土壙36基等で構成される弥生時代後期の集落であることが明らかになった。

なお、この報告書では、下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡を総称して小野原遺跡群と記述する。

2　調査の目的

黒川広域基幹河川改修事業に伴い、当該用地内の下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡が滅失するため、当該遺跡の発掘調査を実施し、記録保存を行うことを目的とした。

3　調査の経緯

熊本県は、黒川が流れる阿蘇市（当時は阿蘇郡阿蘇町）狩尾及び三久保地内に約80,000㎡の小野遊水池を建設することを計画した。

この小野遊水池建設予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地である小野原Ａ遺跡及び下扇原遺跡が含まれること、並びに事業予定地が広大であることによる遺跡の不時発見を回避するため、熊本県教育庁は熊本県の依頼を受けて予備調査を実施した。予備調査の結果、小野原Ａ遺跡及び下扇原遺跡において埋蔵文化財を確認し、工事着手前に発掘調査が必要な旨を通知した。

以後、熊本県一の宮土木事務所と熊本県教育庁文化課とが協議し、遊水池建設事業が災害防止を目的としており代替地も求めることができないため当初の計画のとおり遊水池を建設することとし、平成11年度から記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

平成11年度、熊本県知事は文化財保護法第57条の3第1項の規定により土木工事等のための発掘について文化庁長官あて通知した。これを受け、熊本県教育長は発掘調査が必要と熊本県知事あて通知した。

現地における発掘調査は、下扇原遺跡は平成11年度から平成14年度まで、小野原Ａ遺跡は平成12年度から平成15年度まで実施した。報告書作成のための整理は、両遺跡とも平成16年度から平成20年度まで実施した。

以下、発掘調査の実施に係る諸手続を記す。

予備調査

平成9年12月9日付け一土第1870号で熊本県一の宮土木事務所長から熊本県教育長あて予備調査の依頼があり、平成10年2月16日から19日まで三木ますみ学芸員が調査し、その結果を平成10年3月20日付け教文第1500号で教育長から一の宮土木事務所長あて通知するとともに、内容を阿蘇町教育長あて通知した。

平成10年4月28日付け一土第292号で一の宮土木事務所長から教育長あて予備調査の依頼があり、平成10年8月17日から27日まで帆足俊文学芸員が調査し、その結果を平成10年9月3日付け教文第216号で教育長から一の宮土木事務所長あてするとともに、内容を阿蘇町教育長あて通知した。

平成11年10月7日付け一土第1635号で一の宮土木事務所長から教育長あて予備調査の依頼があり、平成11年10月29日から11月2日まで宮崎敬士主任学芸員が調査し、平成12年1月31日付け教文第1043号で教育長から一の宮土木事務所長あてするとともに、内容を阿蘇町教育長あて通知した。

平成11年10月7日付け一土第1635号で一の宮土木事務所長から予備調査の依頼があり、平成12年8月7日から8月8日まで亀田学主任学芸員、平成12年11月27日から11月28日まで宮崎主任学芸員が調査し、平成12年12月14日付け教文第1458号教育長から阿蘇地域振興局長あてするとともに、内容を阿蘇町教育長あて通知した。

平成13年4月11日付け阿蘇工第9-2号で阿蘇地域振興局長から予備調査の依頼があり、平成13年11月19

日から11月20日まで宮崎主任学芸員が調査し、平成13年12月19日付け教文第222号で熊本県教育庁文化課長から阿蘇地域振興局長あてするとともに、内容を阿蘇町教育長あて通知した。

平成16年4月7日付け阿蘇工第4号の2で阿蘇地域振興局長から予備調査の依頼があり、平成16年5月11日から5月14日まで宮崎主任学芸員が調査し、平成16年5月20日付け教文第557号の2で熊本県教育庁文化課長から阿蘇地域振興局長あてするとともに、内容を阿蘇町教育長あて通知した。

土木工事等による発掘

文化財保護法第57条の3第1項の規定により平成11年9月2日付け一土第1395号で熊本県知事から文化庁長官あて通知、平成11年11月15日付け教文第1149号で熊本県教育長から熊本県知事あて発掘調査が必要と通知した。

埋蔵文化財の発掘

平成11年4月12日付け一土第120号で熊本県知事から熊本県教育長あて発掘調査の依頼があり、文化財保護法第58条の2第1項の規定により平成11年9月3日付け教文第79号（下扇原遺跡）で熊本県教育長から文化庁長官あて通知するとともに、その内容を熊本県知事及び阿蘇町教育長あて通知した。

平成12年5月18日付け阿蘇工第58号で熊本県知事から熊本県教育長あて発掘調査の依頼があり、平成12年5月26日付け教文第334-1号（下扇原遺跡）及び教文第334-2号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から文化庁長官あて通知するとともに、その内容を熊本県知事及び阿蘇町教育長あて通知した。

平成13年4月11日付け阿蘇工第9号で熊本県知事から熊本県教育長あて発掘調査の依頼があり、平成12年5月2日付け教文第221-2号（下扇原遺跡）及び平成12年5月26日付け教文第221-1号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から文化庁長官あて通知するとともに、その内容を熊本県知事及び阿蘇町教育長あて通知した。

平成14年4月9日付け阿蘇工第15-1号（下扇原遺跡）及び阿蘇工第14号（小野原Ａ遺跡）で熊本県知事から熊本県教育長あて発掘調査依頼があり、平成14年5月10日付け教文第107号（下扇原遺跡）及び教文第105号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から文化庁長官あて通知するとともに、その内容を熊本県知事及び阿蘇町教育長あて通知した。

平成15年4月25日付け阿蘇工第15号で阿蘇地域振興局長から熊本県教育長あて発掘調査の依頼があり、平成15年5月13日付け教文第460号（下扇原遺跡）教文第461号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から文化庁長官あて通知するとともに、その内容を熊本県知事及び阿蘇町教育庁あて通知した。なお、平成15年度の下扇原遺跡の調査は、実測作業（補測）のみであった。

平成16年4月7日付け阿蘇工第4号（小野原Ａ遺跡）で阿蘇地域振興局長から熊本県教育庁文化課長あて発掘調査の依頼があり、平成16年4月16日付け教文第158号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育庁文化課長から熊本県教育長あて通知するとともに、その内容を阿蘇地域振興局長及び阿蘇町教育長あて通知した。

文化財の発見

文化財保護法第98条の3第1項で準用する第59条第1項の規定により平成12年3月31日付け教文第1985号（下扇原遺跡）で熊本県教育長から一の宮警察署長あて通知した。

平成13年3月30日付け教文第2164号（下扇原遺跡）及び教文第2165号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から一の宮警察署長あて通知した。

平成14年3月29日付け教文第2775号（下扇原遺跡）及び教文第2776号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から一の宮警察署長あて通知した。

平成15年3月31日付け教文第3284号（下扇原遺跡）及び教文第3283号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から一の宮警察署長あて通知した。

平成16年3月31日付け教文第3719号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から一の宮警察署長あて通知した。

平成16年10月18日付け教文第2007号（小野原Ａ遺跡）で熊本県教育長から一の宮警察署長あて通知した。

4　調査体制

下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡の発掘調査は熊本県教育庁が調査主体となり、熊本県教育庁文化課が調査を担当した。

なお、調査担当者等は以下のとおりである。

調査責任者

文化課長が担当した。

H11　豊田貞二（首席教育審議員）
H12　阪井大文（文化課長）
H14　成瀬烈大（文化課長）
H16　島津義昭（文化課長）

調査統括

課長補佐が担当した。

H11　島津義昭（教育審議員）
H16　倉岡　博（課長補佐）

調査指導

文化財調査第二係長が担当した。

H11　江本　直（主幹）
H13　木崎　康弘（文化財調査第二係長）
H15　西住欣一郎（文化財調査第二係長）

調査担当

職員が担当した。

H11　宮崎敬士（主任学芸員）　H11.8.23～H16.10
H12　亀田　学（主任学芸員）　H12.4～H12.9
H12　河野真理子（文化財保護主事）H12.10～H14.5
H14　馬場正弘（文化財保護主事）　H14.4～H14.12
H16　松村洋史（文化財保護主事）　H16.4～H16.10
H11　堤英　介（非常勤嘱託）　H11.8～H12.2
H12　石橋和久（非常勤嘱託）　H12.4～H13.9
H12　稲富陽子（非常勤嘱託）　H12.4～～H16.10
H12　濱田教靖（非常勤嘱託）　H12.4～H12.7
H12　福永雅美（非常勤嘱託）　H12.4～～H16.10
H12　宮崎　拓（非常勤嘱託）　H12.11～H13.4
　　H14.4～H14.5
H13　西　慶喜（非常勤嘱託）　H14.2～H14.5
H14　松野直子（非常勤嘱託）　H14.4～H14.12
H14　米村俊治（非常勤嘱託）　H14.4～H14.12

調査作業員

浅久野友和、浅久野良明、秋吉啓子、阿部知明、阿部ツヤ、阿部敏治、荒井キクコ、荒井拓未、荒木希実、家入紀美代、家入丈兒、家入春雄、家入ミツ子、石井ツルヨ、石井廣敏、石島ヌイ子、石島政廣、猪嶋みき、石本清美、石本トヨ子、一枝チズヨ、市原エイ子、市原タミ子、市原紀子、市原フミ子、市原美穂、市原美保子、伊藤サチ子、井上泰晴、岩下カツエ、岩下末美、岩下ミドリ、岩下泰子、上島弘子、上島美津枝、上島裕矢、上島由紀子、上田ふみ子、内村サエ子、宇都宮みつ子、浦上和敏、浦上幸、江入美紀、江藤翼、江藤登、江藤竜誠、大木今朝光、大倉美和、大宅喜美子、緒方敬子、加藤ミエ子、鎌倉チズ子、河上トシ子、河瀬未来世、河瀬雄大、河原ヨシ子、菊池カズ子、木本ヨシノ、吉良敬司、吉良ムツ子、草尾京子、草尾田鶴子、草尾千春、草尾フエ、草尾美代子、草尾康貴、工藤アイ子、栗岡ゆかり、黒川一幸、黒川ハマ子、黒木輝光、黒木ヤエ子、古閑悦子、古閑國子、古閑千晴、古閑ヒデ子、小嶋隆弘、五嶋豊、後藤亮、駒形ゆう子、斉藤秀子、坂崎豊代子、坂田和子、坂田将和、坂梨計子、坂梨宗一郎、坂梨誠、坂本奈未、坂本美鈴、坂本有美、佐藤章浩、佐藤かつ子、佐藤甲子、佐藤今朝美、佐藤健二、佐藤千恵美、佐藤知津子、佐藤哲郎、佐藤ミエ子、佐藤美恵子、佐藤ミツ、佐藤美穂、佐藤由起子、佐藤リス子、島川千津江、下城信行、下田フジ子、下林悠姫、下原ツルエ、下原信男、下村悠姫、杉島キヨ子、杉島スイ子、杉島隆義、杉島雪美、杉本恭子、園田竜太、高田誠、竹石勝子、竹川シズ子、竹川哲矢、竹本直樹、田中信考、田中政勝、田中ミヨ、田中幸雄、田中令子、塚本アキ子、塚本彰史、塚本和宏、塚本幸子、塚本久子、洞田貫美和、豊田栄一、豊田保則、長尾甚吉、永尾花子、中川修一、中川孟、中川力、中島絹代、永田幸子、永富久徳、中村ウラ、中村タツ子、中村千寿、中村トシミ、中村ミエ子、野上悠輝、野口恭平、早瀬英記、早瀬ひとみ、藤本政則、藤本魅樹雄、藤本竜、堀元希、松田將太、松永カヅ子、松永筍子、松永浩成、松永よし子、松本昭子、松本チズル、三井絵美、三井智恵、三城翼、

宮本智美、宮本真弓、村上登一、村上裕子、村森いずみ、森永美穂、森本春樹、柳川和子、山内カメ子、山内清香、山内はるな、山内律子、山口早紀、山部洋、山邉冨美子、山室スヨ子、湯浅初枝、幸ミヤ子、吉田ツヨ、吉田房子。（以上、186名）

なお、考古学を専攻する愛媛大学、熊本大学、福岡大学の学生諸君に力添えを願った。

青山陽介、井川恵美子、壱岐尾可奈子、上野路緒、上野平優紀、江頭俊介、大野義人、小笠原美紀、菊池義明、国崎絹代、児玉幹、児玉洋志、権藤聡子、芝康次郎、仙波靖子、竹中克繁、田中謙、田中寿国、壇佳克、中勇樹、中川和、中里陽道、中田伸一、中村昌博、西沢昌平、八郷芙美、濱田美加、半沢直也、東勇士、堀内憲二、前田耕輔、前田知聖、松田成弘、松永悦枝、松本周作、丸岡絵美、丸地見典、村上彩、望月大輔、森幸一郎、安元香名美、山田誠司。（以上、42名）

5　調査経過

現地における発掘調査は平成10年8月23日から平成16年10月12日まで実施した。下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡の2遺跡を調査対象としていることから、調査も2班体制を採り、各班が各遺跡を専任調査することを基本として実施した。

下扇原遺跡は、平成10年8月23日に下扇原遺跡1区から調査を開始し、継続して調査を進め、平成14年7月に下扇原遺跡6区までの調査を終了、現道部分であった下扇原遺跡7区を平成14年10月17日から調査し、平成14年12月27日に現地調査を終了した。

調査は、全期間にわたって宮崎敬士が中心となり、平成11年度は堤英介（平成12年2月まで）、平成12年度は石橋和久及び福永雅美、平成13年度は石橋和久（平成13年9月まで）、福永雅美及び西慶喜（平成14年2月から）、平成14年度は福永雅美及び米村俊治が担当した。なお、平成14年4月から5月まで西慶喜の支援を得た他、適時、小野原Ａ遺跡担当班の応援を受けている。

小野原Ａ遺跡は、平成12年7月5日に小野原Ａ遺跡1区から調査を開始し、継続して小野原Ａ遺跡12区まで調査を進め、平成16年10月7日に現地調査を終了した。

調査は、平成12年度は亀田学（9月まで）及び河野真理子（10月から）を中心として稲富陽子、濱田教靖（7月まで）及び宮崎拓（11月から）、平成13年度は河野真理子を中心として稲富陽子及び宮崎拓、平成14年度は馬場正弘を中心として稲富陽子及び松野直子、平成15年度は宮崎敬士を中心として稲富陽子及び福永雅美、平成16年度は松村洋史及び稲富陽子、並びに宮崎敬士及び福永雅美が調査を担当した。なお、平成14年4月から5月まで河野真理子及び宮崎拓の支援を得ている。

後、現地からの撤収等を実施し、平成16年10月12日に現地調査は完了している。

6　整理体制

整理作業は、平成16年度から平成20年度まで熊本県文化財資料室（熊本市渡鹿、下益城郡城南町沈目）にて実施した。

なお、整理担当者は以下のとおりである。

整理責任者

文化課長が担当した。

H16　島津義昭（文化課長）
H17　梶野英二（文化課長）
H20　米岡正治（文化課長）

整理統括

課長補佐が担当した。

H16　倉岡　博（課長補佐）
H18　江本　直（課長補佐）

整理指導

文化財調査第二係長が担当した。

H16　西住欣一郎（主幹）

整理担当

職員が担当した。

H16	宮崎敬士（参事）	H16～H20
H16	梅田亜耶（非常勤嘱託）	H16～H17
H16	六田育子（非常勤嘱託）	H16～H19
H18	橋口冬美（非常勤嘱託）	H18～H20

整理作業員

小山正子、木村雅子、原田美和、高濱悦子、青木美代子、青山玲子、荒牧陽子、池辺雅子、入舟多美子、岩谷小夜子、上田まゆみ、上野栄子、内田孝子、浦田和恵、緒方涼子、川井田久子、川口浩子、嘉村光代、河崎美恵子、工藤光美、貞苅美津子、篠崎チカ子、柴田久美子、瀬口絹代、武内沙霧、田中知恵美、塚本博子、中村正子、中島ひろみ、波床せい子、野添千津子、畑島文博、原田春子、古庄美伊子、古荘隆、松本直枝、宮守富子、山下千栄子、吉武知佐子、渡邊いわ子

なお、石器の石材同定に際しては馬場正弘、遺物の保存処理に際しては、谷川亜紀子、今田里枝、大塚トシ子、平川早苗、遺物写真の撮影に際しては、村田百合子、手嶋裕子、平岡浩晃の協力を得た。

また、報告書の編集に際しては、横山明代、山口節子、河野陽子、吉岡直子、尾方マサミ、境美恵子、興梠富貴子、北里五男、赤星忠光、栗﨑香代子、平岡春代、中川愛子、上田典子、橋本英子、園田尚子、和泉裕見子から多大なる協力を得た。

7　整理経過

整理作業は、発掘調査期間中は発掘調査事務所で一部を実施し、平成16年度から平成20年度までは熊本県文化財資料室で実施した。下扇原遺跡及び小野原A遺跡の2遺跡を整理対象としているが、両遺跡を一括して整理作業の諸工程を経ることを基本として実施した。

整理作業は水洗、註記、接合、復元、実測、製図の各作業を経て、その成果が報告書に編集される。これらの作業を、水洗から復元までの作業を主に担当する一次整理と、実測、製図を主に担当する二次整理とに分かち、平成16年度及び17年度は六田育子及び梅田亜耶、平成18年度及び19年度は六田育子（平成19年12月まで）及び橋口冬美、平成20年度は橋口冬美が中心となって実施した。

出土品の大半は現地調査の時に現地調査事務所で水洗し、註記した。したがって、文化財資料室における整理作業は土器等の接合作業から開始されている。接合から復元までの一次整理は平成16年度は小山正子、平成17年度は木村雅子、平成18年度は原田美和、木村雅子、平成19年度以降は高濱悦子が中心となって実施した。実測から製図までの二次整理は、平成16年度はガラス製品の整理、炭化物の分析、小型の石器類の実測等、一次整理の成果を待つことなく実施できる作業から開始され、平成17年度に土器類の実測、製図に着手し、大型石器類の実測、製図等を経て、平成20年度まで実施している。

8　保存及び活用

下扇原遺跡及び小野原A遺跡の調査は、現地における発掘調査の段階から埋蔵文化財の活用を図り、一定の成果を得た。

平成11年度は、体験発掘5回（中学生対象）、見学会3回（関係者対象）を実施し、阿蘇町広報（阿蘇町内の全戸に配付）、熊本日日新聞に記事が掲載された。

平成12年度は、体験発掘5回（小・中学生対象、延べ800人参加）、見学会2回（米国他 関係者対象、延べ50人参加）を実施し、熊本日日新聞に記事が掲載された。

平成13年度は、体験発掘及び出張授業1回（尾ヶ石東部小学校、10人参加）、見学会4回（大韓民国忠清南道忠南大学校、阿蘇西小学校、内牧小学校、阿蘇町民生委員対象、延べ179人参加）、阿蘇火山博物館夏季特別展への展示協力を実施し、熊本日日新聞に記事が掲載された。

平成14年度は、現地説明会1回（尾ヶ石東部小学校、阿蘇北中学校、一般、延べ97人参加）、見学会2回（愛媛県宇和町、火山研究者対象、延べ48人参加）、体験発掘8回（尾ヶ石東部小学校、阿蘇西小学校、阿蘇北中学校対象、延べ126人参加）、阿蘇火山博物館「阿蘇こども探検隊」への協力、講演3回（阿蘇町生涯学習講座、阿蘇郡文化財保護委員等研修会、吉野ヶ里歴史講座）を実施し、阿蘇町広報への掲載2回（4月号及び2月号）、熊本日日新聞へのコラム連載、断層出土について記者発表を行い、一般報道（テレビ、ラジオ、新聞等）がなされた。

平成15年度は、見学会2回（阿蘇北小学校、火山研究者対象、延べ92名参加）を実施した。

平成16年度は、下扇原遺跡から出土した「銅釦」について記者発表を行い、熊本日日新聞等、多くのメ

ディアで報道された。また、当該「銅釦」を平成16年10月30日から10月31日まで地元の阿蘇町産業文化祭で初公開し、約300人の見学者を得た。

整理の段階では、平成17年度及び21年度に吉野ヶ里考古学講座に出講した他、平成21年度に肥後考古学会第243回例会・九州考古学会平成21年度大会『阿蘇の弥生時代を考える』で調査の概要を発表し、朝日新聞に記事が掲載された。

9　調査協力者

金属製品「銅釦」については村上隆（京都国立博物館）、ガラス製品については谷澤亜里（九州大学大学院）、土器については弘中正芳（熊本大学大学院）、打製石器について宮崎拓（株式会社有明測量）、遺跡の立地と構造に関しては稲富陽子（株式会社九州文化財研究所）、鍛冶関連遺物については大澤正己（九州テクノリサーチ・TACセンター）、各氏のお手を煩わせた。衷心より感謝申し上げる。

なお、ベンガラについては高田潤氏と岡山大学大学院自然科学研究科を中心とする遺跡出土ベンガラ研究会の皆さんにご指導をいただいている。しかし、諸々の掣肘によりその成果をこの報告書に記すことが叶わない。心からお詫び申し上げる。

また、現地調査、整理の過程において、次に記す方々に暖かな援助と指導をいただいた。衷心より感謝申し上げる。

池辺伸一郎、板楠和子、岩内明子、大坪志子、緒方徹、奥野充、清田純一、甲元眞之、佐古和枝、下條信行、白木原和美、杉井健、長谷義隆、本田光子、藤田憲司、宮内克巳、宮縁育夫、宮本利邦、山崎純男、山本三郎、渡辺一徳、渡辺誠。

嶺南考古学会、九州考古学会、肥後考古学会、愛媛大学考古学研究室、熊本大学考古学研究室、熊本大学地球科学研究室、名古屋大学考古学研究室、福岡大学考古学研究室、阿蘇町及び阿蘇町教育委員会並びに阿蘇市及び阿蘇市教育委員会。（順不同、敬称略）

おって、鉄器については発掘から保存処理の各段階並びに分析、考察にいたるまで、村上恭通氏と愛媛大学考古学研究室の手を煩わせた。特に記して感謝申し上げる。

1－2　遺跡の概要

1　遺跡の立地と構造

下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡は、熊本県教育庁文化課が平成10年3月31日に発行した『熊本県遺跡地図』では地図22（坊中）に熊本県（43）阿蘇町（422）の094下扇ヶ原遺跡が下扇原遺跡に091小野原遺跡が小野原Ａ遺跡として記載され、阿蘇町教育委員会が平成12年3月31日に発行した『阿蘇町遺跡地図』では地図番号39及び40に094下扇原遺跡091小野原Ａ遺跡として記載されている。後者の記載が精確であることは、「下扇原」は「しもおうぎばる」と発することを引けば足りる。前者は膨大な作業量に起因する単純な誤記であろう。蛇足ながら「小野原」は「おのばる」と発するが、現地では「このばる」と聞こえることも多い。

発掘調査前には、下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡は共に弥生時代から中世にかけての遺跡として認識されていた。なかでも小野原Ａ遺跡には「塚」が2基存在し、うち東に位置する1基からは「刀」も出土し、無用な災厄を避けるため祀っていた、と伝え聞く。この東の「塚」は古墳と想定し、発掘調査の際には表土剥ぎの段階から特段の慎重さを充てたが、石室、石棺等の主体部、盛土、周溝等の構造部、いずれをも確認することはできなかった。他方、西の「塚」は遊水池建設用地の外にあり、発掘調査の対象ではない。

下扇原遺跡と小野原Ａ遺跡は、黒川の旧河道により画されている。遊水池建設に伴う大規模な掘削工事により、この旧河道は弥生時代後期以前に形成さたことが層位学的に確認できた。下扇原遺跡、小野原Ａ遺跡ともに黒川が蛇行する屈曲部に位置し、黒川により形成された自然堤防の上の平坦面に展開する弥生時代後期の集落跡であるが、それぞれ別個の集落である。この自然堤防の上の平坦面は、著しい高低差を生じることなく広がり、下扇原遺跡は19,800㎡、小野原Ａ遺跡は59,200㎡の面積を有する。両遺跡の標高は約475mであり、南面する現在の黒川とは約4m以上、北面する現在の水田面とは約2mの比高差をもつ。遺跡の北方には標高約950mの外輪山の稜線が水平に走り、その上部はほぼ垂直な数十ｍの崖面、下部は急な崖錘

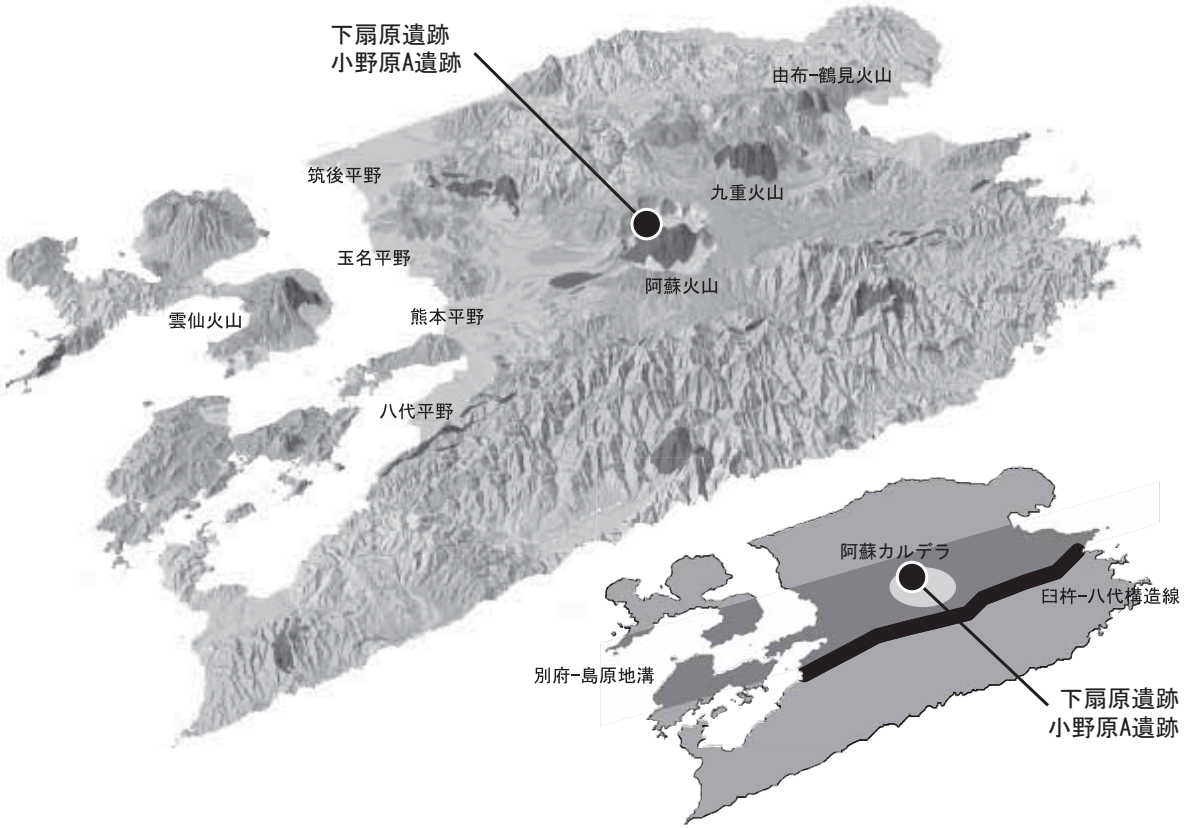
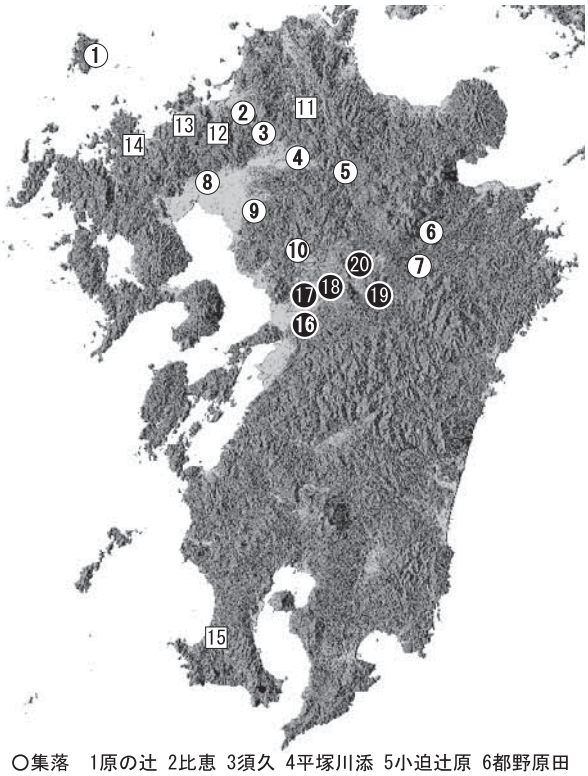


図１　筑紫島の地質構造



○集落　1原の辻 2比恵 3須久 4平塚川添 5小迫辻原 6都野原田
7石井入口　8吉野ヶ里　9深田 10方保田東原
□墓葬　11立岩 12吉武 13井原鑓溝　14桜馬場　15阿多貝塚
●集落　16二子塚　17神水 18西弥護免 19南鶴 20狩尾遺跡群

図２　弥生時代の拠点集落

斜面を呈している。遺跡が位置する自然堤防と外輪山との間には比較的広大な後背湿地が存在するが、現代の圃場整備の機会までこの後背湿地は存在し、「千丁無田」と称されていた。後背湿地「千丁無田」は、外輪山がカルデラ底に張り出した地形「鼻」である三久保丘陵と自然堤防によって形成され、黒川流路から隔てられるが、堅固な地形である「鼻」が関与したため長期間継続的に安定した状態で存在した、と考えてよい。外輪山の崖錘斜面最下部、及びこれに連続する微高地は、然程起伏することなく、カルデラ底を囲繞する乾地帯であり、中世以降、豊後街道が走っている。この乾地帯には、遺跡の西北から接続することができる。なお、遺跡周辺は湧水条件が良好であり、自然堤防上にも自噴井が設けられていた程である。水文環境は、黒川及び後背湿地にも水面が在るが、外輪山の崖錘斜面に連なる湧水点からの水が「美味」く、対して黒川を越えた中央火口丘側の湧水は「使えない」、と聴く。遺跡周辺の地下水位の季節変化は小さく、また、水温も17℃前後と安定しているため、良好な水資源を通年確保することができる。

下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡の周辺には位置的にも、時代的にも近接した遺跡が展開する。小野原Ａ遺跡の北には、黒川旧河道を挟んだ細長い自然堤防上に、石棺が出土した小屋畑遺跡が存在する。下扇原遺跡の南には、黒川を挟んだ微高地上に、黒髪式土器、石庖丁が採取された小野原Ｂ遺跡、中期の弥生土器が採取された下の原Ｂ遺跡が展開し、さらに迫地を挟んだ南西側に広形銅矛が採取された下の原Ａ遺跡が位置する。これらの遺跡は、黒川の水系により区画されるが、小野原遺跡群として捉えることが可能である。

小野原遺跡群の西には、平成３～４年度に熊本県教育庁文化課が発掘調査した狩尾遺跡群が存在する。各遺跡は、いずれもその一部を調査したに過ぎず、遺跡の全貌が判明しているわけではない。調査の結果、小野原遺跡群に近い池田遺跡では住居９軒、池田・古園遺跡では住居35軒、円形周溝５基が出土し、共に弥生時代後期の集落跡であることが判明した。なお、池田・古園遺跡の東端には石棺が３基出土した、と伝わる古園石棺群が在る。両遺跡のさらに西側には、狩尾前田遺跡（弥生時代後期の住居13軒、掘立柱建物１軒、土壙墓２基）、方無田遺跡（弥生時代中期の住居２軒、後期は住居38軒、円形周溝２基、土壙墓３基）及び湯ノ口遺跡（弥生時代後期の条溝１条、住居45軒、円形周溝２基、石棺墓３基、土壙墓１基 他）等、弥生時代後期の集落跡が凝集し、纏めて狩尾遺跡群として捉えられている。狩尾遺跡群出土金属器には、湯ノ口遺跡の箱式石棺から多量のベンガラと共に小玉が首飾りを形作っていた破鏡、42号住居の上層から出土した銅鏃の他、ヤリガンナ等の鉄器、三角鉄片等の鍛冶関連鉄製品等、合計354点の鉄製品がある。

小野原遺跡群の南西には、明神山Ａ遺跡が存在する。明神山Ａ遺跡では、現在も株式会社日本リモナイト鉱業により褐鉄鉱（リモナイト）が掘削されている。昭和62年、この掘削に伴い、丸木舟、鍬等の木器（掘削具）が出土し、弥生時代の産であると考えられた。当該地には戦時中には小高い丘があり、その小山を掘削する際に多量の鉄器が出土したと伝えられている。

小野原遺跡群の南には、昭和57年度に熊本県教育

1野部田　2斉藤山　3東南大門　4柳町　5稲佐津留　6ヲスギ　7五丁中原　8前田　9諏訪原　10大場石棺群　11桜町　12古閑白石　13方保田東原　14蒲生上原　15津袋　16台　17小野崎　18北無田　19石川　20石立･八反田　21小糸山　22梶尾　23黒髪　24八ノ坪　25権藤　26白藤　27上高橋高田　28二本木田崎　29八島町　30平田町　31神水　32大江　33新南部　34弓削山尻･石原亀甲　35梅ノ木　36西弥護免　37大松山　38外牧　39石塚　40二子塚　41新御堂　42上山神･下山神　43西岡台　44東松山　45大塚台地　46大坪貝塚･田中　47上日置･女夫木　48西片町　49宮浦　50北園貝塚　51荒毛　52新深田･高ノ原　53夏女　54本目　55沖松　56市房隠　57ヤリカケ松　58頭地　59小無田鶴　60西一丁田　61南鶴　62幅･津留　63宮山　64下山西･鏡山下　65狩尾遺跡群　66陣内　67小野原遺跡群

図３　弥生時代の主要遺跡

庁文化課が発掘調査した下山西遺跡が存在する。下山西遺跡では弥生時代後期の住居32軒、溝5条の他、石棺4基が出土し、うち3基の石棺から多量のベンガラが出土している。この調査は、褐鉄鉱を熱すればベンガラができることを最初に指摘した調査でもある。住居からガラス製勾玉が出土した他、住居及び墓葬から合計163点の鉄器が出土している。

以上の他、阿蘇谷では宮山遺跡（弥生時代後期の条溝1条、住居26軒、掘立柱建物5棟、円形周溝4基、土器棺墓1基、木棺墓1基）、陣山遺跡（弥生時代後期の住居22軒、円形周溝2基）、西小園前田遺跡（弥生時代後期の住居1軒）の既往調査がある。

2　自然

日本列島は、ユーラシア大陸の東縁に位置する5つの島弧の集合である。九州（筑紫島）は、列島の最も西側に位置する琉球弧の中では最大の島であり、かつ、琉球弧の北端に位置する。また、九州は対馬海峡を経て、韓半島から大陸に連なり、関門海峡、豊後水道を挟んで西南日本弧を構成する本州西半部及び四国に接している。

九州及び四国では中央構造線が東西に走向し、その南部には山地が連続して形成されている。九州においては臼杵－八代構造線の南側に急峻な九州山地が形成され、構造線の北側には別府－島原地溝が並走し、九州の南北を地形的に画す結果となっている。別府－島原地溝内には島原、阿蘇、九重、由布、鶴見の各火山が分布し、火砕流をはじめとする第四紀以後の火山噴出物が厚く体積し、規模の大きい地震が多発している。阿蘇火山は、別府－島原地溝の内にあり、その中央火口丘を東からは大分－熊本構造線が、西からは布田川断層が貫いている。また、阿蘇火山は、別府湾、鶴見岳、由布岳、九重火山、阿蘇火山、金峰山、雲仙岳と東西方向に連なる火山分布の中央に位置している。一方､阿蘇火山より北部には火山が存在しないが、阿蘇火山から日田盆地へ向かい日田－白草構造線が南北に走り、阿蘇火山から南には阿蘇火山、霧島岳、桜島、開聞岳及び南西諸島と南北方向に連なる火山分布が存在する。つまり、阿蘇火山は、九州の東西方向の構造と南北方向の構造との交差点に位置している。

他方、九州は、九州脊梁山地を境として東西に区分することもできる。この九州を東西に画する区分は平野部に主眼を置いた区分ともいえるが、九州西半部のほぼ中央に熊本地域が位置する。九州西半部では、平野部が日本海及び有明海に面し連続して、又は山塊、丘陵等により断続されて広がる。この連続又は断続する平野部の南限は、先の臼杵－八代構造線であり、球磨川に沖積された八代平野が最南の平野部にあたる。ただし、内陸部にまで展開する平野部は、宇土半島基部の山塊を隔てて八代平野に北接する熊本平野となる。熊本平野は、九州西半部のほぼ中央に位置し、阿蘇外輪山西麓から有明海にかけて展開する沖積平野である。その中心部を白川によって、南部を緑川によって開かれた熊本平野の縁辺部には、阿蘇火砕流堆積物（Aso－4）が厚く積った台地が展開し、阿蘇外輪山系及び九州山地に接続している。阿蘇火山は、地形では阿蘇外輪山系、及び外輪山に連続する台地によって熊本平野とは隔たっているが、水系では白川、構造では布田川断層によって繋がっている。中でも白川は、布田川断層及び阿蘇火砕流堆積物が存在する構造的特質に拠って、立野火口瀬を経て、ほぼ一直線に熊本平野へと流れ込んでいる。阿蘇火山から熊本平野までの各地形の標高は、概ね、阿蘇火山頂部1500m、カルデラ底部450m、外輪山頂部700m、台地頂部50m、平野部山側20m、同海側0mであり、阿蘇火山では標高差が大きく、熊本平野では緩やかな傾斜となっている。すなわち、最短かつ高低差の少ない経路が阿蘇火山と熊本平野の間には存在し、これが日田へと続く北、別府へ向かう東､相良へ至る南の各方面とは異なっている。

阿蘇火山は、中央火口丘、カルデラ、及び外輪山によって構成される。中央火口丘の中岳は現在も活動続け、カルデラは東西約18km、南北約25km、面積約380km²に及び、外輪山はこれらを囲繞し、その西端は立野火口瀬として熊本平野に向かって開いている。

阿蘇火山は、約26万年前から約9万年前の間に4回にわたる大規模な噴火活動を行い、阿蘇火砕流堆積物（Aso－1～Aso－4）を噴出し、カルデラを形成した。カルデラ内にはカルデラ湖（古阿蘇湖）が形成され、後、新たな火山活動により中央火口丘が形成される。中央火口丘は、西から烏帽子岳、杵島岳、中岳、高岳

NO.	遺跡名	種別	所在地	備考
1	下扇原	集落跡	阿蘇市阿蘇町三久保下扇原	「銅釦」が出土
2	小野原A	集落跡	阿蘇市阿蘇町狩尾小野原	
3	小屋畑	包蔵地	阿蘇市阿蘇町狩尾小屋畑	
4	小野原B	包蔵地	阿蘇市阿蘇町狩尾小野原	
5	下の原A	包蔵地	阿蘇市阿蘇町狩尾中原	銅矛が出土
6	下の原B	包蔵地	阿蘇市阿蘇町狩尾下の原	
7	池田	集落跡	阿蘇市阿蘇町狩尾池田	
8	古園	包蔵地	阿蘇市阿蘇町狩尾小屋畑東畑	
9	古園石棺群	石棺	阿蘇市阿蘇町狩尾小屋畑	石棺3基出土と伝わる
10	池田・古園	集落跡	阿蘇市阿蘇町狩尾池田・古園	
11	狩尾前田	集落跡	阿蘇市阿蘇町狩尾上尾崎	
12	方無田	集落跡	阿蘇市阿蘇町狩尾上尾崎	
13	湯ノ口	集落跡	阿蘇市阿蘇町狩尾上尾崎	当該地は湯ノ口と通称、破鏡、銅鏃が出土
14	明神山A	包蔵地	阿蘇市阿蘇町狩尾明神山	褐鉄鉱層中から丸木舟2艘が出土
15	下山西	集落跡	阿蘇市阿蘇町乙姫下山西	銅鏡 他出土
16	鏡山下	包蔵地	阿蘇市阿蘇町乙姫鏡山下	大正4年に銅戈が出土
17	宮山	集落跡	阿蘇市阿蘇町的石宮山 他	
18	向原	包蔵地	阿蘇市阿蘇町赤水	

図４　弥生時代後期の遺跡分布

及び根子岳の阿蘇五岳を主とした火口丘群で構成される。なお、最も東に位置する根子岳は九州脊梁山地に接続しており、カルデラ底が同心円構造を採ることを妨げている。根子岳は、第四紀より前に形成された点で他の４岳とは異なり、白亜紀以前の堆積岩類が基盤層を形成する別府－島原地溝以南の地質に連続している。この火口丘形成により、阿蘇カルデラ内は、中央火口丘を境界として南北に分かたれた。中央火口丘の北側には阿蘇谷が、南側には南郷谷が形成された。また、カルデラ湖が再度形成され、阿蘇谷のカルデラ湖を阿蘇谷湖、南郷谷のカルデラ湖を久木野湖と称している。両カルデラ湖の形成及び消滅の先後関係は詳らかではないものの、久木野湖が古く形成され、阿蘇谷湖が弥生時代までは存在した後に消滅したものと考えられている。

阿蘇谷のカルデラ底は、カルデラ湖の堆積作用により概ね緩やかな地形変化をとり、その後、黒川によって開析され、地形を整えてゆく。黒川は概ねカルデラ壁に沿って流れ、カルデラ西端部（立野火口瀬）で白川と合流し、熊本平野へと流出する。これは、噴出した火砕流等が中央火口丘から円錐状に堆積し、カルデラ壁の崩落堆積との狭間がカルデラ底の最低部分となること、及び布田川断層によりカルデラ西端部が破砕されていたためである。先述のとおり、阿蘇谷では幅2km程のカルデラ底の最低部は平坦な地形のため、黒川は大きく蛇行することとなり、その流域には三日月湖が形成されている。同時に、黒川は支流に乏しく水系密度が極端に低いこと、軟らかい地質と緩やかな地形であること、並びに山間部の多量の降水量（3,000㎜／年）と集中雨とに因る短期間での水量増大により黒川は氾濫し、低地部には湿地が、蛇行部には乾地である自然堤防が形成された。

なお、阿蘇谷には、地中の鉄分が湧水に混じり、水が赤褐色に染まることに由来する地名「赤水」がある。地名に象徴されるような大量の鉄分の集積は、褐鉄鉱（リモナイト）の鉱脈を形成した。その鉱床は、カルデラ底の阿蘇市赤水から灰塚まで東西8km程の範囲に8箇所存在し、うち東明神山鉱床は、現在も株式会社日本リモナイトによって褐鉄鉱が採掘されている。この褐鉄鉱は、赤褐色又は黄褐色でやや硬い塊上をなすもの、さらに多孔質で多量の植物の葉根の跡をとどめ、あるいは薄葉を重ねた片状を呈し、極めて粗鬆なもの、沼鉄鉱に粘土を混えて褐色又は黄色の土状を呈し所謂黄土と称すべきものの3種がある。褐鉄鉱は、層状をなし、層厚は不定、3m以下の表層の下位に粘土、黄土あるいは火山灰層を挟み数層の鉱層が存在する。

３　人文

以下では、既往調査の成果を主に用いて、下扇原遺跡及び小野原Ａ遺跡が所在する阿蘇谷の人文環境を素描する。

旧石器時代

外輪山の山頂付近の緩やかな谷と丘が広がる平坦部では、数ヶ所で旧石器時代の遺跡が確認され、調査されている。

北外輪の標高820mに所在する象ヶ鼻Ｄ遺跡では発掘調査が行われ、調査地周辺の沢では原石の露頭が確認された。出土した5,000点の石器の大半は、阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩で占められた。例外は26点であり、九州内の他地域産の石材を用いた石器であった。このことは、象ヶ鼻Ｄ遺跡は他地域産の石器を携えて石材補填のために訪れるキャンプサイト（原産地遺跡）であったことを示す、と考えられる（小畑2003）。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、標高470～480ｍのカルデラ内から、標高520～740ｍの外輪山斜面、丘陵部にかけて点在する。各期の土器が出土して長期にわたる生活跡とみられる遺跡、特定時期の土器のみが出土する遺跡、中には石鏃ばかりを出土する遺跡もある。これら2種類の遺跡のあり方は、センター的役割をもった拠点集落、及び狩猟や採集の一時的な逗留地の表出である、と解釈されている（木﨑1993）。なお、カルデラ内の平野部では、遺物が採集されてはいるものの、縄文時代の遺構は確認されていない。

弥生時代

阿蘇谷では、弥生時代前期の遺構は確認されていな

い。弥生時代中期の住居跡は確認されており、弥生時代後期に遺跡数が大幅に増加する。湿地が点在していたためか、弥生時代の遺跡は外輪山の急崖斜面から連なる丘陵地、又は微高地上に展開している。

宮山遺跡では、昭和46年度の調査時に弥生時代後期の住居跡で検出された炊き口25㎝、奥行き45㎝の「構造物」が「カマド」と報告され（緒方1972）、論議を呼んだ。なお、別の住居跡の床面上焼土からは炭化米が確認された。また、宮山遺跡は、平成17年度から平成18年度に阿蘇市教育委員会によって二次調査が実施され、現在、報告書作成中である。阿蘇市西小園前田遺跡では、弥生時代中期の黒髪式土器を出土する住居跡で石庖丁が出土し（島津1987）、陣内遺跡でも弥生時代後期の住居跡から鉄製摘鎌が出土し（清田1982）、弥生時代の阿蘇谷で稲作が行われていた、と考えることができる。

下山西遺跡では、4基中3基の石棺の中に各々30～40kgものベンガラが入れられており、阿蘇谷におけるベンガラの使用方法を端的に表す事例となった。また、石棺の中からは小型仿製鏡、銅鏃、鉄剣、ガラス小玉が出土し、住居跡内からはガラス製勾玉が出土した（高谷1987）。中でもガラス製勾玉は分析の結果、北部九州の遺跡で出土するガラス製品と同様、鉛バリウムガラス製であり、その原料が中国の産であることが指摘された（山崎1987）。また、大量に出土した鉄器のうち1点が分析され、その結果、鍛造鉄器であることが判った。同時に、鉄器の素地産地は大陸側である可能性が高く、鍛冶加工は国内と考えられる、と報告された（大澤1987）。

狩尾・湯の口遺跡では、銅鏃、破鏡（舶載鏡片）の他、鉄器がほぼ全ての住居跡から出土した。また、鉄器の製作過程で生じたと推定される鉄片、鉄滓が確認され、特に多数の鉄片と大型の鉄滓とを出土した住居跡は集落の中心としての公共的施設という性格と共に鍛冶工房であった可能性が高い、と指摘された。狩尾・方無田遺跡では、住居跡から弥生時代中期前半の城ノ越式土器が出土した。遺跡の立地条件と併せて、阿蘇谷における稲作開始の時期が、それまで最古とされてきた弥生時代中期後半の黒髪式土器の時期よりも遡る可能性が指摘された。また、これら2遺跡以外の狩尾・前田遺跡、池田・古園遺跡を併せた狩尾遺跡群で出土した遺物の特徴として、住居跡から多量に出土する台石、磨石、砥石等の石器、及び鉄器が指摘された。石皿、磨石は数軒にひとつの住居跡から出土しており、ドングリ等、米食以外の食物の存在を示し、砥石及び鉄器の出土数が多い点は下山西遺跡と同様である。鉄器が再利用されずに殆どの住居跡から出土する状況は、鉄器の生産地ならではの消費の形態として捉えることができ、鍛冶のみならず弥生時代後期の阿蘇での製鉄の可能性が、再度、提起された。さらに、狩尾遺跡群内の住居跡の変遷が跡付けられ、規模が大小異なる住居跡も併存すること、柱の数は4本柱、2本柱、柱の確認されないものの3種であることが指摘され、住居の生業の差異が柱穴の数の差異に対応する、と結論付けられた（木﨑1993）。

なお、阿蘇谷では弥生時代の青銅器が5点確認されている。銅戈1点（鏡山下遺跡出土）、銅矛1点（下の原A遺跡出土）、銅鏡1点（下山西遺跡出土）、破鏡1点及び銅鏃1点（狩尾・湯の口遺跡出土）である。これら青銅器5点のうち下の原A遺跡出土銅矛は、阿蘇町史第2巻等に記述されているが、表採品であることから詳らかな報告を欠く。以下に記し、責を塞ぎたい。なお、実測図は、三木ますみの手を煩わせた。感謝申し上げる。

昭和55年頃、石島政廣さんがトラクターで耕作中に出土した銅矛である。後、平成3年の頃、狩尾遺跡群発掘調査の際に石島さんから熊本県教育庁文化課へ移管され、現在、熊本県教育庁文化課が保管している。出土時は「水道管のごたる（水道管の様な物）が出てきた」と思ったとのことであり、刃部より先は既に欠失していた状態で発見された、と推測する。元部の片側はトラクターの刃により欠失し、刃、脊等にその刃痕が残る。現存長は34.3cmを測り、僅かな刃部、元部及び袋部が残存している。

刃部の大半は欠失し、関から5cm程が残存している。関は幅8.4cmに復元することができる。鎬と刃は矛に直行して、翼は矛身に沿って、丁寧に研がれている。袋部は幅2.5cmの節帯と2.2×3.5cmの耳を具え、その側縁には2mm程度の突線を有する。耳は突線が周縁を巡り、耳孔は貫通しており、孔の周囲には明瞭な段

が作り出される。袋部の厚さは5mm程度であり、袋端部は内法3.1×2.7cmの楕円形を呈する。節帯の厚さは、脊から1mmに満たない厚みしか増すことがなく、その厚さは6mm程度である。袋内は袋端部から4.5cmまでは中空であるが、人差し指第二関節より奥には明灰白色の真土が残る。

刃部の大部分を欠くため全長、形態が詳らかではなく、耳が厚く、孔が貫通しているものの、節帯の幅の広さ及び耳を含む袋部側面を周る突線から、この銅矛は中広形銅矛である、としてよい。

古墳時代

阿蘇谷の古墳は、大半が外輪山の急崖斜面とそこから連なり突出する丘陵部とに分布する。その主体部には弥生時代から続く箱式石棺が用いられ、墳丘を持たないものも多い。

阿蘇谷の古墳の筆頭に挙げられるのが、長目塚古墳と上鞍掛塚A古墳の2基の前方後円墳と9基の円墳から構成される中通古墳群である。中でも長目塚古墳は全長129mと、岩原双子塚古墳（山鹿市 所在）に次いで熊本県下最大級の規模を誇る。昭和24年、河川改修により破壊される前方部の調査が行われ、竪穴式石室の中から人骨（女性）と勾玉、管玉、玻璃丸玉、内行花文鏡、太刀、刀子、鉄鏃と大量の遺物が出土した。続く古墳時代中期に比定される迎平古墳からは画文帯神獣鏡が出土した。この鏡と同じ形のものは江田船山古墳、国越古墳の他、県外で3面のみが知られる（角田2006）。上御倉古墳及び下御倉古墳は、横穴式石室の中に石屋形と呼ばれる屍床部を持つことから古墳時代後期に位置付けられる。同古墳は迎平古墳群、東手野古墳群、平井古墳群、城山古墳群等とともに手野古墳群と呼ばれることもある。この手野古墳群を中心として東側の三野地区には生出古墳群、番出古墳群、北西側の湯浦地区には小里古墳群、御塚横穴墓群などが分布する。しかし、中通古墳群と手野古墳群の施設の規模や出土遺物の内容とは共に他の古墳群とは隔絶している。有力な豪族の存在が想定でき、後の文献に登場する阿蘇君であろう、と推定される由縁である。

陣内遺跡では6世紀とされる竪穴式住居跡が1基（清田1982）、下山西遺跡では須恵器坏から7世紀後半とされる住居跡が1基（高谷1987）検出された。狩尾遺跡群では、古墳時代の住居跡は確認されていない。古墳時代以降の遺構例は、狩尾湯ノ口遺跡で8世紀終わり～9世紀初めの竪穴式住居跡、池田古園遺跡で9世紀後半以後の溝が調査された（木﨑1993）のみで、ごく少数に限られる。このように古墳時代の阿蘇谷西部には、弥生時代の様に阿蘇地域を示す劇的な特徴が乏しく、阿蘇谷東部で古墳文化が隆盛を迎えることとは対照的である。

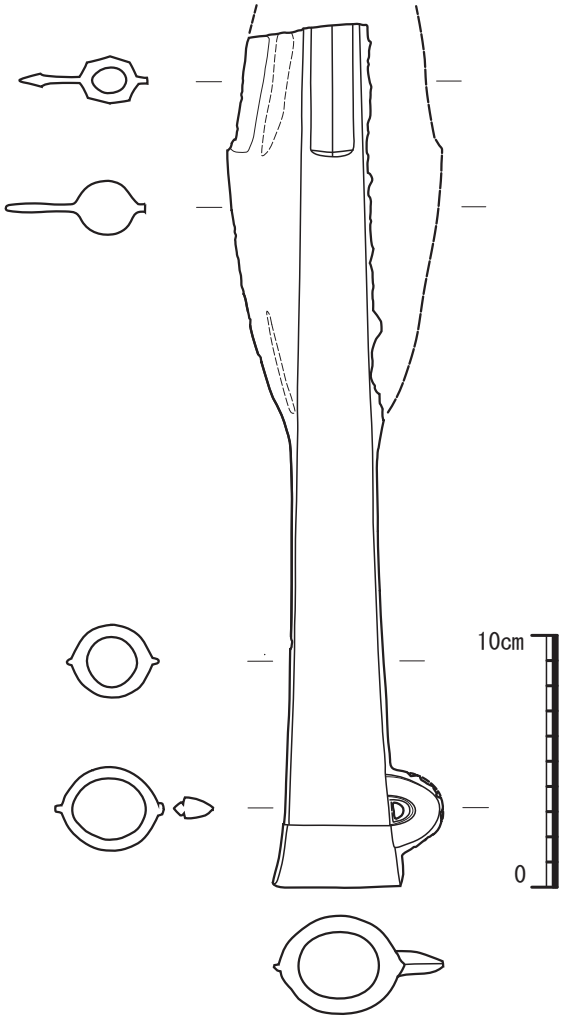


図５　下の原Ａ遺跡出土の銅矛

参考文献

緒方　勉　(1972)　『宮山遺跡』阿蘇町文化財調査報告第1集、阿蘇町教育委員会
緒方　徹　(2000)　『阿蘇町遺跡地図』阿蘇町文化財調査報告第5集、阿蘇町教育委員会
小畑博己　(2003)　「東アジアの旧石器文化と日本人のルーツ」
『遺跡からのメッセージ』熊本歴史叢書Ⅰ、熊本日日新聞社
清田純一　(1982)　『陣内遺跡』阿蘇町文化財調査報告第2集、阿蘇町教育委員会
隈　昭志　(1999)　『長目塚と阿蘇国造』一の宮町史1、一の宮町教育委員会
木崎康弘　(1993)　『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告第131集、熊本県教育委員会
吉田正一　(1994)　『池田遺跡』熊本県文化財調査報告第140集、熊本県教育委員会
高谷和生　(1987)　『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集、熊本県教育委員会
島津義昭　(1987)　「周辺の遺跡」
『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集、熊本県教育委員会
山崎一雄　(1987)　「下山西遺跡出土のガラス製勾玉の化学成分と鉛同位体比」
『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集、熊本県教育委員会
大澤正己　(1987)　「下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査」
『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集、熊本県教育委員会
角田賢治　(2006)　『神のすむ郷阿蘇のものがたり展』肥後の至宝展Ⅳ、熊本県立装飾古墳館
渡辺一徳　(2001)　『阿蘇火山の生い立ち』一の宮町史7、一の宮町教育委員会
新エネルギー・産業技術総合開発機構　(1991)　『平成2年度全国地熱資源総合調査（第3次）
広域熱水流動系調査阿蘇地域』新エネルギー・産業技術総合開発機構

なお、図1は、日本列島の地質編集委員会『日本列島の地質』4_11_gbm図の一部を加工し、使用した。

また、図2、図3、図4は、国土地理院の数値地図25000（地図画像）『熊本』、数値地図50mメッシュ『日本Ⅲ』をカシミール3Dで加工し、使用した。

1－3　調査の方法

1　調査手順の概要

表土剥ぎは、現代の耕作層等を重機を用いて除去した。

包含層及び遺構の掘削は、人力により精査した。遺構の検出及び掘削に際しては、掘削道具への三角鎌の導入、遺構埋土を最大限確認するプラン確認方法の採用、白スプレーを用いた遺構プランの罫書き等、若干の改善策を講じた。また、遺構埋土の回収と水洗による微細遺物、特殊遺物の検出及び分布の把握等、目的に即した精査手法も採用した。

記録作成に際しては、実測用紙にマイラーの1mm方眼紙を採用、光波測距議を用いた実測手法の導入、大判カメラ、中判カメラ及び35mmカメラの導入、ヘリコプターによる航空写真の撮影等、僅かではあるが新たな手法の導入とその定型化を図った。

なお、出土遺物の水洗作業及び註記作業を発掘調査と併行して実施し、一部の土器類は現場で復元する等、見学者の便を図った。

現地調査終了後は、熊本県文化財資料室で整理作業を進めた。整理に際しても、作業のデジタル化等を行っている。

2　発掘の方法

発掘調査に際しては、グリッド法及び分層発掘法を採用した。

グリッドは、日本測地系に則り、平面直角座標第Ⅱ系に準拠して設定した。具体的には、平面直角座標第Ⅱ系の（X=-5,800、Y=2,200）を原点として、小野原遺跡群全体を第1象限に位置付けることができる極座標系を設け、10mグリッドを設定している。グリッドは、グリッド南西隅の座標杭を基準杭とし、その座標値（X = 100a + 10b、Y=100c+10d）を「acbd」と表記し、グリッド名とした。

日本測地系を採用したのは、調査開始時は世界測地系施行前であったこと、用地買収等に伴う既測量成果は日本測地形で実施されていたこと等に因る。下扇原遺跡、小野原Ａ遺跡を同じ極座標系に含めたのは、両遺跡が同一の集落遺跡を形成する可能性があったこと、地点について一意性を保持することが望ましかったことによる。極座標系の第1象限に調査範囲を位置付けたのは、（X>0、Y>0）を確保し、グリッド名、測量値等の表記を簡便化するためである。

層序は、遺構外の層（以下「基本土層」という。）と遺構内の層（以下「遺構埋土」という。）とに大別した。層名は、上層から算用数字を用いて「χ層」と表記し、細分した層位は、上層からアルファベット小文字を付加した。

基本土層は、1層＝表土、2層＝黒褐色シルト、3層＝黄褐色シルト、4層＝明黄褐色シルトである。2層は、弥生時代以降の遺物包含層であり、往時の生活面を含んでいる。3層は、既往調査では「アカホヤ火山灰層」と認識され、その上界面は遺構確認面として重用された層である。4層は、「（ハード）ローム層」と呼称されていた層である。なお、今調査により「アカホヤ火山灰層」は、さらに深度をとり、地表下8m近辺に存在することが判明している。詳細は第4章「地学的特性の基礎的研究（1）」を参照願いたい。

遺構埋土は、遺構ごとに層序を認識し、「埋2層」、「埋3a層」のように、頭に「埋」の文字を付して表記した。なお、遺構埋土の層名は、作業員等、調査者が掘削作業中に認識可能な区分であり、その細分層名は、土層断面図作成等、調査者が詳細な観察を行う際に付されたものである。

なお、具体的な調査方法は「小野原遺跡発掘調査要領」を平成11年9月7日に纏め、適時改定しながら、調査員の共通認識としてきた。以下にその「発掘調査要領」を載せ、調査方法の記述に代えたい。

ただし、下扇原遺跡と小野原Ａ遺跡とでは遺構名の決定方法が若干異なる。これはピット群の取扱いの差異に起因する。ピット群から柵列、建物等、主要な遺構が復元される可能性が高いと考える場合はピット群まで主要な遺構の範疇に納めた取扱いを行い（小野原Ａ遺跡）、当該可能性を低く見積もる場合は主要な遺構からピット群を除いた（下扇原遺跡）。

3　整理の方法

整理に際しては、作業の迅速化及び効率化を図るため、その機械化及び電子化を推進し、新たな手法も一定程度採ることとした。

現地調査事務所

出土品の大半は現地調査の時に現地調査事務所で水洗し、註記した。

水洗作業及び註記作業は、阿部知明、市原美穂、岩下カツエ、大宅喜美子、竹石勝子、栗岡ゆかりが担当した。土器を中心とした出土品の水洗作業には動力噴霧器、註記作業にはゴム印を用いて作業の迅速化及び効率化を図った。

なお、炭化物、ガラス小玉等、微細遺物の検出を目的として遺構埋土等、土壌の水洗を実施している。炭化物の検出を目的とした土壌水洗は、熊本大学考古学研究室から水洗選別機を借用し、その運用について甲元眞之、前田千聖の実習指導を享けている。

また、鉄器は、水洗、自然乾燥の後、脱塩処理に入っている。半年以上の期間経過後、その一部は、錆落し、含浸処理まで現地調査事務所で処置されている。これら鉄器に係る一連の作業は、村上恭通、愛媛大学考古学研究室の実習指導を享けている。脱塩には水酸化リチウム・アルコール溶液及び密閉型ステンレス容器、錆落しには「ミニモ・ワン シリーズ」（株式会社ミニター製）及びスチールブラシ等、樹脂含浸にはパラロイド・ソルベントナフサ溶液及び減圧機「小型減圧用デシケーターPVC－33型」（株式会社三恒商事製）を用いた。

おって、現地調査事務所においても、水道水を使用してすべての水洗作業を実施している。

文化財資料室

文化財資料室における一次整理は、土器等の接合作業から開始されている。

接合作業は、調査区を作業単位として展開し、まず、遺構又はグリッド（10mグリッド）を単位として接合を実施し、後、遺構とグリッド、さらに隣接グリッドとの相互接合を実施した。なお、土器の接合には接着剤「セメダインC」（セメダイン会社製）を用いた。

復元作業は、調査区を作業単位として実施した。なお、土器の復元には修復材「デンカ・キューテックス」（東郷化成株式会社製）を用いた。

文化財資料室における二次整理は、実測及び製図作業である。作業量が二次整理担当の処理能力を上回るため、その一部は外部に委託している。

実測作業は、小型の石器類等、一次整理の成果を待つことなく実測できる遺物から開始し、順次、復元作業が終了した土器の実測に移っている。なお、遺物の種類を問わず、実測はすべて縮尺1/1で実施し、実測用紙には紙又はマイラーの1mm方眼紙を用いた。

製図作業は、電子トレース方式で実施した。電子トレースは、実測図をスキャンした後、電子トレースソフト「トレース君」（株式会社CUBIC製）を用いた。

なお、土器等の整理作業に際しては、接合作業の後、順次、遺物に連番を付し（実測番号）、復元、実測、製図作業を実施した。このため、遺構等、出土単位内で実測番号が連続するとは限らない。この報告書では、読者の便を図るため、この実測番号を用いず、掲載図版の順に図版番号を付し、図版番号を用いて本文を記述している。

小野原遺跡発掘調査要領

1999 年 9 月 7 日確定、2001 年 5 月 22 日最終改訂

1　調査方法

発掘調査は、グリッド調査法及び分層調査法を用いる。

⑴　**グリッド**

グリッドは、国土座標に準拠した10mグリッドを基本単位とし、下記の要領に基づき設定する。

なお、小グリッド又は大グリッドを設定する場合も、これに準拠する。

ア　座標系

小野原遺跡座標系を国土座標に基づき設定する。

小野原遺跡座標系は、遺跡全体を第1小限に包括するために、国土座標（X=-5800、Y=2200）を原点とする。

イ　基準杭

グリッド南西隅の座標杭を、基準杭とする。

ウ　グリッド名

基準杭の座標値（X = 100a + 10b、Y=100c+10d）を、「acbd」と変換し、グリッド名とする。

例：基準杭の座標値（X=350、Y=480）の場合、グリッド名は「3458」である。

⑵　**分層**

層位は、遺構外の層序（以下「基本土層」という。）及び遺構内の層序（以下「遺構埋土」という。）とに分類し、各分類ごとに分層する。

ア　層位名

層位名は、上層から、算用数字を用い「χ層」と標記する。

なお、漸移層等、細分した層位については、上層から「a」、「b」、「c」…とアルファベット小文字を付加する。

例：基本土層第2層の場合、標記は「2層」となり、細分は、「2a層」、「2b層」…となる。

イ　註記

註記は、次に示す項目を記す。

㈠　土色（色彩）黒褐色、赤褐色、黄灰色 等

㈡　土種（粒度）礫、砂、シルト、粘土 等

㈢　成分（混合物）黄褐色パミス混、砂礫混、焼土混 等

㈣　その他しまり、粘性、被熱等の強弱、その他

ウ　層序間の調整

基本土層と遺構埋土とは、遺構の生活面、堀込面又は確認面における相互の関係を記す。

2　遺構及び遺物

⑴　**遺構名**

遺構は、主要な遺構（下表左列）と、その他の遺構（ピット群）とに分別する。

主要な遺構は、各遺跡ごとに、その種類に関係なく連番（以下「遺構番号」という。）を附す。

その他の遺構は、各調査区ごとに、その種類に関係なく連番を（各調査区番号＝ a 、1000 a ＋1）から附す。

遺構の種別は、その遺構番号の頭に次表に示す略号を附し、分類する。遺構番号を付した後に複数の遺構

が一つの遺構を構成することが判明した場合は、最小の遺構番号をもって新たに判明した遺構の遺構番号とし、その他の番号は欠番とする。

遺構の略号

遺構		遺構内の施設	
SA	柵、土塁、塀	K	土壙
SB	建物	P	ピット、柱穴
SC	廓		
SD	溝		
SE	井戸		
SG	苑池		
SH	広場		
SK	土壙		
SX	その他		

⑵　**遺物名**

遺物は、各調査区ごとに、その種類に関係なく連番（以下「遺物番号」という。）を附す。遺物の種類は、その遺物番号の頭に次表に示す略号を附し、分類する。

なお、遺物番号の欠番は、原則的に有り得ない。

遺物の略号

遺物	
RM	金属製品
RN	自然遺物
RP	土製品
RQ	石製品
RU	繊維製品
RW	木製品

⑶　**図面等**

遺構実測図は、1/20縮尺を用い、以下の項目を記す。

なお、実測に係る基点は、各遺構ごとにＡ－Ａ’、Ｂ－Ｂ’と標記し、その位置が判るように適当な座標値を記入する。

また、一遺構につき原則1枚の用紙に各実測図を併載する。必要に応じ、複数の用紙に実測図を記載する場合は、平面図、断面図、特殊図面（祠拡大図など）の種別に応じて分類し、記載すること。

ア　平　面　図　遺構平面実測図、1幅（座標記入、レベル註記）

イ　土層断面図　遺構埋土断面実測図、2幅（絶対高記入）

ウ　断　面　図　柱穴、炉跡を含む断面エレベーション実測図、2幅（絶対高記入）

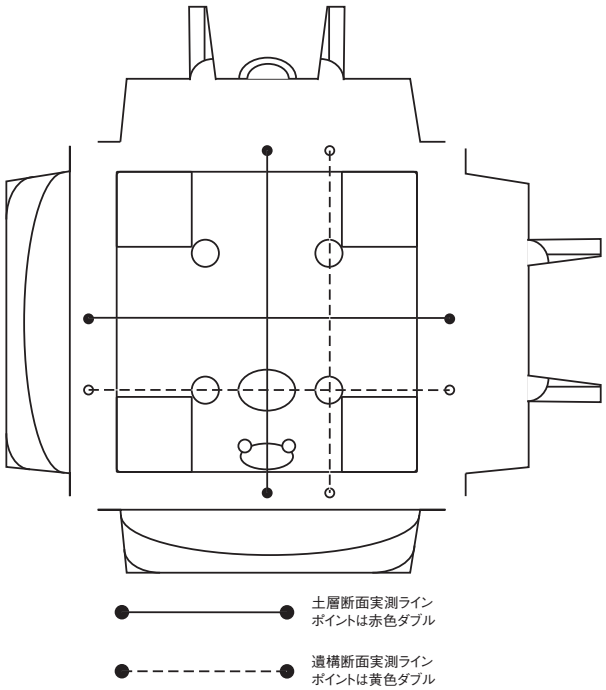
エ　掘方平面図　貼床などを除去した遺構平面実測図、1幅（座標記入、レベル註記）

オ　註記その他　調査区名、遺構名、実測者名、実測日、遺構の規模に係る各種計測値（実測値）、観察所感 等

3　発掘作業

発掘作業は、概ね次表に示す段取りを用い、発掘対象の性格により精粗緩急を付す。

なお、遺構埋土が包含する遺物については、原則、原位置を特定できる遺物についてのみ写真撮影、実測等の処理を行う。



遺構実測図モデル図

発掘作業の段取り

1	プラン確認	平面プラン決定、スプレーにより線引き
2	ベルト設置	遺構主軸及びその直行軸に設定
3	遺構掘削	ベルトにより区画された小グリッドごとに処理
4	土層断面処理	写真撮影（全体及び部分）、土層断面図作成
5	ベルト掘削	小グリッドに振分けて処理
6	完掘写真（廃棄時）	完掘写真撮影（2方向から全体、必要に応じて部分）
7	炉、柱穴等、掘削	使用に伴う堆積などを除去、炉埋土は回収
8	遺構断面処理	エレベーション図の作成
9	完掘写真（使用時）	完掘写真撮影（2方向から全体、必要に応じて部分）
10	平面図等実測	遺構平面図、土層断面図、エレベーション図作成
11	掘方等掘削	貼床、柱穴等、掘方まで掘削、地山露出状況となる
12	完掘写真（掘方済）	完掘写真撮影（2方向から全体、必要に応じて部分）
13	平面図等実測	遺構平面（掘方）図、土層断面図、エレベーション図作成

⑴　一般的事項

遺物は、随時、各グリッド、各層位に分別して取り上げること。遺構埋土が、埋め戻し土の場合は、遺物の位置は人為を反映しないことに留意すること。

必要に応じて、埋土回収、埋土水洗、埋土選別等の処理を行うこと。

⑵　**特殊事項（必須）**

鉄製品、石器、ベンガラ等は、適時、光波測距儀を用いて点取りを行う。

また、炉埋土は、すべて回収する。

⑶　**その他の遺構の取扱い**

主要な遺構以外、ピット等その他の遺構は、光波測距儀または業務委託等の方策により実測を行い、調査の迅速化を図ること。

⑷　**中判写真の撮影**

中判写真は、主要な遺構のうち、建物（住居跡）など特に重要と考える遺構を撮影対象とすること。

2　下扇原遺跡の調査

下扇原遺跡は竪穴住居86軒、掘立柱建物１軒、円形周溝４基、溝３条、土壙40基（うち墓葬と考えられる土壙７基）を主要な遺構とする弥生時代後期の集落である。本章では、上記の主要な遺構の実測図を掲載し、遺構の調査結果を記述した。

下扇原遺跡の主要な出土遺物は、土器を主体とする土製品（略号RP）、石皿、磨石、砥石、石鏃等を組成する石製品（略号RQ）、ピューター製「銅釦」、及び鉄斧、鉄鏃、摘鎌、ヤリガンナ、錐等の鉄製品、並びに三角鉄片、棒状鉄片等の鍛冶関連副産物を組成する金属製品（略号RM）である。本章では、上記の主要な出土遺物のうち土製品850点、石製品158点、包含層出土の金属製品137点の実測図を掲載し、その諸元を章末の附表に収めた。

なお、第２分冊「4　分析と考察」において、石製品（玉類、石鏃）106点、「銅釦」１点、遺構出土の鉄製品506点の実測図を掲載し、「銅釦」１点、ガラス製品（勾玉、小玉）448点について分析し、記述している。本章と併せて下扇原遺跡の調査報告とされたい。

また、下扇原遺跡では大量のベンガラが出土した。回収したベンガラの量は、コンテナ24箱に及ぶ。下扇原遺跡の特質として詳細に報告すべきものであるが、数多の掣肘により本章に記述することが叶わない。別途報告を期すこととしたい。

はじめに

下扇原遺跡では、竪穴住居を主な対象とした調査が行われている。まず、竪穴住居の概要を以下に記し、あらかじめ、用語を整理しておきたい。

住居は、竪穴式住居である。

竪穴住居の平面形は、正方形または長方形の方形プランを呈する。方形の四辺が概ね等しい場合、正方形と記述した。竪穴住居の主柱は､2本または4本であり、2基または4基の主柱穴が備わる。竪穴住居の中央には炉が設けられ、竪穴住居の南側壁に接して、またはその近くにKピット（土壙）を備える例が一般的であ

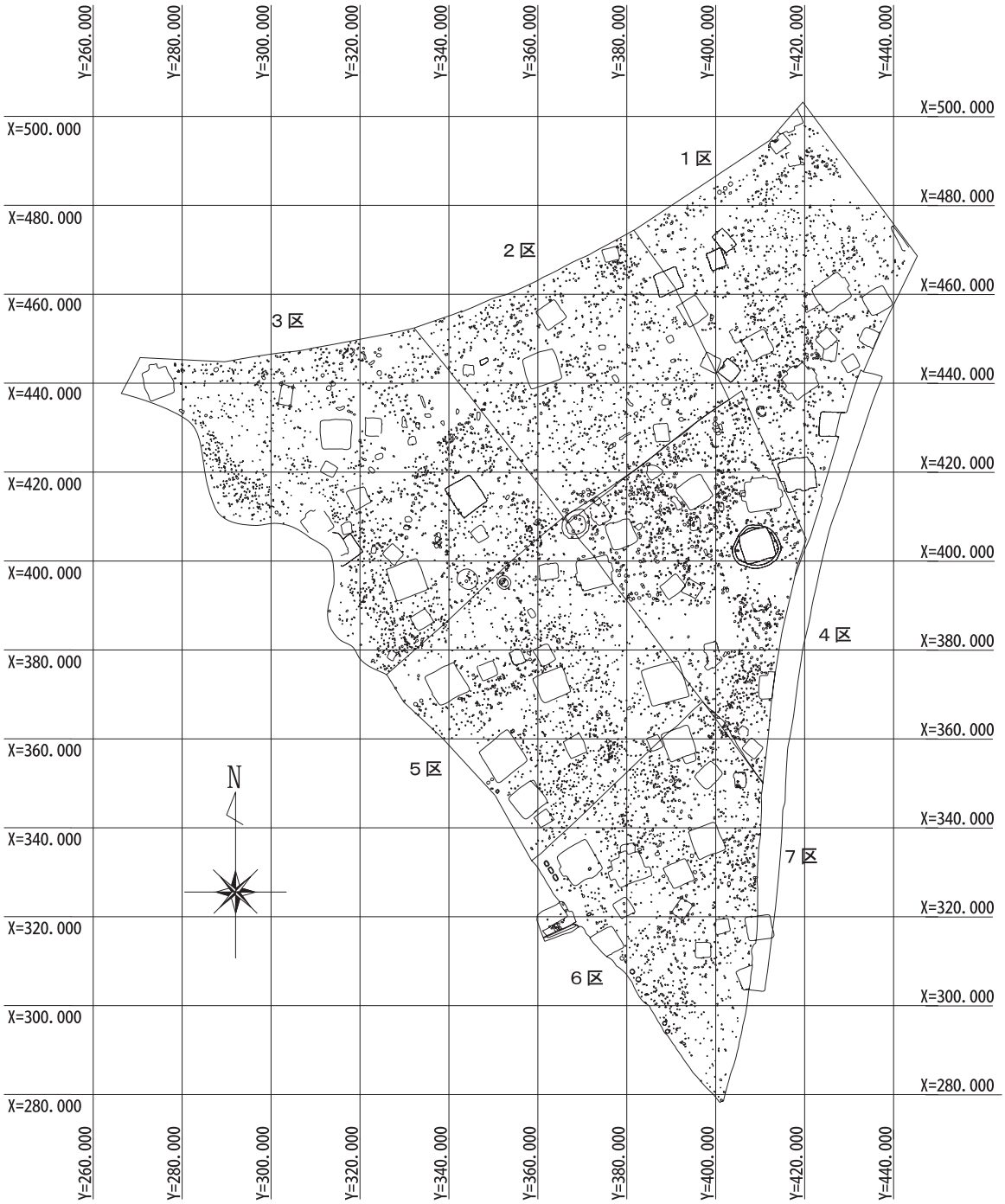


図６　下扇原遺跡　遺構配置図 (1/1500)

る。なお、竪穴住居の内周にベッド状遺構を配する例が多い。

竪穴住居には、その側壁に1段外に張り出した部分を備える例がある。この部分を、張出し部と記述した。張出し部は、付設する側壁長の1/3程度の長さ、0.5ｍ以上の張出し幅である場合が多い。なお、張出し部は、竪穴住居の床面より1段高く設けられた例が多い。この場合、ベッド状遺構と複合した張出し部と表現している。

主柱穴は、直径50cm前後の円形を呈する土壙であり、深さは30cm程度の浅いものから1ｍを超える深いものまで様々である。しっかりとした主柱穴は、人の手が届かなくなる深度まで掘削されている。このため、主柱穴の掘削に際しては、調査者は床面に這いつくばって手を伸ばし続けることが常となる。主柱穴の配置は、柱穴を結ぶ直線（梁）が住居側壁と平行になる場合が多く、側壁から住居内法長の1/3または1/4程度の距離を置く。

主柱が4本建ての場合、各主柱穴を結んだ内側の範囲を内陣と呼称し、外側の範囲を外陣と呼ぶこととしたい。これは、竪穴住居の各施設の位置を説明する場合、内陣との関係から記述すると簡便な場合が多いためである。

主柱は、主柱穴から抜き取られる場合がある。これは、主柱穴の1/3程度の深度まで主柱の周囲を再掘削し、当該主柱を除去する行為である。再掘削された穴と主柱が抜き取られた跡を併せて、抜取り痕と記述した。

炉には、掘込みを持つ炉と掘込みをもたない炉（地床炉）の2者が存在する。前者は、円形を呈する土壙が多く、方形の土壙も少数存在する。この土壙は、炉穴と記述した。後者は、焼土面をもって炉と認定したが、この焼土面は円形を呈する場合が多い。なお、炉穴の断面形態は、皿形とボウル形の2者に分かち、記述している。また、炉には炉穴を囲み込む堤が備わる場合があるが、これは周堤と記述している。

Ｋピットとは、住居内に穿たれた方形または円形の土壙である。多くは、南側壁に内接し、炉と共に当該竪穴住居の内陣の主軸上に位置する。また、その北側、すなわち竪穴住居の中央側に柱穴2基が並ぶ。すなわち、Ｋピットとは、土壙と2基の柱穴の複合体である。その用途は、貯蔵穴、出入口、祭壇等、諸説があり、確定されていない。大分県教育委員会のＫ氏によりその存在が指摘されたため、同氏の頭文字「K」を採り、「Kピット」と命名された。爾後、熊本、大分両県を中心として使用されている。

ベッド状遺構は、竪穴住居内の周辺部に、側壁に接

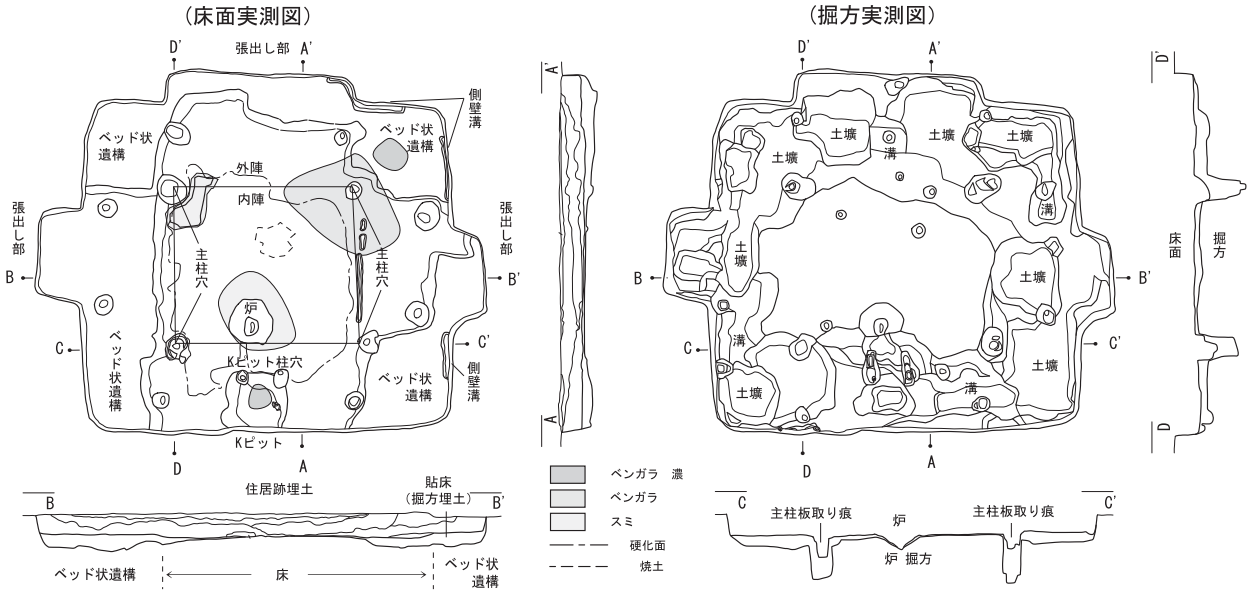


図７　凡例　竪穴住居跡の設備と名称

して、床面から5～10cm程高い段を造り付けたものである。その幅は、住居の規模によって様々であるが、住居内法長の1/4程度である場合が多い。床面に硬化面が観察される場合でも当該施設上には硬化面が認められない例が多いことから、莚等が敷設されていたものと考えられ、その方形の形態と併せて「ベッド」の語が冠された。寝所、物置等の用途に供されたと考えられている。

竪穴住居の側壁際には、幅5cm程度の溝が検出される場合がある。また、この溝の中、あるいは溝の外側に小ピットが連なる例もある。この溝と小ピットの複合体は擁壁設備の痕跡であり、側壁溝と記述した。側壁溝には、屈折点が概ね等しい間隔で観察できるが、この単位は掘削単位または擁壁材の幅を示している、と判断している。

硬化面は、床面、ベッド状遺構の上面等が硬く締まった範囲を示す用語である。下扇原遺跡の調査では、絶対的な硬度ではなく、同一遺構内で相対的に硬化の度合いが高い範囲を硬化面とした。例えば、下扇原遺跡の竪穴住居の床面は貼床であることが多いが、貼床は、通常、硬く締まった三和土の状態である。その中でも特に硬く締まった部分を「硬化面」として記述している。

竪穴住居の貼床部分を除去した段階を、掘方と記述した。掘立柱柱穴構造の呼称に倣い、当該構造物が構築される前段階を示すために使用した。

以下、各竪穴住居跡について、切合関係、形態、法量、設備等の事項を記し、調査で確認された事実の報告としたい。

２－１　下扇原遺跡１区の調査

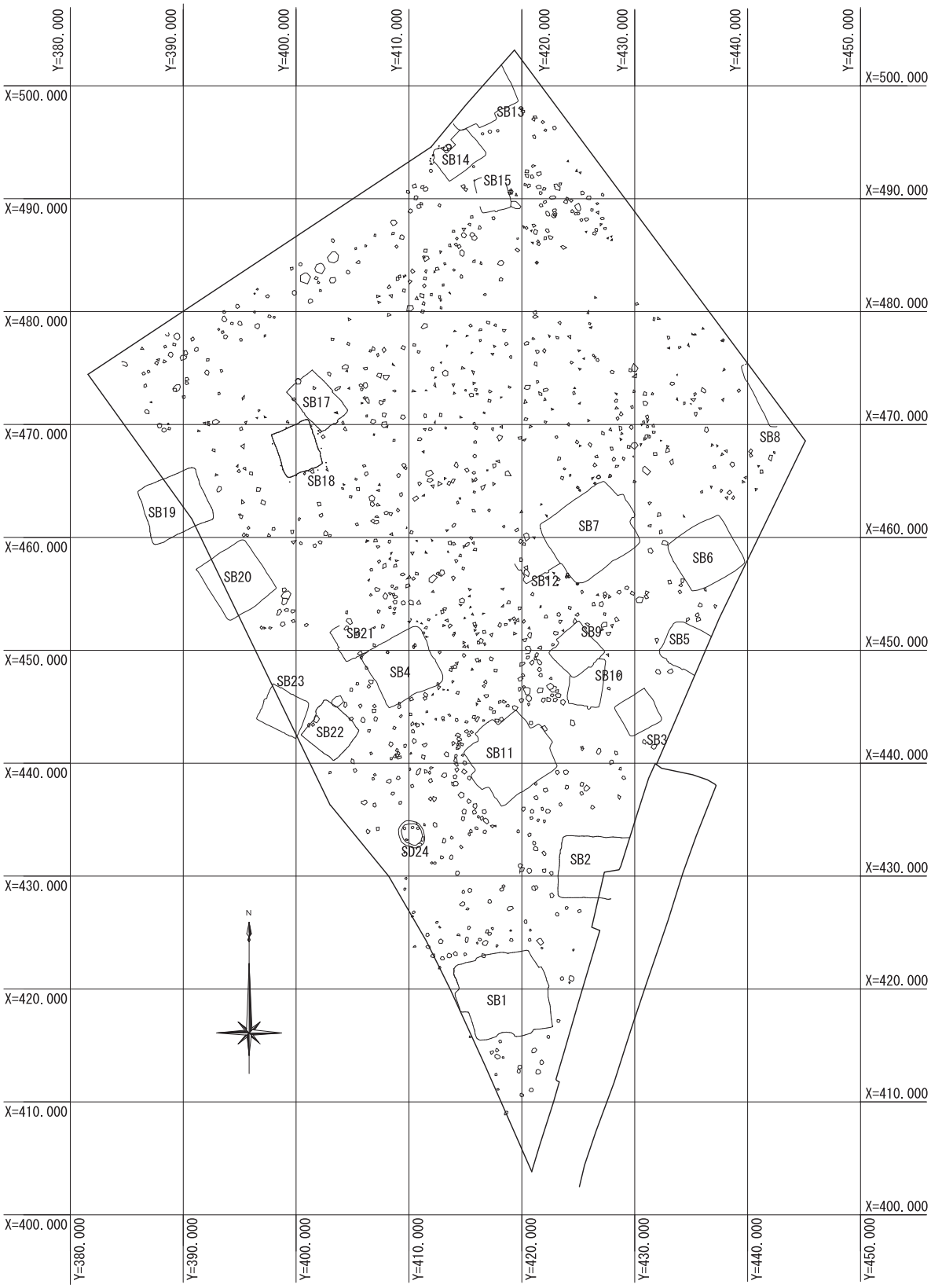
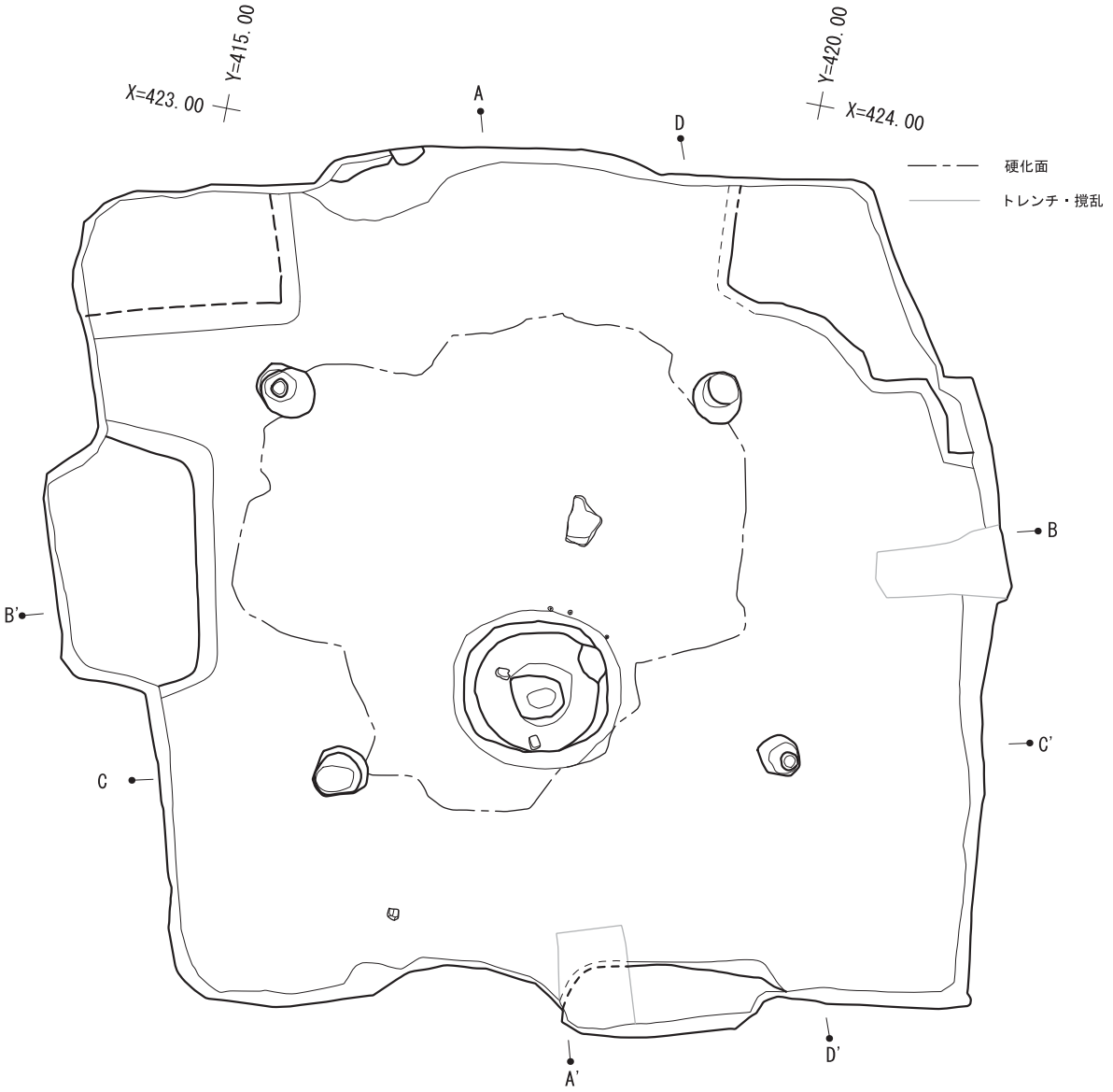
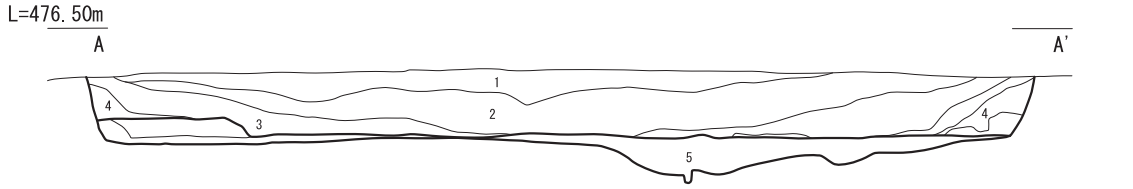
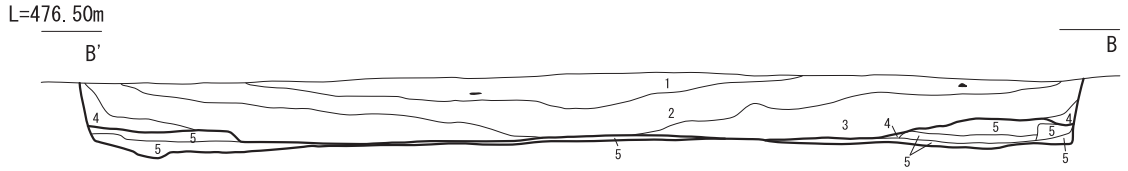


図８　下扇原　１区遺構配置図 (1/500)



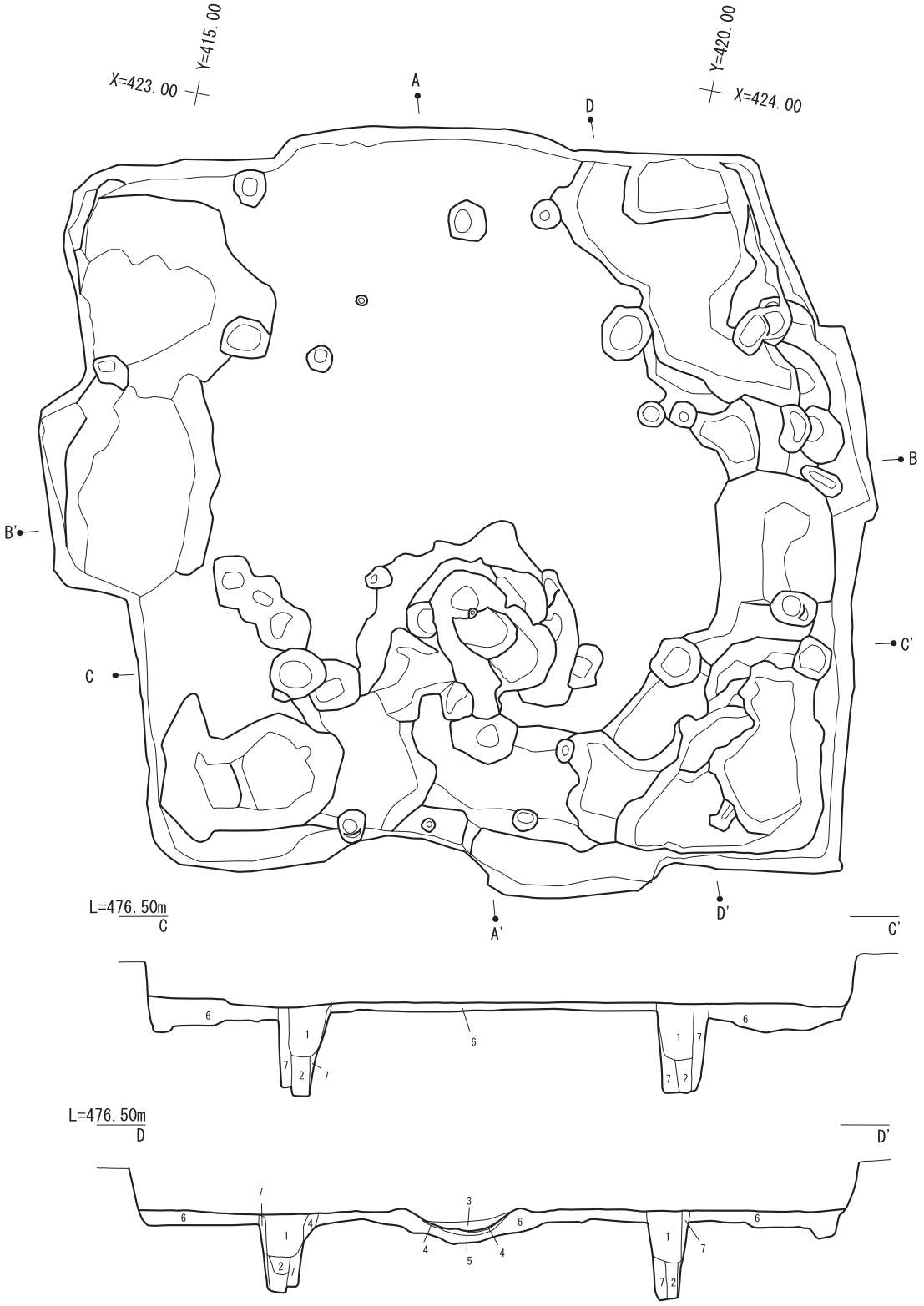




1　1a層　黒色シルト　少量のロームブロック含む　しまり強い
2　1b層　明褐色シルト　多量のロームブロック(5～10cm大)含む　しまり強い
3　2層　暗褐色シルト　多量のロームブロック(5cm大)含む　少量のベンガラ混　しまり強い
4　3層　黒色シルト　少量のロームブロック含む　少量のベンガラ混　しまり強い
5　掘方埋土　褐色シルト(ロームブロック混)　極多量のロームブロックを含む　しまり大　粘性不明　貼床(貼ベッド)の材である

0　2m

図９　SB1　床面（1/60）



1　黒褐色シルト(ローム混)　SB1埋2層に同じ
2　黒褐色シルト　しまり弱　粘性中　柱痕への流入土か？
3　暗褐色シルト　しまり弱　粘性中　炉1層
4　暗灰色シルト　しまり強　粘性中(貼カベが混じった結果　ロームブロック混)　3が受熱により焼きしまったもの
5　4に同じ、ただし4より焼きしまりが弱い
6　褐色シルト　ロームブロック混　ロームを多量に混入した貼床土　しまり強　粘性不明
7　6に同じ　ただし　しまり中　柱穴埋土(〆固め用)

図 10　SB1　掘方（1/60）

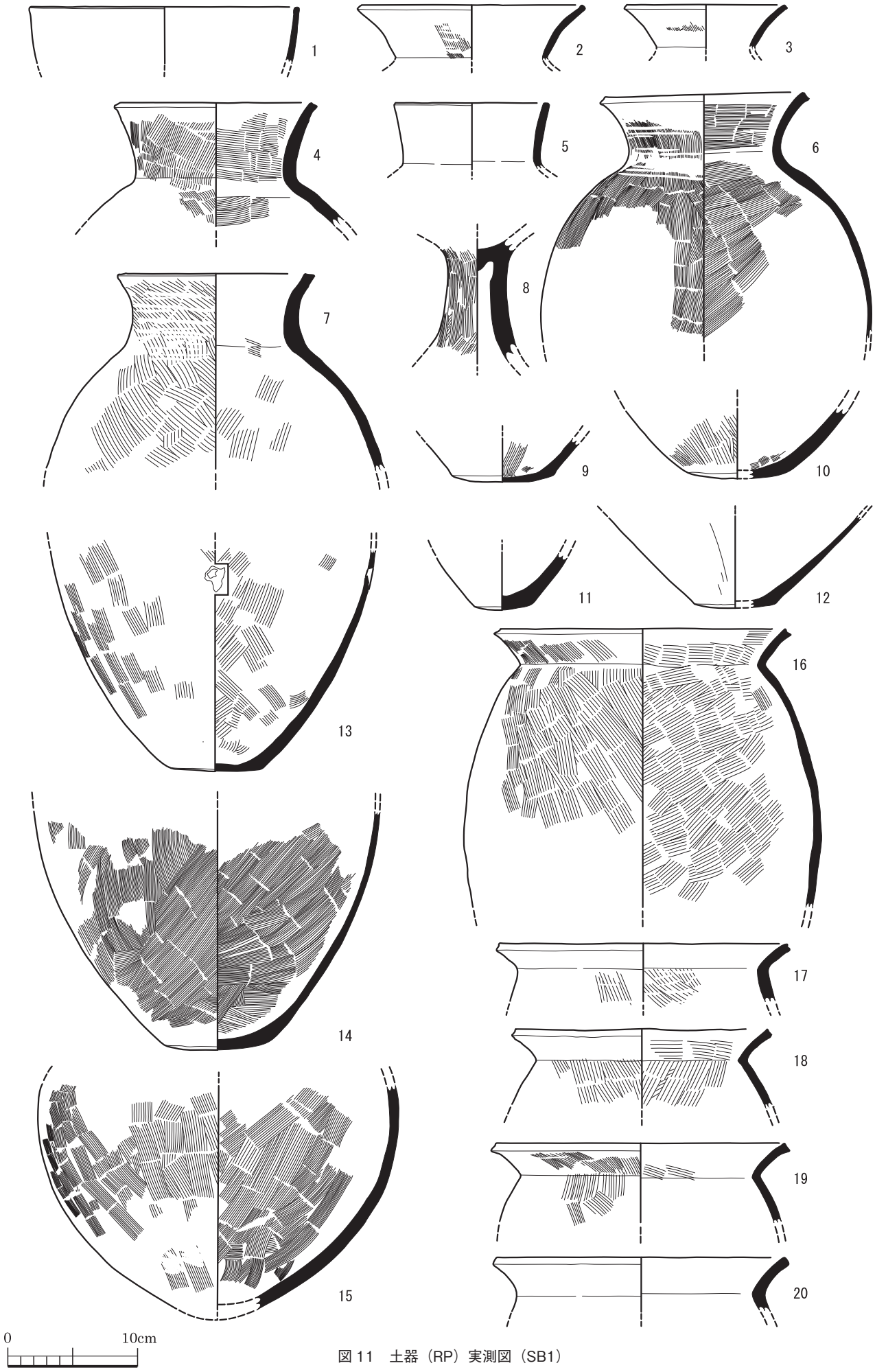


図 11　土器（RP）実測図（SB1）

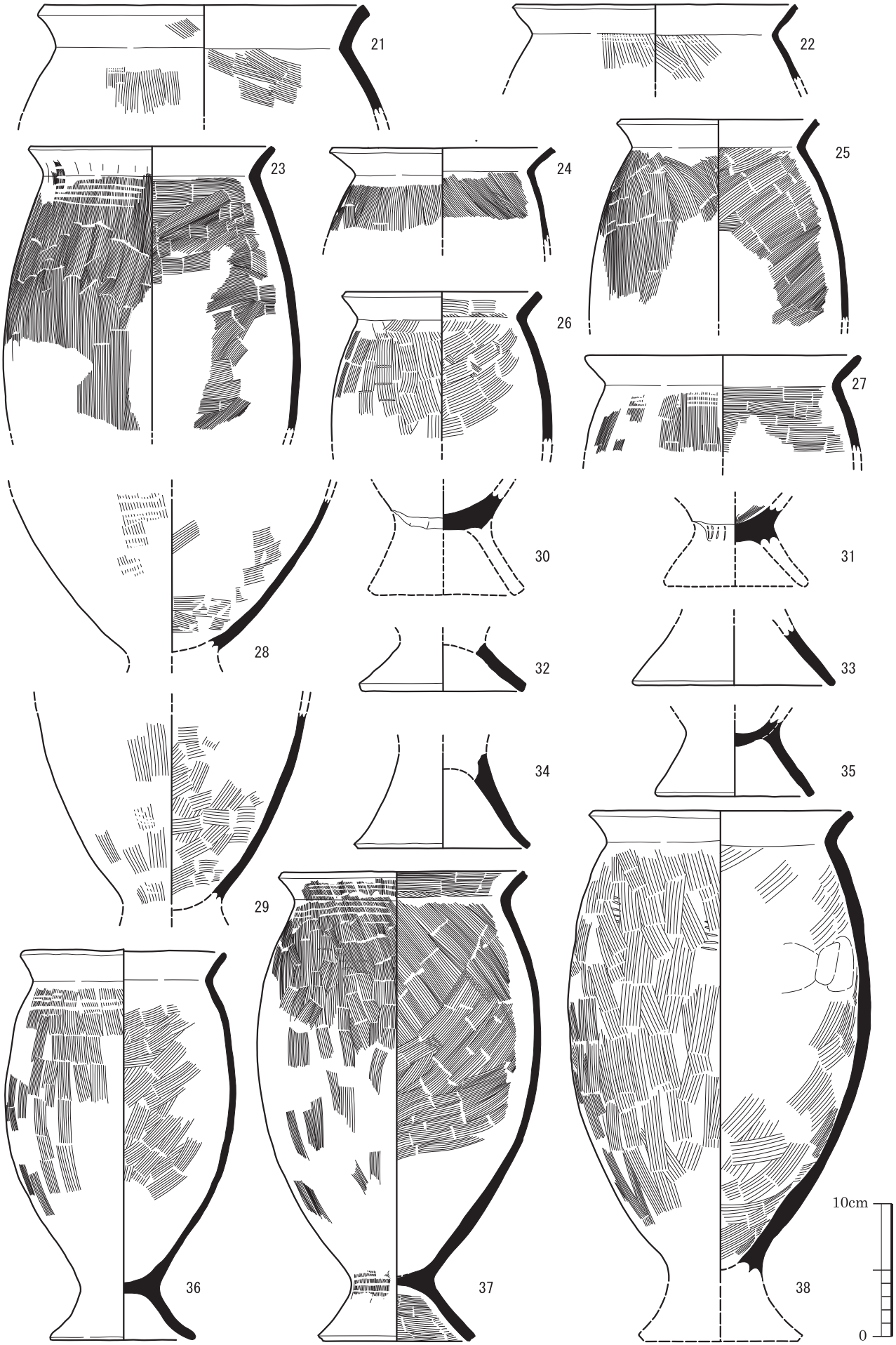


図 12　土器（RP）実測図（SB1）

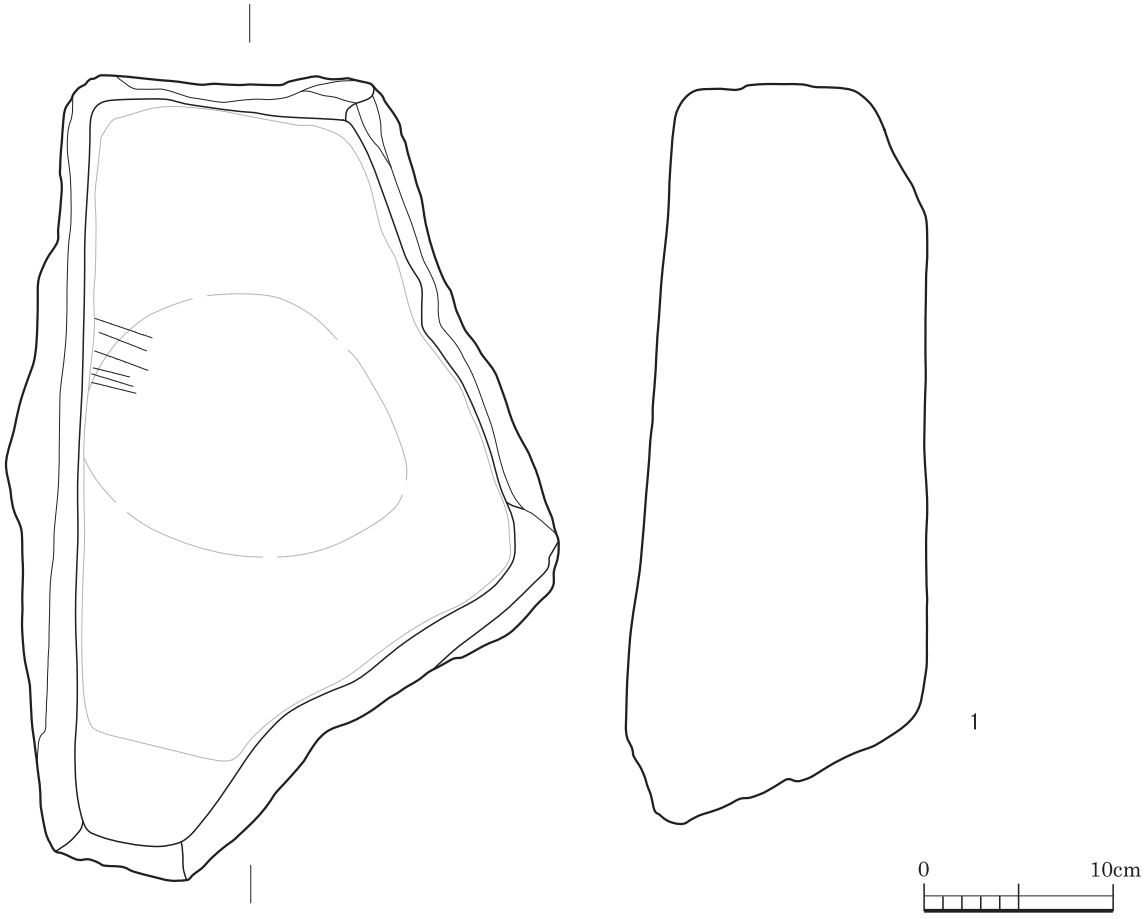


図 13　石器（RQ）実測図（SB1）

SB1

SB1は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁及び西側壁に張出し部を備える。

SB1の法量は、南北7.1 m、東西7.1 m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北半部で発達し、南半部では発達度が低い、なかでも東南隅にはあまり形成されていない。

炉は、南北110cm、東西110cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤の北東部は、部分的に低くなっている。周堤外部には、周堤に接して小ピットが3基並んでいた。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して主軸から東よりに位置する。深さはくぼみが形成された程度であるが、南側壁の張出し部が複合して形成されているので、Kピットとして認めてよい、と考える。

ベッド状遺構は北西隅、北東隅には概ね方形を呈して設けられ、西側壁には張出し部と複合して設置されている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。北辺には溝が切られていないため、凹字形の掘方である。炉、張出しが設けられる部分にも掘削が

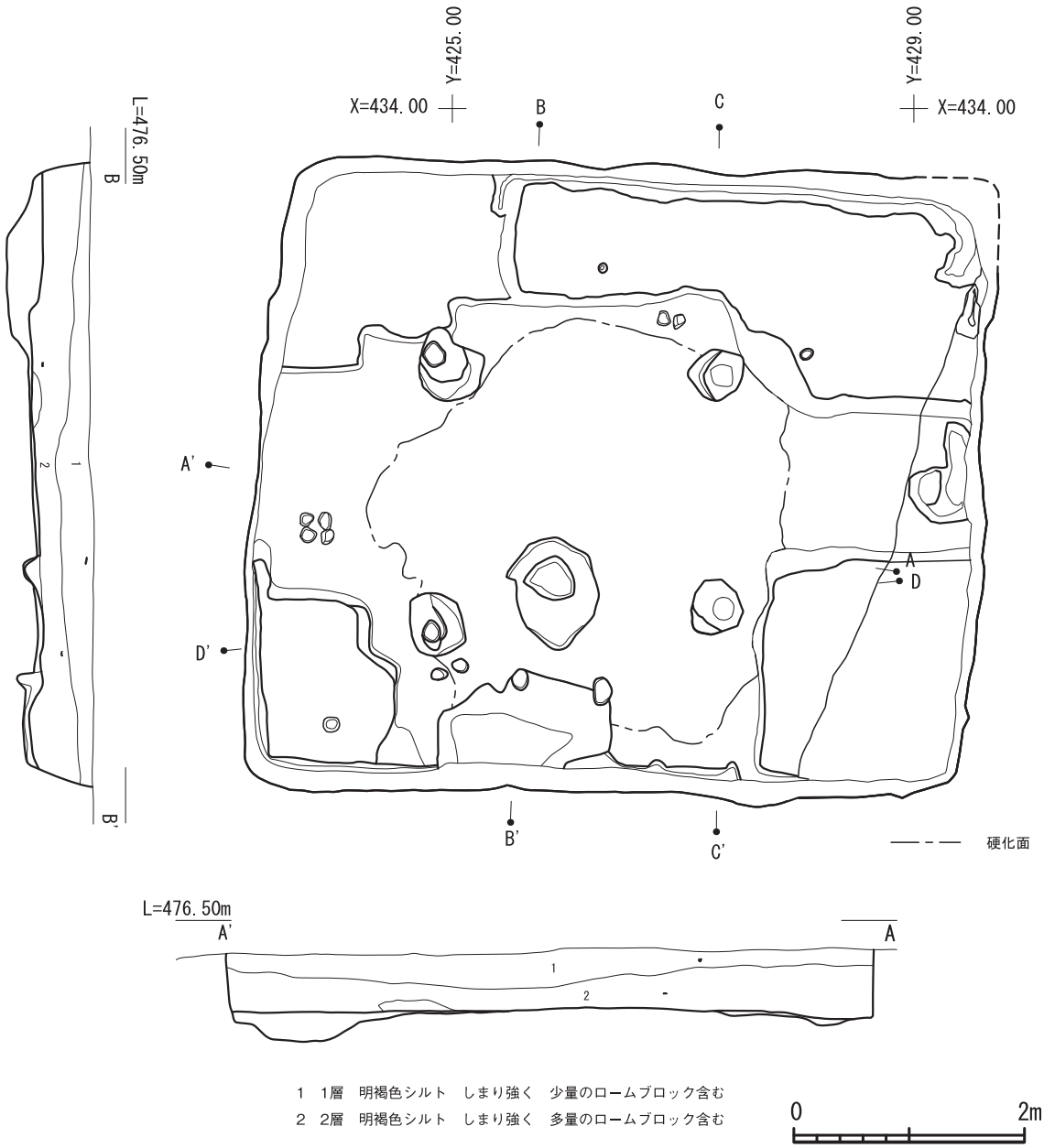


図14　SB2　床面(1/60)

及ぶが、炉は円形土壙が、張出し部は方形土壙に近い幅広の溝が掘削されており、各設備の完成形に対応している。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約25cmの深度である。

なお、この竪穴住居跡は最初に掘削を実施した竪穴住居跡の一つであるが、床面の検出を、北西隅、東側壁、南側壁の部分で失敗している。北西隅と東側壁に係る部分ではベッド状遺構（結果として確認していない。）と床面の判別に、南側壁に係る部分ではKピット床面の判別に手間取り、その一部を4層相当の深度までトレンチとして掘削している。

SB2

SB2は、方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

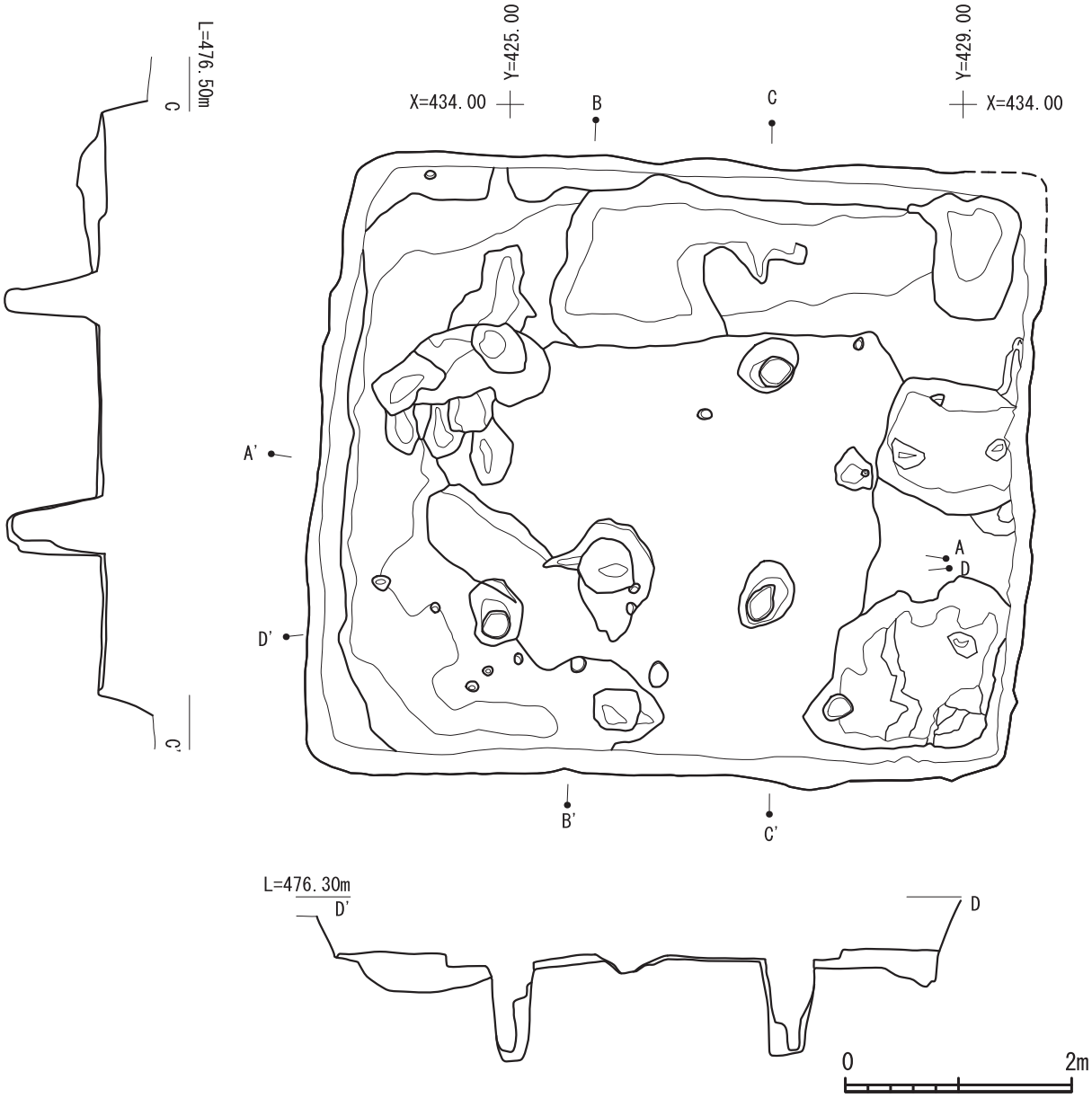


図15　SB2　掘方（1/60）

SB2の法量は、南北5.5ｍ、東西6.2ｍ、遺構確認面からの深さ40cmを測る。

主柱穴は、2×2の計４基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。柱痕跡を確認しており、直径約20cm、深さは床面から約80cmの深度にまで及ぶ。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、全体的に発達しているが、北辺、南辺では発達度が、若干、低く形成されている。なお、内陣は竪穴住居の中央からやや西に偏った位置を採る。

炉は、南北70cm、東西100cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高まりの周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。炉の1段目は不整形な楕円形に近い円形であるが、2段目は整形度合いが高い円形を呈している。

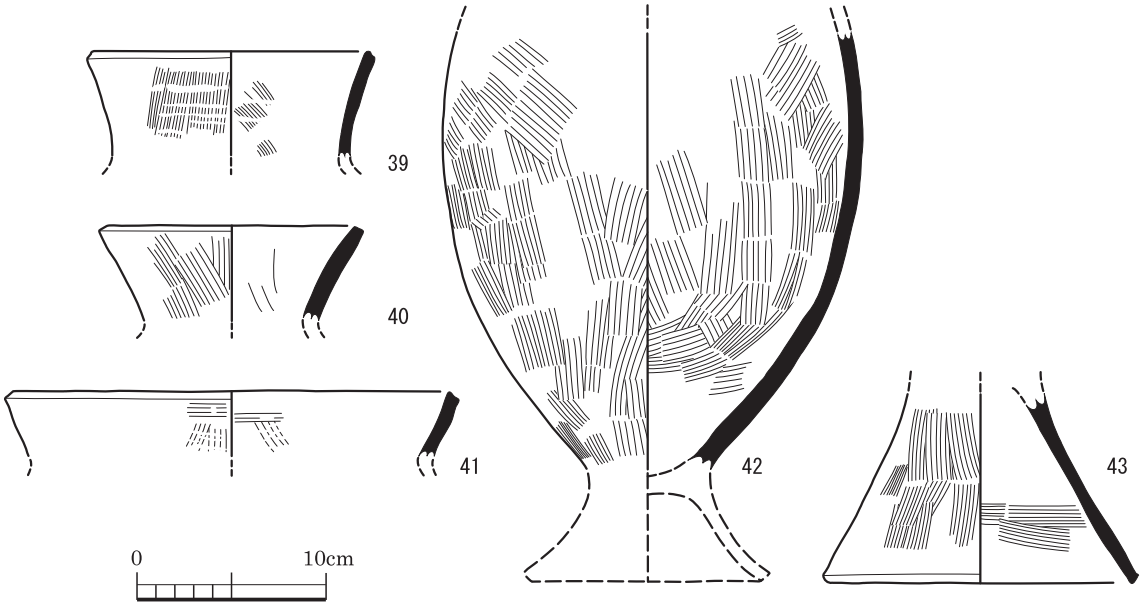


図 16　土器（RP）実測図（SB2）

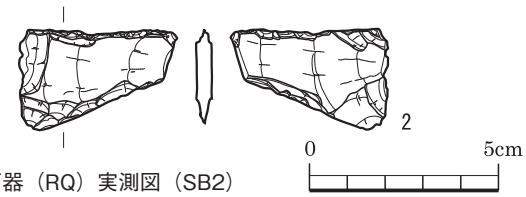


図 17　石器（RQ）実測図（SB2）

炉の内壁は、南側に向かって緩やかに上っている。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して主軸から西よりに位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は北西隅、南西隅、南東隅には概ね方形を呈して設けられ、北東隅のベッド状遺構は西に張出し、北西隅のベッド状遺構と連接している。東側のベッド状遺構の間には、東側壁に接して不定形の土壙が確認された。西側のベッド状遺構の間では、人頭大の礫が4個、固め置かれた状態で検出されている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、概ねベッド状遺構の形に対応した形で溝が切られているが、北東隅、南東隅に方形の土壙を確認した。南辺には溝が切られていないため、凹字形の掘方である。炉、Kピットが設けられる部分にも掘削が及び、炉は円形土壙が、Kピットは方形土壙が掘削されており、各設備の原形を観取することができる。平床に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB3

SB3は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB3の法量は、南北3.1 m、東西3.1 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は2基、検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられ、ともに内傾している。なお、主柱穴が内傾する現象は、SB9、SB10等、浅い竪穴住居に共通する現象である。

炉は、南北60cm、東西60cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、東西の主柱穴を結ぶ線上で、竪穴住居のほぼ中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施設は確認していない。

床は明確に認識できるものではなく、石皿、磨石等、遺物の検出高を参考として判断した。

掘方には、顕著な段差が認められず、掘削手順等を

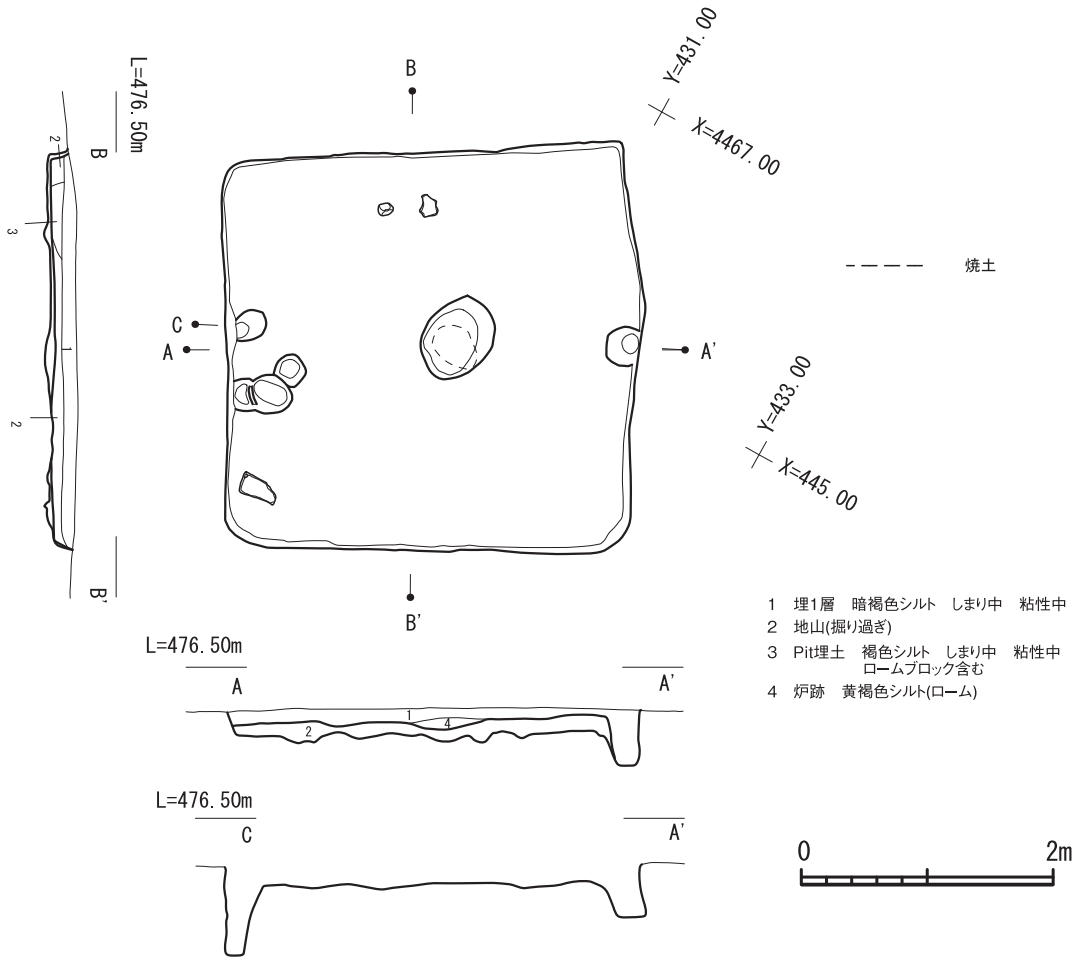


図18 SB3（1/60）

知ることはできない。

SB4

SB4は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁及び西側壁に張出し部を備える。SB21と切り合うが、SB21（古）→SB4（新）である。

SB4の法量は、南北5.5m、東西5.6m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北東部では発達度が低く、あまり形成されていない。

炉は、南北80cm、東西90cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に平坦面を有すほど幅広く形成される。ただし、南東部では平坦面が狭隘なものとなっている。炉の外部、北東部には炭と焼土が掻き出されていた。

Kピットは概ね方形を呈し、南側壁に接して主軸上に位置する。若干堀りくぼめられた程度の深度であるが、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は北東、南東、南西の各隅には概ね方形を呈して設けられ、北西隅では北壁から距離をおいて方形のベッド状遺構が設置されている。北東隅と南

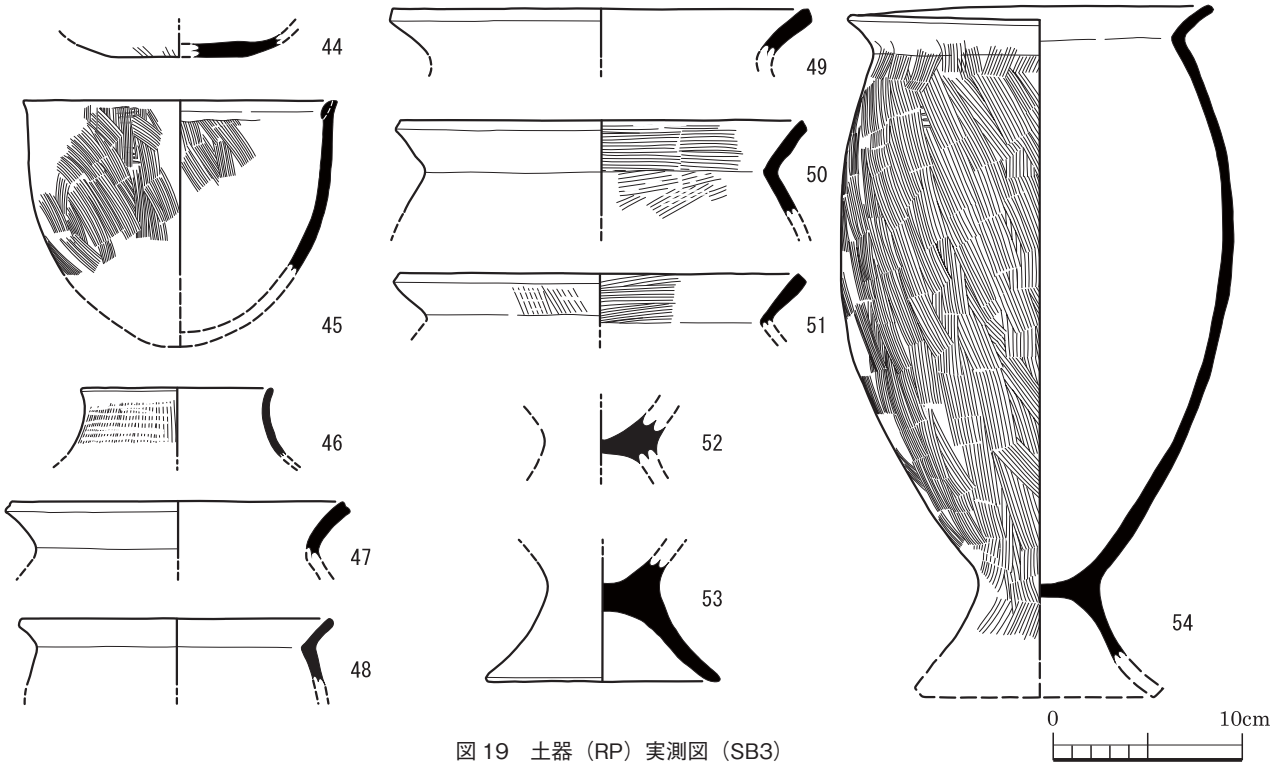


図19　土器（RP）実測図（SB3）

東隅のベッド状遺構の間には、1段低いベッド状遺構が設けられ、東側壁際ではベッド状遺構が連接する状態となっている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

各側壁には側壁溝が確認され、側壁、ベッド状遺構の側辺に沿って小ピット列が検出されている。なお、南側壁際、Kピットと南東隅のベッド状遺構の間では、ベンガラが検出された。

掘方は、東側壁、西側壁に接して溝が切られている。北西隅では長方形の土壙が掘削された状況であり、北東隅、南東隅では溝の上端部は長方形を呈している。このことから、4隅に方形の土壙が掘削された後、北側と南側の土壙を繋ぐ溝が切られたのであろう。いずれにせよ、北辺、南辺には土壙等が確認できないため、二字形の掘方である。炉、Kピットが設けられる部分にも掘削が及ぶが、炉は隅丸の方形土壙が、Kピットはくの字形の不整形土壙が掘削されている。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB5

SB5は、正方形を呈すると推定されるが、柱建てが不明な竪穴住居跡である。炉を備える。

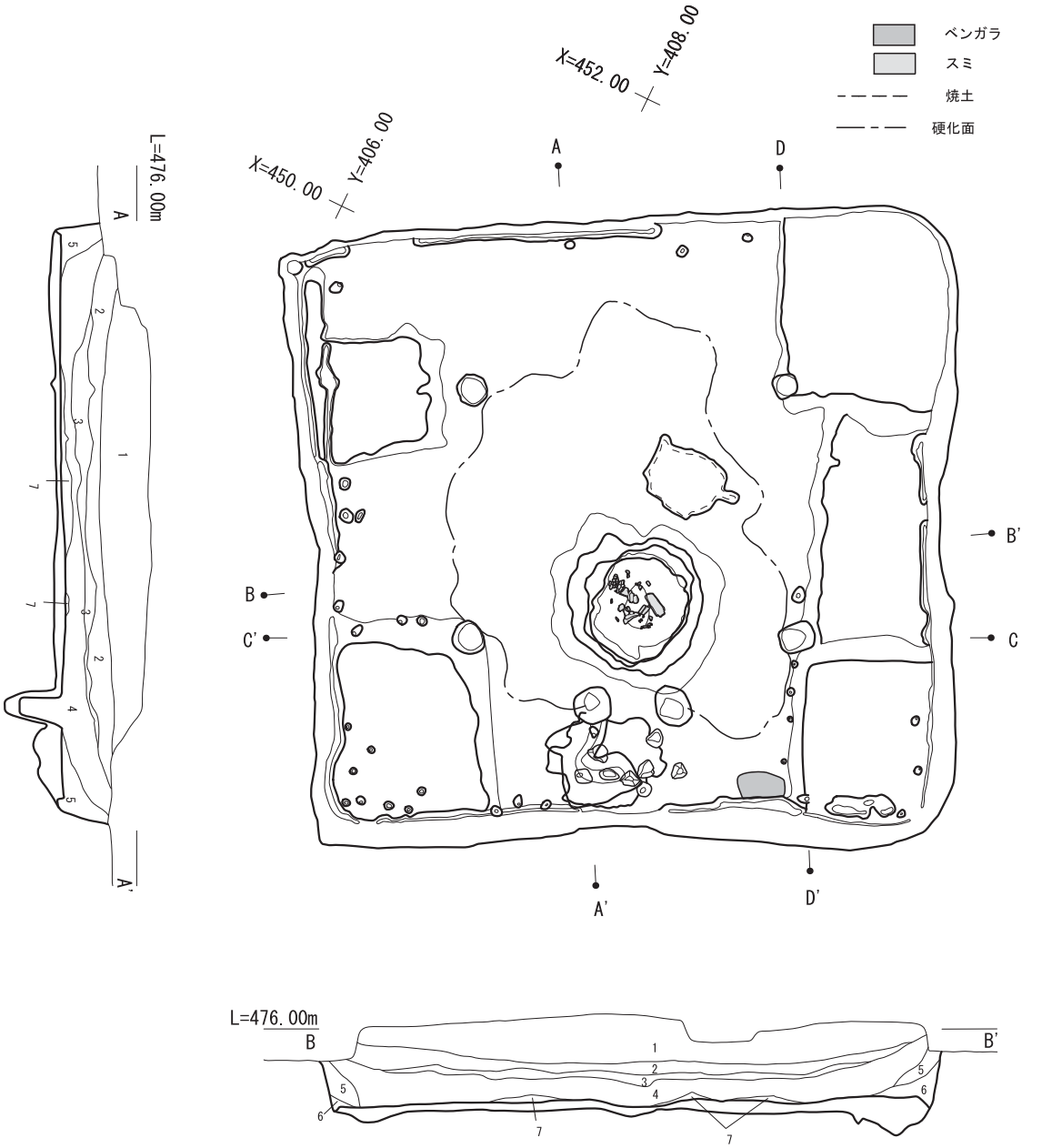
SB5の法量は、南北3.7 m、東西の確認長3.6 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

南側壁に10cm程度の張出し部を備え、張出し部の端はピットが備えられている。この他、複数のピットを検出しているが、いずれのピットも主柱穴と判断するには脆弱な規模である。

炉は、南北70cm、東西110cmの四角形を呈し、深さは20cmである。炉は、竪穴住居のほぼ中央に位置しているが、炉の平面形、位置ともに収まりが悪く、企画性に乏しい。炉の北側には土壙が存在する。

床は、硬化面を明確に認識するには至らなかった。このため土器等の遺物の検出高を参考として床面の位置を判断した。

掘方には、顕著な段差が認められず、掘削手順等を知ることはできない。



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小
2　埋2a層　明黒褐色シルト　ローム粒子混(少)　しまり中　粘性小
3　埋2b層　明黒褐色シルト　炭化物混(多)　しまり中　粘性小　住居廃絶後、土器投入時の灰層
4　埋2d層　明黒褐色シルト　ロームブロック混　しまり中　粘性小　投入土層か？
5　埋3a層　黒褐色シルト　ローム粒子混(少)　しまり中　粘性小　デルタ堆積
6　埋3b層　褐色シルト　ロームブロック混(多)　しまり中　粘性小
7　床直灰層　黒褐色シルト　炭化物混(多)　しまり小　粘性小　住居操出時の炉からの灰層

0　2m

図 20　SB4　床面（1/60）

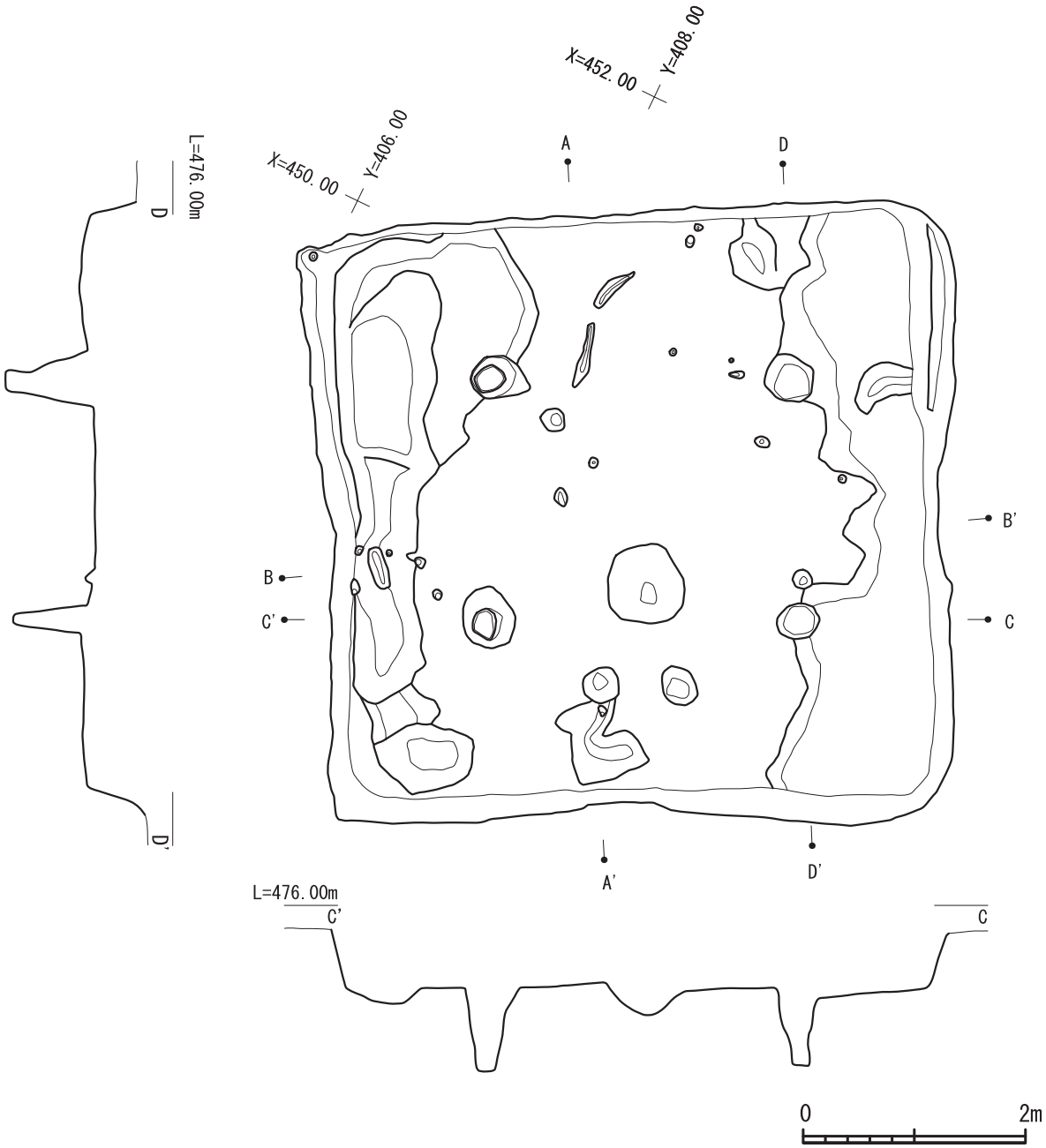


図21　SB4　掘方（1/60）

SB6

SB6は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB6の法量は、南北5.5m、東西5.5m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、東西に2基を検出した。この他、竪穴住居の北側に柱穴と評価することができるピット2基（以下、「擬主柱穴」と表記する。）を検出しており、4本柱建てである可能性を有している。擬主柱穴は北側に寄っているものの、他の竪穴住居における北西主柱穴、北東主柱穴の位置に近く、床の硬化面も擬主柱穴の近辺まで発達しており、主柱穴と他施設と同様の相関関係が認められる。なお、竪穴住居の南半部では擬主柱穴に相当する施設を確認することはできなかっ

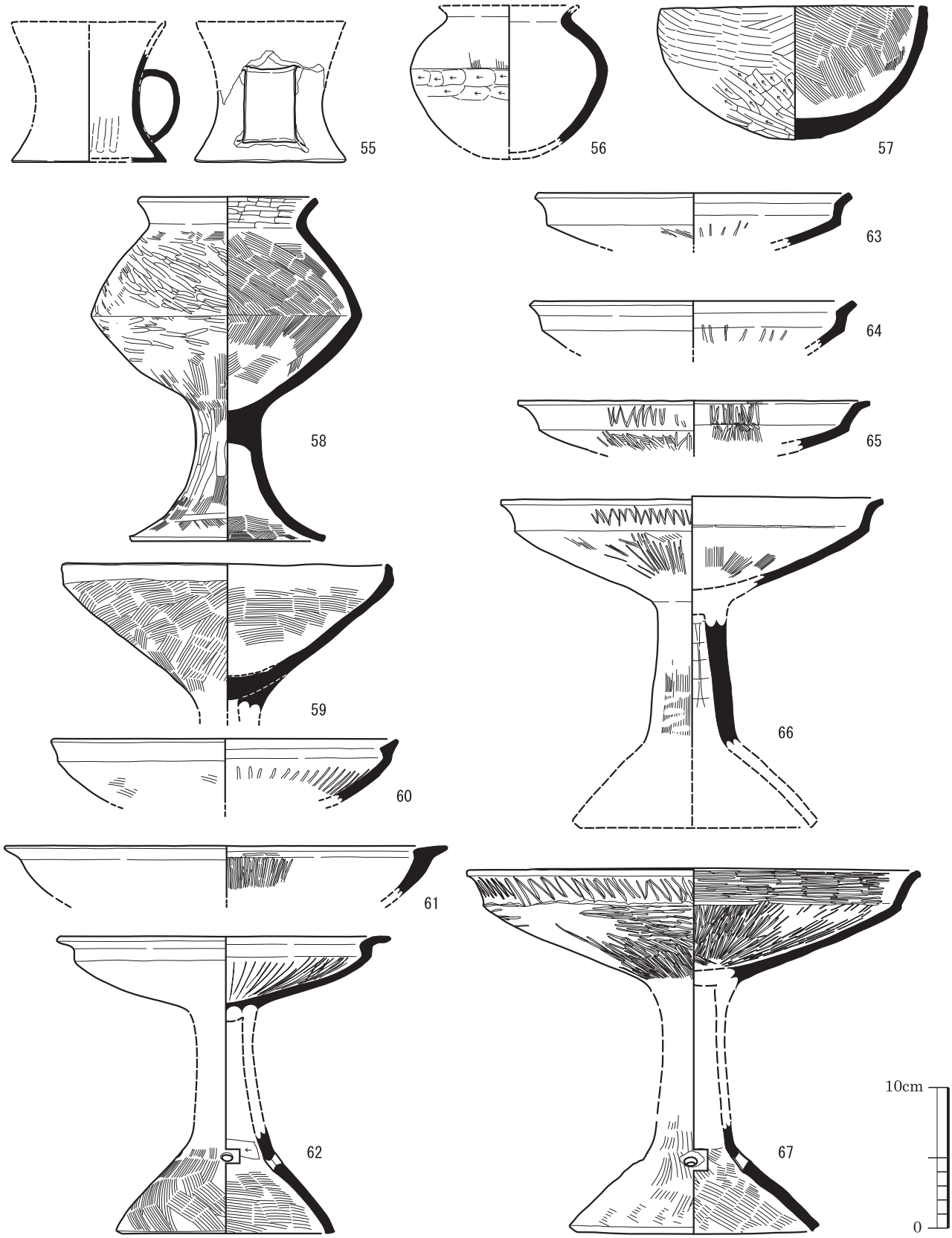


図 22　土器（RP）実測図（SB4）

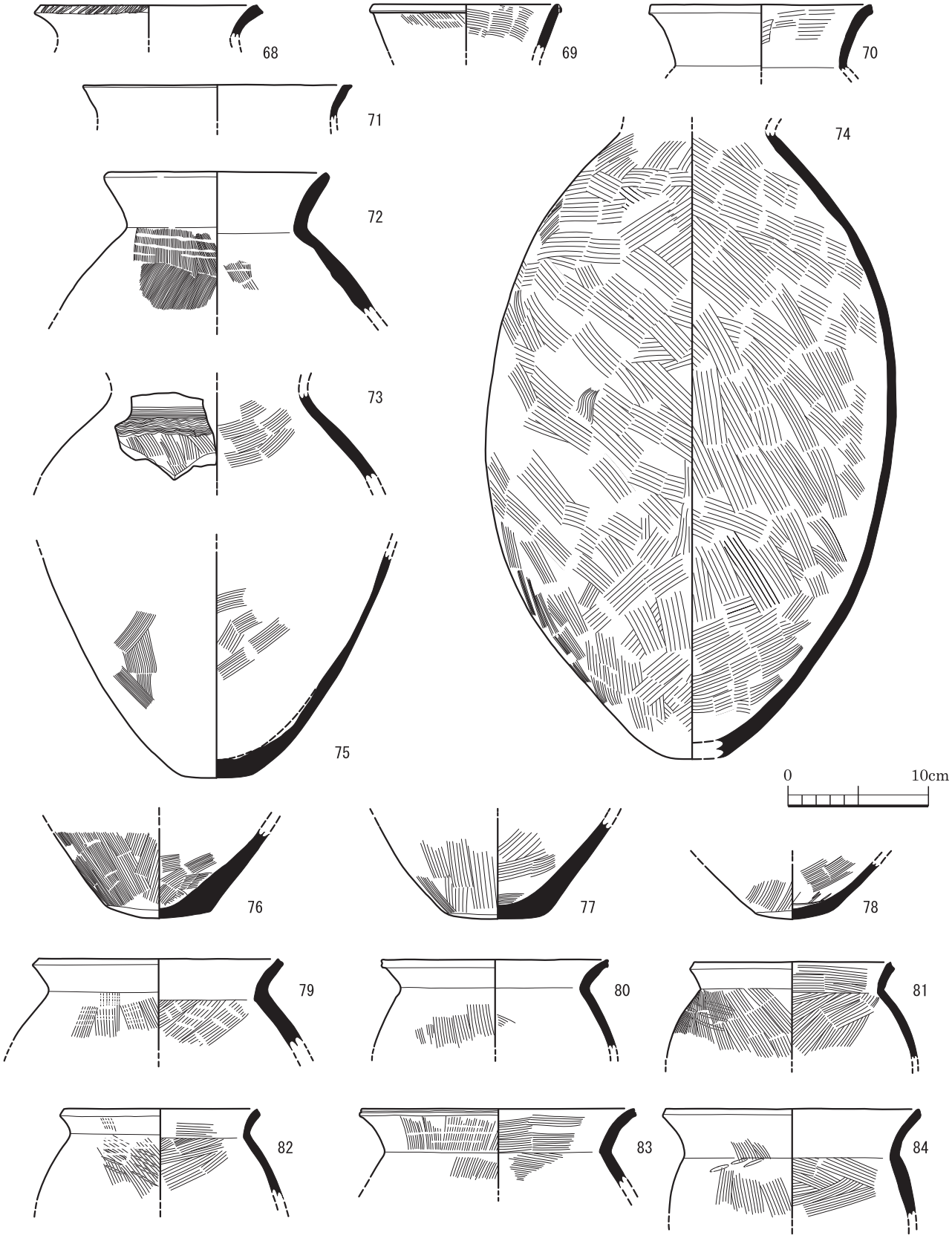


図 23　土器（RP）実測図（SB4）

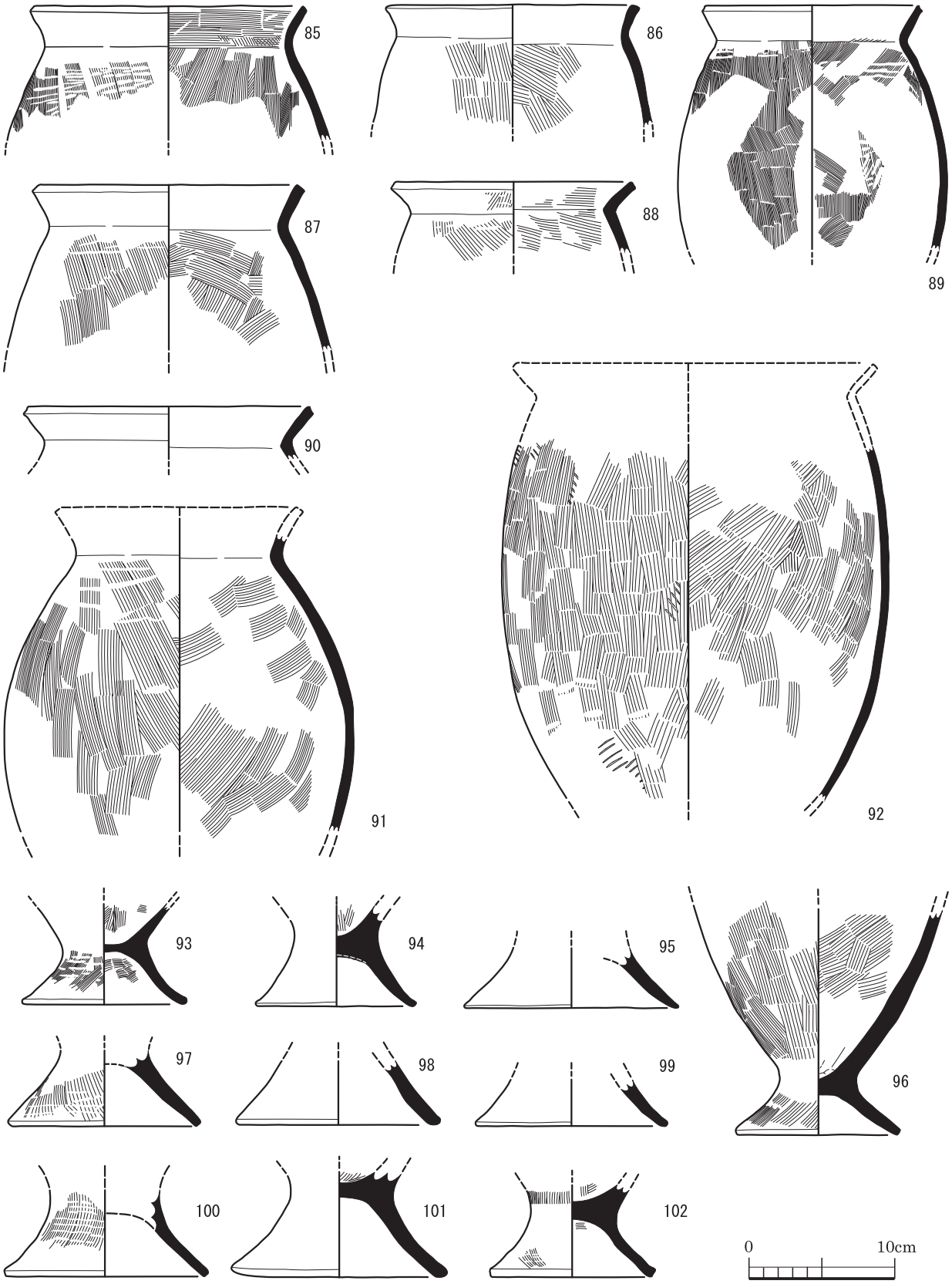


図 24　土器（RP）実測図（SB4）

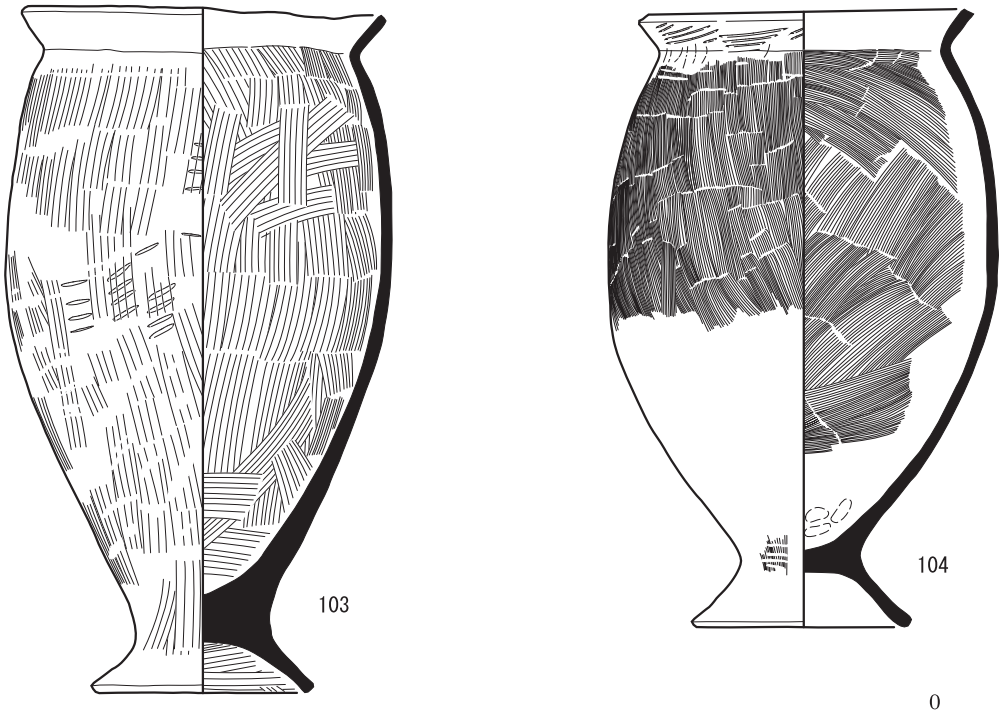


図 25　土器（RP）実測図（SB4）

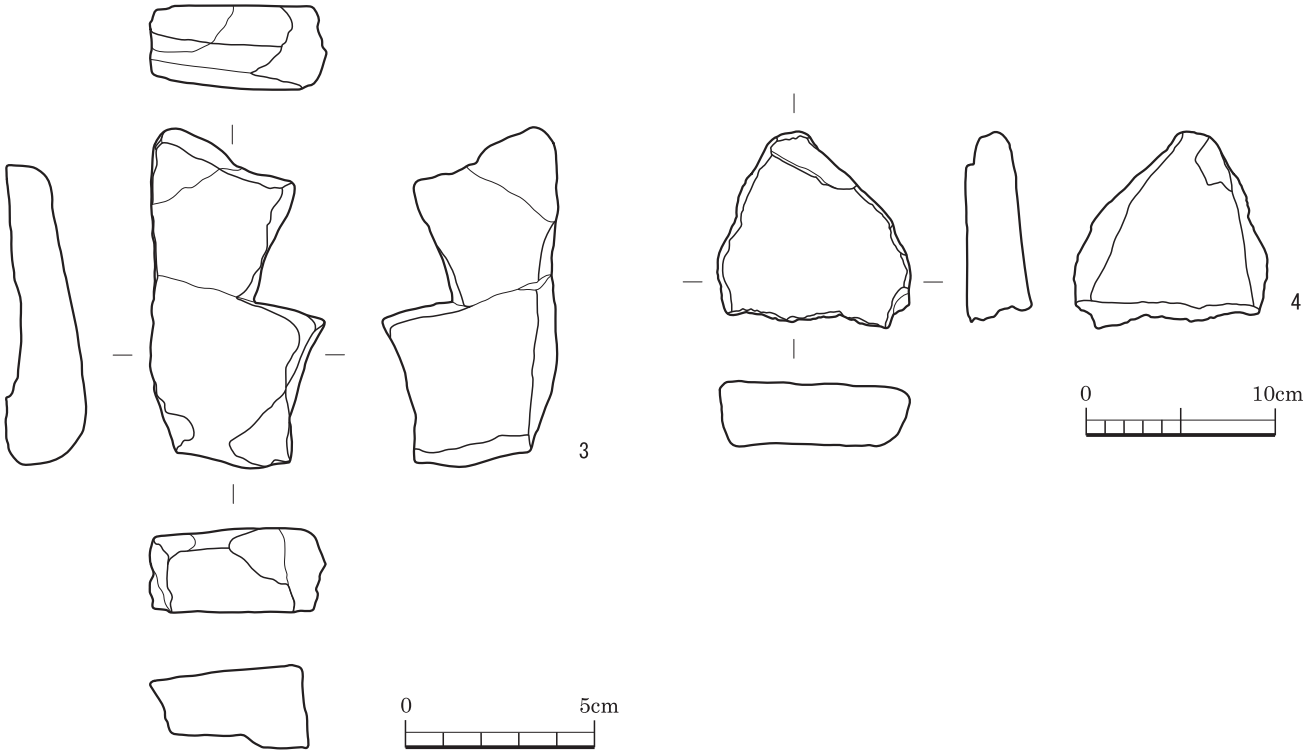


図 26　石器（RQ）実測図（SB4）

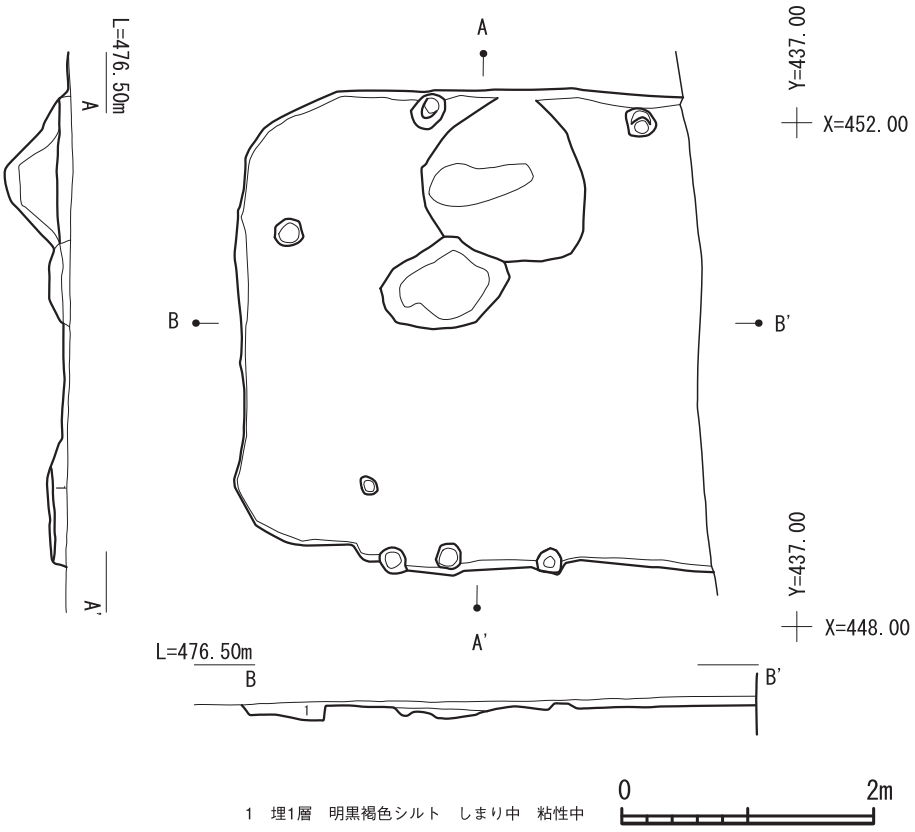


図27　SB5（1/60）

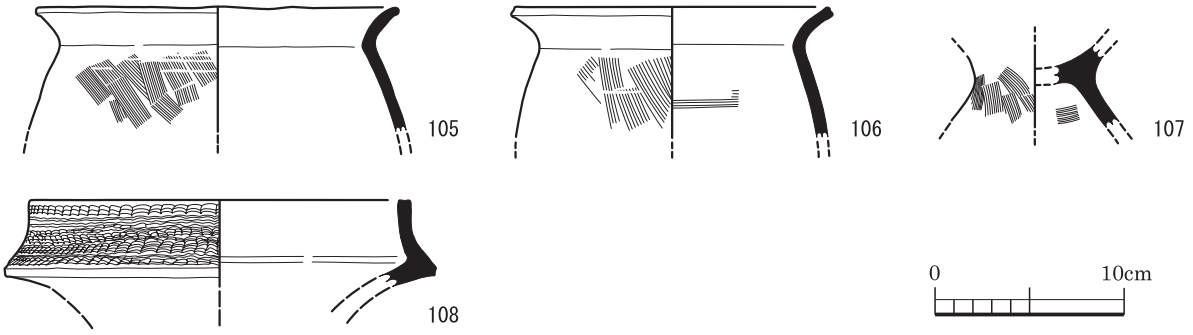
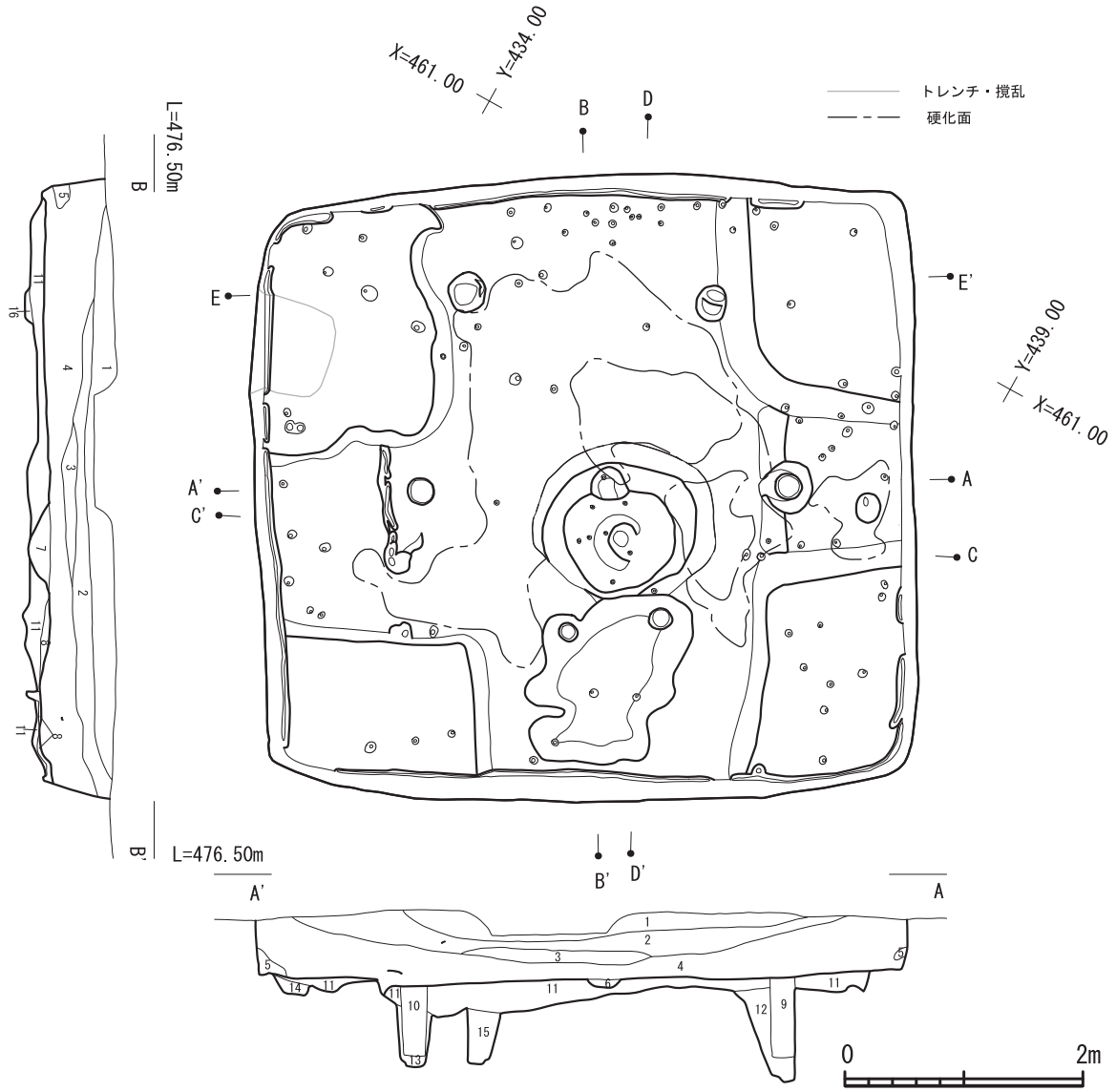


図28　土器（RP）実測図（SB5）

た。以上から、SB6の柱建てを以下のとおり整理する。主柱穴と擬主柱穴を結べば台形を呈し、かつ、竪穴住居の北半部に偏って位置することとなり、梁の通りが悪くなる。したがって、主柱穴を2本とし、擬主柱穴は補助柱とするにとどめたい。床面の硬化面は竪穴住居の中心から、北半部は擬主柱穴の位置まで、南半部では南側ベッド状遺構の北端を結ぶ位置まで形成されている。

炉は、南北80cm、東西90cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、南側ベッド状遺構の北端を結ぶ線に接し、竪穴住居中央に位置している。炉は僅かな高まりの周堤を有し、周堤外縁までを含めると南北130m、東西156cmの円形となる。周堤は、その上端部に平坦面を有すほど幅広く形成される。ただし、南



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性弱

2　埋2a層　黒褐色シルト　しまり中　粘性弱
黄褐色ロームブロック(2～6cm大)を含む
土器片、炭、鉄製品を含む

3　埋2b層　黒褐色シルト　しまり中　粘性弱
朱色～橙色焼土　しまり弱　粘性大　多量に含む
灰黒色シルト(ワラ灰のような炭含有)
しまり中　粘性中　多量に含む　また　土器片、炭化材を含む

4　埋2c層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中
黄褐色ロームブロック(2～8cm大)を多量に含む
土器片、鉄製品を含む

5　暗黒褐色シルト　しまり弱　粘性大
(1～4に比べて暗い)
住居隅のところどころに堆積

6　炉北側くぼみ埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性大
炭を含む
このくぼみは消炭や灰をとっておくのに使用か？

7　炉埋2層　(「炉埋1層＝炉上の埋2a層」として取り上げたため)
暗黒褐色シルト　しまり弱　粘性大
(1～4にくらべて暗い)
灰が土になったような感じを呈する
灰、黄褐色ロームブロックの焼土を含む

8　Kpit埋土　(＝「Kpit上の埋2a層」として取り上げ)
土質は住居埋土の埋2a層とほぼ同じであるが、灰を含む

9　東主柱痕埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性中～大

10　西主柱痕埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性中～大

11　掘方埋1層　黒褐色シルト　黄褐色ロームブロック(φmm～50mm)、
暗褐色シルトの3種混合
混合比は　黒：黄：暗＝1：1：1
全体として　しまり強　粘性中

12　東主柱穴掘方埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性大
黄褐色ロームブロック(φ～2cm)、黒色シルト粒を含む

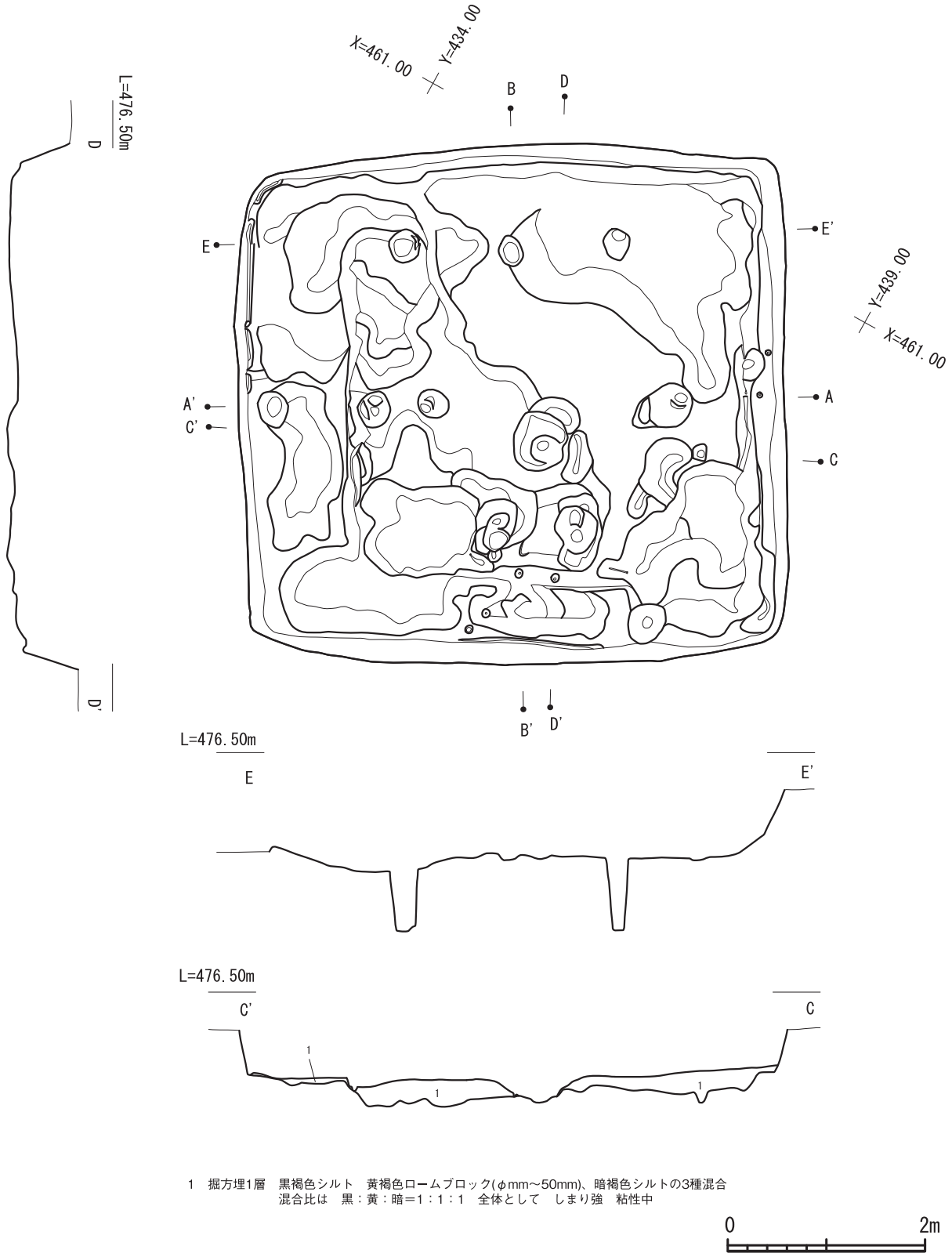
13　西主柱穴掘方埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性大
黄褐色ロームブロック(φ～2cm)、黒色シルト粒を含む

14　西柱穴埋土　黒褐色シルト：暗褐色シルト＝1：1で混合
黒色シルト、黄褐色ローム小粒(φmm)を含む
しまり中　粘性中

15　旧SB西主柱穴？　掘方埋土(＝中央西柱穴埋土として取り上げ)
黒褐色シルト　しまり中　粘性中
暗褐色シルト・黒色シルト・黄褐色ロームブロックがそれぞれ
粒状で混合

16　北柱穴埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性大
黄褐色ロームブロック(φmm～30mm)を含む

図 29　SB6 床面（1/60）



1　掘方埋1層　黒褐色シルト　黄褐色ロームブロック(φmm～50mm)、暗褐色シルトの3種混合
混合比は　黒：黄：暗＝1：1：1　全体として　しまり強　粘性中

0　2m

図30　SB6　掘方（1/60）

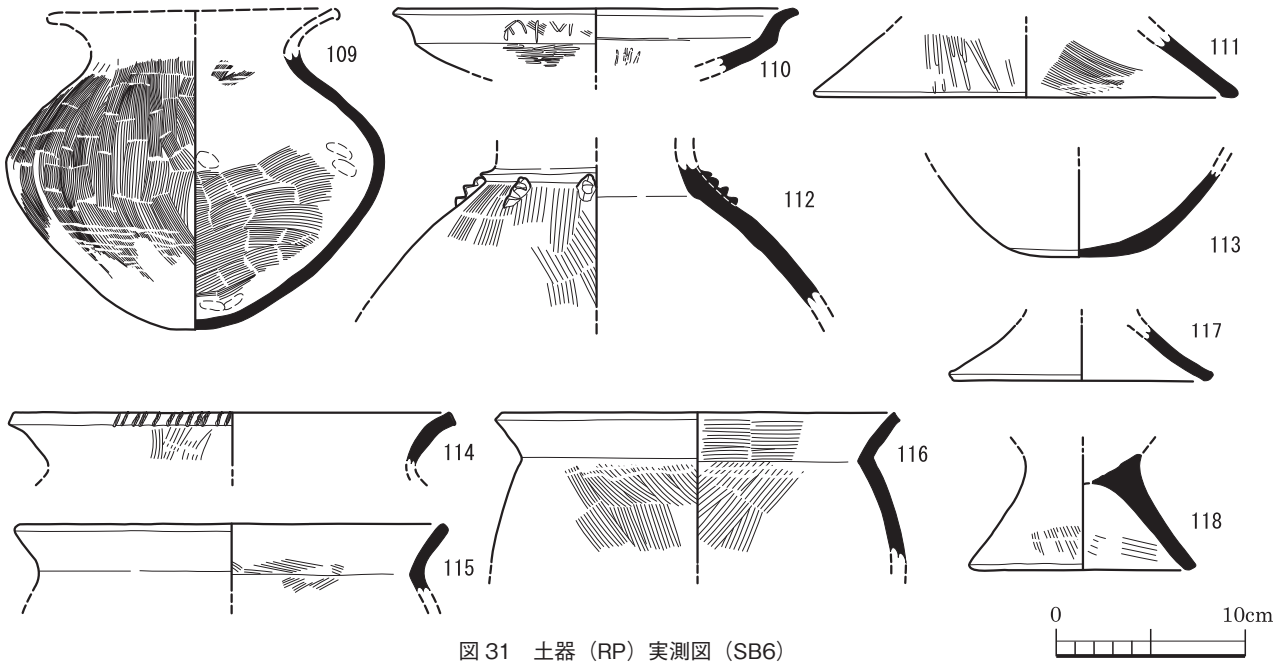


図31　土器（RP）実測図（SB6）

半部では平坦面が狭隘なものとなっている。周堤の北部は、南北28cm、東西32cmの範囲が部分的にくぼんでいる。炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられ、1段目と2段目との間には三日月形の平坦面が西側に付いている。炉の内壁は、東側に向かって緩やかに上っている。

Kピットは不整形な長方形を呈し、南側壁に近接して主軸上に位置する。1.5m×1m程度と大型であり、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。この柱穴は、東柱穴が直径15cm、床面からの深さ17cm、西柱穴が直径12cm、床面からの深さ34cmを測る。炉とKピットは接している。

ベッド状遺構は北西隅、北東隅には概ね正方形を呈して設けられ、南西隅、南東隅には長方形を呈して設置されている。北東隅と南東隅のベッド状遺構の間には、1段低いベッド状遺構が設けられ、東側壁際ではベッド状遺構が連接する状態となっている。この連接したベッド状遺構の中央部には、柱穴に近似したピットが1基存在する。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東北隅を起点として北側のベッド状遺構下端（東端ライン）と南側ベッド状遺構下端（北端ライン）を結ぶ正方形の掘方と、竪穴住居全体を包括する正方形の掘方とが重なり合っている。土壙、溝の掘削が複合しており、全体的に凸凹した掘方面を呈している。炉、Kピットが設けられる部分にも掘削が及ぶが、炉は円形土壙が複数重なり、Kピットは柱穴が2式確認される。

SB7

SB7は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。また、東側壁に張出し部を備える。SB12と切り合うが、SB12（古）→SB7（新）である。

SB7の法量は、南北6.5m、東西7.4m、遺構確認面からの深さ30cmを測る。張り出し部は東側壁の中央部に位置し、0.9×2.5m程度、長方形を呈して張り出している。

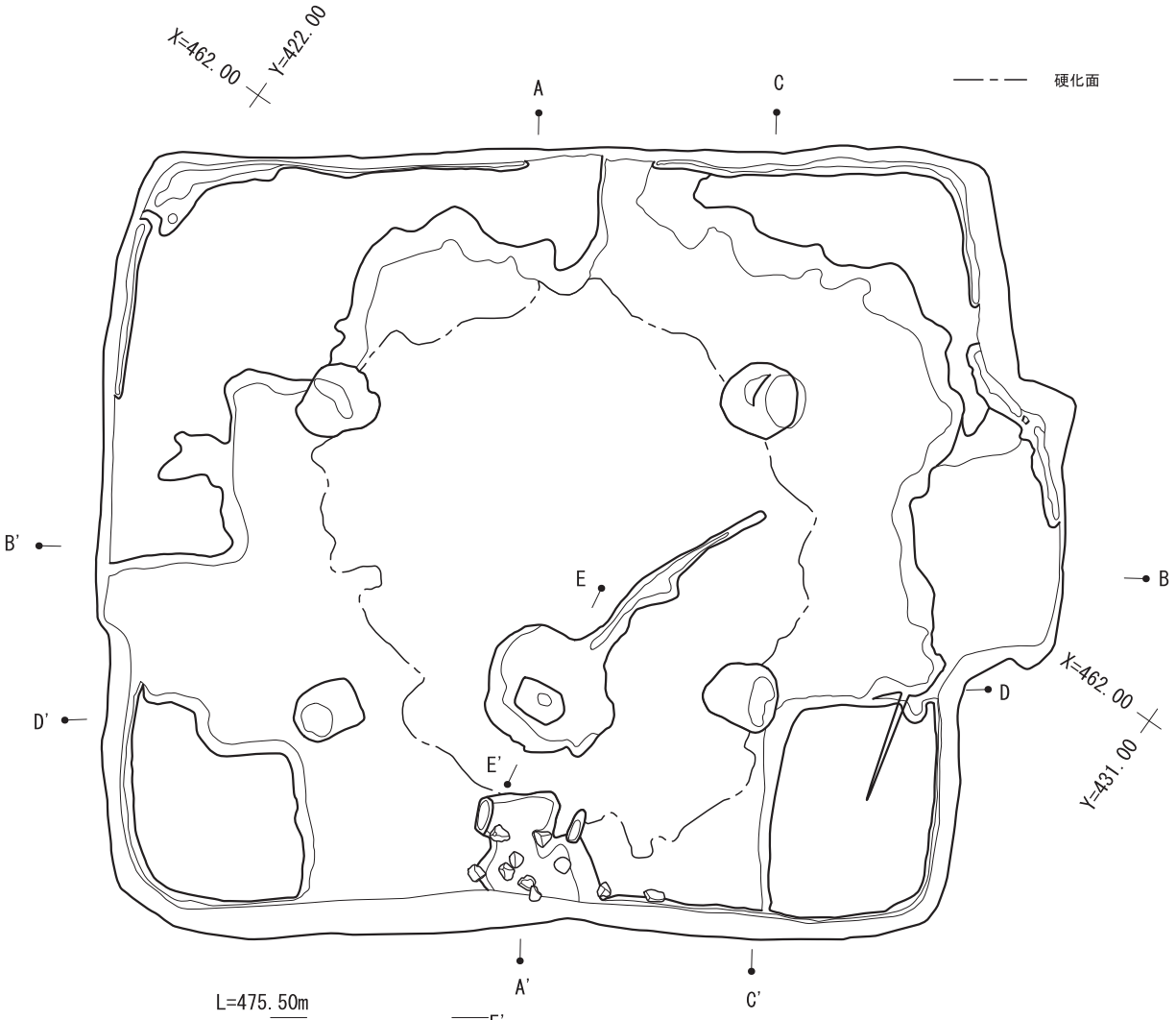
主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、南北方向に発達し、西方向にはあまり発達しない。

図 32　石器（RQ）実測図（SB6）

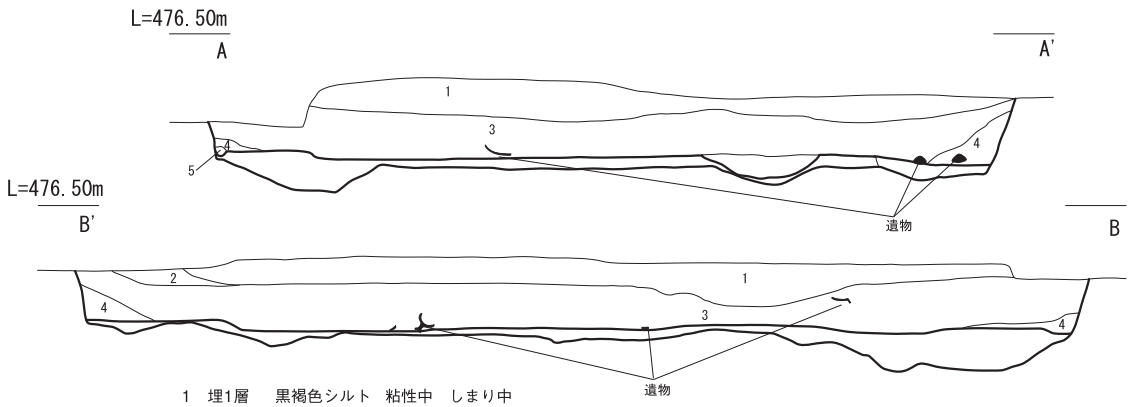
炉は、南北80cm、東西90cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。段が最も明瞭につく部分は南西部であり、その対面、北東部には1条の溝が取り付き、内陣端まで至っている。北東部の炉内壁は、溝に向かって緩やかに上っている。

Kピットは不整形な長方形を呈し、南側壁に接して南壁中央に位置する。なだらかに堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。この2基の柱穴の平面プランは長楕円形を呈している。Kピット内には人頭大の礫8個が凝集しており、南側壁に接した2個を含めると合計10個の礫が据え置かれている。

ベッド状遺構は南西隅、南東隅には概ね方形を呈して設けられ、北東隅、北西隅にはL字形を呈して、東側壁には張出し部と複合して設置されている。北東隅と南東隅のベッド状遺構の間に、張出し部と複合した1段低いベッド状遺構が収まり、結果として、東側壁際ではベッド状遺構が連接する状態となっている。北西隅のベッド状遺構は、元は方形のベッド状遺構に南伸または東伸する部位が取り付き、かつ、新たに取り



1　炉1層　　SB7埋2層と同じ　黒褐色シルトロームブロック　Ece
2　炉埋2層　暗黒褐色シルト　　黒灰を主成分ろする炭層　しまり弱　粘性弱



1　埋1層　　黒褐色シルト　粘性中　しまり中
2　埋2a層　暗褐色シルト　粘性小　しまり小
3　埋2b層　明褐色シルト　ロームブロック混(多)　粘性中　しまり中
4　埋3層　　暗褐色シルト　粘性中　しまり中　デルタ堆積部分
　　(西壁、南壁際には、ロームブロックが少量混じる)
5　埋4層　　明褐色シルト　砂混(小)　側壁溝埋土

0　2m

図 33　SB7　床面（1/60）

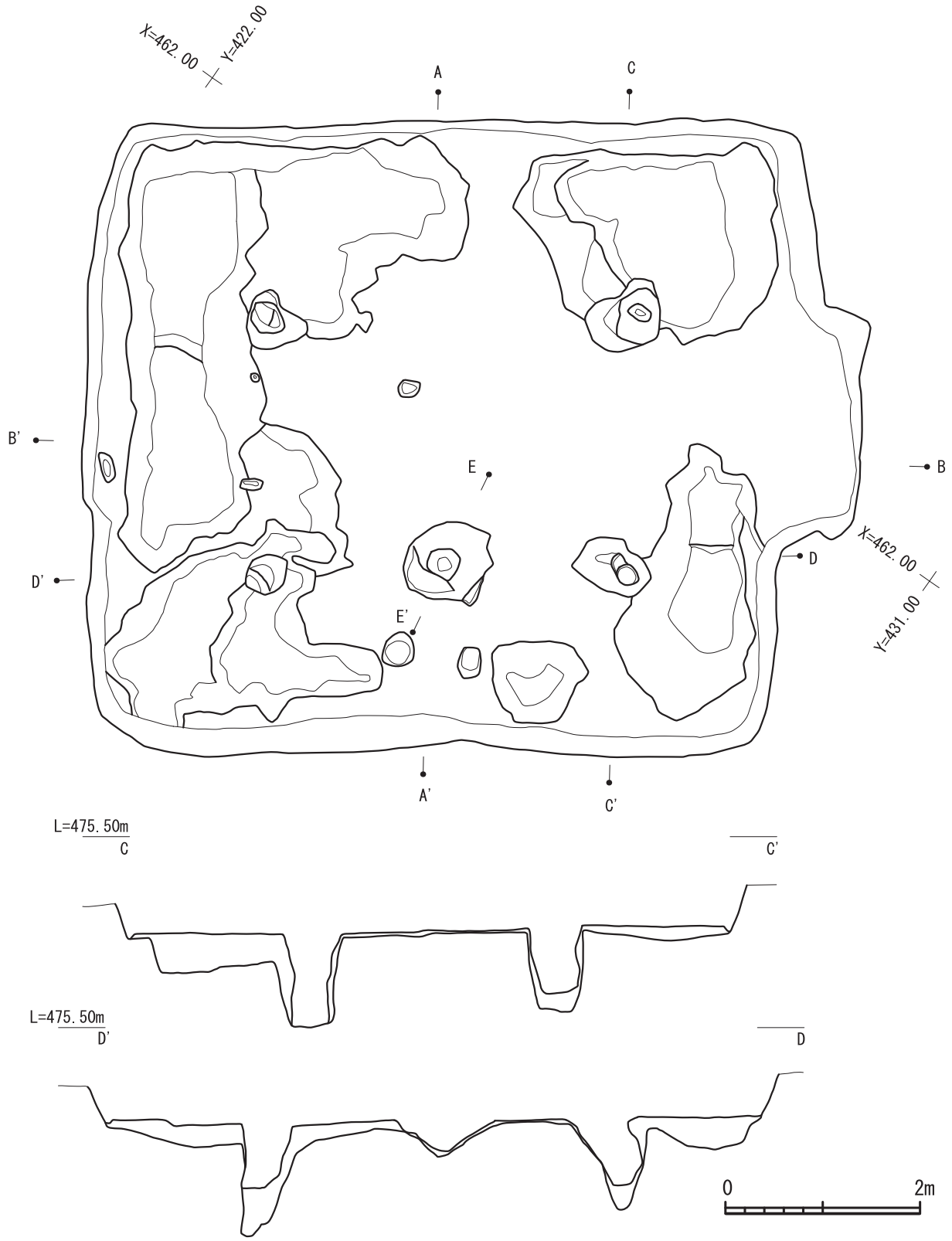


図34　SB7　掘方（1/60）

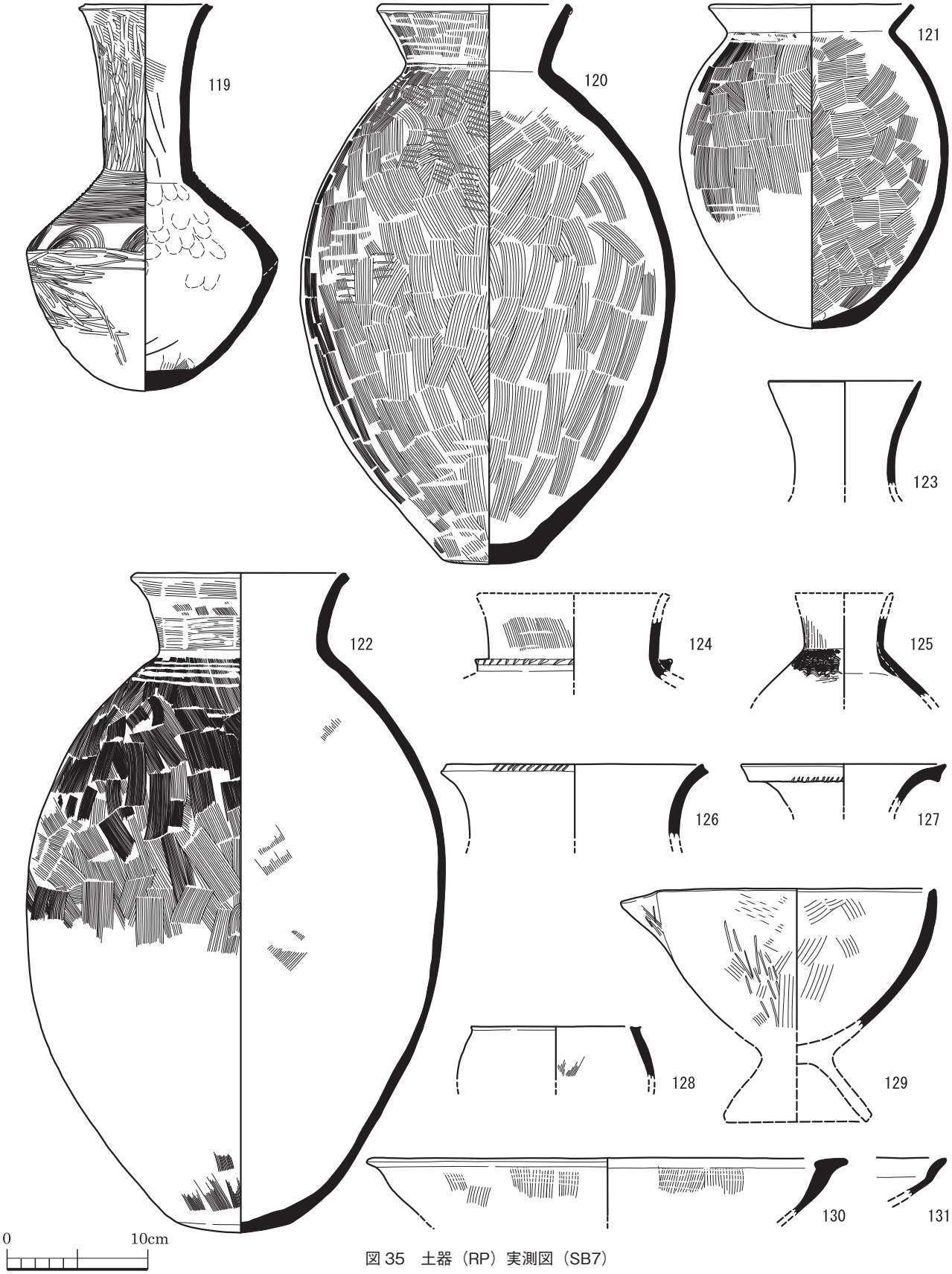


図 35　土器（RP）実測図（SB7）

図 36　土器（RP）実測図（SB7）

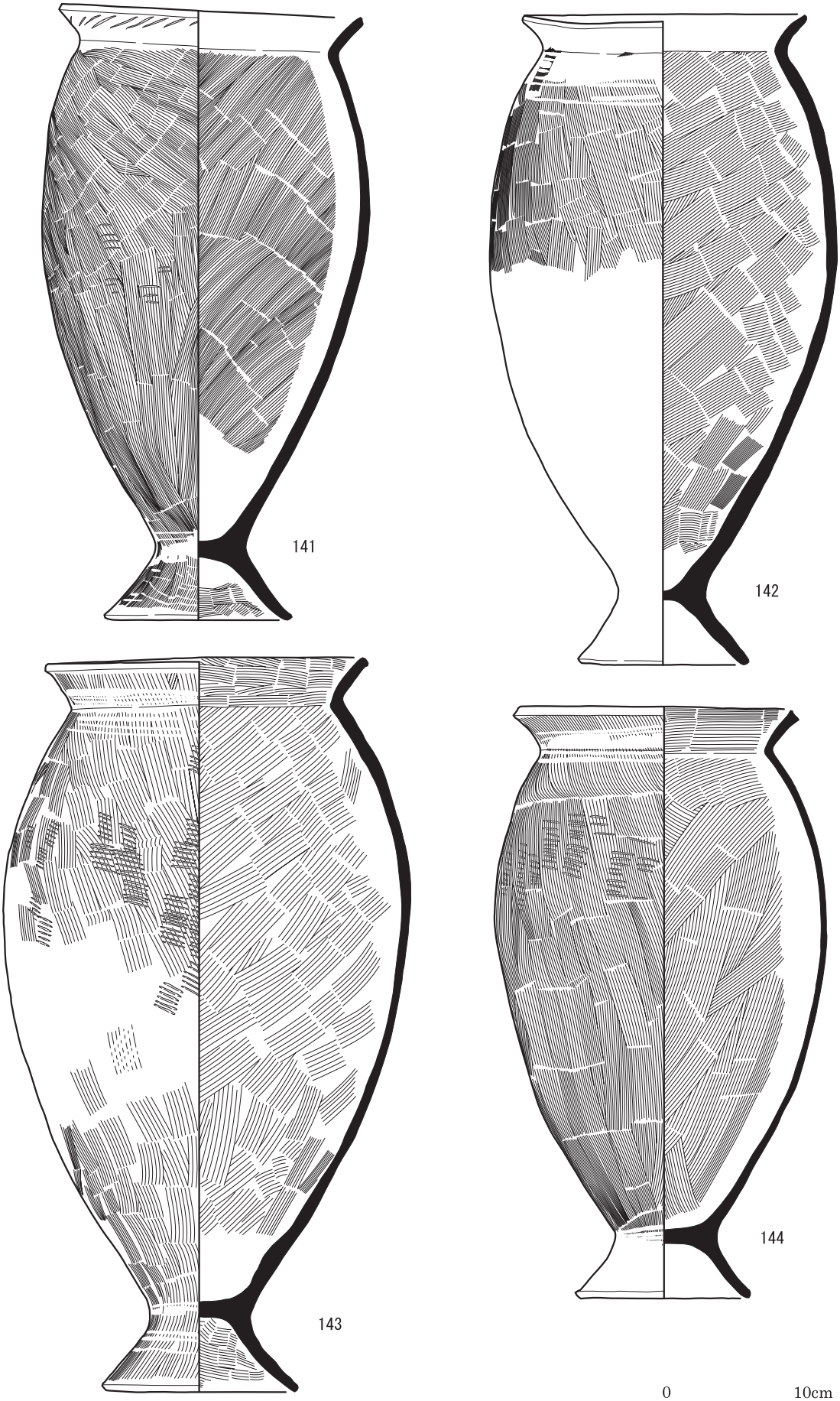


図 37　土器（RP）実測図（SB7）

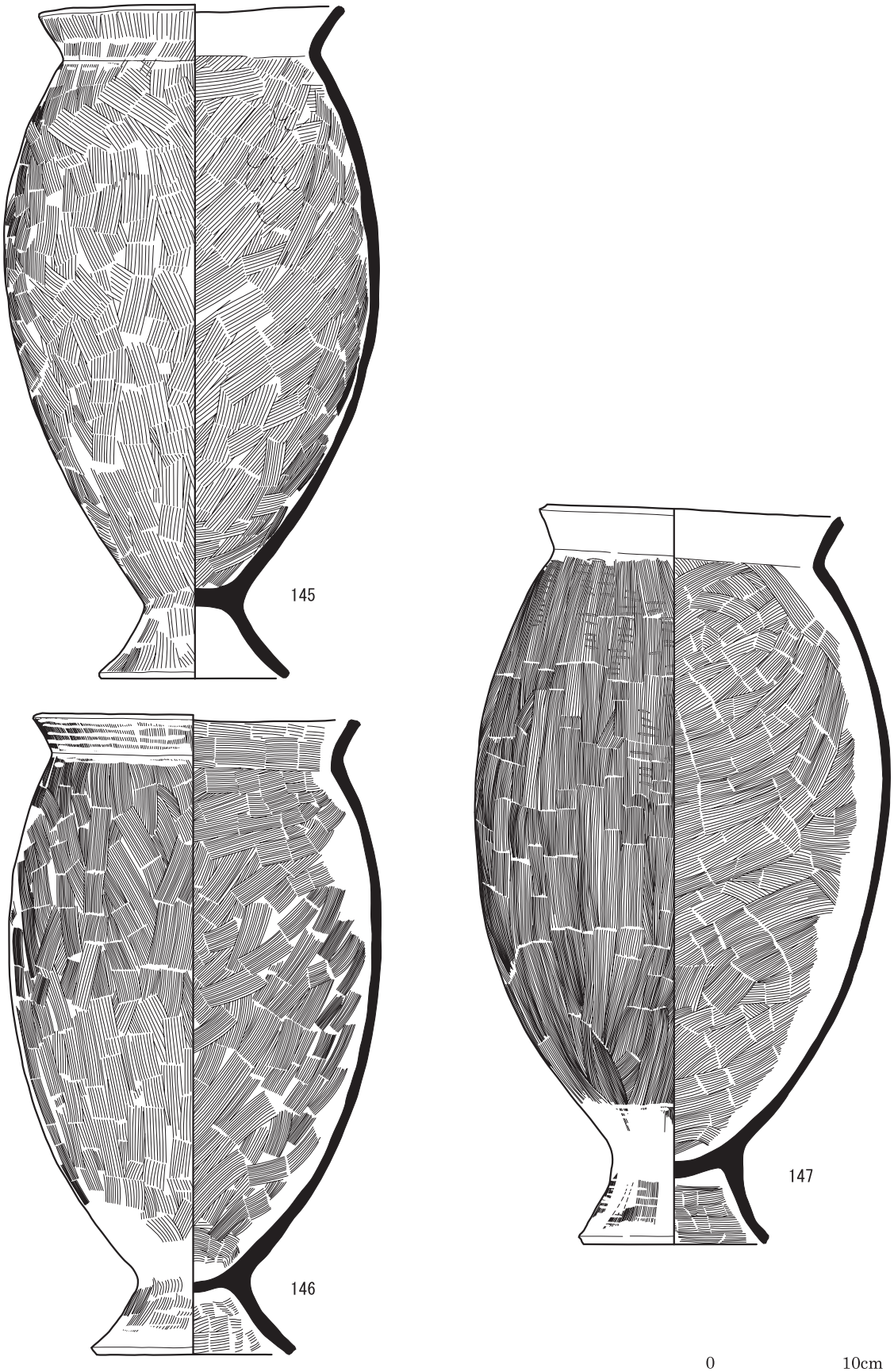


図 38　土器（RP）実測図（SB7）

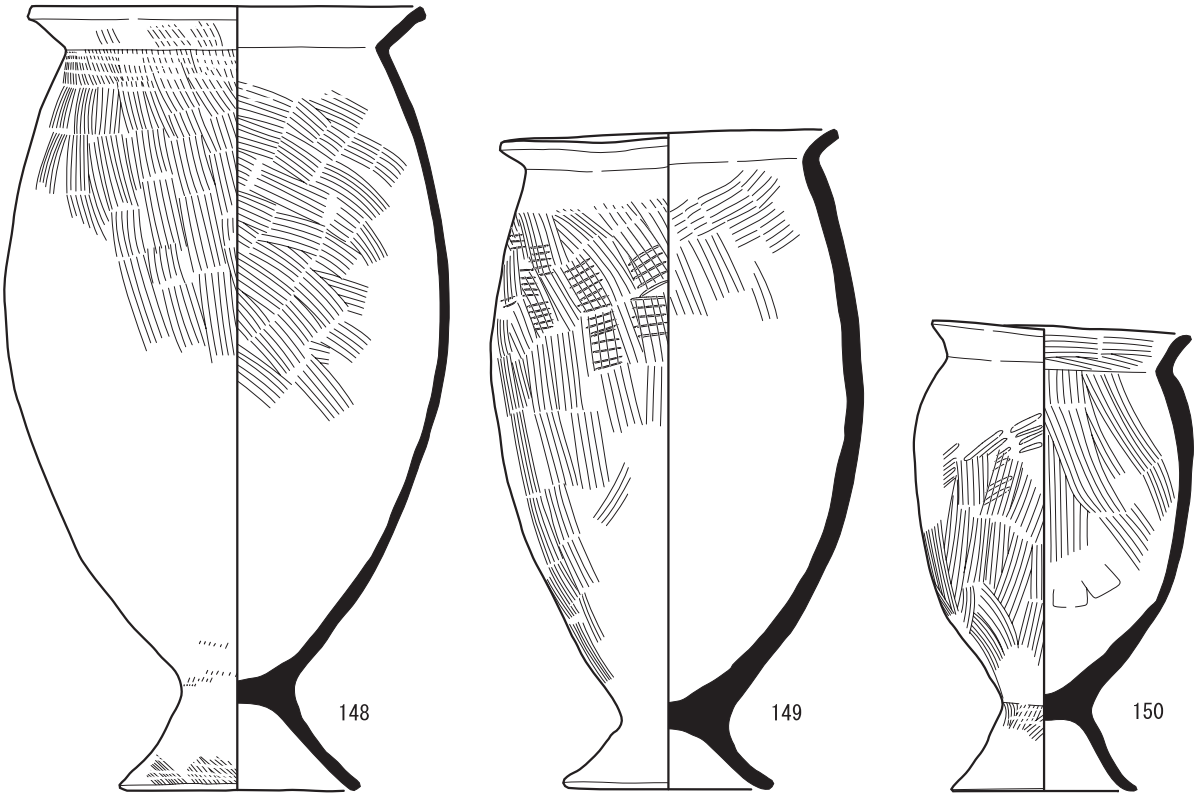


図 39　土器（RP）実測図（SB7）

0　10cm

付いた部分が若干の崩壊を見せている状態と判断している。北東隅のベッド状遺構も同様で、崩壊の度合いが進んだものであろう。

なお、この竪穴住居は張出し部南端と炉の北端とを結んだラインより北側部分の東西幅が、ライン南側のそれよりも大きくなっている。

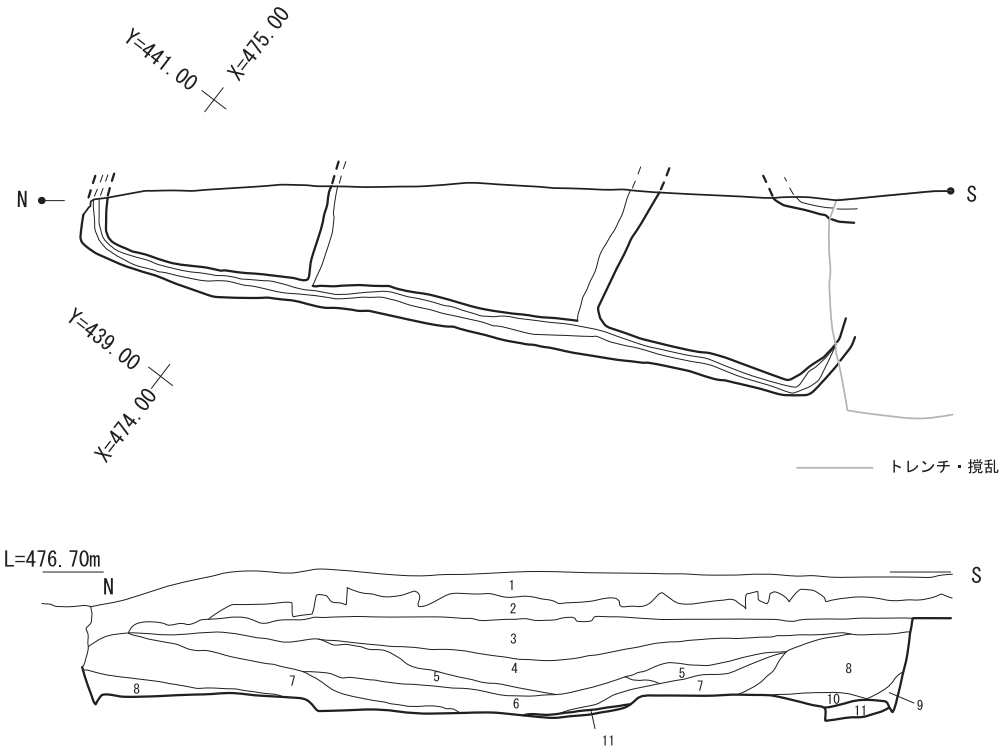
床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、北西隅の土壙は南と東に伸びる土壙を連接させている。この掘方の配置はベッド状遺構の配置と対応している。炉が設けられる部分にも掘削が及ぶが、炉は円形土壙のみが掘削されており、附設する溝は確認されない。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

さて、SB7では竪穴住居の廃絶を詳細に知ることができる成果を得た。以下に詳述したい。

SB7の埋土は4層に大別され、下層から埋４層：側壁溝埋土、埋３層：流入土（自然堆積か人為堆積かは不明）、埋２層：人為堆積層（埋め戻し土）、埋１層：自然堆積と理解している。埋２層上部からは免田式土器の完形品が多量のベンガラとともに出土し、埋４層は住居址壁際にめぐる側壁溝内に堆積している。埋４層は、埋３層に切られ上方に伸びないことから、側壁の抜き取り後に堆積したものと解される。埋３層は、住居址側壁際に断面三角形の状態で堆積しており、この層の形成時期より前が当該住居の使用時期にあたると解される。埋２層は、ロームブロック（基本土層4層）を多く含む擬礫層である。当該ローム層は当該住居址床面以下のレベルに分布することから、埋２層のロームブロックは人為的に混入されたものと判断する。また、住居址の大半を当該層が一挙に埋めている状態から、人為的に埋め戻されたことにより形成されたものと解される。なお、埋２層上部では、土器とベンガラが多量に投げ込まれた状態で出土しており、土器群の中には重弧紋様帯を配したほぼ完形の長頸壺が１個体含まれていた。また、各主柱は抜き取られており、その抜取り痕内には土器が据え置かれた状態で検出され、埋２層が堆積していた。さらに、埋２層は、全般的に少量の炭化物を含んでいた。埋１層は、凹地への流入土が形成するレンズ状堆積を示し、埋２層堆積後

図 40　石器（RQ）実測図（SB7）



1　表土　暗褐色土
2　遺物包含層　暗褐色シルト　しまり強い　粒状の鉄分を少量含む
3　住居址埋土　暗褐色シルト　しまり強い　少量の炭粒含む
4　住居址埋土　暗褐色シルト　しまり強い　多量のロームブロック(10cm大)含む
5　住居址埋土　明褐色シルト　しまり強い　少量のベンガラと多量のロームブロック含む
6　住居址埋土　明褐色シルト　しまり強い　多量のロームブロック含む
7　住居址埋土　明褐色シルト　しまり強い　少量のベンガラと多量のロームブロック含む
8　住居址埋土　明褐色シルト　しまり強い　多量のロームブロックと粒状のベンガラ混
9　住居址埋土　暗褐色シルト　しまり若干弱い　少量のロームブロック含む
10　住居址埋土　暗褐色シルト　しまり若干弱い　土坑の埋土と思われる
11　貼床　暗黄色シルト　しまり強い　少量の黒色シルトを含む　貼り床

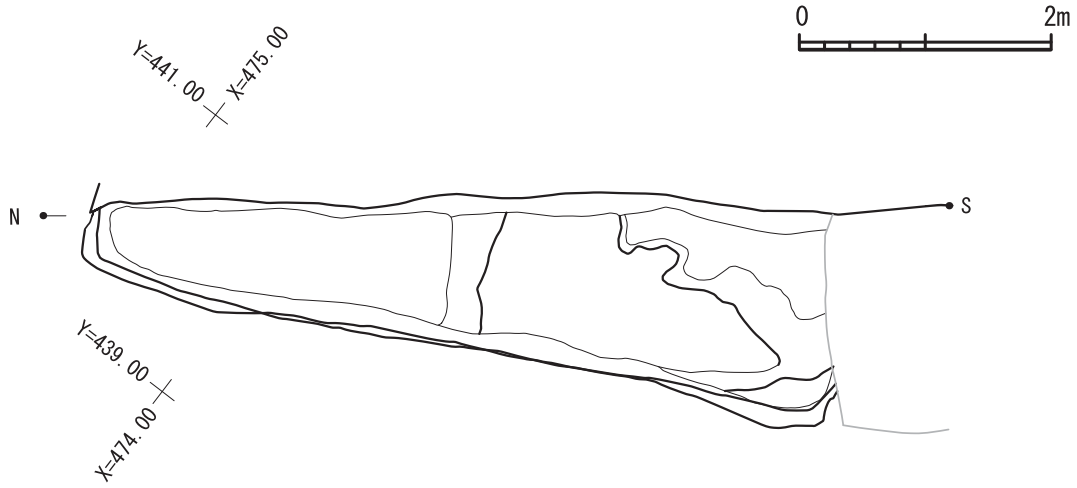
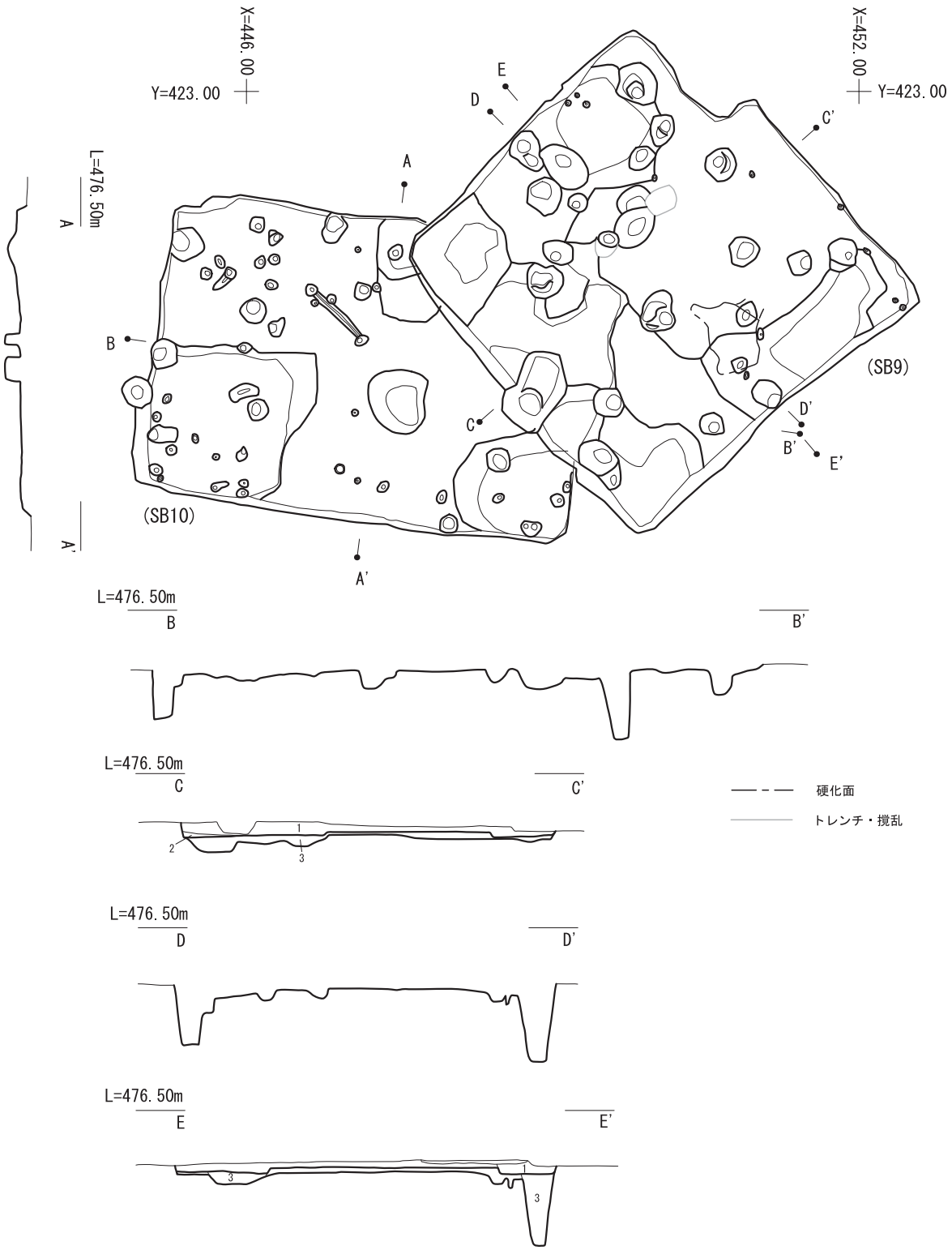


図 41　SB8（1/60）



1　埋1層　明黒褐色シルト　しまり中　粘性中
2　埋2層　明黒褐色シルト　ロームブロック(1cm)混　しまり中　粘性中
3　掘方埋土　明黒褐色シルト　ロームブロック(～5cm)混　しまり中　粘性中

図 42　SB9・10（1/60）

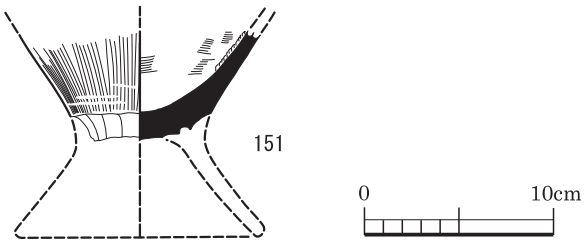


図 43　土器（RP）実測図（SB8）

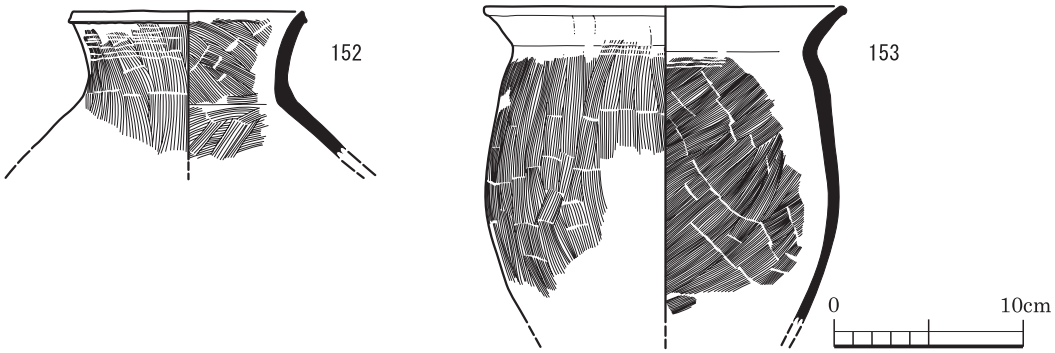


図 44　土器（RP）実測図（SB9）

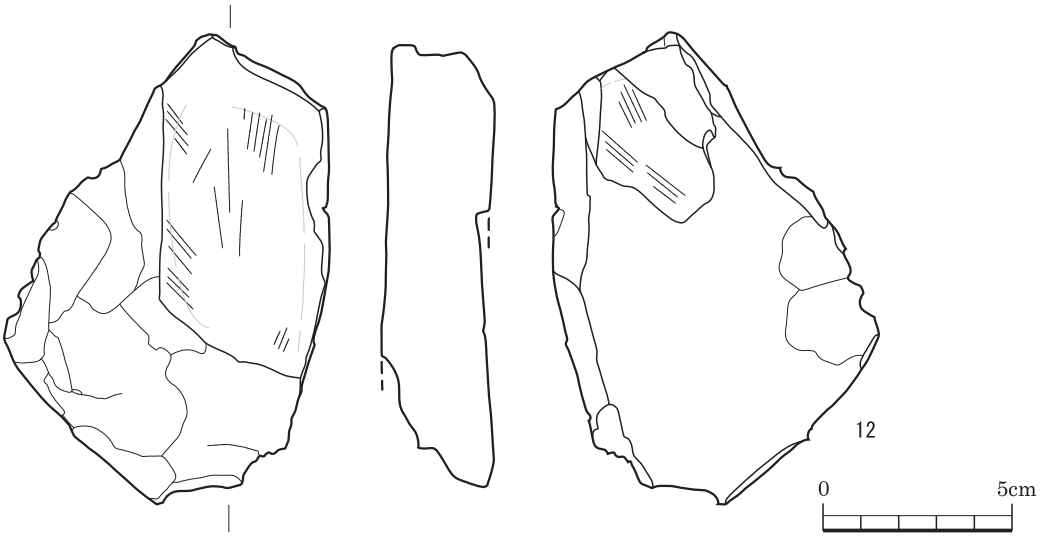


図 45　石器（RQ）実測図（SB9）

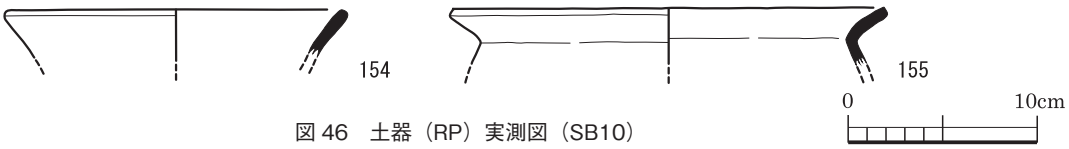
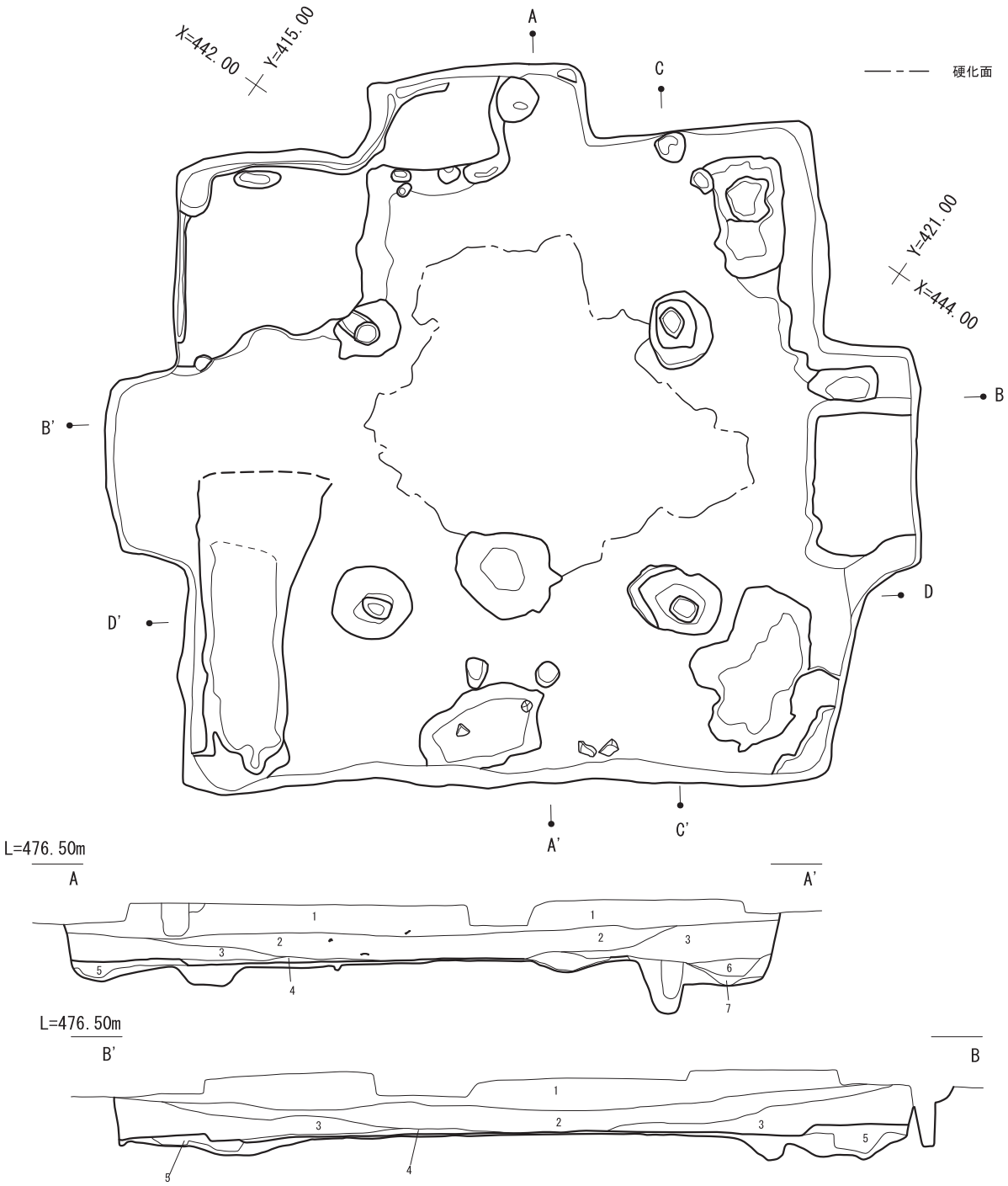


図 46　土器（RP）実測図（SB10）



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小

2　埋2a層　暗褐色シルト　しまり中　粘性小　ロームブロック(～3cm)多く含む

3　埋2b層　暗褐色シルト　しまり中　粘性小　ロームブロック(～3cm)少量含む

4　埋3層　暗褐色シルト　しまり中　粘性小　ロームブロック(～3cm)含まず

5　貼床　褐色シルト　ロームブロック混層　しまり大　粘性中　貼床を形成する

6　Kpit埋1層　暗褐色シルト　しまり小　粘性小　ロームブロック少量含む(埋2層と近似)

7　Kpit埋2層　褐色シルト　しまり小　粘性小

0　2m

図 47　SB11　床面（1/60）

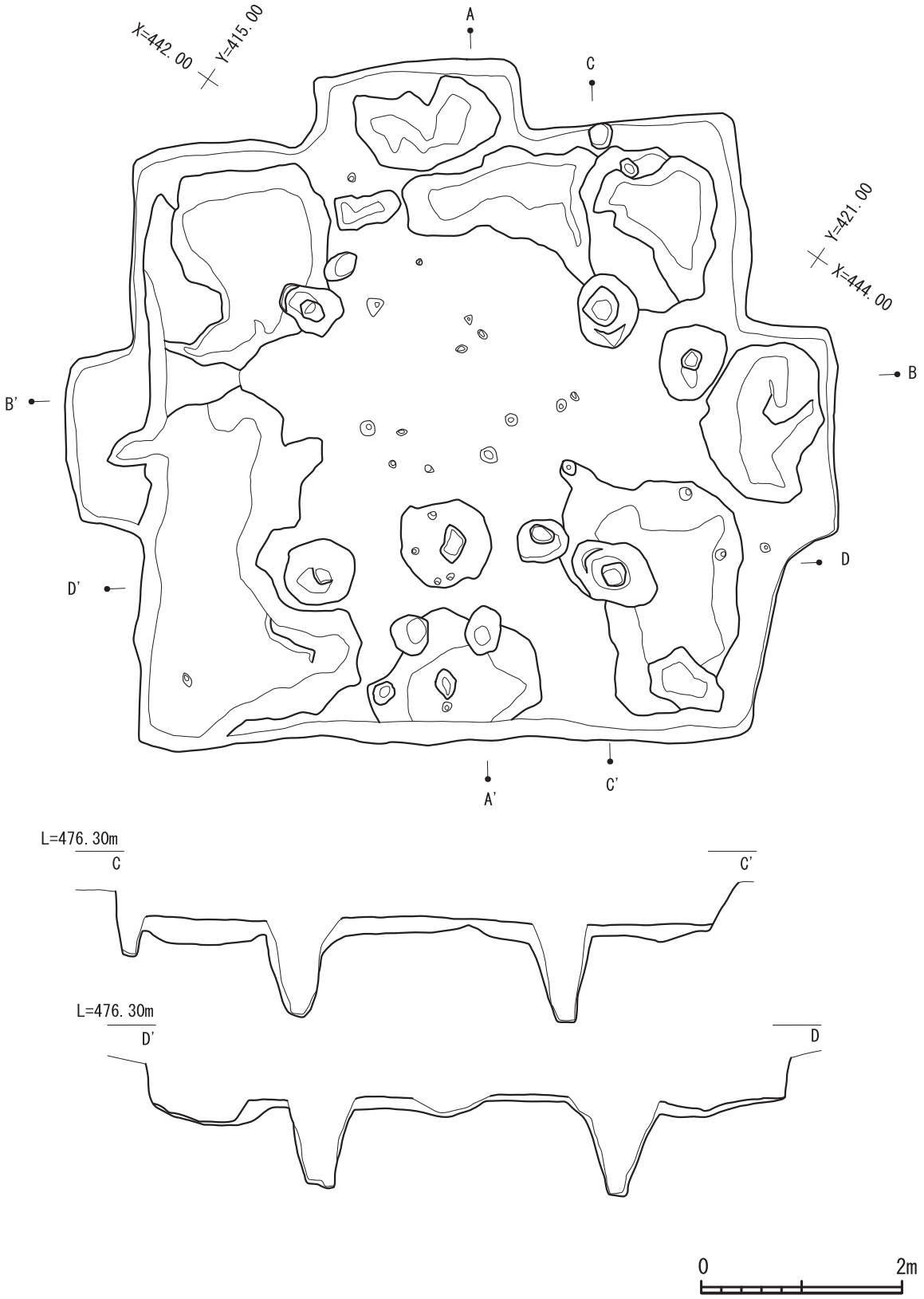


図 48　SB11　掘方（1/60）

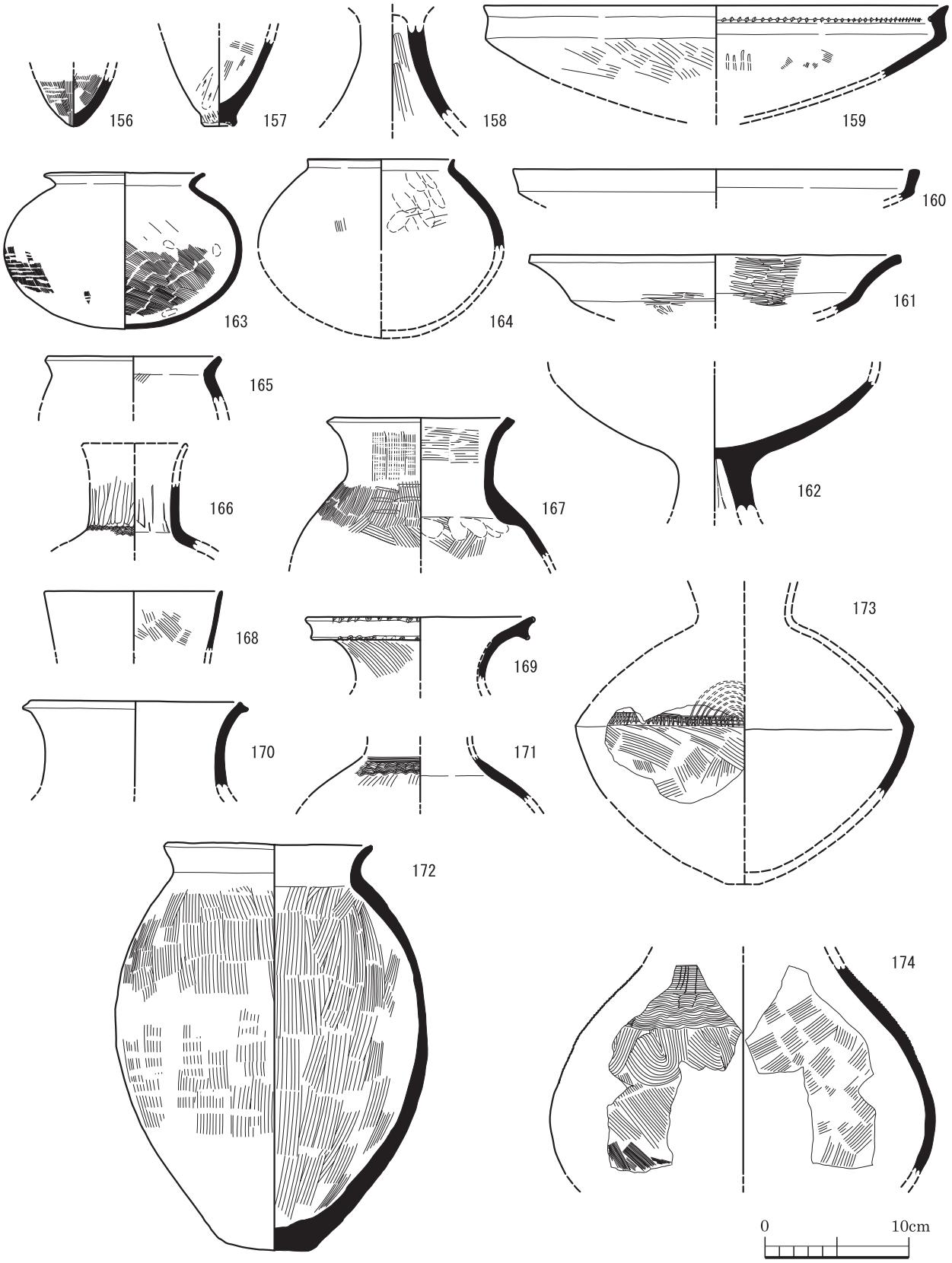


図 49　土器（RP）実測図（SB11）

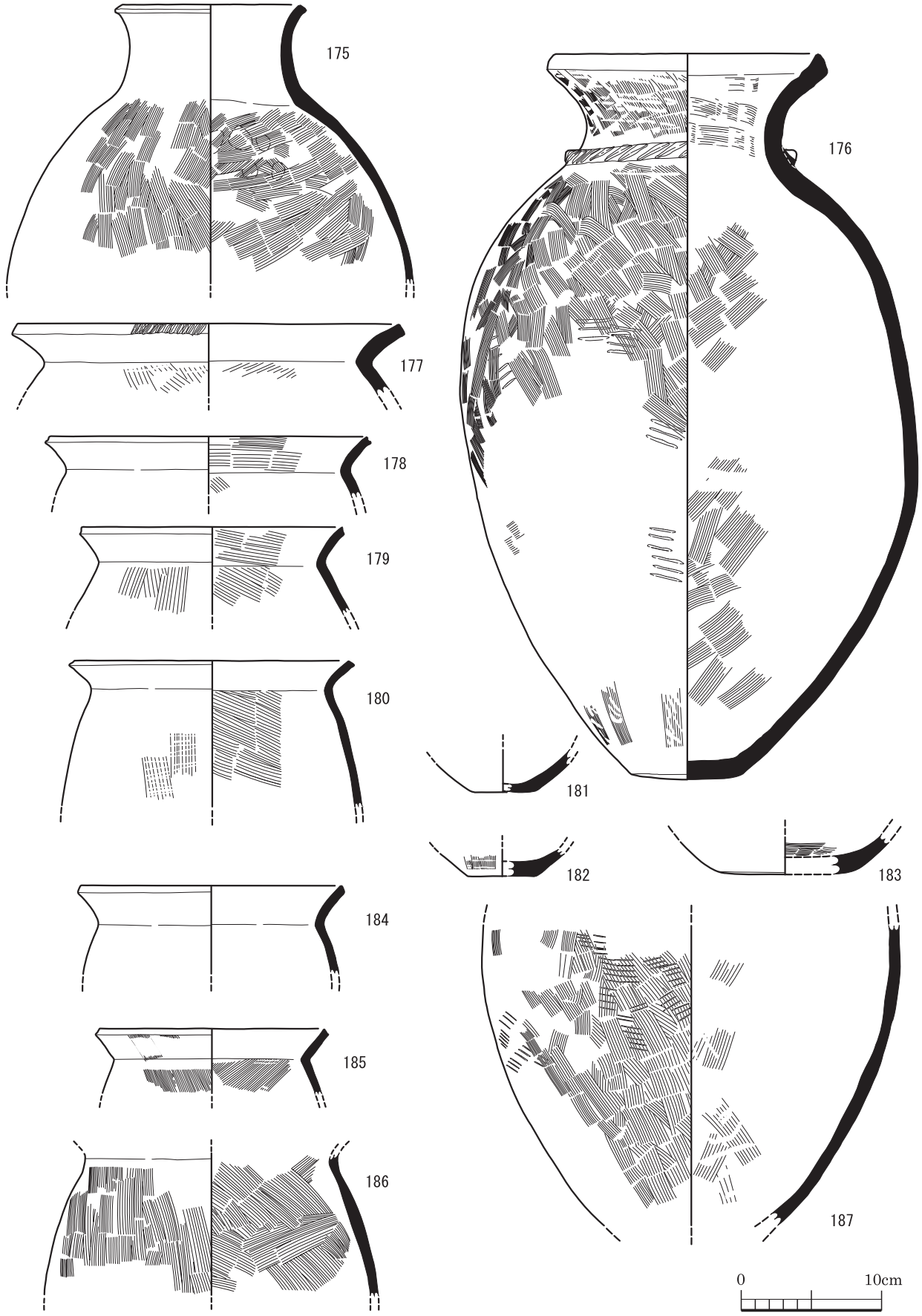


図 50　土器（RP）実測図（SB11）

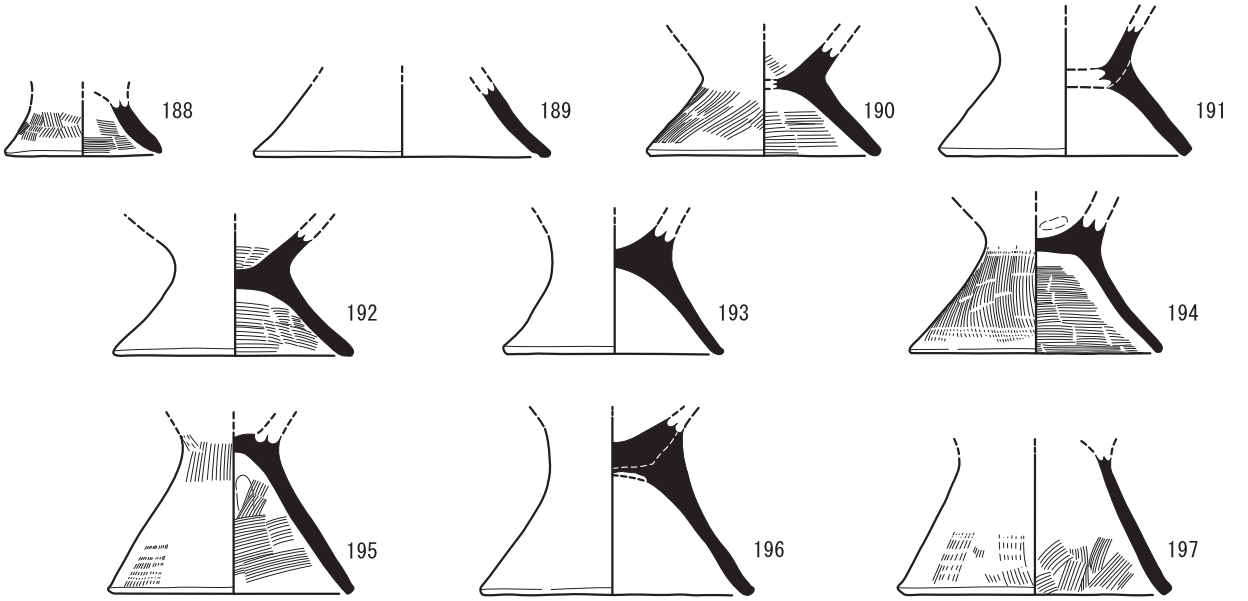


図 51　土器（RP）実測図（SB11）

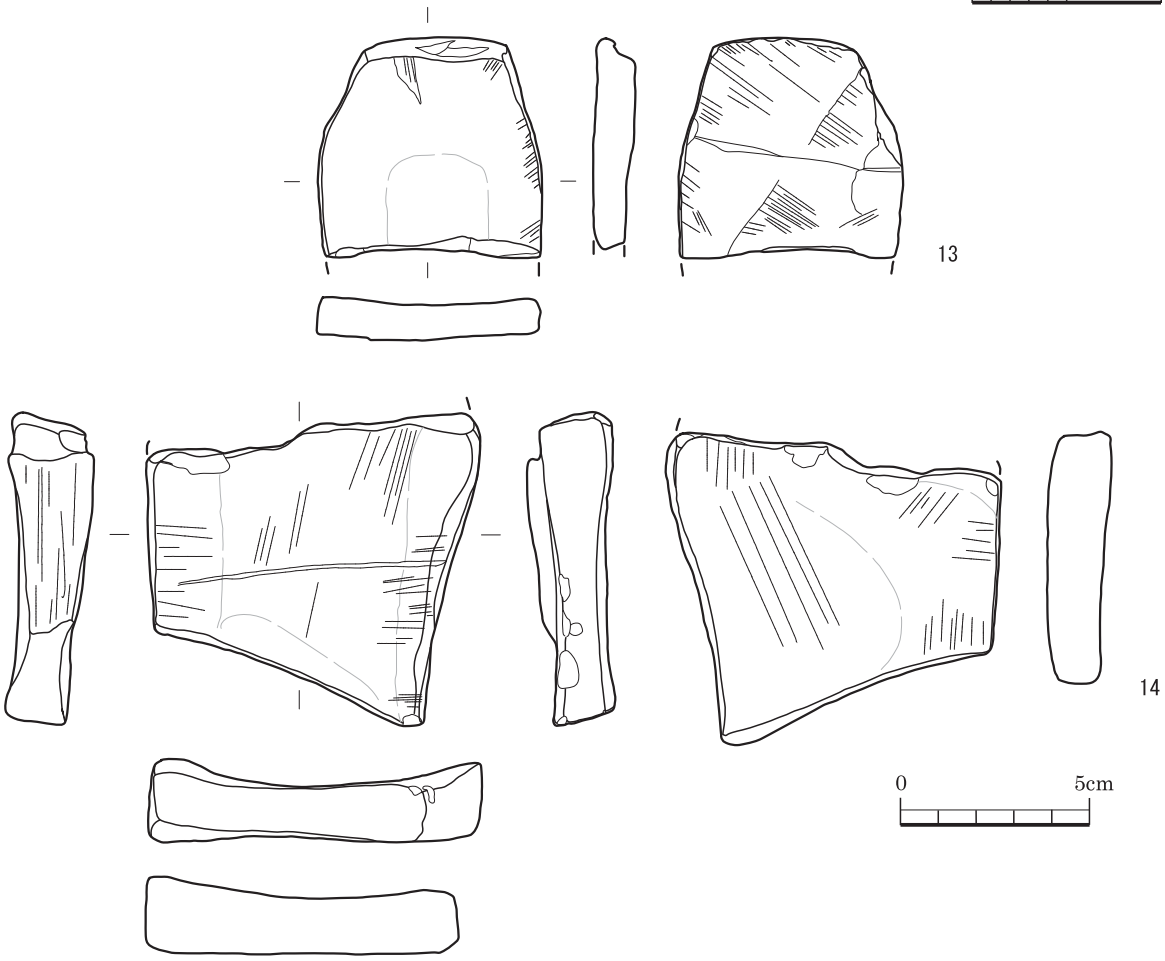


図 52　石器（RQ）実測図（SB11）

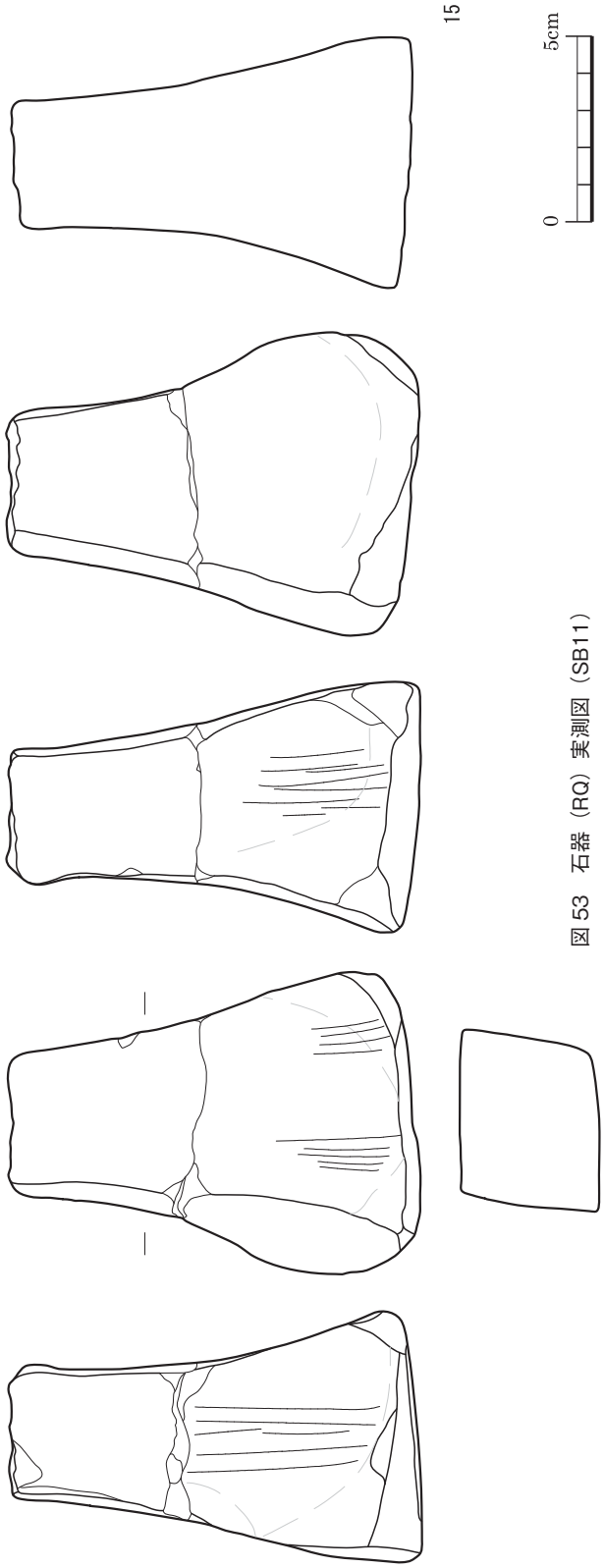


図53　石器（RQ）実測図（SB11）

に順次形成された包含層と解される。

出土した土器群は埋２層に包含されており、その帰属層の下位層がいずれも住居使用時の堆積とは考えられないことから、住居使用停止後に住居址内に包含されたものと理解できよう。また、埋２層出土土器は、住居址床面近くの土器は小破片の状態で、ベンガラと同位にある土器は完形に近い状態で検出されていることからも、床面に接するか否かを問わず住居使用時の状態を留めていると解することはできない。

以上から、SB7においては、住居の使用停止後、側壁、柱等の撤去がなされ、柱抜取り痕内への土器の据え付け、住居の埋め戻しの後、その上面でベンガラ及び土器の廃棄がなされたものと判断することができる。

SB8

SB8は、竪穴住居跡の大部分は調査区外に位置し、その西端を調査したに過ぎない。調査の結果から、正方形を呈する４本柱建て竪穴住居跡である、と推測する。確認された施設はベッド状遺構のみである。

SB8の法量は、南北5.9ｍ、東西は1.6ｍを確認し、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

ベッド状遺構は北西隅、南西隅に概ね方形を呈して設けられている。

床は貼床である。

掘方は、北西隅には方形の土壙を、南西隅では不整形の土壙を掘削している。

SB8は、調査区東端に位置し、遺構の掘り込み面等が確認できる土層断面を得ることができた。土層断面では、表土直下に暗褐色（黒褐色）シルト層が位置し、その層内に遺構の掘込み面が確認できる。この土層断面においては、後世の削平等を確認することができないので、当該遺構の掘込み面が弥生時代の生活面である蓋然性が極めて高い。以後の調査全体の掘削手順は、この土層断面を根拠として設定している。

SB9

SB9は、正方形を呈する２本柱建て竪穴住居跡である。炉を備えている。SB10と切り合うが、SB10（古）→SB9（新）である。

SB9の法量は、南北3.7ｍ、東西3.7ｍ、遺構確認面

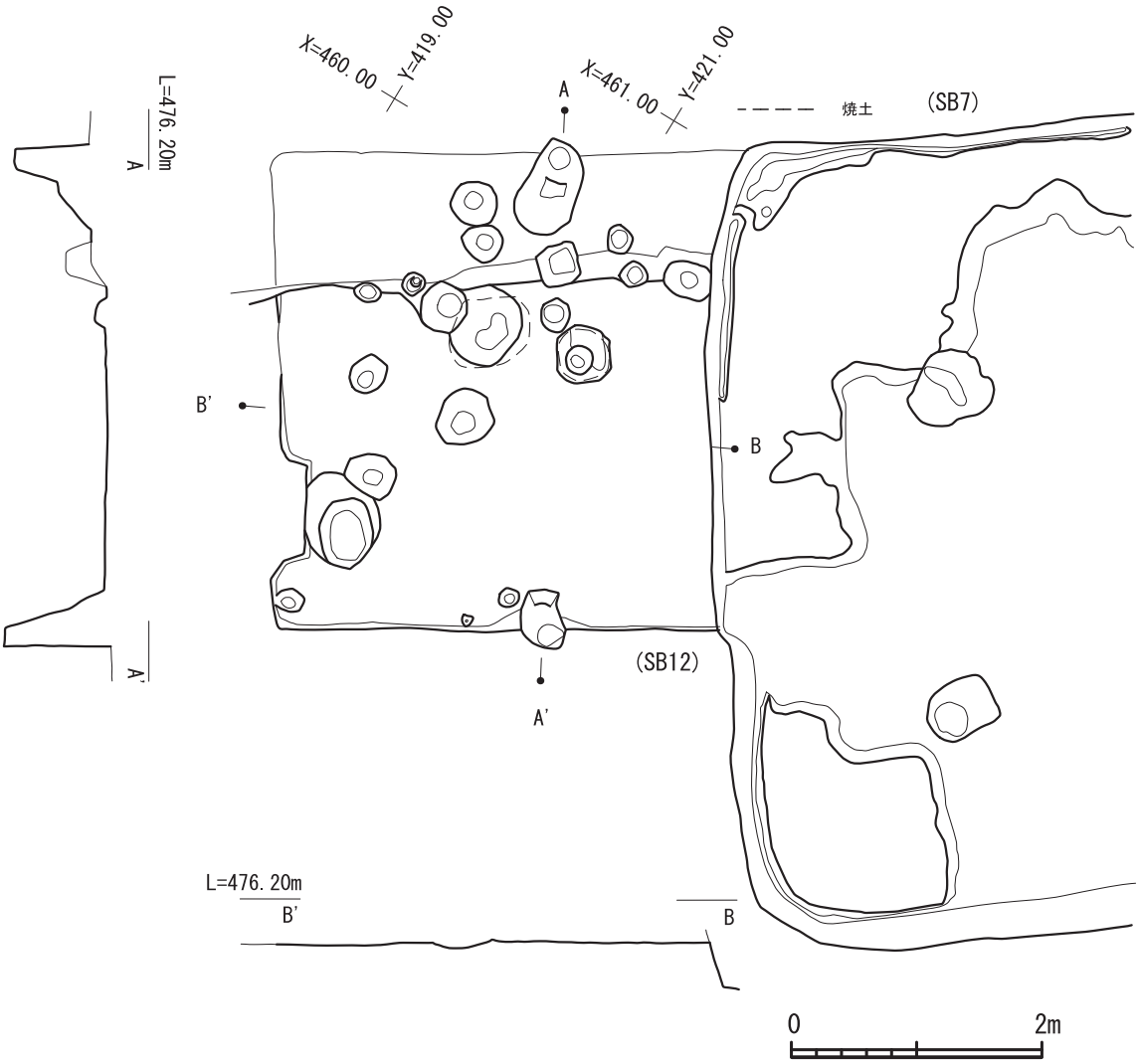


図54　SB12（1/60）

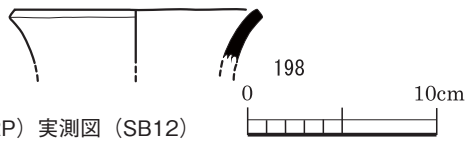


図55　土器（RP）実測図（SB12）

からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられ、ともに内傾している。

竪穴住居の中央には焼土が分布していたが、範囲を図示するには至っていない。炉は、南北60cm、東西40cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、東西の主柱穴を結ぶ線上で、竪穴住居のほぼ中央に位置している。炉底は、2段掘りでボウル形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施設は確認していない。北西隅から北側壁西側1/3まで、テラス状の高まりが内側に張り出している。

床は明確に認識できるものではなく、地山の検出高を参考として判断した。

掘方は、顕著な段差ではないものの南東隅、南西隅には方形の土壙が存在し、東側壁、西側壁に沿って溝が切られている。炉の周囲と北側壁は床面が遺存した平坦面であり、凹字形の掘方が形成されている。

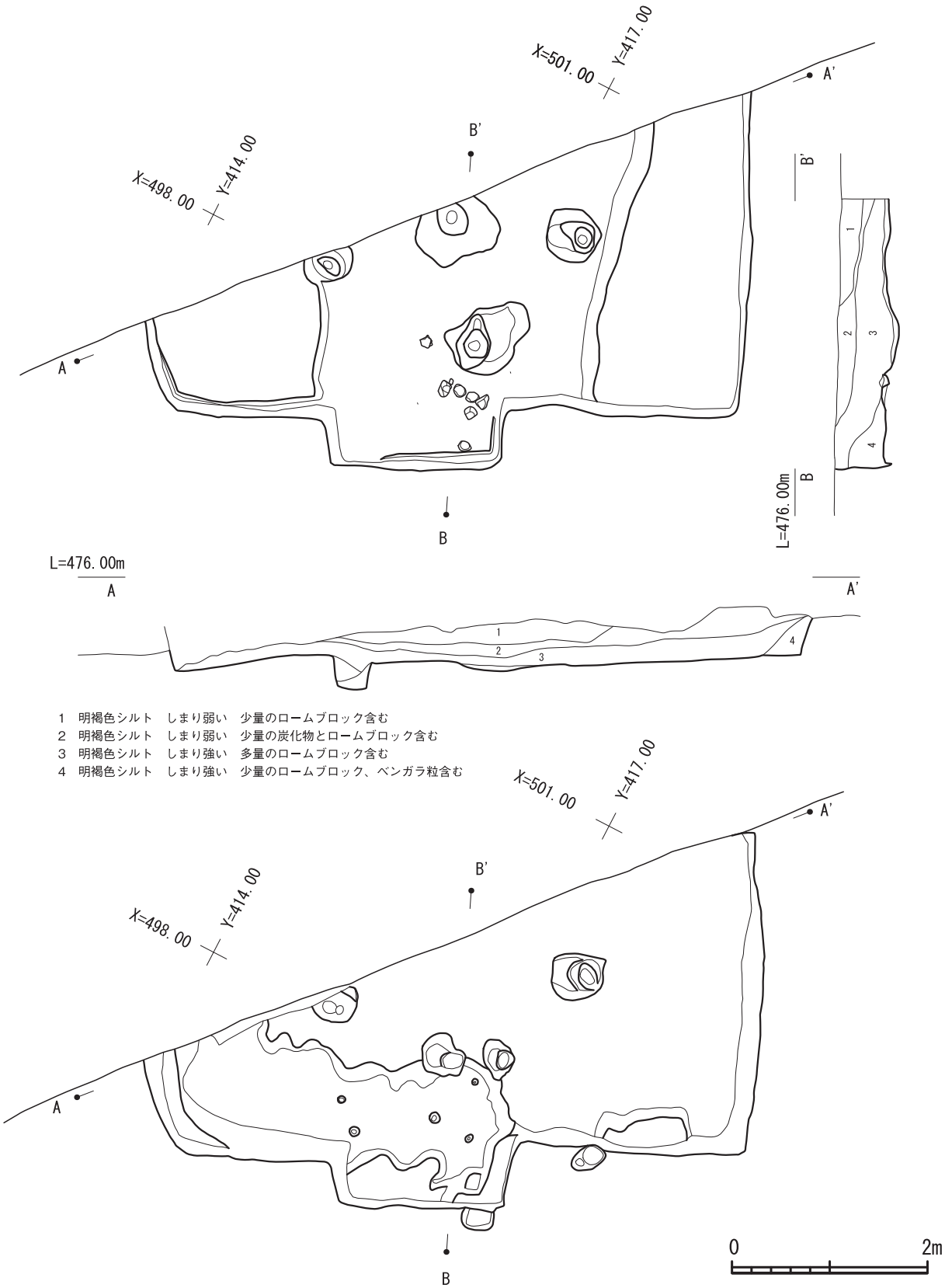

X=501.00
Y=417.00
A'
B'
X=498.00
Y=414.00
A
B
L=476.00m
B
B'
1
2
3
4
L=476.00m
A
A'
1
2
3
4
1　明褐色シルト　しまり弱い　少量のロームブロック含む
2　明褐色シルト　しまり弱い　少量の炭化物とロームブロック含む
3　明褐色シルト　しまり強い　多量のロームブロック含む
4　明褐色シルト　しまり強い　少量のロームブロック、ベンガラ粒含む
X=501.00
Y=417.00
A'
B'
X=498.00
Y=414.00
A
B
0
2m

図 56　SB13（1/60）

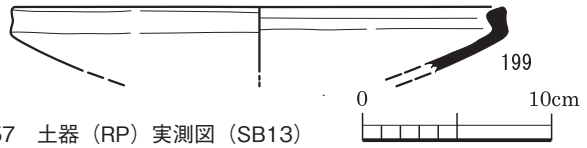


図 57　土器（RP）実測図（SB13）

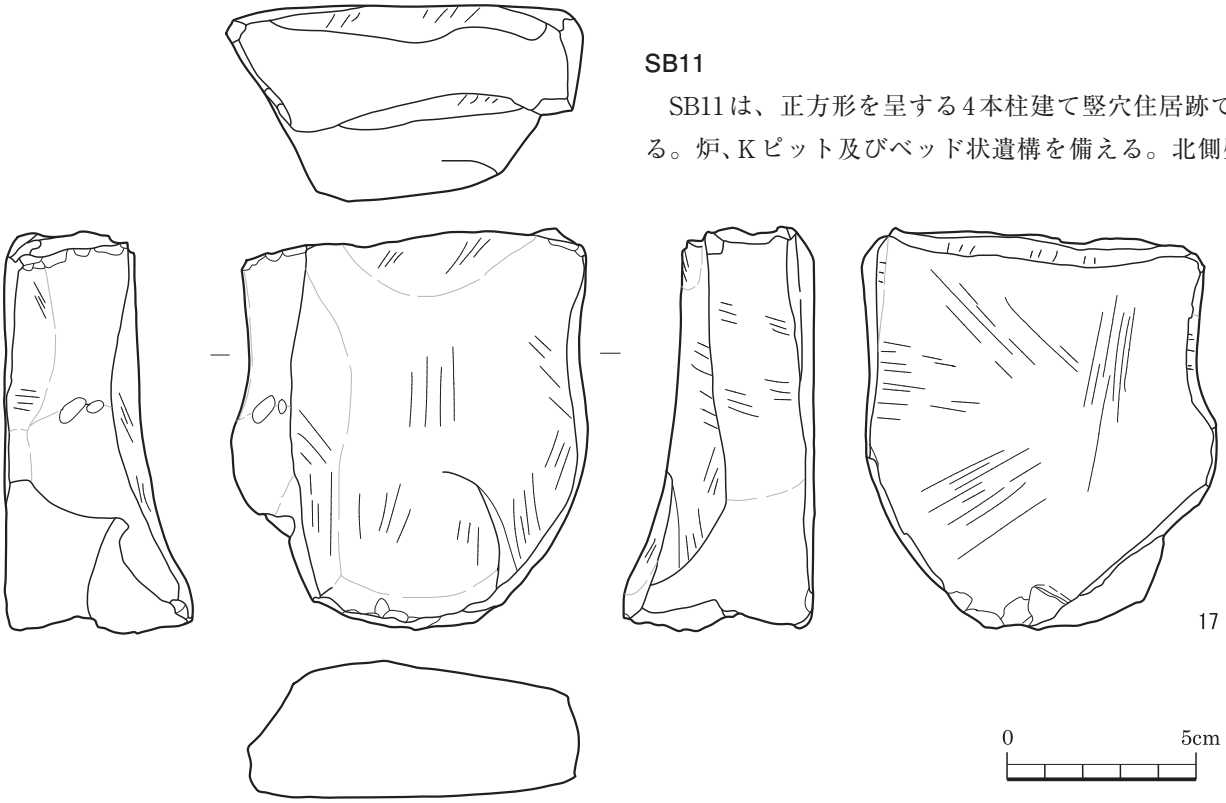


図 58　石器（RQ）実測図（SB13）

SB10

SB10は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備えている。SB9と切り合うが、SB10（古）→SB9（新）である。

SB10の法量は、南北4.3 m、東西3.0 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。南主柱穴は、南側壁に接して設けられ、北主柱穴は、SB9に切られているが北側壁上に位置し、内傾している。

炉は、南北50cm、東西60cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、南北の主柱穴を結ぶラインに接し、竪穴住居のほぼ中央に位置している。炉はボウル形に掘りくぼめられている。

床は明確に認識できるものではなく、地山の検出高を参考として判断した。

掘方は、方形の土壙を掘削し、炉の周辺には平場されており、各設備の完成形に対応している。掘方は、顕著な段差ではないものの北東隅と南東隅には方形の土壙が存在している。炉の周囲と竪穴住居の西半部は床面が遺存した平坦面である。

SB11

SB11は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、

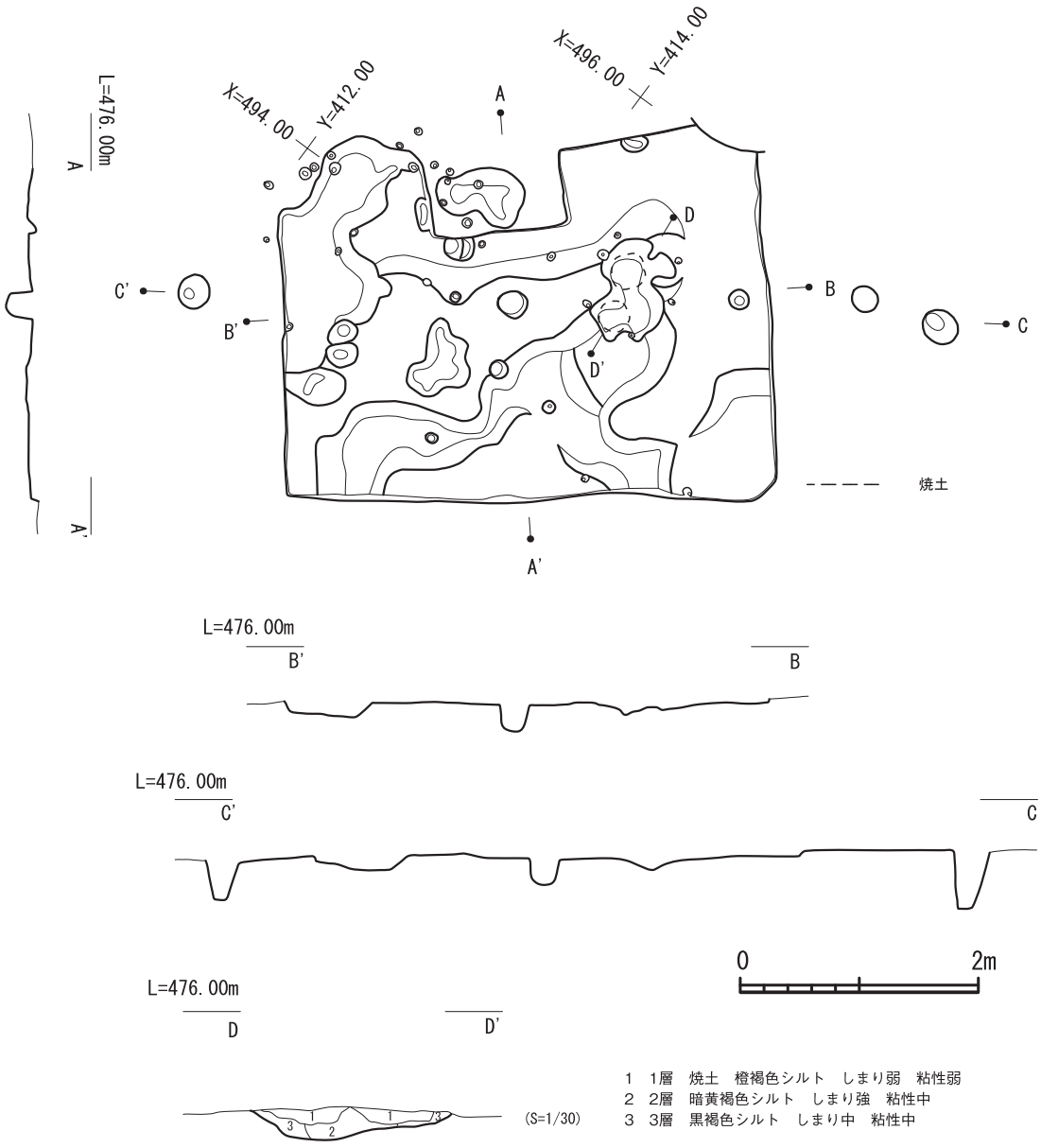


図59　SB14（1/60）

東側壁及び西側壁に張出し部を備える。

SB11の法量は、南北6.1ｍ、東西6.2ｍ、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

張出し部は1.7～2ｍ×0.7～0.9ｍの長方形を呈している。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には硬化面が形成されている。硬化面は、炉の北側に形成され、北側と東側は内陣の外にまで発達し、南半部では発達度が低い。

炉は、南北90cm、東西90cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Kピットは東西1ｍ、南北0.8ｍを測る長方形を呈し、南側壁に一部接し、主軸から西寄りに位置する。深さ

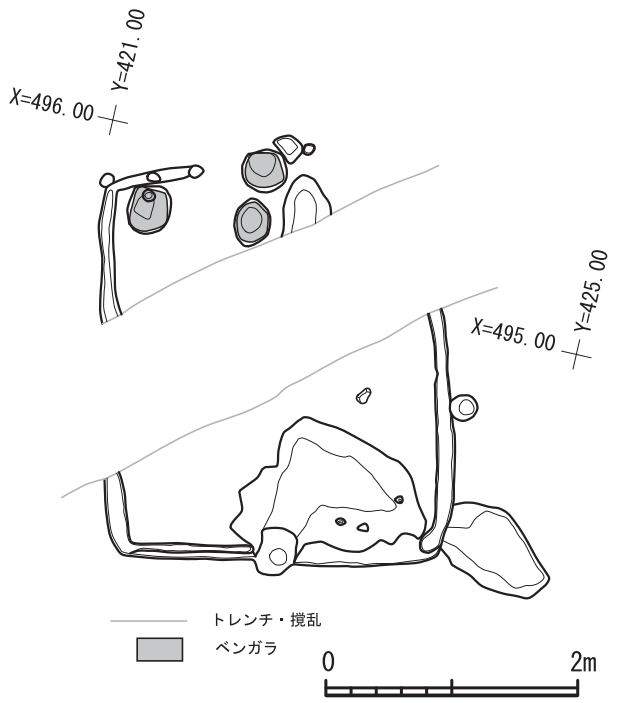


図60　SB15（1/60）

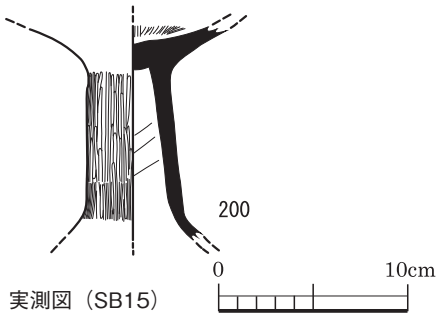


図61　土器（RP）実測図（SB15）

は15cm程度と、しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は北西隅では方形を呈して設けられ、北側壁、南側壁には張出し部と複合して設置されている。この竪穴住居のベッド状遺構は企画性に乏しく、方形を呈していると認められるのは北西隅の1例のみである。北側壁のベッド状遺構は東半部が欠失しており、東側壁のベッド状遺構は張出し部との間に低床部を挟み込んでいる。北東隅、南東隅にはベッド状遺構の代わりに土壙が掘削され、南西隅には溝が切られている。SB11の調査時には床面に対して一定以上の認識が培われていた、と自負している。したがって、この状況でSB11は廃棄されたものと判断する他はない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、西辺、北辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。東辺には溝が切られているが、張出し部に土壙が設けられ、結果として土壙が連接している。なお、西辺では張出し部はテラス状に残存し、北辺では住居プランに沿った溝切りと張出し部への土壙掘削とが併用されており、多様な掘方の形態を観取することができる。南辺にはKピットの掘方が存在するのみであるため、凹字形または口字形の掘方である。炉、Kピットにも掘削が及ぶが、炉は円形土壙が、Kピットは不整形の土壙が掘削されている。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB12

SB12は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。SB7と切り合うが、SB12（古）→SB7（新）である。

SB12の法量は、南北3.9m、東西は3.4mを確認した。この竪穴住居は北側1/3程度まで現代の畑造成により削平されている。明確な遺構は主柱穴のみであるが、掘削の過程で焼土が集中する範囲を2箇所、ならびに硬化面を検出している。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられている。

炉は、南北60cm、東西60cmの円形を呈し、深さは3cmである。炉は、竪穴住居のほぼ中央に位置しているが、主柱穴のライン、遺構主軸等とは一致していない。焼土の集中する範囲2箇所には炉と同規模の土壙が存在する。

SB13

SB13は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。南側壁に張出し部を備える。SB14と切り合うが、SB14（古）→SB13（新）である。

SB13の法量は、北半部が調査区外に位置し、南北

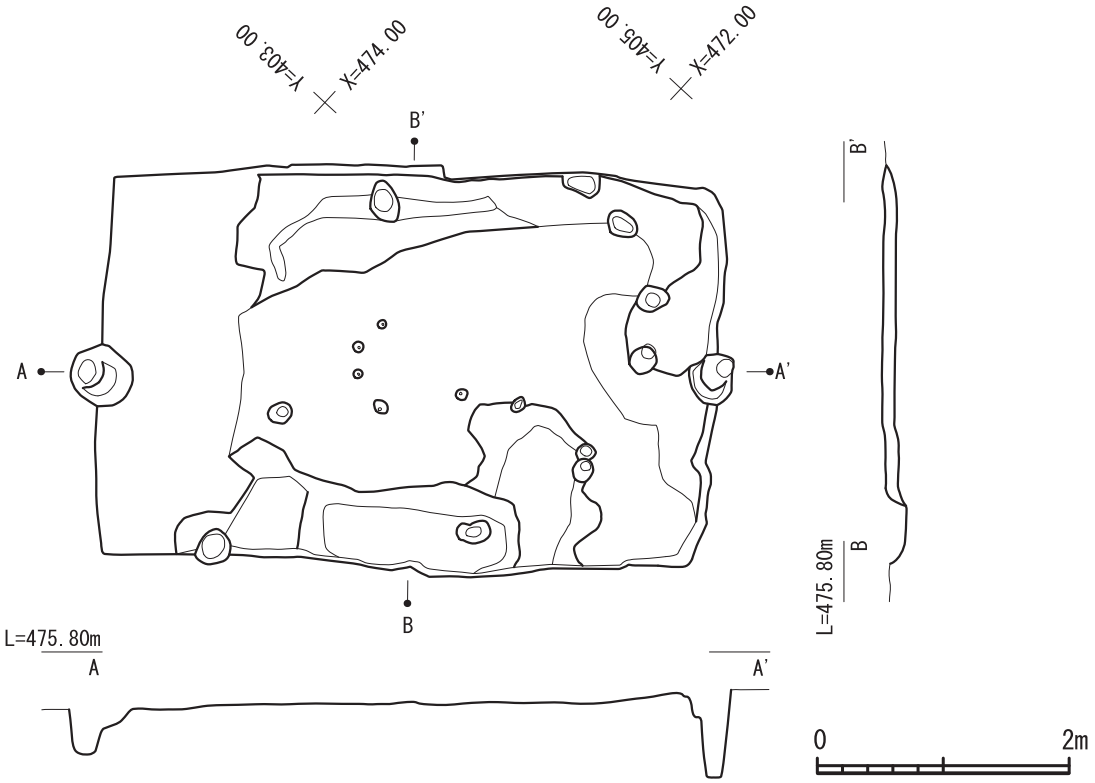


図62　SB17（1/60）

は3.3ｍを確認し、東西6.1ｍ、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2基検出したが、2×2の4本柱建て建物である。調査された主柱穴は、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。硬化面は、調査範囲が狭小なため、把握していない。

炉は、南北は60cmを確認し、東西80cm、円形を呈し、深さは10cmである。炉は、調査された南側の主柱穴を結ぶラインに接し、竪穴住居の中央に位置している。炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。炉の内壁は、西側部分で段が明瞭になり、南東側では緩やかに上っている。

Kピットは長方形を呈し、南側壁の張出し部を含む部分に位置する。なだらかに堀りくぼめられており、そのプランを明瞭に把握することはできない。しかし、北辺には2基の柱穴が炉の端部に対応する位置に設けられ、Kピット内には6個の人頭大の礫が凝集している。

ベッド状遺構は南西隅、南東隅に設けられているが、調査範囲が狭隘なため、その形態を判断することができない。南東隅のベッド状遺構は北に伸びているが、東側壁に沿う長方形のベッド状遺構か、正方形のベッド状遺構に1段低いベッド状遺構が連接したもののいずれかであろう。

床は貼床である。

掘方は、南西隅に方形の土壙を掘削している。炉に対応する掘方は認められない。Kピットが設けられる部分には掘削が及び、南西隅の土壙と連接している。Kピットの柱穴とその平面形は、掘方の段階では把握が容易である。

SB14

SB14は、長方形を呈する3本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。北側壁に竪穴住居内に張り出したテラス部分を備える。SB13と切り合うが、SB14（古）→SB13（新）である。

SB14の法量は、南北は3.1ｍを確認し、東西4.1ｍ

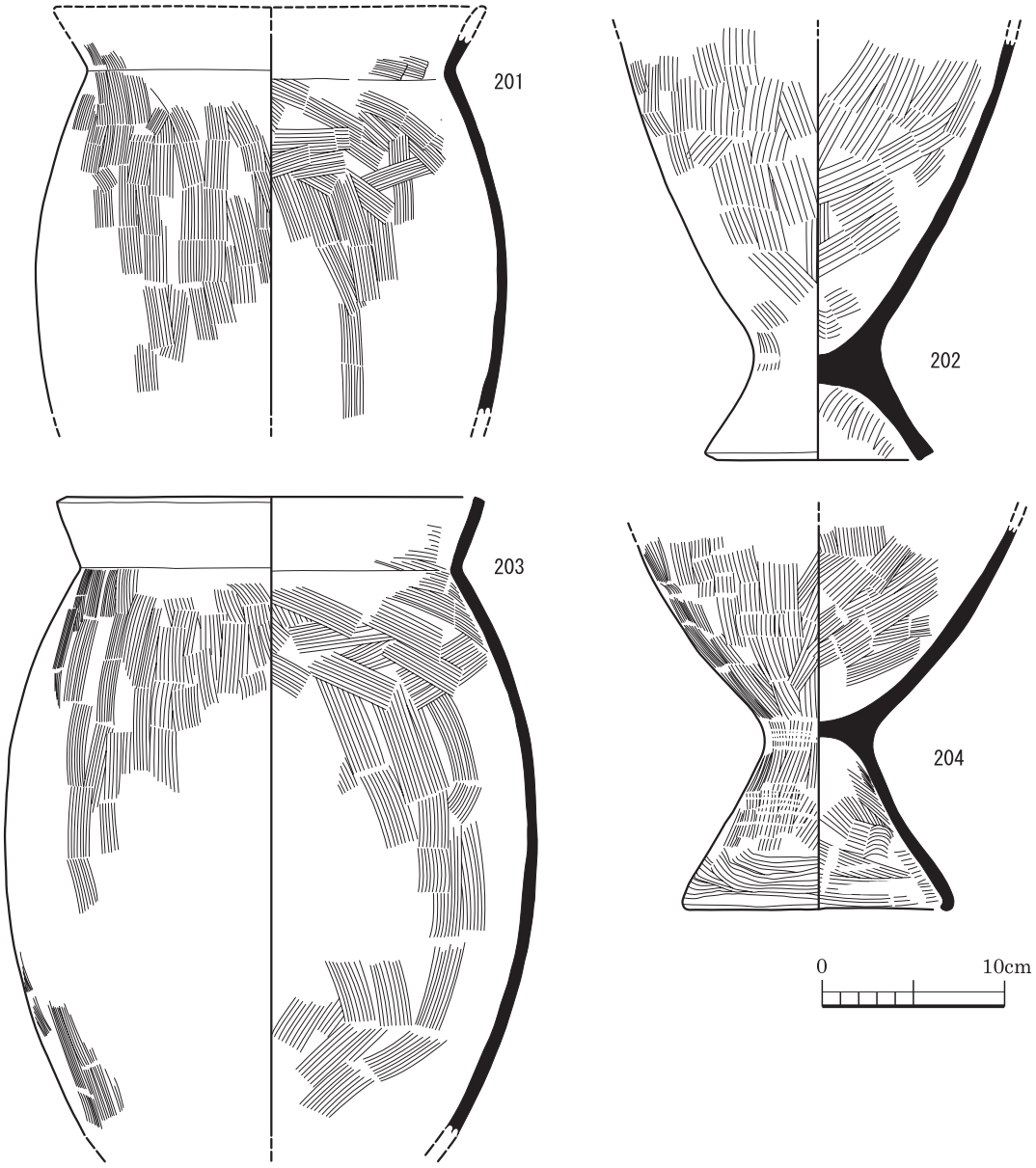


図63　土器（RP）実測図（SB17）

を測る。

主柱穴は、直線上に並ぶ3基を検出した。東主柱穴と西主柱穴は竪穴住居の長方形平面プランの外に位置し、中央主柱穴は長方形平面プランの中央に位置する。検出段階で、既に床面は欠失した状態であり、硬化面、ベッド状遺構は検出していない。

炉は、南北90cm、東西30cmの不定形（中央がくびれた楕円形）であり、深さは15cmである。各主柱穴を結ぶライン上に位置し、2基の円形土壙が連接した形態を採る。このことは、焼土が集中した範囲が2箇所認められたことと対応しており、炉埋1層は、2箇のボウル形の掘りこみが連接した状態を示している。炉埋2層と炉埋3層は焼き締まっているため、浅い炉の複合体として捉えることができよう。

床、ベッド状遺構は、確認していない。北側壁の中央部は、竪穴住居内側に向かい長方形のテラスが張り出している。このテラスには浅い土壙が存在する。

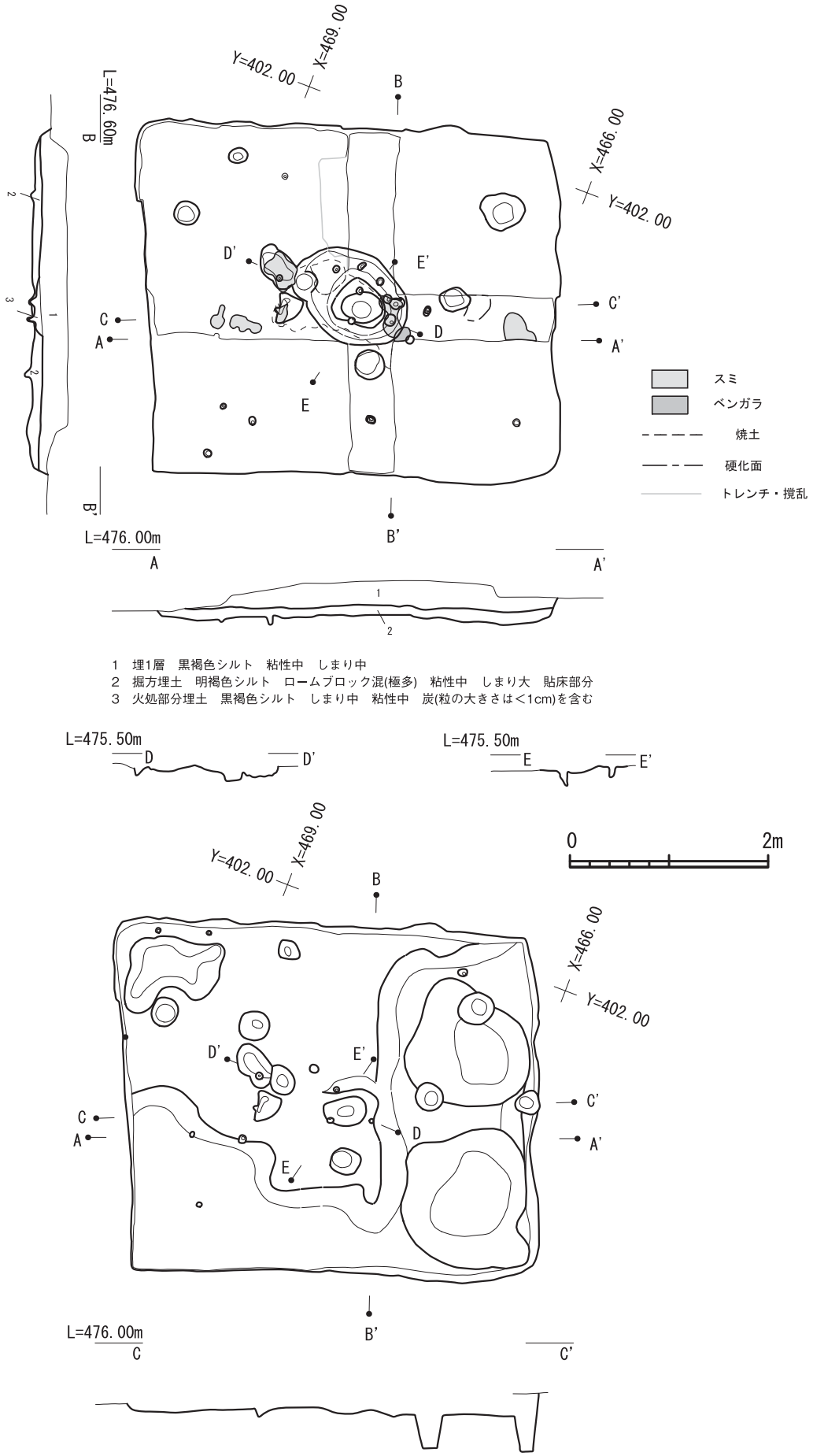
検出状態が掘方に相当すると判断しているが、西側壁、南側壁、東側壁に一致する形で浅い掘りこみがなされている状況である。

SB15

SB15は、長方形を呈する竪穴住居跡である。その中央部を明治時代の導水管に切られている。

SB15の法量は、南北3.1 m、東西2.8 mを測る。

主柱穴は、1基検出した。この主柱穴は、南側壁に接して設けられている。北側壁に接するピットも主柱穴となる可能性があるが、この場合、当該ピットが浅



1　埋1層　黒褐色シルト　粘性中　しまり中
2　掘方埋土　明褐色シルト　ロームブロック混(極多)　粘性中　しまり大　貼床部分
3　火処部分埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　炭(粒の大きさは＜1cm)を含む

図64　SB18（1/60）

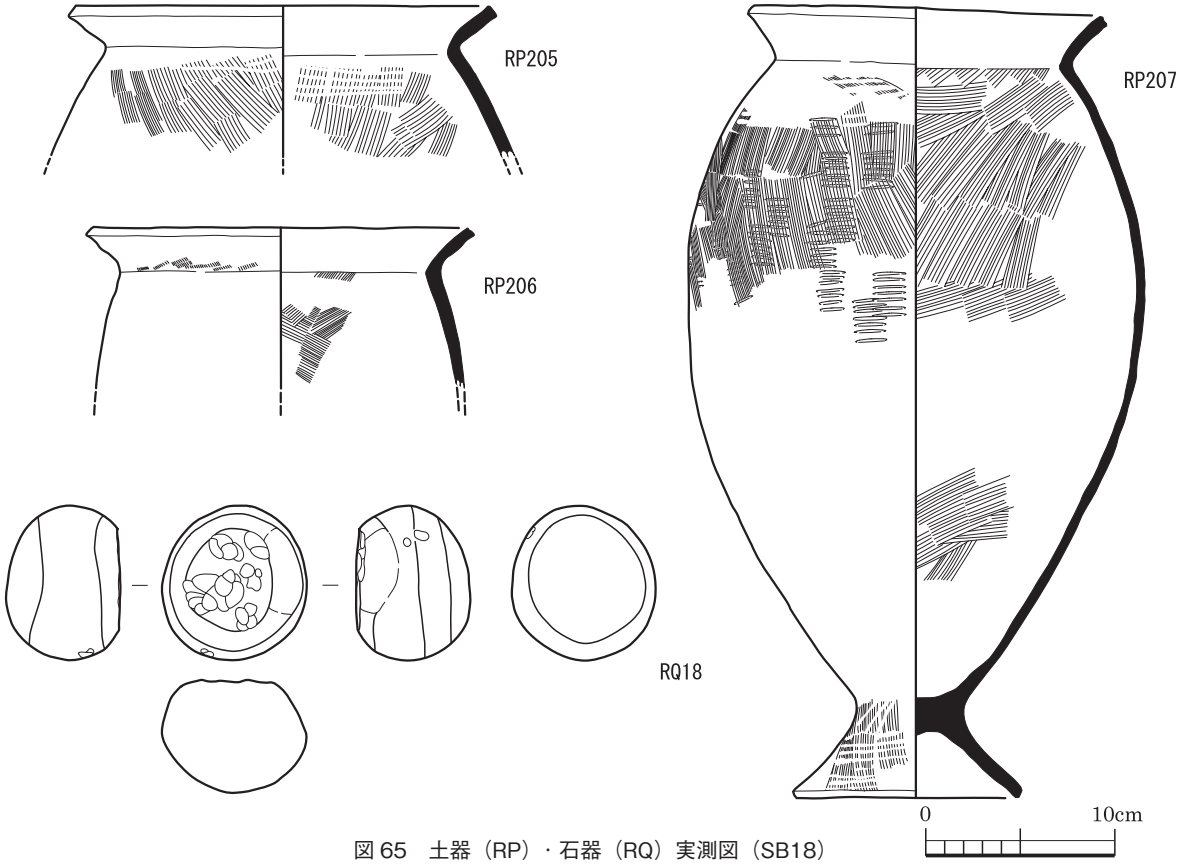


図65　土器（RP）・石器（RQ）実測図（SB18）

いため南側主柱穴の深さと対応しないこととなる。竪穴住居の中央部を明治時代の導水管に切られているため、炉、Kピット、ベッド状遺構、硬化面等は確認していない。竪穴住居の埋土には極少量の炭化物が含まれ、北側に位置する3基のピットの埋土には多量のベンガラと炭化物が含まれていた。

SB17

SB17は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。

SB17の法量は、南北3.1 m、東西4.9 mを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられている。

炉は検出していないが、竪穴住居の中央には弧状に並ぶ小ピット5基が検出されており、炉の関連施設である可能性がある。

Kピット、ベッド状遺構、硬化面は確認していない。検出した遺構は掘方に相当し、竪穴住居の使用面自体は、検出段階で既に欠失していた可能性が高い。なお、北側壁、東側壁、南側壁に沿って溝または土壙が掘り込まれている状況である。

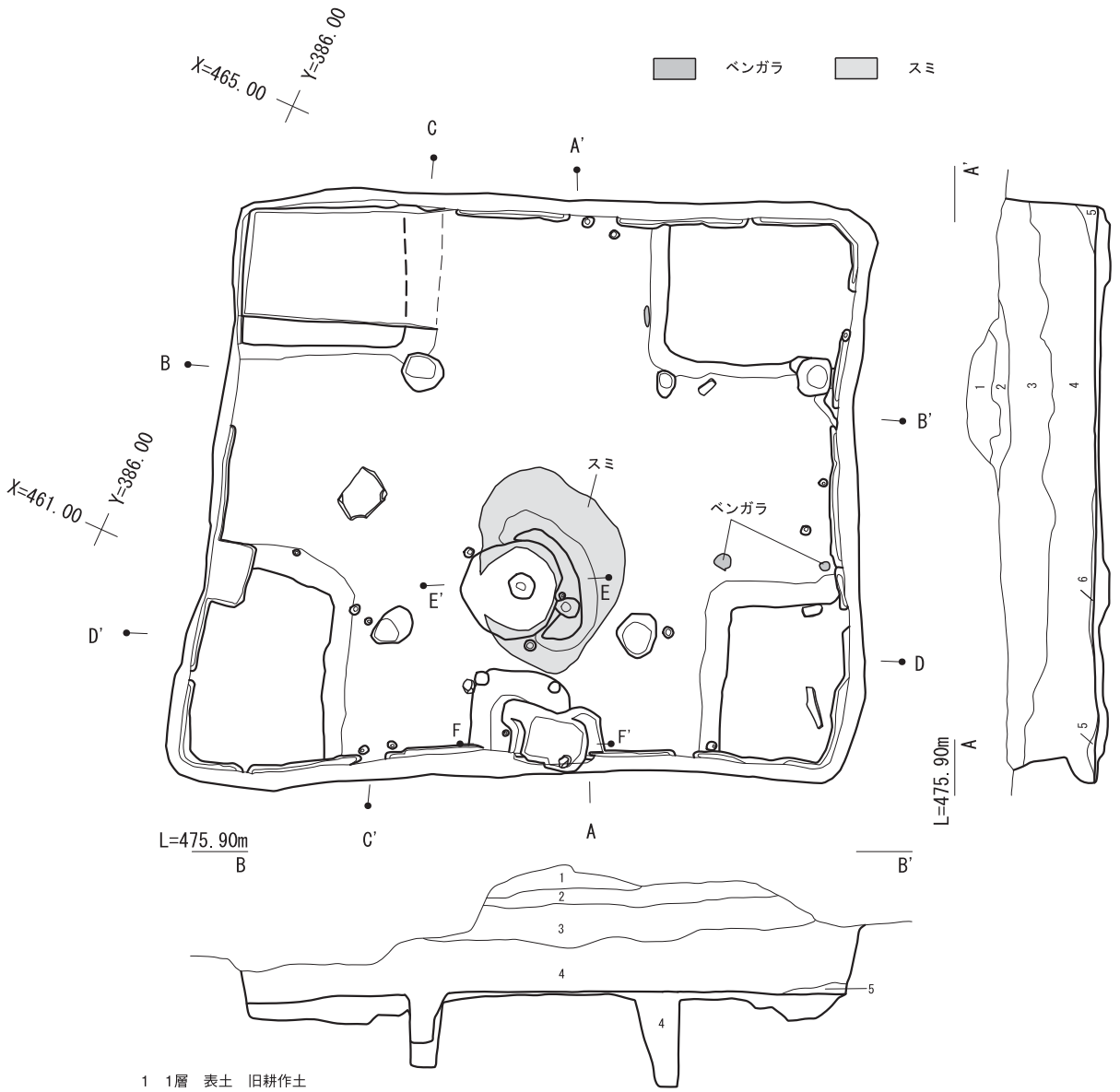
SB18

SB18は、正方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。

SB18の法量は、南北4.1 m、東西3.5 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

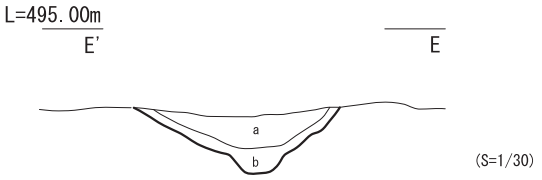
主柱穴を定めるには至っていない。炉の西側に直近して位置するピットと東側壁に平行して北端、南端に位置する2基のピット（3本柱）、南側壁に接して位置するピットと炉の南側に直近して位置するピット等の柱建てを想定することができる。このように5基の主柱穴候補が存在するが、主柱穴を定めるには至っていない。硬化面は、南半部で部分的に形成されている。

炉は、南北120cm、東西90cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、竪穴住居の中央に位置し、複



1　1層　表土　旧耕作土
2　埋1層　褐色シルト　しまり中　粘性小　2層黒褐色シルトの流入土
3　埋2層　褐色シルト　しまり中　2に比べると硬い　粘性小
4　埋3層　ロームブロックまじりの褐色シルト　3に比べると明るい　しまり中、3と同じ　粘性小
5　埋4層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　SB廃絶後の最初の堆積層
6　炉1層　暗黒褐色シルト　しまり中　粘性弱　炉内の黒色灰のかき出し層

0　2m



(S=1/30)

a　炉1層　黒褐色シルト　フカフカの灰(ワラ灰？)を多量の含む灰層　しまり弱　粘性弱
b　炉2層　明黒褐色シルト　灰(ワラ灰？)を多量に含むがaに比して灰色が強くしまっている　しまり中　粘性弱
　a、bの界面が火床となると考えられる

図66　SB19　床面（1/60）

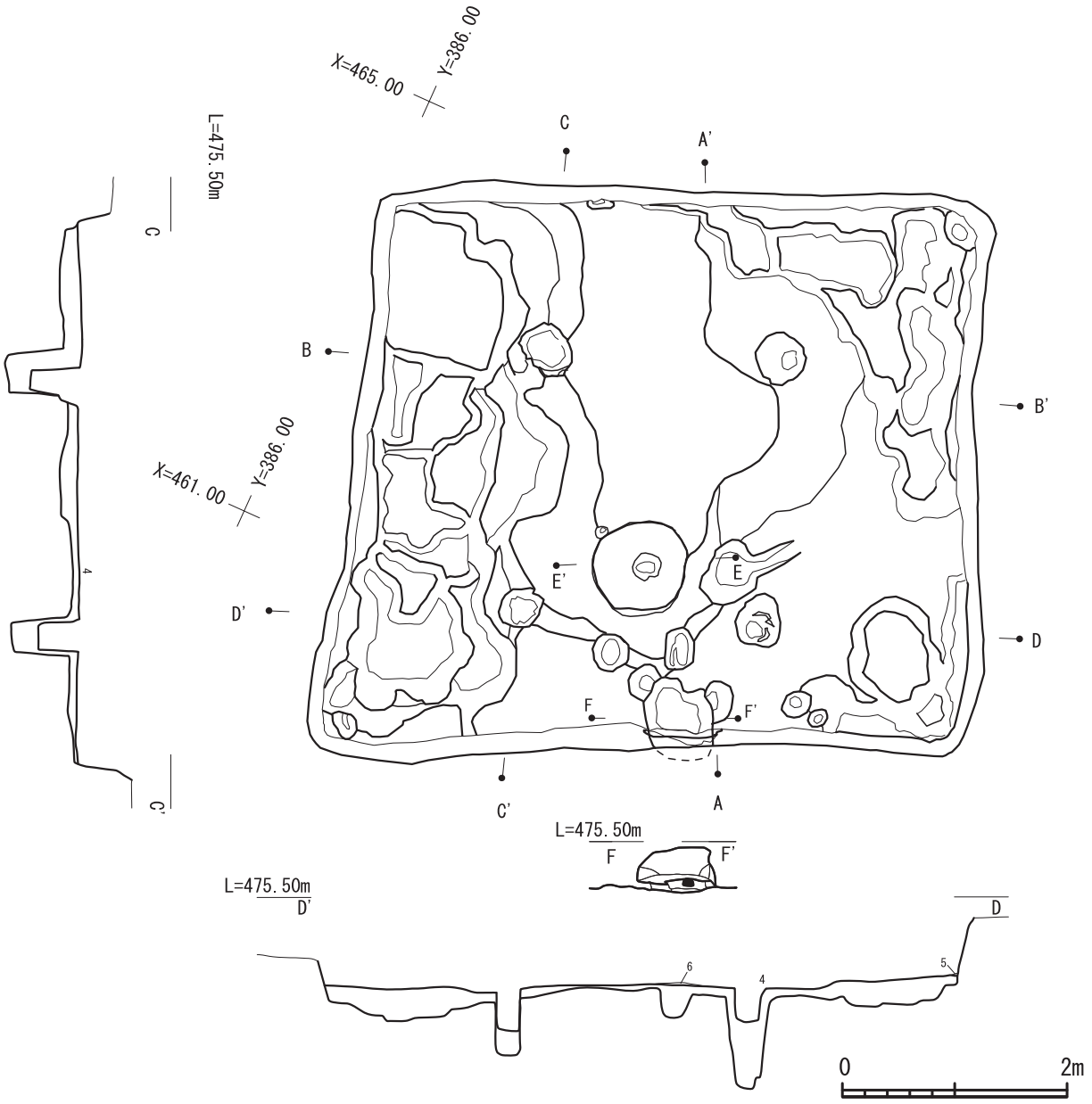


図67　SB19　掘方（1/60）

雑な構造を採る。炉の炉底はボウル形に掘りくぼめられ、炉底中央には円形の周堤が設置される。周堤には小ピットが2基備わり、ボウル状の炉内平坦面にも4基の小ピットが弧状に列を成す。炉の北東部にはピットと長方形の土壙が連接している。炉内部は受熱作用による硬化、赤色化が顕著である。受熱作用による炉壁変化は、火床ほど強く（白っぽい赤褐色）、炉辺に向かって弱まって（褐色）いる。なお、この炉壁は貼床と同様の土が貼られており、厚さは2cm以下であった。連接する長方形の土壙の埋土には、親指大の炭化物（木炭）が多く含まれていた。

炉内の平坦面は北東方向に広がっており、連接する長方形の土壙はその右端に位置する。また、長方形の土壙内には木炭が多量に入っていた。このことから、炉の北東方向には何らかの設備が位置していた、または北東方向に炉の炭が掻き出され、連接する長方形の

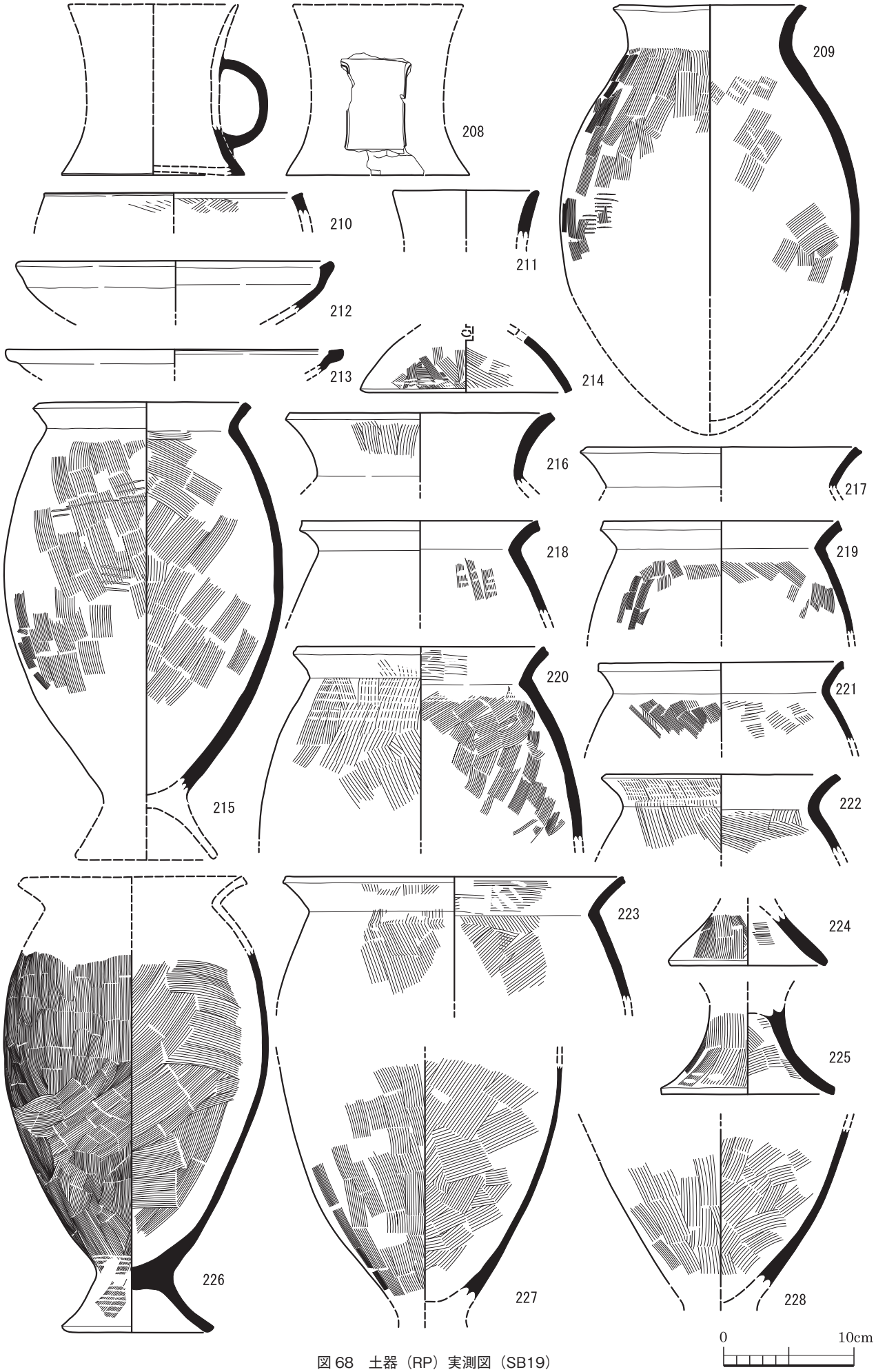


図 68　土器（RP）実測図（SB19）

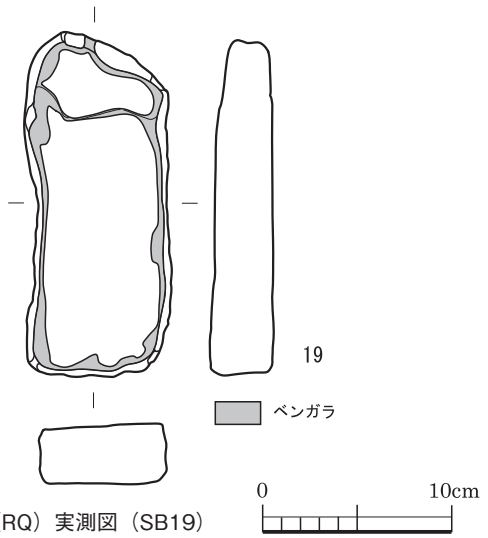


図69　石器（RQ）実測図（SB19）

土壙に溜められた、ことが想定される。

炉に重複して焼土、炭化物が分布し、周辺ではベンガラが検出されている。

Kピット、ベッド状遺構等は検出していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅を掘削している。北東隅、南西隅には土壙が配置されているが、然程深いものではない。炉が設けられる部分にも掘削が及ぶが、炉の周囲は意図的に掘り残されている状況である。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB19

SB19は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット、ベッド状遺構及び小横穴を備える。

SB19の法量は、南北5.0 m、東西5.7 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。硬化面は、床面全体に形成され、範囲を特定する必要を認めない。

炉は、南北80cm、東西90cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は、その東半部に周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。炉の内壁は、東半部では段が明確に形成されているが、西半部では緩やかに上っている。周堤は、その上端部に平坦面を有すほど幅広く形成され、小ピットを備える。炉の周囲では炭とベンガラが検出された。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられ、南西隅のベッド状遺構には北西端に長方形土壙が、北東隅のベッド状遺構には南東隅に方形土壙が複合して設置されている。側壁際には側壁溝がめぐり、本来の竪穴住居のありようを示すモデルとすることができよう。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

Kピットは正方形を呈し、南側壁に接して位置する。なだらかに堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

Kピットを切り、炉と東端を揃える位置の南側壁には小横穴が穿たれている。この小横穴は、高さ30cm、幅50cm、奥行30cmのドーム形であり、前面にはKピットに類似した2段掘りの長方形土壙を伴っている。小横穴の内奥部には高台が造り出され、高台の中央部手前側はコの字形に凹んでいる。この凹部には拳大の礫が1個位置していた。小横穴前面の長方形土壙は、横穴に向かって左右側辺が2段構成となっており、正面観を示している。

小横穴内の埋土は、竪穴住居内の埋土に等しく、礫を被覆するように埋4層が、その上に埋3層が堆積している。一方、小横穴前面の長方形土壙はKピットを切っており、Kピットの使用停止後に小横穴が造作されたことを示していよう。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東側壁、西側壁に沿って溝を切り各土壙を連接させている。南辺は全体的に低く掘削され、北辺は掘削されていないため、凹字形の掘方である。炉が設けられる部分、Kピットの柱穴にも掘削が及び、各設備の完成形に対応している。小横穴全面の長方形土壙はそのまま依存した状態であるが、左右側壁の2段構造が炉側に傾いていることが判明する。炉から北壁にかけての長方形の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB20

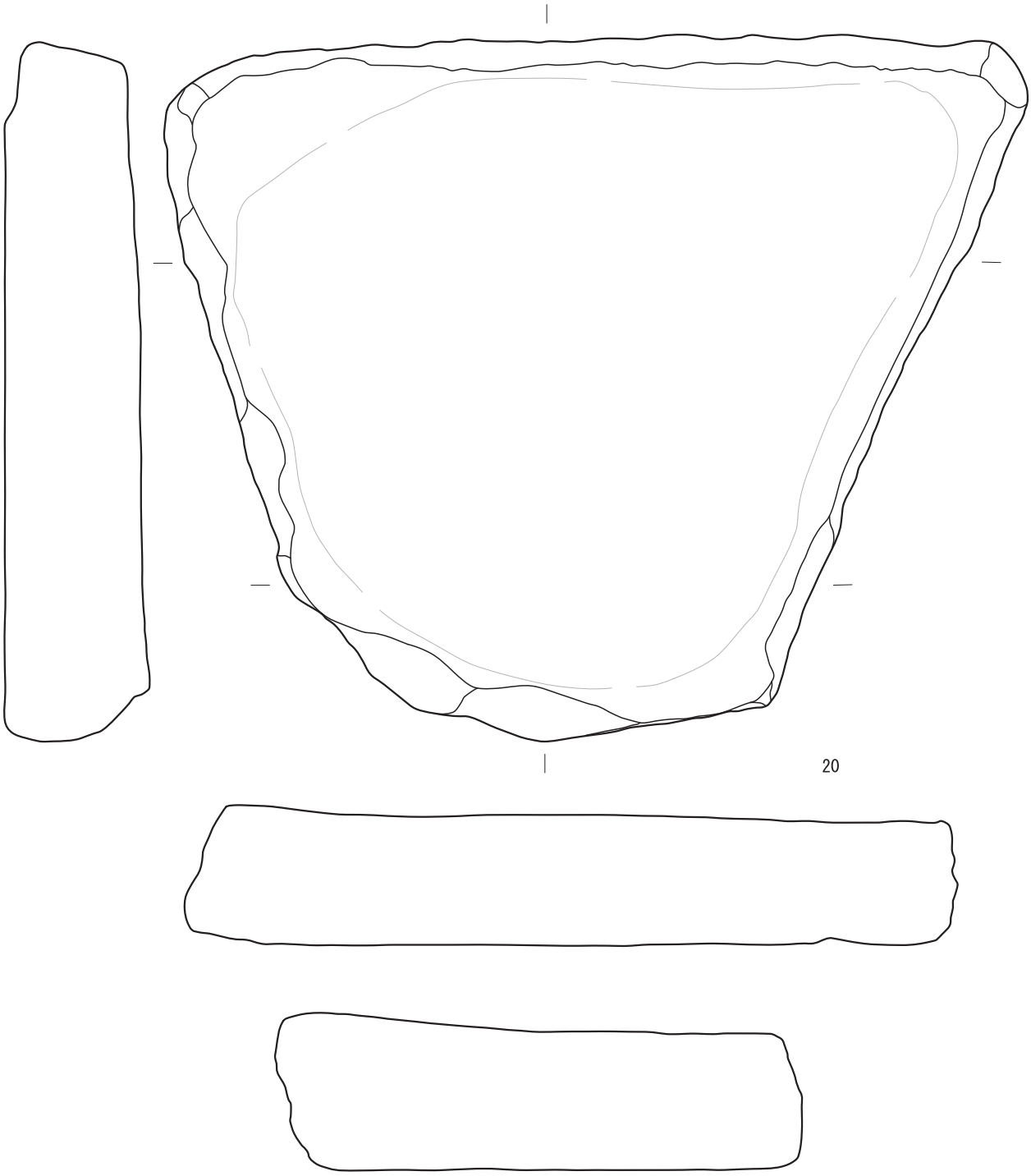


図 70　石器（RQ）実測図（SB19）

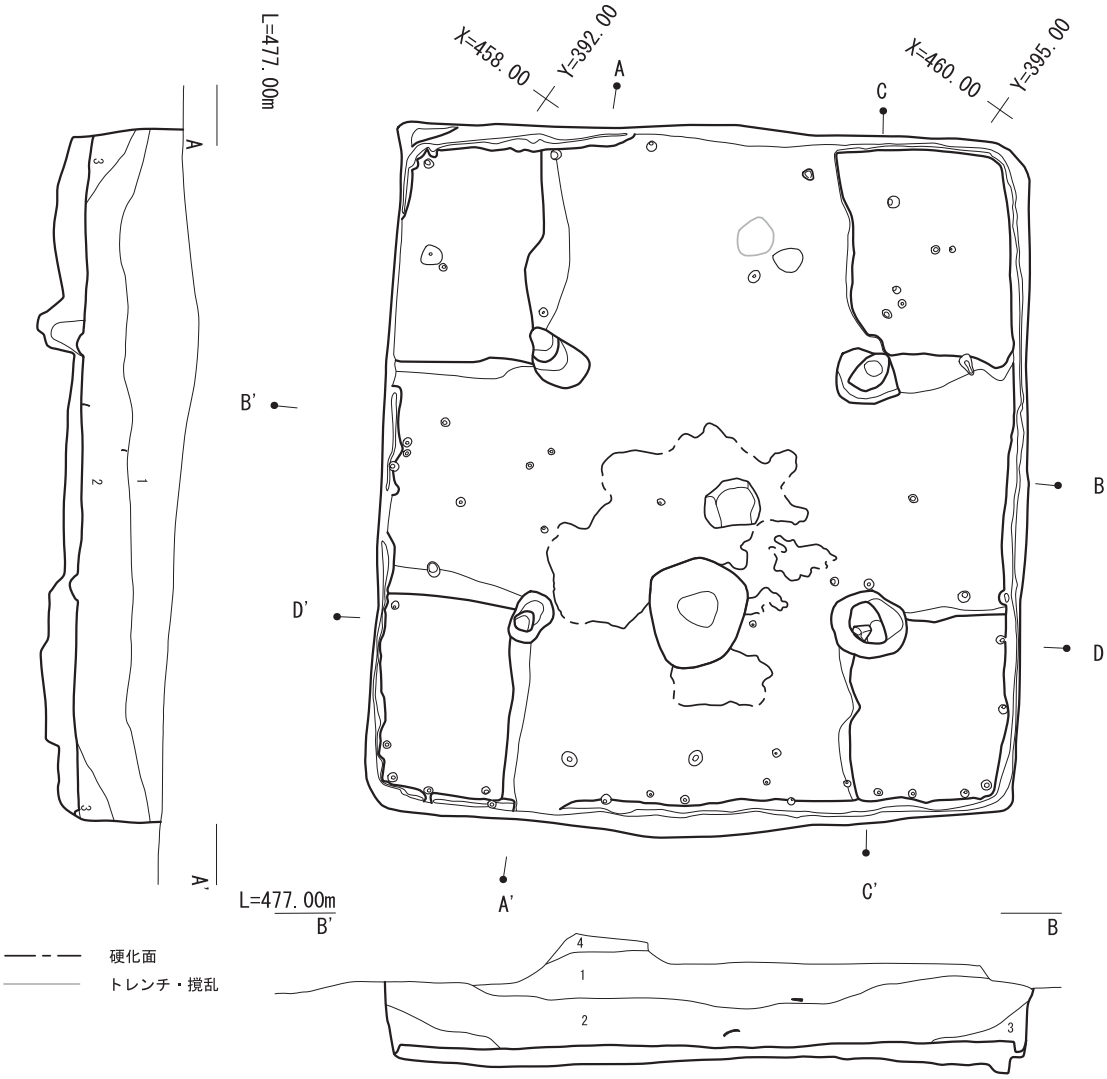


図71 SB20 床面（1/60）

SB20は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉及びベッド状遺構を備える。

SB20の法量は、南北5.5 m、東西5.1 m、遺構確認面からの深さ70cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。各主柱穴はベッド状遺構の角に一致して建てられている。また、いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には硬化面が形成されている。硬化面は、炉の周辺で発達し、一部は内陣の外側、炉の南側にも形成されている。

炉は、南北90cm、東西80cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺上に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。先述のとおり、炉の周囲には硬化面が形成されているが、炉から北東に向かい硬化面が線状に形成されていない部分が存在する。

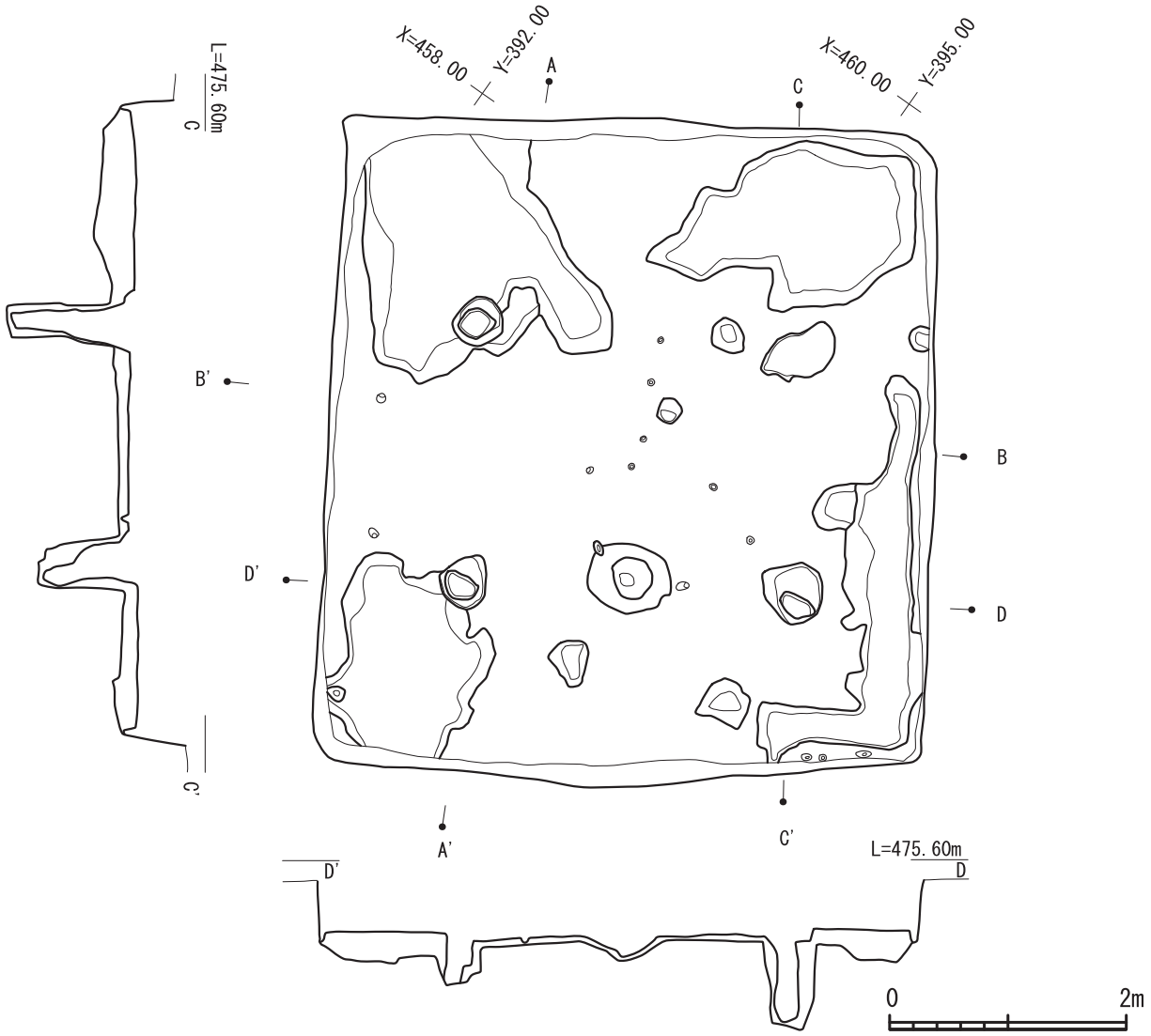


図72　SB20　掘方（1/60）

この部分は、SB7における炉に連接する溝と同じ位置を占めている。炉の北側では石皿が出土したが、内陣のほぼ中央の位置を占めている。石皿の下には埋2層が確認され、床面（硬化面）とは最小1cm、最大3cm離れていた。霜等で石皿が持ち上がった際に埋土が流入した可能性は否定できない。しかし、莚等と複合した使用が想定される石皿の底部には硬化面は形成されがたい、にもかかわらず石皿は一連の硬化面上にあることからも、この石皿は、竪穴住居の廃絶に際して当該竪穴住居跡を埋め戻す時に、意図的にこの位置に据え置かれたものと判断する。

竪穴住居内では小ピットを多数検出したが、竪穴住居の南半部では小ピットが側壁溝に沿った列を形成している。これは側壁の擁壁設備の部分を構成している杭列であろう。側壁溝は詳細に観察すると、幅5cm、長さ53cm程度の単位を見出すことができる。これは擁壁材の規格に対応した単位であろう。

Kピットは検出できなかった。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられている。ベッド状遺構と床面との比高差は3cm～9cmを測る。主柱穴はベッド状遺構の上端面の角に一致しており、建物の完成形がしっかりと計画されていることが理解できよう。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部

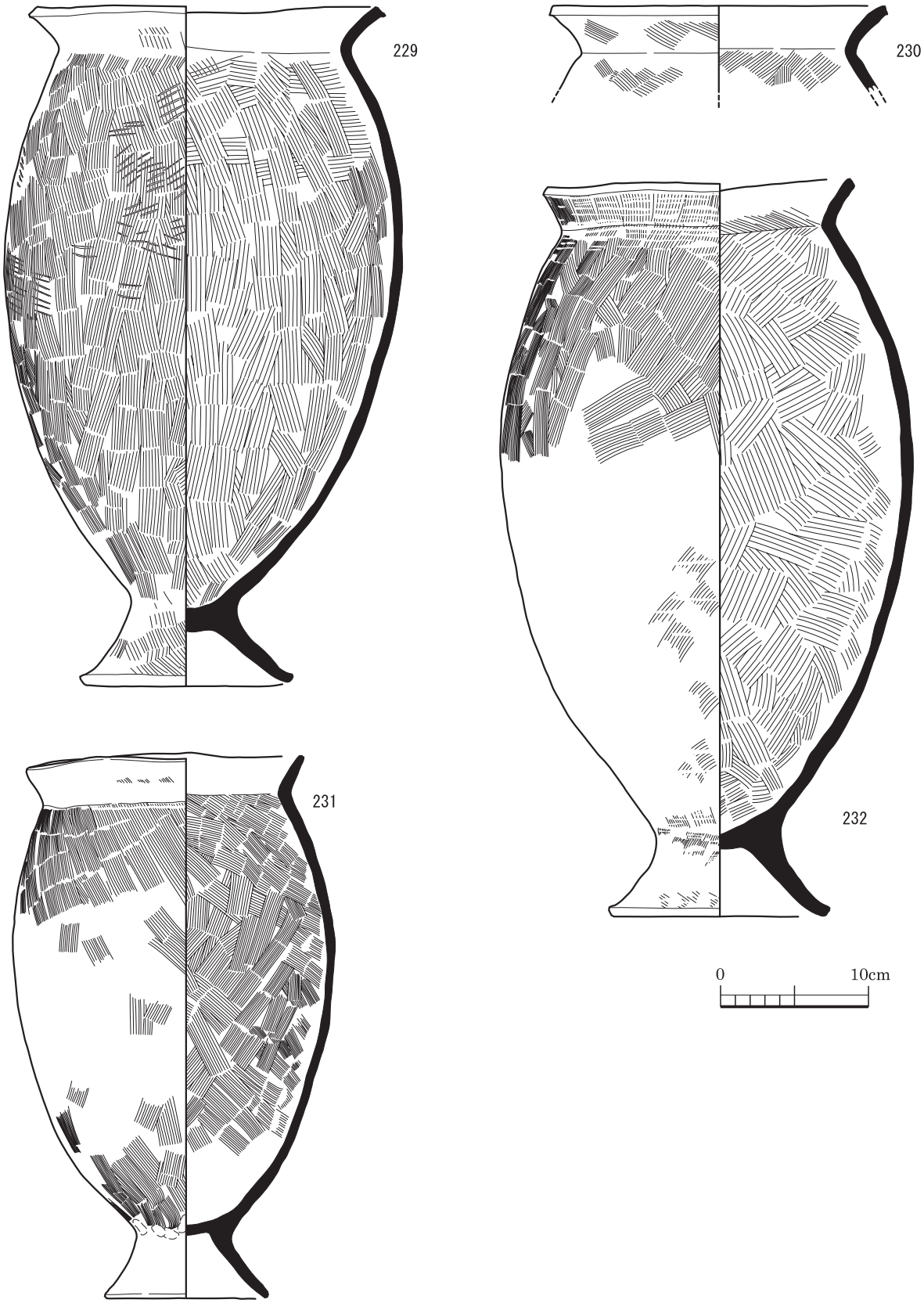


図 73　土器（RP）実測図（SB20）

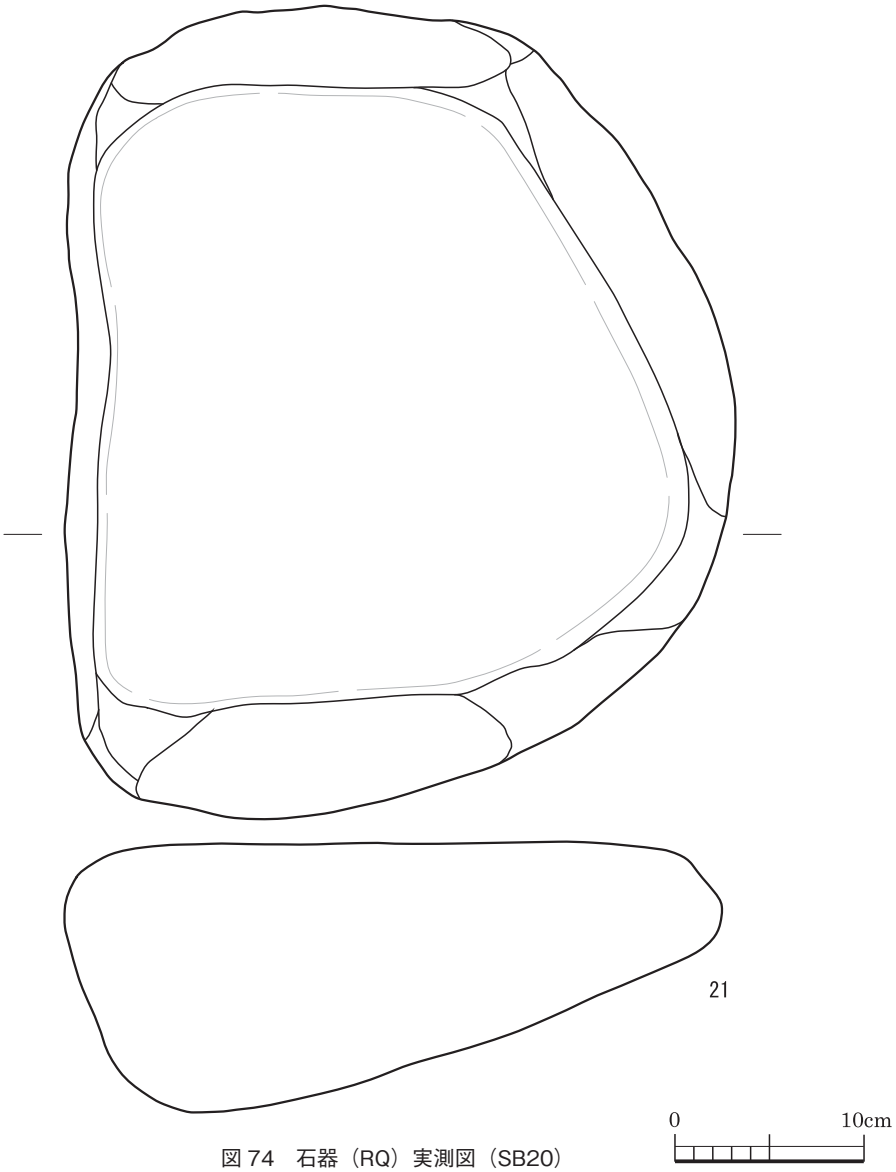


図 74　石器（RQ）実測図（SB20）

では厚く床が貼られている。

掘方は、北西、北東、南西の各隅に概ね方形の土壙を掘削し、南東隅にはＬ字形に溝を切っている。炉が設けられる部分にも掘削が及び、円形土壙が2段掘りに近似した形で掘削されている。Ｋピットの柱穴等は確認していないため、Ｋピット自体を備えない竪穴住居と判断してよい。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB21

SB21は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。SB4と切り合うが、SB21（古）→SB4（新）である。

SB21の法量は、南北3.2ｍ、東西3.6ｍを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられ、ともに内傾している。

炉は、南北65cm、東西60cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、両主柱穴を結ぶラインに東端が接し、竪穴住居の北半部に位置している。西側壁には15cm程内側に張り出した部分が存在するが、炉の下端はこの部分の南端と一致している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Ｋピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施

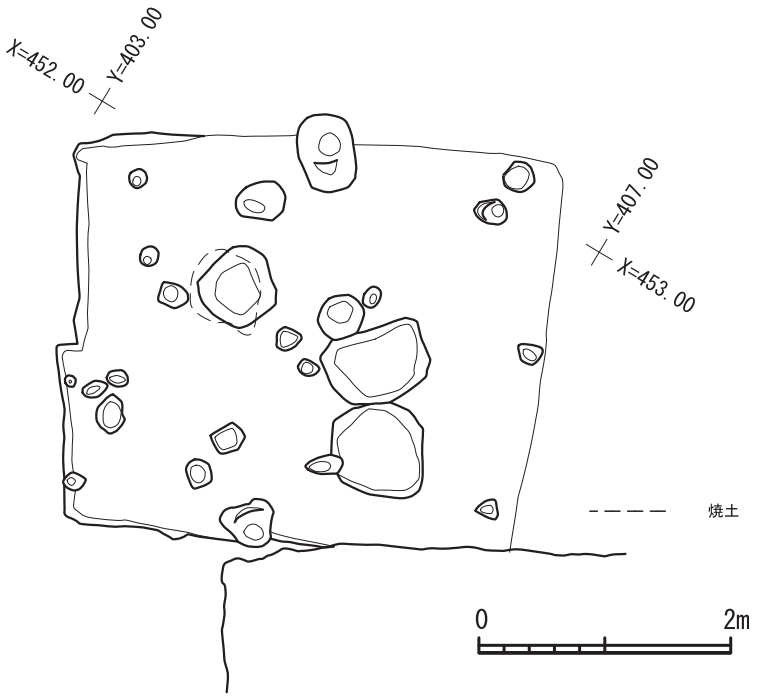


図75　SB21（1/60）

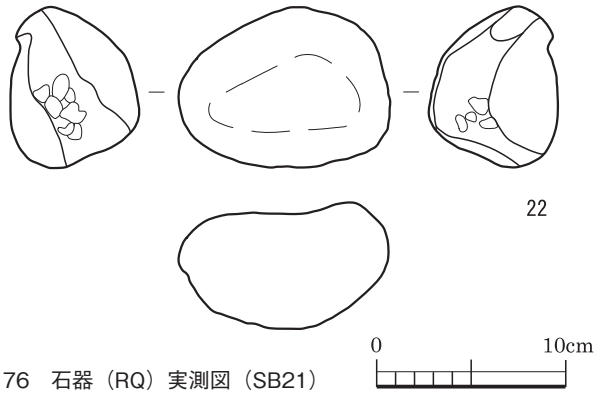


図76　石器（RQ）実測図（SB21）

設は確認していない。竪穴住居の東半部には炉と同規模の浅い土壙2基が連接して存在する。

床は明確に認識できるものではなく、地山の検出高を参考として判断した。

SB22

SB22は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。SB23と切り合うが、SB22（古）→SB23（新）である。

SB22の法量は、南北4.1 m、東西3.7 mを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられ、西主柱穴は内傾している。

炉は、南北60cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、両主柱穴を結ぶライン上に位置し、炉の周辺は若干高まっている。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施設は確認していない。

床は黒褐色シルトの貼床である。

南半部分に東西方向の溝が存在するが、床が既に欠失し、掘方が露出している状態である。

SB23

SB23は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。SB22と切り合うが、SB22（古）→SB23（新）である。

SB23の法量は、南北3.4 m、東西3.7 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。遺構検出時には既に床面に達していたと判断している。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられ、ともに内傾している。

竪穴住居の中央部に、南北30cm、東西35cmの円形を呈する深さ50cmのピットを検出しているが、炉と判断するには至っていない。

Kピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施設は確認していない。

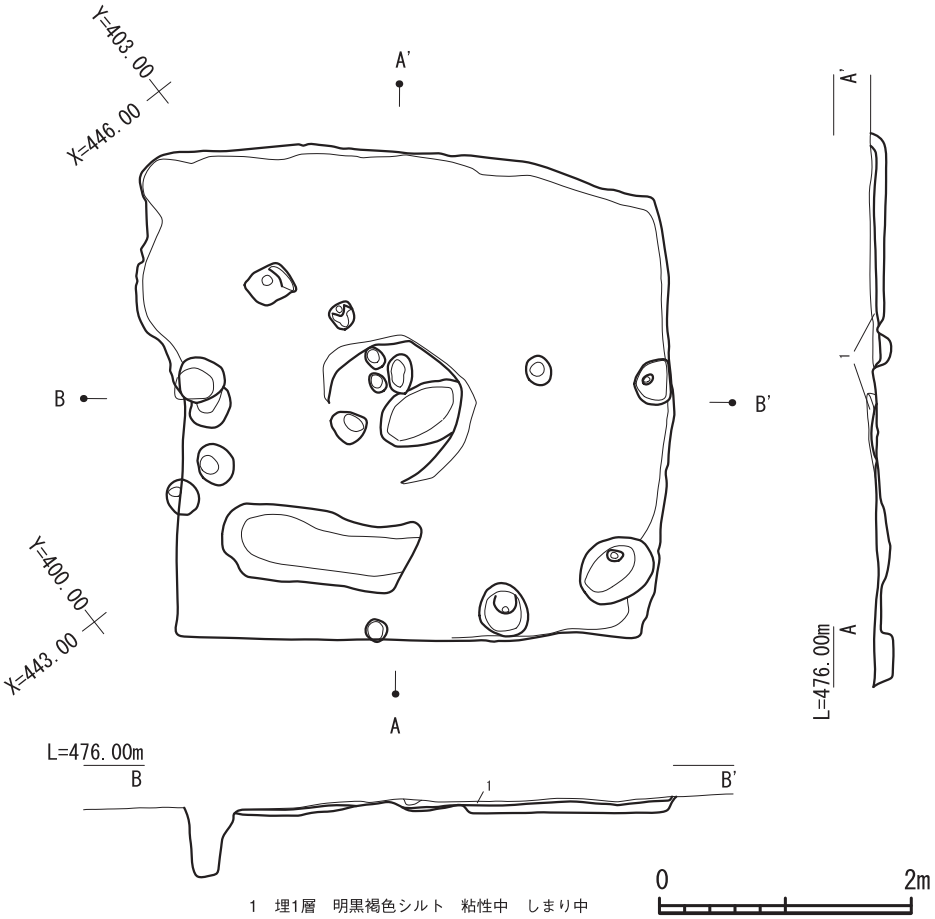


図 77　SB22（1/60）

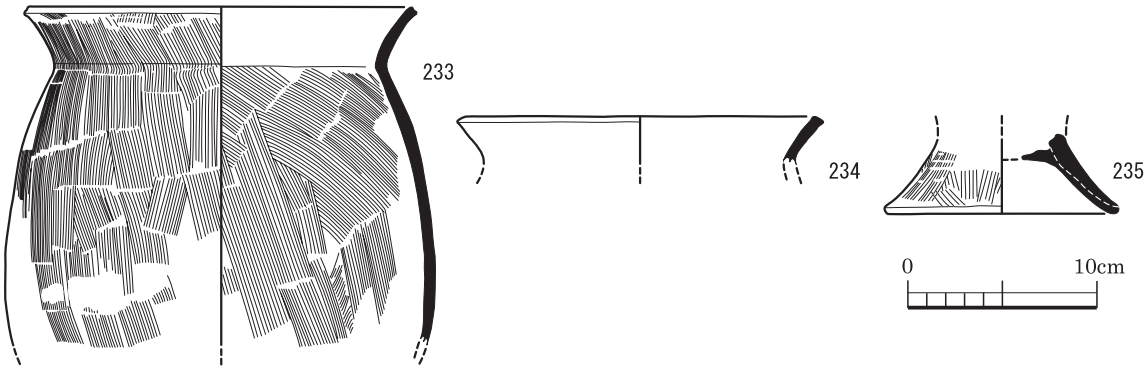


図 78　土器（RP）実測図（SB22）

SD24

SD24は、円形周溝である。周溝内に3基1列のピットを備える。

SD24は、幅26cm、深さ10cmの溝が馬蹄形にめぐる。その直径は2.6mであり、東側が開口している。ただし、周溝底部を観察するとSD24は削平によって途切れていると判断することができるので、本来は円形の円形周溝である。

周溝内には3基1列のピット群が存在する。ピットの直径は約20cm、深さは20～30cmを測る。この他、小ピット2基が周溝内に存在しているが、いずれのピットも周溝と関連すると判断する根拠をもたない。

その他

下扇原遺跡1区では、遺構番号16、25を欠番とした。なお、包含層等から出土した遺物を一括して掲載した。

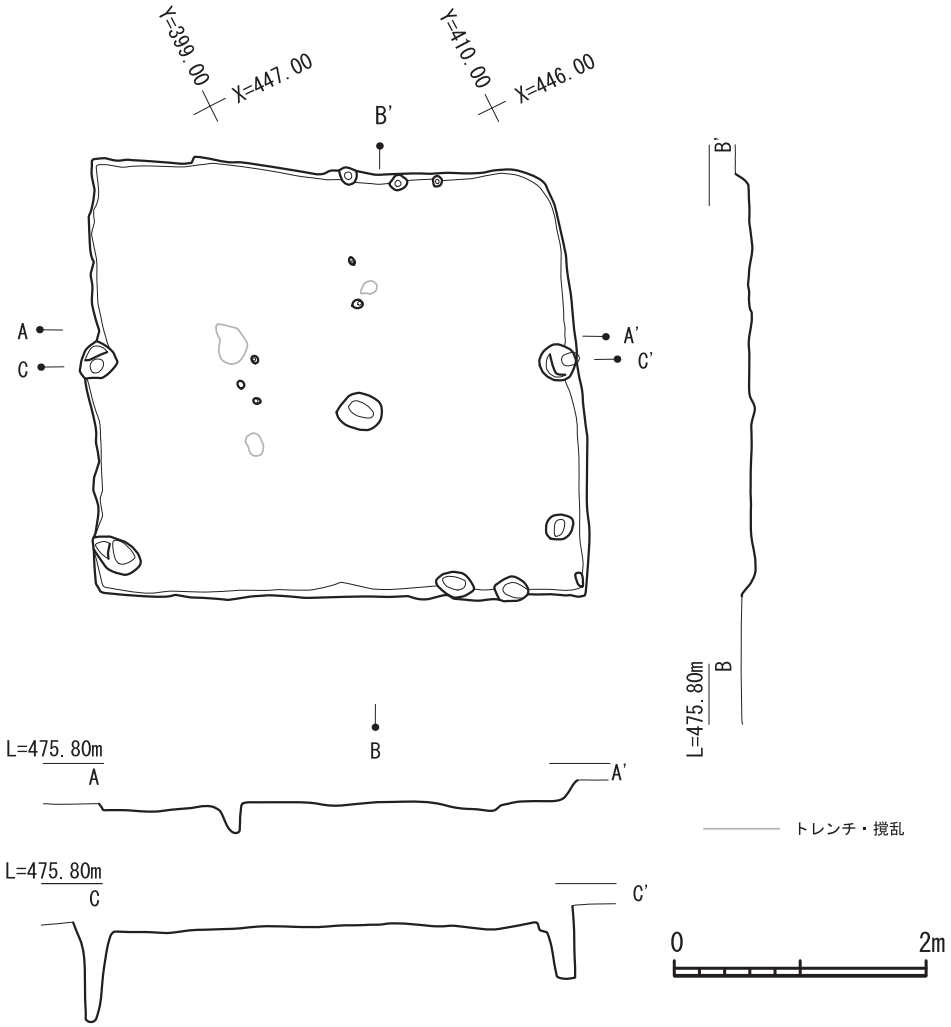


図 79　SB23（1/60）

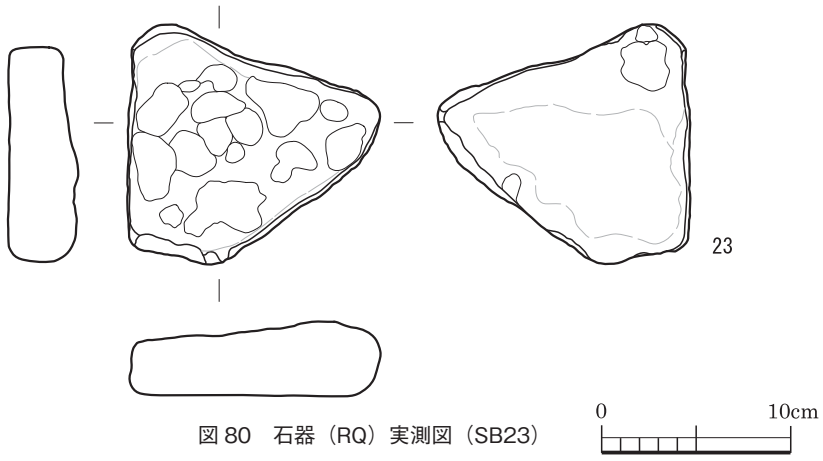
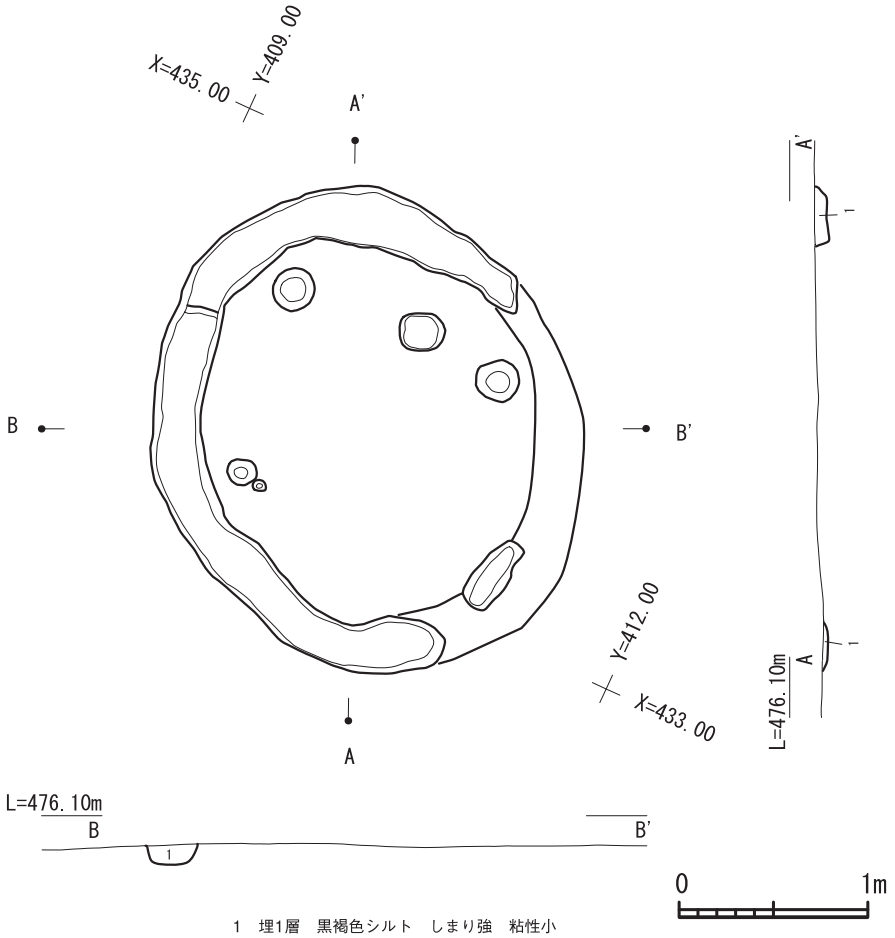


図 80　石器（RQ）実測図（SB23）



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり強　粘性小

図 81　SD24（1/40）

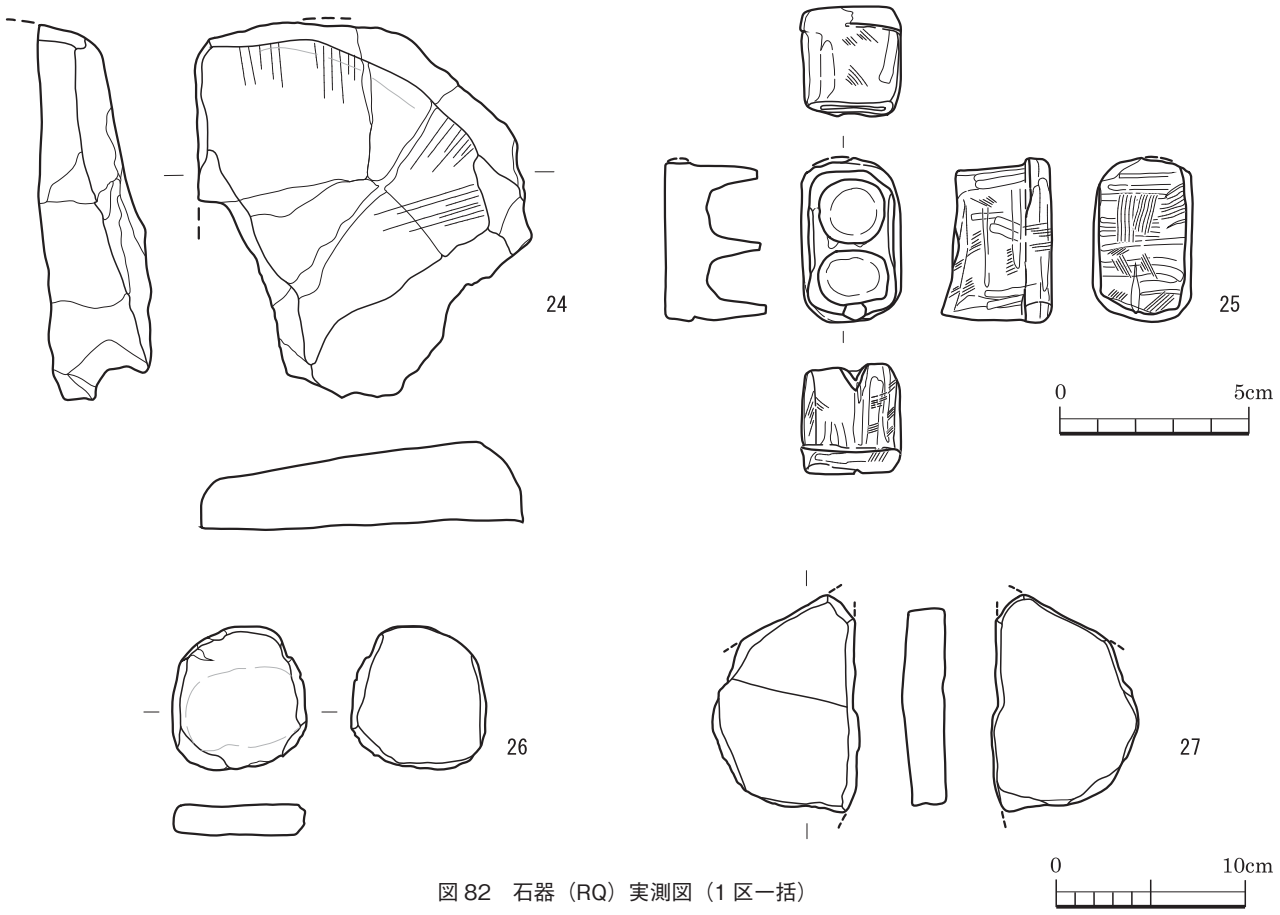


図 82　石器（RQ）実測図（1 区一括）

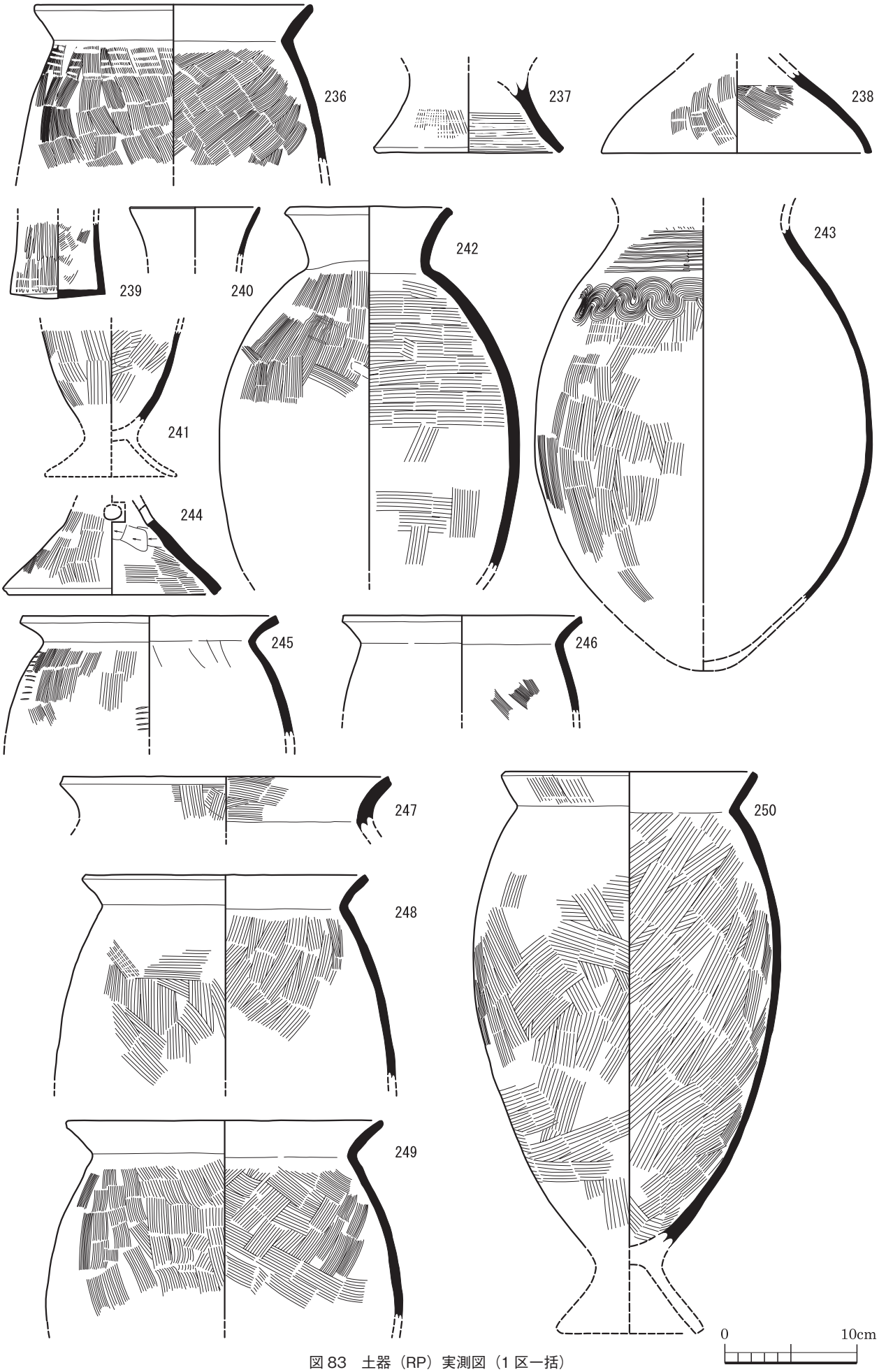


図 83　土器（RP）実測図（1 区一括）

２－２　下扇原遺跡２区の調査

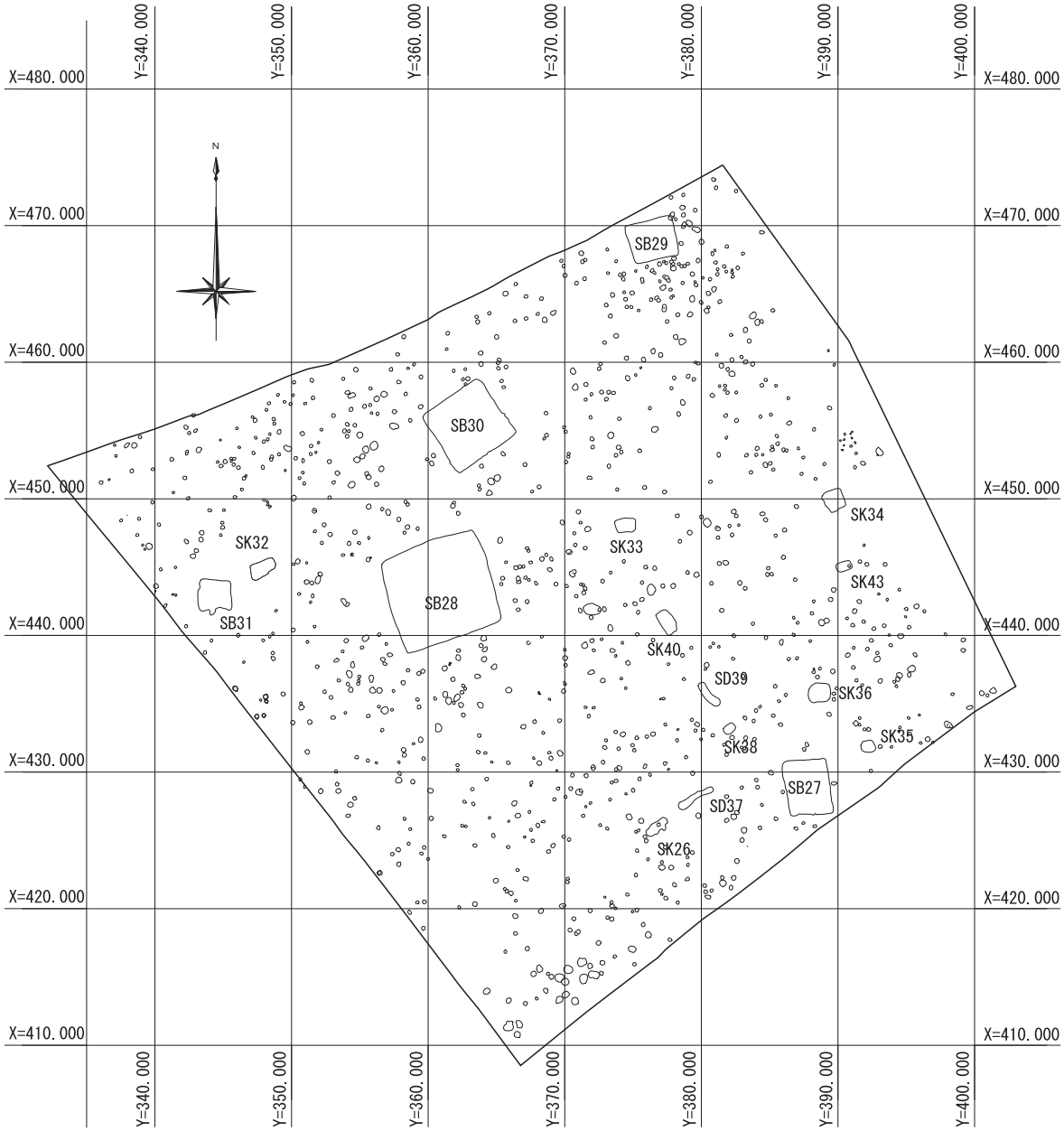


図 84　下扇原　２区遺構配置図（1/500）

SK26

SK26は、長方形を呈する土壙である。

SK26の法量は、東西2.0ｍ、南北0.8ｍ、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙の中央部には不整形な土壙があり、さらにその中心部に小ピットが穿たれている。土壙の西端には2基のピットが位置する。

プラン検出時には墓壙と想定し、調査を進めたが、土層断面を縦横に観察しても木棺等の痕跡を認識することができなかった。

遺物は土壙の北東部と南西部の2箇所に集中していた。

SB27

SB27は、長方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。

SB27の法量は、南北4.0ｍ、東西3.1ｍ、遺構確認面

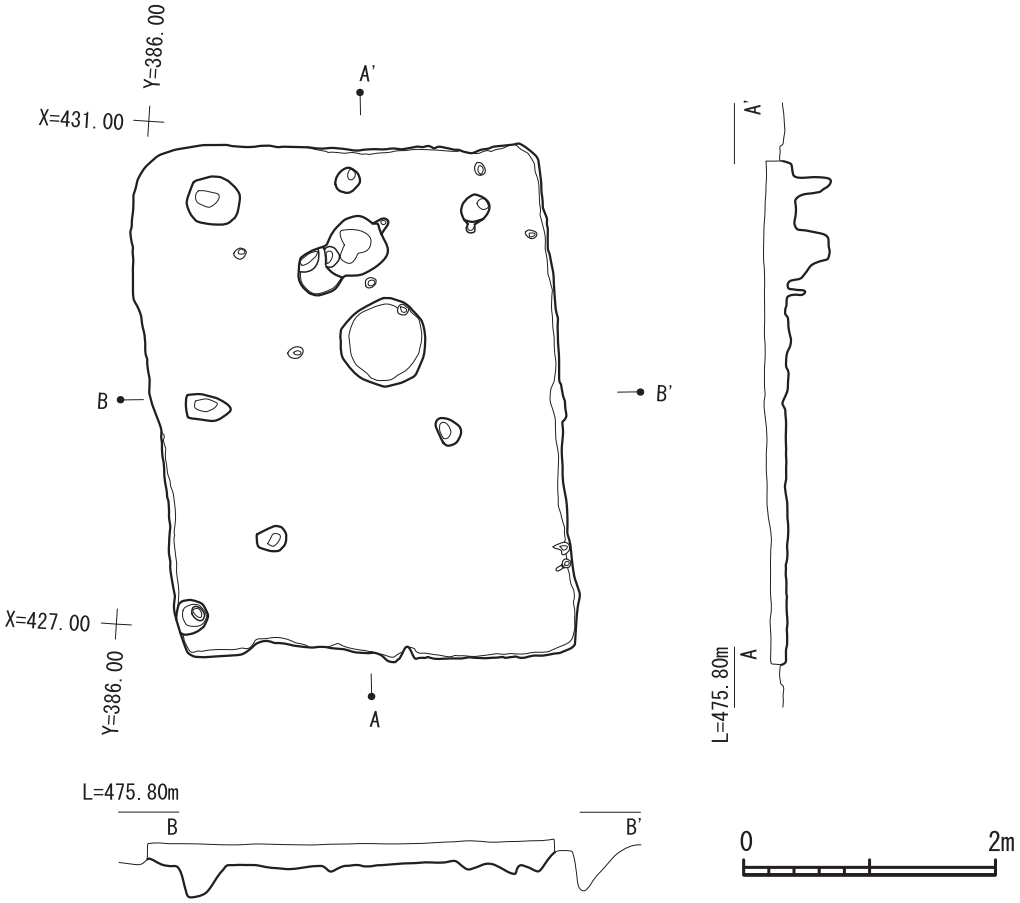


図85　SB27（1/60）

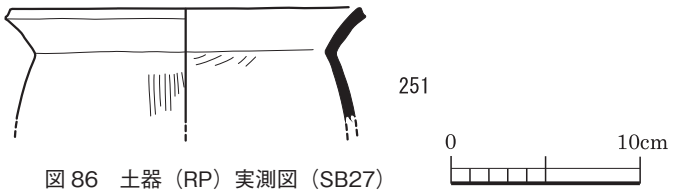


図86　土器（RP）実測図（SB27）

からの深さ20cmを測る。

複数のピットを検出しているが、主柱穴を定めるには至っていない。

炉は、南北70cm、東西70cmの円形を呈し、深さは5cmである。浅い地床炉であり、竪穴住居のほぼ中央に位置している。

Kピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施設は確認していない。

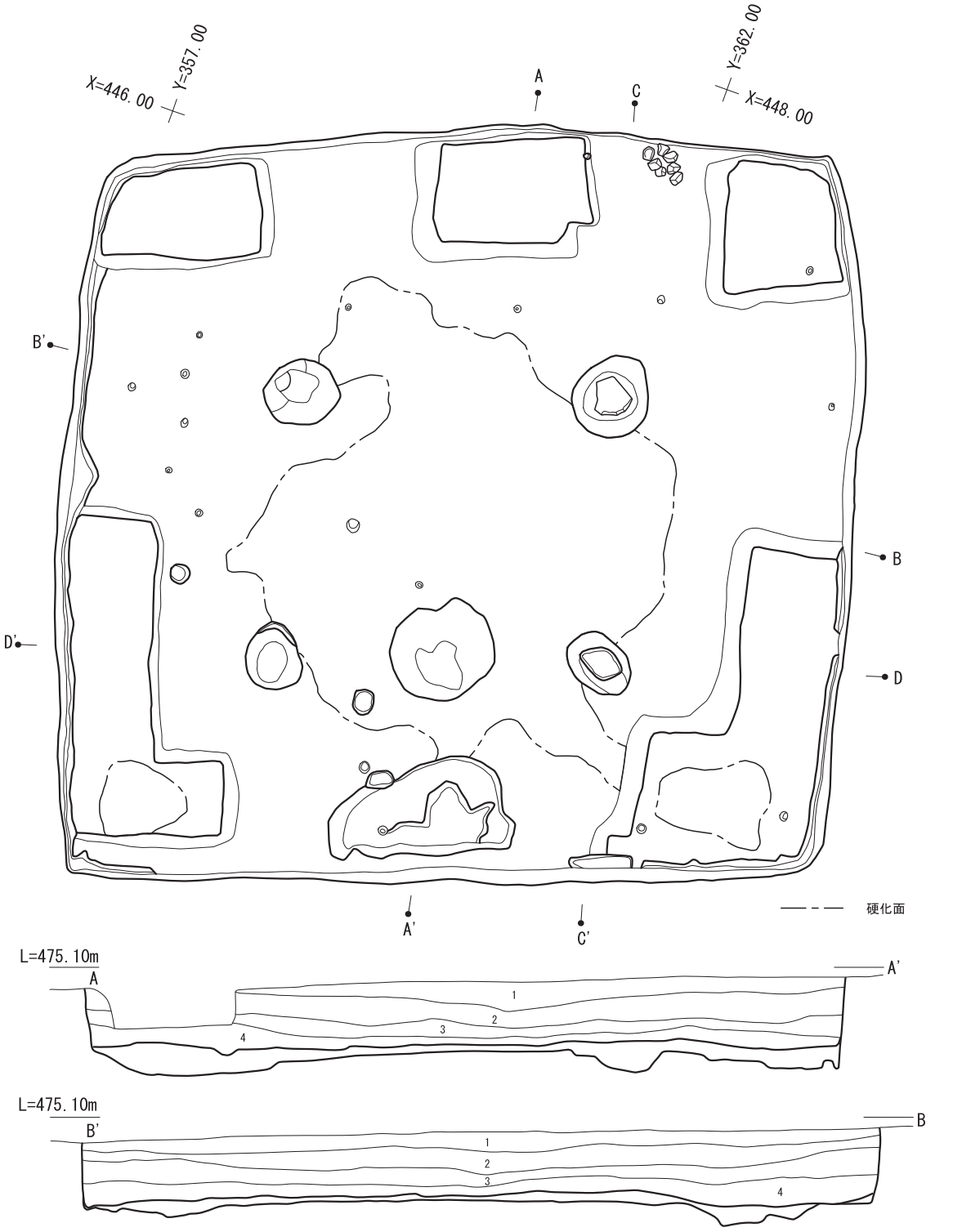
床は明確に認識できるものではなく、地山の検出高を参考として判断した。

SB28

SB28は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB28の法量は、南北7.3 m、東西7.7 m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面



1　埋土1層　(黒褐色シルト)　炭化物が多くみられ、茶色粒子は全くみられない　しまり小
2　埋土2層　(黒褐色シルト)　2mm²ほどの茶色粒子が全体的にまばらにみられる　1層と比べると炭化物は減っている　しまり中
3　埋土3層　(黒褐色シルト)　2層と比べて、茶色粒子が増え大きさも5mm²ほどになっている　炭化物は2層と同様で粘質が少し強い
4　埋土4層　(うすい黄褐色シルト)　茶色粒子は3cm²ほどに大きくなり全体的に非常に多く含まれる　炭化物も目立ち、粘質が強い

0　2m

図 87　SB28　床面（1/60）

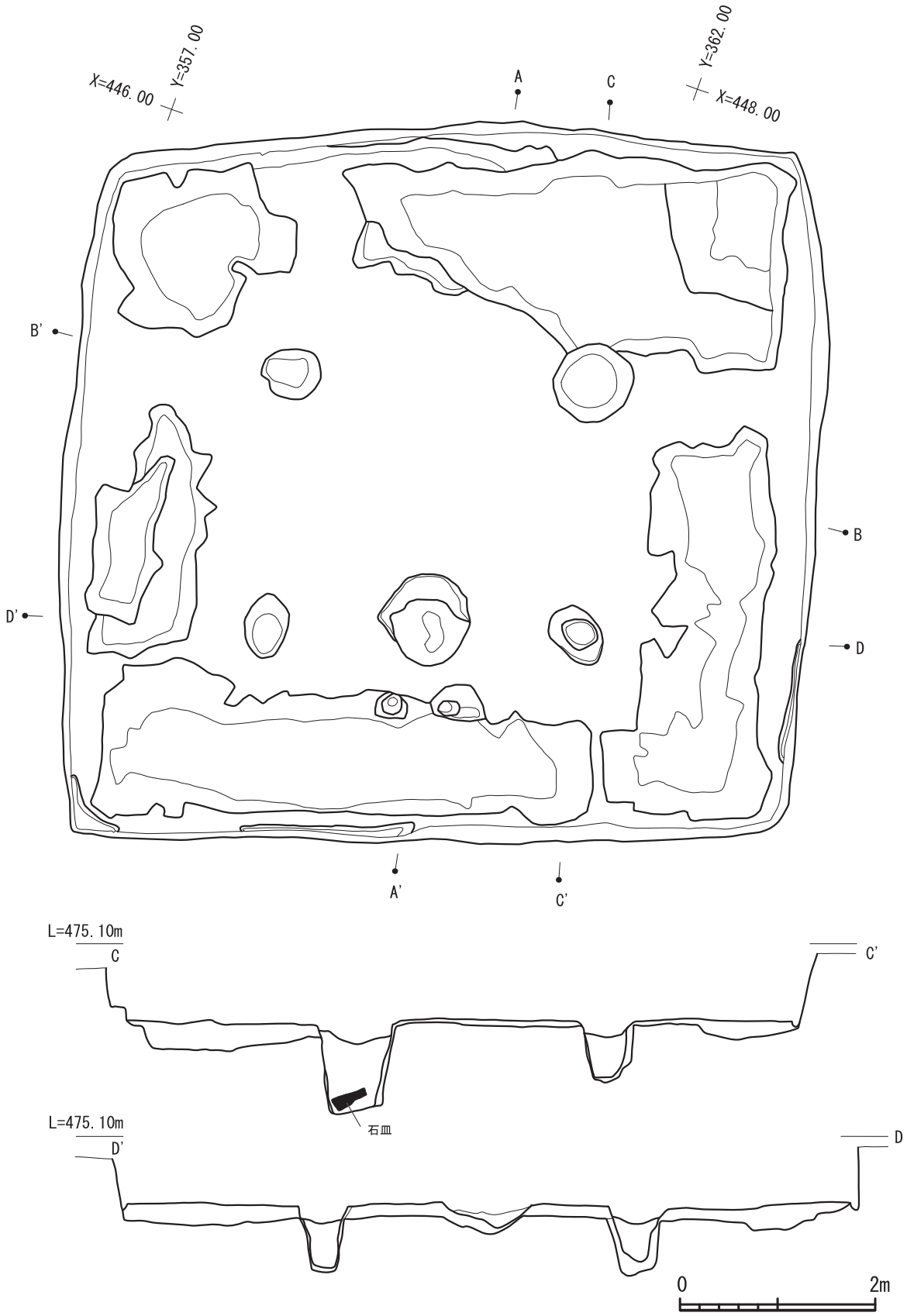


図 88　SB28　掘方（1/60）

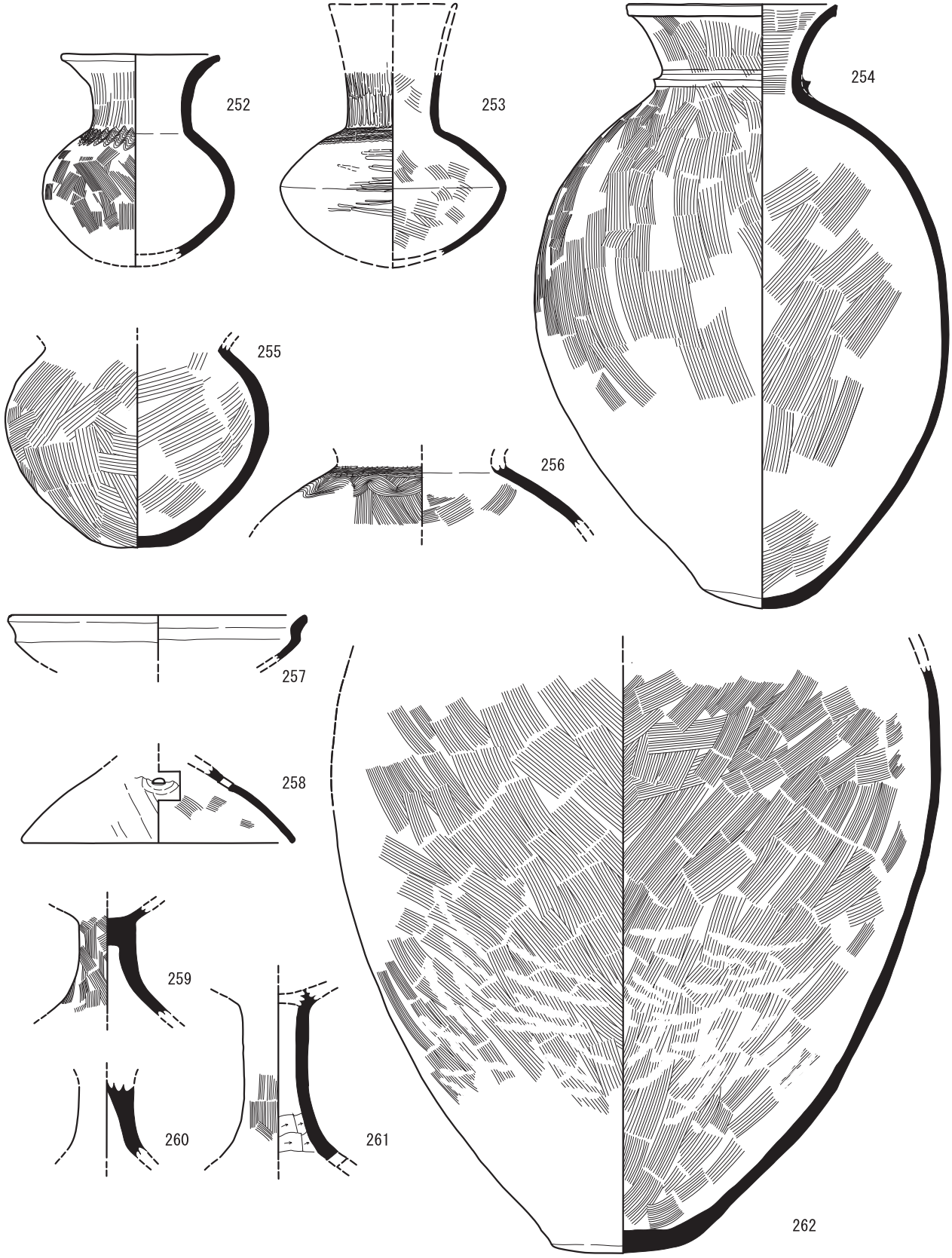


図 89　土器（RP）実測図（SB28）

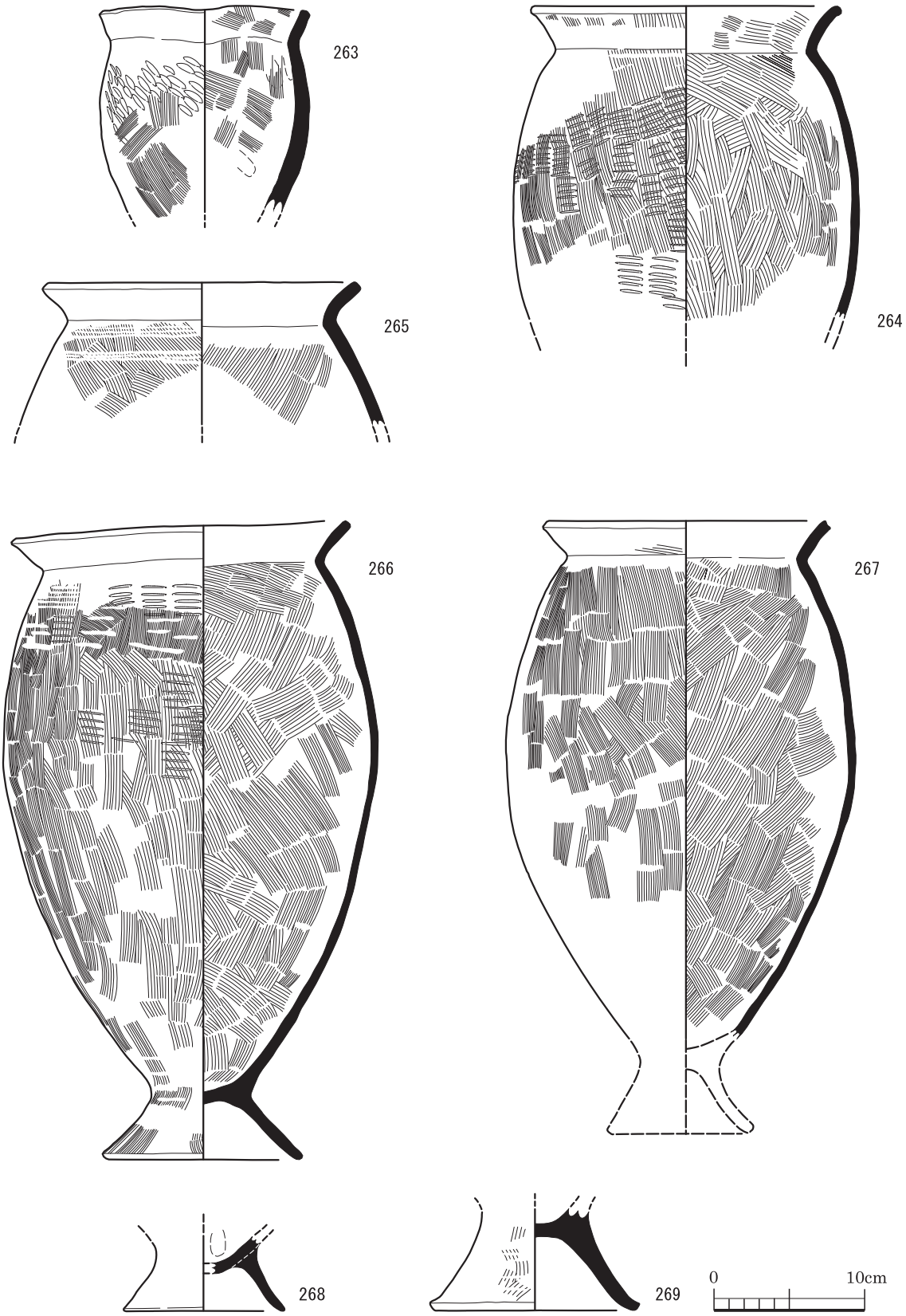
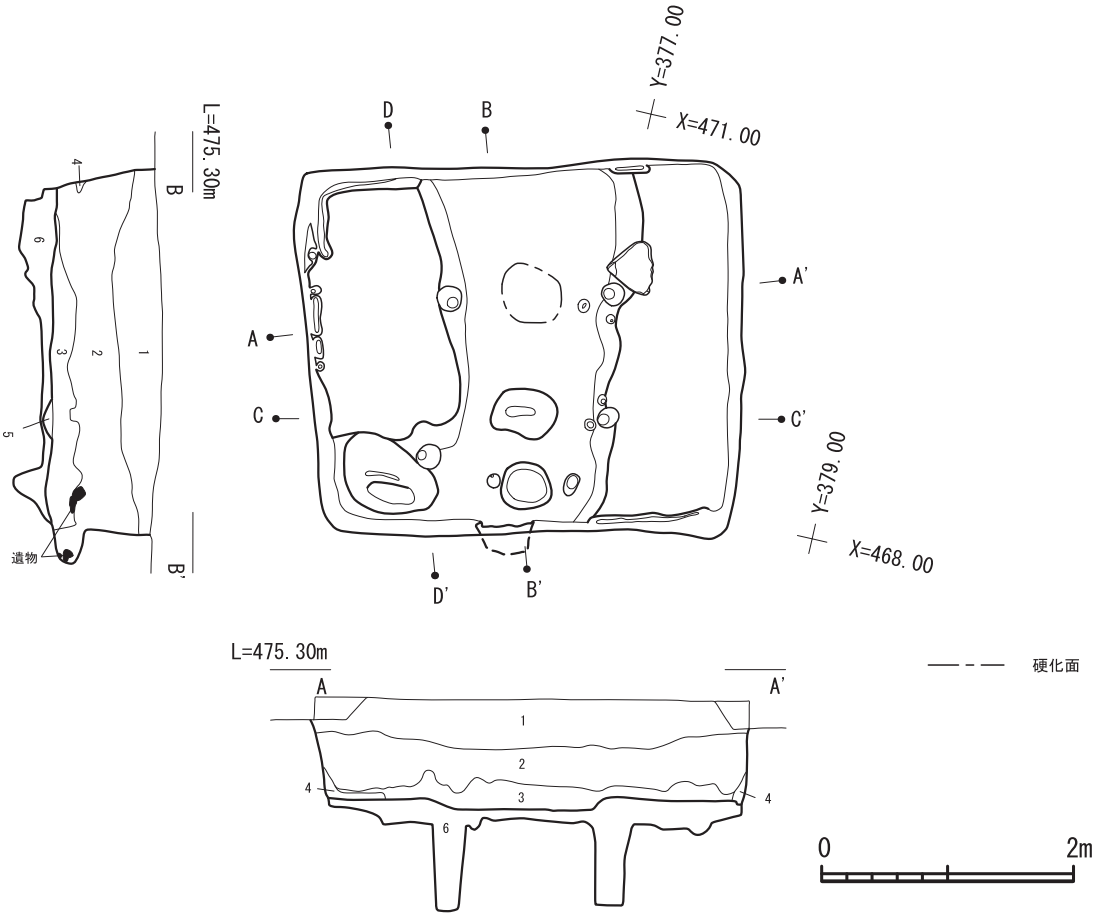


図 90　土器（RP）実測図（SB28）

図 91　石器（RQ）実測図（SB28）



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小　土器片を含む

2　埋2a層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(直径2cm～5cm)を多量に含む
遺物はほとんど含まない　住居廃絶時に投げこまれた土か

3　埋2b層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(直径2cm～5cm)を含み、
木炭を多量に含む　また、木炭が多量に出土した部分の周囲には焼土も存在した　床直上層

4　黒褐色シルト　1、2、3に比べ、色はやや暗い　しまり弱　粘性大　住居内の壁際に堆積

5　炉埋土　黒褐色シルト　炭を多量に含む　しまり弱　粘性弱

6　掘方埋土　暗褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(直径1cm～5cm)に多量に含み、
わずかに炭を含む　貼床の土

図92　SB29　床面（1/60）

は、内陣の北部と南部でも発達し、南部ではベッド状遺構の上面にも形成される。北東の主柱穴抜取痕には石皿が使用面を上にした状態で出土した。この石皿は、柱抜取痕の底部付近に位置しながら、傾いた状態で出土している、柱の抜き取り後、意図的に北東主柱穴抜取痕内に据え置かれたものと判断する。この石皿が据え置かれた北東主柱穴抜取痕の北側には、北側壁に接して、拳大の礫が7個凝集していた

炉は、南北90cm、東西90cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺上に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高さながらも周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、緩やかな斜面として形成され、床面との境界を明確に区分することはできない。炉の外形は北東方向に若干膨らんでいる。炉壁は一様な斜面ではなく、東半部は内壁が立ち、西半部の内壁は緩やかに傾斜している。この様子は、炉が2段掘りに近似している状況であることを示している。

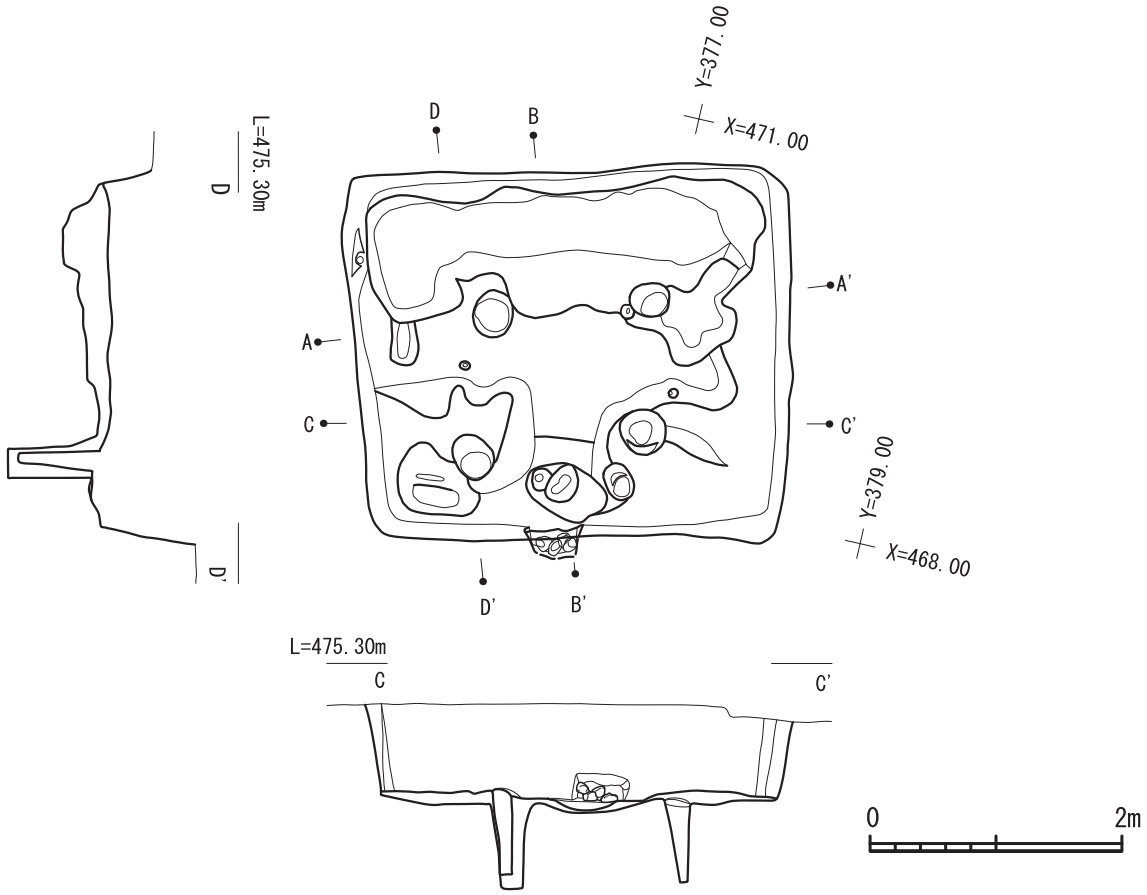


図93　SB29　掘方（1/60）

Kピットは概ね長方形を呈し、南側壁に平行して内陣の中央線上に位置する。2段掘りがなされているが、外側の土壙底面は緩やかな斜面であり、内側の概ね正方形を呈する土壙が水平な底面を有している。竪穴住居の使用段階に係るの調査ではKピットの柱穴を検出することが適わなかったが、築造段階に係る調査では掘方とともに2基のKピット柱穴が炉の端部に対応する位置に設けられている状況を確認している。

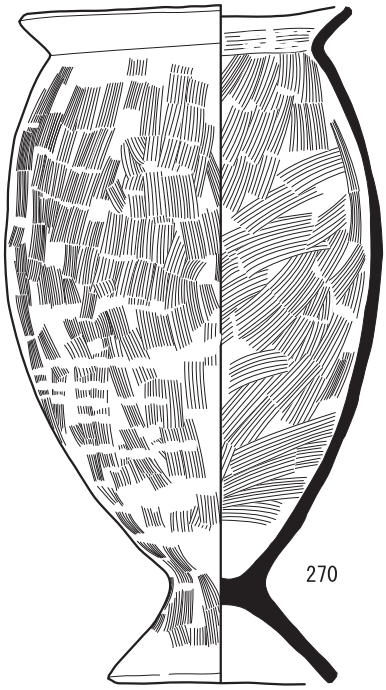
ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられ、さらに北側壁沿い中央部に1基が設置されている。南西隅、南東隅のベッド状遺構は、それぞれ北側向かって伸長し、内陣中央のラインを端部としている。さらに、南西隅のベッド状遺構は、南側壁沿いに幅30cm程度の帯状床面が複合し、もとの方形からL字形のベッド状遺構へと変換されている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に1.2m×1.5mの方形の土壙を掘削し、南西隅の土壙は南側壁に沿って東へ、南東隅の土壙は東側壁に沿って北へ、北東隅の土壙は北側壁に沿って西へ伸長し、西側壁際には新たに長方形の土壙を掘削し、ロ字形の掘方となっている。炉が設けられる部分には円形土壙が掘削されており、その完成形に対応している。掘方の各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。なお、Kピットの柱穴をこの段階で確認した。Kピットの柱穴2基は、炉の端部に対応する位置に設けられている。

SB29

SB29は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット、ベッド状遺構及び小横穴を備える。



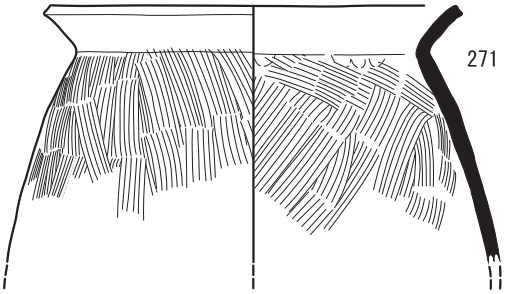


図 94　土器（RP）実測図（SB29）

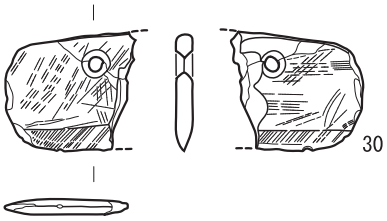


図 95　石器（RQ）実測図（SB29）

SB29の法量は、南北3.0 m、東西3.5 m、遺構確認面からの深さ40cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴でも柱痕跡が明瞭に確認できた。柱痕跡が残存している例は乏しいため、柱建てと床貼りの前後を調査したところ、北東主柱穴において貼床が柱穴掘方を被覆している状況、しかも柱を芯とする紡錘車の様に貼床粘土を柱に巻きつけた状況を観察することができた。したがって、柱建ての後、床貼りが行われているとの判断を導き出した。各主柱穴を結ぶ内陣は、南西主柱穴を除き、竪穴住居の各側壁と平行に位置している。南西主柱穴は南西隅に向かってずれて位置している。北東主柱穴と北西主柱穴を結ぶライン上に座布団程度の範囲で硬化面が形成されている。

ベッド状遺構は西側壁、東側壁に沿った長方形を呈した形で設けられている。西側壁に沿ったベッド状遺構は、南西主柱穴を南端部とし、南側壁との間には幅40cm程度の長方形を呈する土壙が複合して設置されている。東側壁に沿うベッド状遺構では北東主柱穴に察する位置で石皿が出土した。この石皿は竪穴住居跡の廃絶に際し、意図的に北東主柱穴の位置に据え置かれた物と判断する。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

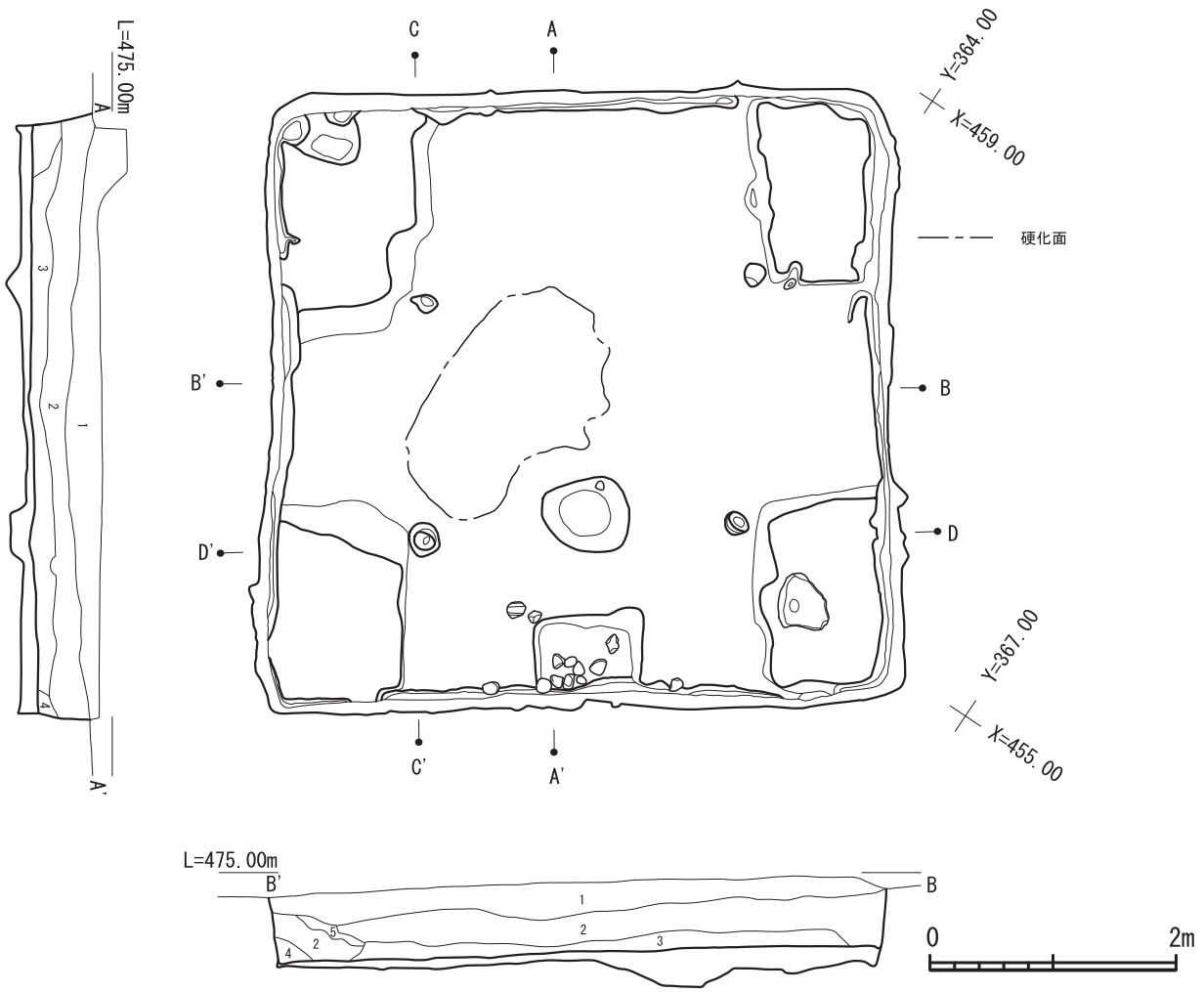
炉は、南北70cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の中央で南東主柱穴と対応した位置にあり、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Kピットは円形を呈し、炉と南側壁の中間に位置する。なだらかに堀りくぼめられ、2基の柱穴が中央の東西に、炉の端部に対応した位置で設けられている。

Kピット、炉に正対する位置の南側壁には小横穴が穿たれている。この小横穴は、高さ21cm、幅42cm、奥行18cmのドーム形である。小横穴の内部には拳大の礫が4個凝集していた。小横穴内の埋土は、竪穴住居内の埋土に等しく、礫を被覆するように埋2a層が堆積している。

掘方は、北西隅、北東隅に方形の土壙を掘削し、北東隅の土壙を北側壁に沿って西に伸長させ、両土壙を連接させている。南半部は全体的に低く掘削されているが、その様相を整理することが適わない。炉が設けられる部分は掘削されておらず、Kピットの完成形に対応した掘り込みが確認できる。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB29では、埋2層以下の層序が形成された時期幅を



1　埋土1層　(暗褐色シルト)　粘性小　3mm²ほどの黄褐色ロームブロックを含む　少量の炭に物がみられる　しまり中

2　埋土2層　(暗褐色シルト)　粘性小　1cm²～5cm²ほどの黄褐色ロームブロックを含む　1層よりも多い炭化物がみられる　しまり小

3　埋土3層　(暗褐色シルト)　粘性小　2層よりも黄褐色のロームブロックが少し減っている　非常に多量の炭化物を全体に含んでいる
土質はあらい　しまり小

4　埋土4層　(黒褐色シルト)　粘性小　1、2、3層に比べて暗く、炭化物もロームブロックもほとんどみられない　しまり中

5　埋土5層　(黒褐色シルト)　粘性小　炭化物の層　炭化物が帯状に入っており少量のロームブロックを含む　しまり小

図 96　SB30　床面（1/60）

時点の域にまで限定する成果を得た。埋2b層に含まれる炭化物は、住居床面にも接して分布し、炭化物周辺のロームブロックのみが焼土化した状態であった。炭化物の成因は、その分布範囲がベッド状遺構に及ぶことなく床面に限られることから、柱等の家屋構造が失火等により焼失したとは考えることができない。同時に炭化物の量は浅い炉1基が生成するには多量に過ぎる。このことと、炭化物が床面に間層を挟まずに堆積していることから、床面で意図的に焚火を行ったことにその成因を求めるのが妥当であろう。さらに、炭化物周辺のロームブロックのみが焼土化していたことは、炭化物が相当の熱を帯びている（燃えている）うちに埋２層が形成され（投げ込まれ）たことを示している。すなわち、埋２層は、住居使用停止に近接し床面が露出している時期に焚火等によって炭化物が生成され、かつ当該炭化物が熱を帯びている極短時間内に形成さ

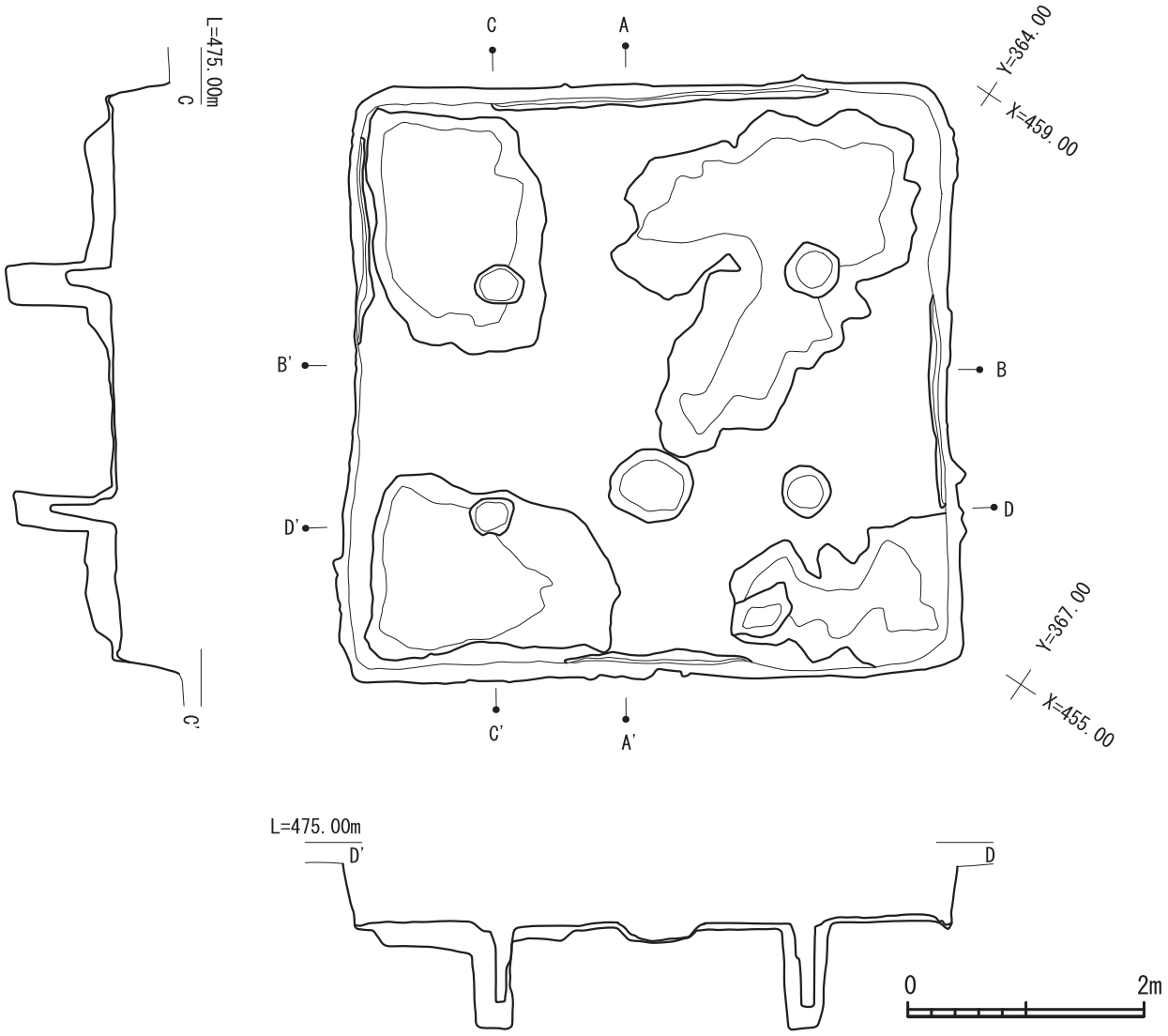


図97　SB30　掘方（1/60）

れた層であると結論することができる。

SB30

SB30は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB30の法量は、南北5.1 m、東西5.1 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側の西半部には概ね硬化面が形成されている。なお、北東主柱穴のとなりには石皿が1個、据え置かれていた。

炉は、南北50cm、東西70cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣中央に位置する。炉はなだらかな周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、緩やかな斜面として形成され、床面との境界を明確に区分することはできないもののその幅は広く、30cmを測る。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して竪穴住居の中央に位置する。緩やかにくぼめられており、炉の端部に対応する位置に設けられている。ただし、柱穴を確認することはできなかった。Kピット内には8個、Kピットの北西部には2個、合計10個の拳大の礫が凝集

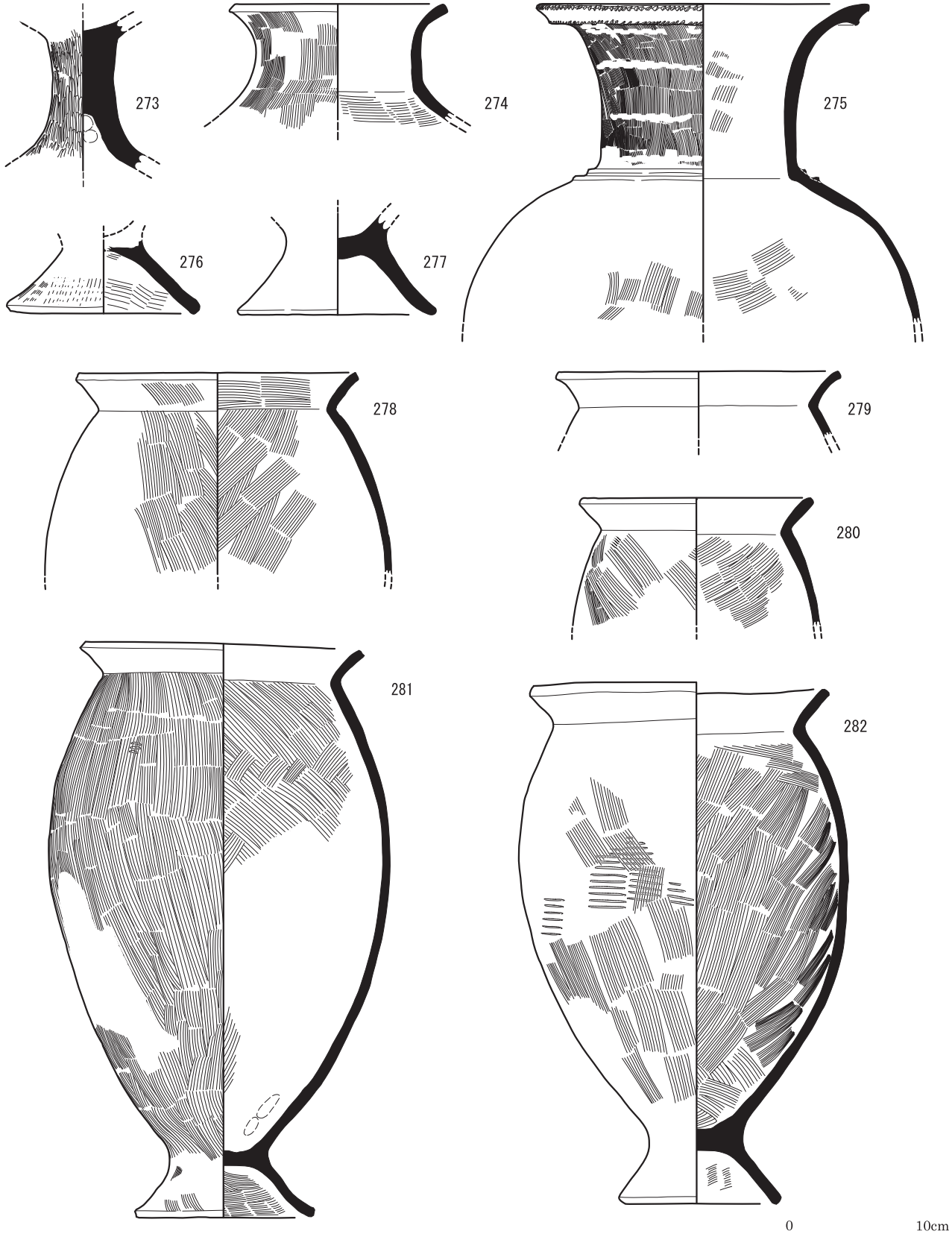


図 98　土器（RP）実測図（SB30）

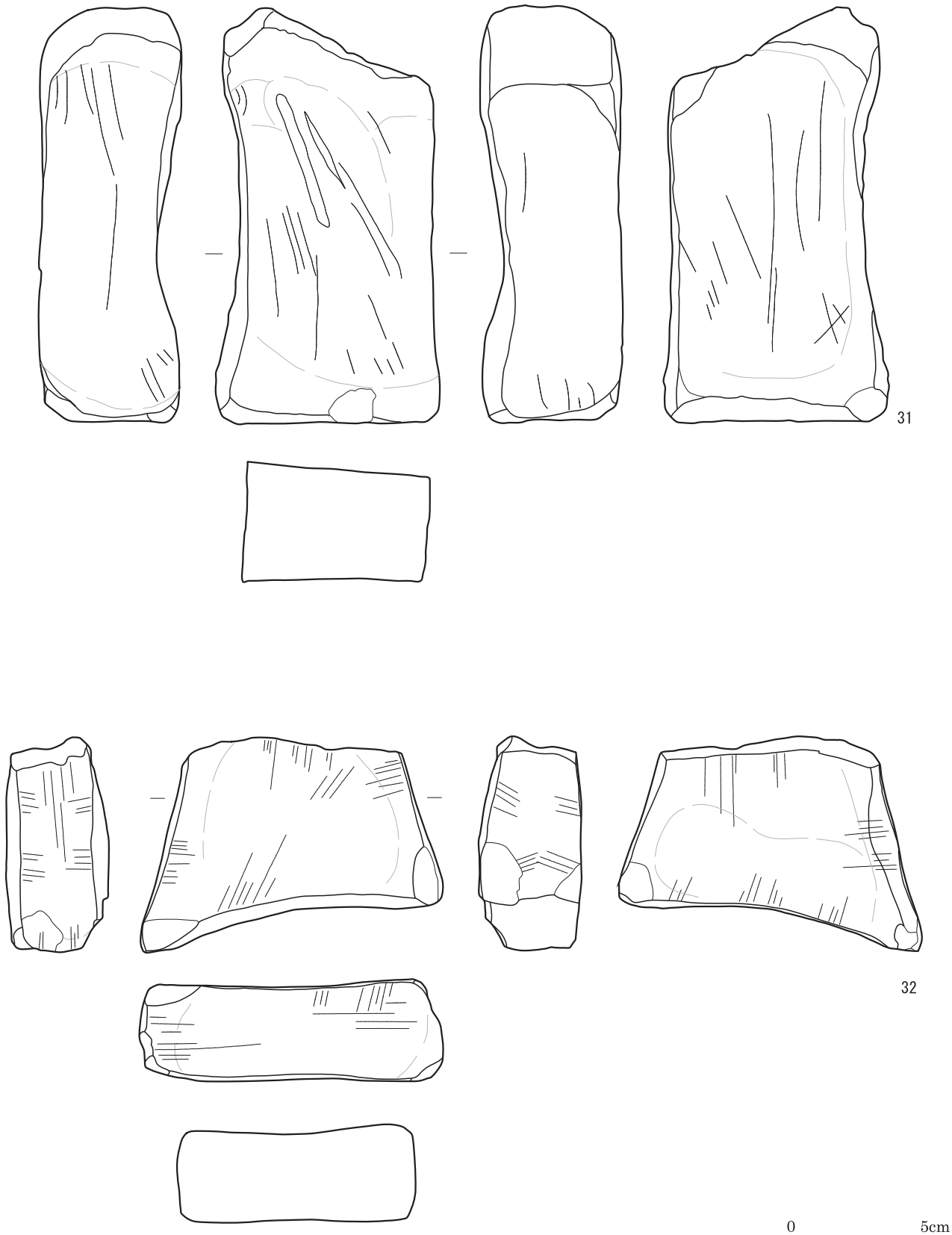


図 99　石器（RQ）実測図（SB30）

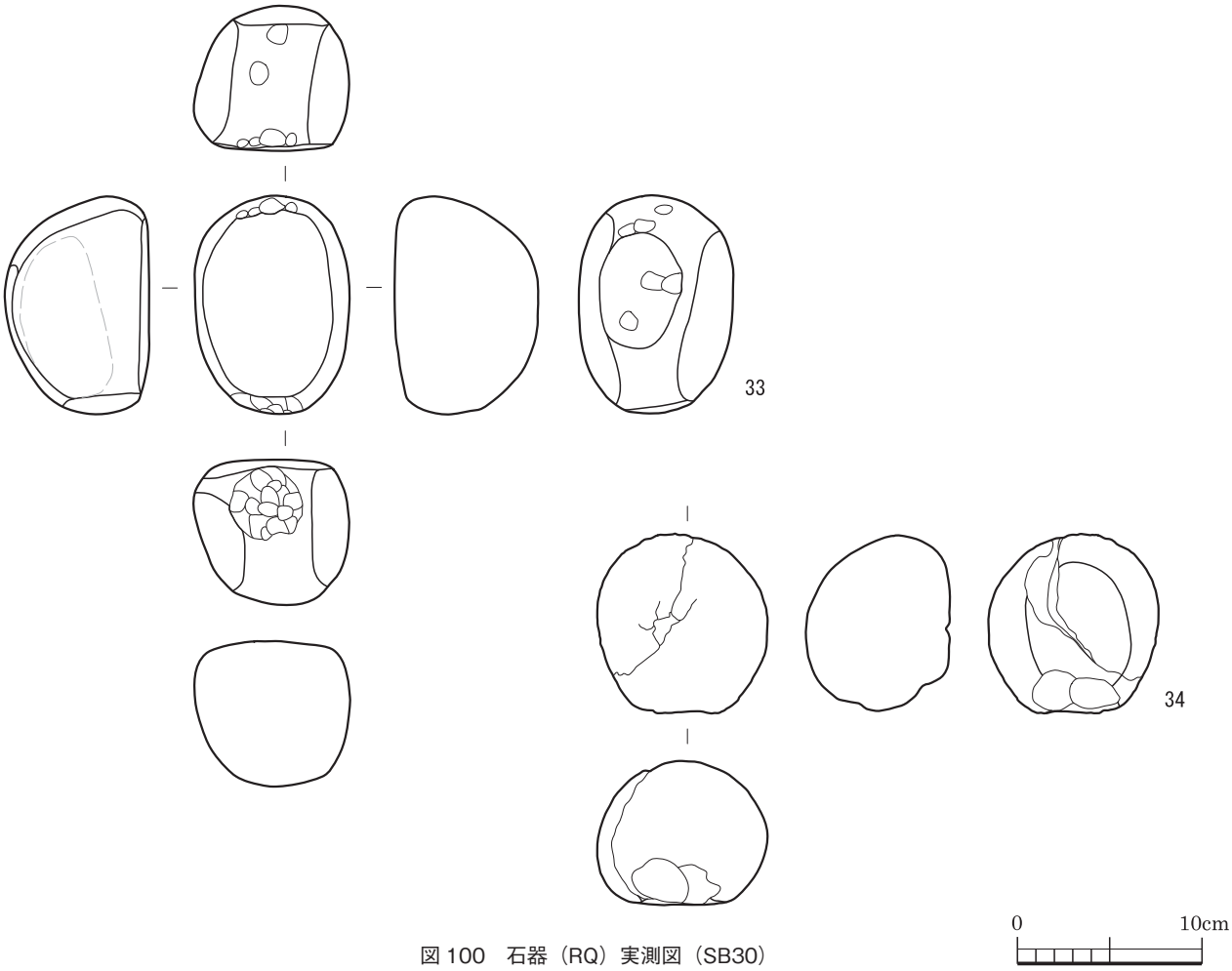


図 100　石器（RQ）実測図（SB30）

して検出された。これらの礫は、意図的に据え置かれたものと判断する。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に長方形を呈して設けられ、北西隅のベッド状遺構は上端面北西隅の土壙と複合して設置されている。ベッド状遺構の下端部内角は主柱穴に接し、側壁際には側壁溝をめぐらせている。南東隅のベッド状遺構では、その上面に石皿と磨石が重ね置かれていた。なお、当該石皿の側面にはベンガラが付着している。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、北西隅、南西隅に1.5 × 2.0 m程度の方形の土壙を掘削し、北東隅、南東隅にも不整形ではあるが同規模の土壙を掘削している。北東隅の土壙からは炉に向かう溝が切られている。炉が設けられる部分には円形土壙が掘削されている。その他の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB31

SB31は、正方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。南側壁に張出し部を備える。

SB31の法量は、南北2.3 m、東西2.4 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、検出していない。

炉は、南北50cm、東西45cmの円形を呈し、深さは15cmである。炉は、竪穴住居のほぼ中央に位置している。炉の周囲にはなだらかな高まりがあり周堤と同様の構造が存在する。この高まりは北西部にピットが複合して位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられて

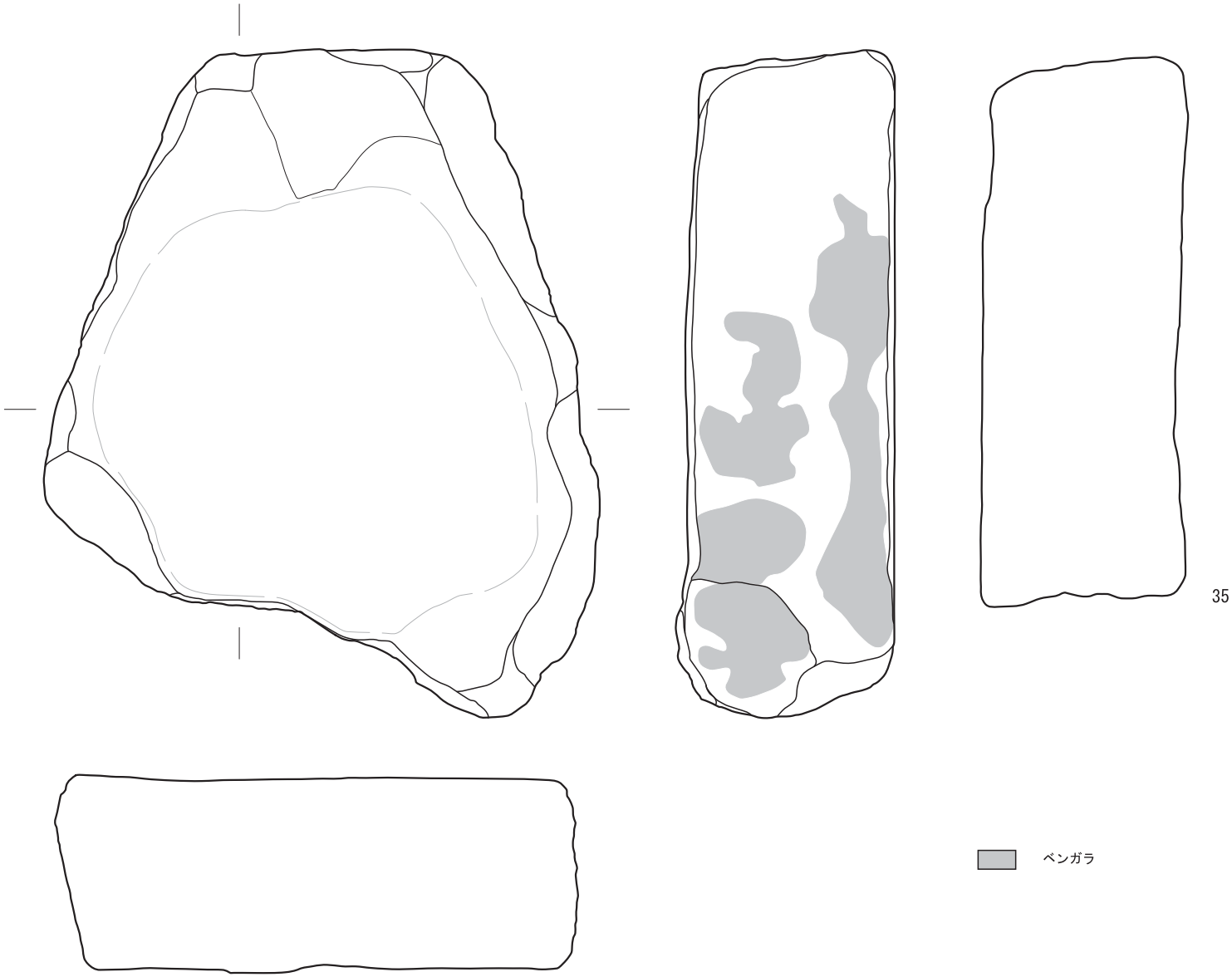


図 101　石器（RQ）実測図（SB30）

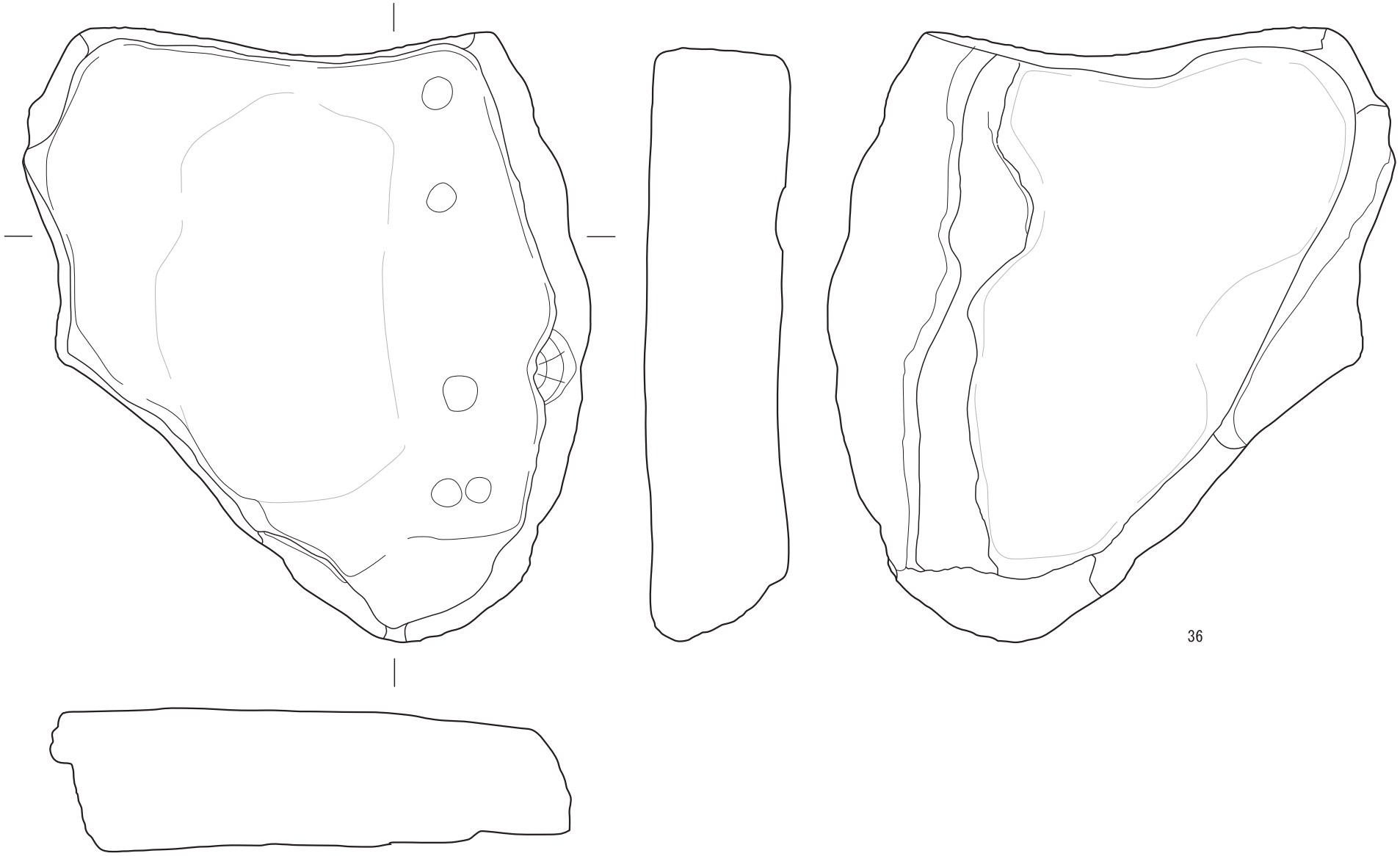
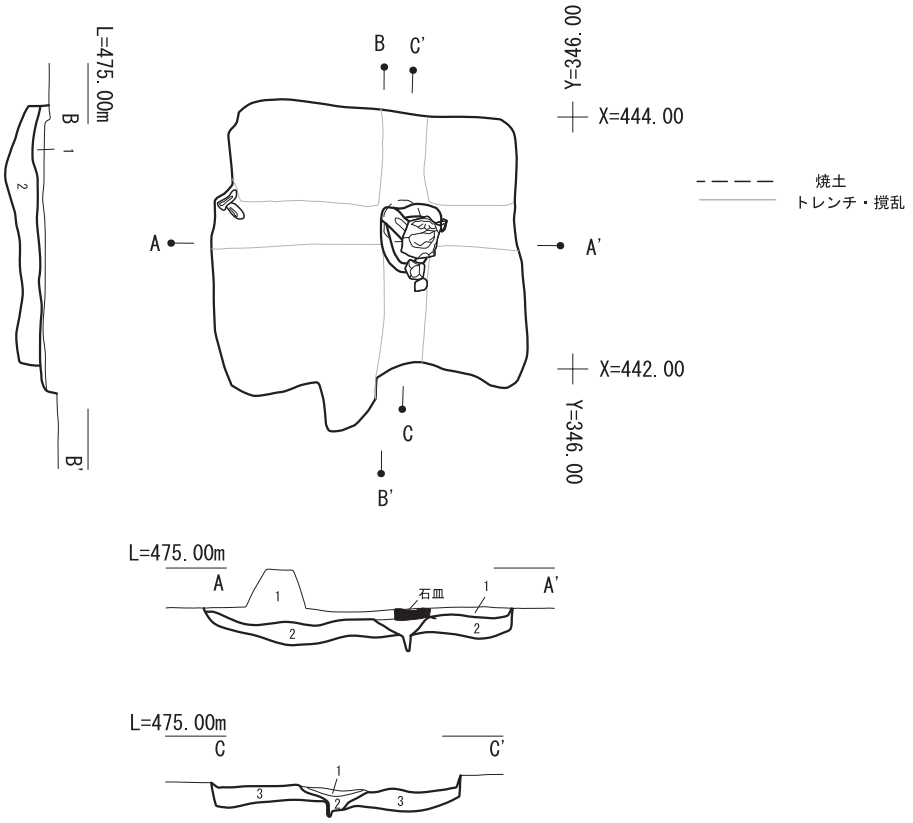


図 102　石器（RQ）実測図（SB30）



1　炉埋1層　橙色焼土　しまり中　粘性小 黒褐色シルト　しまり弱　粘性小　混合　炭を含む

2　炉埋2層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中

3　掘方埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　暗黄褐色シルトがブロック状に混じる

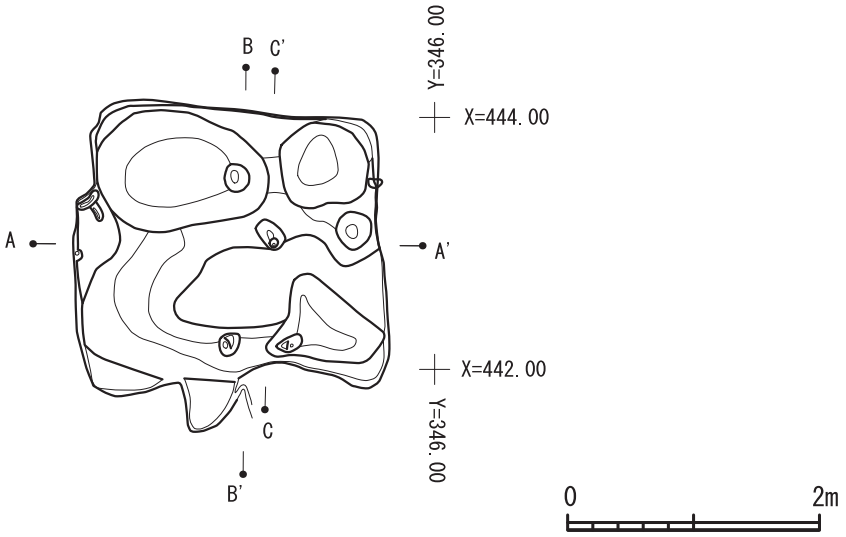


図 103　SB31（1/60）

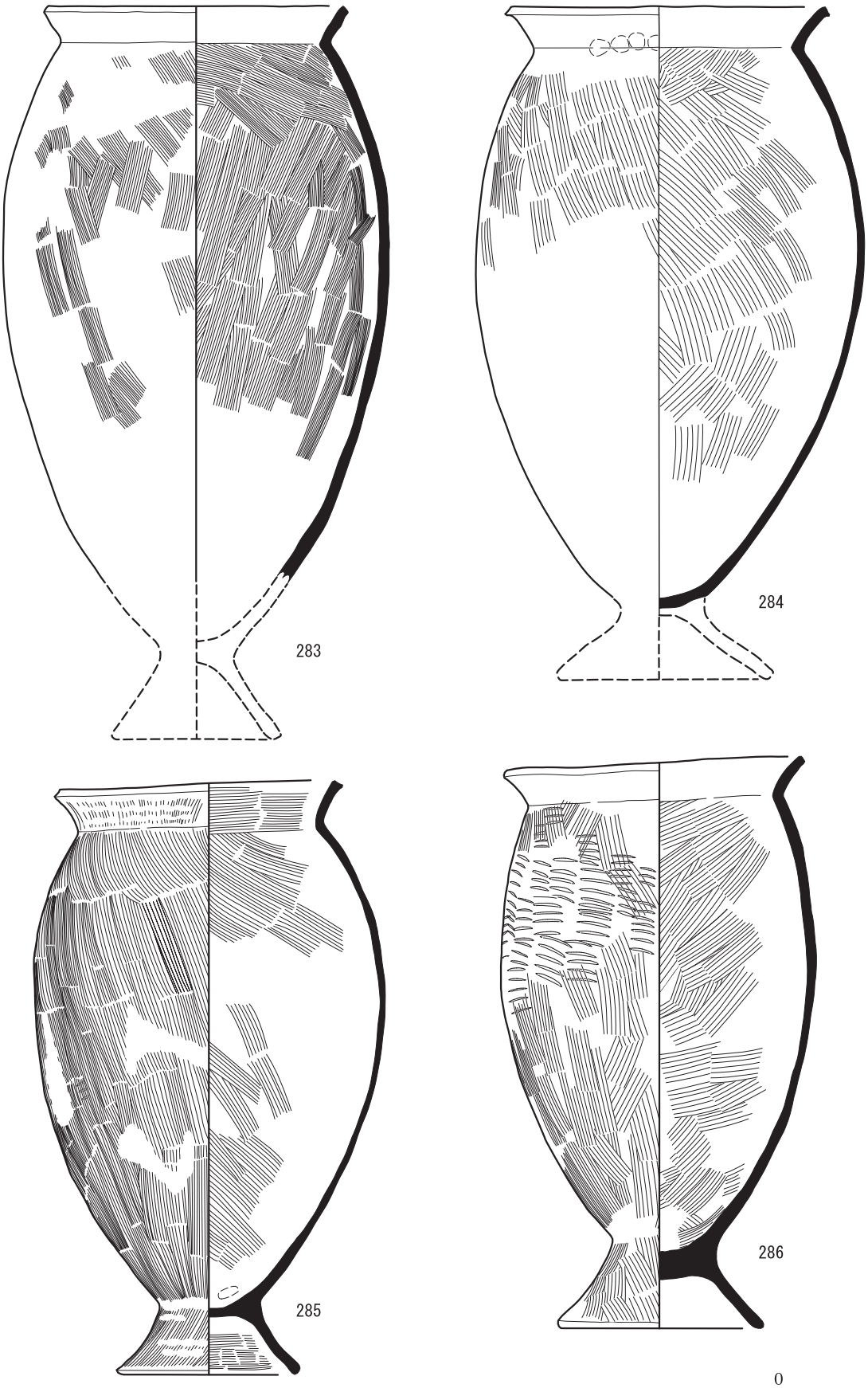


図 104　土器（RP）実測図（SB31）

0　10cm

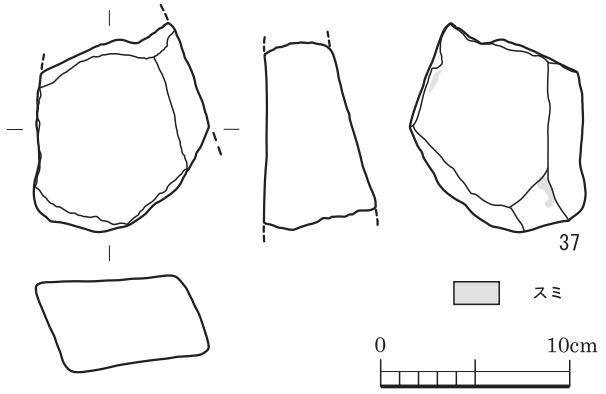


図 105　石器（RQ）実測図（SB31）

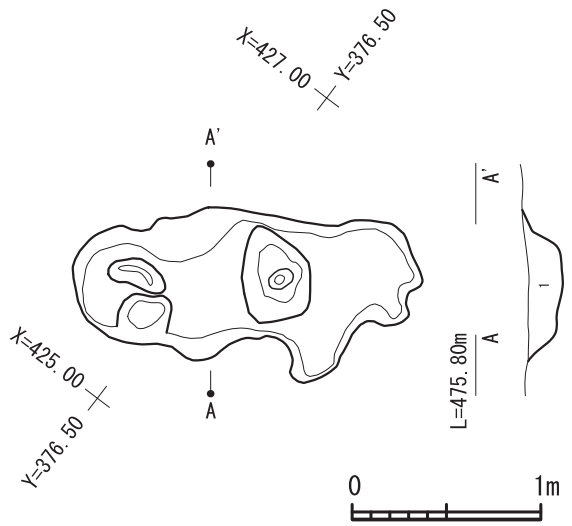


図 106　SK26（1/40）

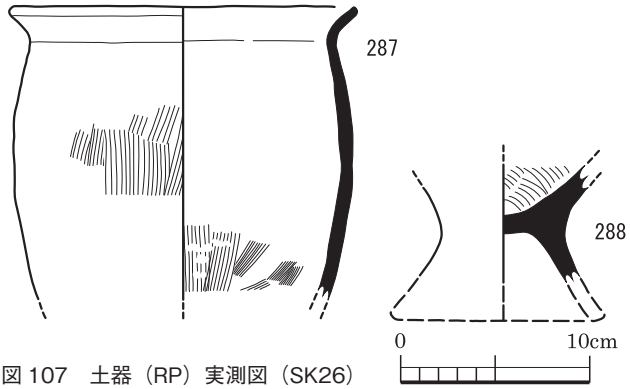


図 107　土器（RP）実測図（SK26）

いる。炉の最下部中央には小ピットが穿たれ、炉の断面は漏斗形を呈している。検出時の炉は、炉全体を覆うように、その上部に石皿が位置していた。炉の北西部分には炉埋土として焼土が確認できるが、石皿はこの焼土の上位にある。

南側壁には張出し部が付加されている。蛇尾形を呈するが、これは遺構検出時には床面直上にまで掘削が進んでいたためであり、本来は正方形を呈していたものと推測する。この張出し部の東、西側壁北端には竪穴住居内に20cm程張り出したテラス部が確認できる。

Kピット、ベッド状遺構、ピット列等、その他の施設は確認していない。

床は貼床である。

掘方は、北東隅、北西隅、南東隅に不整形ではあるが方形の土壙があり、さらに、各土壙と南西隅をめぐるように馬蹄形の溝が切られている。炉が位置する部分は、平らに整えられている。凹字形の掘方の亜種と捉えることができよう。掘方の最深部は、床面から約15cmの深度である。

SK32

SK32は、長方形を呈する土壙である。

SK32の法量は、東西2.0 m、南北1.1 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙底部には平坦面が造られ、北西隅、南側壁際に小ピットが穿たれている。

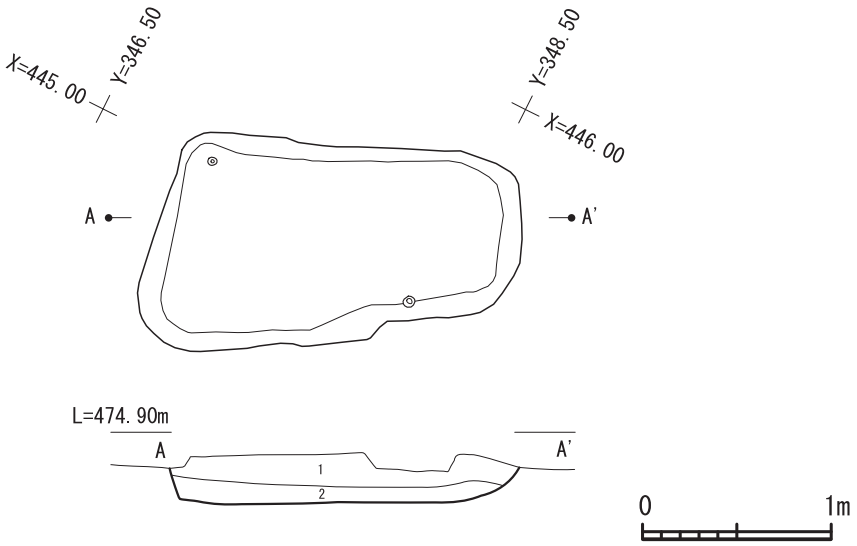
SK33

SK33は、長方形の土壙である。東側では多量のベンガラが検出された。土壙とベンガラを併せてSK33と認識している。

SK33の法量は、土壙は東西1.5 m、南北1.0 m、遺構確認面からの深さ25cmを測り、ベンガラの範囲は東西1.0 m、南北1.4 m、厚さ5cmを測る。

土壙底部には平坦面が造られ、2基のピットが穿たれている。土壙の東側には土壙よりひと回り広い範囲でベンガラが検出された。ベンガラの分布は土壙の外形をたどるようであり、その上位には高坏が伴っている。

プラン検出時には墓壙と想定し、調査を進めたが、土層断面を縦横に観察しても木棺等の痕跡を認識する



1　埋1a層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　土器片を含む
2　埋1b層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　暗黄褐色シルトがブロック状に混じり始める

図108　SK32（1/40）

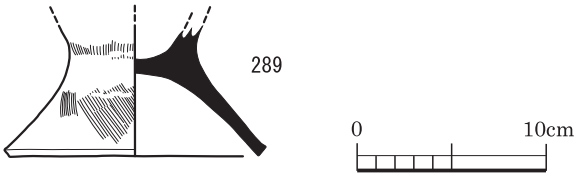


図109　土器（RP）実測図（SK32）

ことができなかった。

SK34

SK34は、正方形を呈する土壙である。

SK34の法量は、東西1.5ｍ、南北1.5ｍ、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙底部は2段の構造をもち、1段目には土壙外形と同様に正方形を呈する平坦な床面が形成されている。2段目には不整形土壙が穿たれ、その内部の南北にピットが形成された構造である。1段目が使用時の土壙であり、2段目は土壙の築造過程を示している可能性がある。

SK35

SK35は、円形を呈する土壙である。

SK35の法量は、東西0.9ｍ、南北1.1ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造られている。

SK36

SK36は、正方形を呈する土壙である。

SK36の法量は、東西1.6ｍ、南北1.4ｍ、遺構確認面からの深さ25cmを測る。

土壙底部には平坦面が造られている。

SD37

SD37は、条溝である。

SD37の法量は、東西2.9ｍ、南北0.5ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

SK38

SK38は、長方形を呈する土壙である。

SK38の法量は、東西1.0ｍ、南北0.7ｍ、遺構確認面

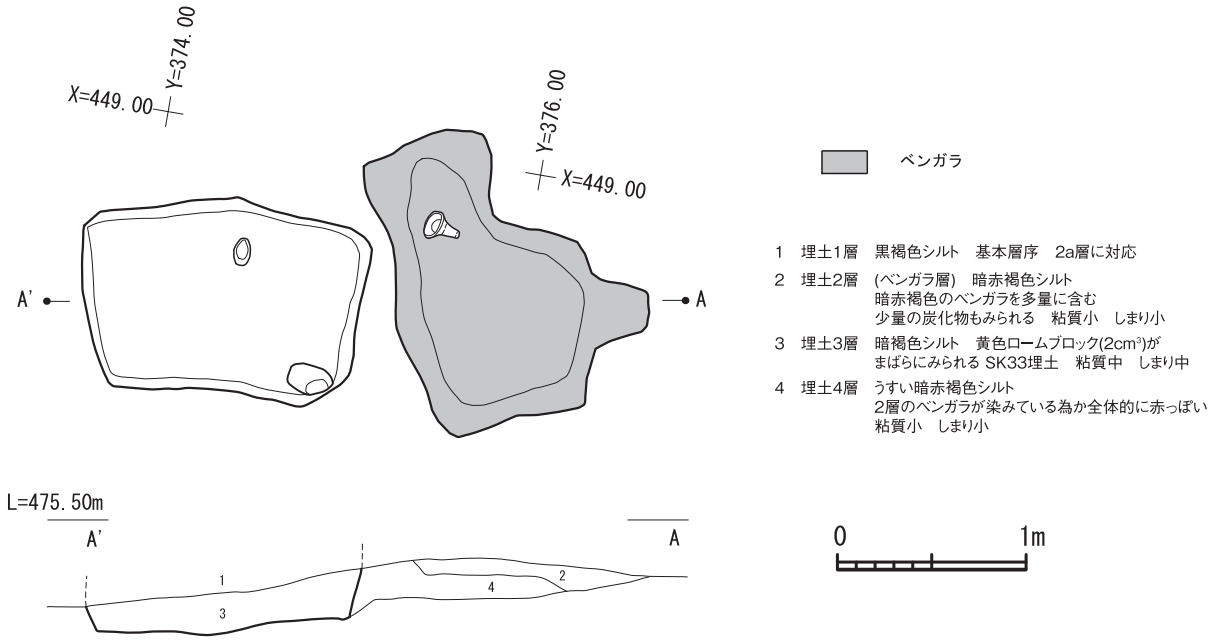


図 110 SK33（1/40）

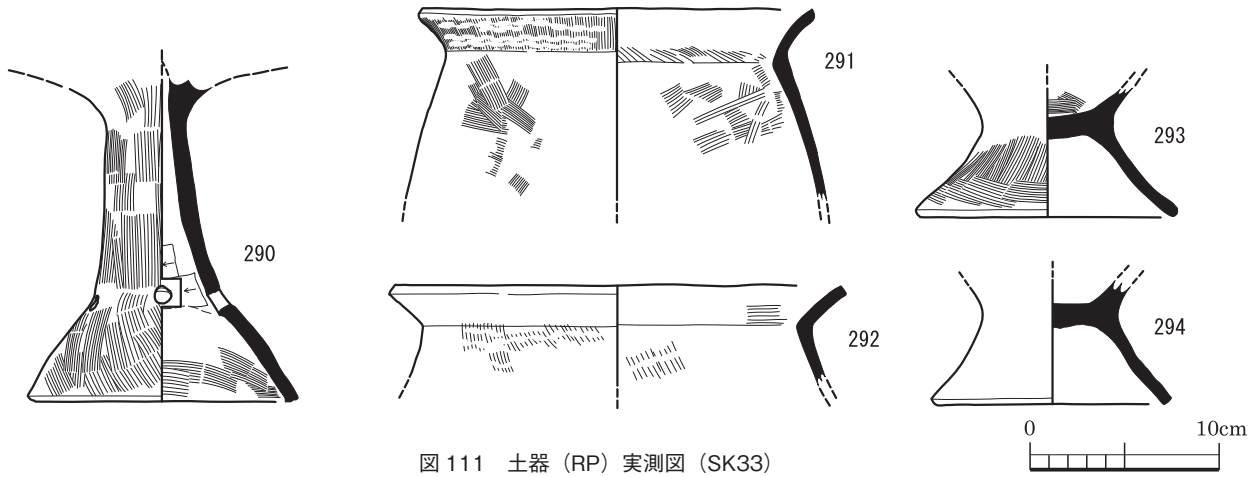


図 111 土器（RP）実測図（SK33）

からの深さ40cmを測る。

土壙底部は2段の構造をもち、1段目には土壙外形と同様に長方形を呈する平坦な床面が形成されている。2段目には長軸に沿って2基のピットが形成された構造である。1段目が使用時の土壙である可能性が高いが、SK38 全体が大きな柱穴となる可能性も存在する。

SD39

SD39は、条溝である。

SD39の法量は、東西2.1 m、南北0.8 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

その南端にはピットが穿たれている。

SK40

SK40は、長方形を呈する土壙である。

SK40の法量は、東西1.0 m、南北1.9 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙底部には平坦面が造られ、北東隅、南西隅にピッ

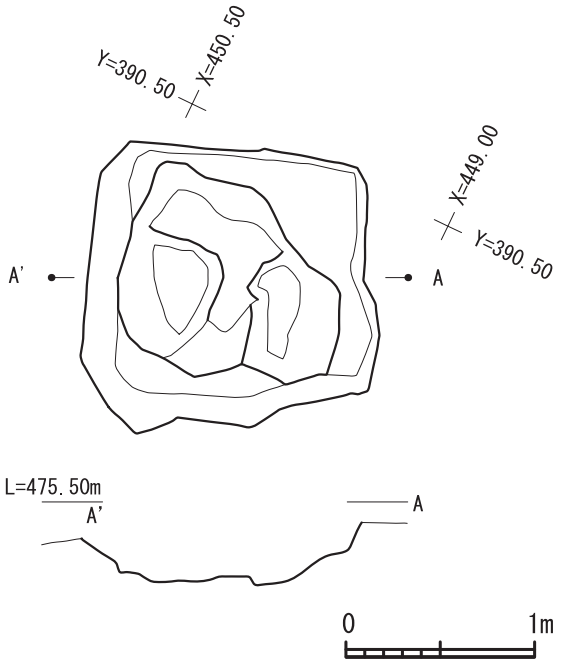


図112　SK34（1/40）

図113　土器（RP）実測図（SK34）

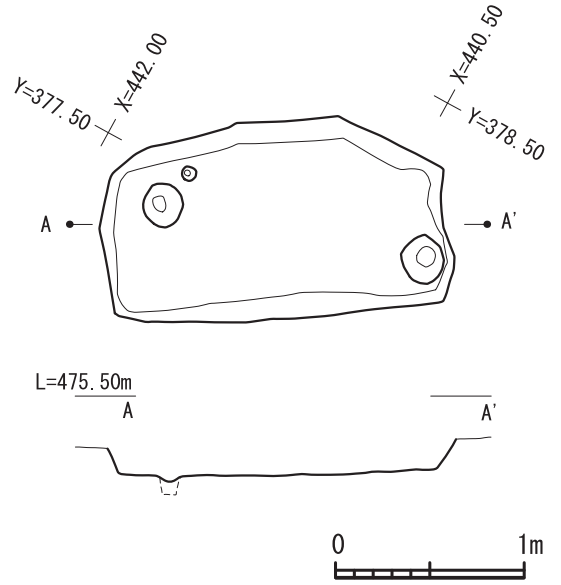


図114　SK40（1/40）

図115　土器（RP）実測図（SK40）

トが穿たれている。

SK43

SK43は、長方形を呈する土壙である。

SK43の法量は、東西1.2ｍ、南北0.7ｍ、遺構確認面からの深さ15cmを測る。

土壙底部には平坦面が造られ、南西隅にピットが穿たれている。

その他

下扇原遺跡2区では、遺構番号41、42を欠番とした。

なお、包含層等から出土した遺物を一括して掲載した。

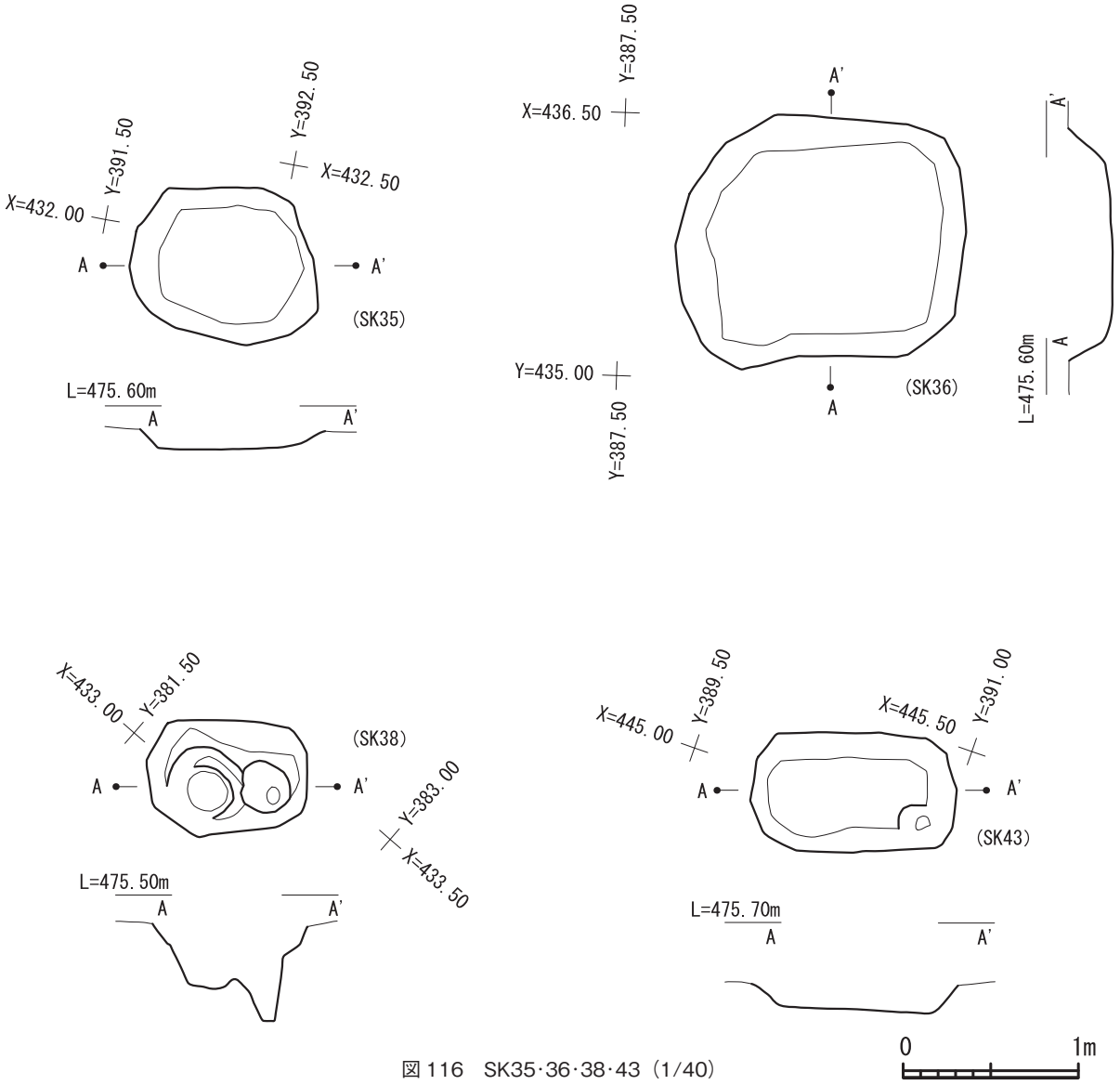


図116　SK35･36･38･43（1/40）

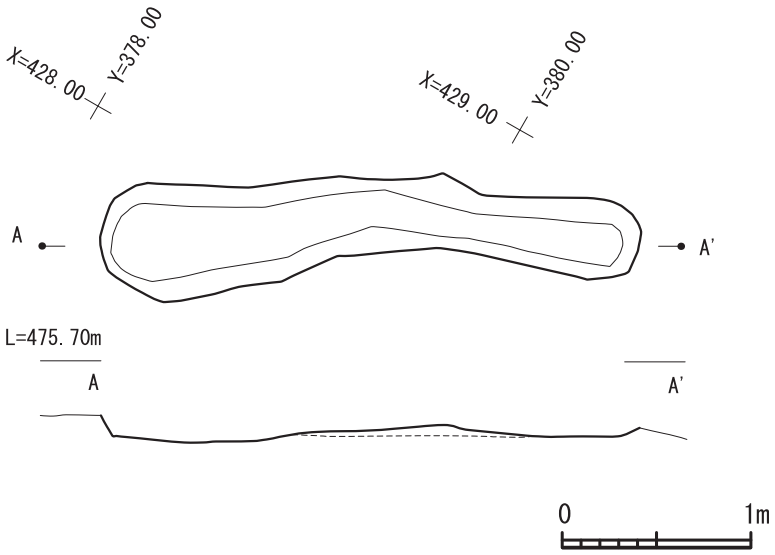


図 117　SD37（1/40）

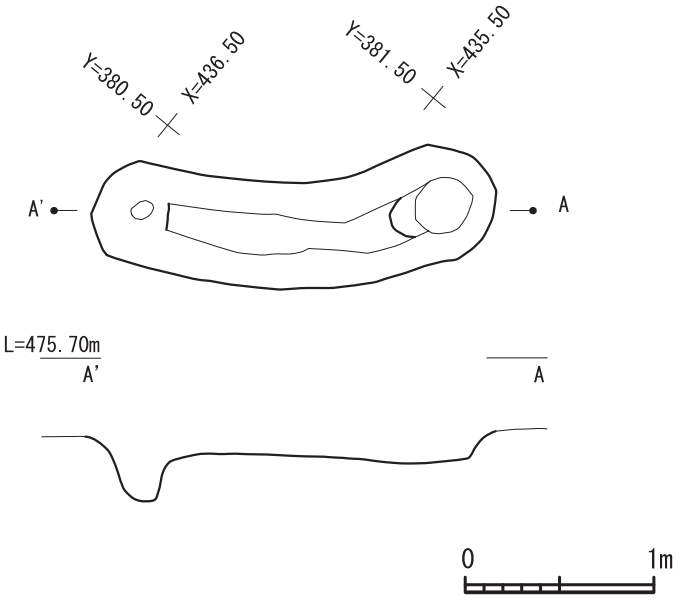


図 118　SD39（1/40）

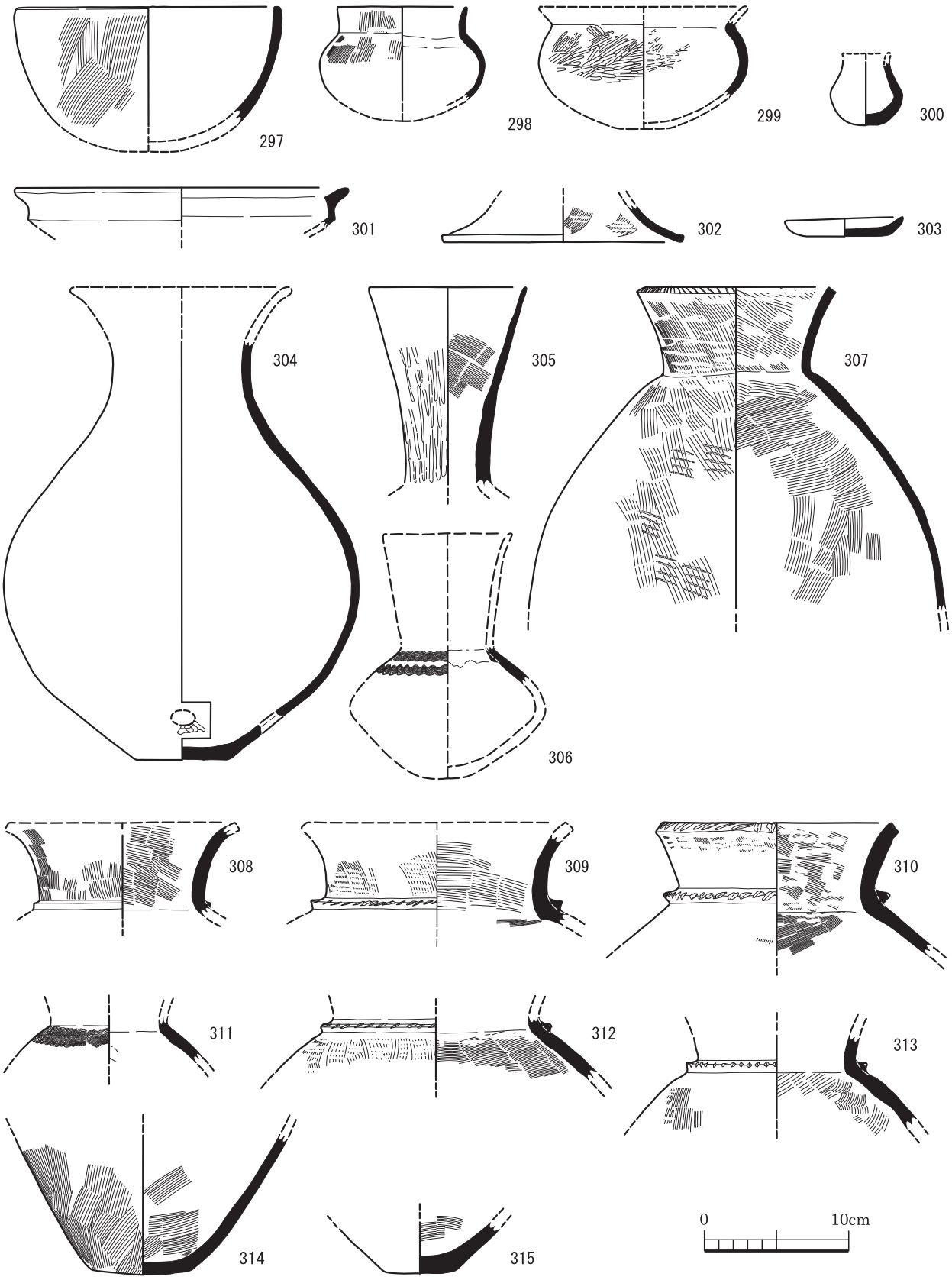


図 119　土器（RP）実測図（2 区一括）

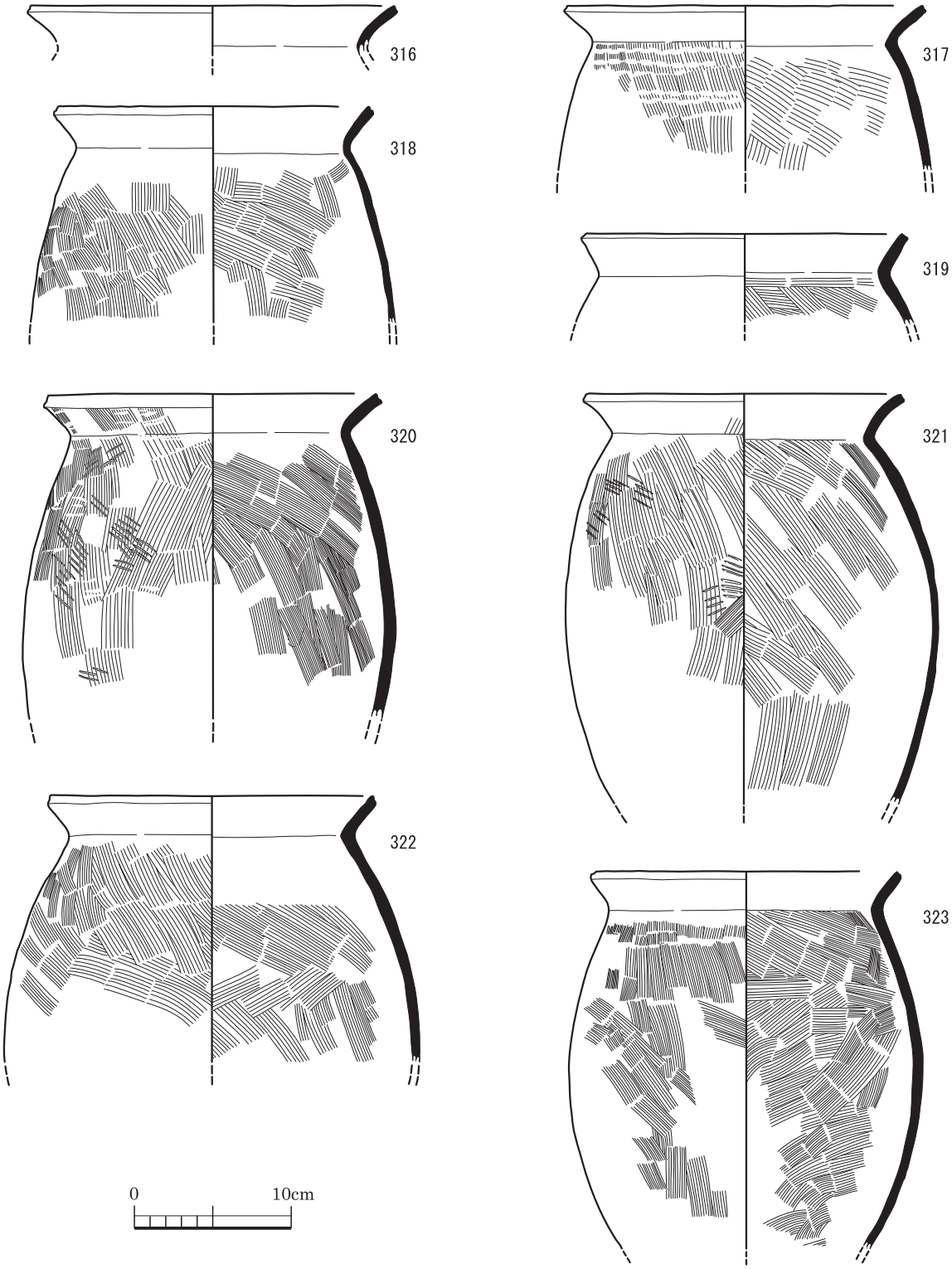


図 120　土器（RP）実測図（2 区一括）

図 121　土器（RP）実測図（2 区一括）

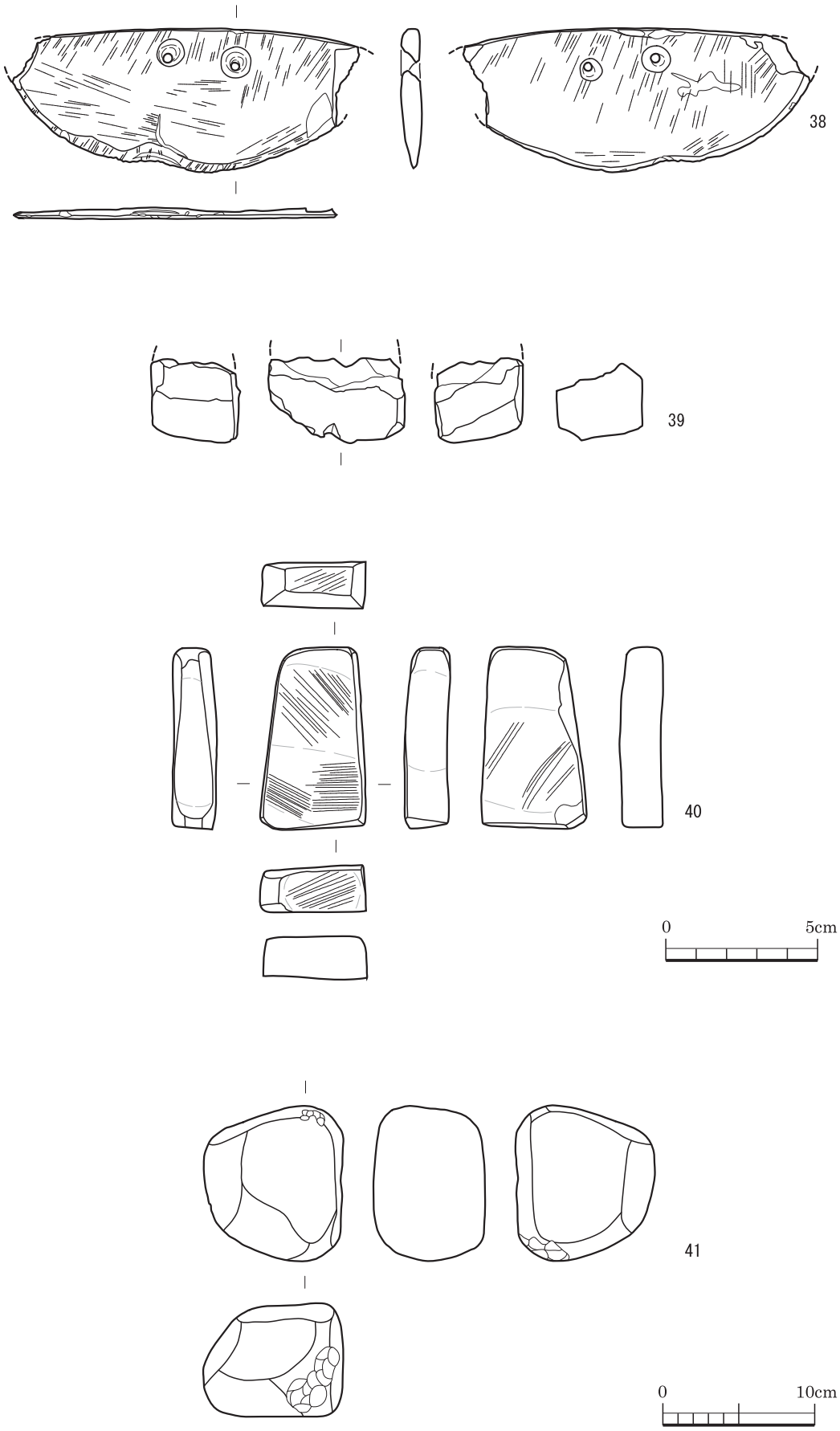


図 122　石器（RQ）実測図（2 区一括）

2－3　下扇原遺跡３区の調査

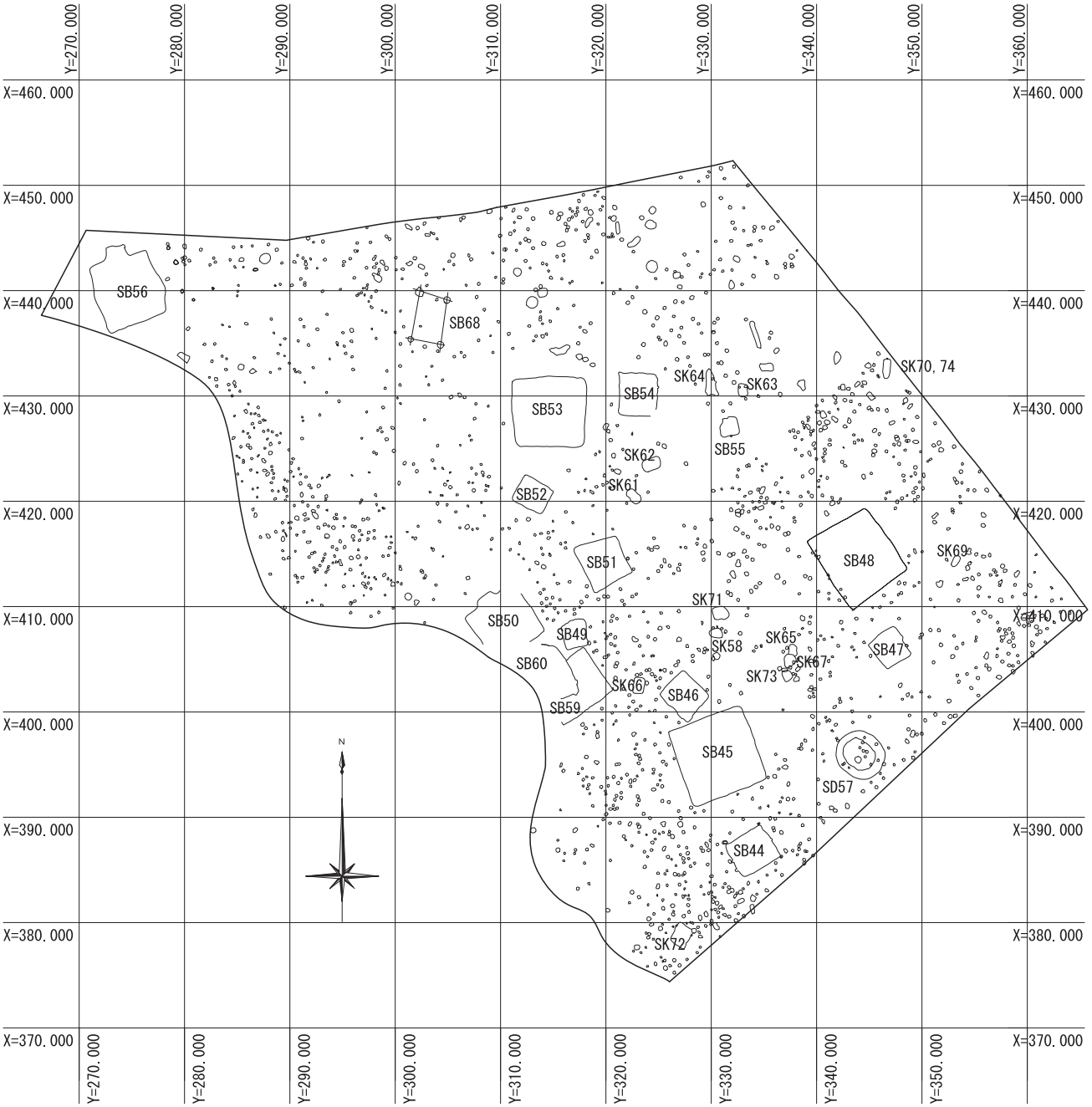


図 123　下扇原　３区遺構配置図（1/600）

SB44

SB44は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB44の法量は、南北3.6 m、東西4.1 mを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられている。竪穴住居の西側壁、東側壁にも同様の位置にピットが確認できたが、その深さは竪穴住居の掘方底面と同じ深度であり、主柱穴との較差が大きい。両主柱穴を結ぶライン上には南北2箇所に硬化面が形成されている。

炉は、南北70cm、東西40cmの方形を呈し、深さは10cmである。炉は、両主柱穴を結ぶライン上に位置し、

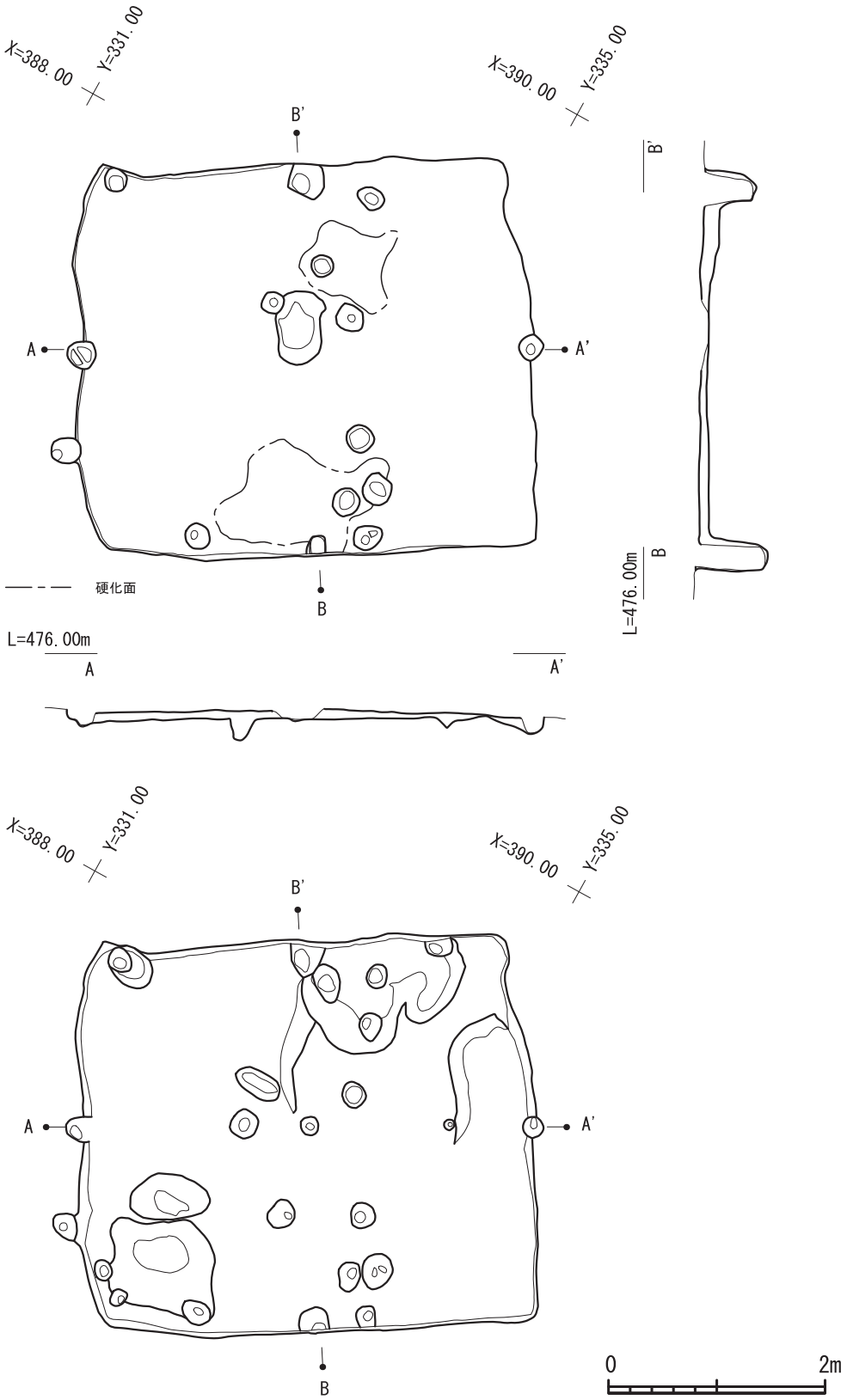
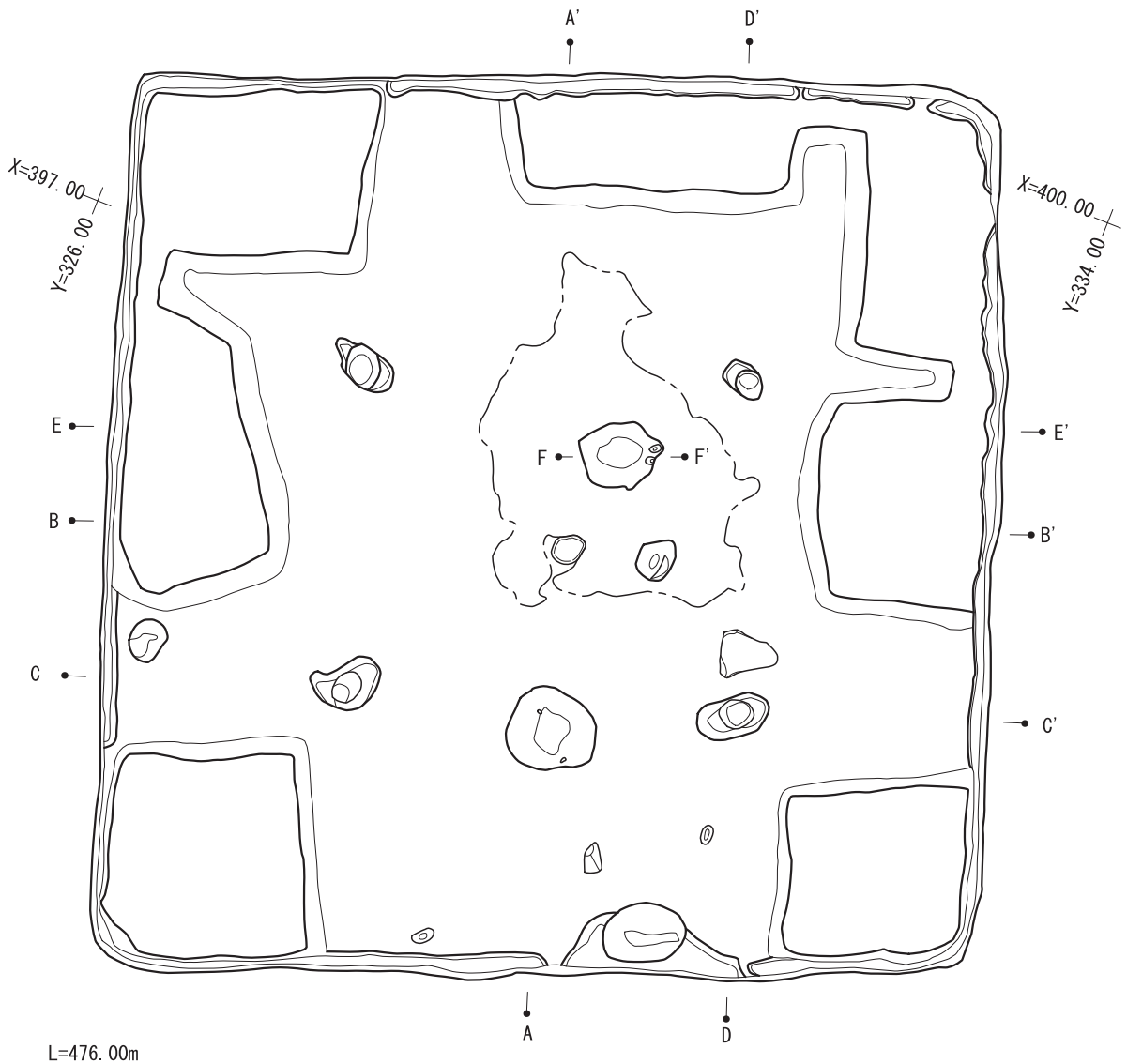
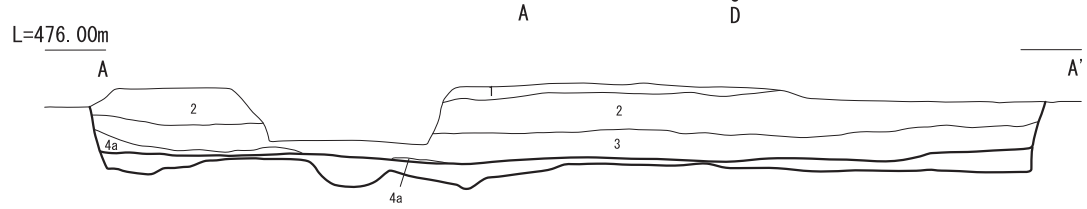
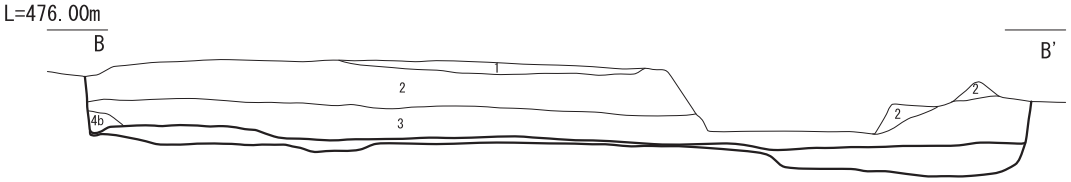


図 124　SB44（1/60）







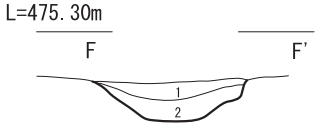
(A・B 断面)

1　埋土1層　粘質小　しまり小　1cm大の黄褐色ロームブロックがまばらにみられる 炭化物も極少量含む　(2a層で検出)

2　埋土2層　粘質中　しまり中　1～5cm大の黄褐色ロームブロックが1層よりも多くみられる　炭化物・ベンガラが確認された

3　埋土3層　粘質中　しまり中　1～5cm大の黄褐色ロームブロックが2層よりも多くみられる　炭化物・ベンガラが2層より多く確認された

4　4a層　暗褐色シルト　粘質小　しまり小　多量の炭が混じる黒色土を含む　焼土粒がみられる



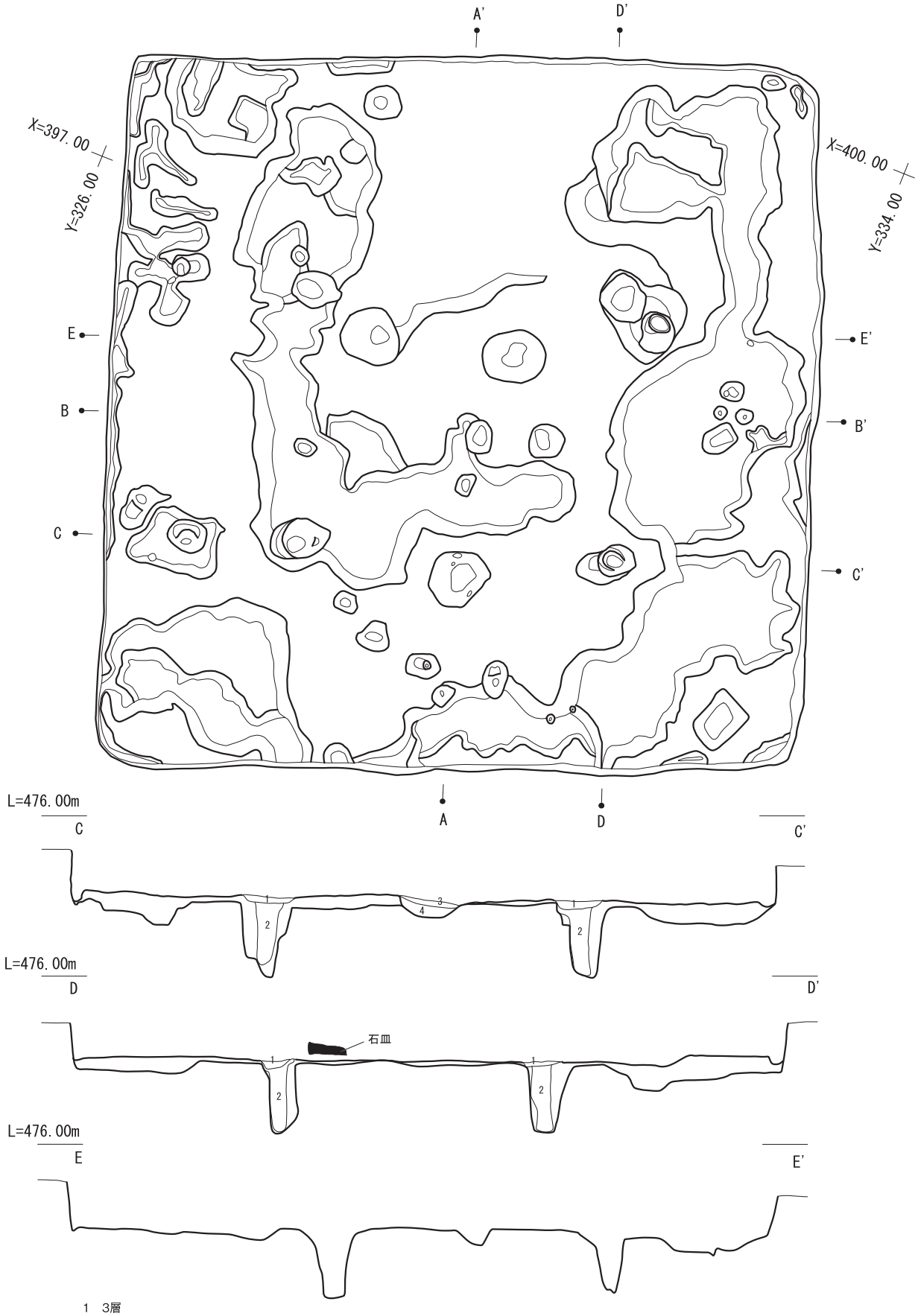
(S=1/30)

(F 断面)

1　住居埋土3層

2　南炉に比べ焼土粒が少ない　オリーブ色のローム塊を含む

図 125　SB45 床面（1/60）



1　3層
2　暗褐色シルト　住居埋土3層より若干明るい　しまり弱　粘質中　3cm大のロームブロック及び少量の炭が混入
3　住居埋土3層
4　炉埋土　黒色シルト　ふかふかしており粘性なし　多量の炭混入　焼土粒少量

図 126　SB45 掘方（1/60）

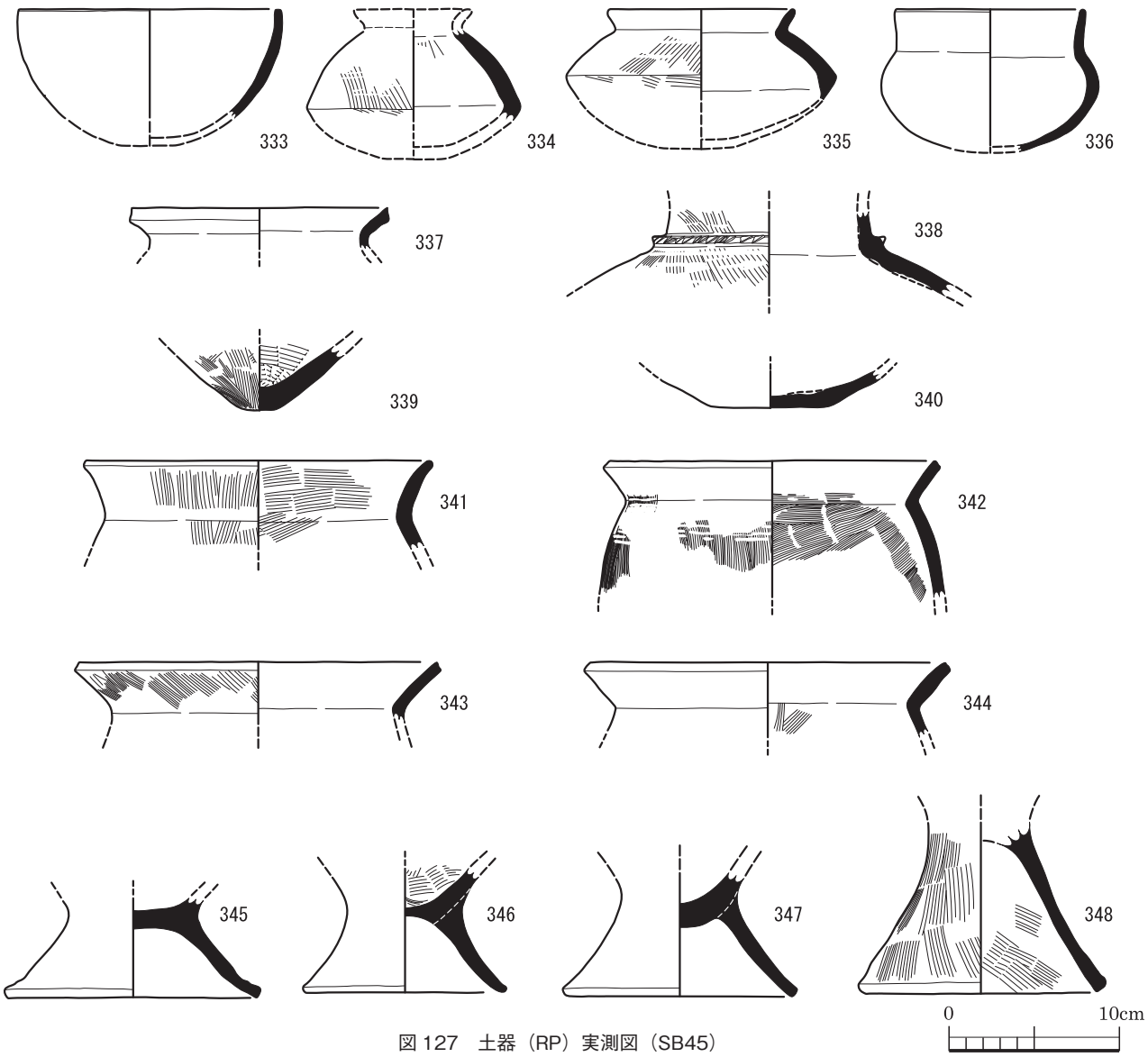


図 127　土器（RP）実測図（SB45）

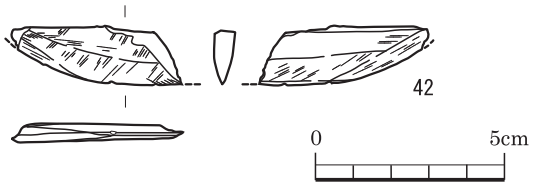


図 128　石器（RQ）実測図（SB45）

竪穴住居の中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられているが、その中心は炉の北半部に位置する。炉の内壁は、南側に向かって緩やかに上っている。

Kピット、ベッド状遺構は確認していない。

床は貼床である。

掘方は、南西隅に方形の土壙を掘削し、北側壁際には不整形の土壙、東側壁に沿って浅い溝を切っている。炉が設けられる部分は掘削されず、他の部分と併せて、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB45

SB45は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。2基の炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB45の法量は、南北7.6 m、東西7.6 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。なお、南西主柱穴からは鉄製品が多量に出土している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側に硬化面が形成されている。

炉は、2基確認した。以下では、その位置により南炉、北炉と記述する。炉内の炭化物は、南炉のほうが北炉より多い。北炉は炭化物、焼土に混じり、オリーブ色

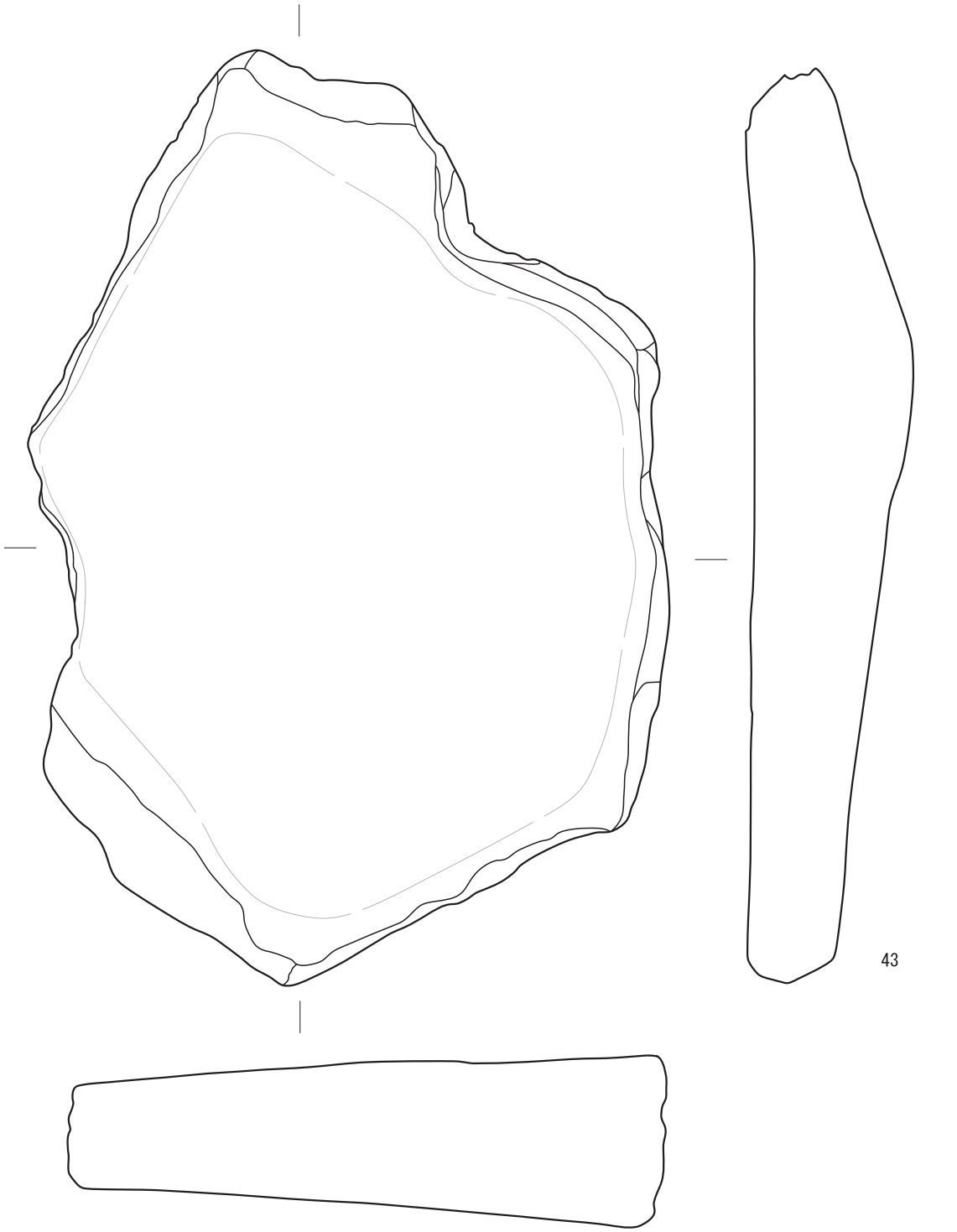
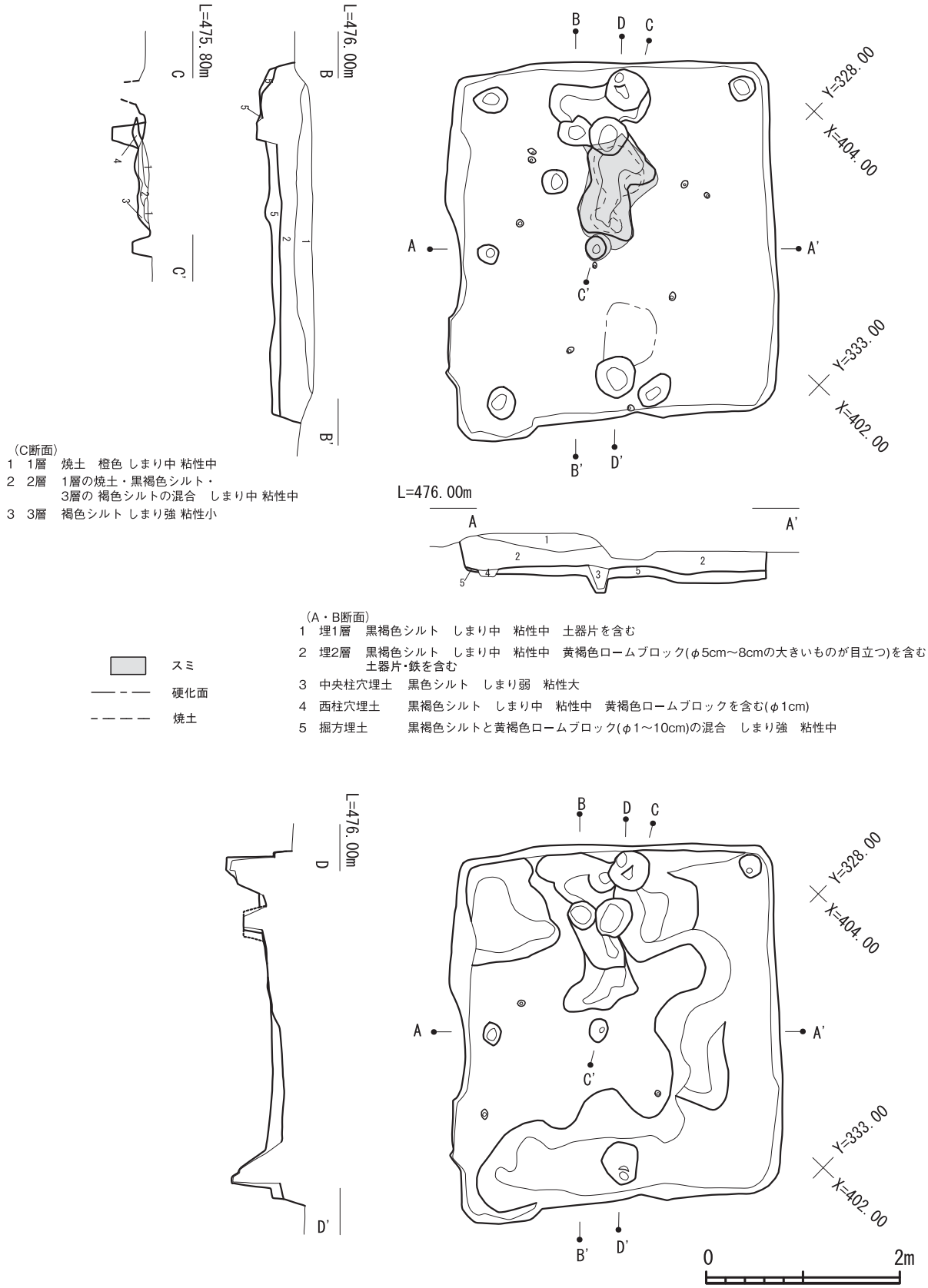


図 129　石器（RQ）実測図（SB45）



（C断面）
1　1層　焼土　橙色 しまり中 粘性中
2　2層　1層の焼土・黒褐色シルト・
　　3層の 褐色シルトの混合　しまり中 粘性中
3　3層　褐色シルト しまり強 粘性小

（A・B断面）
1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　土器片を含む
2　埋2層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ5cm～8cmの大きいものが目立つ)を含む
　　土器片・鉄を含む
3　中央柱穴埋土　黒色シルト　しまり弱　粘性大
4　西柱穴埋土　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロックを含む(φ1cm)
5　掘方埋土　黒褐色シルトと黄褐色ロームブロック(φ1～10cm)の混合　しまり強　粘性中

スミ
硬化面
焼土

図 130　SB46（1/60）

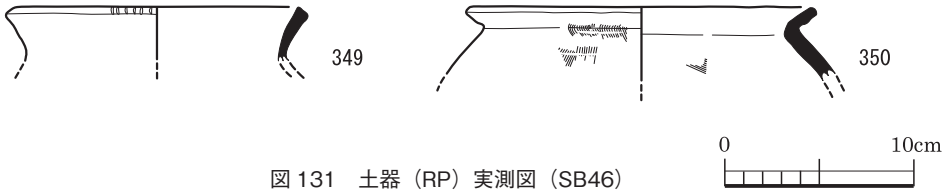


図 131　土器（RP）実測図（SB46）

のローム塊も含んでいる。

南炉は、南北70cm、東西70cmの円形を呈し、深さは20cmである。各主柱穴を結ぶ内陣の南辺上に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高さながらも周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、緩やかな斜面として形成され、床面との境界を明確に区分することはできない。炉の外形は若干膨らんだ方形と捉えることも可能であるが、ここでは円形とした。

北炉は南北70cm、東西60cmの円形を呈し、深さは70cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の中に位置しているが、他の主要な施設と明瞭な関係性を導き出すことができない。北炉の南には2基のピットが東西方向に並んで存在するが、その用途を定めることはできない。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。炉内東側には小ピットが2基穿たれているが、この周囲に平坦面が形成されているため部分的な2段掘りの様相を呈している。反対側の西側炉壁は、緩やかに上っている。

KピットとKピットの柱穴は、使用段階の調査では把握することができなかった。竪穴住居の床面は、南炉から南側壁際までなだらかに低まっていくが、明瞭な土壙を検出していない。北炉の延長線上に浅い土壙を認めたものの、柱穴を伴わない土壙である。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられている。各ベッド状遺構の中間には西側壁、北側壁、東側壁に沿ってベッド状遺構が設置され、さらに、北西隅と西側壁中間のベッド状遺構、北側壁中間と北東隅と東側壁中間のベッド状遺構は狭小なベッド状遺構によって連接されている。側壁際には、側壁溝がめぐる。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

南東主柱穴の北では、石皿1点が検出された。この石皿は床面から10cm程上位で検出されているため、使用時の位置を示していない。併せて、主柱穴を結ぶライン上に位置することから、石皿は当該位置に据え置かれたものと判断する。なお、南東グリッドからは極少量のベンガラが検出されている。

掘方は、2段階に整理することができる。

まず、竪穴住居の北東隅を基点として竪穴住居の南西主柱穴まで至る正方形を想定する。この正方形の東辺、西辺、南辺に沿って溝が切られている。正方形の北東隅、南東隅には方形の土壙が位置しており、北西隅、南西隅にも小ぶりではあるが長方形の土壙を見出すことができる。北辺には溝が切られていないため、これらの溝と土壙は凹字形の掘方を形成している。これを掘方１としたい。

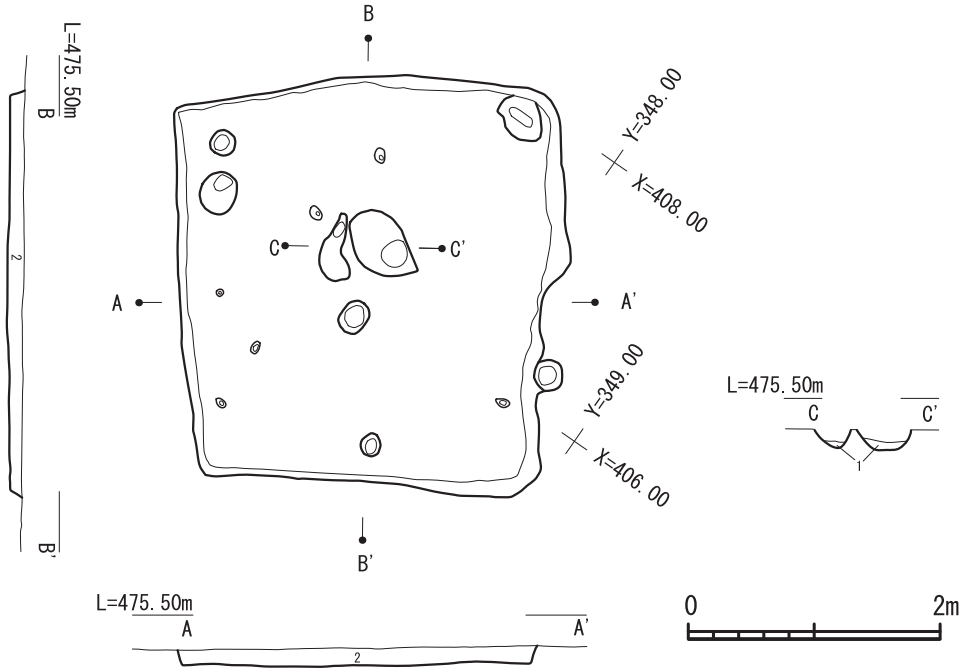
次に竪穴住居の平面形（外形）を想定する。先述の掘方1を拡大するように、南東隅から南側壁中央まで溝が切られ、南西隅には方形の土壙が掘削される。北西隅には小規模ながら方形の土壙が掘削され、さらに不整形の土壙群が西側壁に沿って設けられる。結果として、竪穴住居の外形に対応して、もう一つの凹字形の掘方が形成されている。こちらは掘方2としたい。

掘方1の範囲において、北炉の位置は有意性を帯びる。掘方1においては、その中心に北炉は位置し、東西には主柱穴が備わる。北炉の南に位置した2基のピットは、その南の溝の一部（長方形の土壙となろう）と複合してKピットとなる。以上により、掘方1の範囲に2本柱建て竪穴住居跡を認めることが可能となった。

掘方2の範囲は、南炉の位置と整合する。南炉の両端に対応して東西に並ぶ2基の柱穴が検出され、その南側には不整形ながら長方形の土壙が存在する。これらは南炉に対応したKピット（の掘方）である。

以上からSB45は増築がなされた竪穴住居と判断され、その変化は、掘方1から掘方2への構造変化で追うことができよう。

なお、竪穴住居の使用段階の調査で検出された硬化面は、掘方1との整合性が高い。しかし、掘方2に対応



1　炉埋土　明赤褐色シルト　しまり小　粘質小　分層するほどではないが、下の方に焼土が多くみられる　炭化物も含む
2　埋土1層　黒褐色シルト　しまり中　粘質中　極少量の黄褐色ロームブロック(1cmほど)、少量の炭化物を含む

図 132　SB47（1/60）

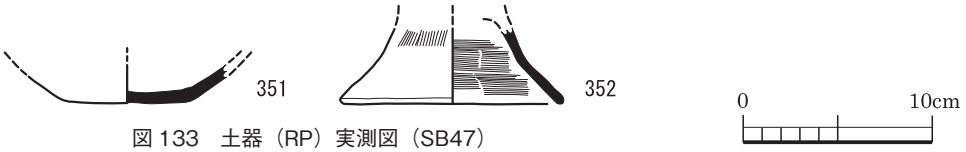


図 133　土器（RP）実測図（SB47）

した段階において、北炉の延長線上に浅い土壙が認められること、北炉自体がSB45の埋3層によって埋没したこと、検出時に他の施設と同様に認知されたこと等から、掘方2の段階においても北炉は使用されていた、と判断する。

SB46

SB46は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB46の法量は、南北3.7 m、東西3.4 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

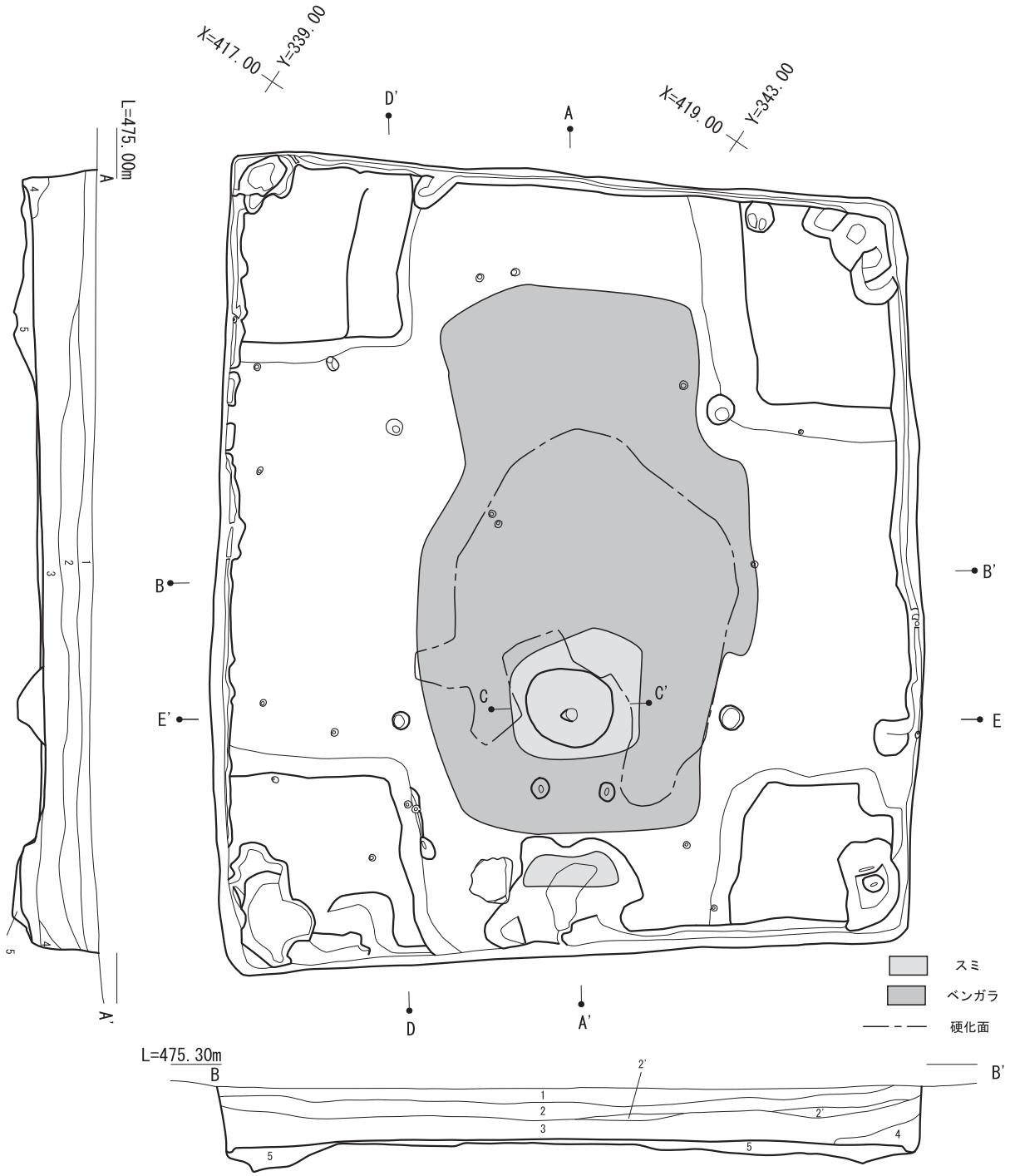
主柱穴は、2基検出した。両主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられ、ともに内傾している。南主柱穴の北側には座布団程度の範囲に硬化面が形成されている。なお、南西隅、北西隅、北東隅にはピットが存在するが、浅いため柱穴とは判断できない。

炉は、南北110cm、東西70cmの不整形な楕円形を呈し、深さは10cmである。炉は、両主柱穴を結ぶライン上に位置し、竪穴住居の北半部に位置している。炉の北端、南端には小ピットが複合する。炉底はボウル形に掘りくぼめられた底が2基連接した状況であり、焼土も2基の「ボウル形の炉底」に対応した分布を示している。

Kピット、ベッド状遺構は確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、北西隅に方形の土壙を掘削し、東辺、南辺に沿ってL字形に溝を切っている。炉が配置される部分では、楕円形の土壙が2基、切り合う状況を呈してい



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームの粒(1cm以下)わずかに含む　炭もわずかに含む　遺物…土器・石器・鉄

2　埋2a層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(1cm～3cm)を含む　炭を含む　遺物…土器・鉄

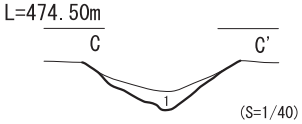
2'　埋2b層　黒褐色シルト(埋2a層よりも黒味が強い)　しまり中　粘性大　黄褐色江ロームブロック(1cm～3cm)を含む
炭(手の中指の1関節部分くらいの大きさ)をたいへん多く含む

3　埋3層　暗褐色シルト(埋2a層よりも赤味が強い)　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(1cm～3cm)を含む炭を含む　遺物…土器・石・鉄

4　埋4層　灰色がかった黒褐色シルト　しまり弱　粘性大　黄褐色ロームブロック(1cm～5cm)を含む　大粒も目立つ
壁際のところどころに断面で見ると三角形に堆積　遺物…土器・鉄

5　掘方埋土　黒褐色シルトと黄褐色ロームブロックの混合

0　2m



1　炉埋土　暗褐色シルト・炭・黄褐色ロームブロック混合
炭は細かい(粉状)
全体的にしまり弱　粘性は炭(小)＜暗褐色シルト(大)

図 134　SB48 床面（1/60）

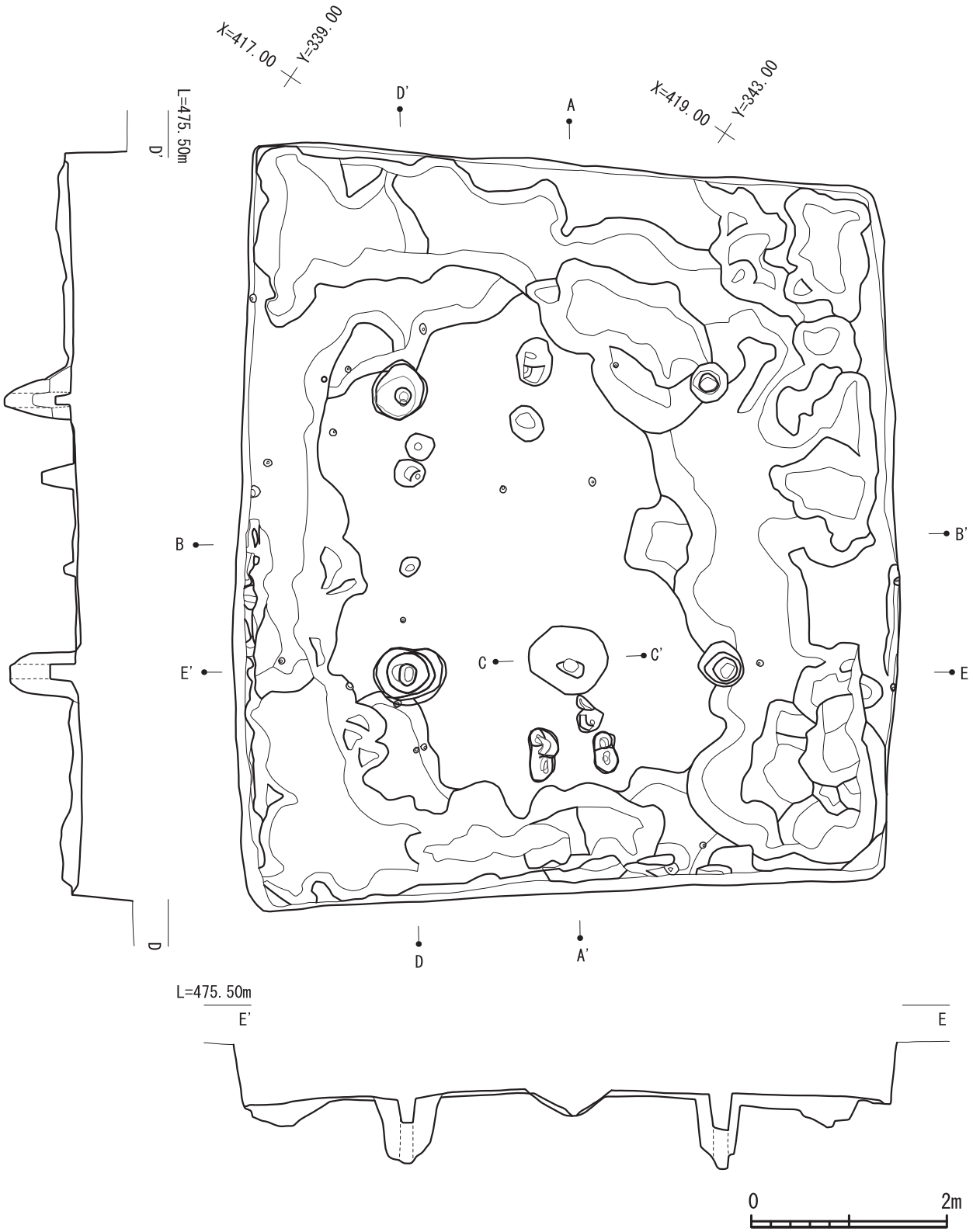


図 135　SB48 掘方（1/60）

る。その他の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

なお、SB46では鉄滓、ベンガラ滓が出土したため、埋土をすべて回収し水洗している。

SB47

SB47は、正方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。

SB47の法量は、南北3.2ｍ、東西3.0ｍを測る。

主柱穴は、確認していない。

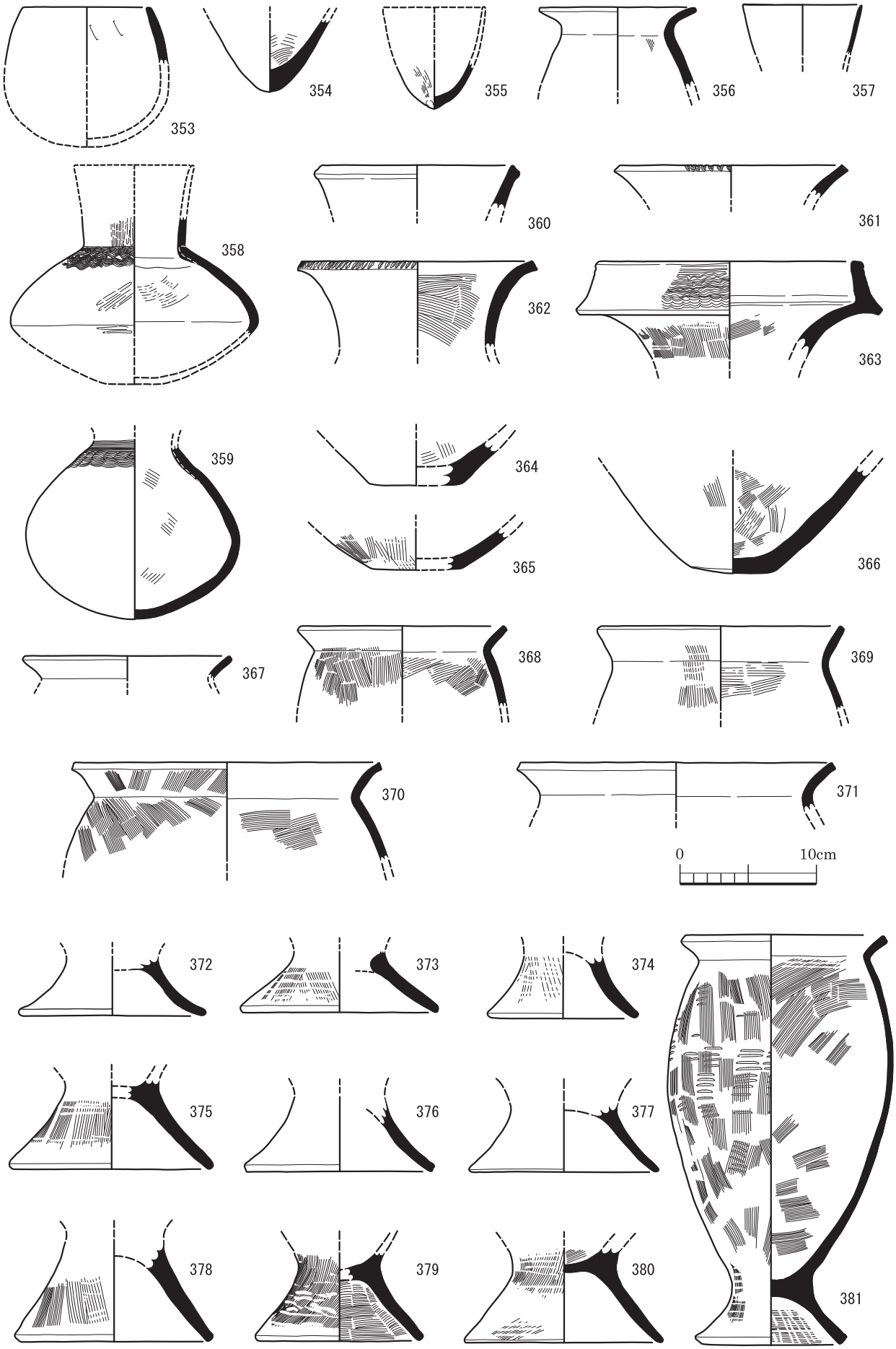


図 136　土器（RP）実測図（SB48）

図 137　石器（RQ）実測図（SB48）

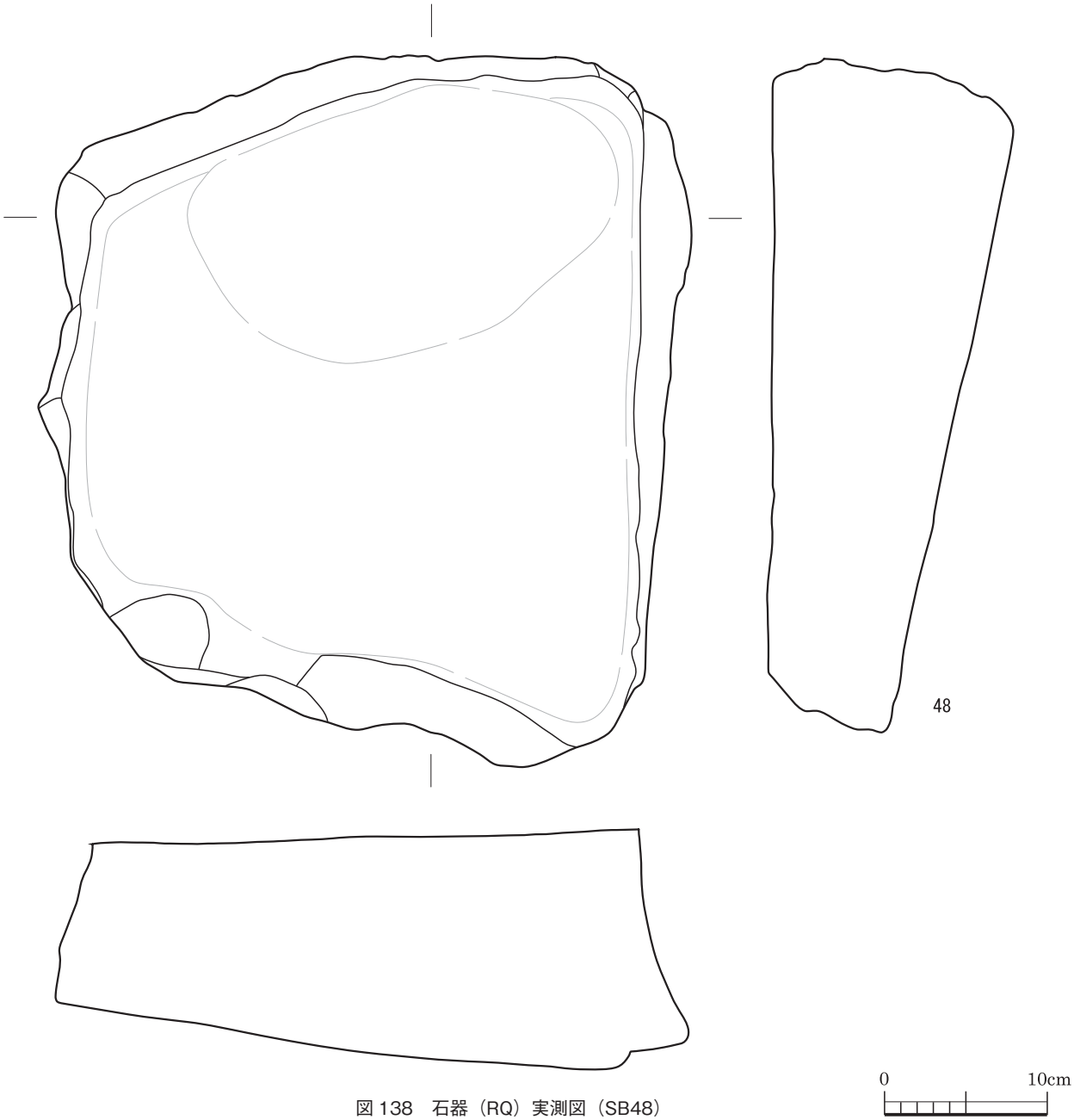


図 138　石器（RQ）実測図（SB48）

炉は、南北50cm、東西40cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は竪穴住居の中央に位置し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。この炉の西側に、炉埋土と同じ埋土をもち、炉の外形に沿った弧状の土壙が存在する。弧状の土壙底部は平坦面をもたない。

Kピット、ベッド状遺構は確認していない。

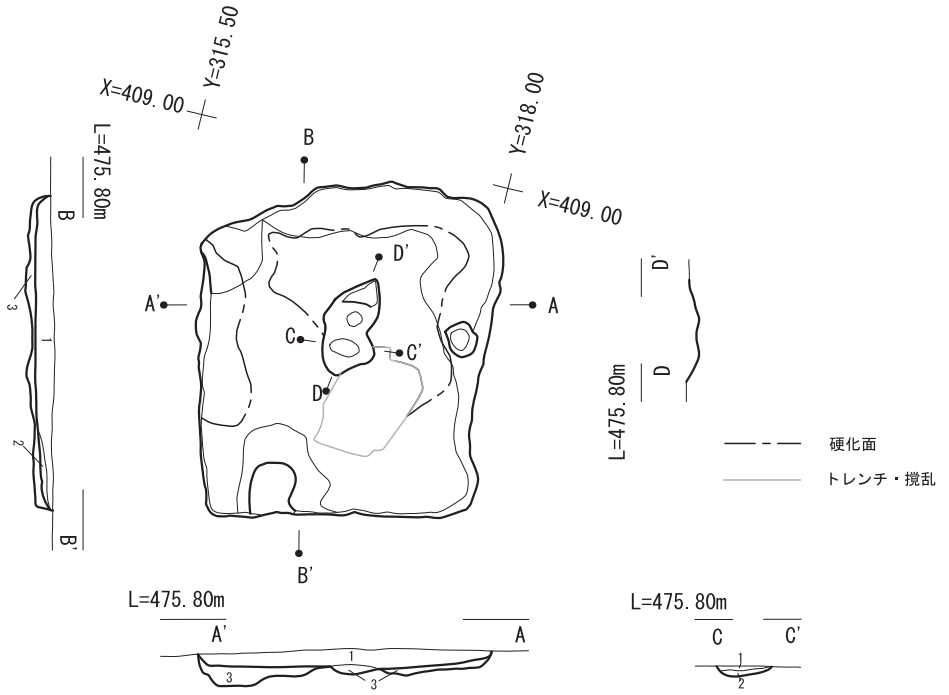
床は、基本土層が露出した「地山切出し」である。

SB48

SB48は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB48の法量は、南北7.7 m、東西6.7 m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。すべての主柱穴において柱痕跡を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側に



(A・B断面)

1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ5～10cm)を含む
また炭を含む　遺物…土器片

2　埋2層　褐色シルト　しまり強　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ1cm)を含む
南壁際にのみ出土

3　掘方埋土　黒褐色シルトと黄褐色ロームブロックの混合　混合比は黒：黄＝1：1
しまり強　粘性小

(C 炉断面)

1　炉埋1層　焼土(橙色シルト)・黒褐色シルト混合
しまり中　粘性中

2　炉埋2層　焼土(橙色シルト)　しまり強　粘性小

0　2m

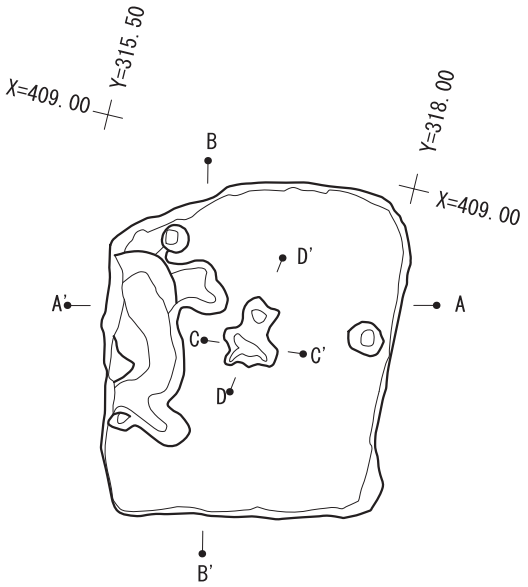


図 139　SB49（1/60）

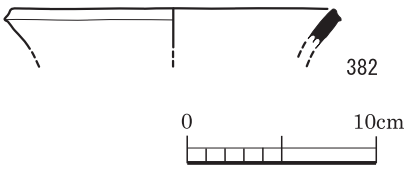


図 140　土器（RP）実測図（SB49）

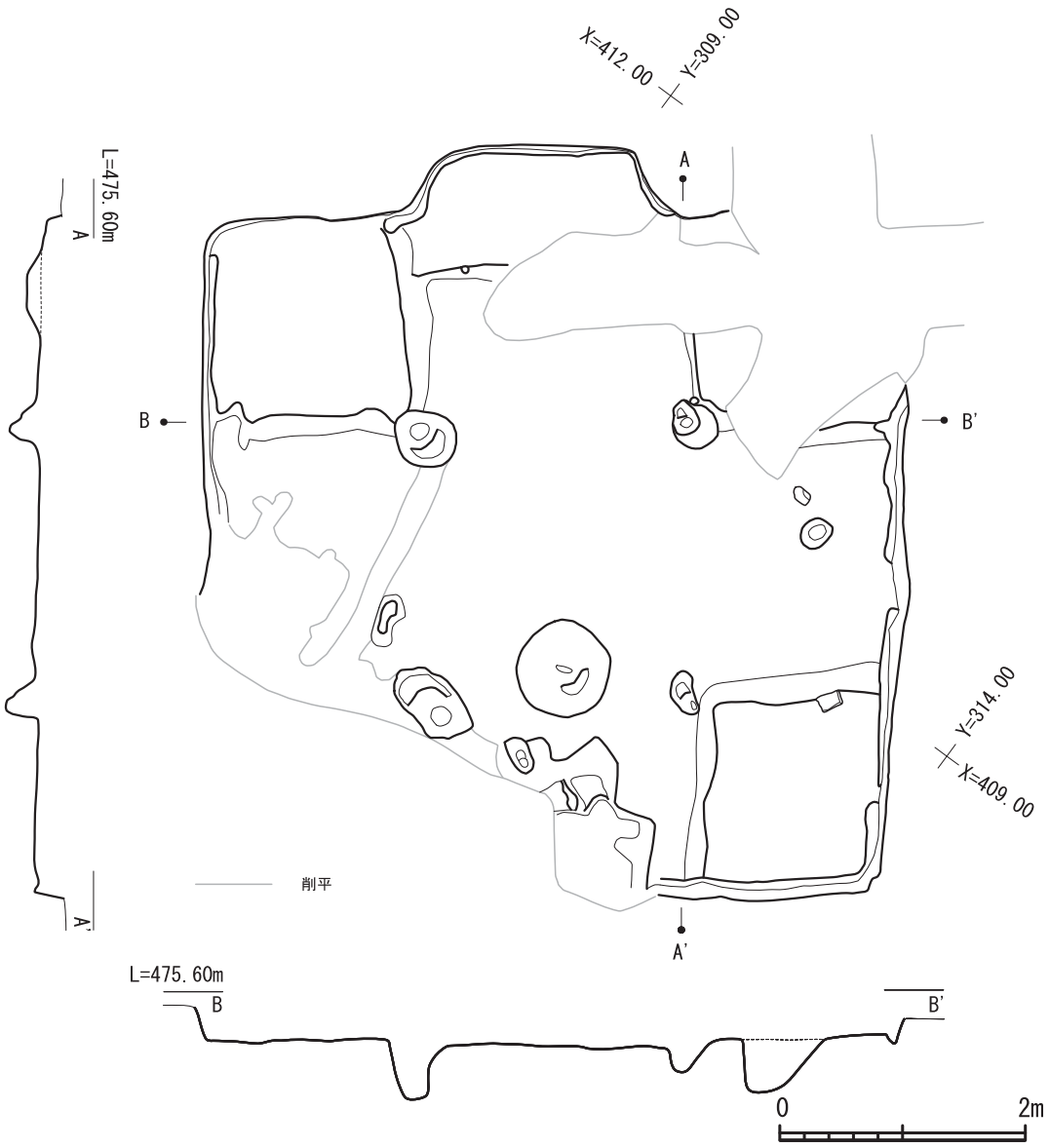


図 141　SB50（1/60）

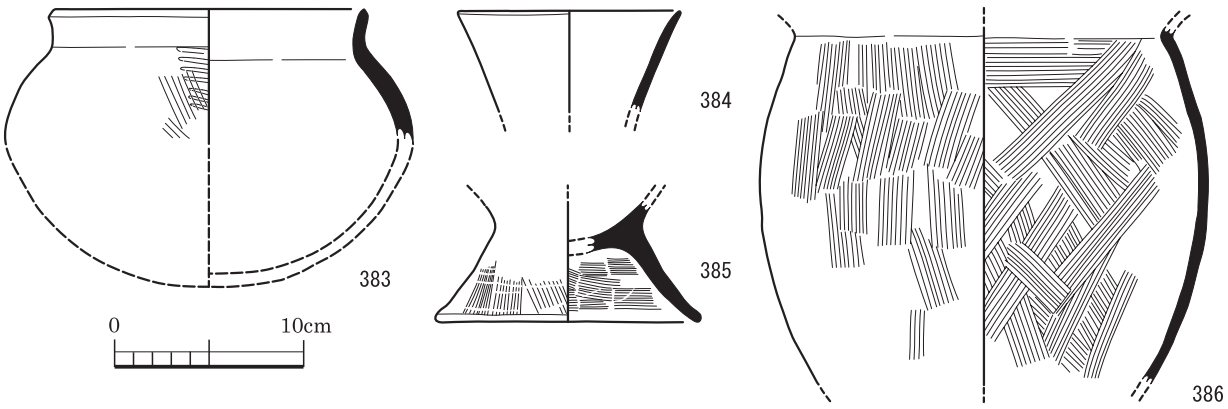


図 142　土器（RP）実測図（SB50）

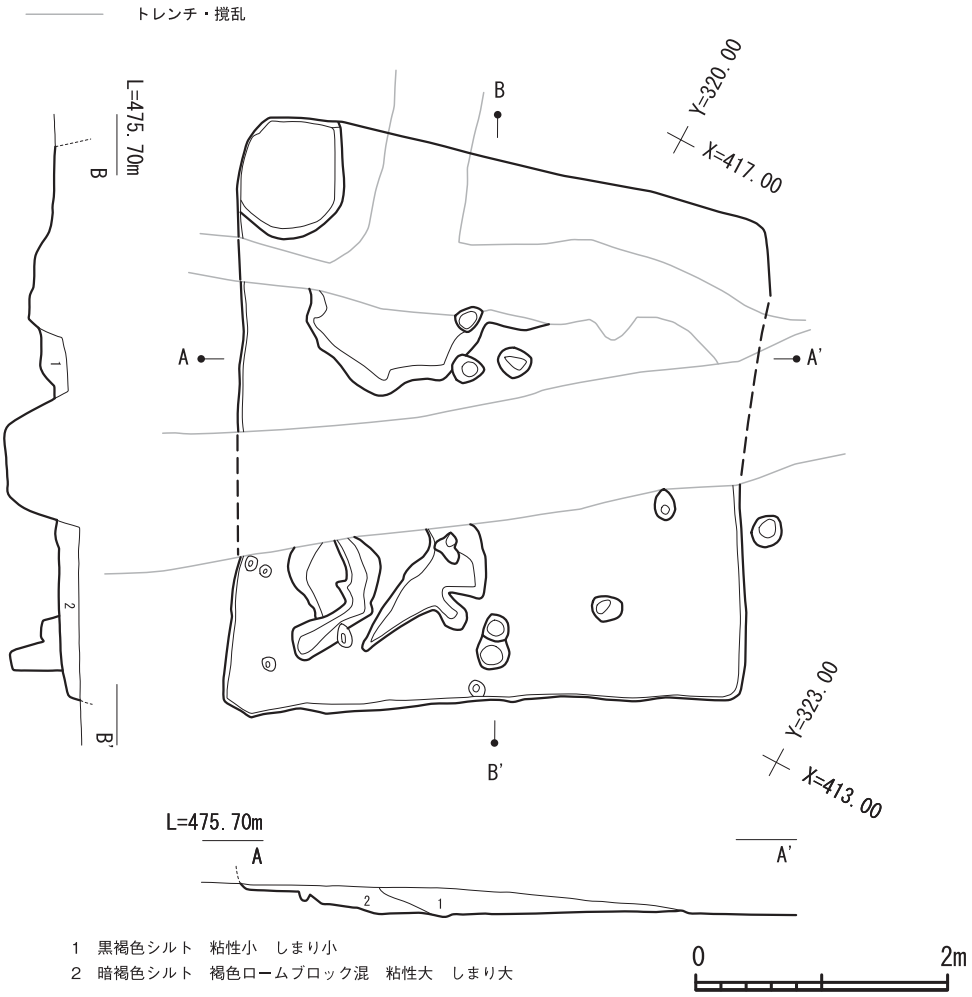


図143　SB51（1/60）

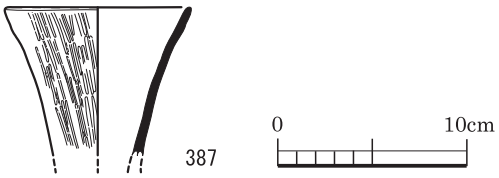


図144　土器（RP）実測図（SB51）

は概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、南半部では内陣の外にまで発達し、Kピット柱穴の横にまで及んでいる。

炉は、南北80cm、東西80cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高みながら周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、帯状の高まりではなく、内陣内の床面が炉に向かって緩やかに高まっている状態である。炉内西半部には段が形成され、炉底には小ピットが穿たれている。炉内東半部の内壁は緩やかに上っている。炉底の小ピット部分には炭が詰まり、その上層は炭、ロームブロックを含む暗褐色シルトである。

Kピットは方形を呈し、南側壁に接して竪穴住居の中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、西側辺には浅い掘り込みが複合して、2段掘りの状況となっている。Kピットの北側には、少し離れて、2基の柱穴が炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられている。いずれのベッド状遺構も外角部に土壙が複合し、北西隅のベッド状遺構に段差が存在する。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

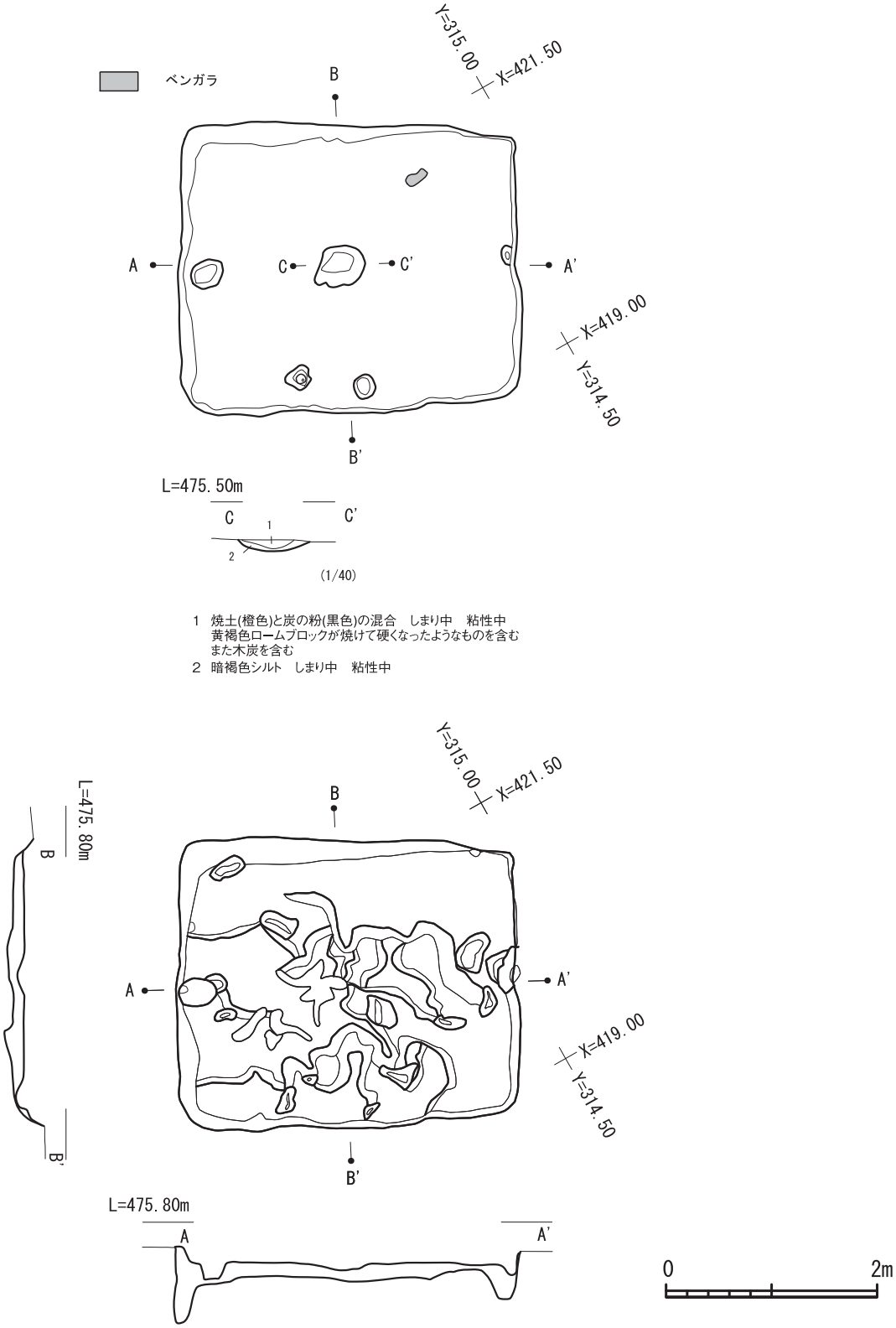


図 145　SB52（1/60）

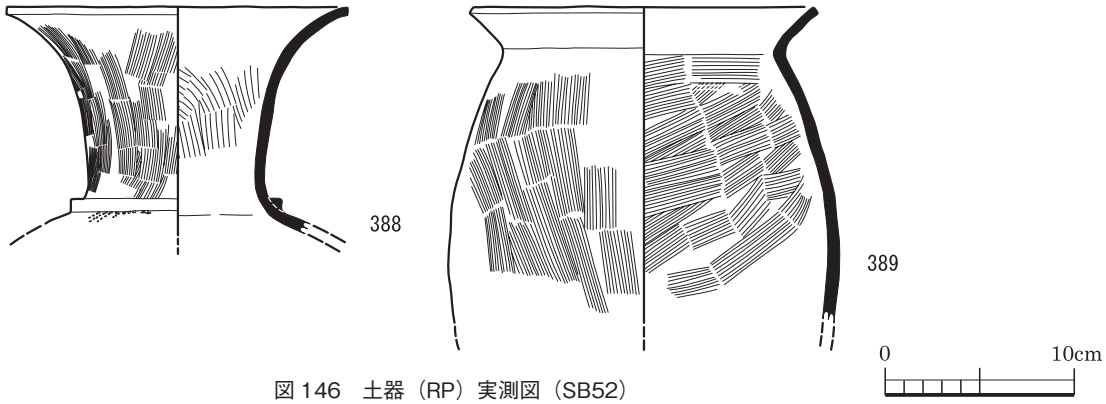


図146　土器（RP）実測図（SB52）

SB48では床面にベンガラが散布されていた。ベンガラは内陣を中心として散布されており、1cm程度、最大3cm程度の厚さである。その色調には較差があり、一般的には赤褐色のベンガラが散布されているが、所々、赤色の鮮やかなベンガラが直径20cm程度の範囲に凝集した状態が検出されている。炭化物は、炉の周囲とKピット北半部に集中している。Kピット西に位置する石皿は、床面から5cm程上位に位置し、埋3層、炭、ベンガラ、受熱したロームブロックがその下部に堆積していた。このことから石皿は、竪穴住居跡の廃絶に際し、当該箇所に据え置かれたものと判断する。

掘方は、2段階に整理することができる。

まず、西側壁の南半部と南側壁に接する掘方を観察すると、壁際に1段高いテラス部が形成されていることが判明する。また、東側壁に沿う掘方には側壁から1m程離れて位置する溝が見出せよう。これらを結ぶと竪穴住居の外形より小規模で東西6m、南北6.5mを測る小型正方形となる。この小型正方形の主軸は約10度西に傾くが、主柱穴を結ぶ内陣とはより精緻な平行関係となる。また、Kピットでは、掘方段階で新たに検出された柱穴2基が、竪穴住居の使用段階の調査で確認した柱穴2基のすぐ南に位置するが、この新たに検出された柱穴2基との平行関係も精確である。これら一連の掘方はロ字形を呈するが、これを掘方1としたい。

次に竪穴住居の平面形（外形）を想定する。先述の掘方1を、南西方向には0.5m程度と小さく、北東方向には1.5m程度と大きく拡大した掘方となる。小さく拡大した部分では既存の側壁が削平され、大きく拡大した部分には新たに土壙が掘り足された状況を観取することができる。既存側壁の削平の起点には、側壁の変化が生じており、新たな土壙は北西隅、北東隅にしっかりとした方形土壙が掘削され、既存側壁の削平と作業が混在する南東隅には不整形な小土壙群が掘削される。結果として、竪穴住居の外形に対応して、もう一つのロ字形の掘方が形成されている。こちらは掘方2としたい。

なお、掘方段階において新たに検出されたのはKピットに伴う柱穴2基のみであり、炉、主柱穴は新たに検出されていない。

以上からSB48は増築がなされた竪穴住居と判断され、その変化は、掘方1から掘方2への構造変化で追うことができよう。Kピットは掘方2段階で新造されるが、炉、主柱穴は掘方1、2とも同じであり、継続使用された、と判断する。

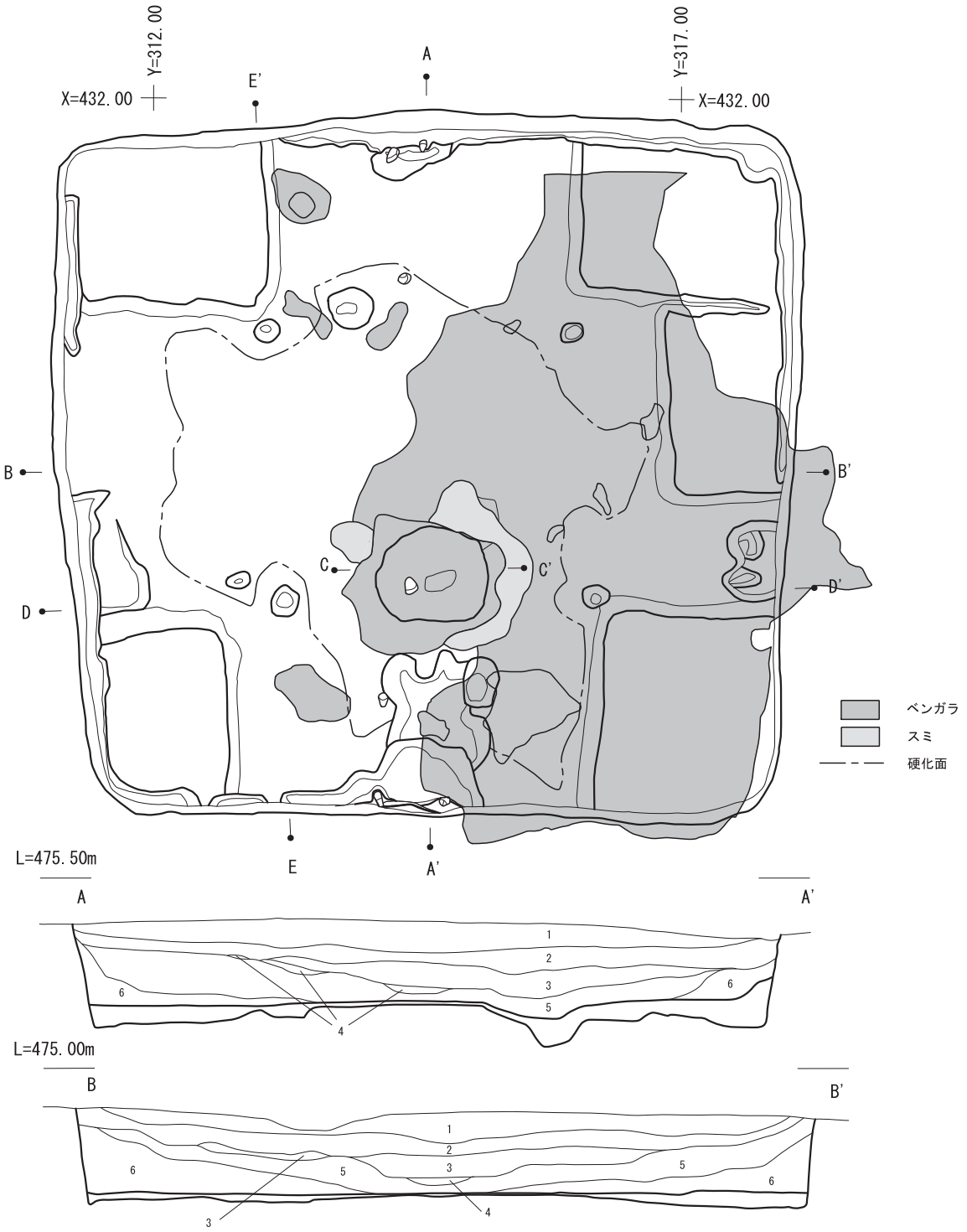
SB49

SB49は、正方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。

SB49の法量は、南北2.6m、東西2.3m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は、検出していない。遺構外も含め複数のピットを検討したが、いずれのピットも主柱穴と認めるには至らなかった。硬化面は、竪穴住居の北半部に形成されている。

炉は、南北80cm、東西40cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の中央に位置している。炉の北端には1段高くテラスが形成され、中央、南端には小ピットが複合する。炉底はボウル形に掘りくぼめ



(A・B断面)　1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小
2　埋2層　明黒褐色シルト　しまり中　粘性小　1mm程の橙黄色種子を含む　1に比しやや明るい
3　埋3a層　明黒褐色シルト　しまり中　粘性中　3～4cmのロームブロック含む
4　埋3b層　黒褐色シルト　しまり小　粘性中
5　埋3c層　明黒褐色シルト　しまり中　粘性中　4～5cmのロームブロック含む　炭化物含む
6　埋3d層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小　～1cmのローム粒子含む　5に比し少量

(C断面)
1　黒色シルト　炭多量混入　しまり大　粘性中

図 147　SB53 床面（1/60）

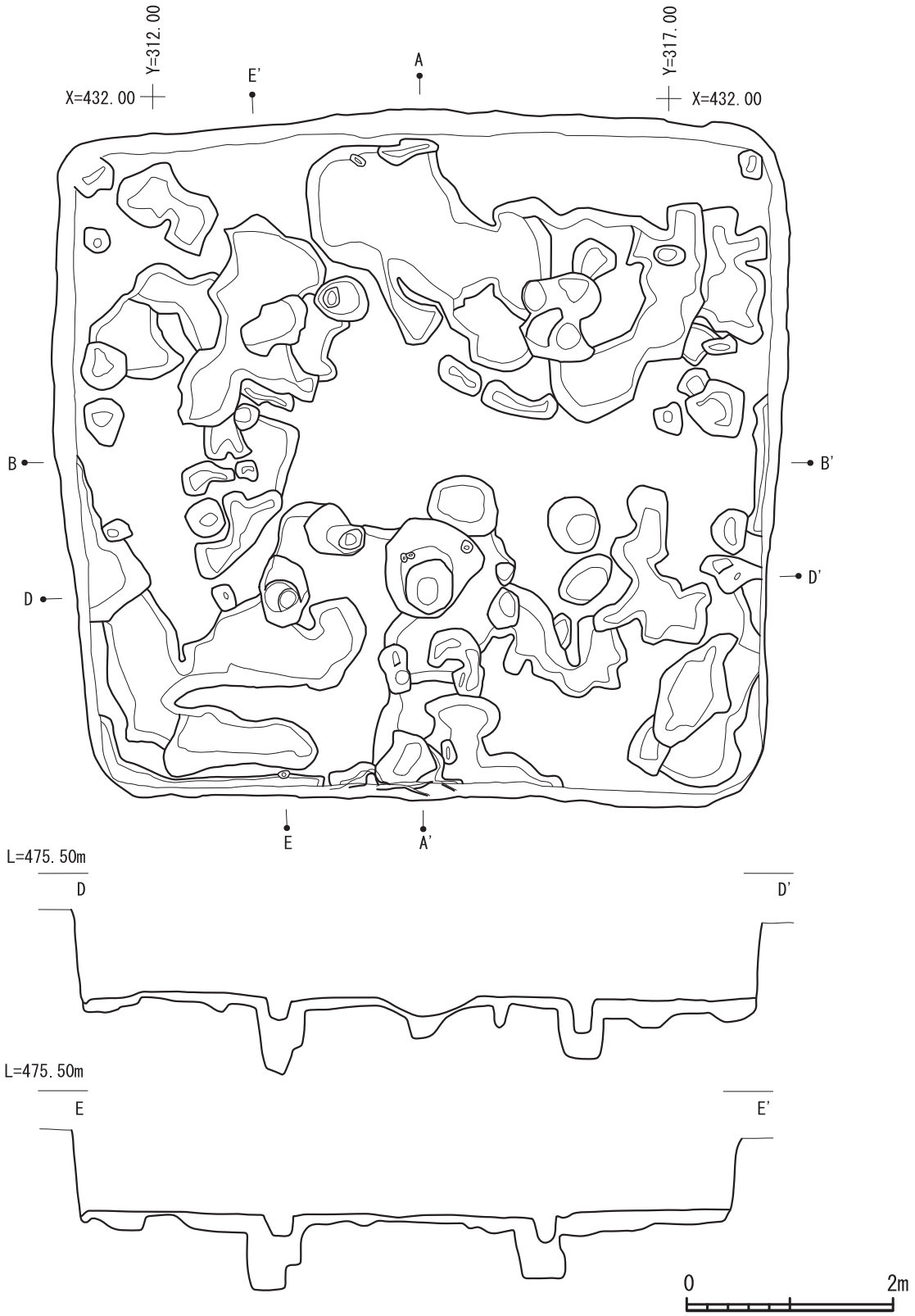


図 148　SB53 掘方（1/60）

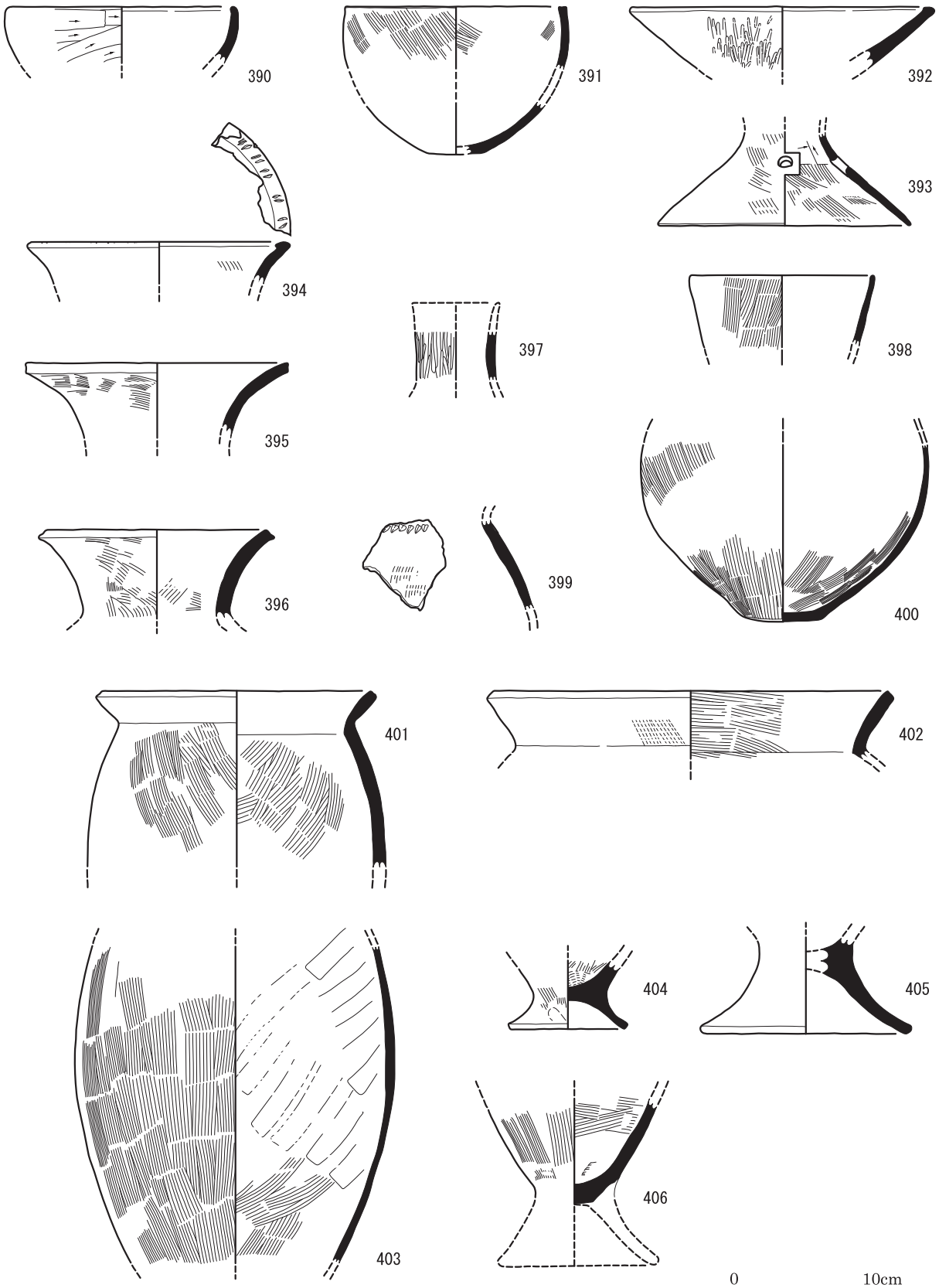


図 149　土器（RP）実測図（SB53）

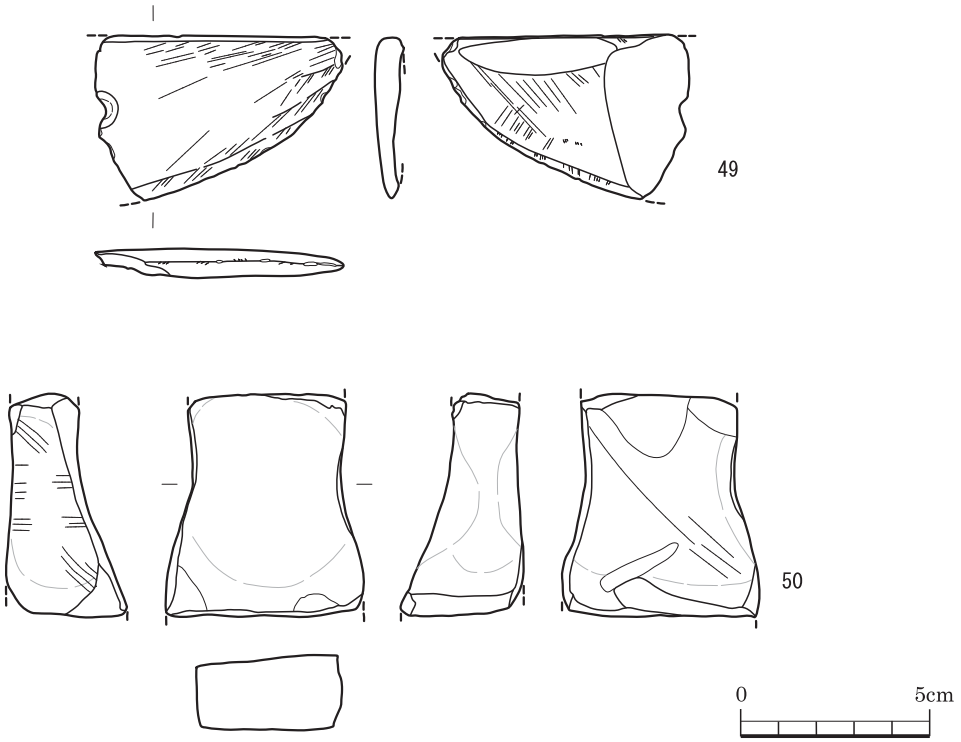


図 150　石器（RQ）実測図（SB53）

られた底が2基連接した状況であり、焼土も2基の「ボウル形の炉底」に対応した分布を示している。

Kピット、ベッド状遺構は確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。竪穴住居の中央で東側壁に近接する位置に柱穴が1基確認されている。

掘方は、北西隅に方形の土壙を掘削している。その他の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB50

SB50は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁に張出し部を備える。なお、竪穴住居跡の南西部は廃棄物置場の造成、北東部は明治時代の導水管によって撹乱されている。

SB50の法量は、南北5.6 m、東西5.7 m、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。南西主柱穴の北側では、柱の抜き取りに際して生じた廃土が小山をなして検出された。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置している。

炉は、南北80cm、東西80cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、南東部に各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられ、南東部にはテラスが形成され2段掘りの形状となっている。これに正対する北西部の炉壁は、緩やかに上っている。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して、その中央に位置する。北側に向かい2段に掘りくぼめられており、その北辺には1基の柱穴が炉の西端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は北西隅、北東隅、南東隅に方形を呈して設けられ、北側壁には張出し部と複合して設置されている。北西隅と北東隅のベッド状遺構は、北側壁張出し部に複合する1段低いベッド状遺構によって連接している。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部

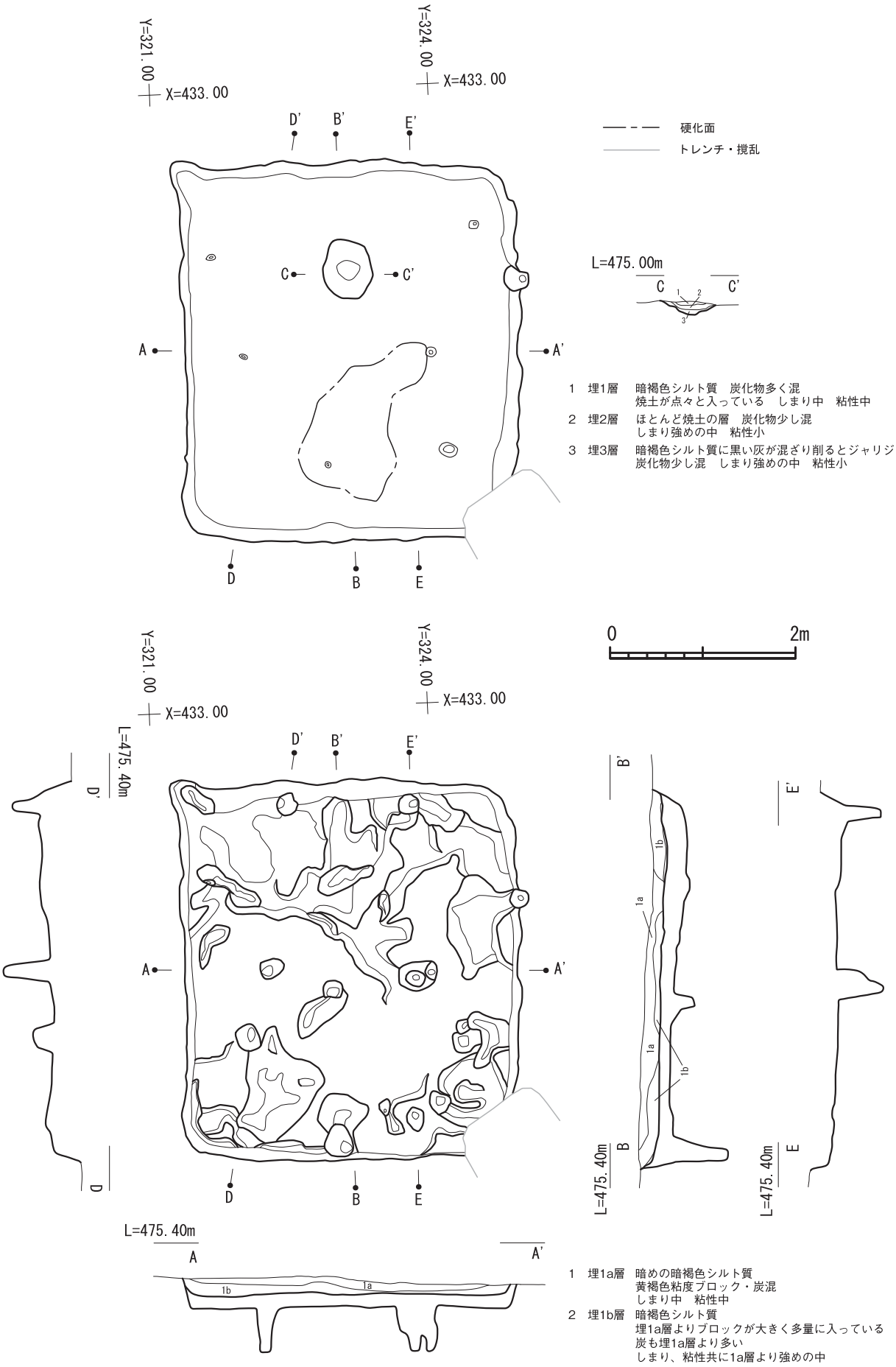


図 151　SB54（1/60）

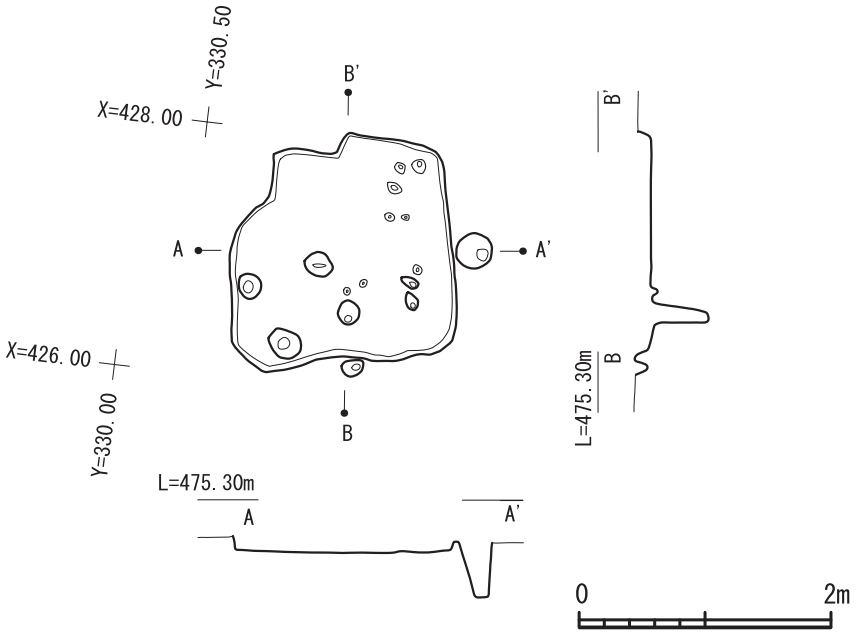


図152　SB55（1/60）

では厚く床が貼られている。

SB51

SB51は、正方形を呈する竪穴住居跡である。竪穴住居跡の北側は現代の排水路、中央部は明治時代の導水管によって撹乱されている。炉、Kピット及びベッド状遺構は確認していない。

SB51の法量は、南北4.7ｍ、東西4.0ｍを測る。

北東隅に方形の土壙が位置し、その他の部分には不整形土壙、ピットが散在する状況である。

SB52

SB52は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピットを備える。

SB52の法量は、南北2.7ｍ、東西3.2ｍ、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられ、ともに内傾している。

炉は、南北40cm、東西40cmの方形を呈し、深さは15cmである。炉は、両主柱穴を結ぶライン上に中心を置き、竪穴住居の中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Kピットは確認されていない。しかし、2基の柱穴が、竪穴住居の南側壁際で、炉の端部に対応する位置に設けられている。これは、Kピットの柱穴と同様の位置であり、2基の柱穴は「土壙が欠け柱穴のみで構成されたKピット」と評価できよう。今後、Kピットの用途を探求する際の一助として記載した。

ベッド状遺構は、検出されていない。

床は貼床である。

掘方は、不整形の土壙がランダムに掘削されている状況である。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

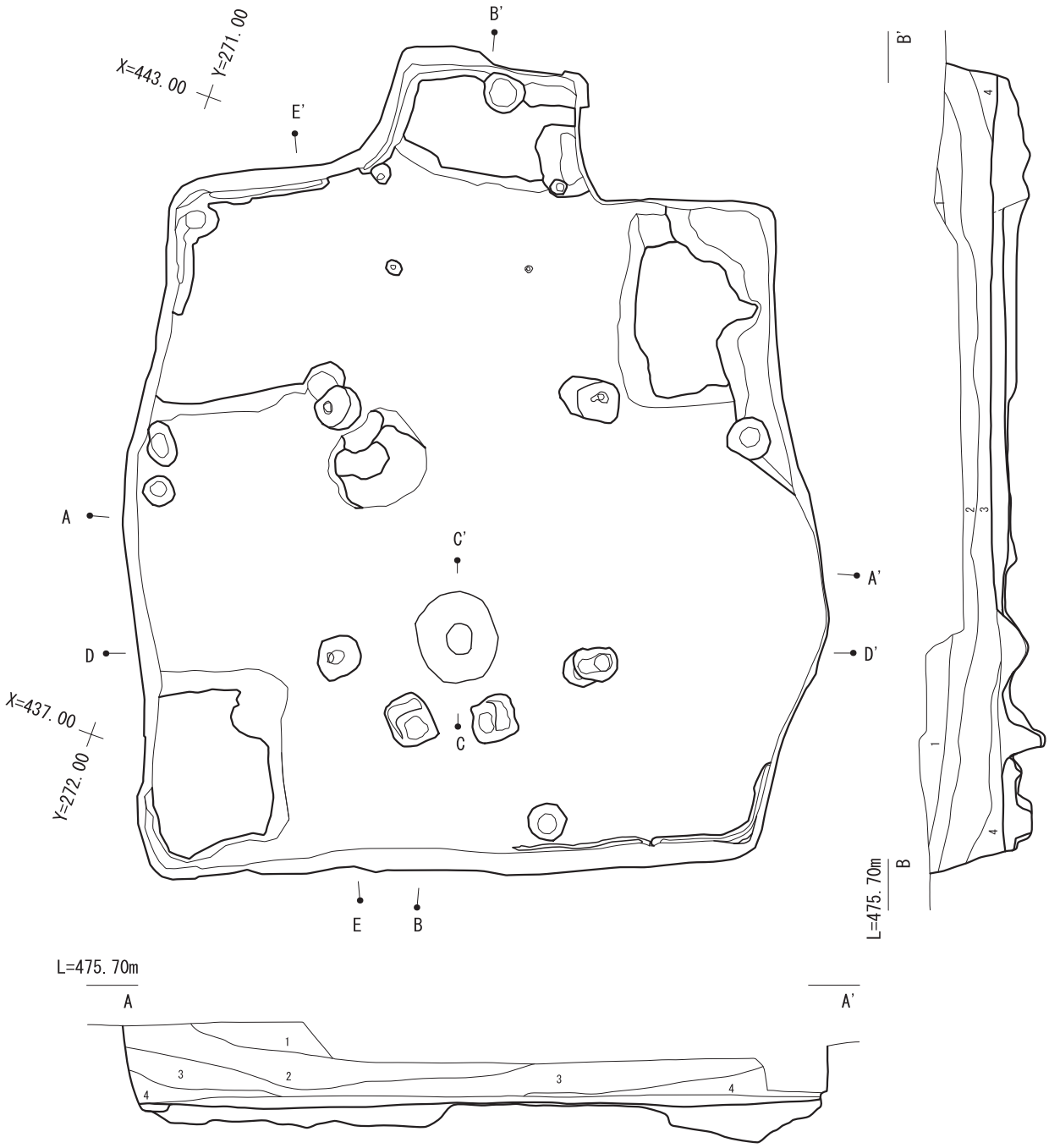
SB53

SB53は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB53の法量は、南北6.7ｍ、東西7.1ｍ、遺構確認面からの深さ90cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。すべての主柱穴において柱痕跡を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、西半部、南半部では内陣の外にまで発達し、東半部ではベッド状遺構の際にまで伸びる。北半部では、然程、発達しない。

炉は、南北55cm、東西50cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣の中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。炉の内壁は、南側では切り立っているが、北側では緩やかに上っている。炉の周囲ではベンガラが検出された。炉の北西部には直径40cm程度の範囲に、炉の東部には幅30sｍ程度の弧状にベンガラが散布されている。



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中
2　埋2a層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小　5～7cm大のロームブロック含む
3　埋2b層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　2cm程のロームブロックを含む　5cm程のロームブロックを少量含む
4　埋2c層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小　3～4cm程のロームブロックを含む

0　2m

図153　SB56　床面２（1/60）

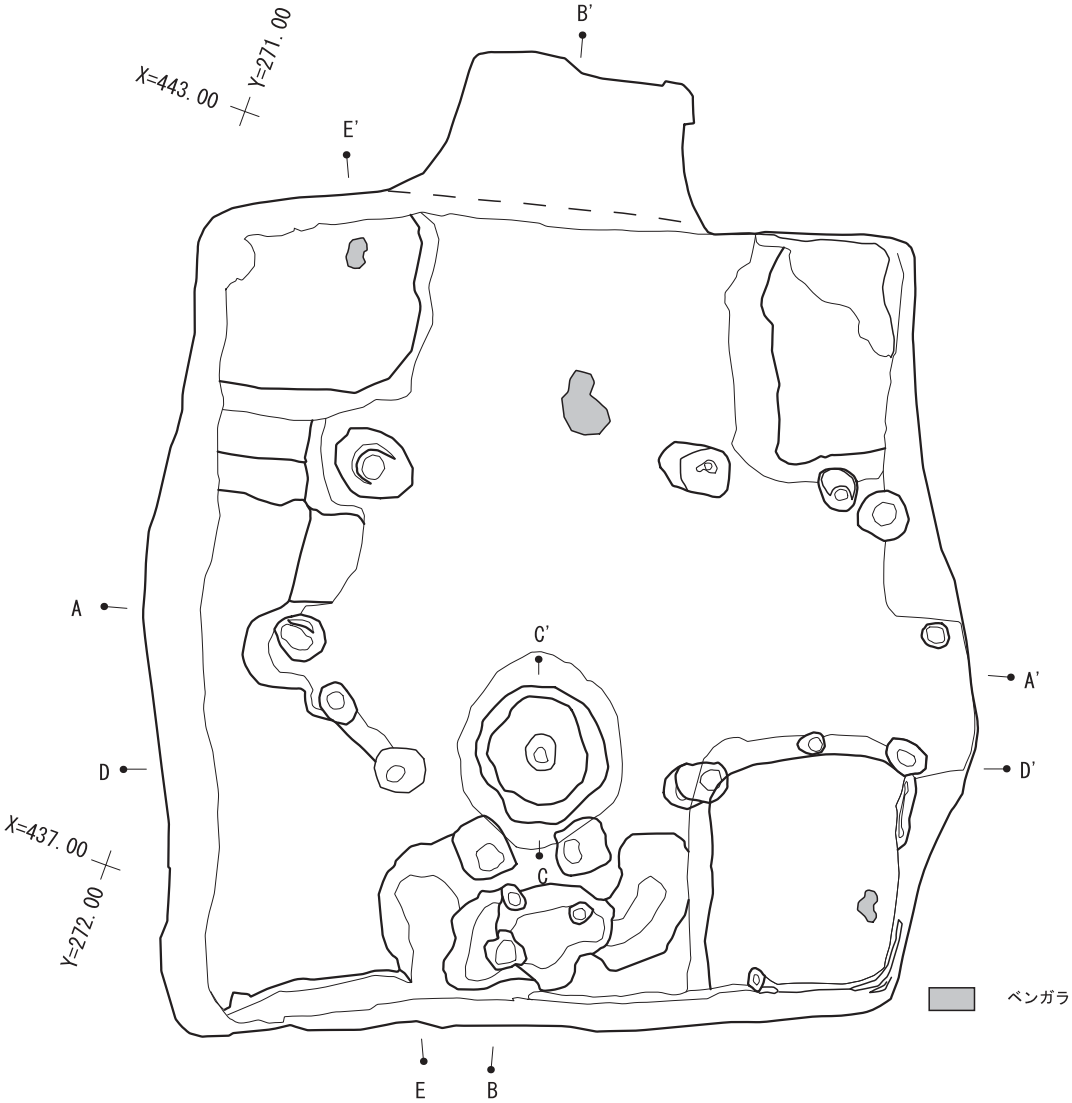


図154　SB56　床面1（1/60）

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して竪穴住居の中央に位置する。方形土壙が2基、南北方向に重複している。北側土壙が浅く、南側土壙が深いため、結果として2段掘りの様相を呈している。北側土壙の両端には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。南側土壙内では南側壁に接して拳大の礫2点が検出された。この南側土壙に正対する位置、北側壁際の中央部には長楕円形を呈する土壙が存在するが、この長楕円形土壙内でも拳大の礫2点が検出されている。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられている。北東隅のベッド状遺構には幅が狭小なベッド状遺構が東側壁に沿って設置されている。南東隅のベッド状遺構の北にはピット2基が複合した土壙が東側壁に沿って設置されている。各側壁際には、部分的で

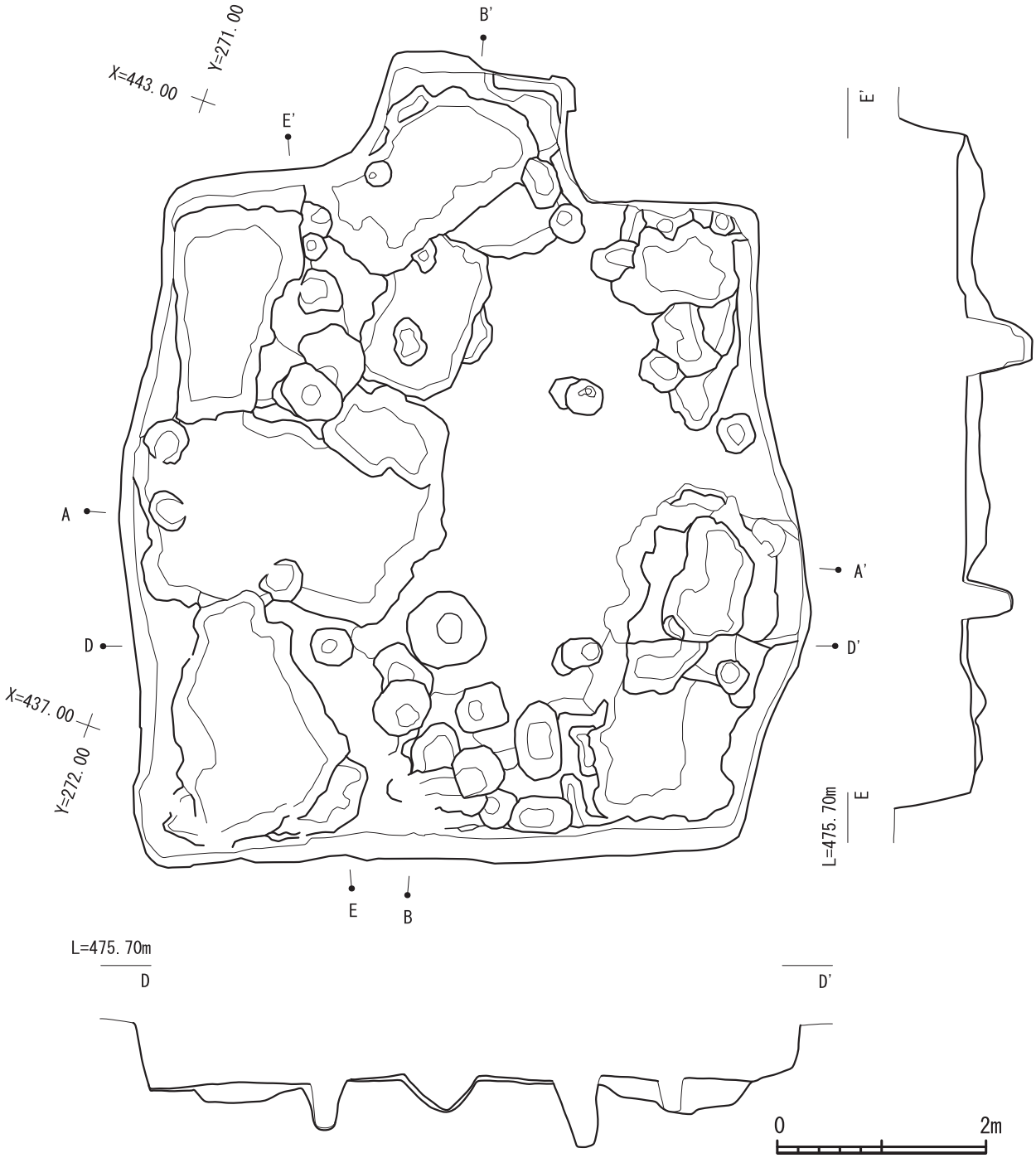


図155　SB56　掘方（1/60）

はあるが、側壁溝がめぐる。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、2段階に整理することができる。

まず、側壁から1m程内側に土壙が線状に並び、竪穴住居の外形より小規模で東西5m、南北5mを測る小型正方形を形作る様相が観取できよう。この小型正方形の主軸は竪穴住居に一致している。新たな主柱穴、炉は、竪穴住居跡の主柱穴、炉の北側に接する位置で、それぞれ検出した。また、Kピットは、竪穴住居跡のKピッ

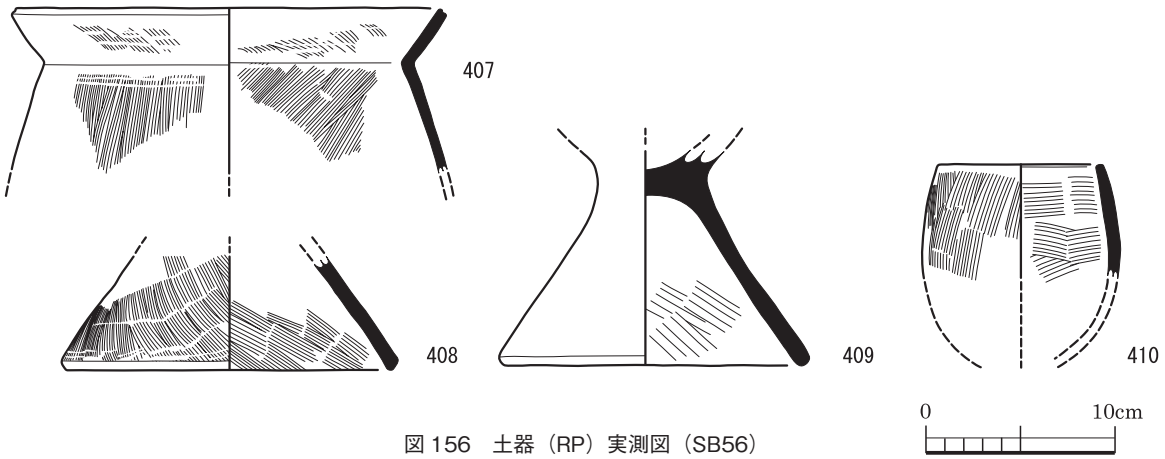


図156　土器（RP）実測図（SB56）

ト柱穴に重複する位置に新たな土壙が、竪穴住居跡の炉に重複する位置に新たなKピットの柱穴が1基検出され、その東にもう1基の柱穴が並んでいる。これら一連の掘方は、概ねロ字形を呈するが、これを掘方１としたい。

次に竪穴住居の平面形（外形）を想定する。これは、先述の掘方1を、その中心を起点として外側に1m程度拡大した掘方となる。拡大した部分には新たに土壙が掘り足された状況を観取することができる。南西隅、南東隅には方形の土壙が掘削されるが、その他の部分は不定形の土壙がランダムに掘削される。結果として、土壙の連続性に乏しいものの、もう一つのロ字形の掘方が形成されている。こちらは掘方2としたい。

なお、掘方段階において主柱穴、炉、Kピットのセットが新たに検出された。

以上からSB53は増築がなされた竪穴住居と判断され、その変化は、掘方1から掘方2への構造変化で追うことができよう。竪穴住居の中心は同じであるが、主柱穴、炉、Kピットを新設し、建物の規模を拡大したものと判断する。

SB54

SB54は、正方形を呈する5本柱建ての竪穴住居跡である。炉を備える。

SB54の法量は、南北4.1m、東西3.6m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は、床面調査の段階では確認していない。ピットが1基、炉の東側、東側壁上に位置するが、規模が小さく、かつ対応するピットを見出すことができなかった。床面を除去した掘方調査の段階に、主柱穴と判断できるピット群を検出している。まず、竪穴住居の中央、南側壁に接して1基。次に、竪穴住居の北半部、北側壁に接して2基、中央部に2基のピットが検出され、合計4基のピットが炉を囲む位置に設置されている状況となった。以上から、竪穴住居の北半部に4本、南半部に1本、合計5本の柱建てがなされていたものと判断する。硬化面は、竪穴住居の南半部中央付近に形成されている。

炉は、南北60cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の北半部の中央に位置している。炉底はボウル形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構は確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

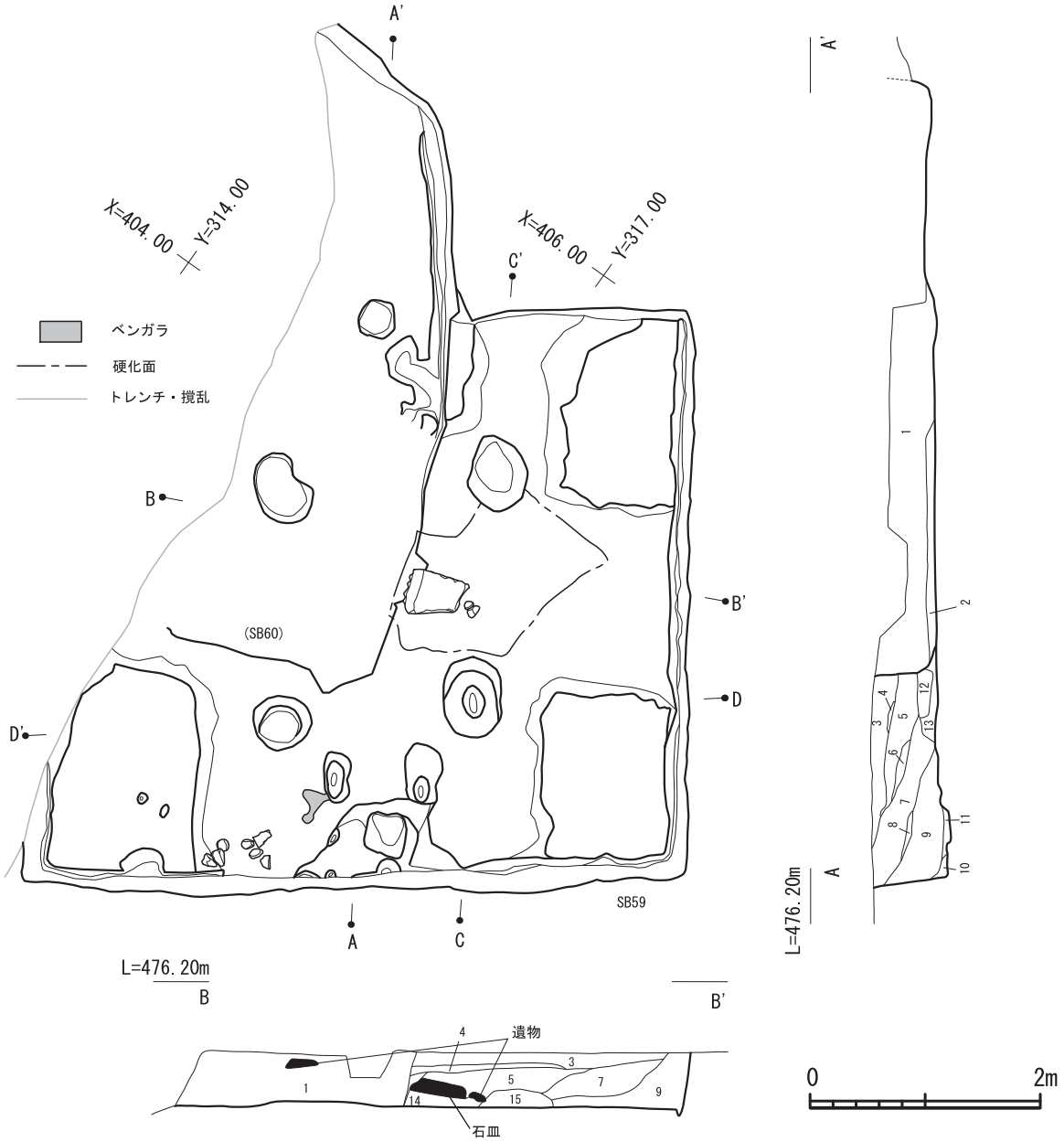
掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、北側壁に沿って溝を切り、北西隅、北東隅の土壙を連接させている。その他の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB55

SB55は、正方形を呈する竪穴住居跡である。

SB55の法量は、南北1.8m、東西1.8m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、検出していない。竪穴住居の外部、東側壁、南側壁に接してピットが各1基位置しているが、それぞれ対応するピットを見出すことができなかった。硬化



1　SB60埋1層　褐色シルト　～2cmのロームブロックを含む　しまり中　粘性小
2　SB60掘方1層　褐色シルト　ロームブロック混　しまり強　粘性中
以下SB59埋土
3　埋1a層　黒褐色シルト　粘性小　しまり中
4　埋1b層　黒色シルト　粘性小　しまり中　炭化物を多く含む炭化層
5　埋2a層　褐色シルト　～2cmのロームブロック少量含む　しぼり中　粘性中
6　埋2b層　黒色シルト　粘性小　しまり中　炭化物を多く含む炭化層
7　埋2c層　褐色シルト　5mm大のローム粒子を含む　しまり中　粘性中
8　埋2d層　黒色シルト　炭化物を含む灰層　しまり中　粘性小
9　埋2e層　暗褐色シルト　1cm～5cmのロームブロック混　炭化物を少量含む　しまり中　粘性中
10　埋3層　暗褐色シルト　3mm大のローム粒子を含む　しまり弱　粘性中　デルタ堆積
11　KP4埋土　暗褐色シルト　しまり中　粘性大
12　南西主柱抜取廃土　黄褐色シルト　ローム（破砕）ブロック　しまり大　粘性小　掘上げ土？
13　南西主柱抜取廃土　暗褐色シルト　～2cmのロームブロック含む　しまり中　粘性小　掘上げ土？
14　埋2f層　明褐色シルト　しまり中　粘性大　破砕ロームの成分を多く含む
15　南東主柱抜取廃土　黄褐色シルト　～2cmのロームブロック混　赤味が強く焼土粒が入っており、ジャリジャリという　しまり大 粘性小

図 157　SB59・60　床面（1/60）

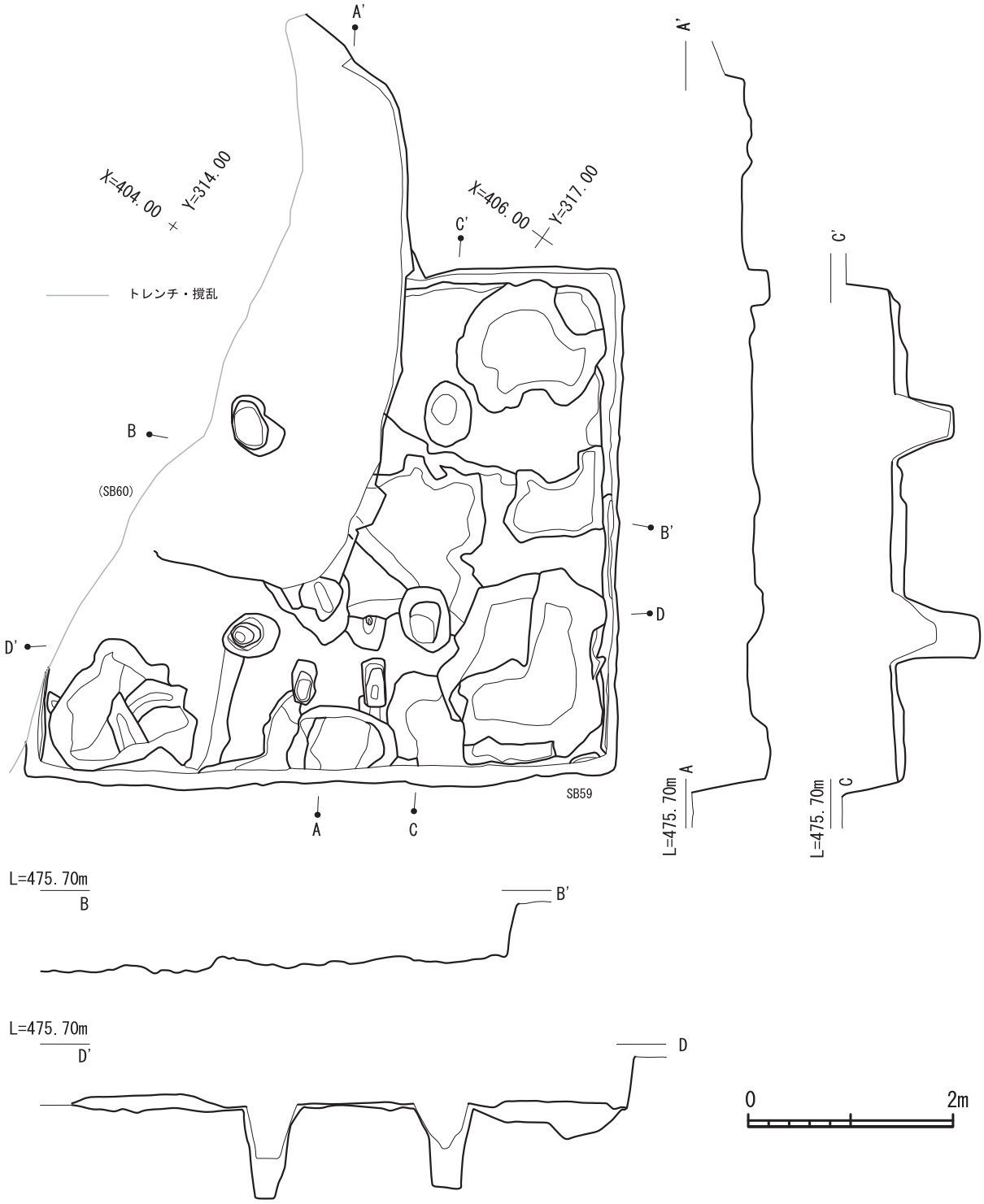


図 158　SB59・60　掘方（1/60）

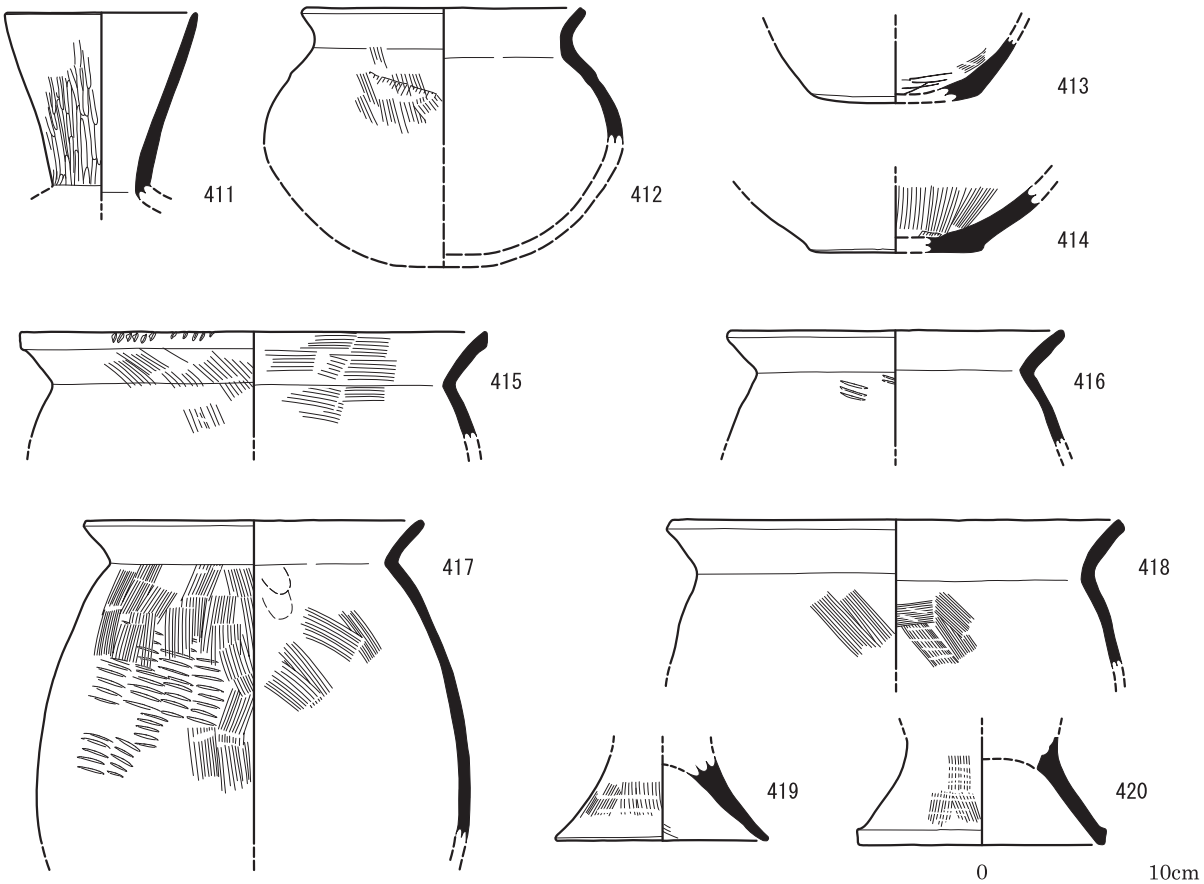


図 159　土器（RP）実測図（SB59）

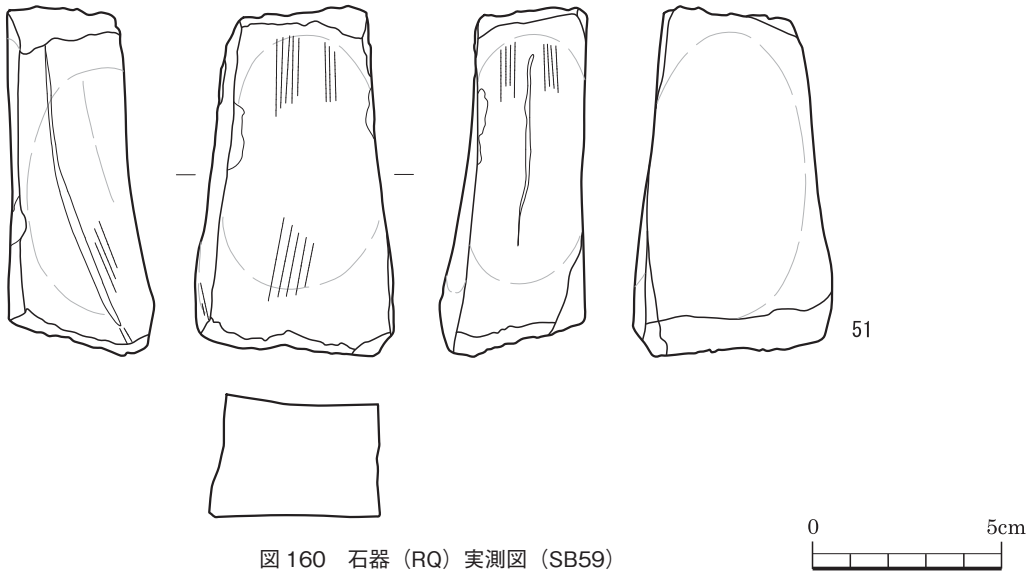


図 160　石器（RQ）実測図（SB59）

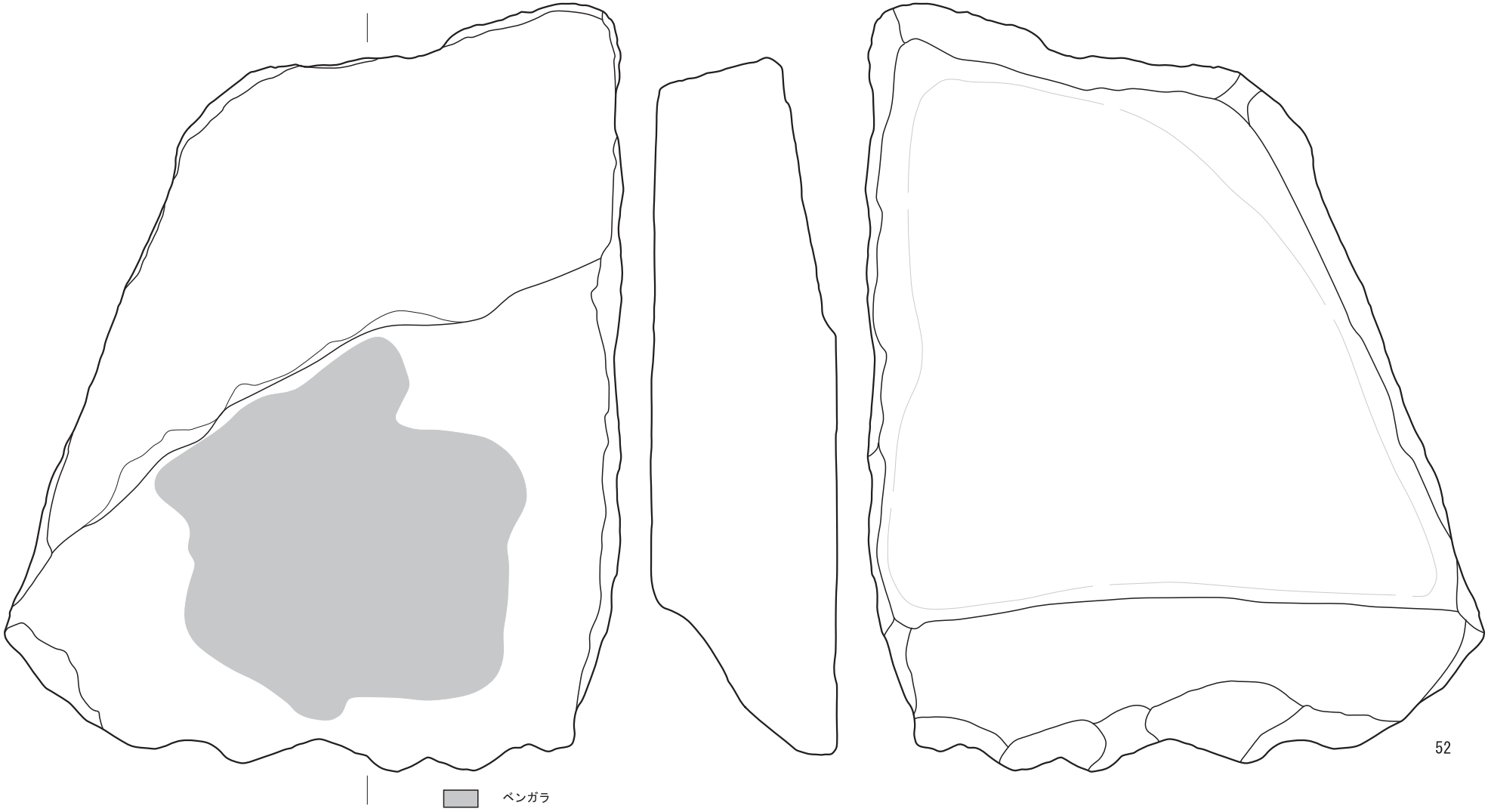


図 161　石器（RQ）実測図（SB59）

0　10cm

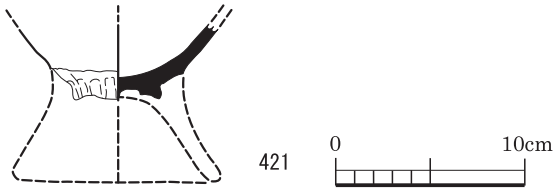


図 162　土器（RP）実測図（SB60）

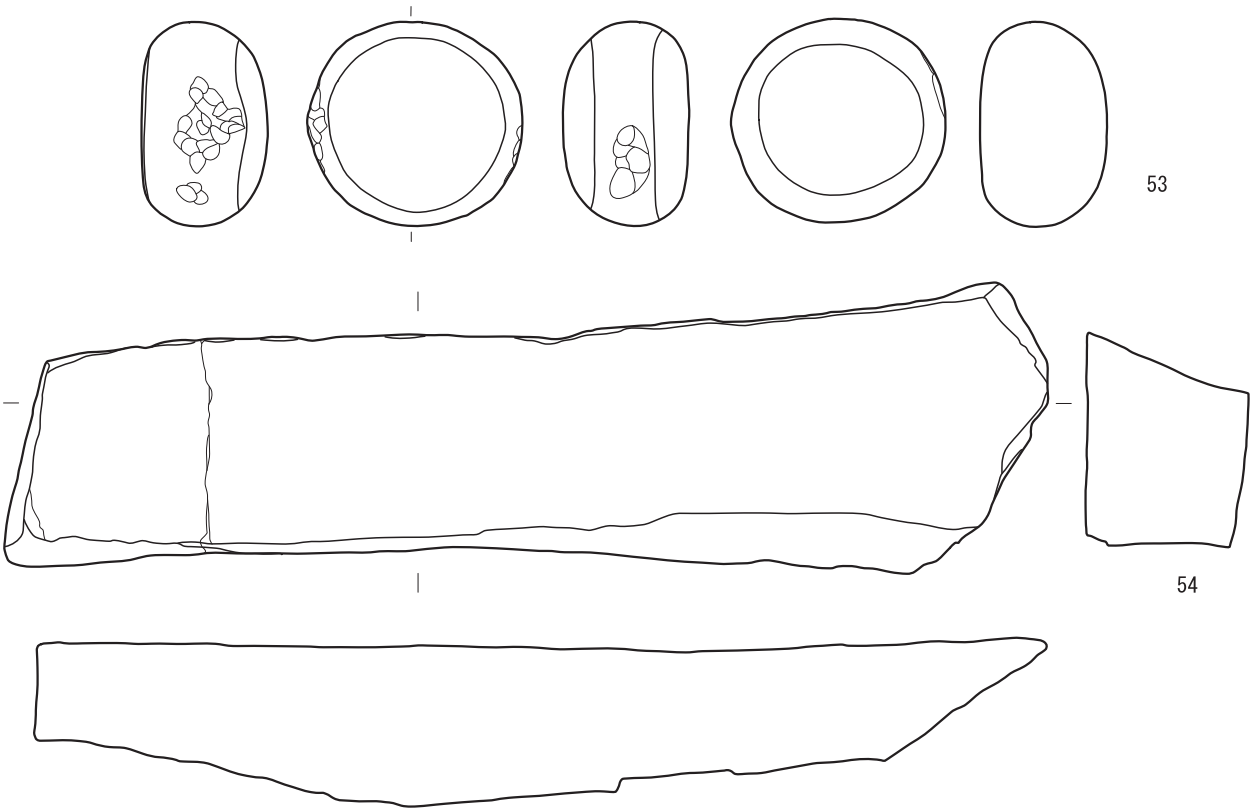


図 163　石器（RQ）実測図（SB60）

面は、形成されていない。炉、Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。床面は平坦化されており、ピットが南西部に4基、小ピットが東半部に存在する。

当該遺構は、竪穴住居跡と認識できるのか否か疑義が生じるところであるが、調査段階の認識を第一として、竪穴住居として報告する。

SB56

SB56は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。SB56は、床貼りが2回なされており、床面1（古）の段階には東側壁、西側壁に張出し部を備え、床面2（新）の段階では北側壁に張出し部を備えている。北西隅には地割れが加わっている。

SB56の法量は、南北6.2 m、東西5.5 m、遺構確認面からの深さ70cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。北西主柱穴の南には主柱穴抜き取りの際の廃土が小山をなしていた。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置している。硬化面は、竪穴住居全体に形成されている。

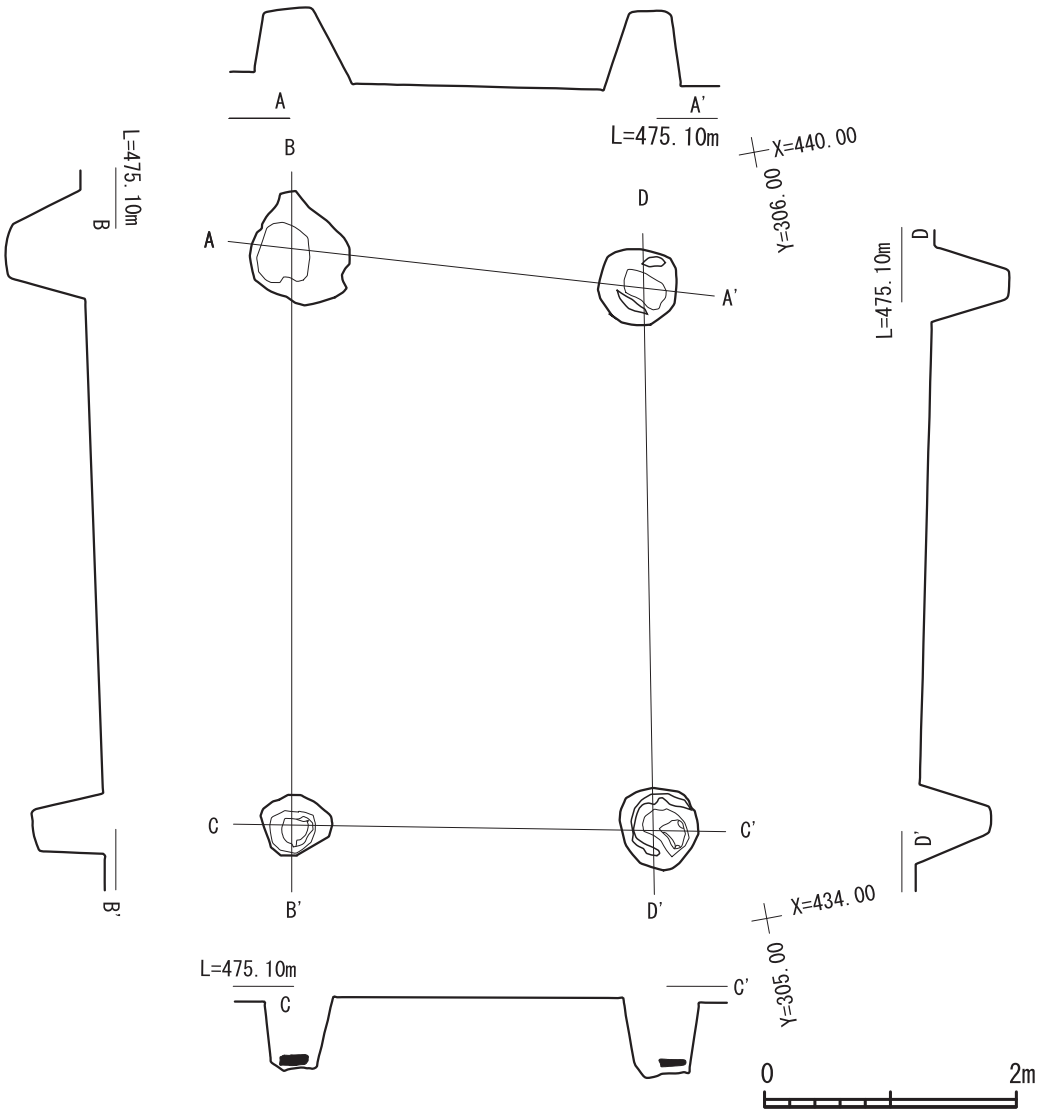


図164　SB68（1/60）

炉は、南北75cm、東西75cmの円形を呈し、深さは35cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉はなだらかな周堤を有し、炉底はボウル形に2段掘りに掘りくぼめられている。炉の内壁は、北東部では切り立っているが、その他の部分では緩やかに上っている。炉底の小ピット状のくぼみは炭化物で充ちている。

Kピットは、南側壁の中央の際がなだらかに低まっており、その範囲の北辺には方形の柱穴が2基、炉の端部に対応する位置に設けられている。この柱穴は、しっかりと2段掘りがなされている。

ベッド状遺構は北西隅、南東隅に概ね方形を呈して設けられている。北西隅には緩やかな高まりがあるもののベッド状遺構としての形態を認識するには足りない高まりであり、南西隅は平坦である。北側壁には、ベッド状遺構と張出し部が複合して設置されている。

張出し部、南側壁の壁際中央、西側壁、東側壁の壁際中央にはピットが位置している。これらのピットはいずれも深度が浅いため、柱建てをした痕跡とするならば「埋め柱」ではなく「据え柱」とした方がよい。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

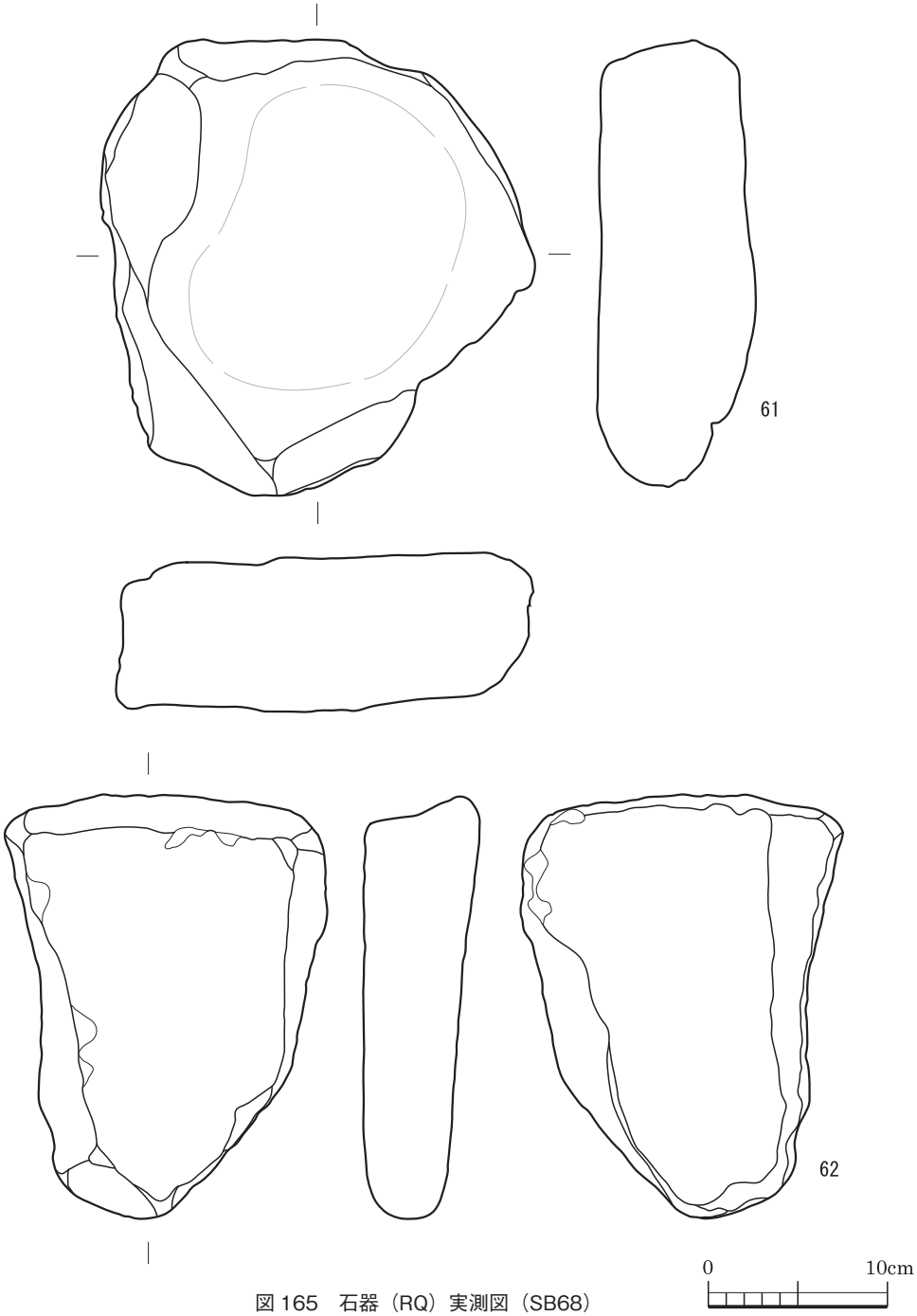


図 165　石器（RQ）実測図（SB68）

以上は、SB56において最初に調査された使用と廃棄の状況である。この後、掘方の調査のため床土を除去する際に、その下位から別の床面を検出した。したがって、ここまでの内容を「床面2」としたい。また、以後に記述するSB56の使用と廃棄の状況は「床面1」と記述する。両者の切合関係は、床面1（古）→床面2（新）である。

SB56（床面1）の法量は、南北6.1 m、東西5.4 mを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。北西主柱穴は、床面2の主柱穴と異なる柱穴であり、その北西に接して位置する。その他の主柱穴は、床面2の主柱穴と同じ柱穴を使用している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居

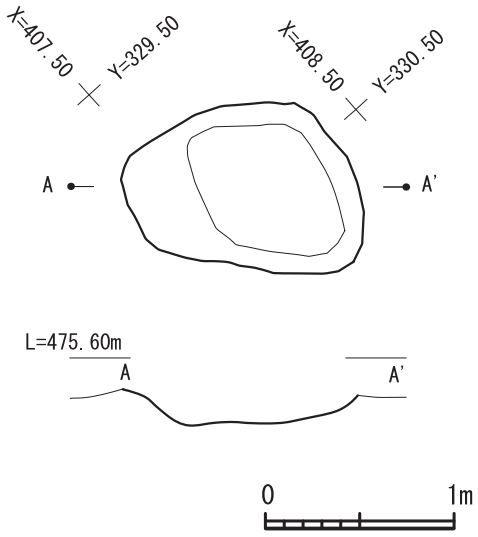


図166　SK58（1/40）

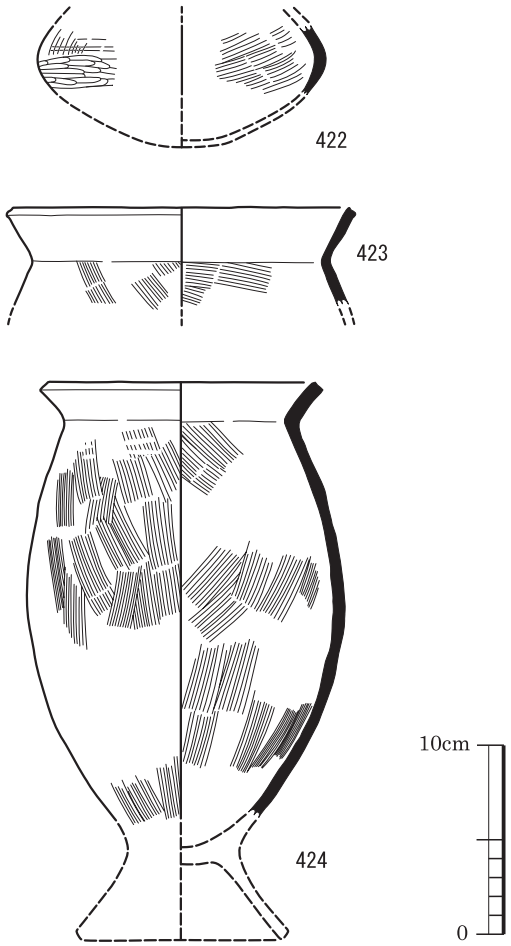


図167　土器（RP）実測図（SK58）

の各側壁と平行に位置している。硬化面は、竪穴住居全体に形成されている。

炉は、床面2の炉と同じ土壙を使用している。炉は、南北75cm、東西75cmの円形を呈し、深さは35cm、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣の中央に位置している。しかし、炉の周囲の床土を除去したことにより、床面2とは異なる外形となった。床面1の炉は、しっかりとした周堤を備えている。この周堤の頂端部は、幅15cm程度の広い平坦面を備えている。周堤部全体の幅は30cm程度であり、周堤の外端部と床面との境界には屈折部が明瞭に表れている。炉の周囲には、炭が掻きだされていた。なお、炉の内側は、床面2と同じである。

Kピットは、床面2とは異なる土壙、柱穴を使用している。床面1のKピットは方形を呈し、南側壁に近い中央に位置する。深さは15cm程度、しっかりと掘り込まれ、その東西には段状に平坦面が東西に展開している。Kピットの北壁には2基の柱穴が位置する。新たに検出された床面1のKピット柱穴は、床面2の柱穴より南に位置している。

ベッド状遺構は、床面2とは異なる様相を示している。南東隅のベッド状遺構は、床面2に同じである。しかし、床土を除去したことにより北西隅、南東隅に方形のベッド状遺構が検出された。また、南西隅のベッド状遺構は北側に伸長し、さらに、1段低いベッド状遺構が付加され、北西隅のベッド状遺構と連接した状態が検出されている。

竪穴住居の北側壁の張出し部（床面2）では、床土を除去すると地山が露出し、その下位に床面1は存在していなかった。また、床面1の床面は北西隅と北東隅を結ぶラインで終っていた。このことから、床面1の北側壁には張出し部は備わらないと判断する。東側壁際では、床土を除去すると西壁に平行したラインで床面1が終っており、これが床面1の西端部と判断できた。このラインは南東隅ベッド状遺構の北端部で西に伸長し、幅1.2m、奥行き0.5m程の張出し部を形成している。張出し部の両脇にはピットが設置されている。このことから、床面1では東側壁に張出し部が備わっている、と判断した。

北西隅、南東隅のベッド状遺構の上端面、内陣北辺の中央部付近には、鮮やかな色調のベンガラが検出さ

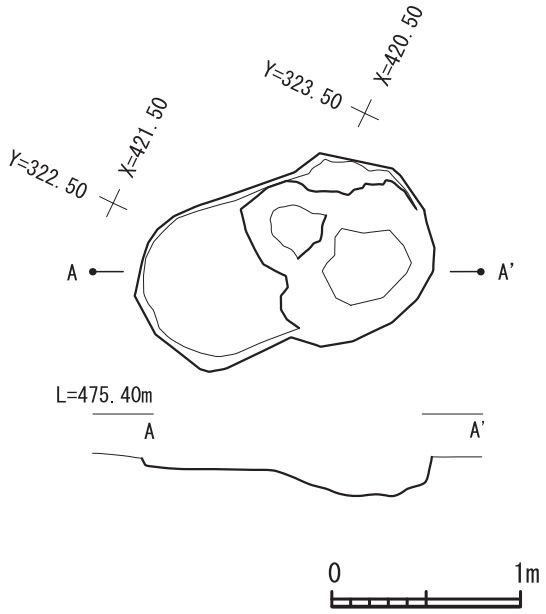


図168　SK61（1/40）

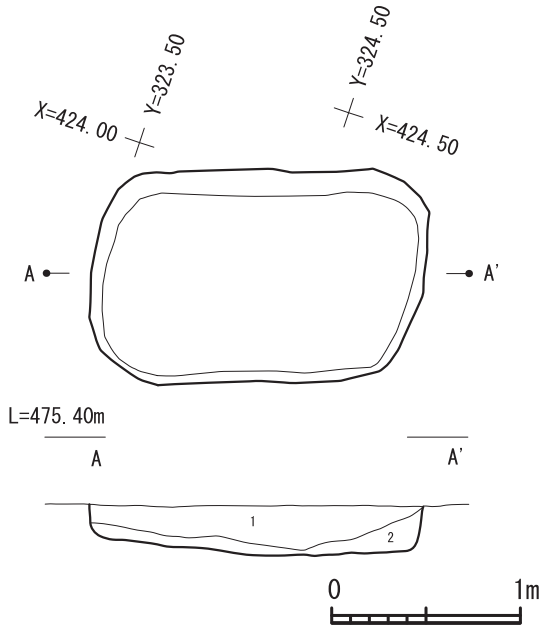


図169　SK62（1/40）

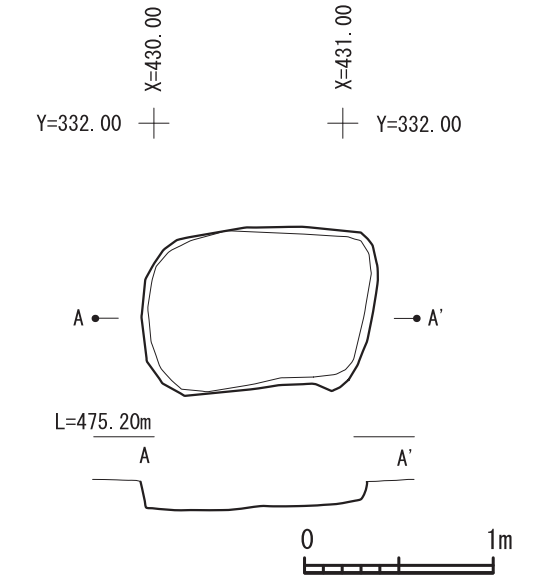


図170　SK63（1/40）

れた。ベッド状遺構上のベンガラは直径20cm程度の範囲、内陣北側のベンガラは直径50cm程度の範囲に検出されている。ベンガラは鮮やかな赤色を呈し、精良な類としてよい。

その他、北西隅と南西隅のベッド状遺構の間に2基1対、北東隅と南東隅のベッド状遺構の間に2基1対のピットが新たに検出されている。東側壁張出し部内の2基1対のピットと併せて、6基3対のピット群が新出したが、これらのピットはいずれも深度が浅いため、柱建てをした痕跡とするならば「埋め柱」ではなく「据え柱」とした方がよい。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

以上が床面1の使用と廃棄の状況である。

掘方は、まず、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削している。北東隅の土壙は小規模であるが、その他の3隅の土壙は長辺が2mに及ぶ規模である。この4隅の土壙に加え、北辺、西辺、東辺に方形の土壙が掘削される。3土壙とも異なる規模であるが、いずれも竪穴住居跡の側壁が凸状の箇所に掘削されている。北辺、東辺の土壙は、張出し部に対応しており、その幅、規模も正比例の関係にある。西辺には最も大規模な土壙が位置する。この土壙は南北に位置する土壙から0.5m程度西に張り出した位置にあり、東辺の張出し部の形態に近似している。調査では認識できなかったものの、あと一つの張出し部が当該位置に存在した可能性が高い。この他、側壁に沿って不定形の土壙がランダムに掘削されるものの、内陣に相当する部分は平らに整えられている様相、と捉えることができる。なお、掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

上部構造である、床面1、床面2と対比させると以下のとおりである。

床面1、床面2に共通する北東隅のベッド状遺構の下部は、掘方土壙の規模が最小であり、他の部分とも連接することなく、孤立している。床面2で新出した北西隅、南東隅のベッド状遺構の下部と、床面2で規模が拡大された南西隅のベッド状遺構の下部には同規模の掘方土壙が位置する。張出し部の下位には、その前面にまで及ぶ土壙が位置し、床面2で新出した北側壁張出し部の下位の土壙は最も新しい切合関係にある。

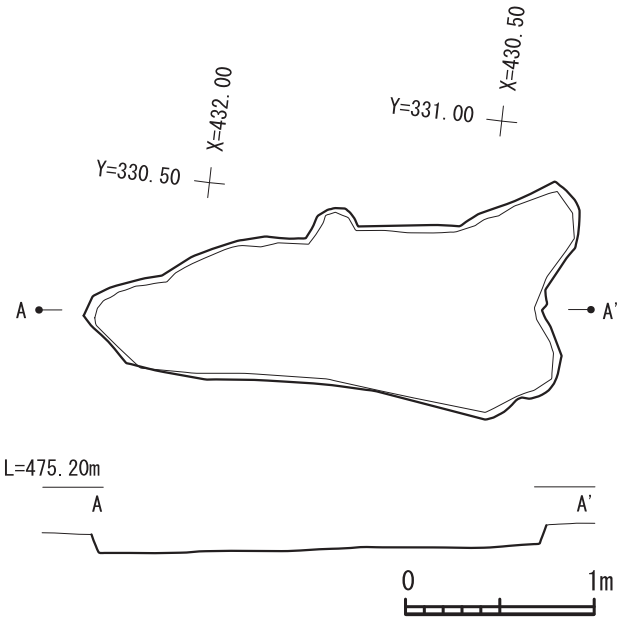


図171　SK64（1/40）

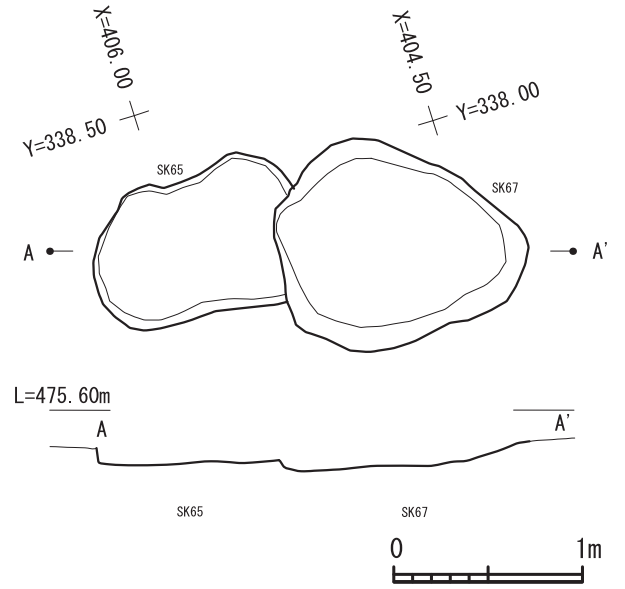


図172　SK65･67（1/40）

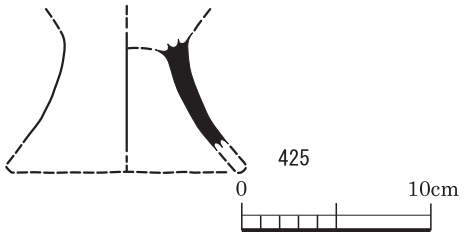


図173　土器（RP）実測図（SK65）

以上から、SB56は竪穴住居の範囲を大きく変更することなく、少なくとも2回、改築された竪穴住居と判断できる。その変化は、床面1から床面2への構造変化で追うことができよう。なお、張出し部の増設と床面の改築が一致しない可能性も十分あるため、「少なくとも2回」の改築とした。

SD57

SD57は、円形周溝である。周溝内に1基のピットを備える。

SD57は、幅70cm、深さ20cmの溝が円形にめぐる。その直径は4.5mである。溝底には平坦面が形成され、大きな段差を生じることなく、概ね同一深度でめぐっている。

周溝内には1基のピットが存在する。ピットの直径は約55cm、深さは50cmを測る。

SK58

SK58は、概ね方形を呈する土壙である。

SK58の法量は、東西1.2m、南北0.9m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

SB59

SB59は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁に張出し部を備える。SB60と切り合うが、SB59（古）→SB60（新）である。

SB59の法量は、南北5.0m、東西5.7m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置する。竪穴住居跡の北西部をSB60に切られているため内陣の様相は詳らかにはできない。硬化面は、内陣内に形成され、一部東側に発達している。

炉は、内陣の中心に位置している。炉は、SB60に破壊されているため、その詳細は不明である。炉の東側では、僅かに炉に架かった状態で石皿が検出された。この石皿は床面から10cm近く上位にあり、意図的に当

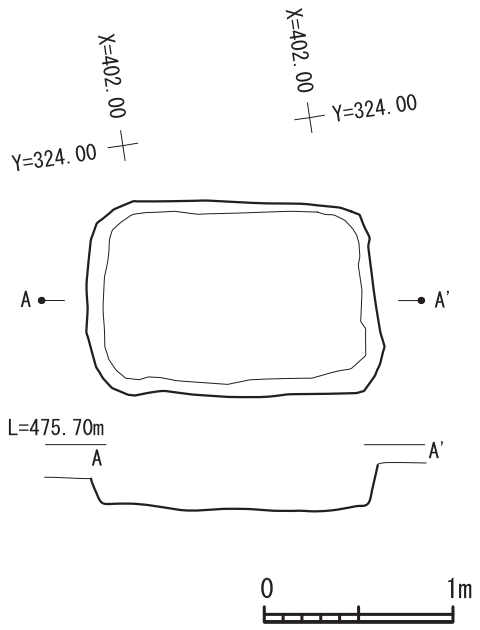


図174　SK66（1/40）

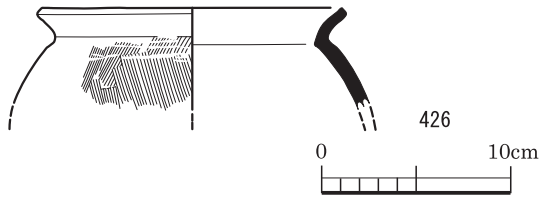


図175　土器（RP）実測図（SK66）

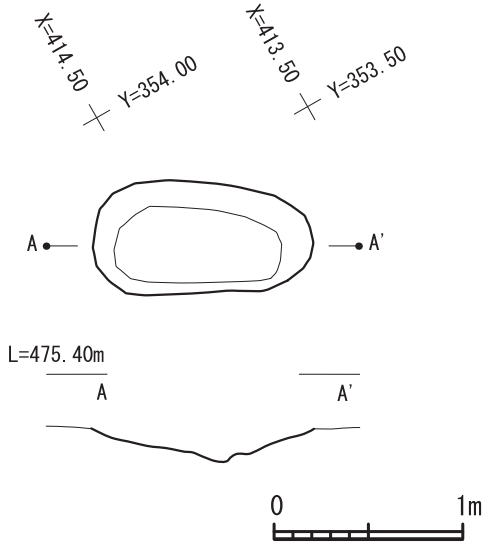


図176　SK69（1/40）

該位置に据え置かれたものと判断する。石皿の下面にはベンガラが付着していた。

Kピットは方形を呈し、南側壁に接して、その中央に位置する。2段に掘削され、中央部の土壙は40cm四方の正方形を呈する。全体的にしっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は、SB60に破壊されている北西隅を除く、各隅に長方形を呈して設けられている。北側壁沿いには、1段の高みが存在し、その端部は内陣の範囲に対応している。これは、壁際に独立して設けられたベッド状遺構と判断する。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、南東隅の土壙は東側壁辺に沿って溝を切り、さらに小規模な土壙をその先に設けている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB60

SB60は、方形を呈する竪穴住居跡である。隣接する廃棄物置場造成時に撹乱を受け、その東側壁がかろうじて残存している状況である。SB59と切り合うが、SB59（古）→SB60（新）である。

SB60の法量は、南北5.6ｍ、東西は1.7ｍの範囲を確認している。

東側壁の壁体はほぼ垂直に立ち上がり、北半部では側壁溝も検出することができた。

なお、東側壁はその中位で、若干、壁体の走向を変えている。SB60の内部から東側壁を見ると、SB59の炉の残骸と石皿を見ることができる。これら前代の遺構、遺物がSB60東側壁屈折の要因となった可能性も考慮したい、と考える。

SK61

SK61は、長方形を呈する土壙である。

SK61の法量は、東西1.6ｍ、南北0.8ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙の東半部にはピットが穿たれている。土壙底部には平坦面が造り出されている。

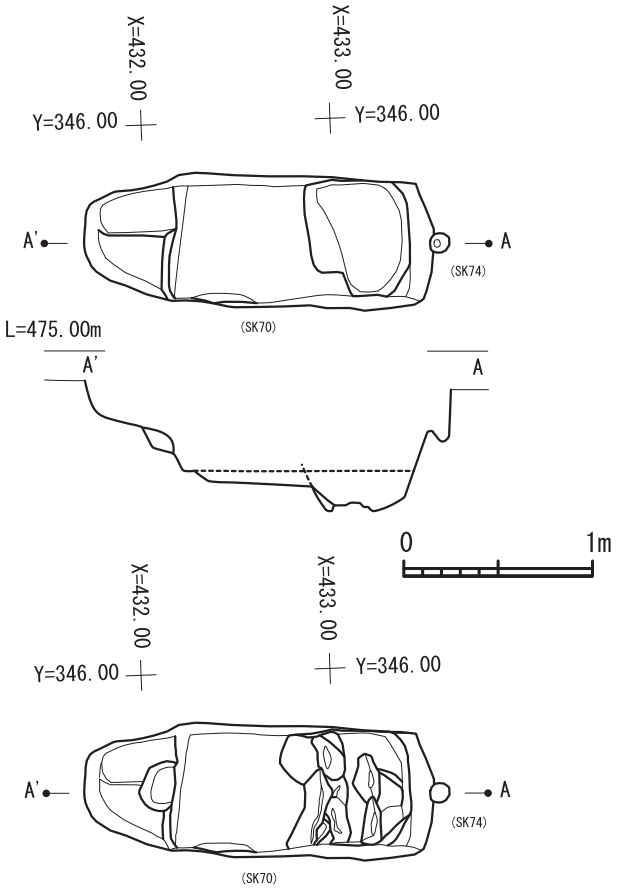
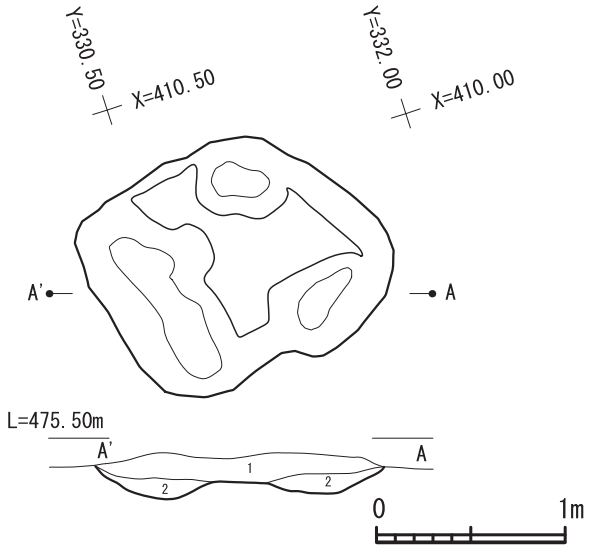


図177　SK70・74（1/40）



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロックを含む
　　また、不純物（砂、赤色粒）を多く含む

2　埋2層　黒褐色シルト(埋1層にくらべやや暗)
　　しまり中 粘性大（埋1層よりやや強）
　　黄褐色ロームブロック含む　不純物混なし

図178　SK71（1/40）

SK62

SK62は、長方形を呈する土壙である。

SK62の法量は、東西1.8ｍ、南北1.1ｍ、遺構確認面からの深さ25cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。

SK63

SK63は、長方形を呈する土壙である。

SK63の法量は、東西0.8ｍ、南北1.2ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。

SK64

SK64は、概ね三角形を呈する土壙である。

SK64の法量は、東西1.1ｍ、南北2.5ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。SK64の平面形は、本来は長方形であり、その南北端、南東隅、東辺中位にピットが複合した、と考えることもできよう。

SK65

SK65は、方形を呈する土壙である。

SK65の法量は、東西0.7ｍ、南北1.1ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。

SK66

SK66は、方形を呈する土壙である。

SK66の法量は、東西1.5ｍ、南北1.0ｍ、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。

SK67

SK67は、円形を呈する土壙である。

SK67の法量は、東西1.1ｍ、南北1.2ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。

SB68

SB68は、1×1間の掘立柱建物である。

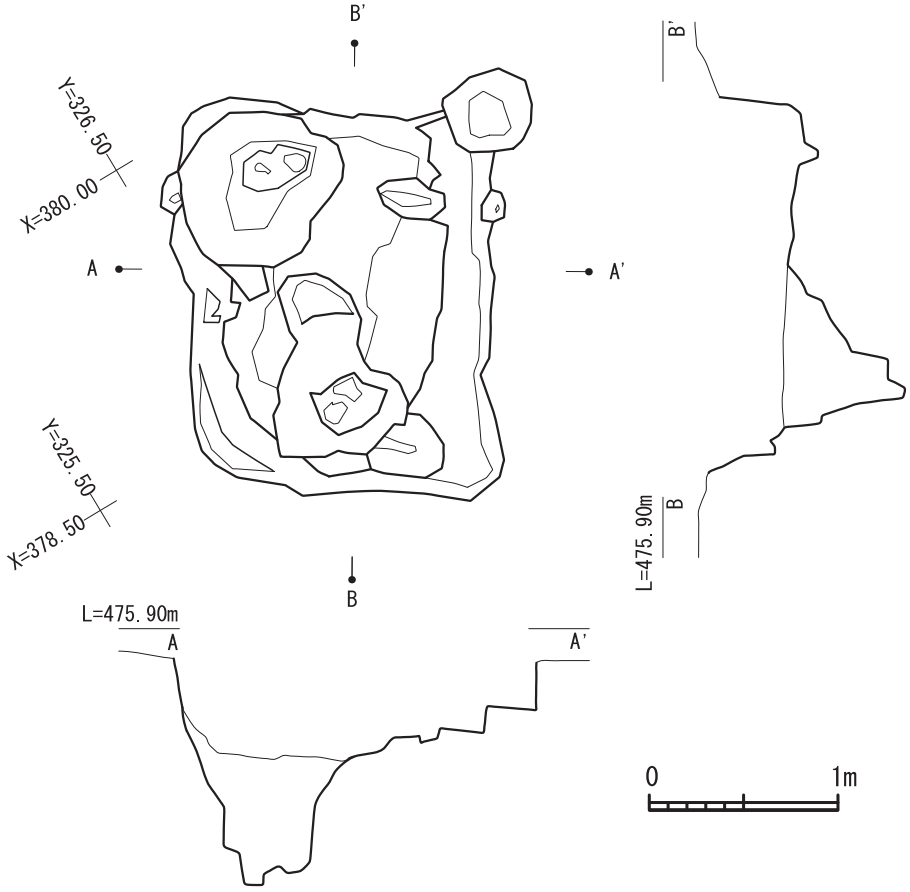


図179　SK72（1/40）

各柱穴の直径は約70cm、遺構確認面からの深さは約0.6mを測り、東西柱間は3.0ｍ、南北柱間は4.5ｍである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認することはできなかったため、柱抜き取りが行われているものと判断する。

南西柱穴からは、石皿（RQ61）が出土した。この石皿は、輝石安山岩製で縦25.4cm、横24.2 cm、厚さ8.8cm、重さ3.7kgであり、縁辺部には再加工が施され円形を呈している。石皿は、平滑面を上面として南西柱穴内の中位に位置している。

南東柱穴からは、石皿（RQ62）が出土した。この石皿は、輝石安山岩製で縦23.6cm、横18.0 cm、厚さ6.5cm、重さ3.8kgであり、縁辺部は曲面が形成されている。石皿は、平滑面を上面として南東柱穴内の中位に位置している。

この石皿2点は、その出土状況から柱礎石、柱穴埋め戻し材等ではなく、それぞれ柱抜き取り後の柱穴内に据え置かれたものと判断する。

SK69

SK69は、楕円形を呈する土壙である。

SK69の法量は、東西0.6ｍ、南北1.2ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部は中央に向かいくぼんでいる。

SK70、SK74

SK70は、長方形を呈する土壙である。SK74はSK70の北端に位置するピットである。

SK70の法量は、東西0.7ｍ、南北1.7ｍ、遺構確認面からの深さ0.7ｍを測る。SK74の法量は、直径9cm、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

SK70は、2段造りの土壙であり、内法長120cm、内法幅62cmの長方形土壙の南端に、奥行き48cm、奥壁幅40cmのテラス部が1段高く備え付けられている。その底部北端には方形土壙が付加されているが、これは掘

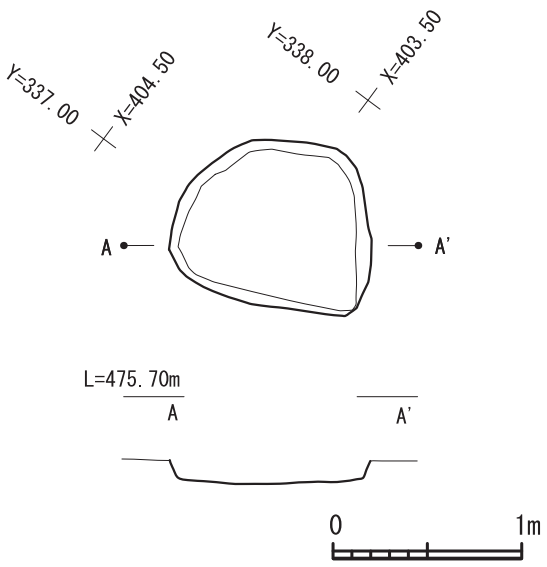


図180　SK73（1/40）

方である可能性が高い。この方形土壙を掘方とした場合には土壙底面は平坦に形作られ、付加された土壙とした場合には腰壙的なものとすることができよう。いずれにせよ、長方形土壙には床が貼られ、遺構確認面からの深さは42cmを測る。

掘方は、北半部は深く、南側ほど浅くなる。床から20cm程度の掘方であり、遺構確認面からの深さは68cmを測る。南側のテラス部には、長方形土壙に接して直径15cm、深さ11cmの半月形を呈する堀込が検出された。この部分の埋土は、灰褐色シルトが固く締まっており、周辺の黄褐色シルト（基本土層4層）とは様相が異なっていた。

SK74は、小ピットである。掘方等は付随しないため、杭穴であると判断している。SK74は、SK70の北端に接し、その中央に位置している。

SK70は木棺墓の墓壙である可能性が高い、と考える。南側のテラスは墓壙掘削、納棺の作業に使用されたステップであり、半月形の掘込みは木棺の固定に供された部分と推定する。なお、SK74は、この木棺墓の標柱等、地表の標識の部分である、と考えている。

SK71

SK71は、正方形を呈する土壙である。

SK71の法量は、東西1.5m、南北1.1m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙の底部は埋1層下面であり、平坦面が造り出されている。また、埋2層は貼床と判断している。

掘方は、土壙を形作るように配置されている。床面からの深さは10cm程度である。

SK72

SK72は、長方形を呈する土壙である。

SK72の法量は、東西1.6m、南北2.1m、遺構確認面からの深さ1.2mを測る。

SK72は、2段造りの土壙である。2.1m×1.6mの長方形大土壙の西壁に接して、内法長1.4m、内法幅0.6mの長方形の小土壙が付加され、結果として大土壙内東側には幅20cm程度のテラス部が形成されている。小土壙の底部には平坦面が形成され、テラスに向かう東壁は複数の段が構成する緩やかな立ち上がりを呈し、その他の壁は切り立っている。その底部南端には2段掘りのピットが付加されているが、これは掘方である可能性が高い。このピットを掘方の一部とした場合には土壙底面は平坦に形作られ、付加されたピットとした場合には腰壙的なものとすることができよう。いずれにせよ、小土壙には床が貼られ、遺構確認面からの深さは58cmを測る。

掘方は、南端部と北西隅にピットが設けられている。床から70cm程度の掘方であり、遺構確認面からの深さは118cmを測る。南側のテラス部には、小土壙の上端部に接して楕円形のピット2基が検出された。

大土壙の北東隅には直径40cmのピットが存在する。また、北端から50cm程南の東辺、西辺の上端部には、それぞれ、小ピットが付加されている。

SK70は木棺墓の墓壙である、と考える。小土壙が納棺壙であり、大土壙内東側のテラスは墓壙掘削、納棺の作業に使用されたステップである、と推定する。大土壙の北東隅に位置するピット、北側に並列する小ピットは、この木棺墓の標柱等、地表の標識の部分である可能性が高い。

SK73

SK73は、方形を呈する土壙である。

SK73の法量は、東西0.8m、南北1.1m、遺構確認面

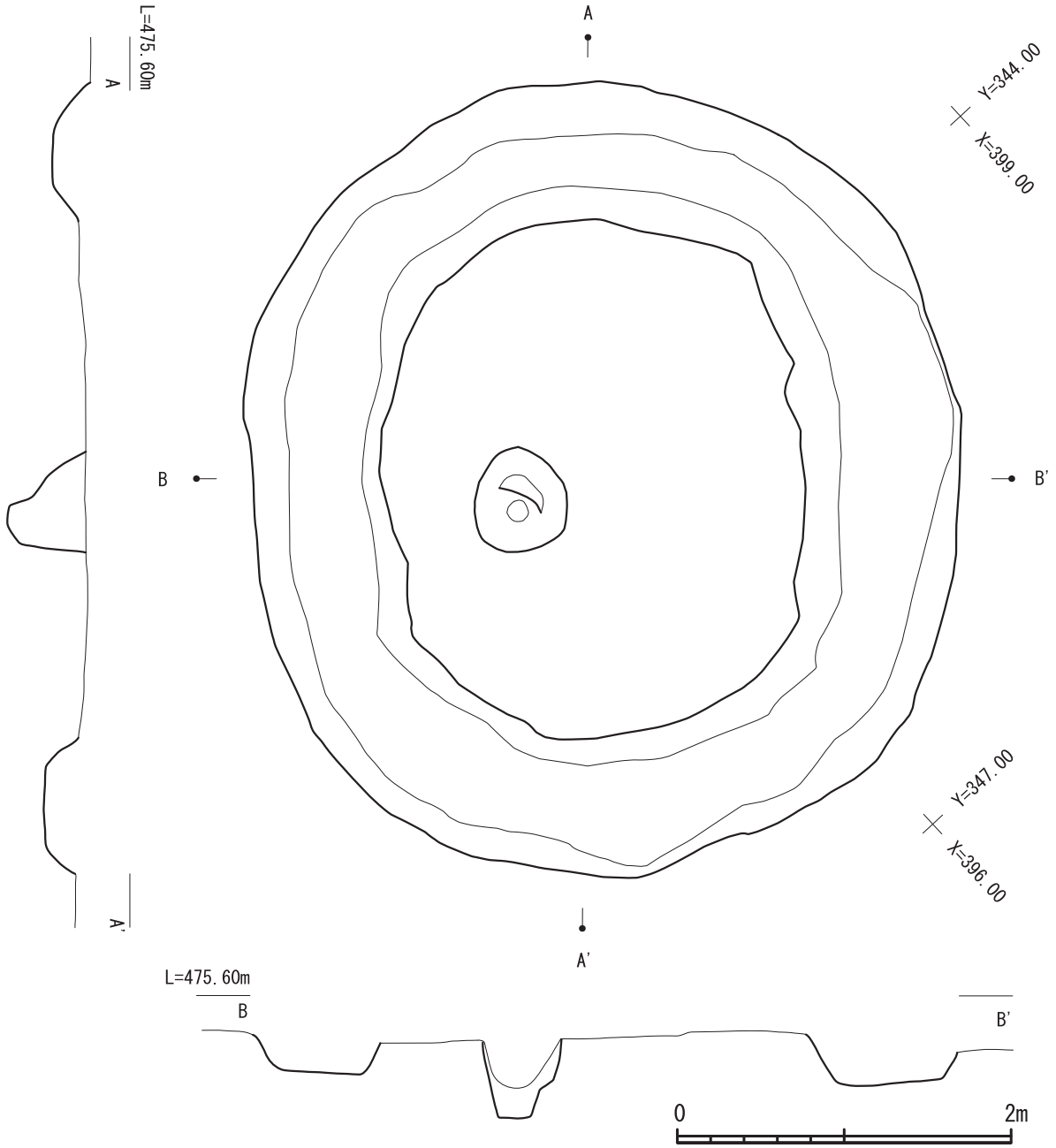


図181　SD57（1/40）

からの深さ10cmを測る。

土壙の底部には平坦面が造り出されている。

その他

下扇原遺跡3区では、遺構番号は欠番していない。

なお、包含層等から出土した遺物を一括して掲載した。

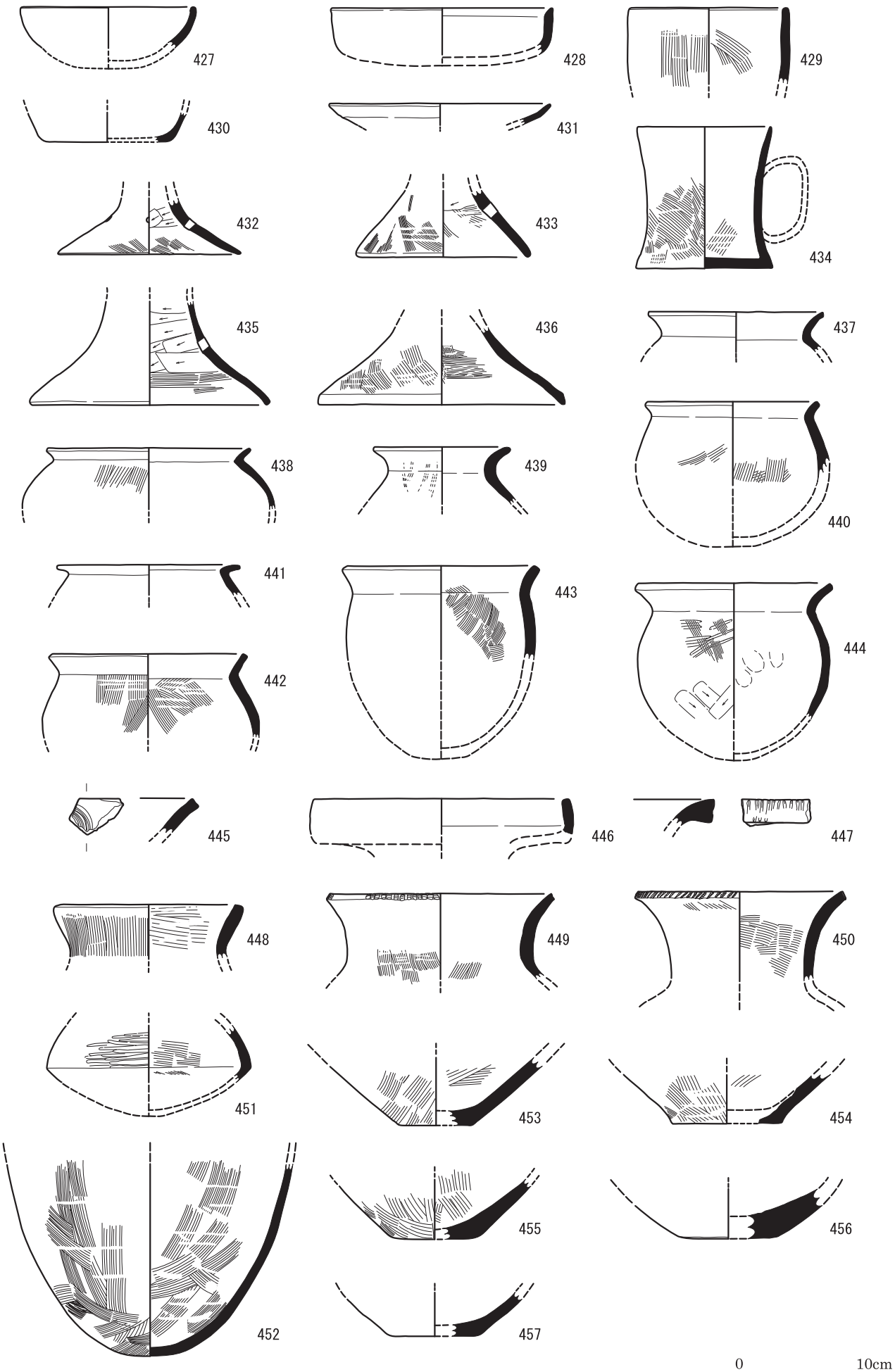


図 182　土器（RP）実測図（3 区一括）

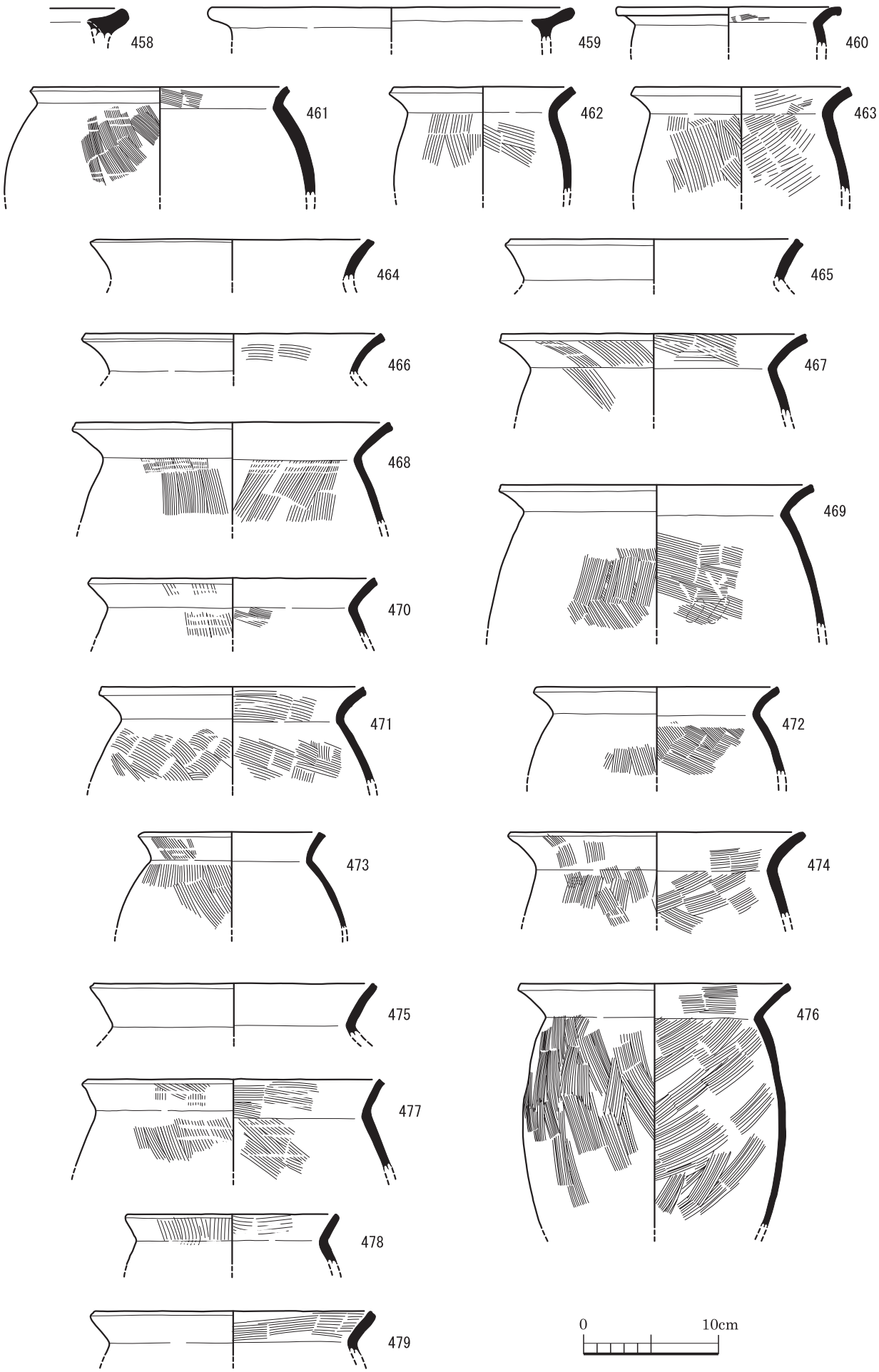


図 183　土器（RP）実測図（3 区一括）

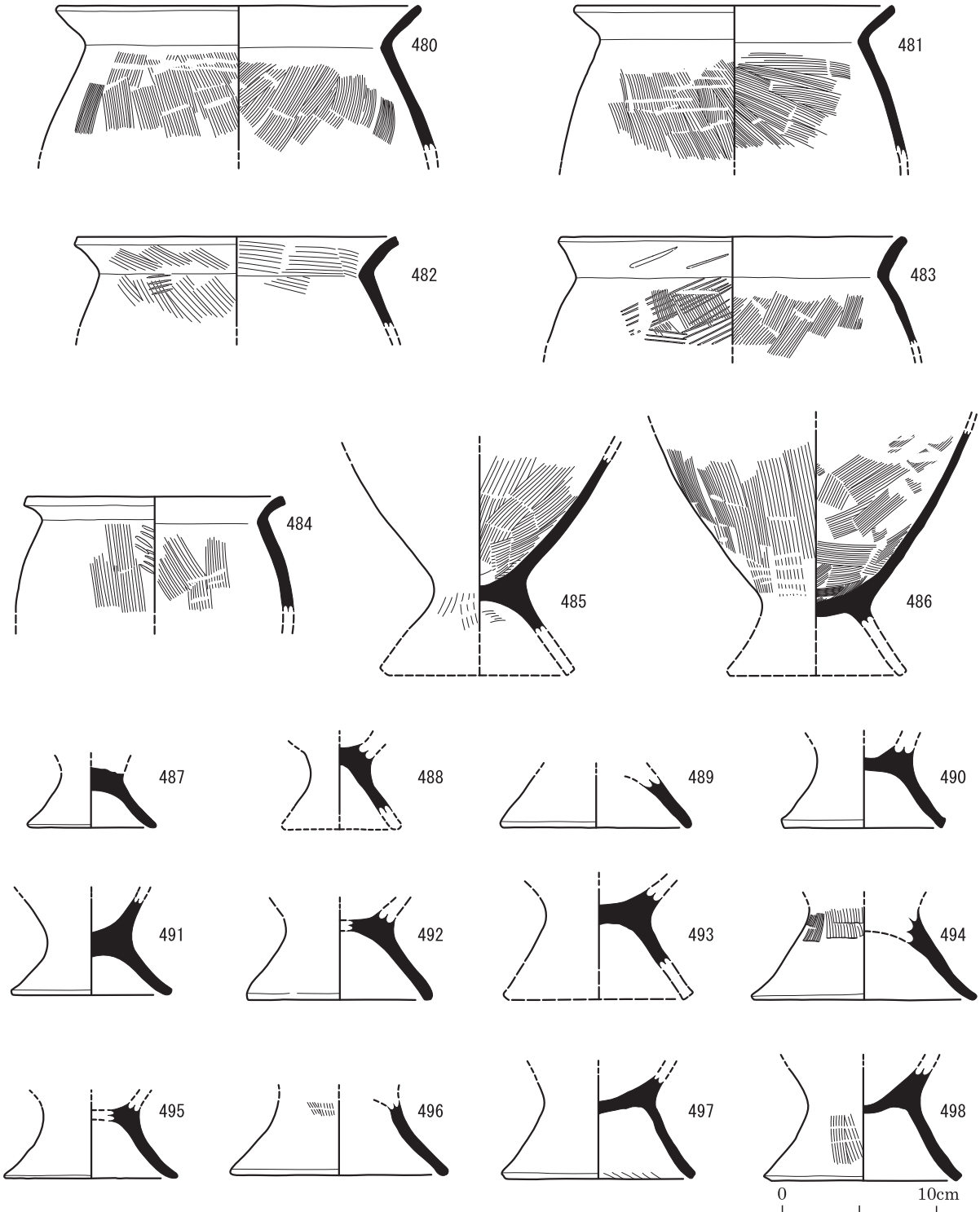


図 184　土器（RP）実測図（3 区一括）

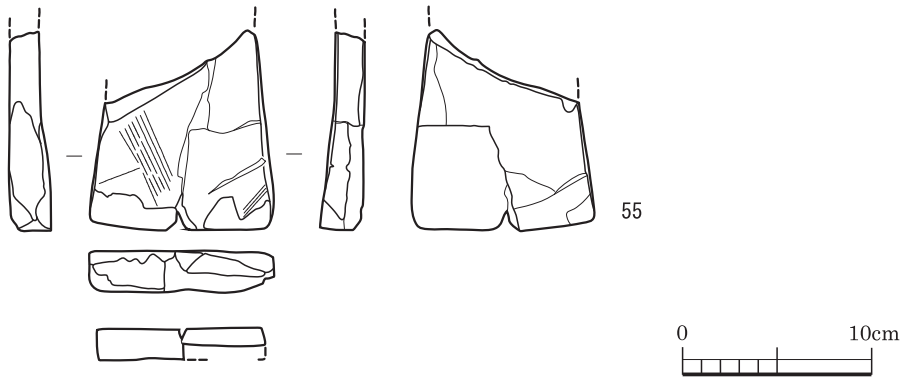


図 185　石器（RQ）実測図（3 区一括）

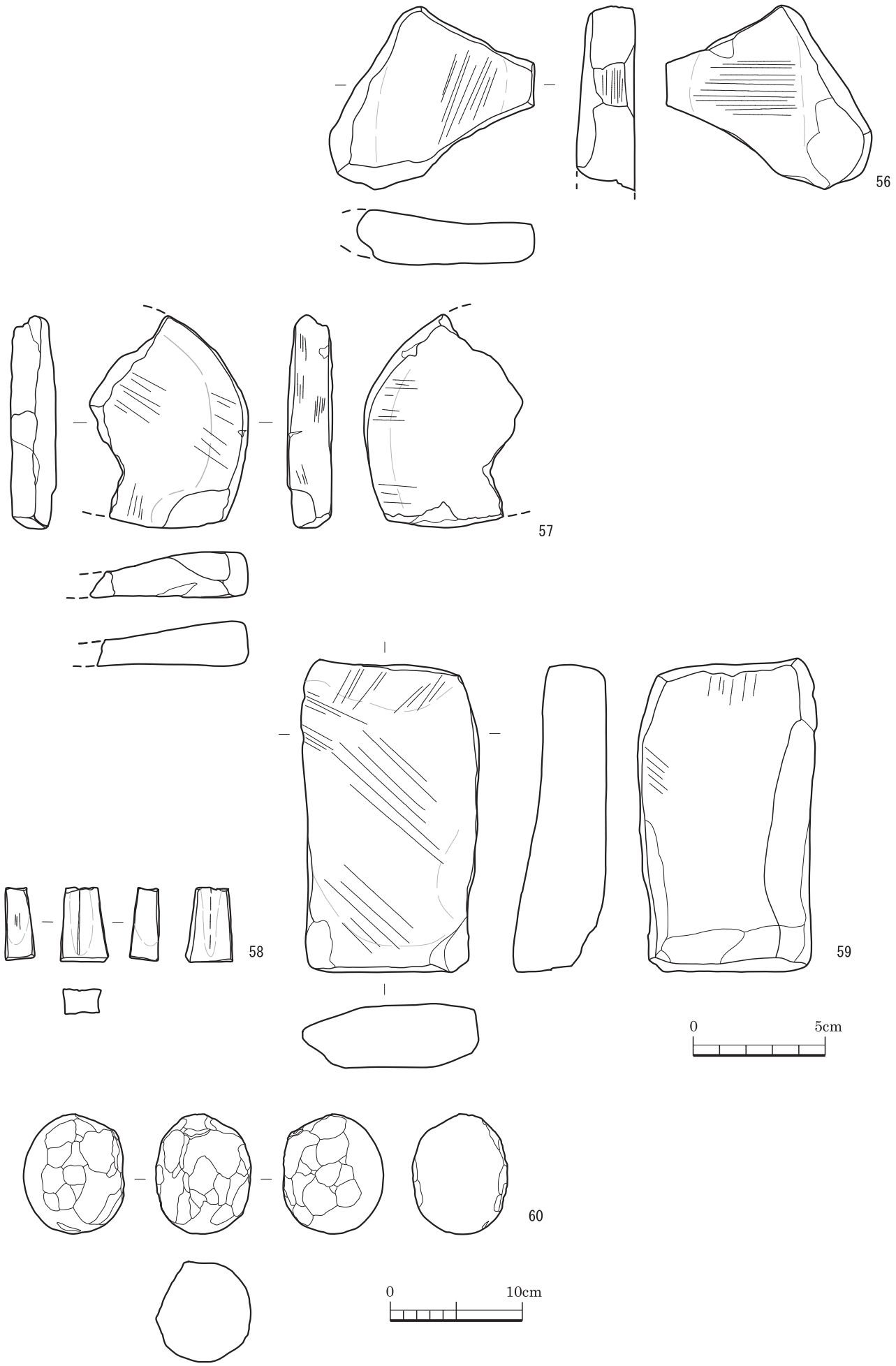


図 186　石器（RQ）実測図（3 区一括）

２－４　下扇原遺跡４区の調査

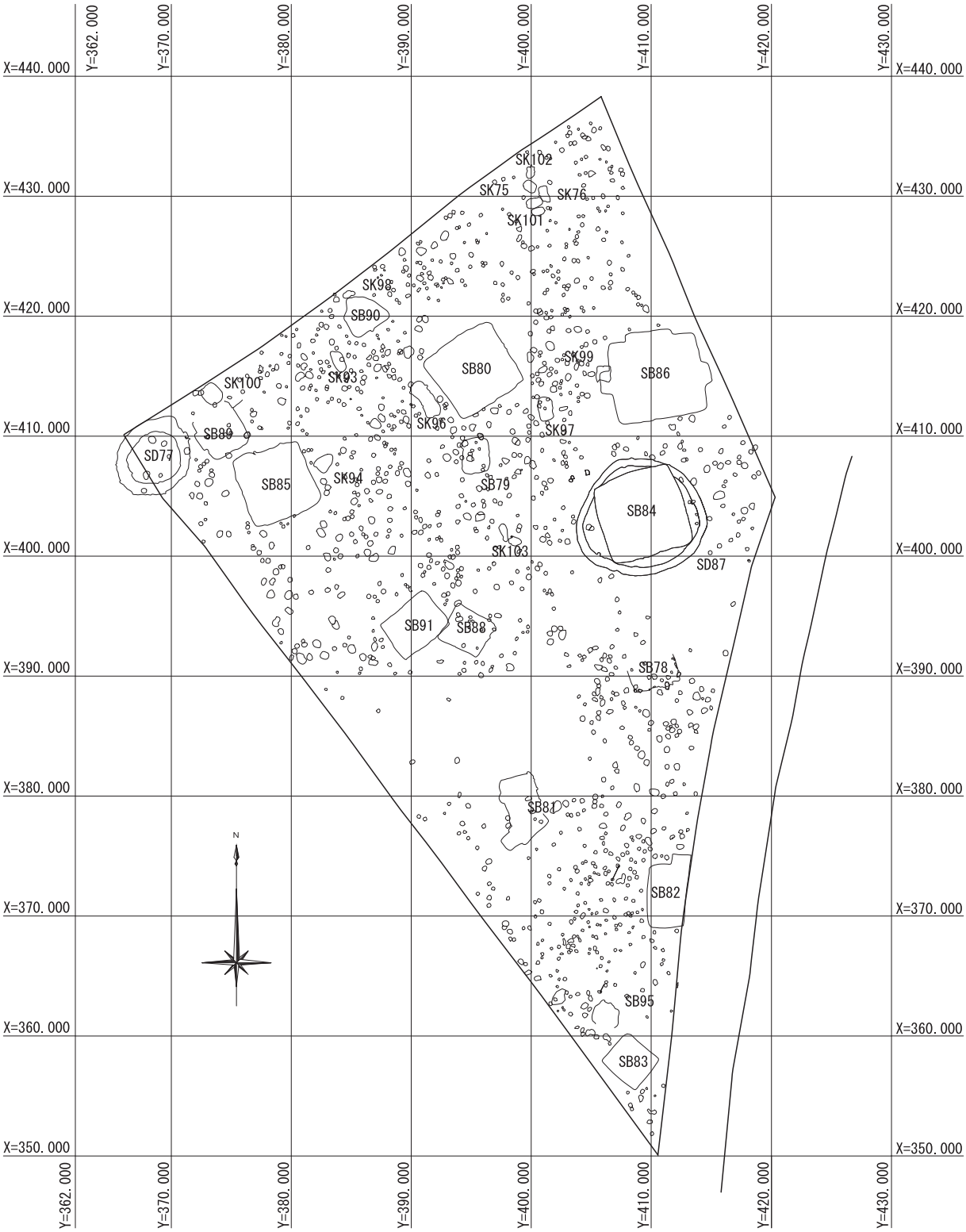
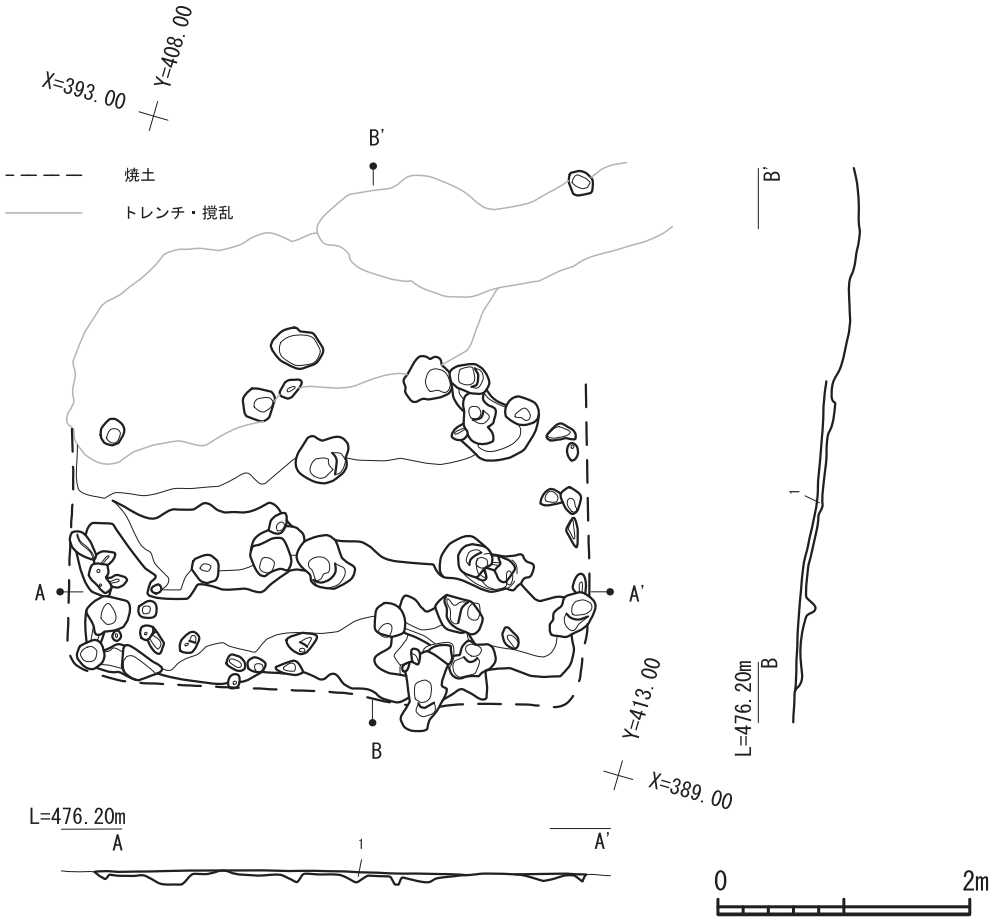


図 187　下扇原　４区遺構配置図 (1/500)



1　貼床　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック（2cm程度）混　炭混
しまり中　粘性中　遺物：土器片

図 188　SB78（1/60）

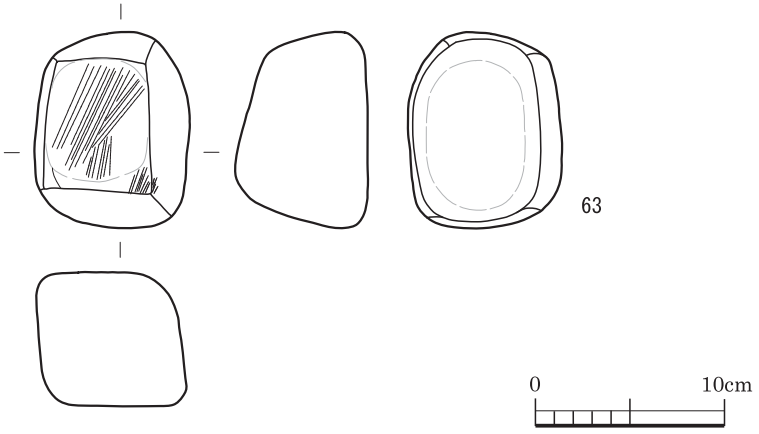
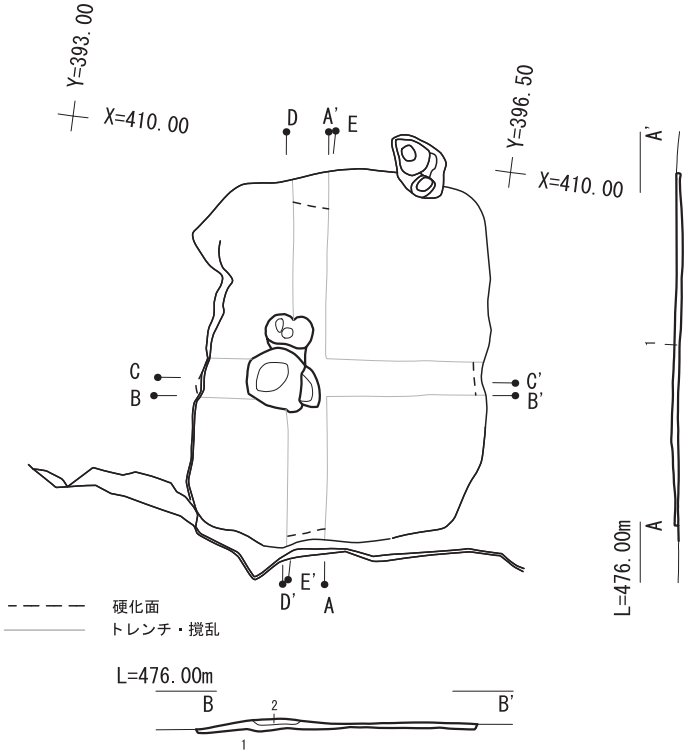


図 189　石器（RQ）実測図（SB78）



1　貼床　暗褐色シルト　褐色シルトブロック（3cm弱）混　ところどころに炭を含む
　　通常の貼床と違って含まれるブロックの割合が少なく、また粒も小さいため、色調が暗く、全く硬化していない
　　しまり中　粘性中

2　炉埋土1層（焼土）橙色シルト　灰･炭を多く含む　橙色･1層の焼土の下部で炭･灰が検出される
　　この焼土下には、火を受けて若干硬化している部分とそうでない部分とがある　しまり中　粘性中

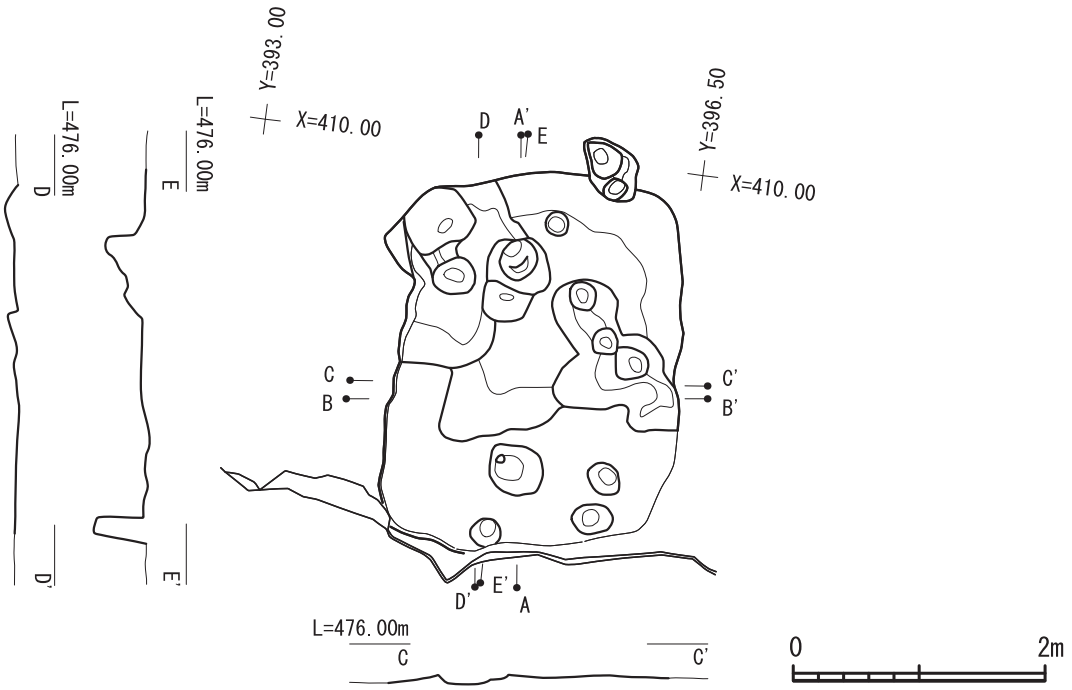
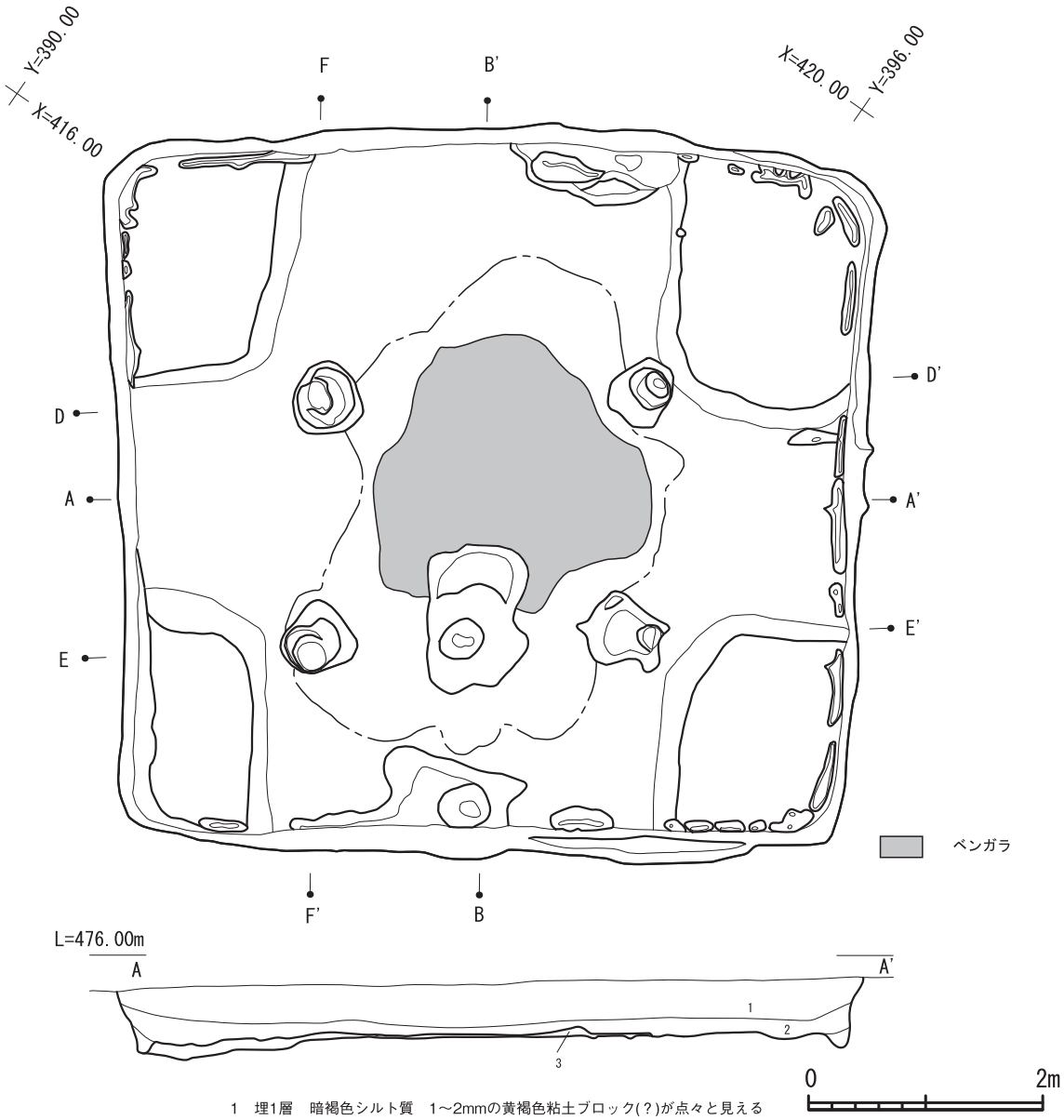


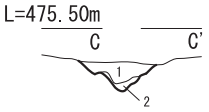
図 190　SB79（1/60）



1　埋1層　暗褐色シルト質　1～2mmの黄褐色粘土ブロック(？)が点々と見える
炭混(下にいく程多くなる)　しまり中　粘性中

2　埋2層　暗褐色シルト質(部分的に1層より黒く見える所もある)
大きな黄褐色粘土ブロックが壁側にいく程多く含まれる　炭1層より多い
しまり1層よりやや弱めの中　粘性1層よりやや強めの中

3　埋3層　明褐色シルト質　粘土ブロック等があまり入っていない
中央部にのみ存在することからベンガラを床にまいた跡かもしれない
しまり中　粘性中



1　住居の埋2層とほぼ同じであるが小さな炭化物が入っていて削るとジャリジャリとする
オレンジ粘土ブロックも混

2　やはり埋2層に起因する土が入っているが、黒い土(灰まじり)が多く入っている
しまりは1に比べ弱めの中

図191　SB80　床面（1/60）

SK75

SK75は、長方形を呈する土壙である。

SK75の法量は、東西1.1ｍ、南北0.8ｍ、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

土壙の底部には、西端に浅いピット、小ピットが穿たれ、東半部には正方形を呈する小土壙が2段掘りで設けられている。

SK76

SK76は、長方形を呈する土壙である。

SK76の法量は、東西0.7ｍ、南北1.4ｍ、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙の底部は平坦化され、中央部に浅いピット2基、複数の小ピットが穿たれている。

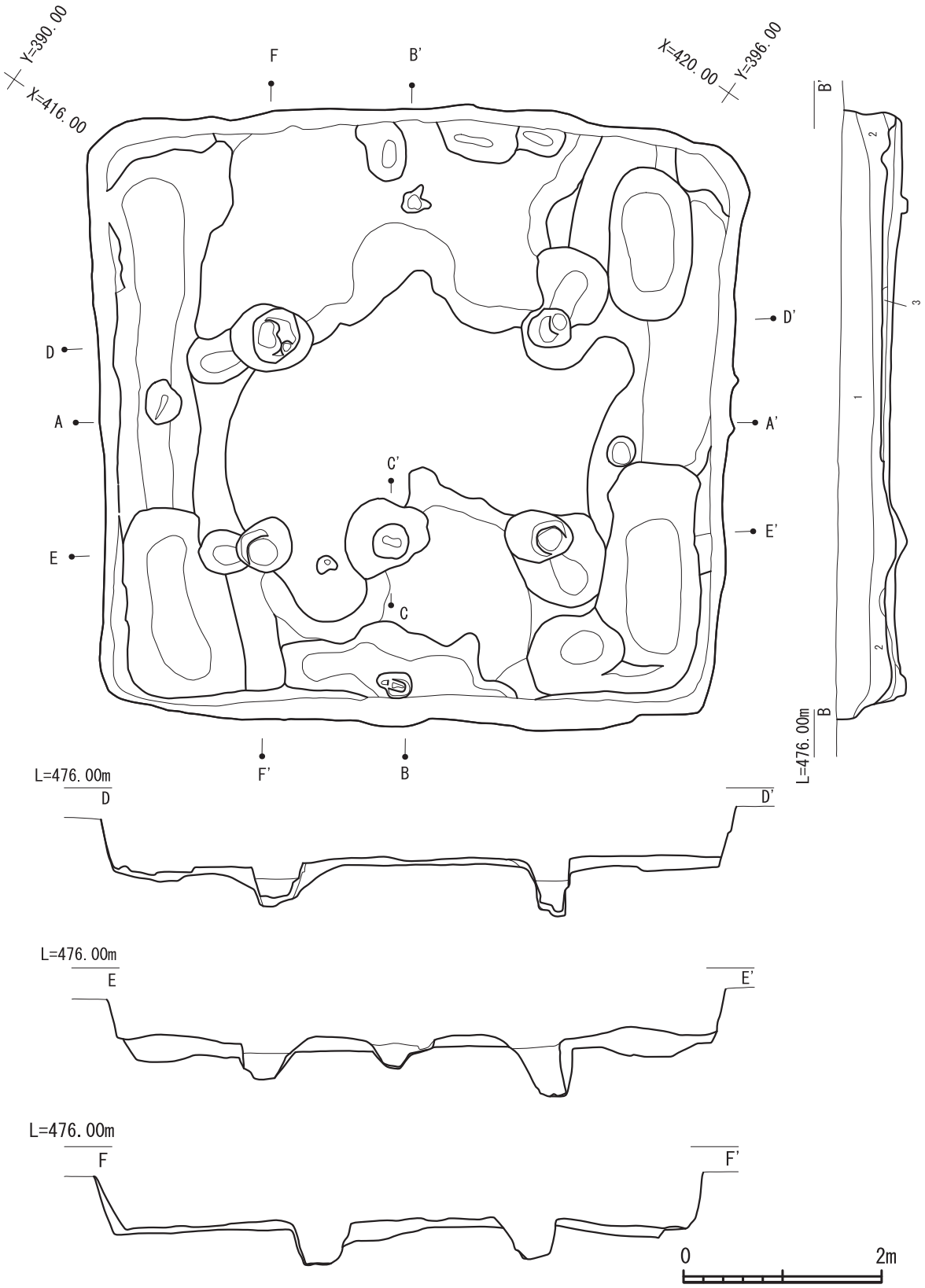


図 192　SB80　掘方（1/60）

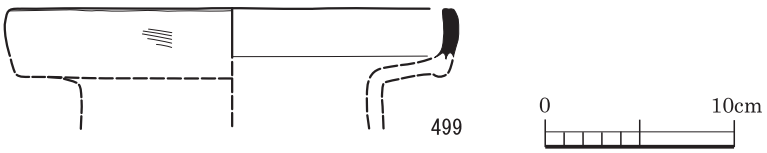
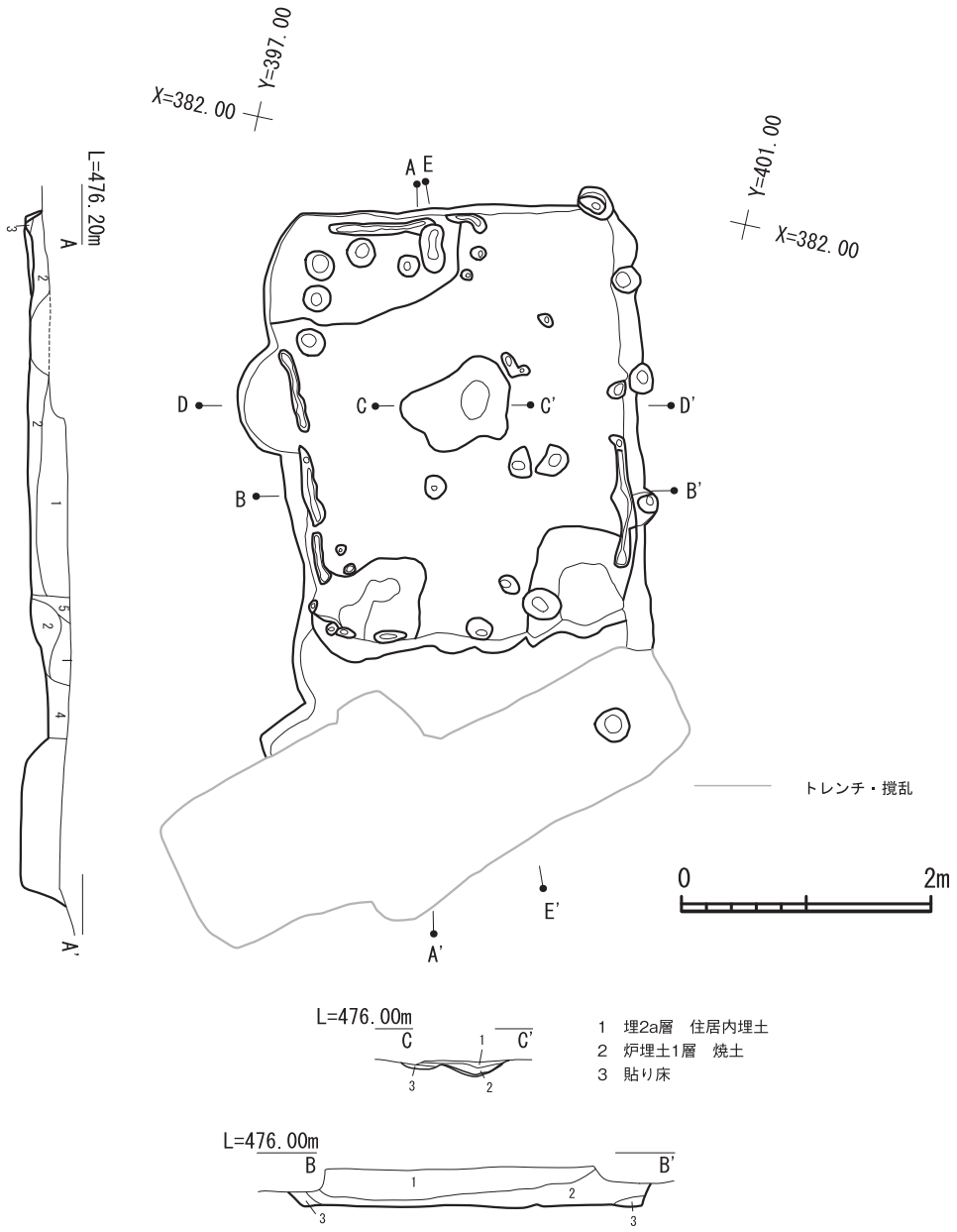


図 193　土器（RP）実測図（SB80）



1　埋2a層　住居内埋土
2　炉埋土1層　焼土
3　貼り床

1　埋1層　黒褐色シルト　炭が混じる　しまり中　粘性中

2　埋2a層　黒褐色シルト　褐色シルトブロック(2cm大)、黄褐色シルトブロック(2cm弱)混
埋1層よりは炭を多く含む　南壁中央部の埋2a層に大量のベンガラが含まれている
土器片が多く出土したのもこの層である　しまり中　粘性中

3　埋2b層　黒褐色シルト　褐色シルトブロック(2cm弱)、黄褐色シルトブロック(2cm弱)混
埋2a層より細かいブロックを多く含むため、全体の色調が明るく見える
主に側壁溝を埋めている埋土である　しまり中　粘性中

4　埋3層　暗褐色シルト　南壁のみを埋めている埋土である
ベンガラを大量に含む埋2a層の下に入っている様子が確認できる
しまり中　粘性中

5　撹乱

図 194　SB81　床面（1/60）

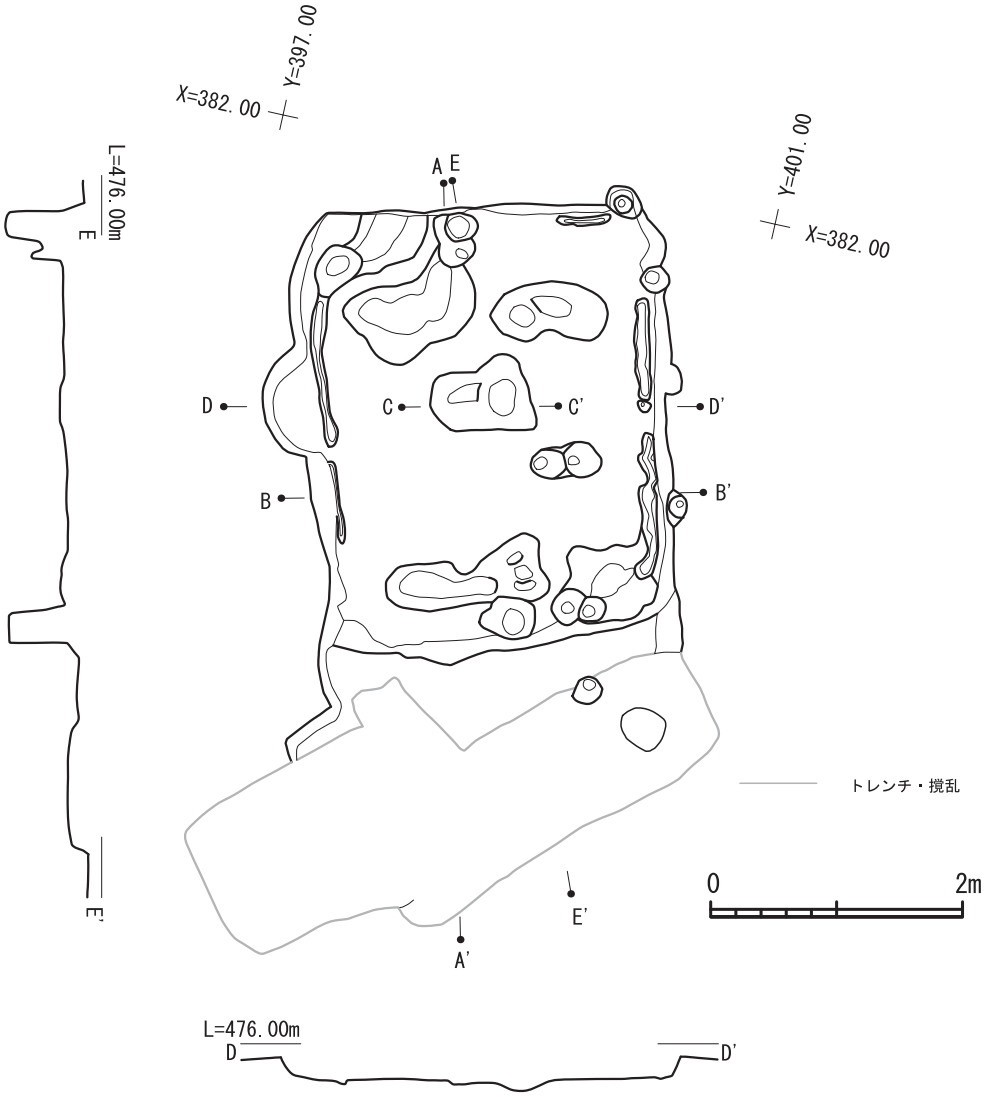


図 195　SB81　掘方（1/60）

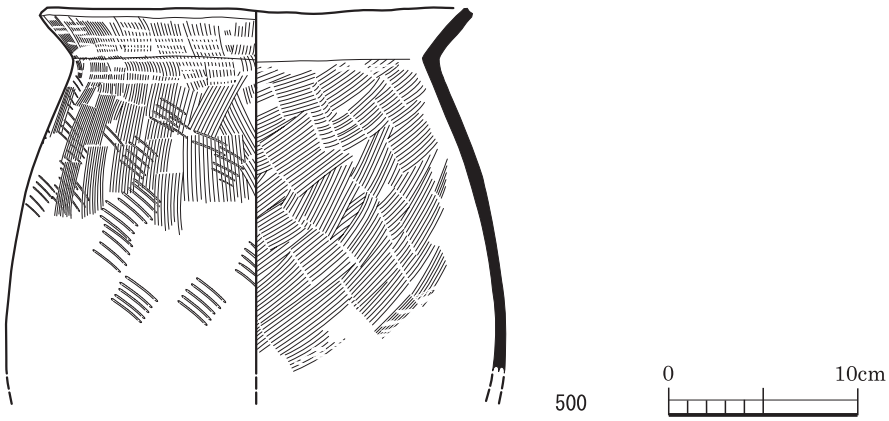
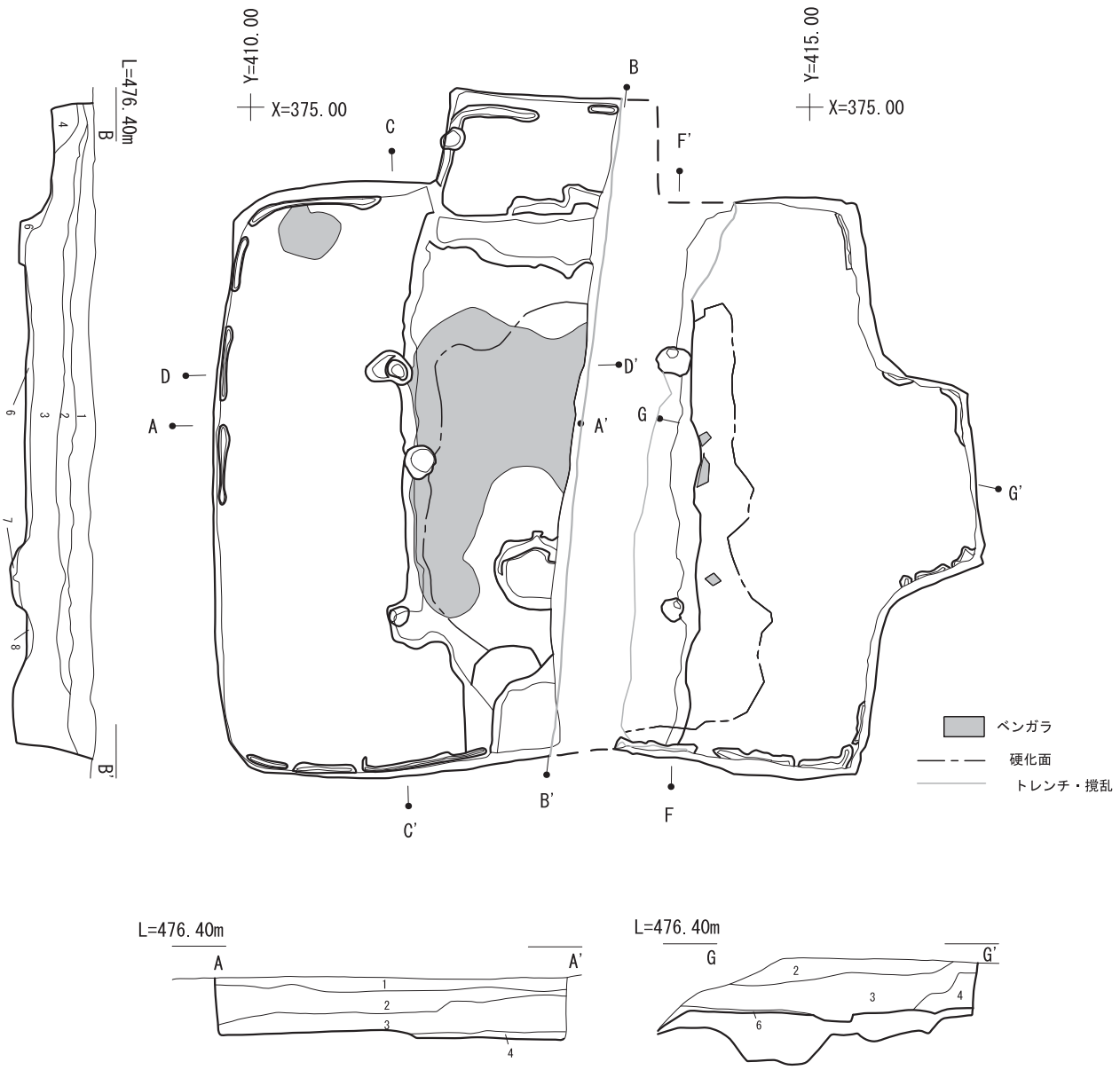


図 196　土器（RP）実測図（SB81）



1　埋1層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中

2　埋2層　暗褐色シルト　褐色シルトブロック(2cm程度)、黄褐色シルトブロック(2cm弱)混　しまり中　粘性中

3　埋2b層　暗褐色シルトと黒色シルトに褐色シルトブロック(1～3cm強)、黄褐色シルトブロック(1～3cm強)混
黒色シルトが混じるため埋2層より色調が暗くなる　土器に加えて鉄が数多く遺存していた層である　炭混　しまり中　粘性中

4　埋2c層　暗褐色シルトと黒色シルトに褐色シルトブロック(0.5～2cm)、黄褐色シルトブロック(0.5～2cm)混
埋2b層より褐色・黄褐色シルトブロックの粒が小さく、また混じり具合も密である
埋2c層直上の埋2b層より色調が暗い　しまり中　粘性中

5　埋2d層　黒色シルトと褐色シルトに褐色シルトブロック(1～3cm混)　直上の埋2b層よりはるかに色調は暗い　しまり中　粘性中

6　埋3層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中

7　炉埋土1層　黒色シルト　炭混　しまり小　粘性中

8　炉埋土(かき出し)　黒色シルト　黄褐色シルトブロック(0.5～2cm)混　炭混　しまり中　粘性中

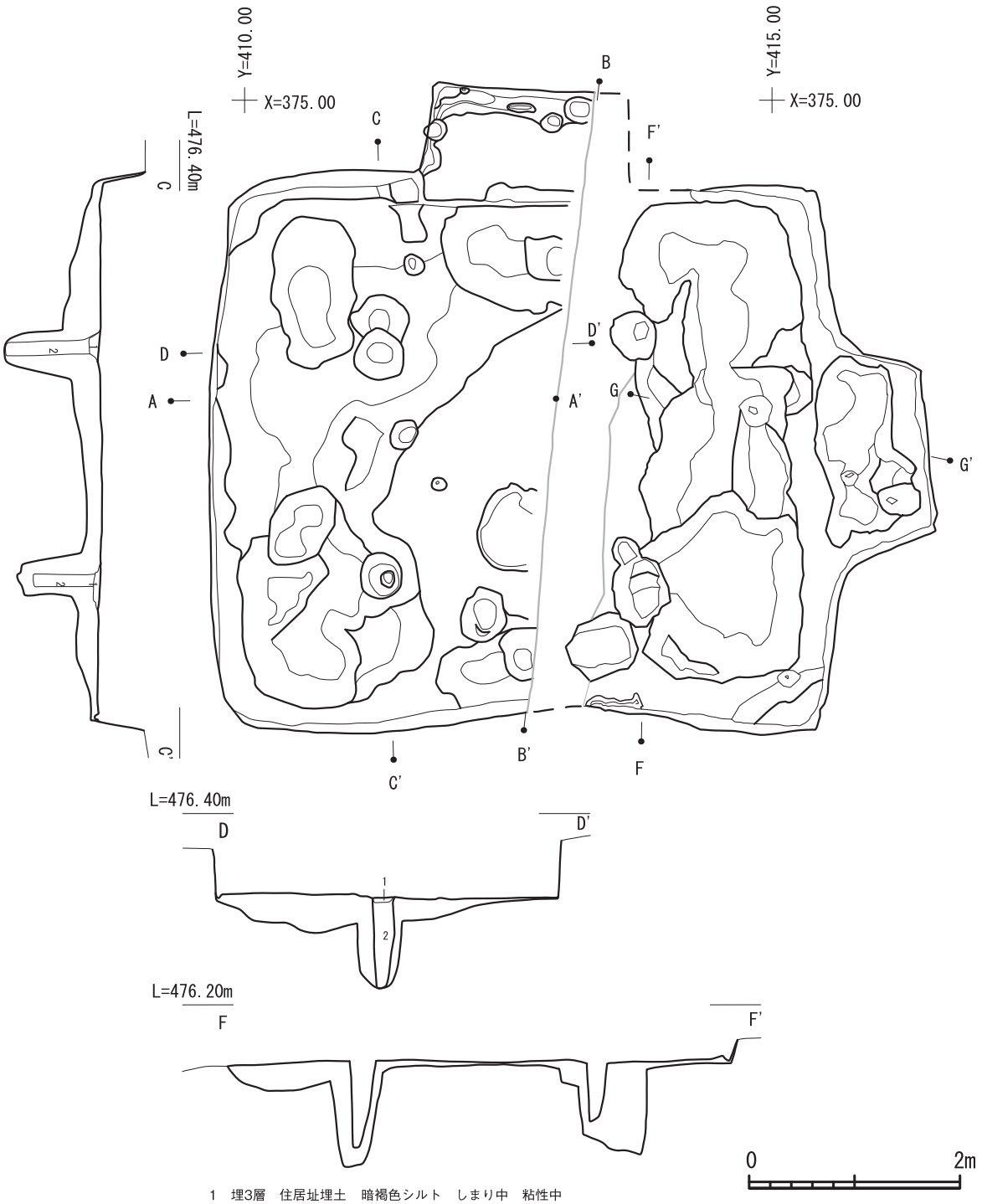
0　2m

図197　SB82　床面（1/60）

SD77

SD77は、円形周溝である。遺構全体に後代の地割れが東西に走る。

SD77は、幅80cm、深さ50cmの溝が円形にめぐる。円は楕円に近く、長径7m、短径6m程度である。この円形周溝は、大別して3段階の掘削工程を経ている。まず、円形周溝の西端位置を起点として円周の1/2弱の半円弧が北半部、南半部にめぐる。しかし、半円弧が短いため、東端には2m程度の空隙が生じる。この部分に、長さ1m程度の長方形の土壙2基が連接して空隙を埋め円周を閉じさせる。最後に、周溝の北端部分に長さ2m程度の長方形土壙を穿ち、円形周溝は完成する。円周の溝底には平坦面が形成され、先の掘削工程の各段階内では大きな段差を生じることなく、同一深度を保っ



1　埋3層　住居址埋土　暗褐色シルト　しまり中　粘性中
2　埋1層　柱穴埋土　茶褐色シルト　しまり小　粘性中　上部は直下の埋3層(暗褐色シルト)が多く混じる
下部へいくほどしまりが小さい　しまり小　粘性中

図 198　SB82　掘方（1/60）

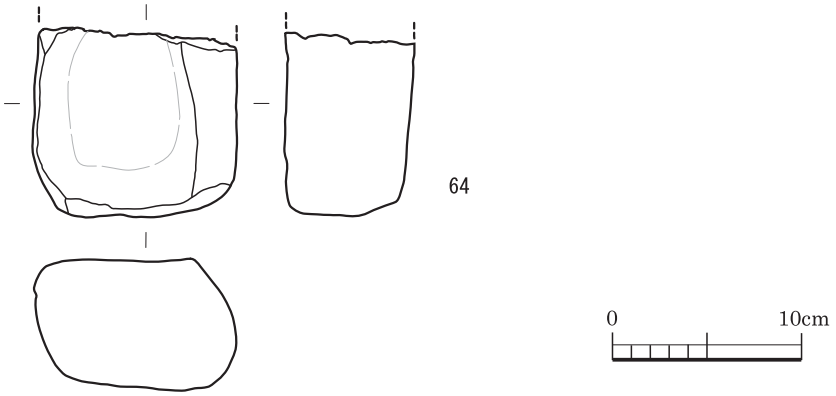


図 199　石器（RQ）実測図（SB82）

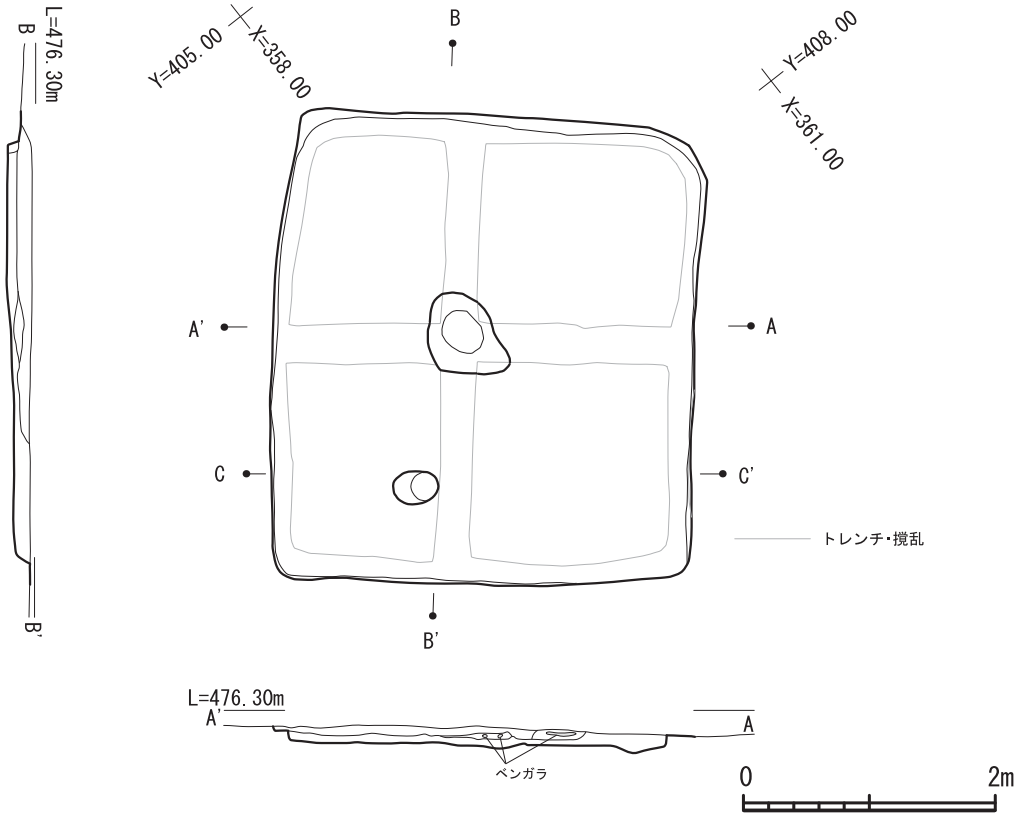


図200　SB83 床面（1/60）

てめぐっている。

周溝内部には複数のピットが存在する。ピットの直径は約55cm、深さは50cmを測る。

SD77の埋土は、位置によって逆転しており、掘削作業中には擬似硬化面とも言うべく、踏み固められたような面がランダムに検出されている。このことから、SD77は、短期間のうちに人為的に埋め戻されたもの、と判断する。

SB78

SB78は、方形を呈する竪穴住居跡である。後代に形成された迫地の傾斜部に位置し、その地形変化の影響を受けて上半部が逸失している。その南半部に相当する部分のみ確認することができた。

SB78の法量は、南北は2.9mを確認し、東西4.1mを測る。

主柱穴は、確認していない。確認プランの中央、東よりに2×2の4本柱建てを想定しているが、主柱穴を定立するには至っていない。なお、掘削した埋土は、竪穴住居の掘方埋土であり、竪穴住居跡の最下部を検出したものと考えている。

SB79

SB79は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB79の法量は、南北2.9m、東西2.3m、遺構確認面からの深さ5cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、竪穴住居の南北中軸ライン上に設けられ、ともに内傾している。硬化面は、形成されていない。

炉は、南北50cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶラインに接し、竪穴住居の中央より西側の位置にある。炉の北側には、炉より小規模なピットが1基存在し、炉と連接している。炉、小規模ピットともに焼土を包含しており、両者が複合して炉跡を形成している、と判断する。炉底は皿形に浅く掘られている。

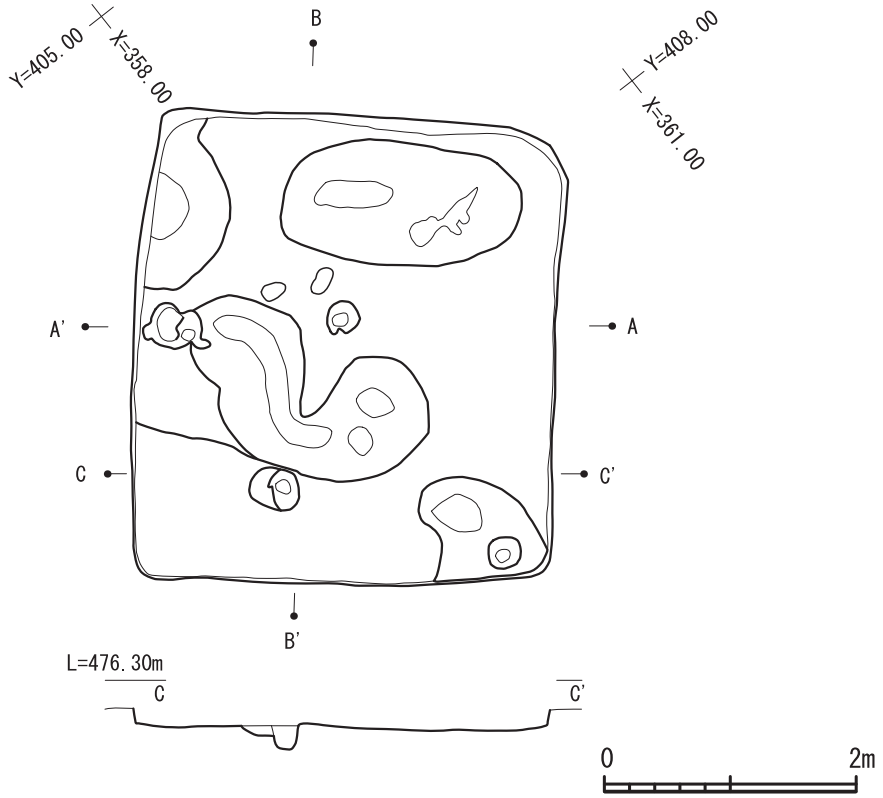


図 201　SB83　掘方（1/60）

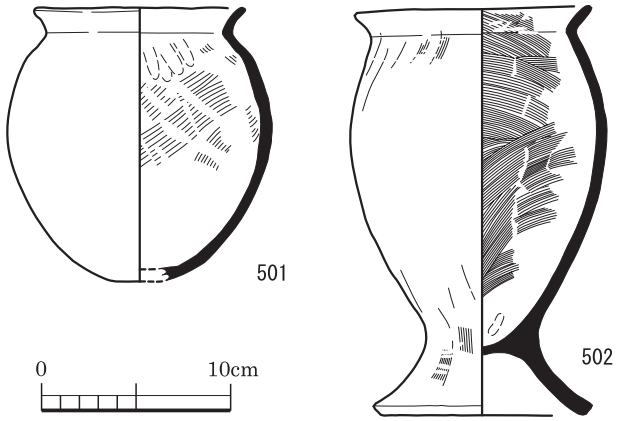


図 202　土器（RP）実測図（SB83）

Kピット、ベッド状遺構は、検出していない。

竪穴住居の北側壁上端、東よりに柱穴と考えられるピットが位置しているが、その性格を判断するには至らない。

床は貼床であり、竪穴住居全体に均一に貼床されている。

掘方は、竪穴住居北半部を1段低く掘りくぼめ、さらに北西隅に長方形の土壙を掘削している。複数のピットが検出されているが、ランダムに配置されている、と判断している。竪穴住居の南半部は平らに整えられ、掘方の最深部は床面から約10cmの深度である。

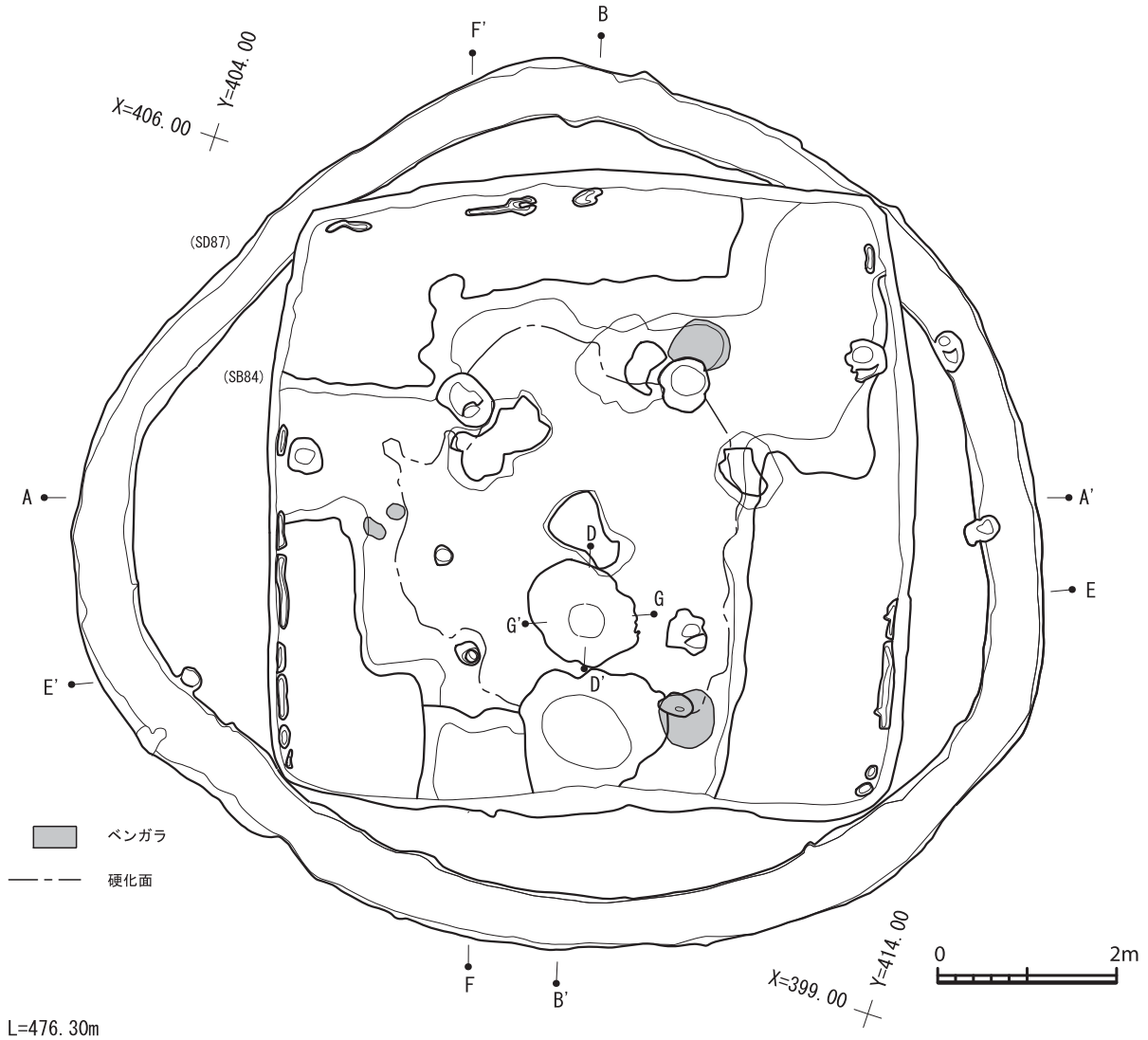
SB80

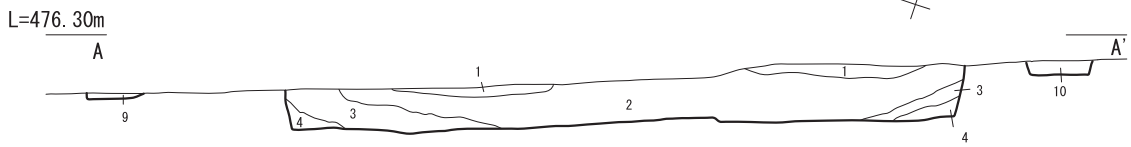
SB80は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

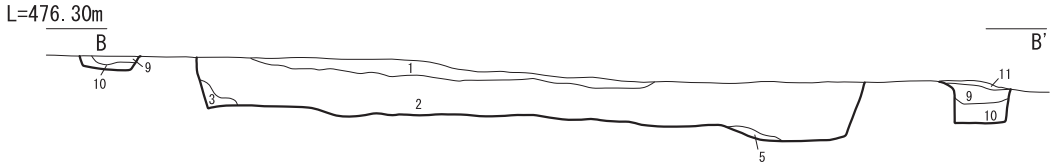
SB80の法量は、南北6.2 m、東西6.5 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北側、南側で発達し、東側、西側では発達度が低い、なかでも西側にはあまり形成されていない。

炉は、南北70cm、東西90cmの円形を呈し、深さは







1　埋1層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中

2　埋2a層　暗褐色シルト、黒褐色シルトに黄褐色・褐色シルトブロック(2.3mm～7.8cm)、黒色シルトブロック(1cm程度)混
炭混　しまり中　粘性中

3　埋2b層　暗褐色シルト、黒褐色シルトに黄褐色・褐色シルトブロック(2.3mm～7.8mm)混
埋2a層よりもブロックを多めに含むため、色調が明るく見える　炭混　しまり中　粘性中

4　埋3a層　黒褐色シルトに黄褐色シルトブロック(2.3mm～4cm)、褐色シルトブロック(1～6cm大)混　しまり中　粘性中

5　埋3b層　黒褐色シルトに黄褐色シルトブロック(2cm弱)混　埋2a･2b層より多く炭･灰を含んでいる　しまり中　粘性中

9　埋1層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　(＝SB84　埋1層)

10　埋2層　暗褐色シルト　黄褐色・褐色シルトブロック(5mm～2cm)混　炭混　しまり中　粘性中　(＝SB84　埋2層)

11　カクラン　阿部牧場の堆肥直下であったため残された鉄ゴッチン

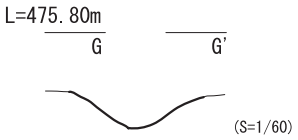
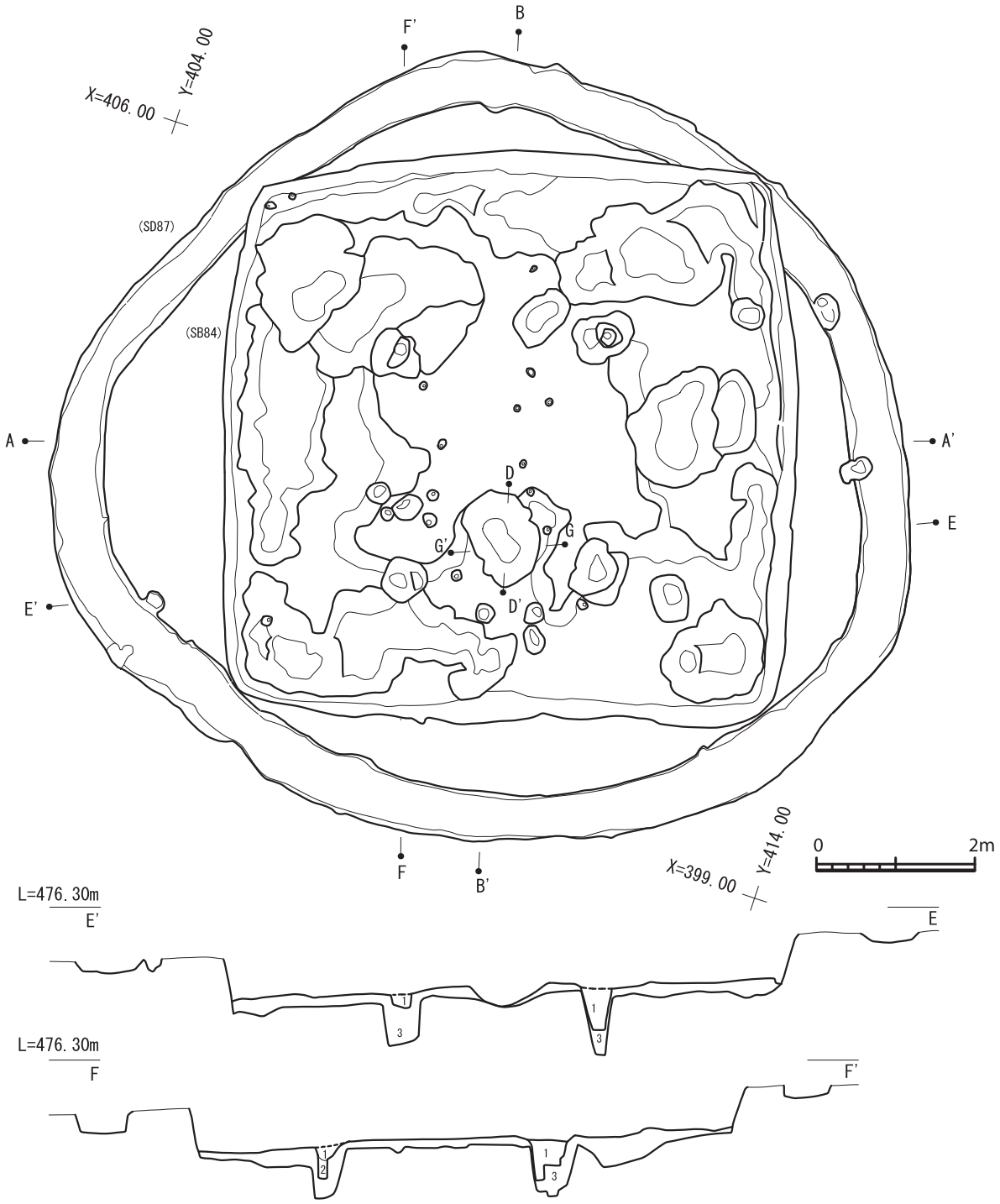
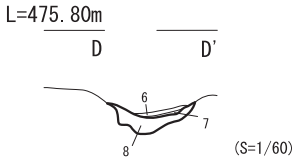


図 203　SB84･SD87　床面（1/80）



1　埋2a層
2　埋1層　南東G主柱穴　柱穴埋土　暗褐色シルト　しまり中(小)　粘性中
3　掘方埋土(貼床)　暗褐色シルト　黄褐色シルト(5mm～2cm)ブロック、褐色シルト(5mm～8cm)ブロックを大量に含む
ベッド状遺構、住居址中央部の硬化面には黄褐色粘土ブロックも含んでいる　しまり中　粘性中



6　炉埋土1層　黒色シルト　炭が大量に混じる　しまり小　粘性中
7　炉埋土2層　暗褐色シルト　にぶい赤褐色の焼土を含む
しまり小　粘性大
8　貼床　SB84掘方埋土　※掘りすぎ

図 204　SB84･SD87　掘方（1/80）

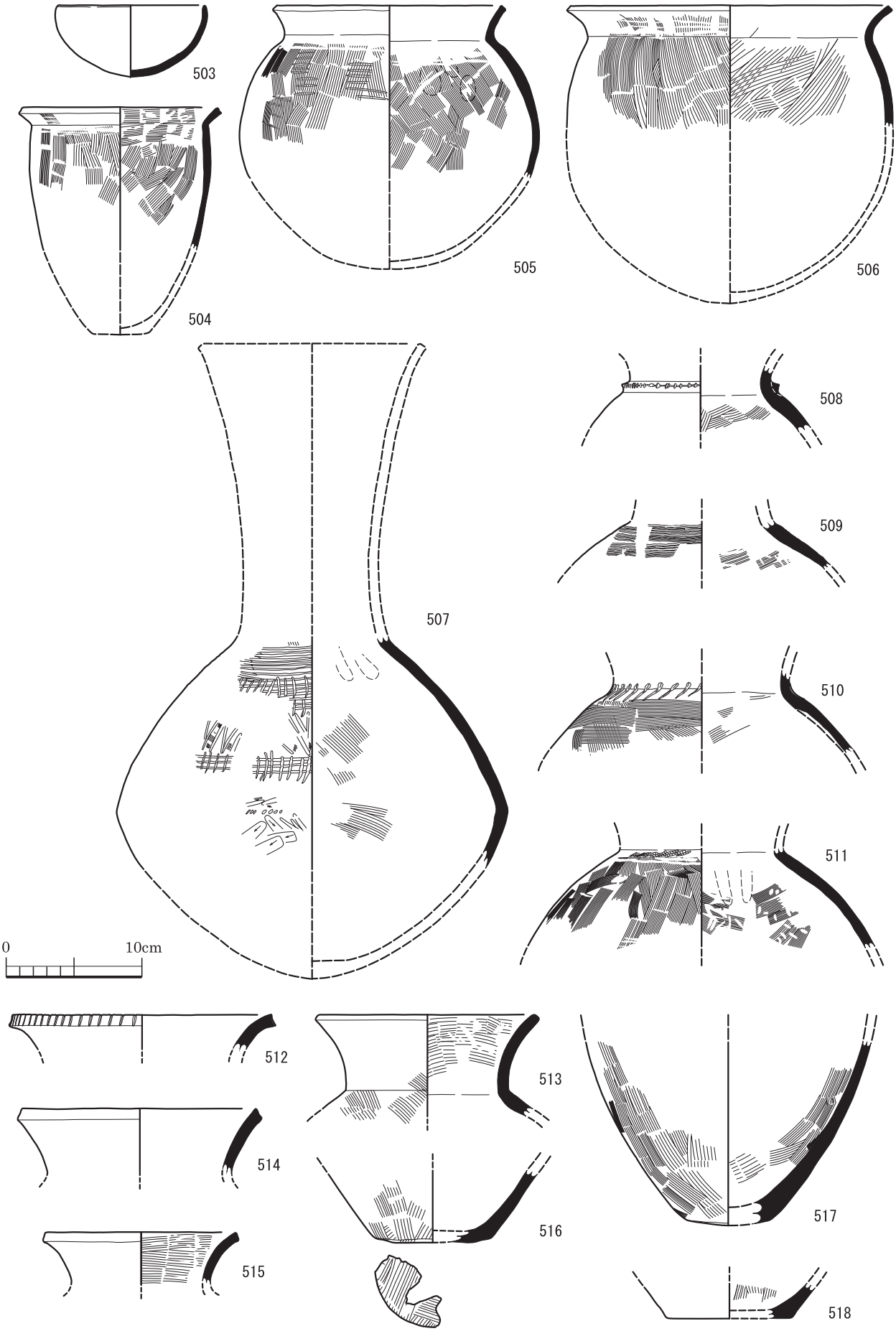


図 205　土器（RP）実測図（SB84）

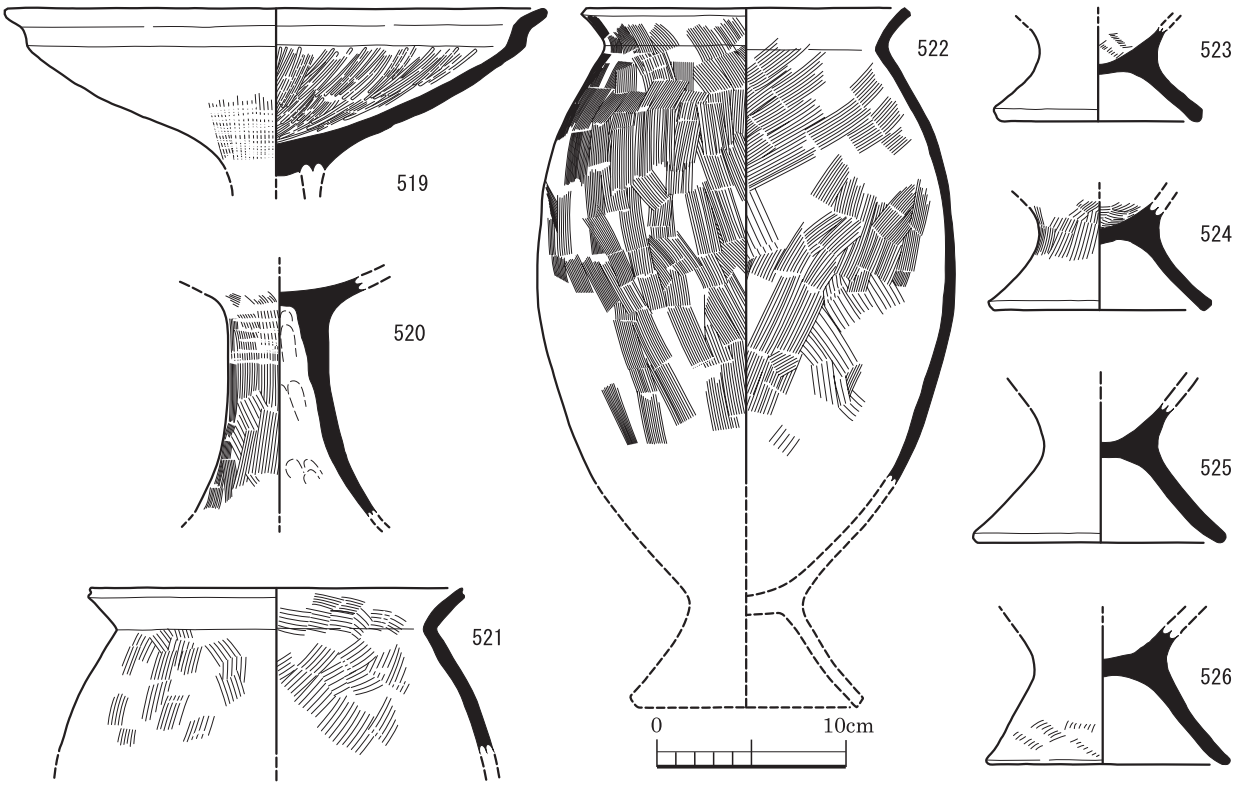


図 206　土器（RP）実測図（SB84）

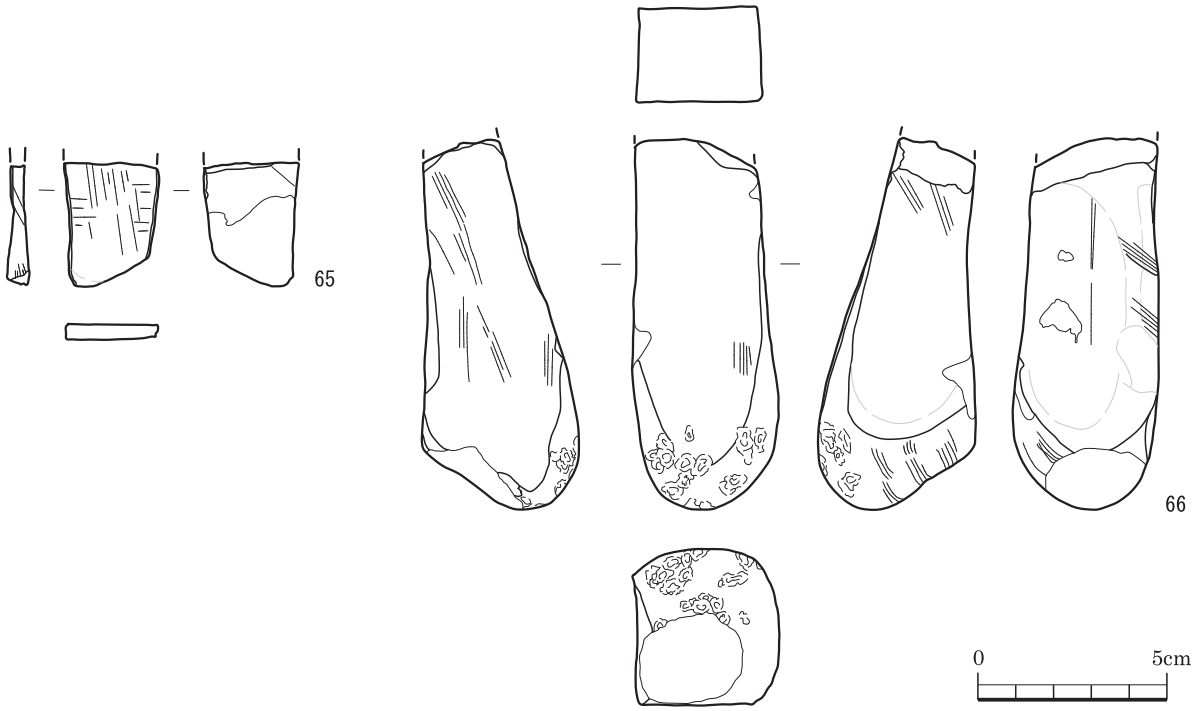


図 207　石器（RQ）実測図（SB84）

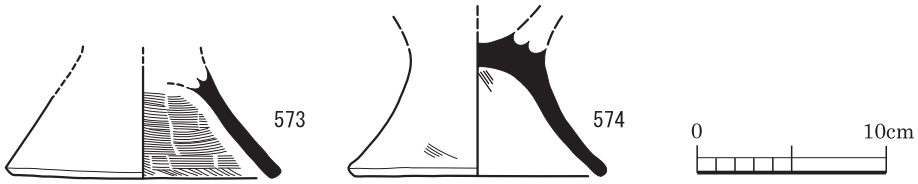
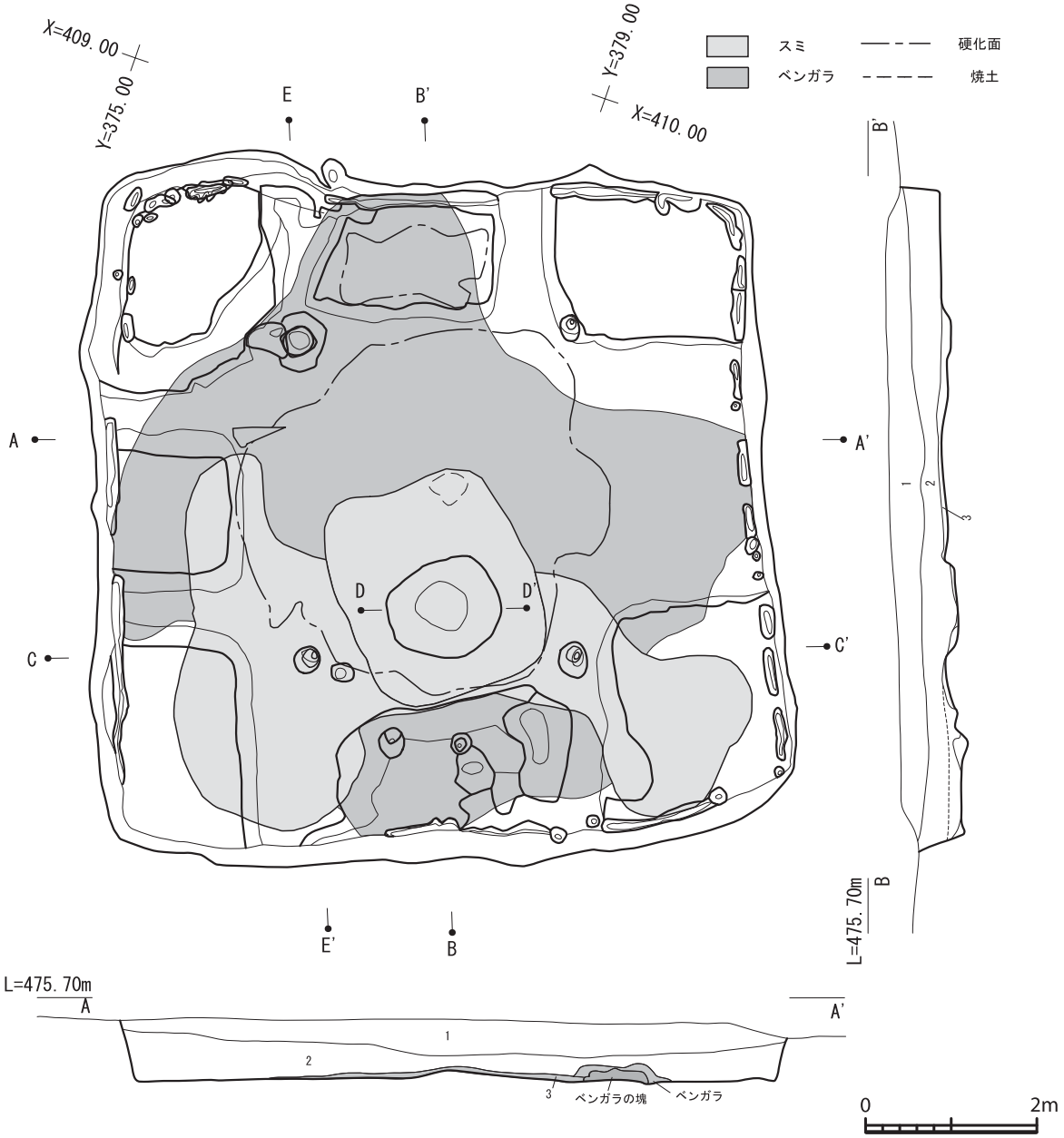


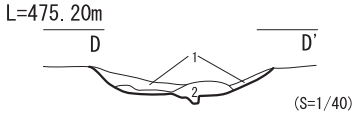
図 208　土器（RP）実測図（SD87）



1　埋1層　暗褐色シルト質(上部は暗め)　炭化物混　しまり中　粘性中

2　埋2層　暗褐色シルト質　黄色粘土ブロック混
炭化物が埋1層よりかなり多く入っている　炭化材の大きめなものも出てくる
しまり中　粘性中

3　埋3層　基本的には埋2層と同じだが、色は床にまいたベンガラで赤い(暗赤褐色シルト質)
しまりも2層より強い



1　埋1層　住居の埋2層と灰まじりで埋2層が多く含まれている為
粘土ブロックが多い　ベンガラ少量混　しまり中　粘性中

2　埋2層　1より灰の割合が多い　ベンガラ少量混
しまり1より弱めの中　粘性1より弱めの中

図 209　SB85　床面（1/80）

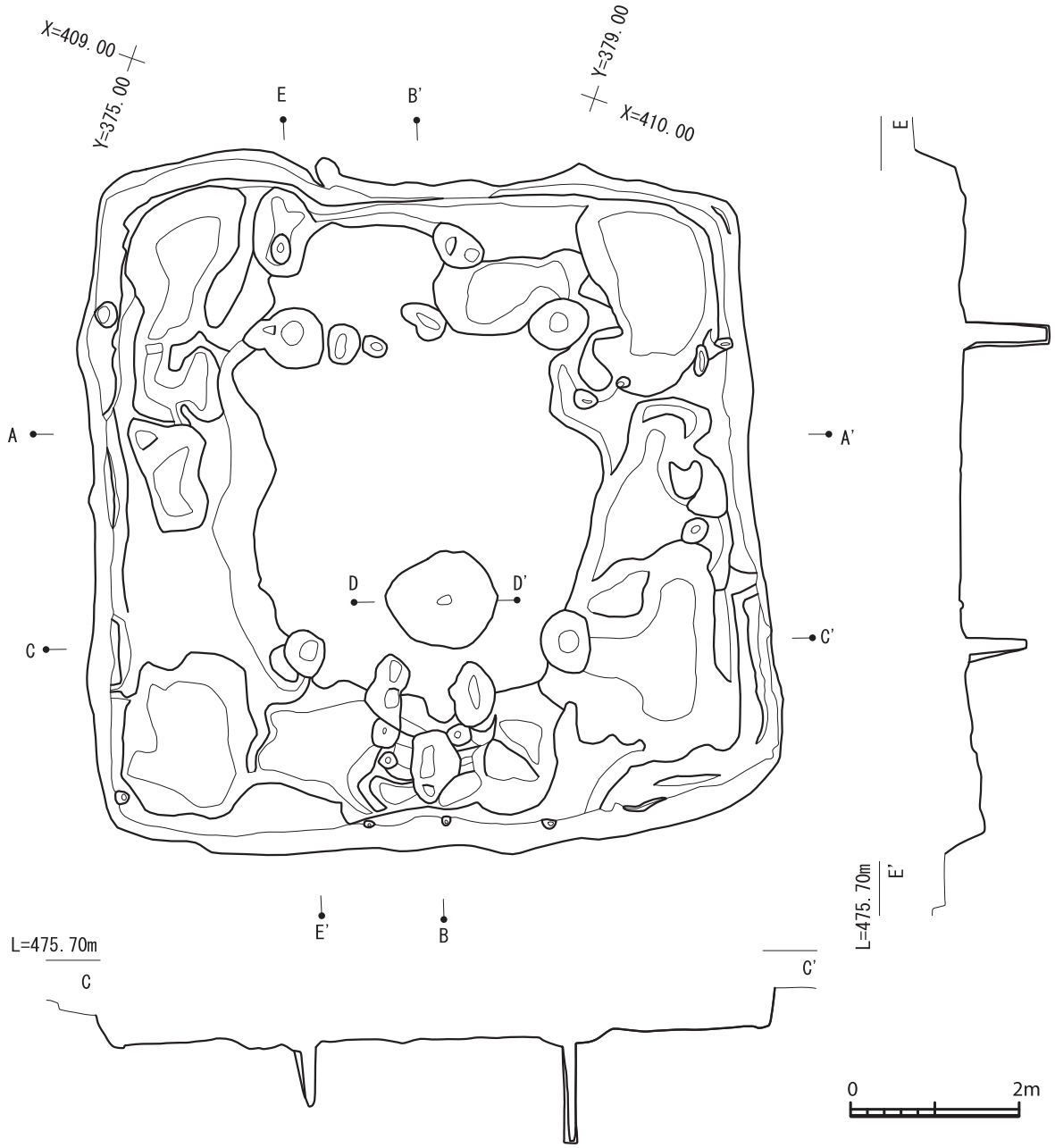


図210　SB85　掘方（1/80）

20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺上に中心を置き、内陣内の中央に位置している。炉は僅かな高さながらも周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、緩やかな斜面として形成され、炉堤と床面との境界を明確に区分することはできない。堤体頂部には平坦面が存在しているが、この平坦面も堤体斜面との境界を明確に区分することができないほど、緩やかな斜面である。炉内は、複雑な構造を示す。まず、炉は、炉内南側に1段高いテラス部を備える。このテラス部は、幅は炉穴の幅に等しく、方形を呈している。また、床面からは1段、ほぼ垂直に3cm程落ち込んでいる。炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。炉の1段目は方形に近似した円形であるが、2段目は円形を呈した土壙である。1段目と2段目の土壙の間

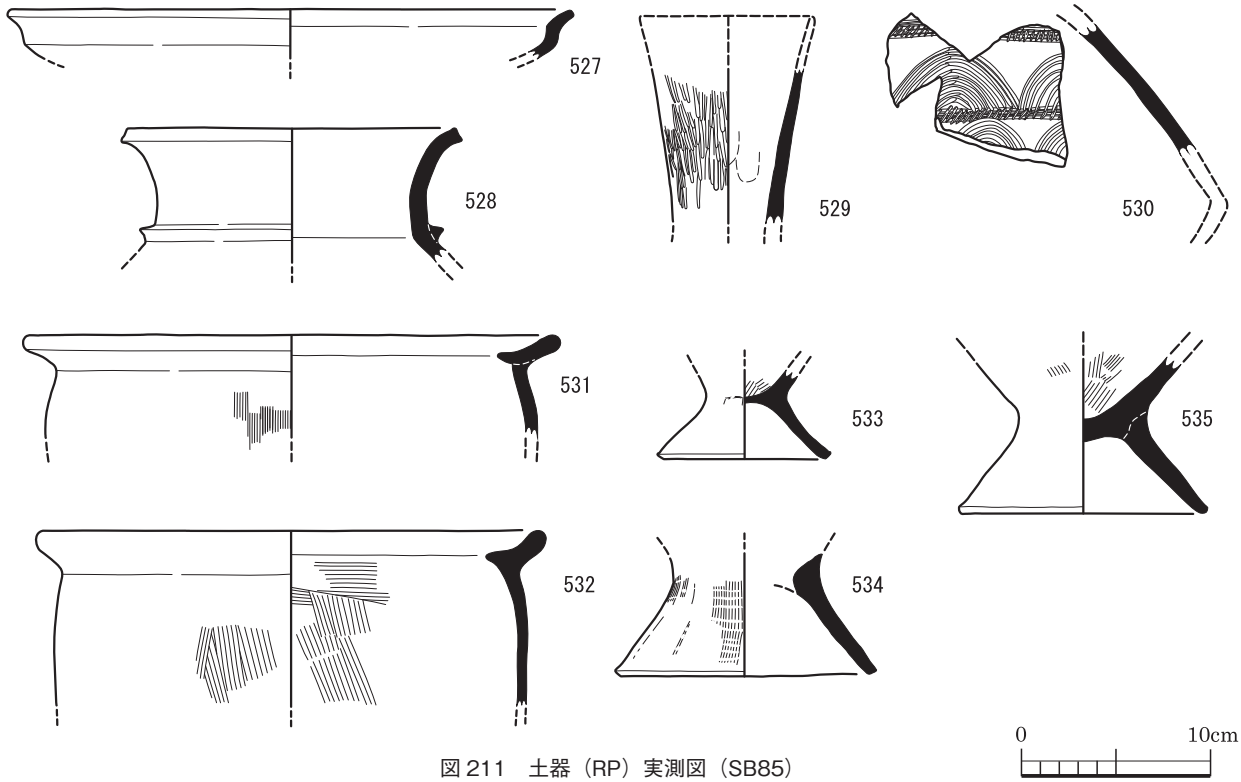


図 211　土器（RP）実測図（SB85）

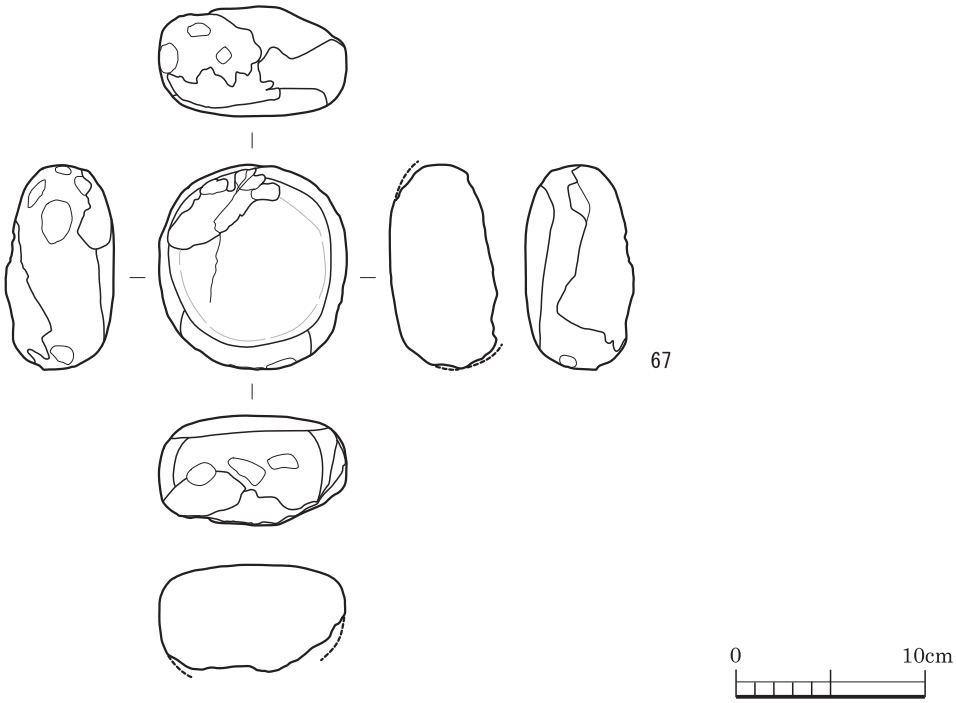


図 212　石器（RQ）実測図（SB85）

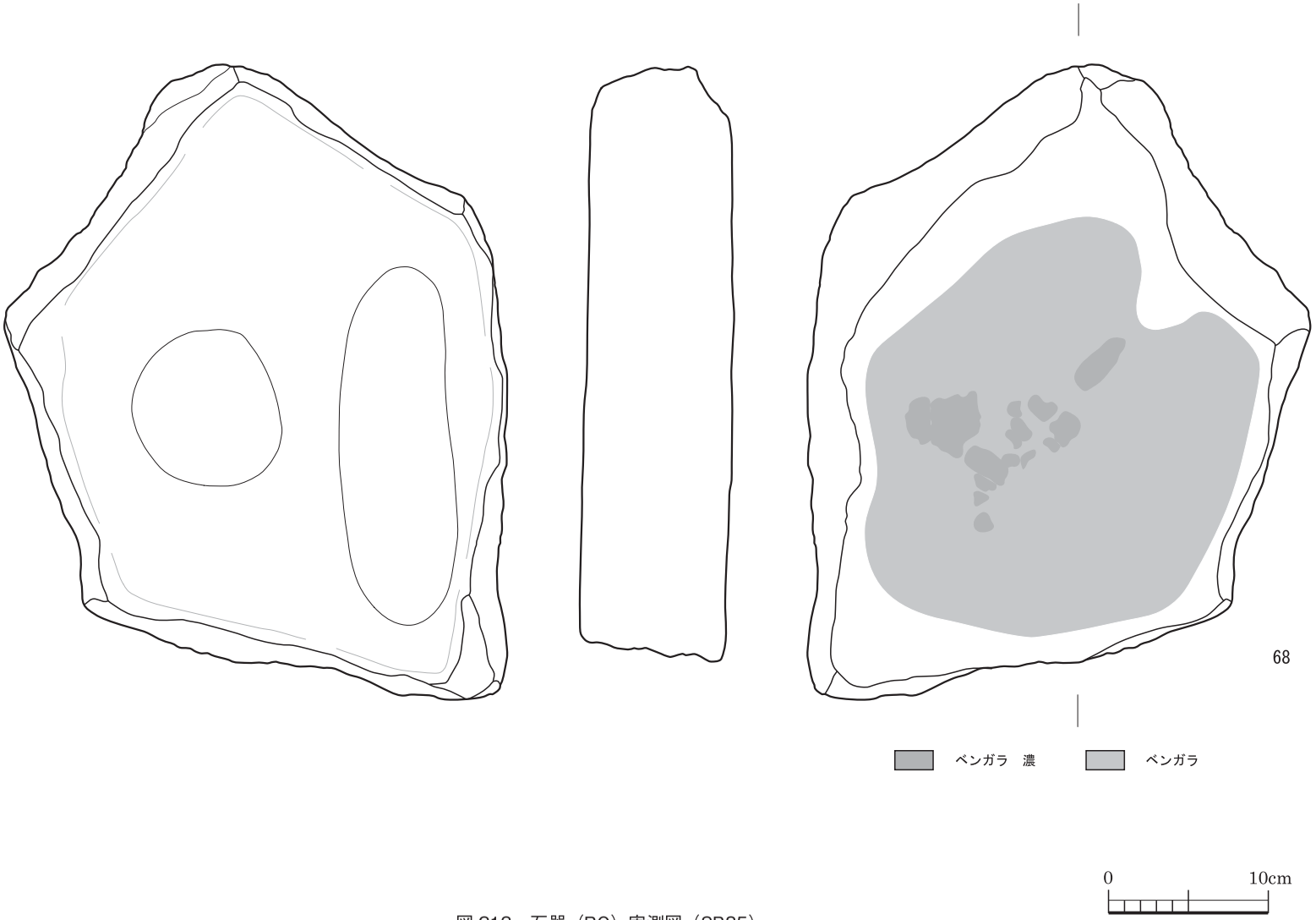
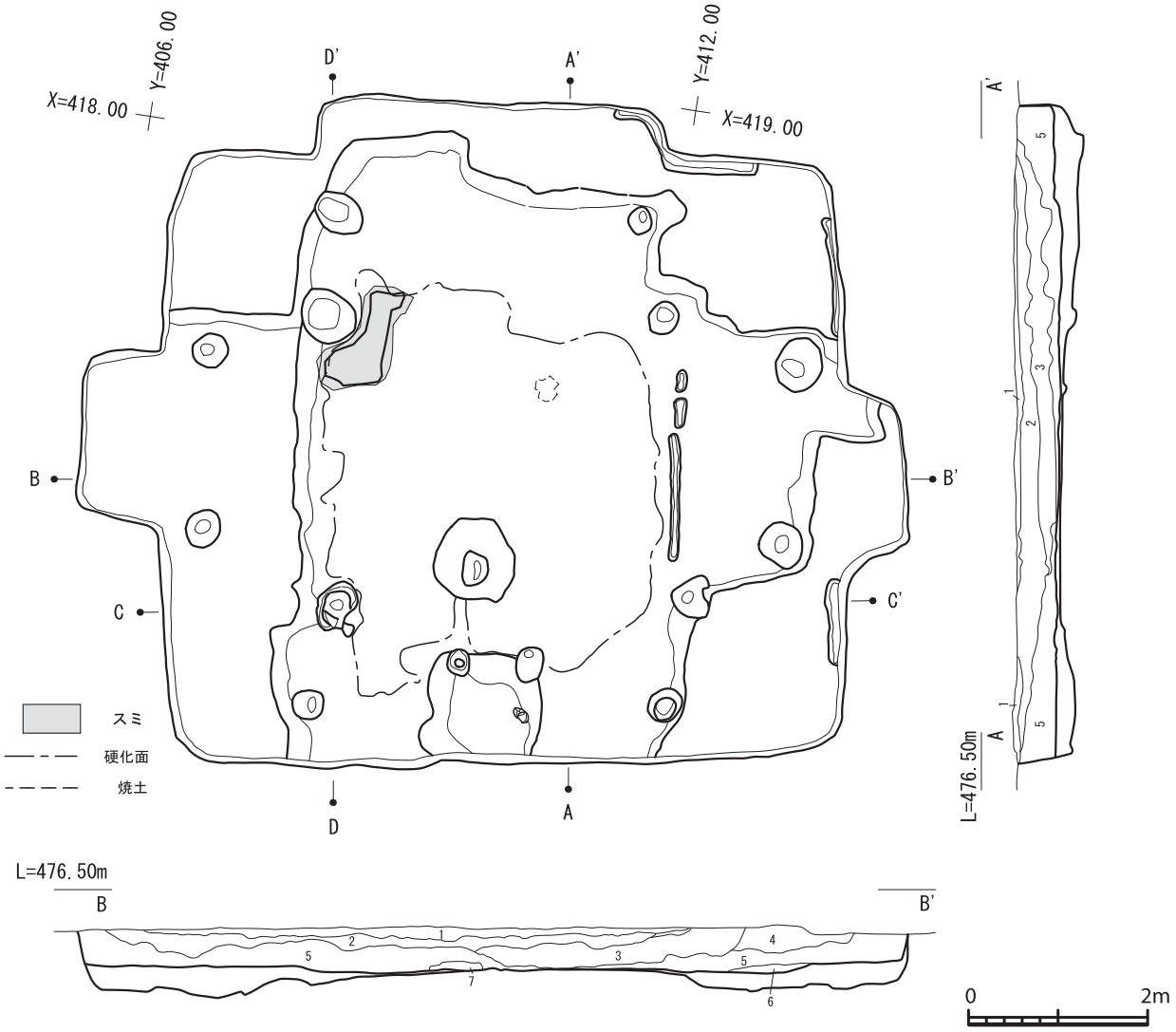


図 213　石器（RQ）実測図（SB85）



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり小　粘性小
2　埋2層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック径1～2cmをところどころに含む　炭もまじる
3　埋3層　褐色シルト　しまり小　粘性中　黄褐色ロームブロック径10cm以下を多量に含む　ところどころに炭が混じる
4　埋4a層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ブロック径3cm以下を含む
5　埋4b層　暗褐色シルト　4a層に比べて明るい　しまり強　粘性中　2～4に比べて粘性が弱い
6　埋4c層　暗褐色シルト　4b層に比べて暗い　しまり強　粘性大
黄褐色ロームブロック径3cm以下を含むが、その分布はさらにまばらになる
7　埋5層　暗褐色シルト　しまり大　粘性中　黄褐色ロームブロックが顕著に堆積する
なお黄褐色ロームブロックはその他の層のものより明るく、しまっている

図214　SB86　床面（1/80）

には、炉内壁の南側から東側にかけて狭いテラス部がめぐる。他の部分の内壁側面は、一様な斜度で上っている。炉の外形は北東方向に若干膨らんでいる。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接した中央に位置する。緩やかに堀りくぼめられており、2基の柱穴を確認することはできなかった。

ベッド状遺構は、東西南北の各隅に概ね方形を呈して設けられている。北東隅のベッド状遺構の西側には、長楕円形の土壙が設けられている。この土壙の西端は、炉の東端に一致している。ベッド状遺構の壁際には側

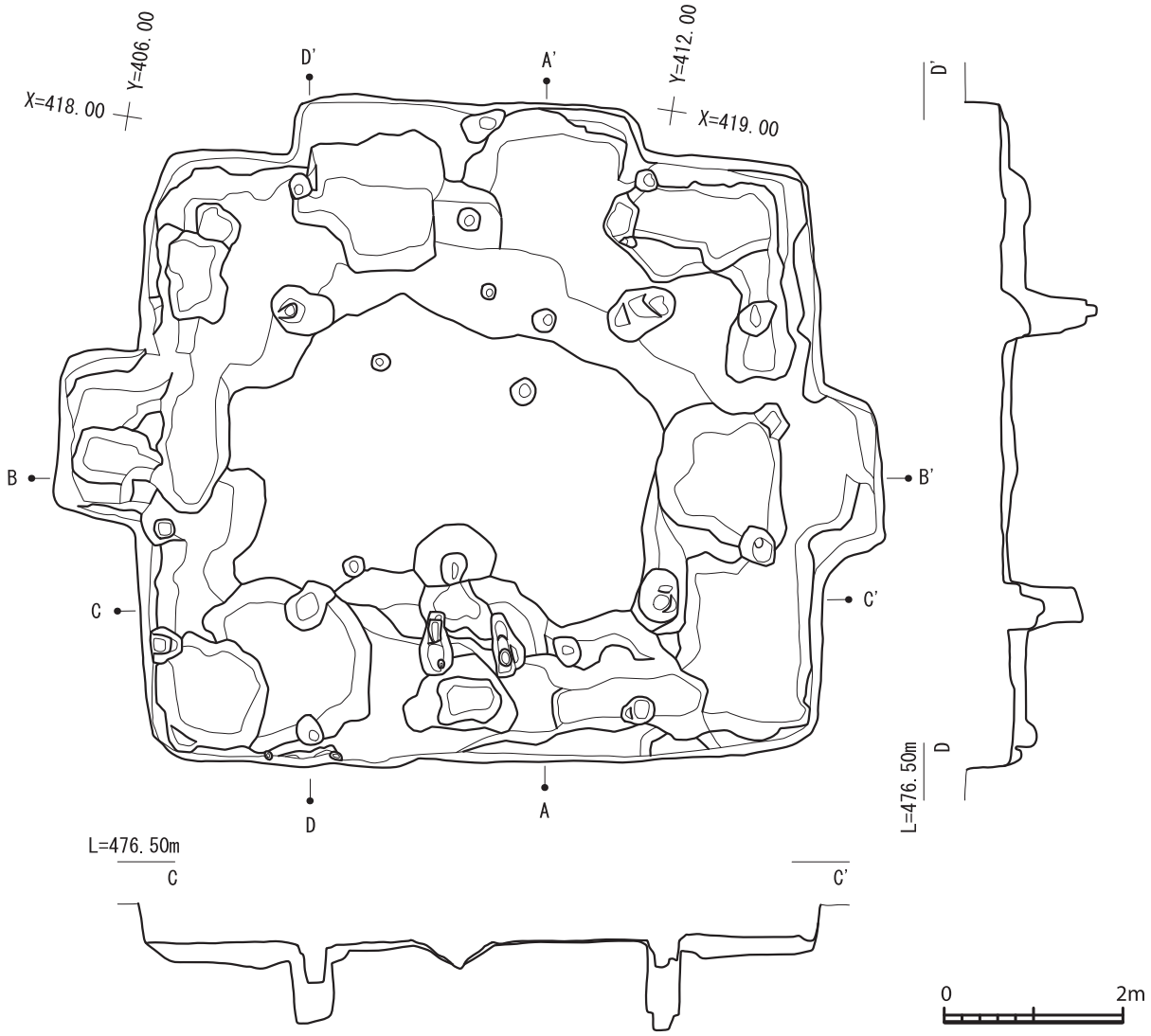


図215　SB86　掘方（1/80）

壁溝がめぐり、東側壁際では床面部分にも確認される。なお、北西隅のベッド状遺構を除去する際、土器片が出土し、床面と同じ高さで硬化面も確認された。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

内陣内にはベンガラが散布されていた。

掘方は、東西南北の各隅に長方形の土壙を掘削し、東辺、西辺に沿って溝を切り、南西隅と北西隅、南東隅と北東隅の各土壙を連接させている。北辺、南辺にも幅広の溝が切られているが、その深度は東辺、西辺に沿った溝に比して浅い。全体としては、ロ字形の掘方である。炉が設けられる部分にも掘削が及び、各設備の完成形に対応している。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。なお、東西南北各側壁の中央部内側にピットが各1基、合計4基検出されている。北、西のピットの埋土は、炭化物とベンガラ滓を含み、南、東のピットは炭化物のみを含んでいた。4基のピットは竪穴住居の主軸上に位置するため、竪穴住居の建設に伴う設備の痕跡である可能性が高い。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB81

SB81は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉、ベッド状遺構、張出し部を備える。

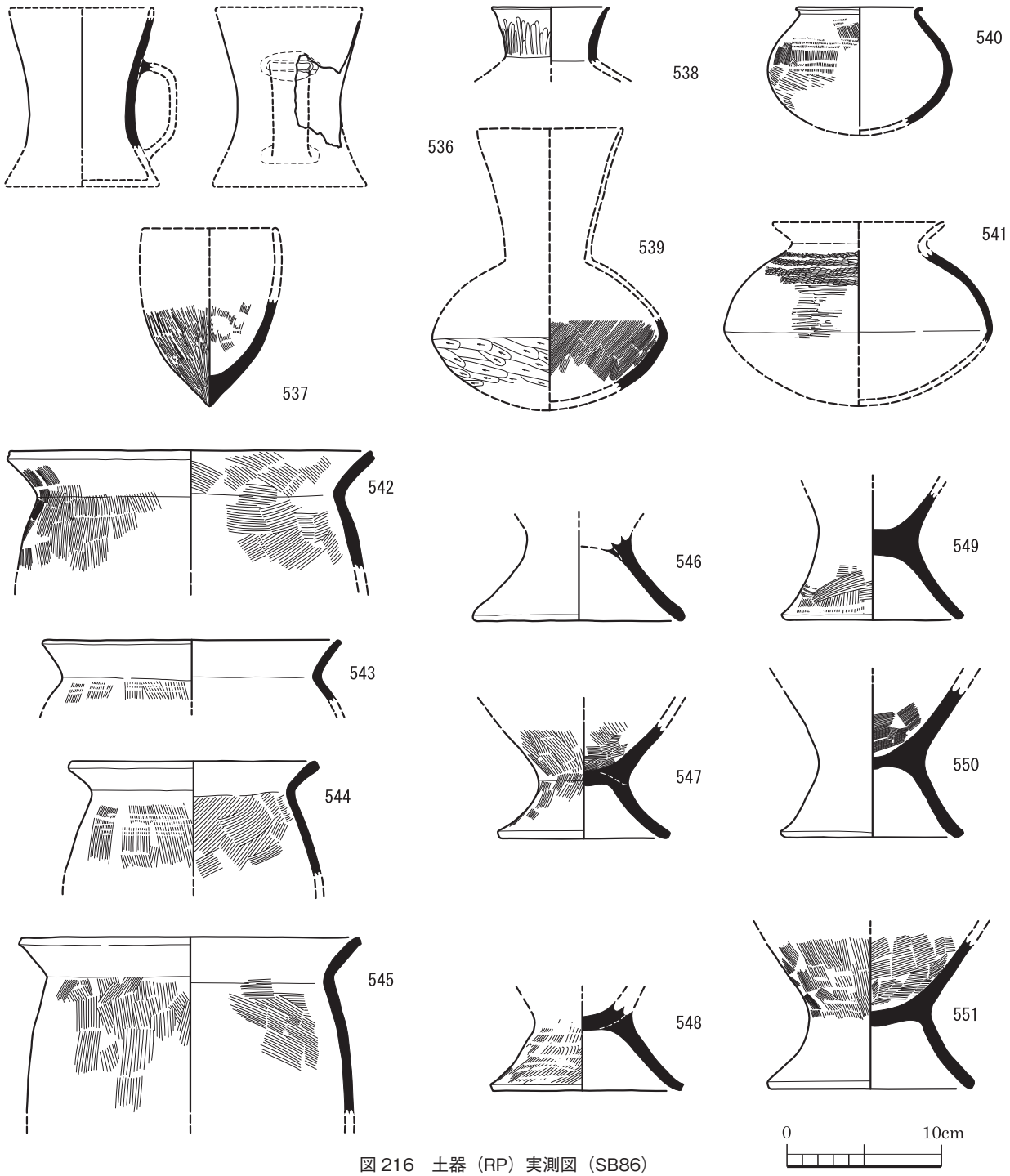


図216　土器（RP）実測図（SB86）

SB81の法量は、南北3.4 m、東西2.7 m、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、竪穴住居の南北中軸ライン上に設けられ、ともに内傾している。硬化面は、形成されていない。

炉は、南北50cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、両主柱穴を結ぶラインに接し、竪穴住居の中央に位置する。炉底は皿形に浅く掘られている。

竪穴住居の南西隅、南東隅には「ベッド状遺構」が概

図217　石器（RQ）実測図（SB86）

ね方形を呈して設けられている。その規模は、下端部で幅1m程度、上端面の幅は0.5 m 程度と、極めて小さい。さらに、その南側には1段高いテラス部が付設されている。このテラス部は「張出し部」と捉えることもできよう。しかし、他の竪穴住居跡における張出し部は、SB81より規模が大きな竪穴住居に、竪穴住居隅に位置するベッド状遺構の間に付設され、ベッド状遺構と複合する場合には同じ幅のベッド状遺構が備わるのが常である。SB81の「ベッド状遺構」と「張出し部」のありようは類例に乏しい。なお、「ベッド状遺構」間を埋めていた埋2a層には多量のベンガラが含まれていた。

Kピットは、検出していない。南側壁以外の各壁際には側壁溝がめぐる。

床面は、地山切出しである。

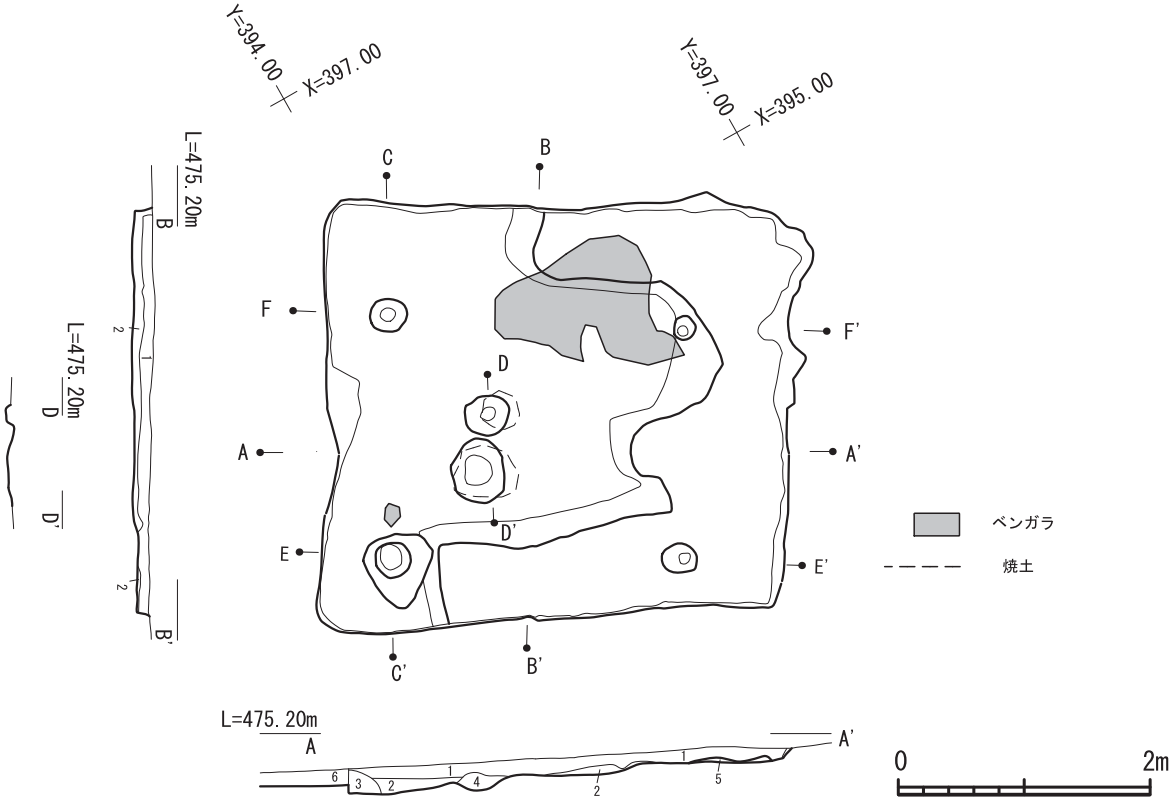
掘方は、北西、南東の各隅に方形の土壙を掘削している。「張出し部」には掘方は認められない。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB82

SB82は、長方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁に張出し部を備える。竪穴住居跡東半部は黒川堤防道路、現代の用水路によって、その一部を破壊されている。

SB82の法量は、南北5.3m、東西6.0m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。すべての主柱穴において柱痕跡を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北側では内陣の外にまで発達し、東側ではベッド状遺構の上端面にまで及ぶ。



1　埋1a層　黒褐色シルト層　しまり中　粘性中　白色および赤色砂粒をまばらに含む
　　南北ベルト(B)北半部にはベンガラを少量含む

2　埋1b層　暗褐色シルト層　しまり中　粘性中　幅1～5cmの褐色粘質土ブロックを含むため、色調は埋1a層よりも明るい
　　白色砂粒をまばらに含む　南北ベルト(B)北半部にはベンガラを少量含む

3　埋2層　暗褐色シルト層　しまり中　粘性中　幅1～2cmの黄褐色および褐色粘質土ブロックを含む
　　白色砂粒を非常にまばらに含む　東西ベルト(A)西端のみに見られる

4　炉埋1層　暗褐色シルト層　しまり小　粘性小　炉内埋土のため、橙色焼土を多量に含む
　　東西ベルト(A)を挟んで床面に長径約80cm短径約40cmの楕円形に広がる
　　最下部に黒色シルトの炭化物を多く含む

5　貼り床　床面の掘り過ぎ

6　SB91埋土

図218　SB88　床面（1/60）

炉は、南北60cm、東西では50cmを確認しており、円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高まりの周堤を有し、炉底は皿形に2段に掘りくぼめられている。炉の内壁南側には、狭いテラス部が形成され、北側中央部は外側に向かい細くくぼみ出ている。北東部で平面形の変化が生じているが、これは撹乱の影響である。

Kピットは方形を呈し、南側壁に接して主軸から西よりに位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北西隅に2段掘り状に斜面が取り付いている。Kピットの西柱穴は、掘方調査の段階で、当該斜面に設けられていることが判明した。Kピットの東柱穴は、現代の用水路によって破壊されている。

ベッド状遺構は、西側壁、東側壁に沿った長方形を呈して付設されている。北西隅と南西隅、北東隅と南東隅に概ね方形を呈して設けられたベッド状遺構を、その間に同じ高さのベッド状遺構を充填することで連接させたもの、と判断する。北側壁、東側壁には張出し部が設置されているが、張出し部の前面には1段低い溝が付設されており、床またはベッド状遺構の上端面との境界となっている。壁際には側壁溝がめぐる。なお、

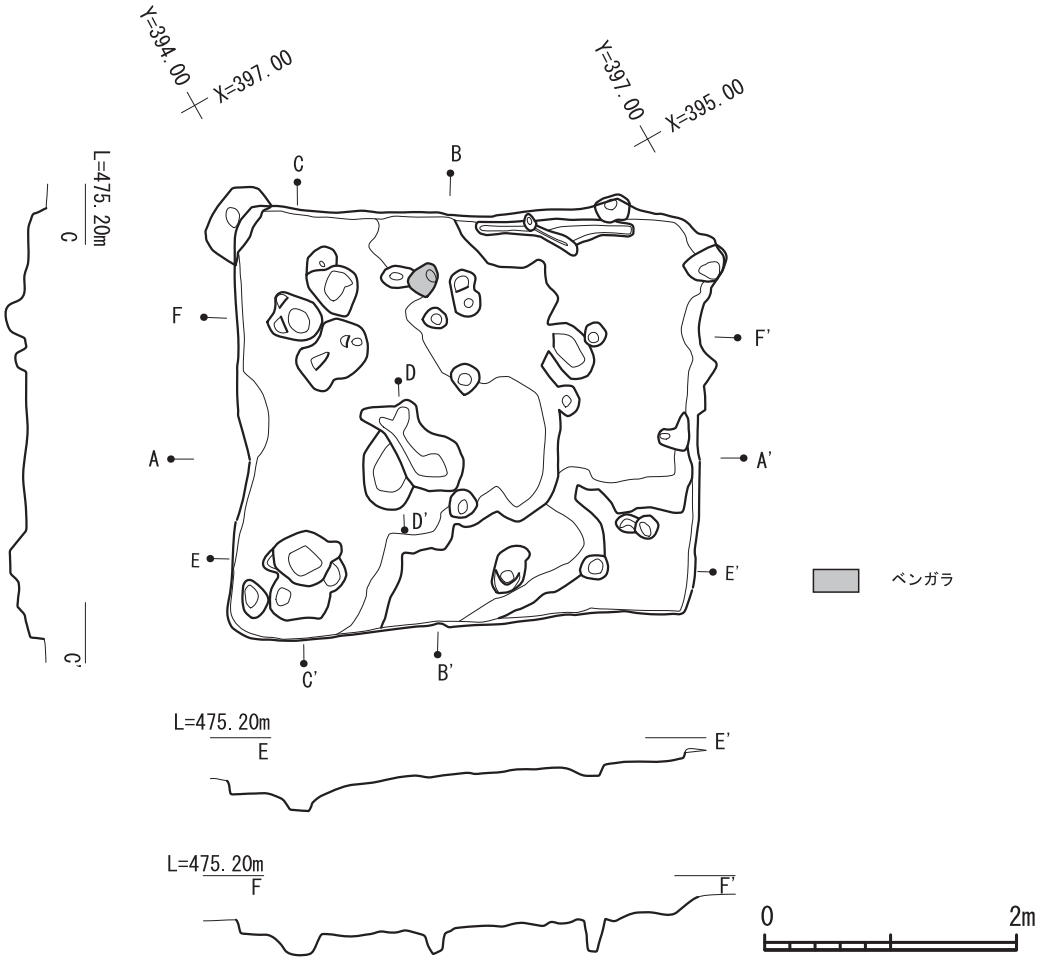


図219　SB88　掘方（1/60）

北西隅のベッド状遺構の上端面には、ベンガラが散布されていた。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。この貼床を除去する過程で、ベンガラが散布された状況を検出した。竪穴住居の各主柱穴を結ぶ内陣に概ね一致する範囲では、貼床を除去すると地山が露出する。この地山面の上に薄いベンガラ層が広がっていた。貼床自体はペリペリ、カパカパと軽快に外すことができ、地山の面には軽微な硬化面が形成されている。一面に検出されたベンガラは、この硬化面の上に、薄く、満遍なく敷き込まれた、との印象を与える状況である。竪穴住居の床貼りに先立つ時期または段階にベンガラ散布がなされた、と判断する。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺に沿って溝を切り、北西隅と南西隅、北東隅と南東隅の各土壙を連接させている。北辺には張出し部の前面に土壙が掘り込まれ、結果として北西隅と南西隅の土壙を連接させている。全体としては凹字形の掘方である。炉、Kピット、張出し部が設けられる部分にも掘削が及ぶが、炉は円形土壙が、張出し部は方形土壙に近い幅広の溝が掘削されており、各設備の完成形に対応している。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。なお、北西主柱穴は、掘方の段階でさらに1基の柱穴が切り合って位置している状況が確認できた。また、掘方の上端は竪穴住居側壁から20cm程度内側に位置している。このことから、SB82は北西主柱穴以外の主柱穴、炉を継続使用した改築がなされた竪穴住居である可能性がある、と判断する。掘方の最深部は、床面から約40cmの深度である。

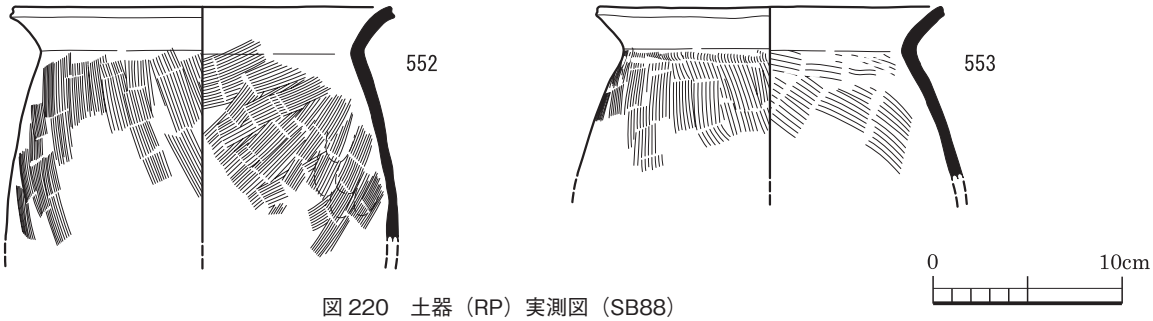


図 220　土器（RP）実測図（SB88）

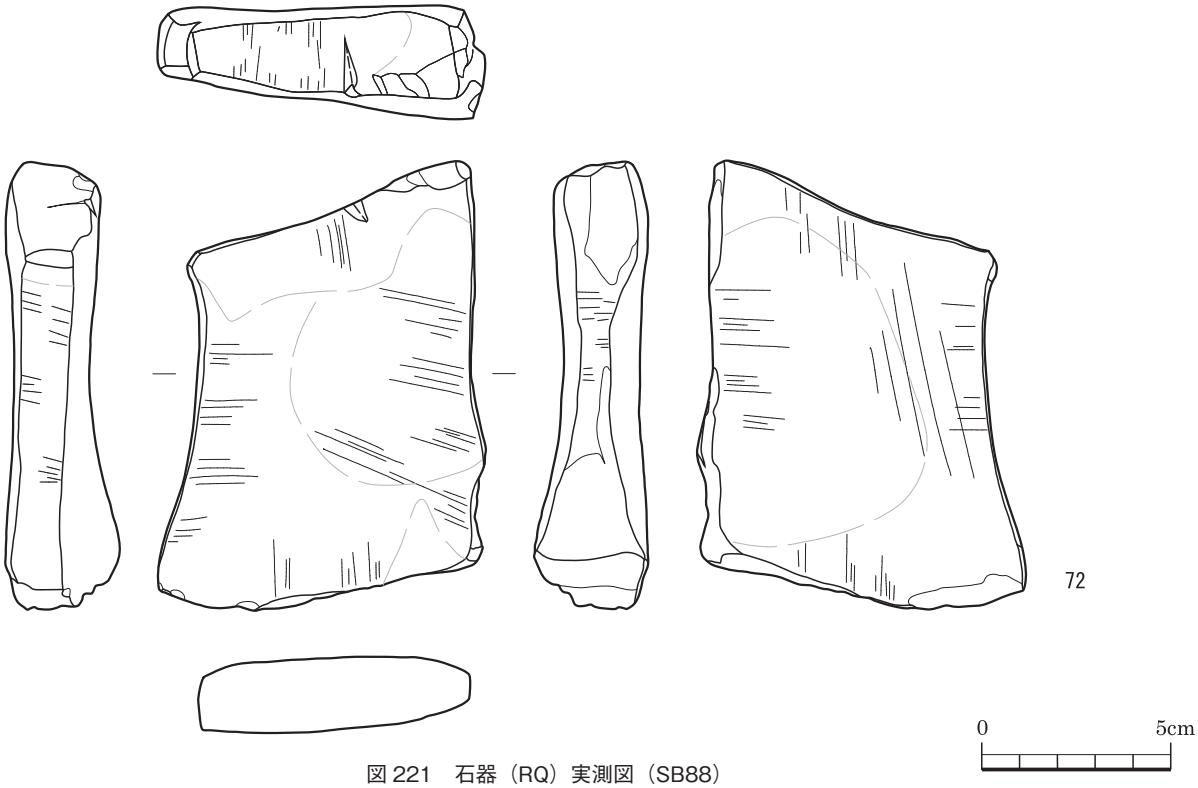


図 221　石器（RQ）実測図（SB88）

SB83

SB83は、正方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。

SB83の法量は、南北3.3 m、東西3.7 m、遺構確認面からの深さ15cmを測る。

主柱穴は、確認していない。南壁に接して中央部に1基、南東グリッドに1基、ピットを検出しているが、規模が弱く、対応する柱穴を欠くことから、主柱穴と判断するには至っていない。硬化面は、形成されていない。

炉は、南北60cm、東西60cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の中央に位置している。炉底は皿形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は、薄い貼床である。

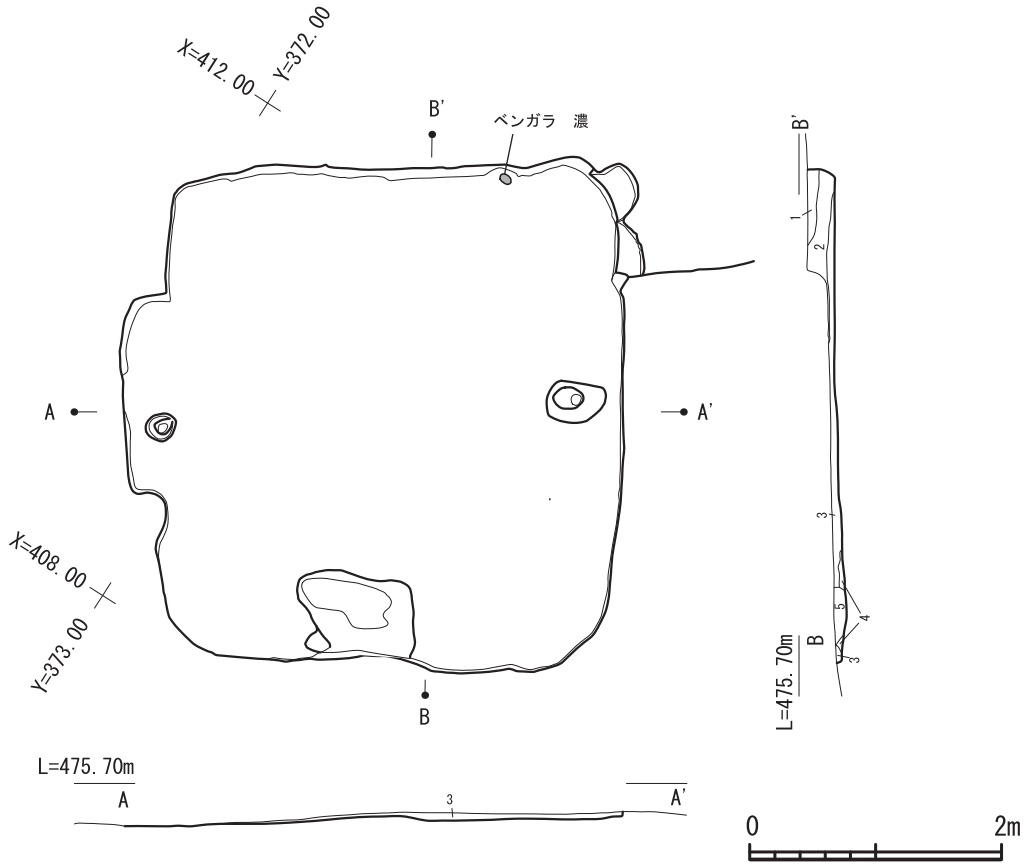
掘方は、北東隅、北西隅、南西隅に概ね方形の浅い土壙を掘削している。炉の周囲は平らに整えられているが、その外側には浅い溝が囲むように位置する。掘方の最深部は、床面から約5cmの深度である。

SB84、SD87

SB84は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。SD87は円形周溝である。SB84とSD87は遺構の中心が一致した配置関係にある。先後関係、同時存在の当否は不明である。

SB84の法量は、南北7.2 m、東西7.2 m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。北西、北東の主柱穴では、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。また、北西主柱穴の南東部、北東主柱穴の北西部では、各主柱穴を抜き取っ



1　埋1a層　埋1b層とほぼ同じだがベンガラのしみ出した様なやや赤っぽい色　しまり1bよりやや弱めの中　粘性1bよりやや弱めの中
2　埋1b層　暗褐色シルト質　炭化物混　ベンガラくず混　しまり中　粘性中
3　埋2a層　明るめの暗褐色シルト質　大きい黄褐色粘土ブロック混　炭化物も含む　しまり中　粘性1b層より強めの中
4　埋2b層　2a層よりやや黒っぽい明るめの暗褐色シルト質　大きい黄褐色粘土ブロック混　炭化物も含む　しまり中　粘性1b層より強めの中
5　埋3層　2b層の色に近く、小さな黄褐色粘土ブロック混　灰のような黒っぽい部分がある　樹根跡？

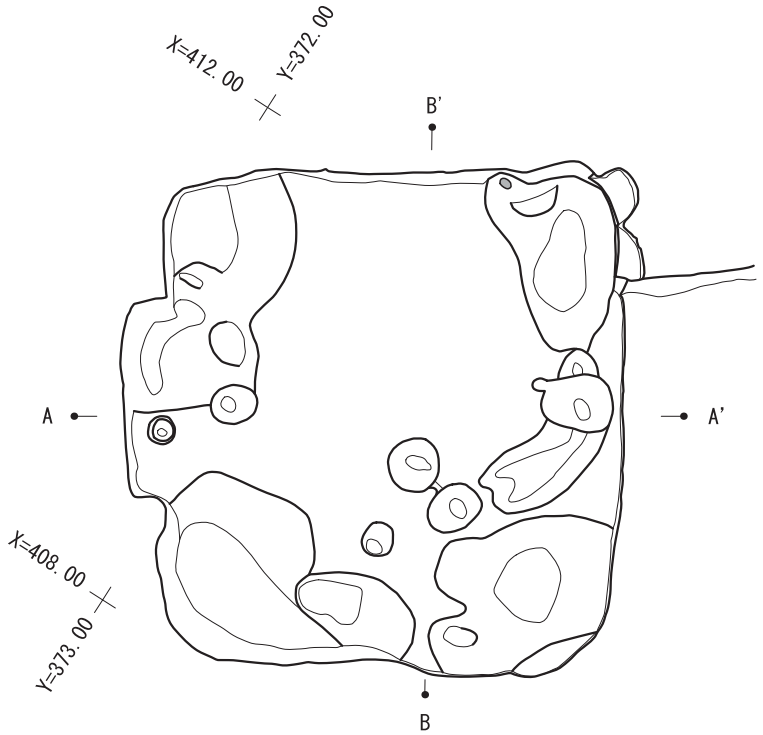


図 222　SB89（1/60）

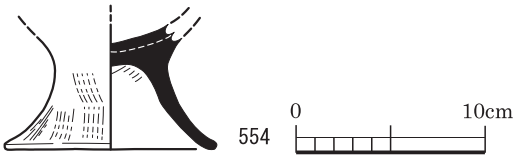


図 223　土器（RP）実測図（SB89）

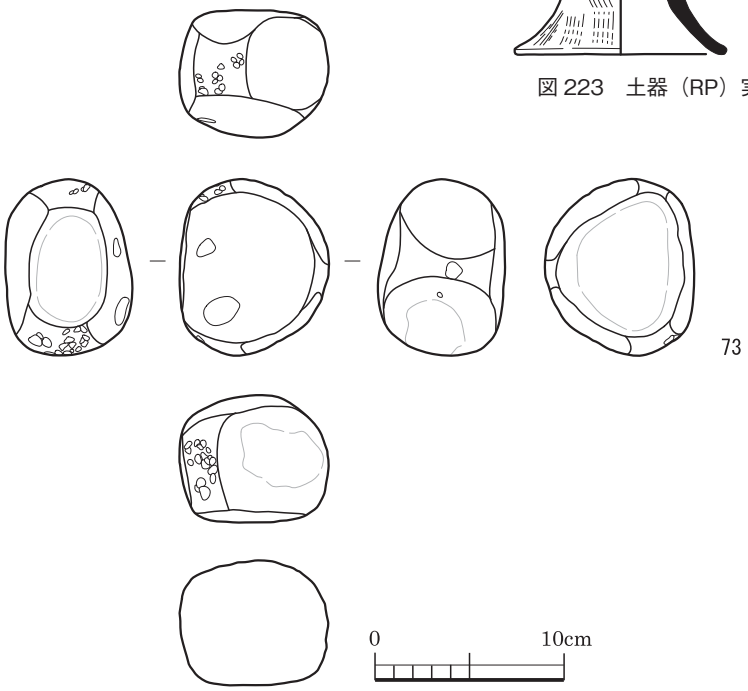


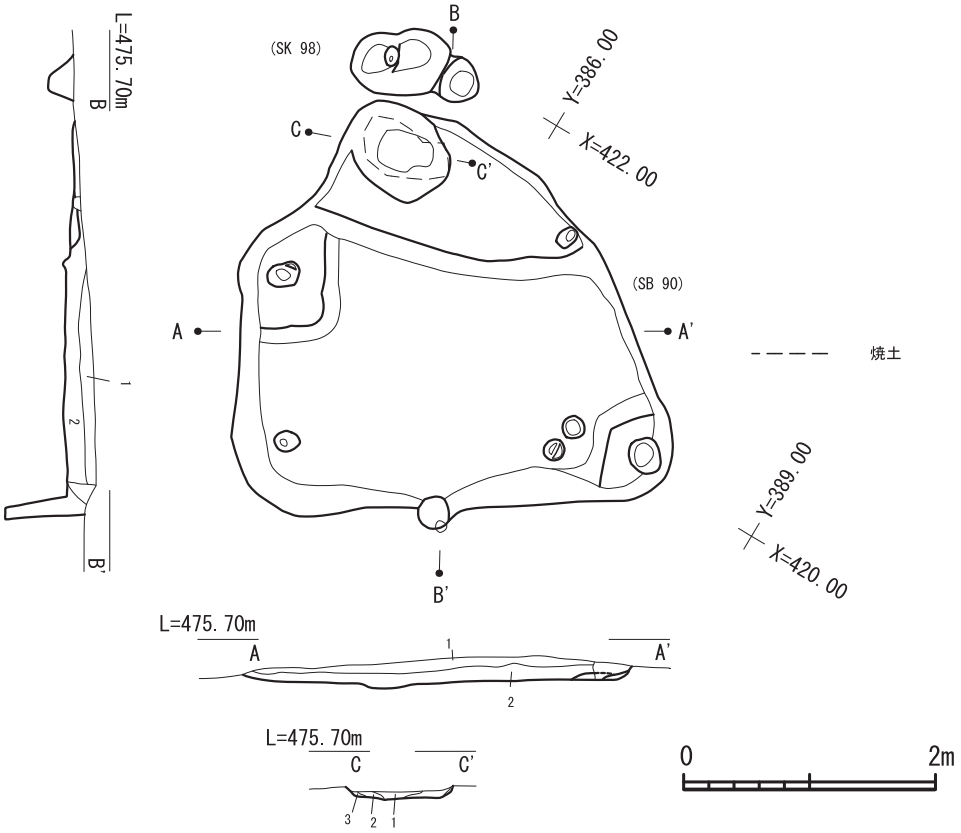
図 224　石器（RQ）実測図（SB89）

た際の排土が小山をなして検出された。同様の排土は、炉の北側、東側ベッド状遺構の北西隅でも検出されている。南西主柱穴では柱痕跡を確認している。南東主柱穴は、柱痕跡の周囲がくぼんだ状態で検出しており、抜き取りがなされていないとは断定することができない状況ではあるが、直近に排土が検出されなかったこと、「抜取り痕」の規模が小さいことから、北側の2基とは様相が異なっている。なお、炉の北側の排土が南東主柱穴の排土である可能性は、十分にある。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。

炉は、南北100cm、東西130cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に20cm程度の平坦面を有すほど幅広く形成される。炉の1段目は不整形な楕円形に近い円形であるが、2段目は整形度合いが高い円形を呈している。2段目の土壙の埋土は、炭を大量に含でいた。1段目の内壁は、緩やかに上っている。なお、炉の北側には、床面が橙色に焼けている部分が存在する。この部分の直上には焼土、炭化物がかたまって出土している。炉内の焼土とは連接していないため、炉内からの掻きだしではない、と判断している。

Kピットは方形を呈し、南側壁に接して中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、西辺には西南隅のベッド状遺構に連接するテラス部が付設され、2段掘りの状況を呈している。掘方調査の段階で、2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている状況が検出された。

ベッド状遺構は南西隅、北西隅、南東隅に概ね方形を呈して設けられ、各側壁に沿って竪穴住居の側壁中央部にまで伸長している。西辺、北辺では幅が狭いベッド状遺構が連接した形態であるが、東辺では同幅で北に伸長した様相を呈している。北東隅ではベッド状遺構を検出していないが、東側壁沿いにベッド状遺構と同じ高まりが細長く存在しており、かつては北東隅にもベッド状遺構が設けられていた可能性が高いことを



1　暗褐色シルト質　焼土、灰、炭化物非常に多く混　しまり中　粘性中
2　暗褐色砂質(削るとジャリジャリ)　灰、焼土、小さな炭化物が1より少ないが混ざっているしまり1より強めの中　粘性1より弱めの中
3　暗褐色シルト質　点々と炭化物等含む　わずかにジャリっとする

図225　SB90　床面（1/60）

示している。西側壁、北側壁、東側壁の各壁際には、側壁溝がめぐる。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

なお、北東主柱穴抜取り痕の北側、Kピットの北東、南西隅のベッド状遺構の北東にはベンガラが散布されていた。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、各辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。ロ字形の掘方である。炉が設けられる部分の南半にも掘削が及び、炉には楕円形土壙が掘削され、その完成形に対応している。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SD87は、円形を呈する周溝である。遺構の中心はSB84と同じ位置にあり、SB84の各隅を通るように幅70cm、深さ20cm程度の溝がめぐっている。その直径は長径10.8ｍ、短径10ｍであり、卵形と表現することもできよう。溝の内壁に接して、ピットが3基存在する。溝底には平坦面が形成され、大きな段差を生じることなく、概ね同一深度でめぐっている。

SB84とSD87は各外形プランが重複する箇所にセクションベルトを設置し層序を詳細に観察し、平面プランにおいても精査を繰り返したが、切り合い関係を示す結果を見出すことはできなかった。ともに当該位置の埋土が暗褐色シルトであるため、差異を認識することが困難であった、と考えている。その一方、両遺構が複合して存在した、と考えることも可能であろう。この場合、SD87はSB84の周堤溝にはならない。両遺構は、北東隅でしっかりと連接しており、SD87がSB84の周堤

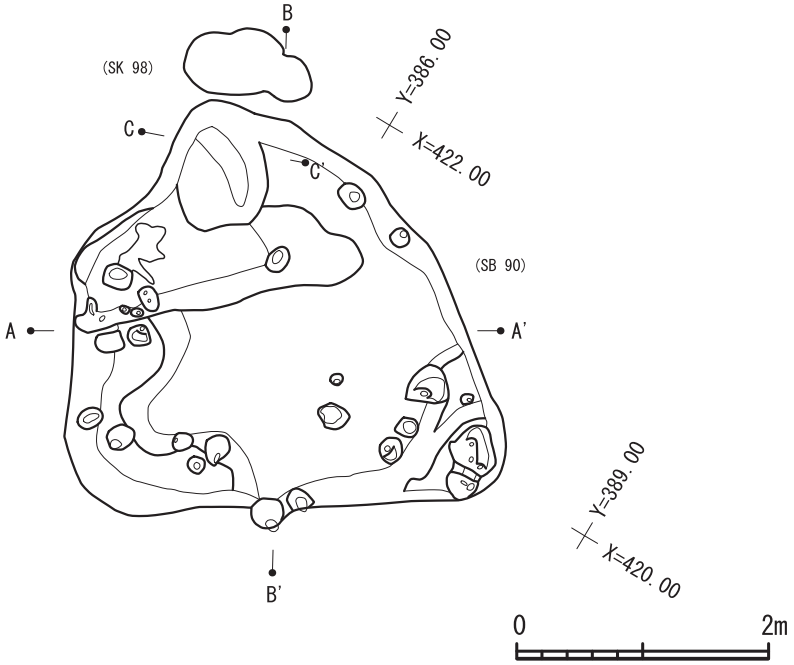


図 226　SB90　掘方（1/60）

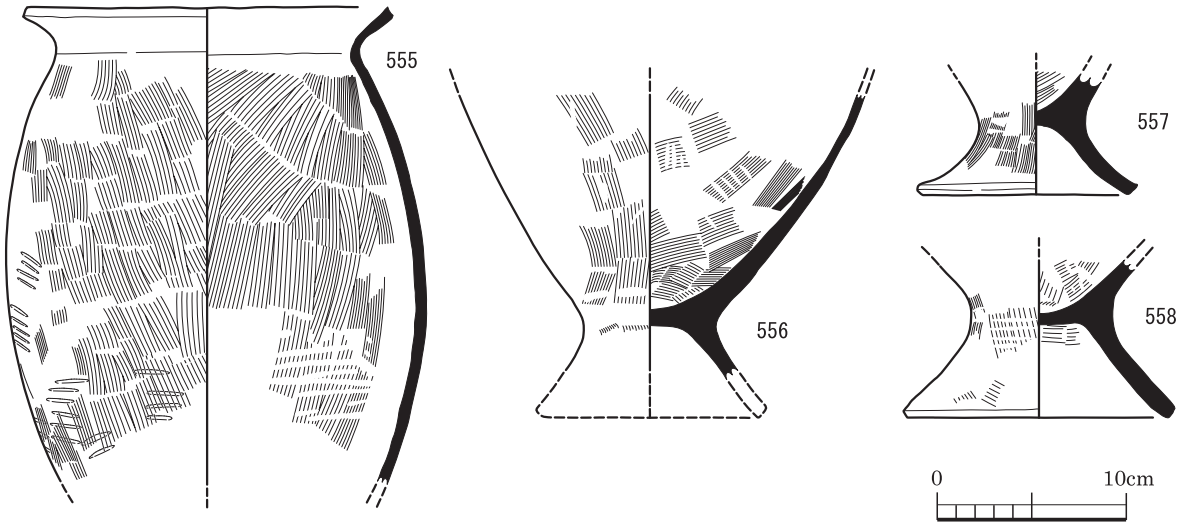
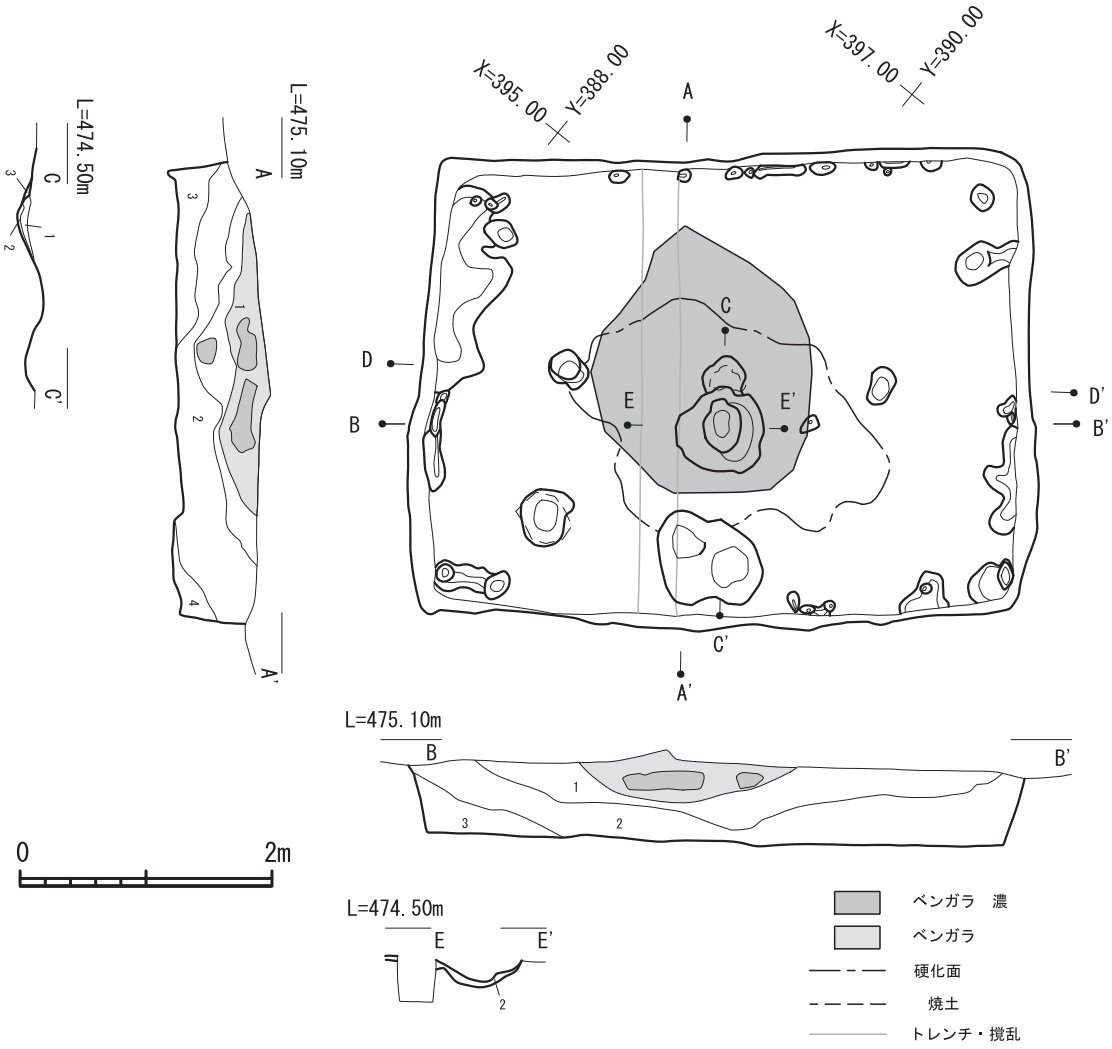


図 227　土器（RP）実測図（SB90）

溝であった場合、雨水等が竪穴住居内に流入する結果となるからである。竪穴住居と溝との間に形成された半円形の部分を張出し部と考えることも可能であるが、類例に欠き、テラスとするには比高差が大きすぎ、各半円形の規模も異なるため、その蓋然性は極めて低い。両遺構の東北隅が大きく重複する配置関係、埋土の共通性から、SB84の廃絶に伴い、その埋め戻しに際してSD87が掘削された、と判断することが最も整合的であると考える。

SB85

SB85は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。竪穴住居跡を地割れが破壊しており、北西隅、南西隅にはクラック



(A・B 断面)

1　埋1層　黒褐色シルト　上層中央部にベンガラが集中　炭混　しまり中　粘性中

2　埋2a層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(2.3mm～5cm)混
中央部には特に大きなブロック(2.3mm～5cm)が入る　B-B'のB'側など最下層にブロックが最も多い
炭を多く含むがこれもB-B'のB'側(北東G、南東Gの境界あたり)に特にまとまった炭が含まれる　しまり中粘性中

3　埋2b層　暗褐色シルト、黒褐色シルト、黄褐色・褐色シルトブロック(2.3mm～5cm)混
北西G床直には顕著にみとめられるが、南東Gなどにはみられない　ブロックが大量に含まれている　しまり中粘性中

4　埋2c層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(1cm弱)混　ブロックの混じる割合が少なく、また粒も小さい　しまり中粘性中

(C 断面)

1　炉埋土1a層　黒色シルト　褐色シルトブロック(5cm弱)混　炭を多く含む　埋土全体が灰・炭に起因する黒さを呈す
しまり小　粘性大　遺物：土器片数点

2　炉埋土1b層　黒色シルト、暗褐色シルト、褐色シルトブロック(5cm弱)混
埋土1a層などは炭を含まず、暗褐色シルトを含むため、色調が若干明るい　しまり中　粘性中

3　貼り床　褐色シルト　橙色焼土ブロック(5mm程度)混　褐色シルトそのものでなく、埋土中に含まれるブロックのみが橙色になっている
赤化しやすい土だけ赤化しているようである　炭を多く含んでいる　しまり大　粘性中

(E 断面)

1　主柱穴・柱穴痕　上部は埋2a層に同じ　しまりが埋2a層より小さい　下部は暗褐色シルト　しまり小粘性中

2　主柱穴(東側)掘方埋土　褐色シルト(地山の色)　黄褐色シルトブロック(2.3mm～8cm)、暗褐色シルトブッロック(5cm大)、炭混　しまり大　粘性中

図 228　SB91　床面（1/60）

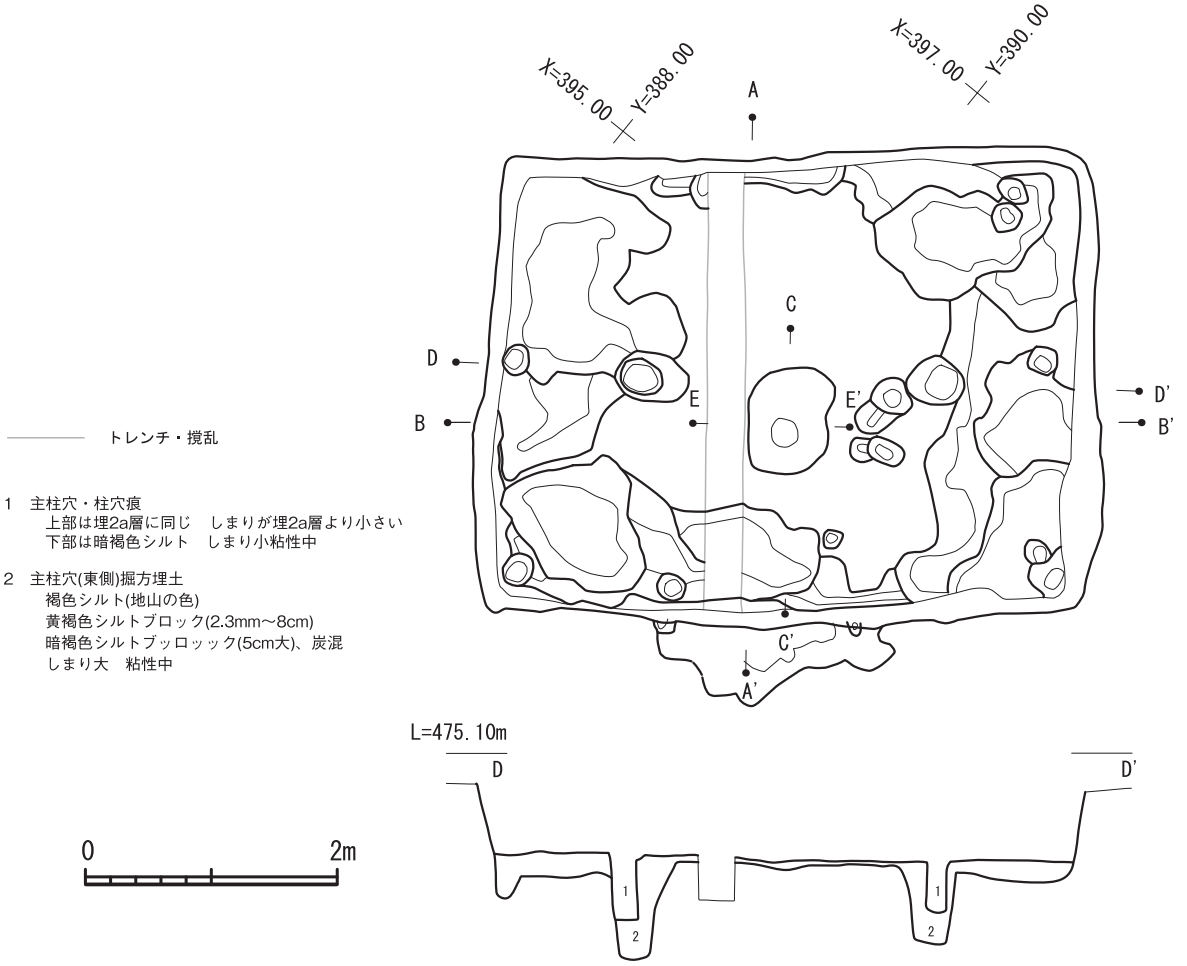


図229　SB91　掘方（1/60）

が走る。

SB85の法量は、南北8.6ｍ、東西8.1ｍ、遺構確認面からの深さ40cmを測る。埋2層には、直径2cm程度のベンガラ粒が含まれる。このベンガラは、真赤な色を呈し、良質なベンガラである。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴でも、柱痕跡を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置する。その内側と竪穴住居の東西、南北の主軸部分には大量のベンガラが散布されていた。このベンガラは埋3層に属し、良質とは言い難く、暗紫色に近い色調である。

炉は、南北120cm、東西130cmの円形を呈し、深さは40cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、炉穴に向かい床面が斜めに高まっている状況であり、明確な下端部を見極めることができない。炉の周囲、南北2.4ｍ、東西2.2ｍの長方形を呈する範囲には、炭と焼土が掻き出されていた。さらに炉から南側には、Ｋピットを中心とした範囲に、灰が散布されていた。

Ｋピットは長方形を呈し、南側壁に接した中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に概ね方形を呈して設けられている。さらに、西側壁、北側壁にはその中央部にベッド状遺構が付加されている。西側壁に付加されたベッド状遺構の北東角では、色鮮やかなベンガラ塊が据え置かれている状態で検出された。このベンガラは良質なベンガラである。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部

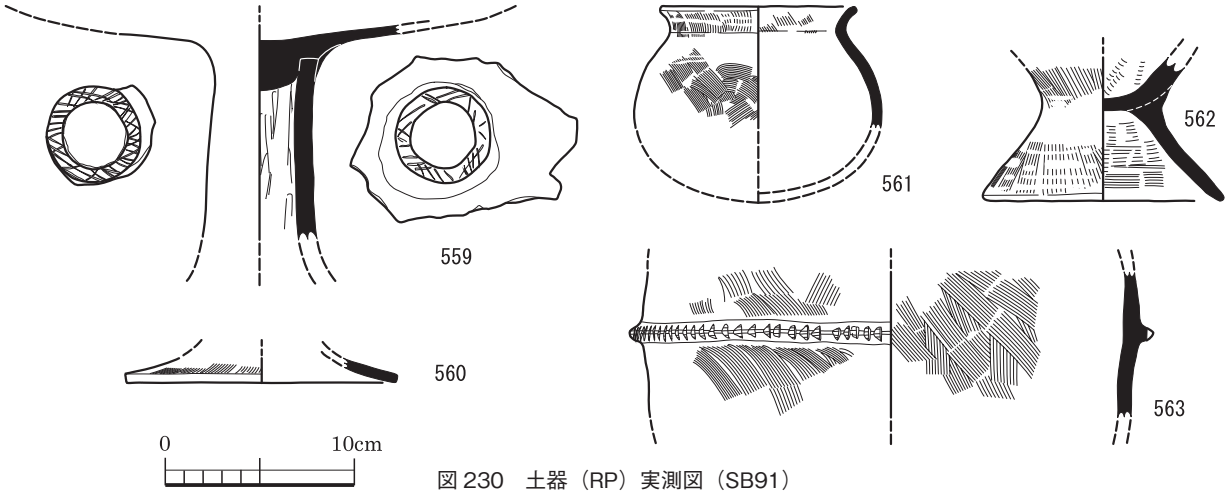


図 230　土器（RP）実測図（SB91）

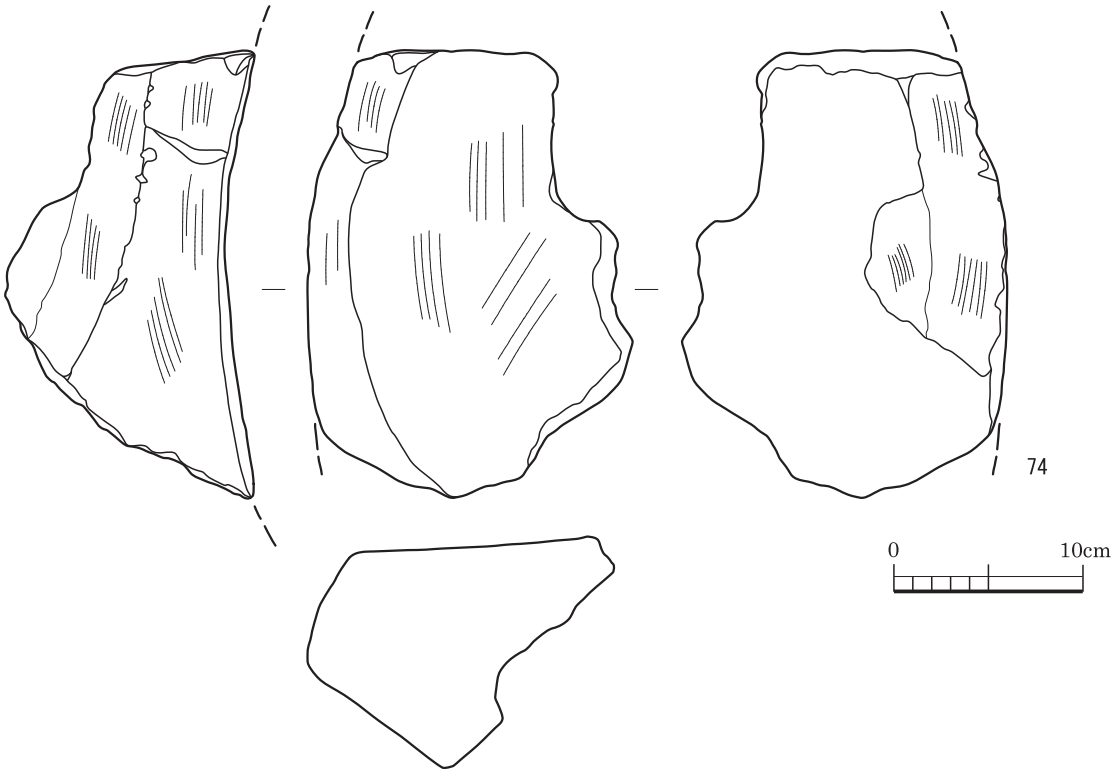


図 231　石器（RQ）実測図（SB91）

では厚く床が貼られている。

以上から、SB85では、竪穴住居の廃絶に際し、以下の行為が確認されたこととなる。まず、炉内の炭と焼土が掻きだされ、灰が竪穴住居跡の南半部に散布される。灰の北端、竪穴住居跡の北西部に良質のベンガラが据え置かれ、内陣と主軸線上の広範囲にベンガラが散布される。さらに、良質なベンガラを含む埋土が投げ込まれ、竪穴住居跡が、一定、埋められる。ベンガラの散布にも種別があること、炭、灰を用いた行為と複合することが判明する例となる。なお、石皿（68）は使用面を上にして検出されたが、その裏側には、良質、普通、2種のベンガラが付着しており、ベンガラの散布

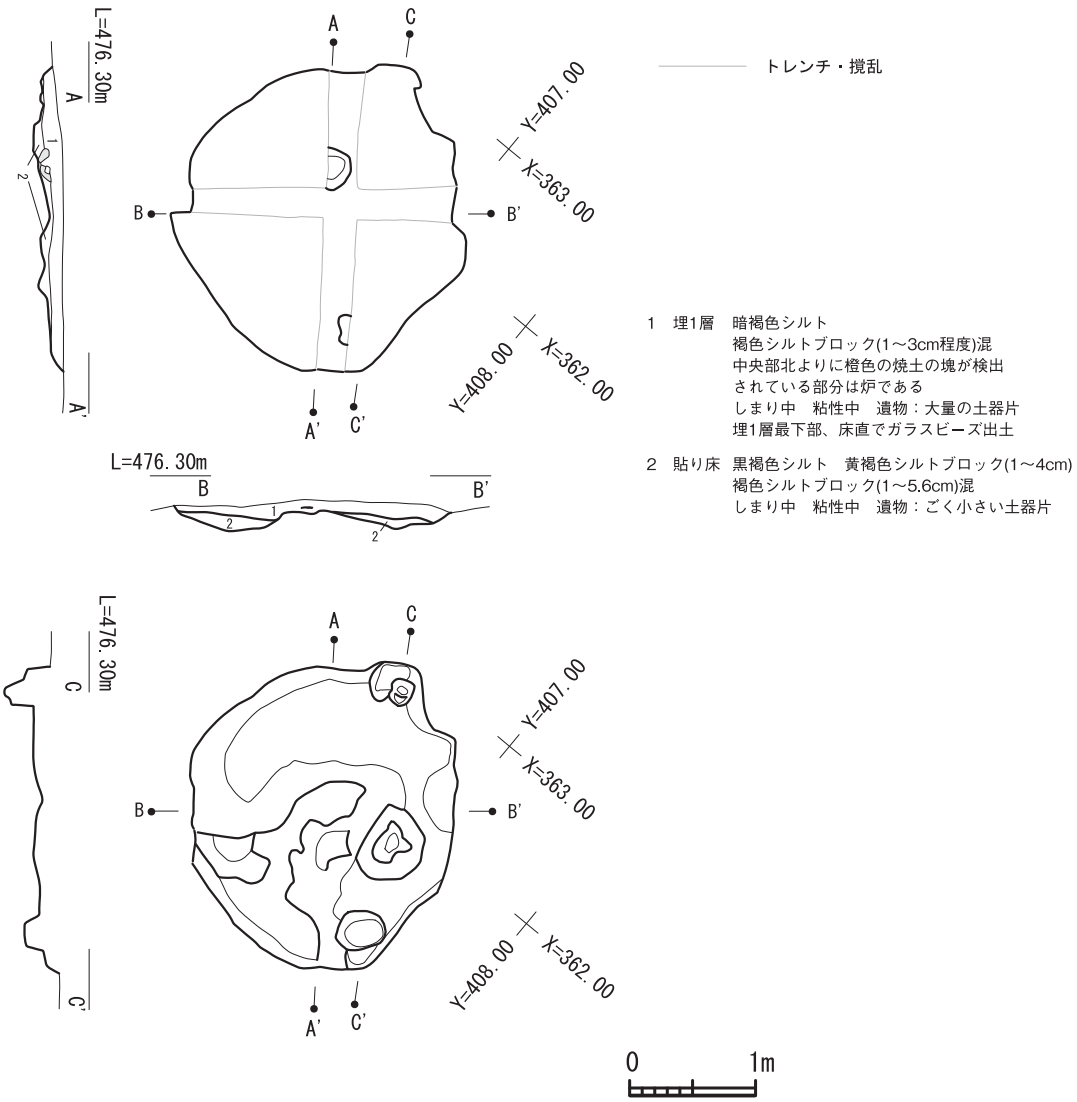


図 232　SB95　(1/60)

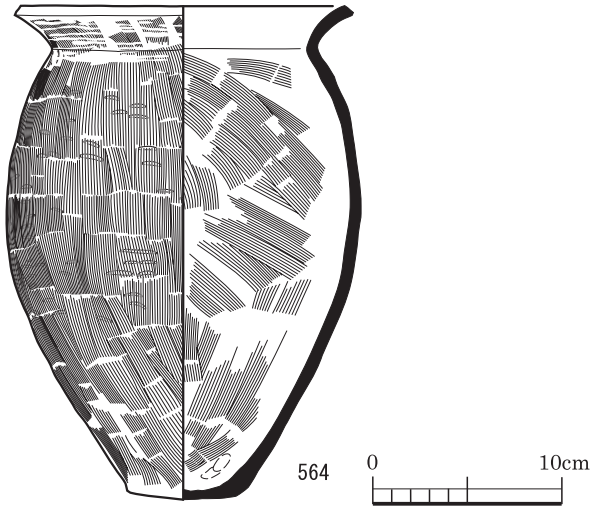
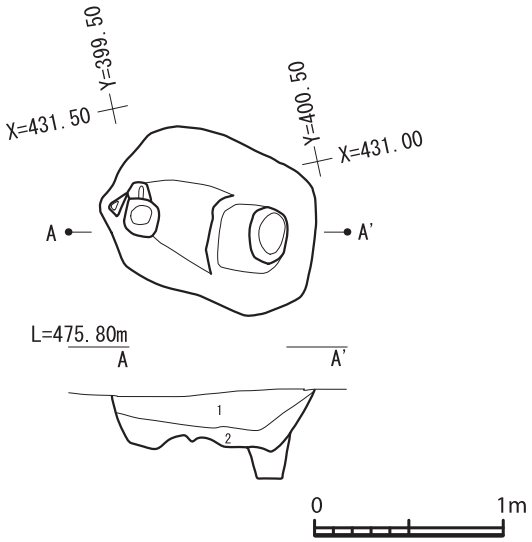
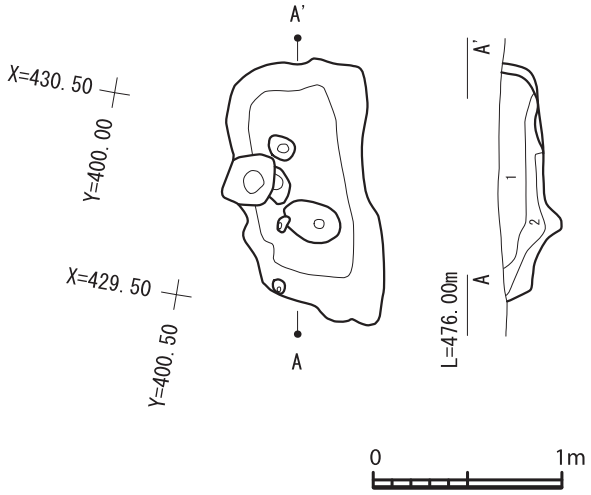


図 233　土器（RP）実測図（SB95）



1　埋1層　暗褐色シルト質　大きめの黄褐色粘土ブロック(3～5cm)が点在
　　炭化物(1～2cm大もある)含む　しまり中　粘性中
2　埋2層　明るめ暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック多く混　炭化物含む
　　しまり1より強めの中　床を貼った様な感じでもある

図234　SK75（1/40）



1　埋1層　暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック少量混
　　炭化物、ベンガラくず含む　しまり中　粘性中
2　埋2層　明るい暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロックかなり多く混
　　炭化物も多い(4cm大のものもあった)　しまり中　粘性中

図235　SK76（1/40）

後に出土位置に据え置かれたことを示している。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、北辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。南辺には溝が切られないが、Kピット関連の土壙群が連接して設けられるため、結果として南側壁際にも凹みが形成されることとなる。すなわち、竪穴住居全体では、ロ字形の掘方となる。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約15cmの深度である。

SB86

SB86は、長方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁及び西側壁に張出し部を備える。SK99と切り合うが、SK99（古）→SB86（新）である。

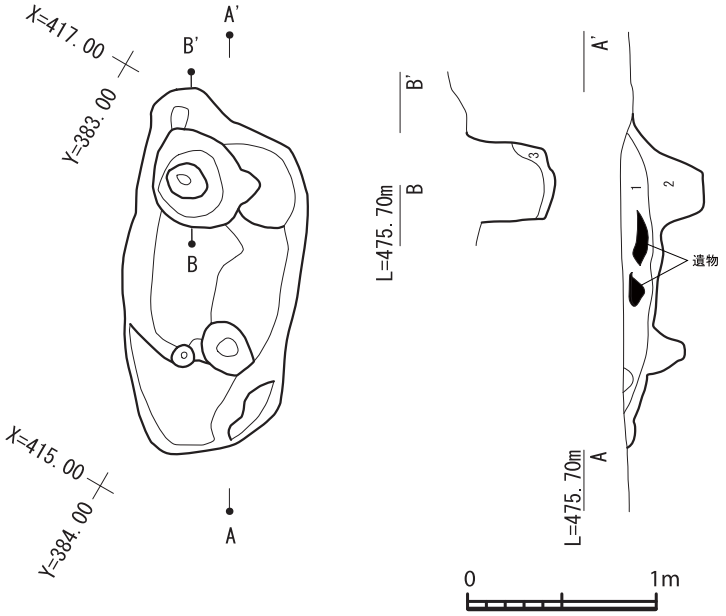
SB86の法量は、南北6.8 m、東西7.6 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

SB86の埋土は、ロームブロックを含む擬礫層であり、その流入状況を観察することが容易である。なかでも埋3層にその特徴がよく出ているが、この層はSB86の東側から投げ込まれている状況と判断することができた。東側にはSB1が位置しており、SB1の築造に際して、その最下層（基本土層4層）掘削排土がSB86に堆積している、と考えることができる。なお、南東グリッドと北東グリッドでは、埋4層からベンガラが検出された。なかでも南東グリッドで検出されたベンガラは色鮮やかである。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、南側で発達し、Kピットの北端にまで発達している。各主柱穴の外側には、主軸に沿って各方向1基、合計8基のピットが配置されている。

炉は、南北90cm、東西90cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高まりの周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。

Kピットは正方形を呈し、南側壁に接して中央に位置



1　埋1層　暗褐色シルト質　炭化物非常に多く含む　所々に焼土も混　土器片も埋1層にほとんど集中　しまり中　粘性中
2　埋2層　暗褐色シルト質(下にいく程暗め)、黄褐色粘土ブロック混　炭化物少し含む　しまり埋1層より強めの中　粘性埋1層より強めの中
3　埋3層　暗めの暗褐色シルト質、黄褐色粘土ブロックが大きな粒でたくさん入っている　しまり埋2層より強い　粘性埋2層より強い

図236　SK93（1/40）

する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は北西隅、北東隅、南東隅には概ね方形を呈して設けられている。南西隅のベッド状遺構は、北西隅のベッド状遺構と、幅はそのままで、高さは1段低くなり、西側壁の張出し部とも複合した状態で、連接している。東側壁の張出し部には、張出し部内にベッド状遺構が複合して設置されており、南東隅のベッド状遺構と角部分で連接している。北側壁には張出し部と複合したベッド状遺構が設置され、北西隅と北東隅のベッド状遺構を連接させている。ベッド状遺構の高さは、北側が1段高く、南側が低い。

床は2種に分かれる。内陣の床面は、地山削り出しの床であり、基本土層4層が硬化面を伴って床面を形成している。竪穴住居の縁辺部、すなわち、外陣は貼床であり、厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東西南北の各辺に沿って幅広い溝を切り、各土壙を連接させている。張出し部には、その前面に長方形の土壙が掘削されている。竪穴住居全体では、ロ字形の掘方となる。炉の南半部分にも掘削が及ぶが、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は平らに整えられている。この平坦面は、先述のとおり、床面として直接使用された。掘方の最深部は、床面から約35cmの深度である。

SB88

SB88は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁及び西側壁に張出し部を備える。SB91と切り合うが、SB91（古）→SB88（新）である。

SB88の法量は、南北3.4 m、東西3.5 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

竪穴住居跡の北半中央部の埋土（埋1層）には、ベンガラが含まれていた。

主柱穴は、床面段階では北東主柱穴が確認できなかったが、掘方段階で2×2の計4基を検出した。北東主柱穴を除く3基の主柱穴は、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。硬化面は、形成されていない。なお、南西主柱穴の北ではベンガラが検出された。

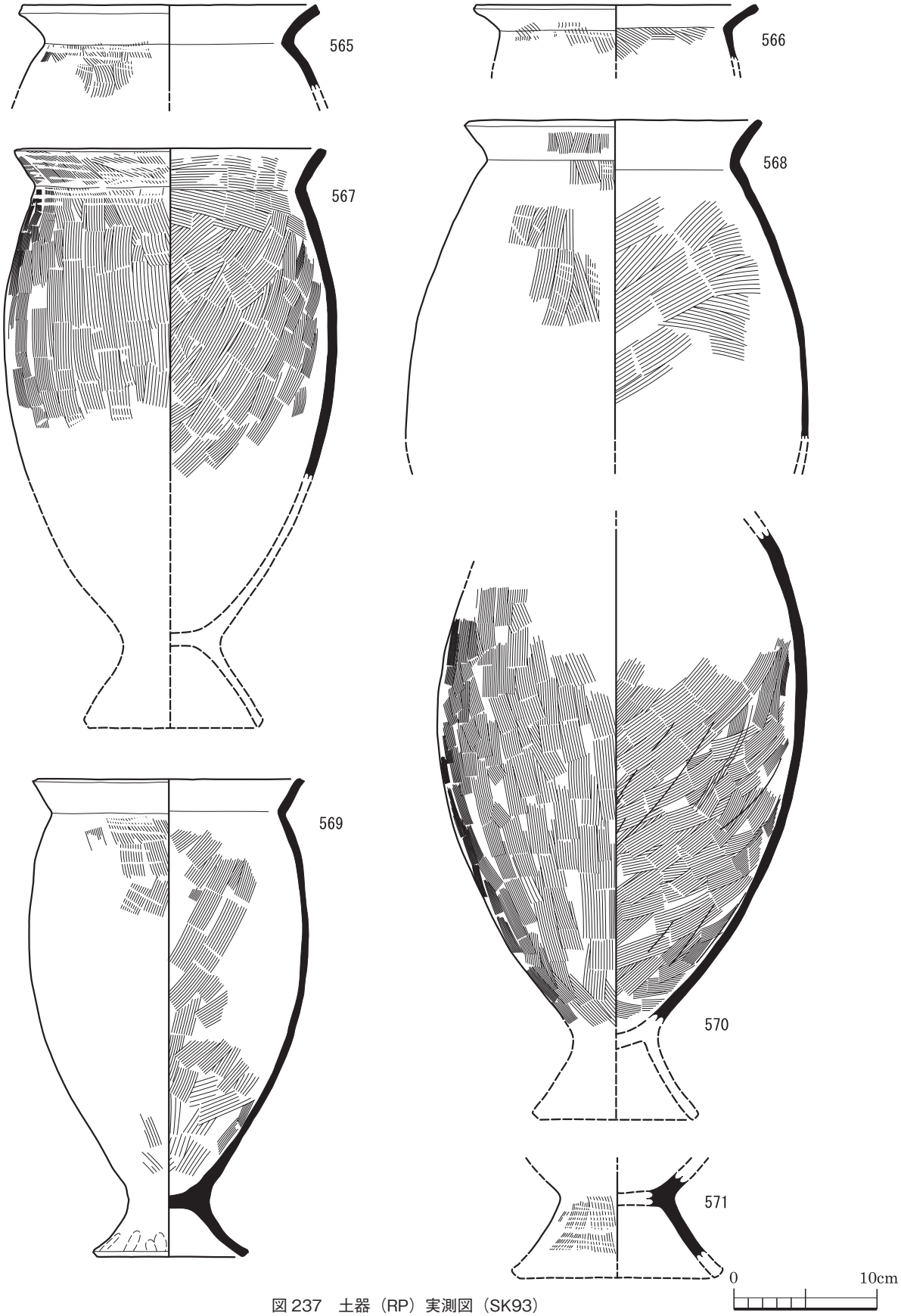


図 237　土器（RP）実測図（SK93）

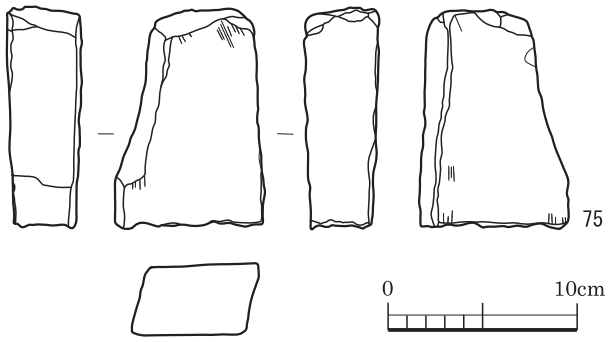


図238　石器（RQ）実測図（SK93）

炉は、南北に並ぶ2基の土壙で形成されている。南土壙は南北50cm、東西40cmの円形を呈し、深さは10cmである。北土壙は、南北25cm、東西30cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南北方向中央、東西方向西寄りに位置している。炉底は浅い皿形に掘りくぼめられている。炉の上位では、各土壙に対応して焼土が検出されている。

Kピットは、確認していない。

ベッド状遺構は、竪穴住居の東半部を、コ字形に囲うように設けられている。SB88のベッド状遺構は、その基本単位としての方形を呈するベッド状遺構を認識することができない点が特徴である。

床は、貼床である。

掘方は、ベッド状遺構に概ね一致する形で、竪穴住居の東側が高く、西側が低くなるように掘り下げられている。炉を中心とした内陣の西半部と、西側の外陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約15cmの深度である。

SB89

SB89は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。Kピットを備える。

SB89の法量は、南北3.9m、東西3.6m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁に接して設けられ、ともに内傾している。硬化面は、形成されていない。

炉、ベッド状遺構は、確認していない。

Kピットは方形を呈し、南側壁に接して中央に位置する。なだらかに堀りくぼめられており、柱穴は伴わない。

床は、薄い貼床である。

掘方は、東西南北の各隅に方形の浅い土壙を掘削している。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB90

SB90は、長方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。北側壁に張出し部を備える。

SB90の法量は、南北2.9m、東西3.0m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。長方形を呈する竪穴住居の北側壁に三角形を呈する張出し部が付設され、張出し部の頂点に炉を設けている。

柱穴は、竪穴住居の東西南北の各隅に位置し、北西柱穴、南東柱穴にはテラス状の高まりが付設されている。南壁に接して中央に位置する柱穴と遺構外でSK98の東端に位置する柱穴も主柱穴の候補に上るが、この場合、2本柱建てとなる。

炉は、南北80cm、東西80cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉底は浅い皿形に掘りくぼめられている。その上位では焼土が検出された。

Kピット、ベッド状遺構は、確認されていない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

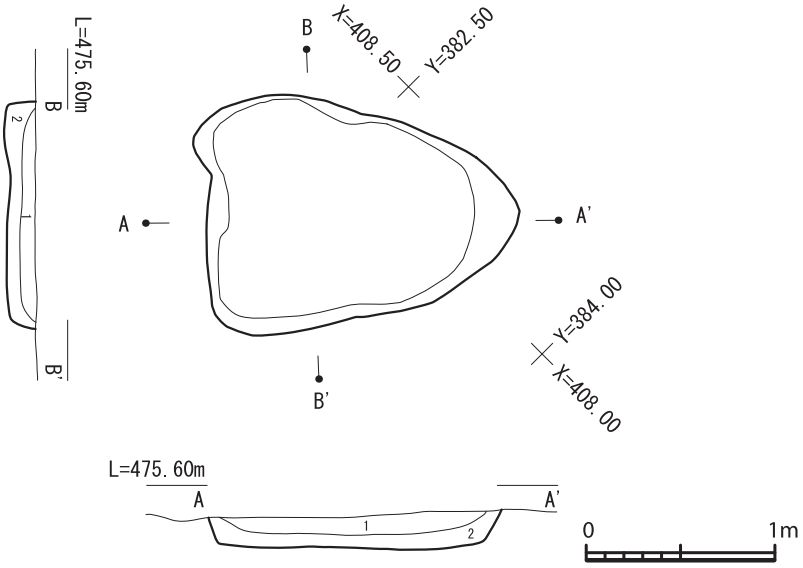
掘方は、竪穴住居の中央部に向かい、2段掘り状に不整形の土壙が掘削されている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB91

SB91は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピットを備える。SB88と切り合うが、SB91（古）→SB88（新）である。竪穴住居跡の南東隅は、後代の地割れが走り、陥没している。

SB91の法量は、南北3.7m、東西4.9m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

SB91では、最上層（埋1層）にベンガラが大量に含まれていた。このベンガラは竪穴住居跡のほぼ中央部に位置し、南北2.1m、東西1.7mの円形を呈する範囲に、レンズ状に堆積していた。ベンガラは色鮮やかな部分と、その他の部分に峻別することが可能である。色鮮やかな部分は、レンズ状に堆積するベンガラの中位に



1　埋1層　暗褐色シルト質　炭化物混　遺物(土器片)もほとんど埋1層　しまり中　粘性中
2　埋2層　埋1層よりやや明るめ暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック少し含む
　　しまり埋1層より強めの中　粘性埋1層より強めの中

図239　SK94（1/40）

あり、当該部分自体もレンズ状の堆積状況を示している。また、埋1層の最下位にもブロック状に堆積した部分が確認できる。その堆積状況から、北東隅の方向から投げ込まれたベンガラである、と判断した。

主柱穴は、2基検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。2基の主柱穴を結ぶラインは、竪穴住居の南北側壁と平行に位置し、竪穴住居の東西主軸に一致する。その内側には硬化面が形成されている。硬化面は、Kピット北端までの南半部で発達している。

炉は、南北65cm、東西70cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶラインに接し、竪穴住居の中央に位置している。炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。炉内東側にはテラス部がめぐる。炉の内壁は、東側は切り立ち、西側に向かって緩やかに上っている。炉の北側には半円形を呈する浅い土壙が付設され、土壙の範囲では焼土が検出された。この焼土は、貼床そのものが焼け、明橙色を呈し、ボロボロと崩れていく状態であった。この部分と炉床、炉埋土との間には間層があるため、炉の熱を受けて生じた変化ではない、と判断する。

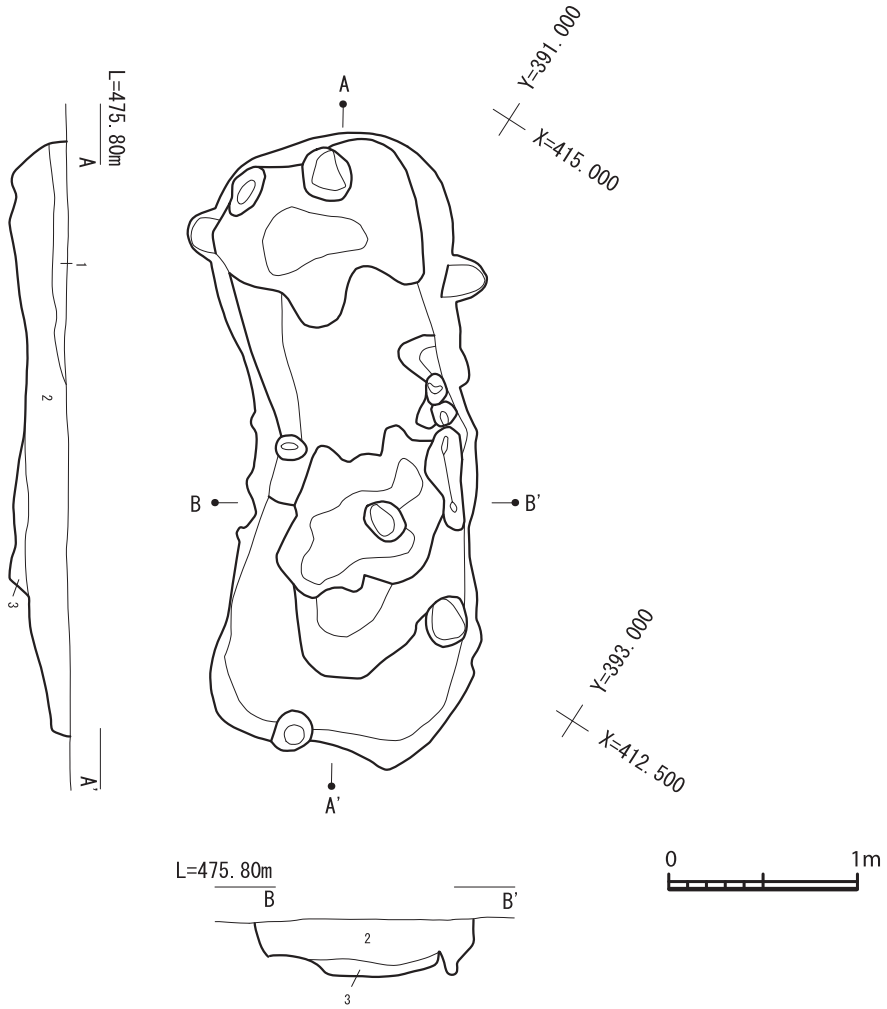
Kピットは不整形ながらも方形を呈し、南側壁の近くの東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、底部は、緩やかな凹が2箇所に認められるが、概ね平坦である。Kピットに伴う柱穴は、床面段階の調査では確認することができなかった。掘方段階の調査では、北辺東側に1基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている状況を検出している。

竪穴住居の南西部、西主柱穴の南側では、焼土が検出された。当該部分では、焼土を除去するとピットが検出された。床面は、このピットの部分のみ硬化しているため、このピットで火が焚かれたもの、と判断した。

ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。北辺には幅が広い溝は切られていないが、北側壁に沿って細長い溝1条が認められるので、ロ字形の掘方となる。各主柱穴を端部とした内陣に相当する部分は、平らに整えられている。なお、掘方段階の調査で、東側壁と西側壁に沿って柱穴が3基ずつ並び、さらに南側壁に接



1　埋1層　黒褐色シルト　粘性中　しまり中

2　埋2a層　暗褐色シルト　黒褐色シルトブロック、黄褐色シルトブロック(1～4cm)混
ブロックの混じり具合は上から下まで均一である　粘性中　しまり中　遺物：土器片2点のみ

3　埋2b層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(5mm～3cm)、褐色シルトブロック(1～6cm大)混
ブロックを特に多く含むため、埋2a層より色調が明るく見える 粘性中　しまり中　遺物なし

図240　SK96（1/40）

し西主柱穴の南側にも柱穴1基が検出された。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SK93

SK93は、長方形を呈する土壙である。

SK93の法量は、南北1.9m、東西0.9m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙の北端にはピットが付設され、土壙底部には平坦面が造り出されている。

SK94

SK94は、概ね方形を呈する土壙である。

SK94の法量は、南北1.6m、東西1.1m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出されている。

SB95

SB95は、円形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。

SB95の法量は、南北2.4m、東西2.1m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

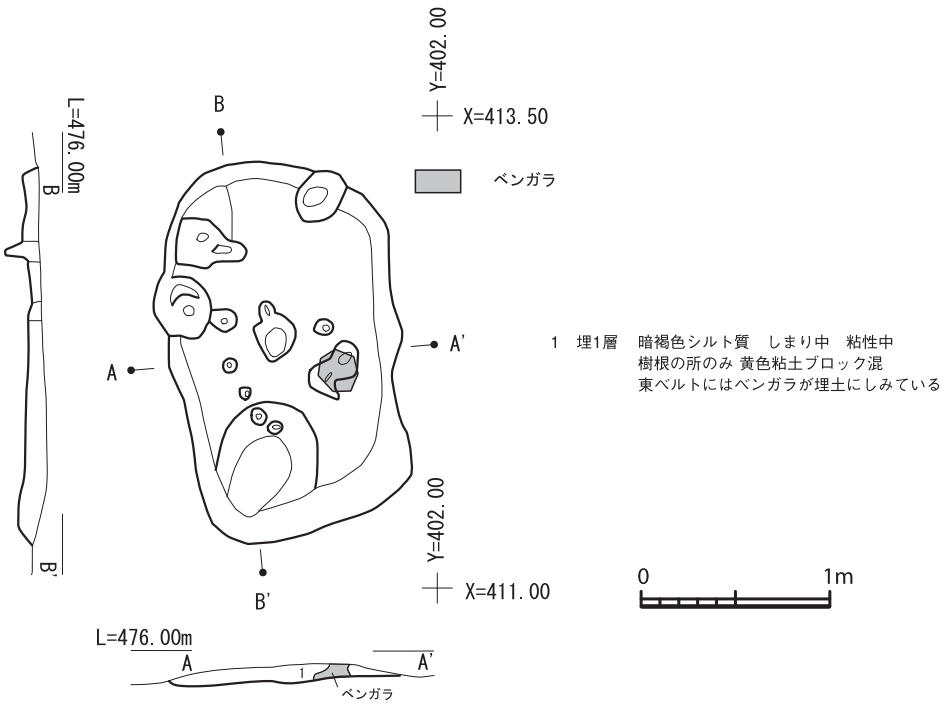


図 241 SK97（1/40）

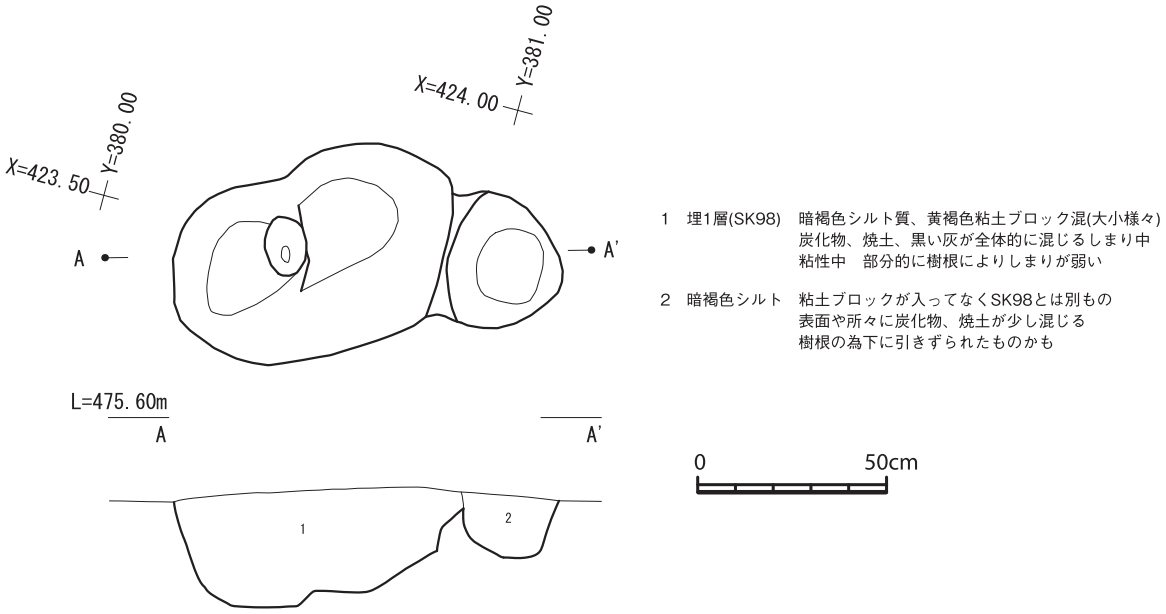


図 242 SK98（1/20）

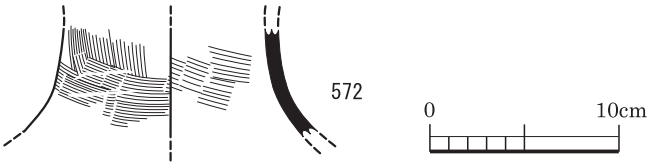
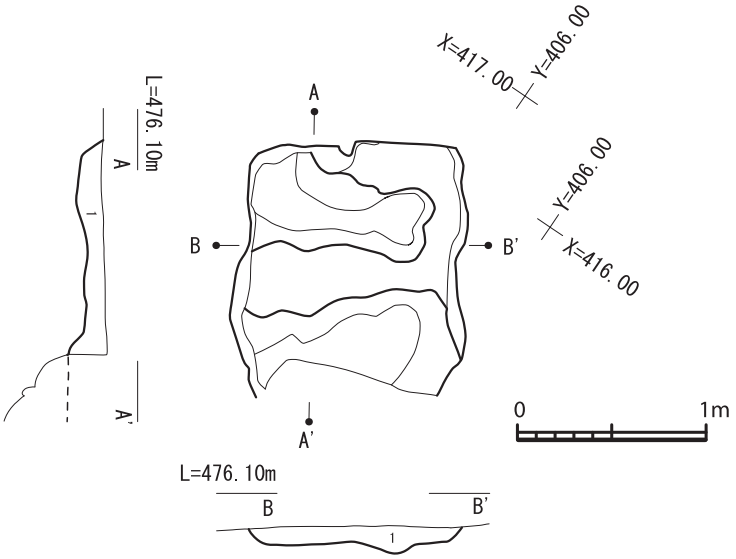


図 243 土器（RP）実測図（SK98）



1　埋1層　暗褐色シルト　褐色シルトブロック(1～7.8cm)、黄褐色シルトブロック(1～7.8cm)混
検出時からまんべんなくブロックが入っている
わずかではあるが(数粒程度)、1cm程度の炭混　しまり中　粘性中　遺物：土器片

図244　SK99（1/40）

柱穴は、床面段階の調査では確認していないが、掘方段階の調査で2基検出した。2基の柱穴は竪穴住居の南北両端に位置している。いずれの柱穴も、浅く、掘方段階で認識されたようにしっかりとした構造を備えているとは評価できない。硬化面は、形成されていない。

炉は、掘方段階の調査で確認された。南北60cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶライン上に位置している。炉底は浅い皿形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は、貼床である。

掘方は、竪穴住居の平面形をたどるように、幅広の溝が馬蹄形に掘削されている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SK96

SK96は、長方形を呈する土壙である。

SK96の法量は、南北3.2 m、東西1.2 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙底部は平坦に整えられているが、緩やかな起伏を備えている。木棺墓の可能性を考慮して調査を進めたが、木棺墓と考えるに足る根拠を見出すには至っていない。

SK97

SK97は、長方形を呈する土壙である。

SK97の法量は、南北2.0 m、東西1.2 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出され、南西隅には浅い土壙が付設されている。底面中心部付近ではベンガラが検出された。ベンガラは炭等と混じっていた。ベンガラの直下にはピットが位置する。このピットは深度が浅いものの、底までベンガラで染まっている状態である。

SK98

SK98は、円形を呈する土壙である。

SK98の法量は、南北0.3 m、東西0.4 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

ピットの複合体である。

SK99

SK99は、方形を呈する土壙である。SB86と切り合うが、SK99（古）→SB86（新）である。

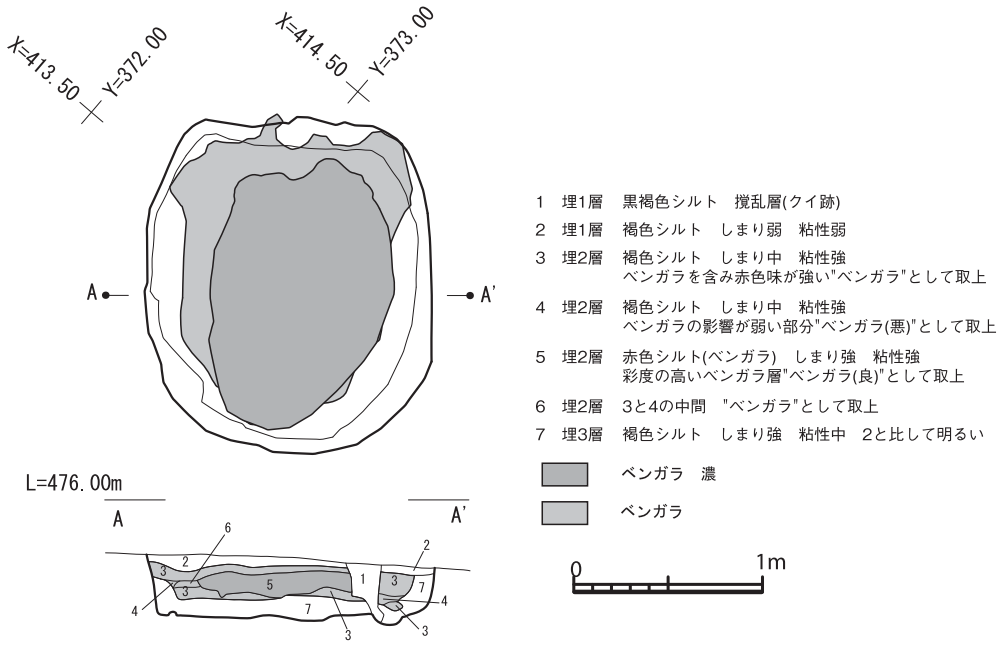


図245 SK100（1/40）

SK99の法量は、南北は1.2ｍを確認し、東西1.2ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。壁面は垂直に立ち上がる。

SK100

SK100は、長方形を呈する土壙である。ベンガラが多量に埋置されていた。

SK100の法量は、南北1.8ｍ、東西1.5ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

SK100は、最下層（埋3層）が形成された後、多量のベンガラ（埋2層）が土壙内に充填され、さらに上層に埋土（埋1層）が堆積している。ベンガラは、土壙と同様長方形のプランを描き、その断面端部は概ね垂直な立ち上がりを見せている。また、上層との界面も平坦である。以上から、ベンガラは、木箱等、容器に入ったものが据え置かれた、あるいは、立方体の土壙が整えられその中に据え置かれたものと判断することができる。

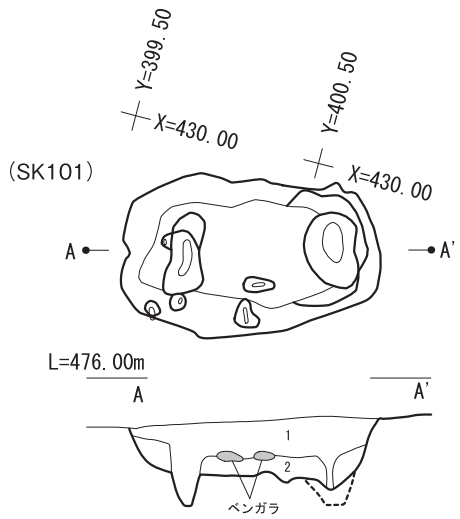
なお、ベンガラは、その出土箇所により色調が異なり、現場で3段階に識別することができた。特に明るい赤色を呈し最も精良な類のベンガラは、平面的にも、断面的にもベンガラの中位に位置している。ベンガラの堆積は、この精良なベンガラの部分から放射的に色調が劣化する変化構造を基本とする。この部分は、褐色シルトと混じり彩度と明度が落ちる類のベンガラである。また、褐色シルトと混和した状態でしか取り上げが適わなかった類をベンガラ（悪）として取り扱った。このベンガラ（悪）は、ベンガラ分布の最下部の隅部分、下層（埋3層）の変化点にブロックとして存在している。このことは、ベンガラが容器に入っていた、または土壙が立方体に整えられていたとする判断に整合している。さらに、当該ブロックを鍵層とすると、最上層の薄いベンガラ層（3と註記）は、容器の場合にはその蓋の上に、土壙が立方体に整えられていた場合には異なる段階に、散布されたものとして他のベンガラと区分することができる。

SK100は、ベンガラが、その質によって分類できること、据え置きと散布という異なる経過を認識できることを示唆した土壙である。

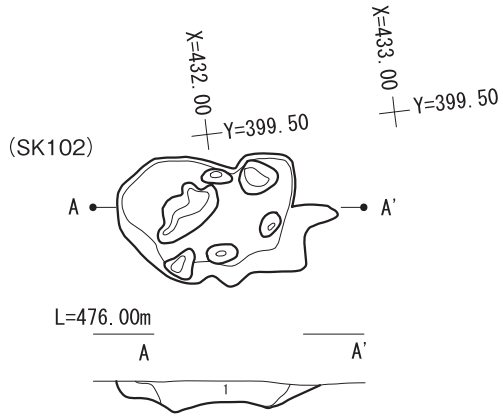
SK101

SK101は、長方形を呈する土壙である。

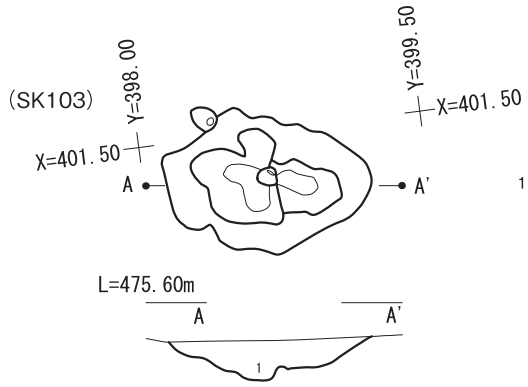
SK101の法量は、南北0.8ｍ、東西1.4ｍ、遺構確認面からの深さ20cmを測る。



1　埋1層　暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック全体的にまばらに混　炭化物含む
2　埋2層　褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック多量に混　炭化物含
しまり1より強めの中　粘性1より強めの中
SK75同様床を貼ったような感じ　しかも2上面にベンガラがぬりつけてあって
上下に色が浸み出したように見える部分もある

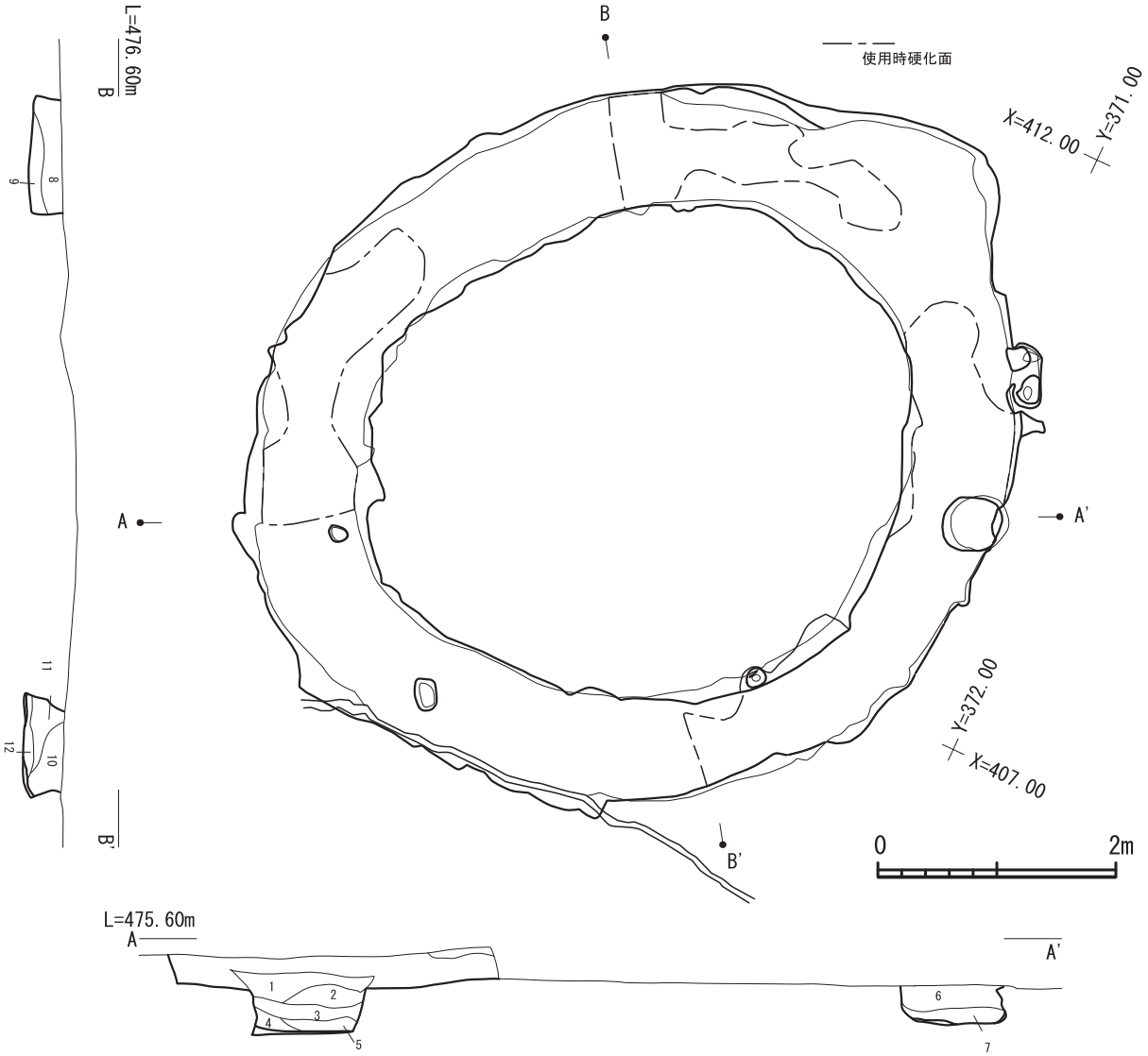


1　埋1層　暗めの暗褐色シルト質
大小様々な黄褐色粘土ブロック混
しまり中　粘性中



1　埋1層　黒褐色シルト　褐色シルトブロック(1～10cm弱)
黄褐色シルトブロック(1～10cm弱)混
比較的下部に大きいブロックが集中している
1cm程度の炭混　遺物なし　しまり中　粘性中

図246　SK101･102･103（1/40）



1 埋1層　暗褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロックが点在する　ブロックが追える所まで線を引いたが、あとは2a層と区別つかず しまり中　粘性中

2 埋1層　明るめの暗褐色シルト質、黄・黄褐色粘土ブロックを多量に含む　炭化物含　しまり中　粘性1より強めの中

3 埋1層　暗褐色シルト質　黄・黄褐色粘土ブロック混　炭化物含　しまり中　粘性中

4 埋1層　3より暗めの暗褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロック少し混　ベンガラくず含　しまり1～3より弱めの中　粘性中

5 埋1層　明るめの暗褐色シルト質　大きな黄褐色粘土ブロック少し混　しまり中　粘性強めの中

6 埋1層　暗褐色シルト質　粘土ブロックがほとんど入っていない　小さな炭化物、ベンガラくず含　しまり中　粘性中

7 埋1層　3より暗めの暗褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロック少し混　ベンガラくず含　しまり強めの中　粘性中

8 埋1層　暗褐色シルト質　黄・黄褐色粘土ブロック混　炭化物含　しまり中　粘性中

9 埋1層　3より暗めの暗褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロック少し混　ベンガラくず含　しまり強めの中　粘性中

10 埋1層　3より暗めの暗褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロック少し混　ベンガラくず含　しまり強めの中　粘性中

11 埋1層　明るめの暗褐色シルト質、黄・黄褐色粘土ブロックを多量に含む　炭化物(2より大きい)含　しまり中　粘性1より強めの中

12 埋1層　明るめの暗褐色シルト質　大きな黄褐色粘土ブロック少し混　しまり中　粘性強めの中

図247　SD77　床面（1/60）

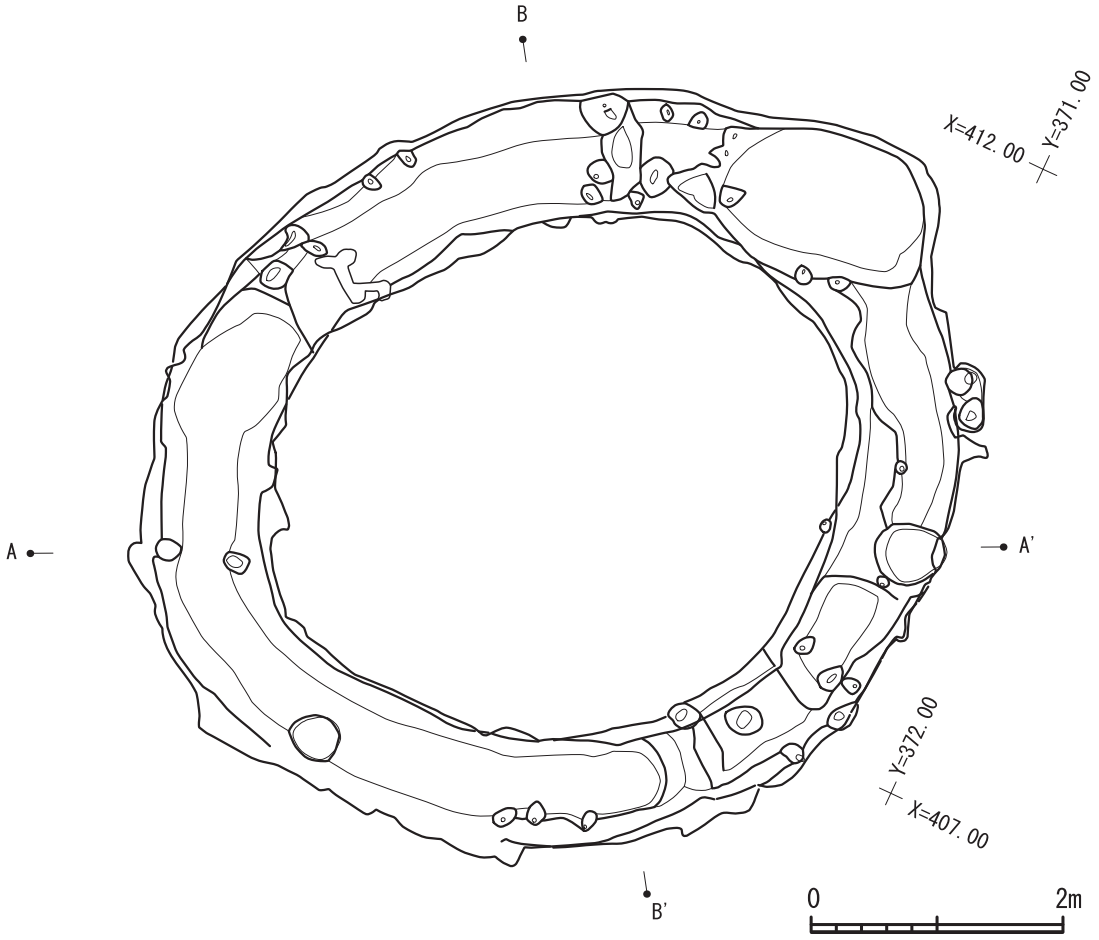


図 248　SD77　掘方（1/60）

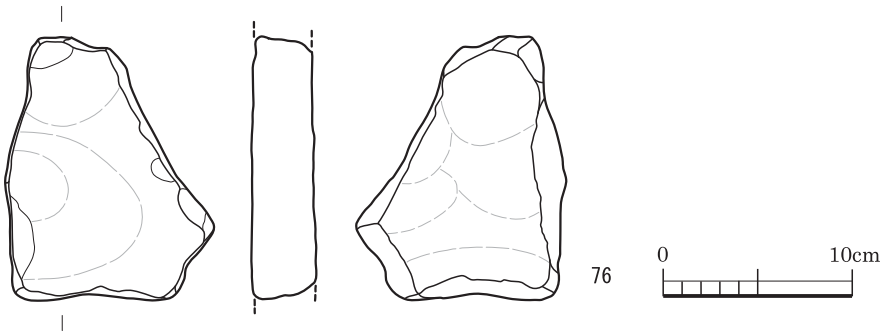


図 249　石器（RQ）実測図（SD77）

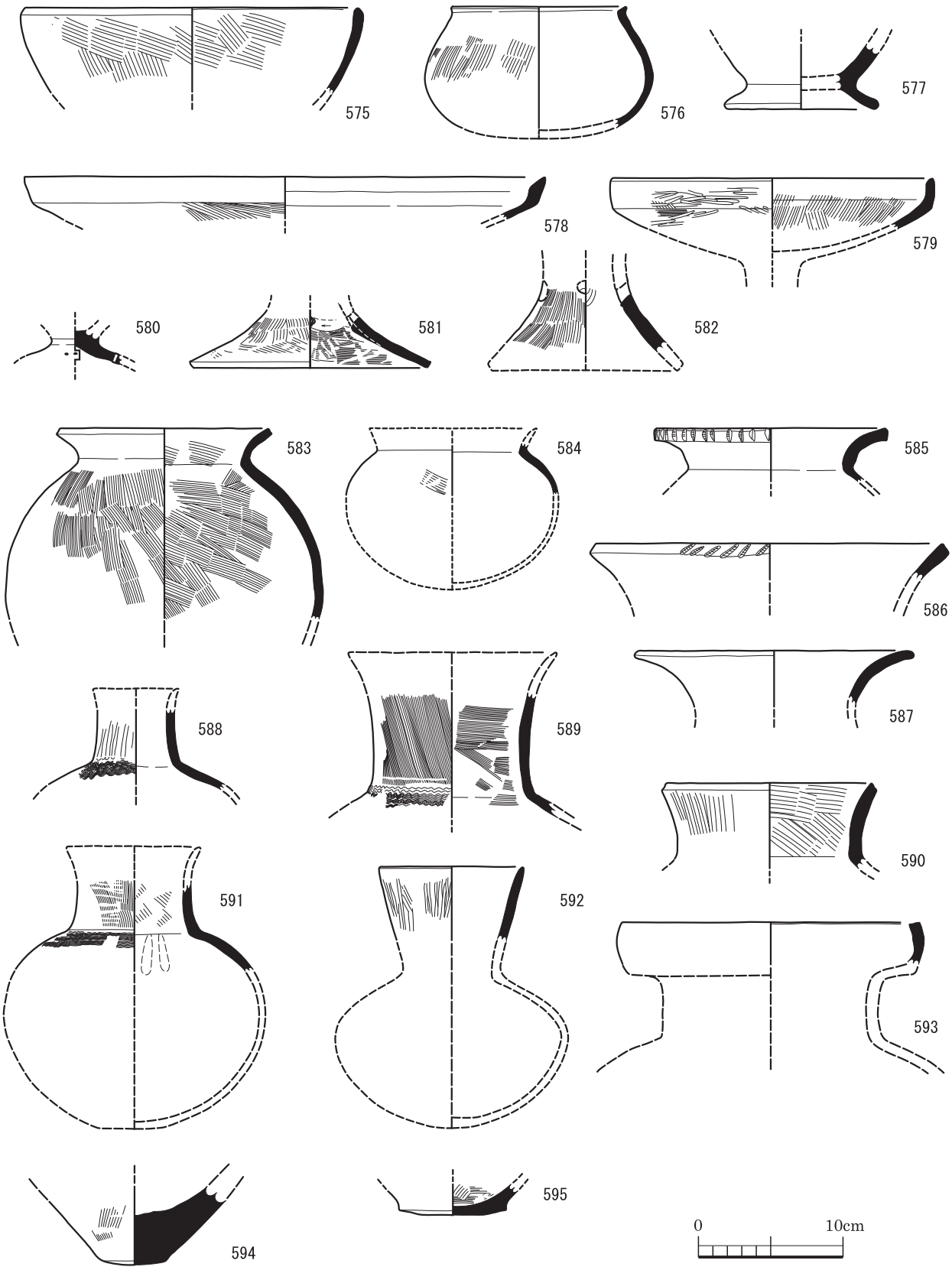


図 250　土器（RP）実測図（4 区一括）

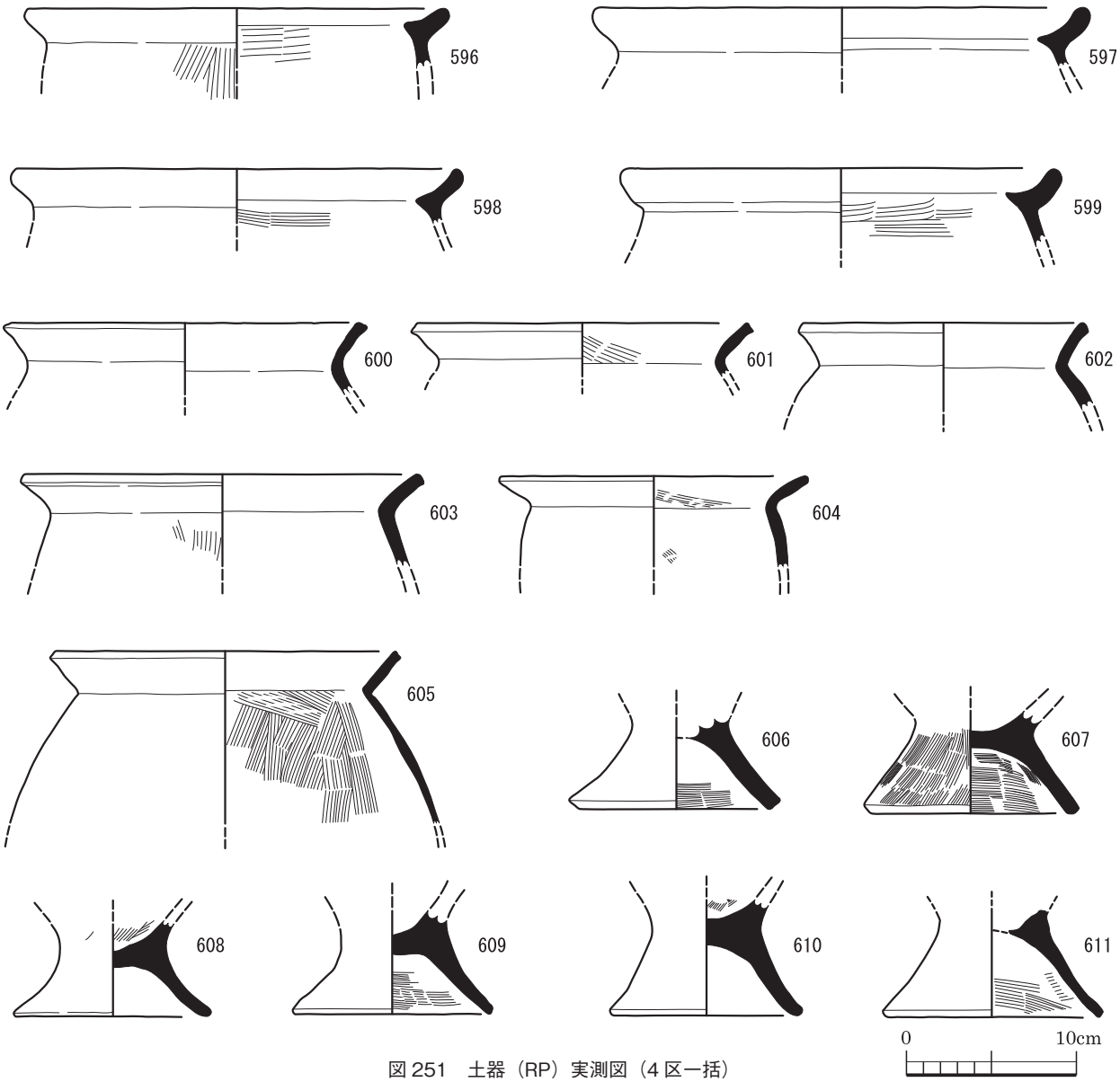


図 251　土器（RP）実測図（4 区一括）

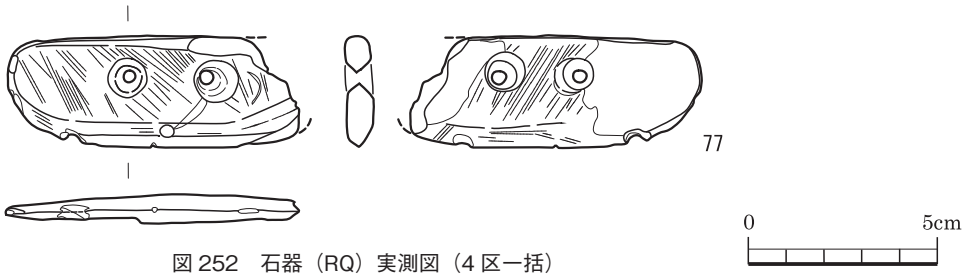


図 252　石器（RQ）実測図（4 区一括）

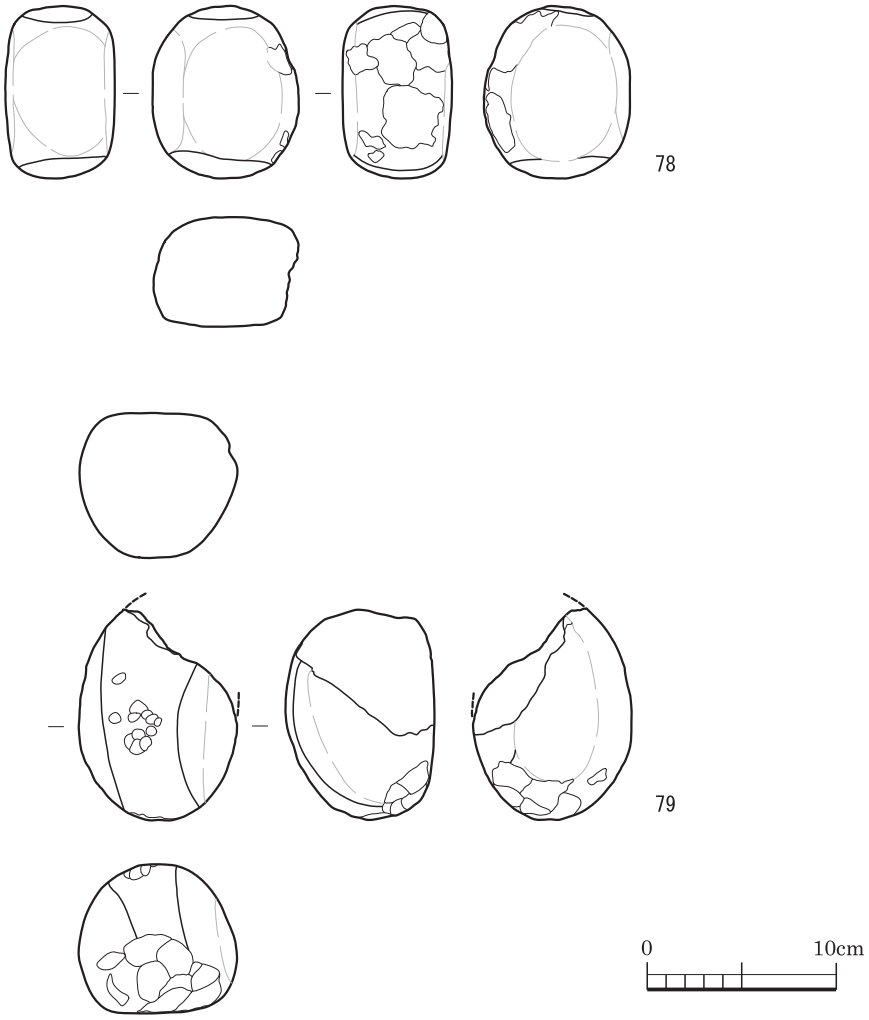


図 253　石器（RQ）実測図（4 区一括）

土壙の東西端部にピットを付設し、底部に床を貼り平坦面を有する。貼床の上ではベンガラが検出された。このベンガラは当該位置に据え置かれており、その上位、下位にベンガラ粒が分散している状態である。

SK102

SK102は、概ね方形を呈する土壙である。

SK102の法量は、南北1.0 m、東西0.7 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出され、ランダムに不整形ピットが散在している。

SK103

SK103は、概ね円形を呈する土壙である。

SK103の法量は、南北0.8 m、東西1.1 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙は2段掘りに掘削され、底部には平坦面が造り出されている。

その他

下扇原遺跡4区では、遺構番号92を欠番とした。

なお、包含層等から出土した遺物を一括して掲載した。

２－５　下扇原遺跡５区の調査

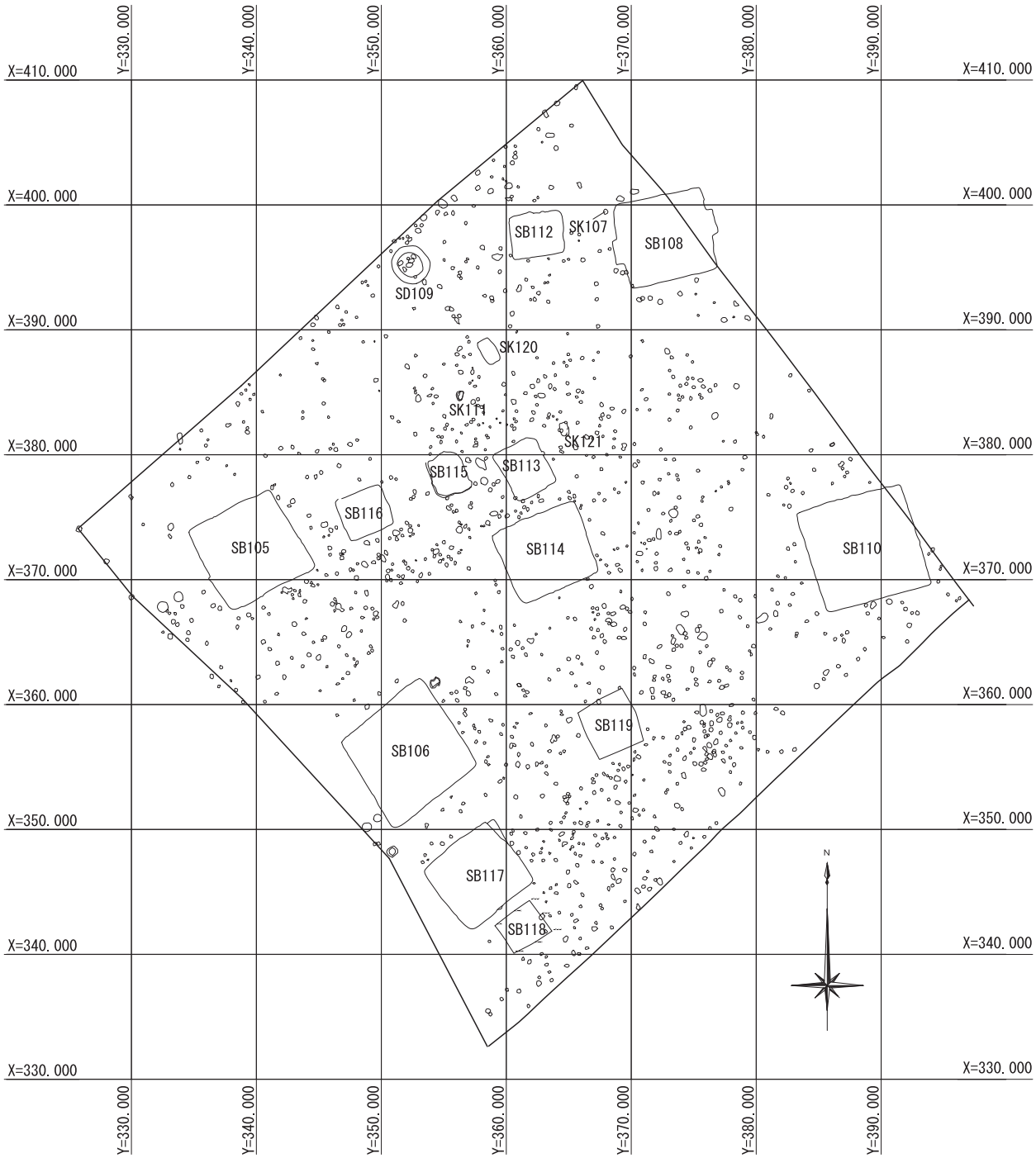


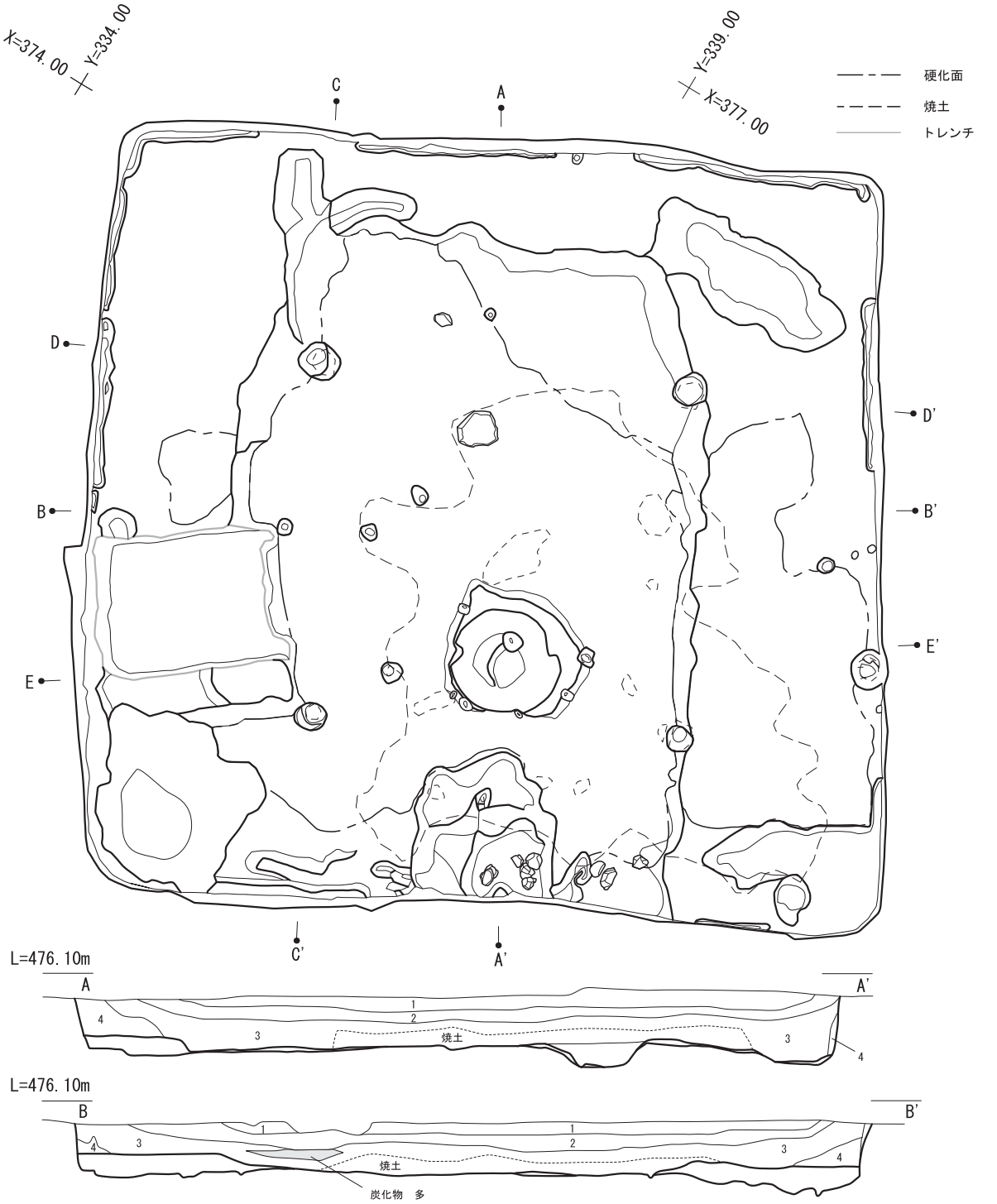
図 254　下扇原　５区遺構配置図 (1/500)

SB105

SB105は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。竪穴住居跡の西側中央部には確認調査の際のトレンチが入っている。

SB105の法量は、南北7.5 m、東西7.8 m、遺構確認面からの深さ40cmを測る。

主柱穴は、2×2の計４基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内陣を中心として



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　炭を含む

2　埋2層　黒褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(φ1cm以上)を含む　また炭、焼きを含む

3　埋3層　暗褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(φ1cm以上)を含む
ブロックの大きさは、埋2層よりも大きな物が多くなり、数も増える　埋3層の下部で、床面に接している部分は広範囲にわたって焼土化しているが、この焼土は埋3層の土が焼けたもののようである

4　埋4層　黒色シルト　しまり弱　粘性大　黄褐色ロームブロック(φ0.5～3.0cm)を含む　壁際に堆積している

0　2m

図255　SB105（1/80）

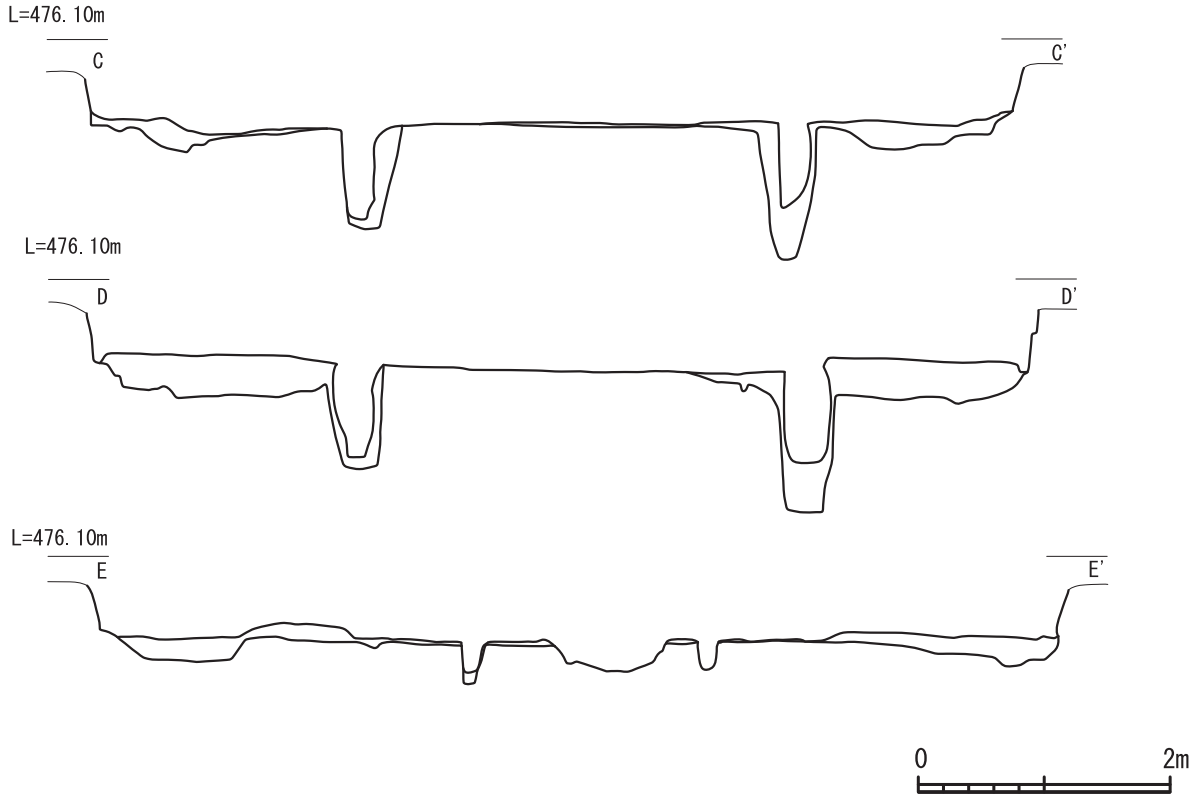


図256　SB105断面図（1/80）

硬化面が形成されている。硬化面は、内陣の北西部ではベッド状遺構端部まで、内陣の西部、東部ではベッド状遺構の上端面まで、内陣の南部ではKピット北端まで発達している。

炉は、南北100cm、東西100cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、下端部の直径1.4m程度の円形を呈し、幅20cm程の平坦部を上端に備えている。この上端面は、炉の北側から東側にかけてしっかりと形成され、西側は狭くなり、南側では稜線に変化する。炉の西側には、一部、周堤がくぼんでいる。また、炉の東西には小ピットが1基ずつ、合計2基が付設され、外端裾部に接して小ピット4基がめぐっている。炉の1段目は整った円形であるが、2段目は、炉内西側に形成されたテラス部の影響で、楕円形を呈している。テラス部の北端には小ピット1基が穿たれていた。なお、炉の内壁は、急角度で立ち上がっている。おって、炉を中心とした内陣南側からKピットまでの広範囲には焼土が分布しており、さらに、その範囲内に炭化物が凝集した箇所が多く検出された。

Kピットは正方形を呈し、南側壁に接して東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、西側には1段高まったテラス部が付設されている。西側テラスを含めた範囲の北側には、さらに1段高まったテラス部が付設されており、併せて2段のテラス構造を有する3段掘りとなっている。柱穴は、確認されていない。最下段のKピットは、その東西両端が、炉の端部に対応する位置に設けられている。この最下段Kピット内には、拳大の礫が6点検出された。また、Kピットの東側では南側壁際に拳大の礫が3点検出されている。合計9点の礫は当該位置に固め置かれていた、と判断している。

ベッド状遺構は北西隅、北東隅には概ね方形を呈して設けられ、北側壁には幅の狭いベッド状遺構が付加され、両ベッド状遺構を連接させている。南側のベッド状遺構は、南西のベッド状遺構は南側壁から2m、南東のベッド状遺構は南側壁から1m北側に方形を呈して位置している。その北端は竪穴住居の南北中央付近であり、さらに北側の部分には幅の狭いベッド状遺構が付加され、北西隅、北東隅のベッド状遺構に連接している。南東、南

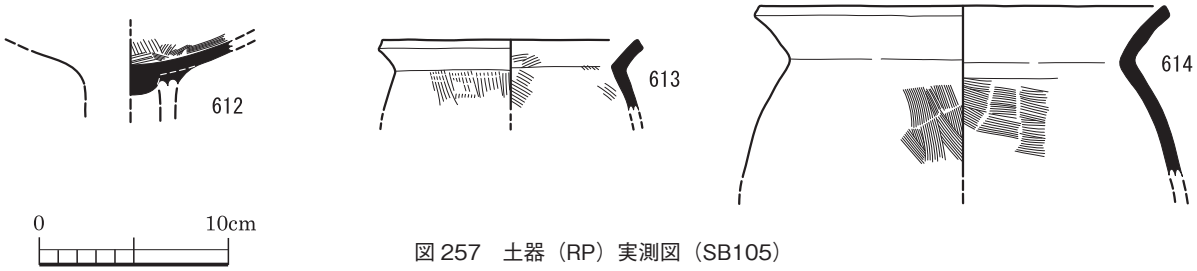


図 257　土器（RP）実測図（SB105）

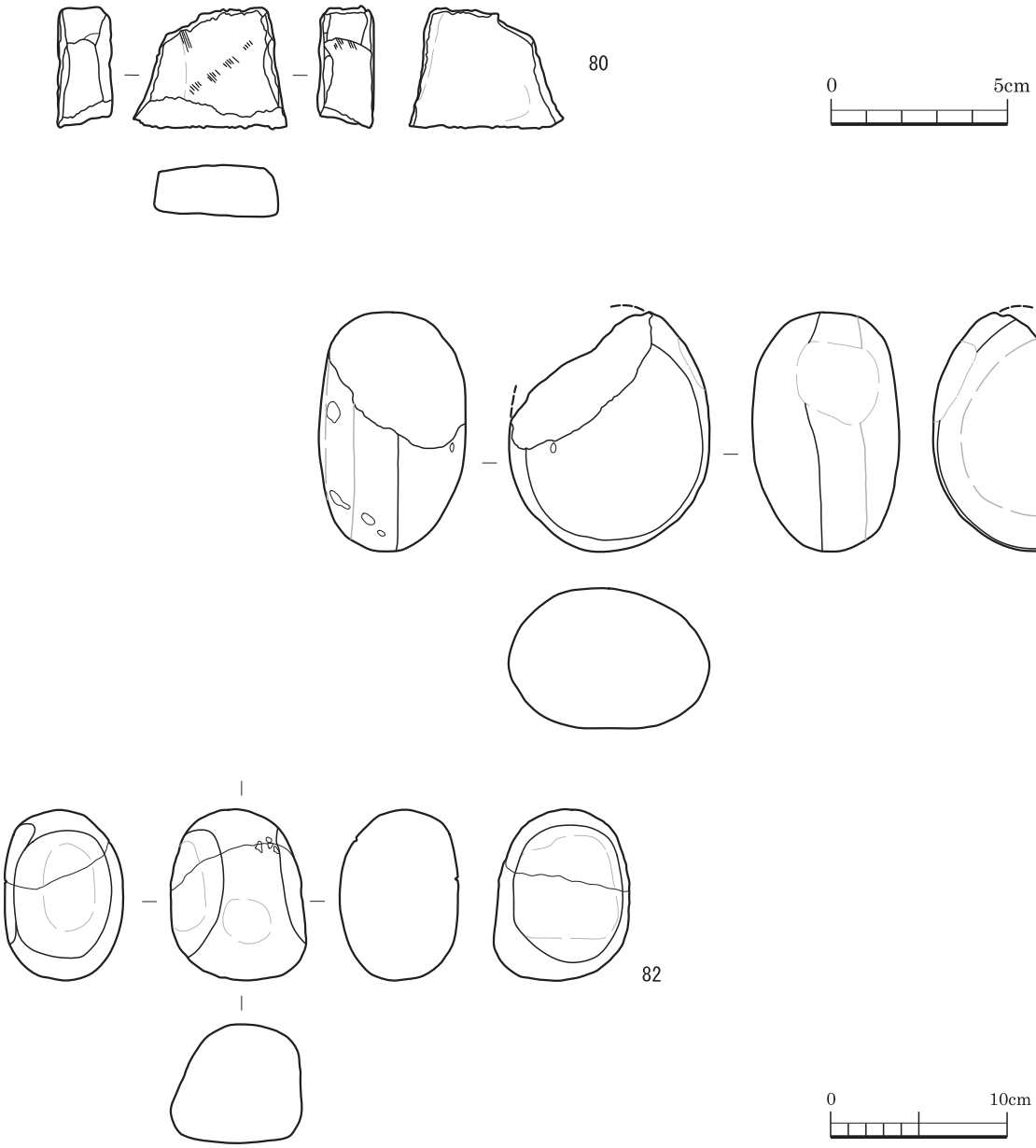


図 258　石器（RQ）実測図（SB105）

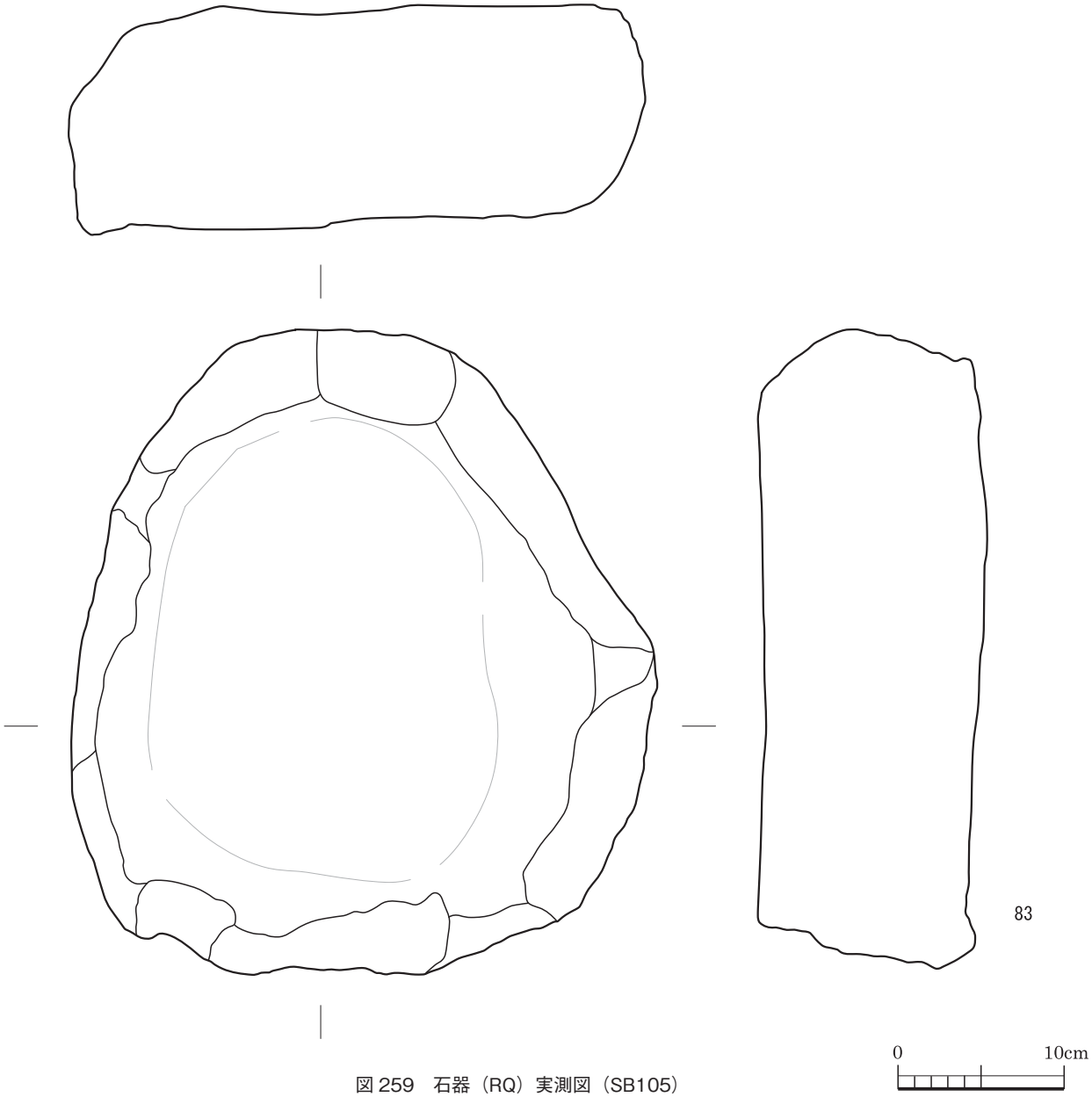
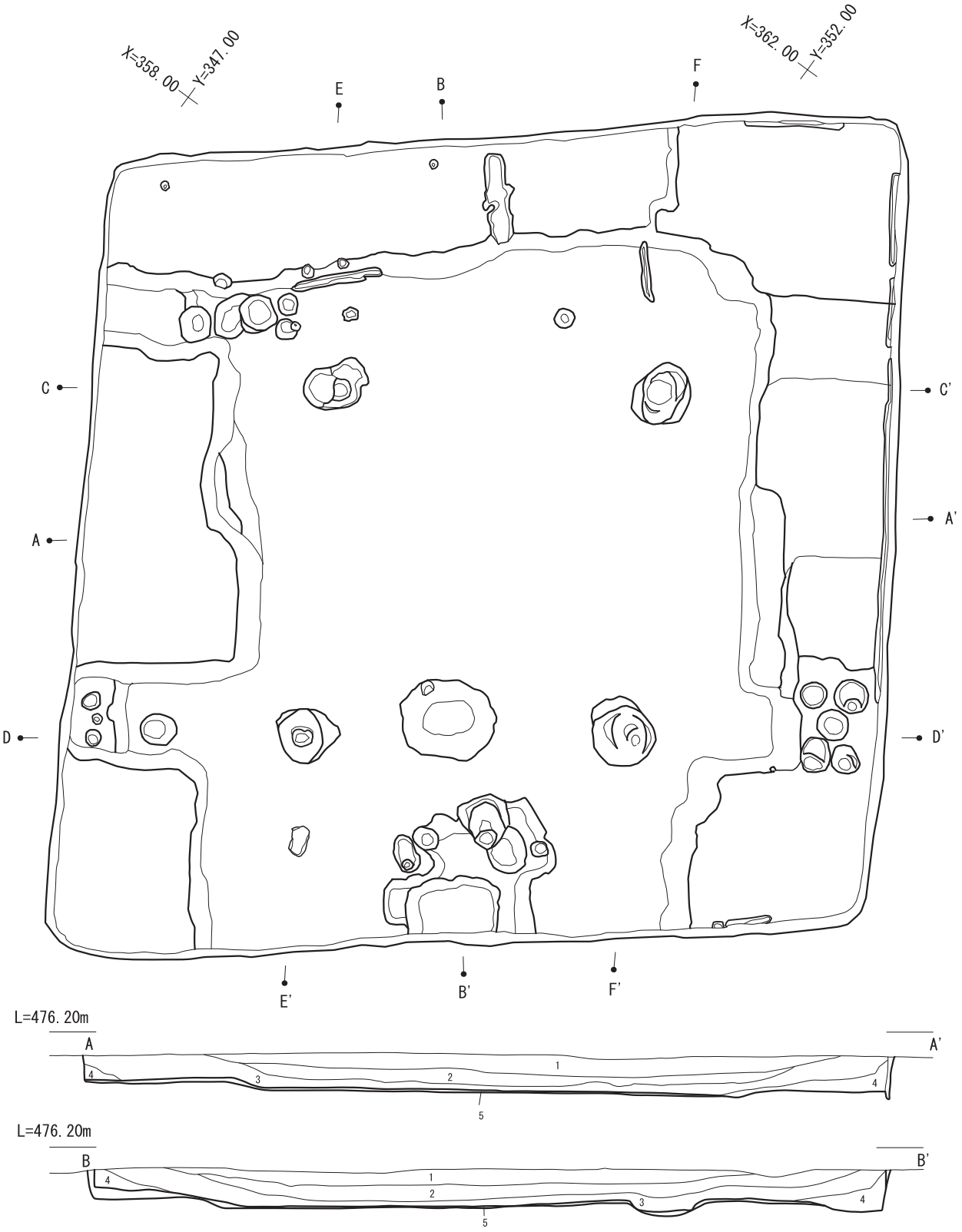


図259　石器（RQ）実測図（SB105）

西の各隅には概ね方形を呈して設けられ、北西隅では北壁から距離をおいて方形のベッド状遺構が設置されている。北東隅と南東隅のベッド状遺構の間には、1段低いベッド状遺構が設けられ、東側壁際ではベッド状遺構が連接する状態となっている。南東のベッド状遺構の南端は、最下段Kピットの北端と、南側壁の西側部分壁際に形成されているくぼみの上端に一致している。このことから、SB105は、南に1m程度増築された可能性がある、と考えている。なお、南西のベッド状遺構状は、増築後の南東のベッド状遺構と同様、増築前には南側壁から1m程度離れて位置していた、と考えられる。

竪穴住居の北寄り中央では、石皿が使用面を上にした状態で検出された。この石皿の下位ではベンガラが検出された。ベンガラが出土したのは、この竪穴住居内では当該位置のみである。したがって、ベンガラと石皿は当該位置に据え置かれたものと判断している。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。



1　褐色シルト　　粘性少　しまり中　～2mmのローム粒子資料含む
2　暗褐色シルト　粘性少　しまり中　上位から中位にかけて炭化物を含む　～5cmのロームブロックを含む擬礫層
3　褐色シルト　　粘性少　しまり中　～5mmのローム粒子を含む　SB端部に近い程～2cmのロームブロックが混じる
4　黒褐色シルト　粘性少　しまり中　～5cmのロームブロックを含む
5　掘方埋土

0　2m

図 260　SB106（1/60）

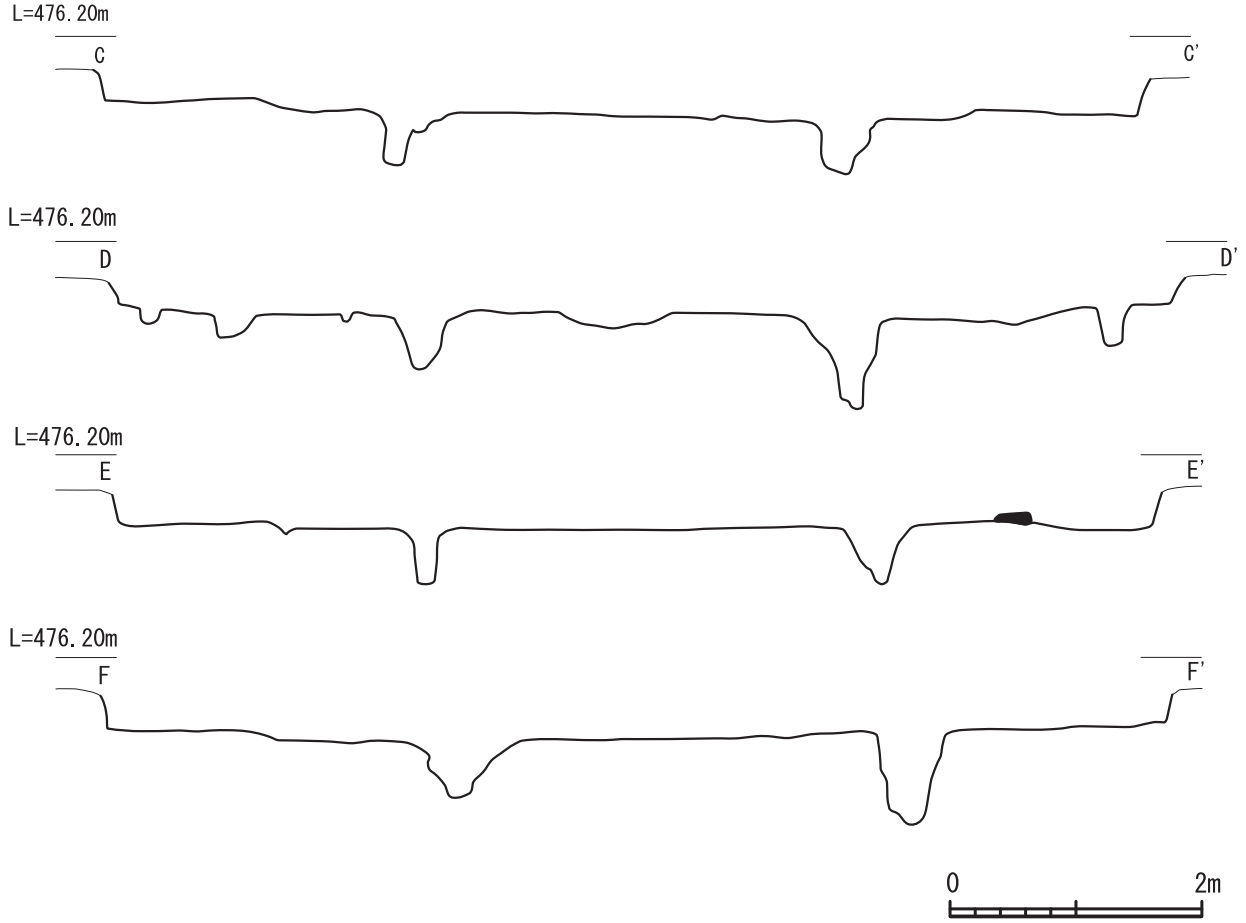


図261　SB106　断面図（1/60）

掘方は、東西南北の各隅に概ね方形の土壙を掘削し、東辺、西辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。南側壁際にはKピットが配置される部分に方形土壙が設置され、さらに、南辺に沿って溝を切り、南西隅、南東隅の土壙に連接させている。北辺には溝が切られていないため、凹字形の掘方である。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB106

SB106は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB106の法量は、南北8.4ｍ、東西8.4ｍ、遺構確認面からの深さ30cmを測る。竪穴住居の平面プラン、設備とその配置が、すべて西側に傾いている。

SB106は、その埋没過程が理解しやすい例である。竪穴住居跡の埋土は、埋1層は自然堆積と考えることができる。埋2層以下は、ロームブロックを含む擬礫層であり、人為的な埋め戻し層である。このため、層の峻別が容易であり、流入方向、堆積状況を把握しやすい。上層から、順次、埋土を外していくと、埋2層上面では竪穴住居跡のやや東よりに中心を持つ円形土壙が表れ、埋3層上面では東西南北の各隅を中心とした扇形に擬礫層が展開し、ベッド状遺構を被覆し、竪穴住居跡内陣の床面に向かう斜面を形成した状況となった。なお、北東グリッドには埋3層は存在せず、埋2層の直下に埋4層が位置していた。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置している。南西主柱の抜取り痕底面では、掌大の礫と甕体部破片とが密着して出土した。これは主柱抜取り痕の内部に土器と礫を据え置いた状態である。下山西遺跡の調査以来、柱穴内から出土した礫は「柱礎石」と評価してきたが、別用途も検討する必要性を提示する例となろう。なお、主柱穴を掘削すると、途中、撞き固められた面を認識することがあるが、SB106の主柱穴では少なくとも5面以上、この撞き固め

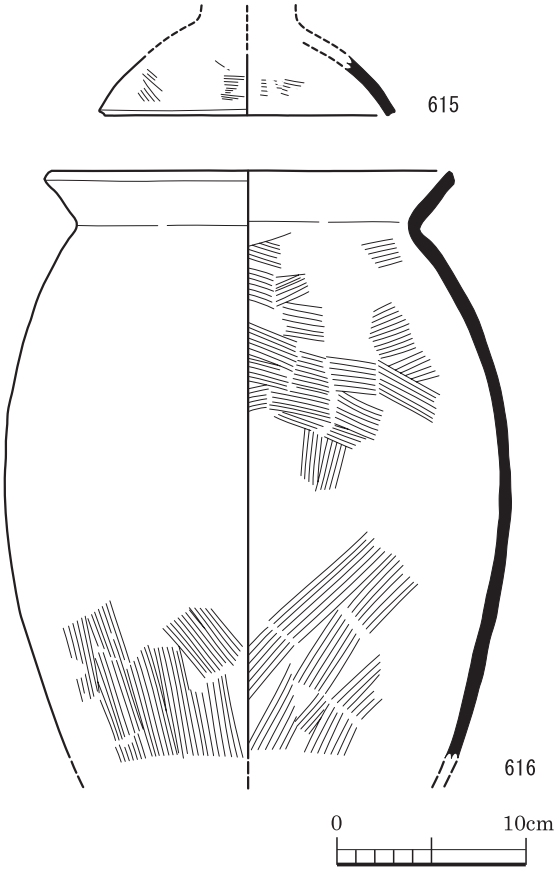


図 262　土器（RP）実測図（SB106）

られた面が存在している。また、硬化面は、竪穴住居全体に形成されている。

炉は、南北90cm、東西100cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高まりの周堤を有し、炉底は皿形に掘りくぼめられている。炉の内壁は直線的な立ち上がりである。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、その北側と東側にはL字形にテラス部が付設されている。テラス部の北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。これを柱穴セット2とする。これとは別に、Kピットに伴う2基の柱穴が、もう1組検出されている。こちらは柱穴セット1とする。柱穴セット1は、柱穴セットの南側に位置し、その柱間隔は柱穴セット2より広い。KピットのL字形テラス部の端部に位置しており、テラス部と組み合わさる可能性が高い。なお、柱穴セット2と柱穴セット1は、東柱穴部分で切りあっており、柱穴セット1（古）→柱穴セット2（新）である。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられている。南西隅と北西隅のベッド状遺構の間には、幅広のベッド状遺構が設けられ、さらに、幅の狭いベッド

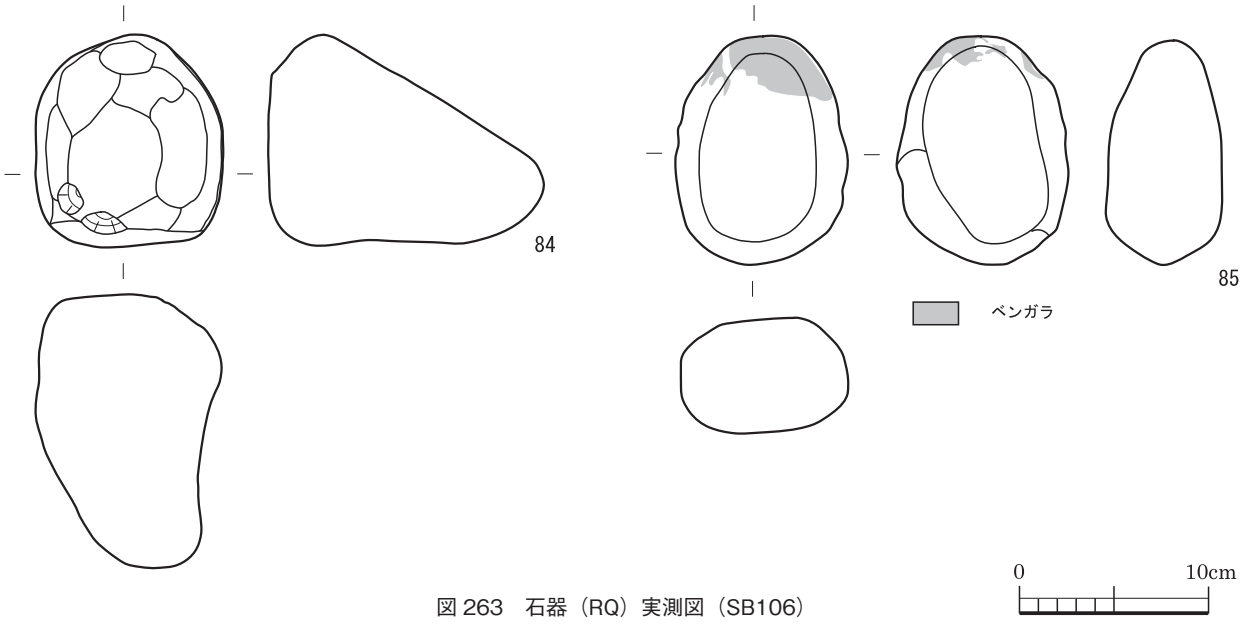


図 263　石器（RQ）実測図（SB106）

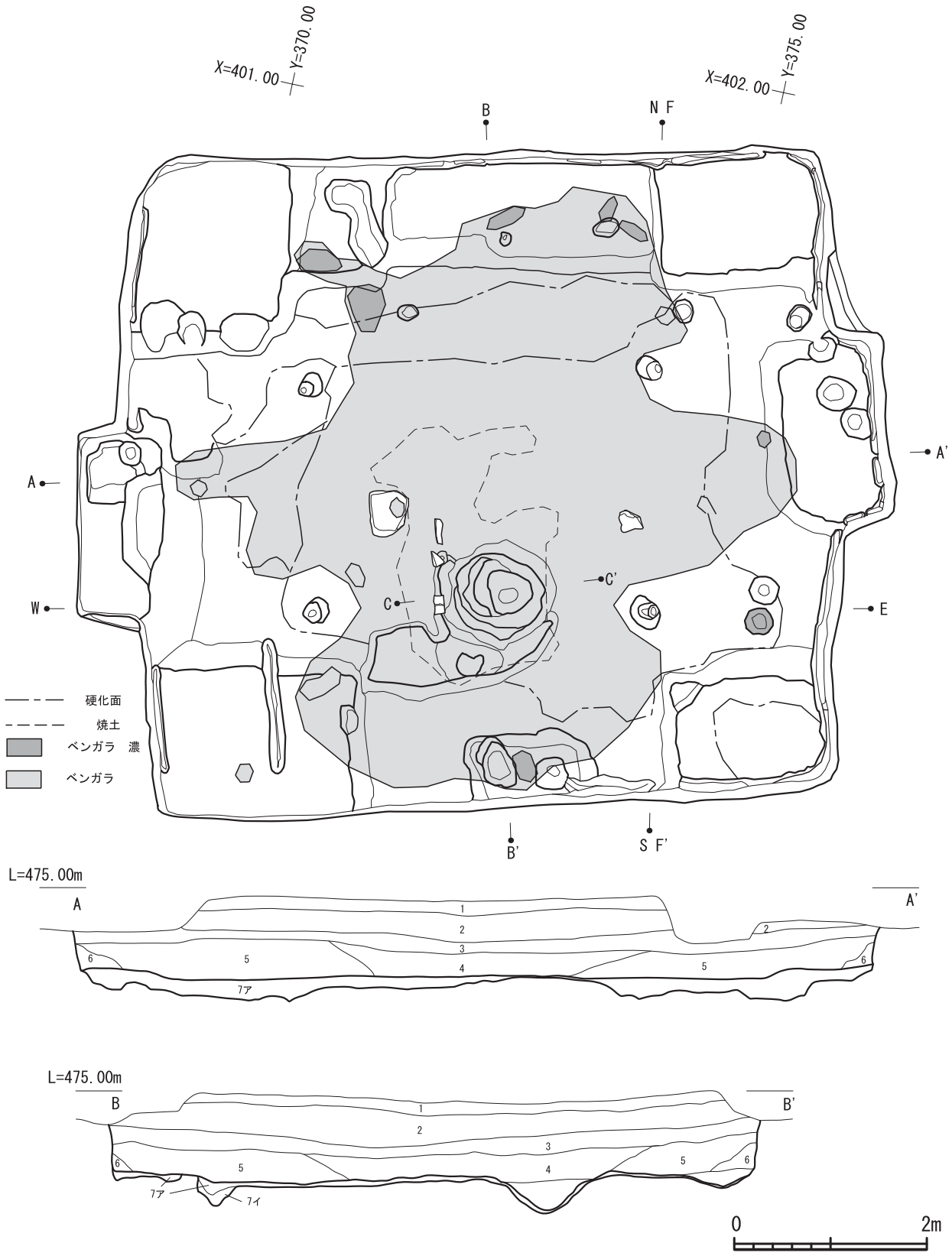
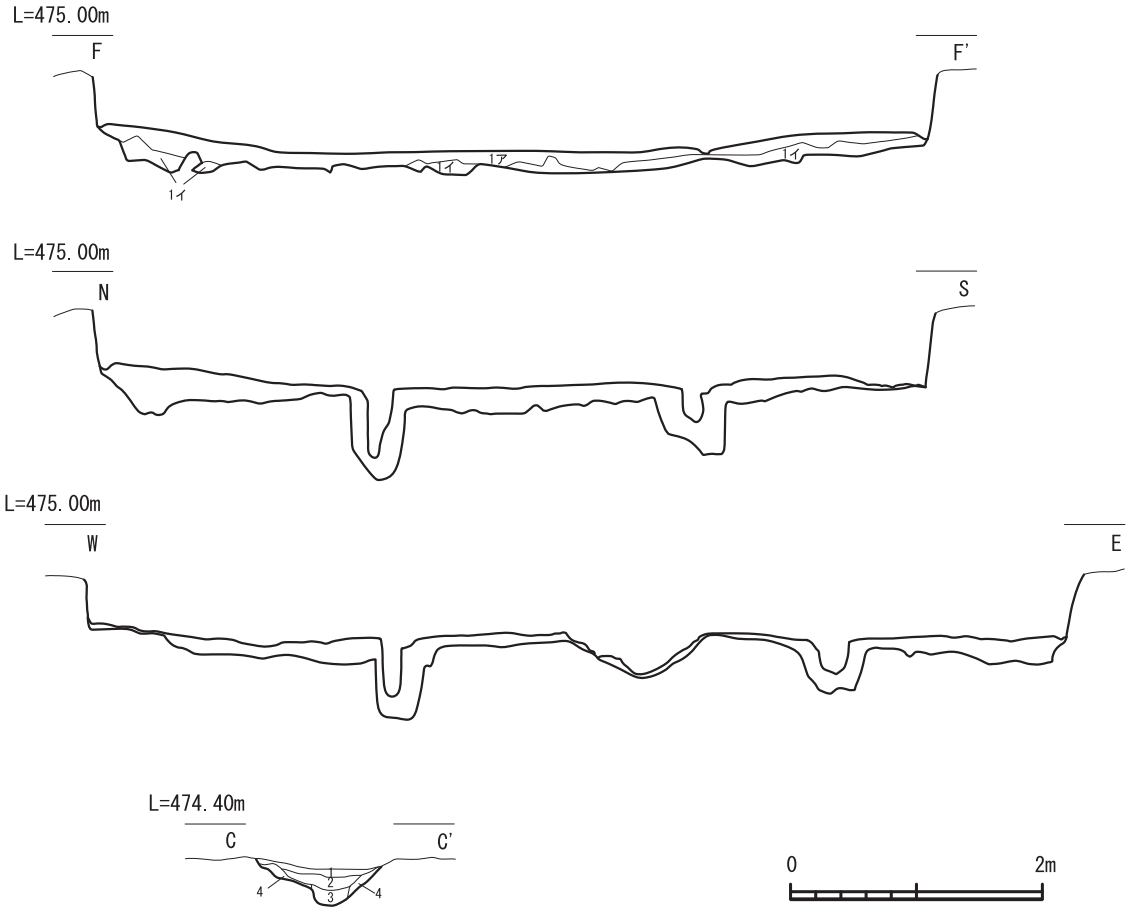


図 264　SB108（1/60）



(A・B 断面)

1　埋1層　黒色シルト　しまり中　粘性中
2　埋2層　黒褐色シルト（埋1層より赤味が強くなる）　しまり中　粘性中　炭を含む
3　埋3層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ローム粒(φ5mm)　炭を含む
4　埋4a層　暗褐色シルト（埋3層より赤味強い）　しまり中　粘性中　黄褐色ローム粒(φ5mm 以下の物が主)、炭を含む
住居址中央部の床上焼土範囲上に堆積
5　埋4b層　暗褐色シルト(色的には4a層と同じ)　しまり中　粘性中
黄褐色ロームブロック(φ5mm以上の大きな物を含む、埋4a層、埋3層よりも数が多い) 炭を含む
6　埋5層　黒色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(φ50mm以下)を含む　住居址壁際に堆積(三角堆積)
7ア　掘方埋土　暗褐色シルト・黄褐色ロームブロック混合　しまり強　ロームブロックの粒が細かい
7イ　掘方埋土　黒褐色シルト・黄褐色ロームブロック混合　しまり弱　ロームブロックで大きいものはφ4cm程度
※pit埋土　暗褐色シルト　しまり中　粘性大　黄褐色ロームブロック(φ3mm以下)　ベンガラ粒(φ4mm以下)を含む
掘方埋土 7ア に似ており、またKpit自体がはっきりしないので、Kpitではなく、掘方埋土である可能性有り

(F 断面)

1ア　掘方埋土　暗褐色シルト・黄褐色ローム混合　しまり強
1イ　掘方埋土　暗褐色シルト・黄褐色ローム混合　しまり弱

(C 断面)

1　埋4a層　炭化材を含む　炭化材は大きいもので長さ15cm、幅4cm、厚さはもろく不明
2　炉埋1層　植物の炭（黒色）非常にもろくほとんど粉状。　しまり弱　粘性小
3　炉埋2層　暗褐色シルト　しまり弱　粘性小　黄褐色ロームブロック(φ2cm以下)を含み、下層ほどその数は増える
4　炉埋3層　黒褐色シルト　しまり中（1 より小さい）　粘性小　黄褐色ロームブロック(φ2mm以下)を含む　貼床の可能性有り

図 265　SB108　断面図（1/60）

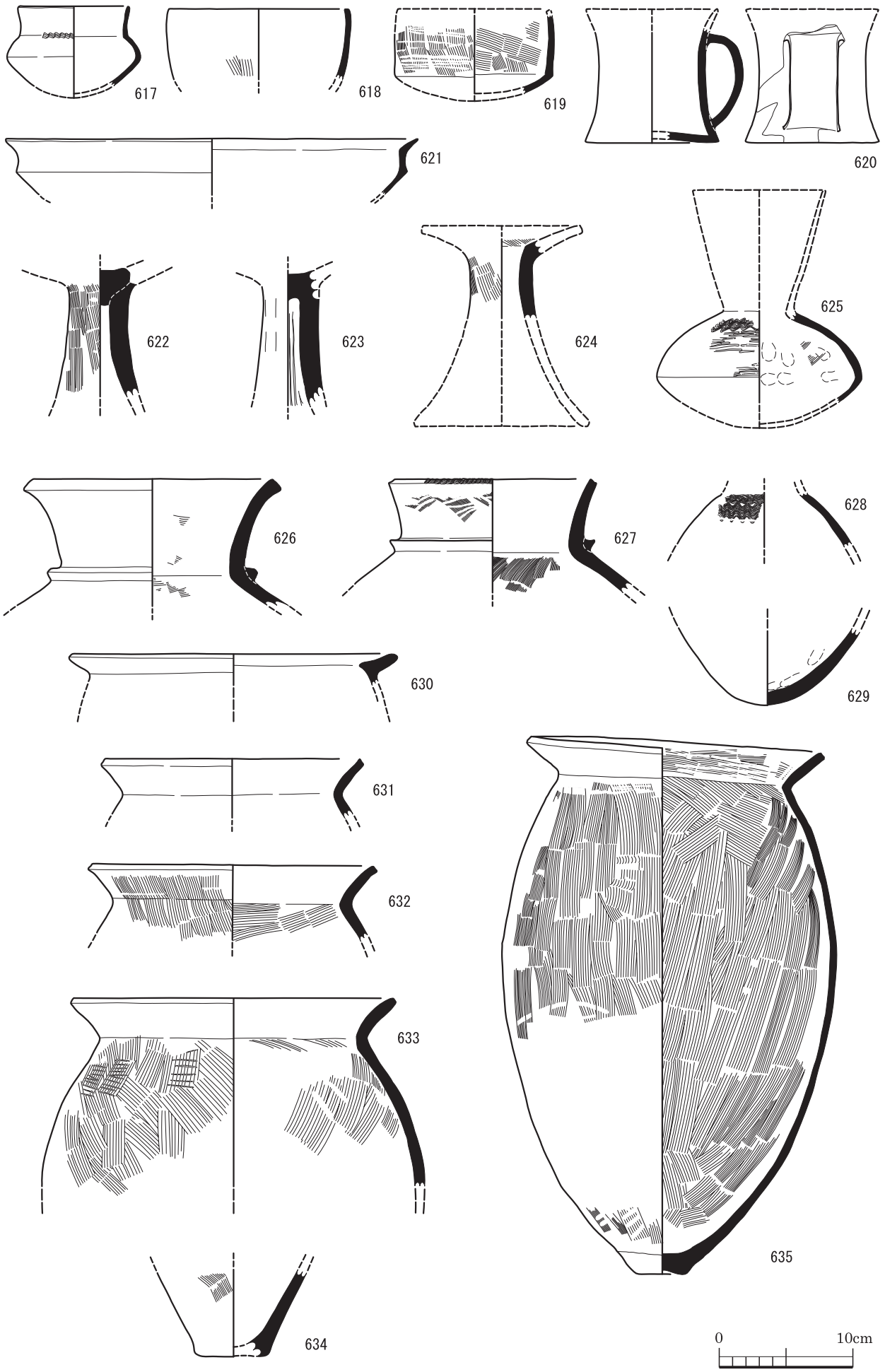


図 266　土器（RP）実測図（SB108）

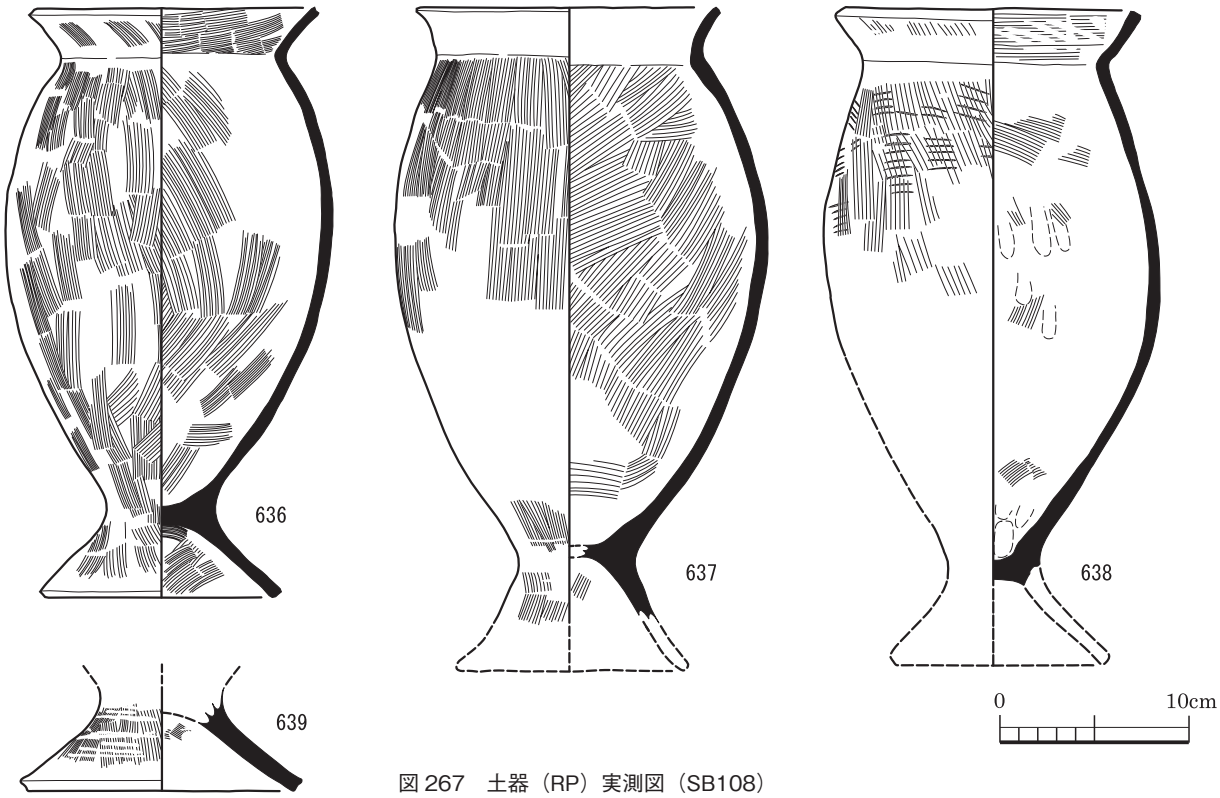


図 267　土器（RP）実測図（SB108）

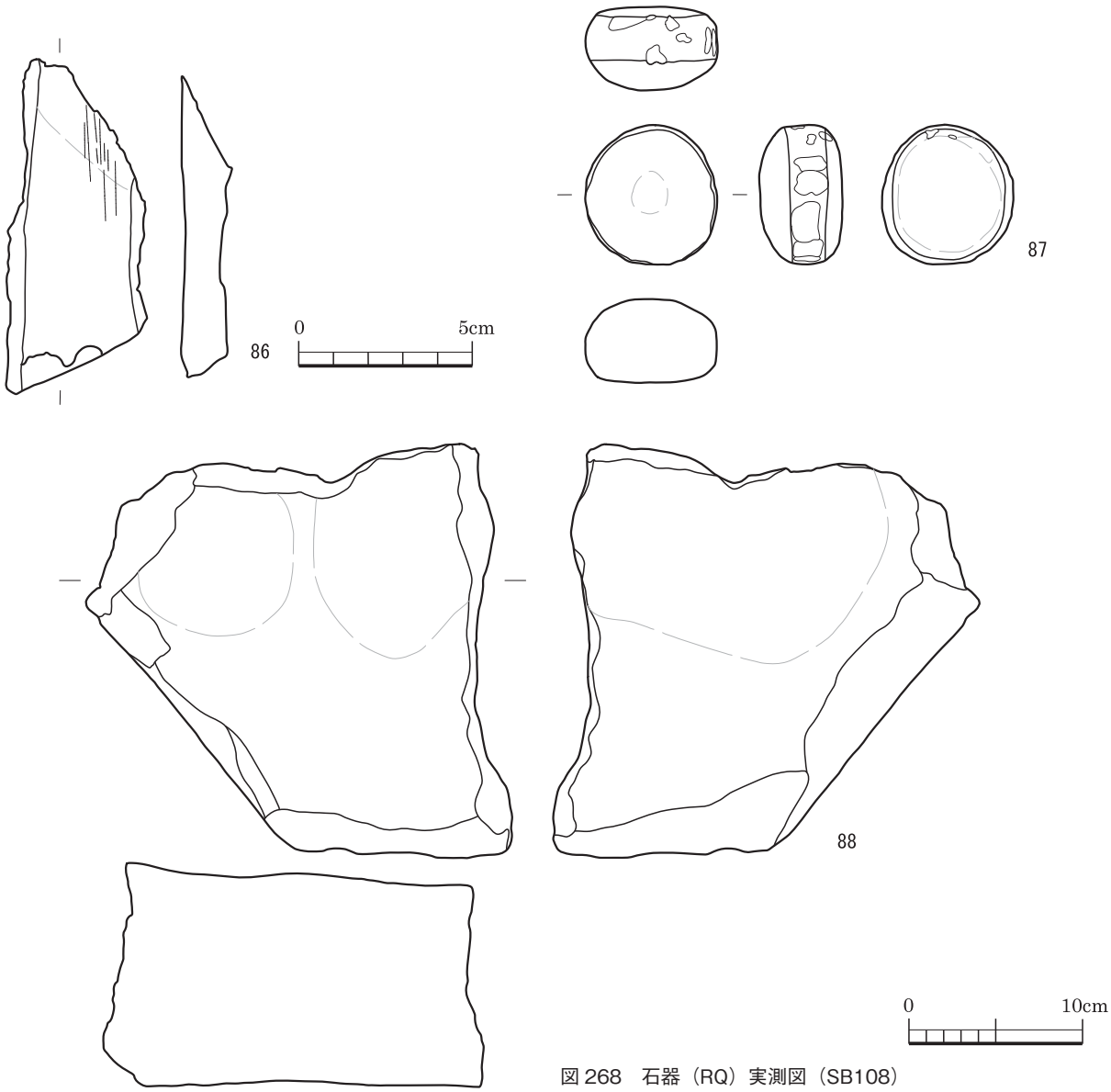


図 268　石器（RQ）実測図（SB108）

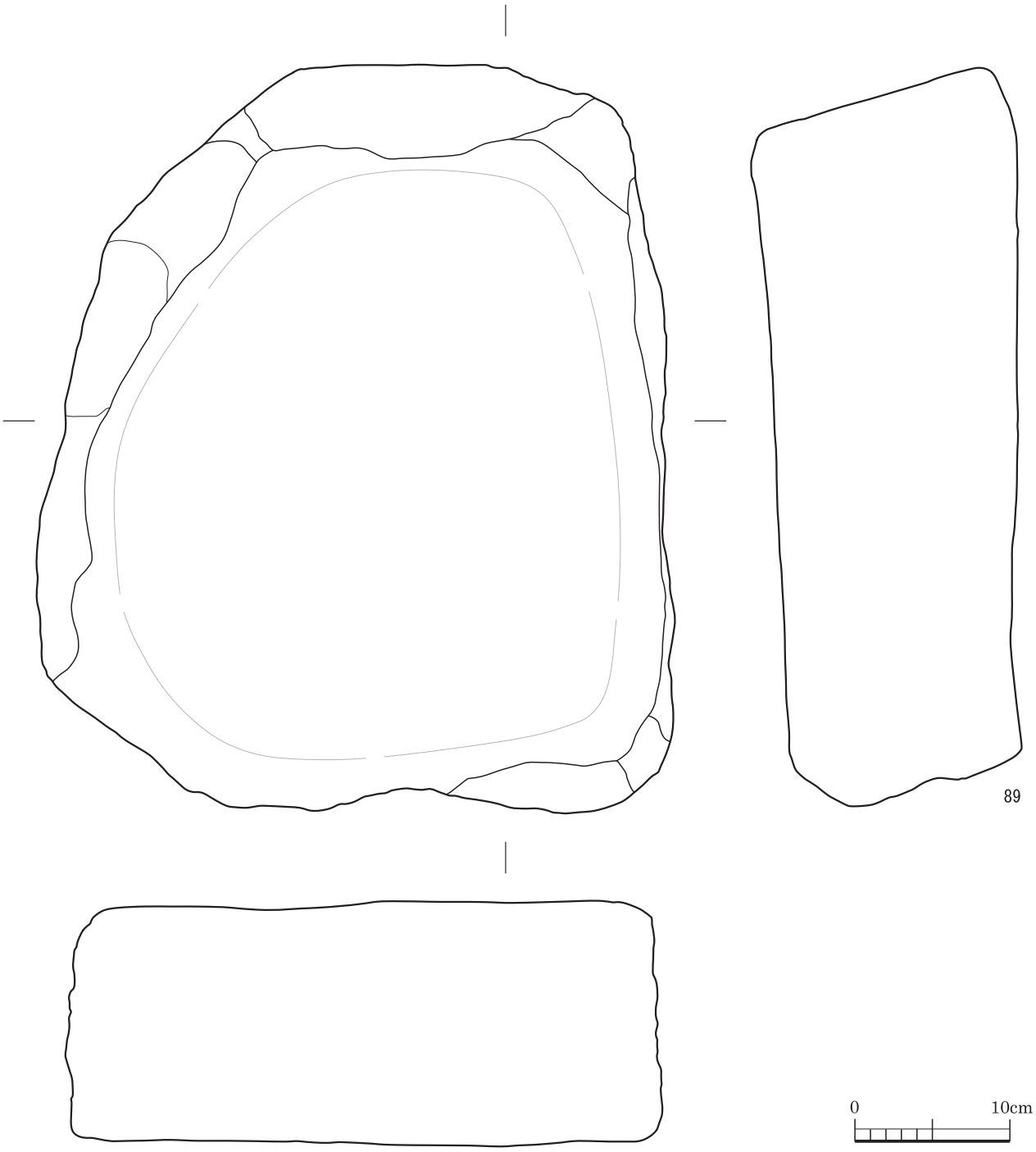
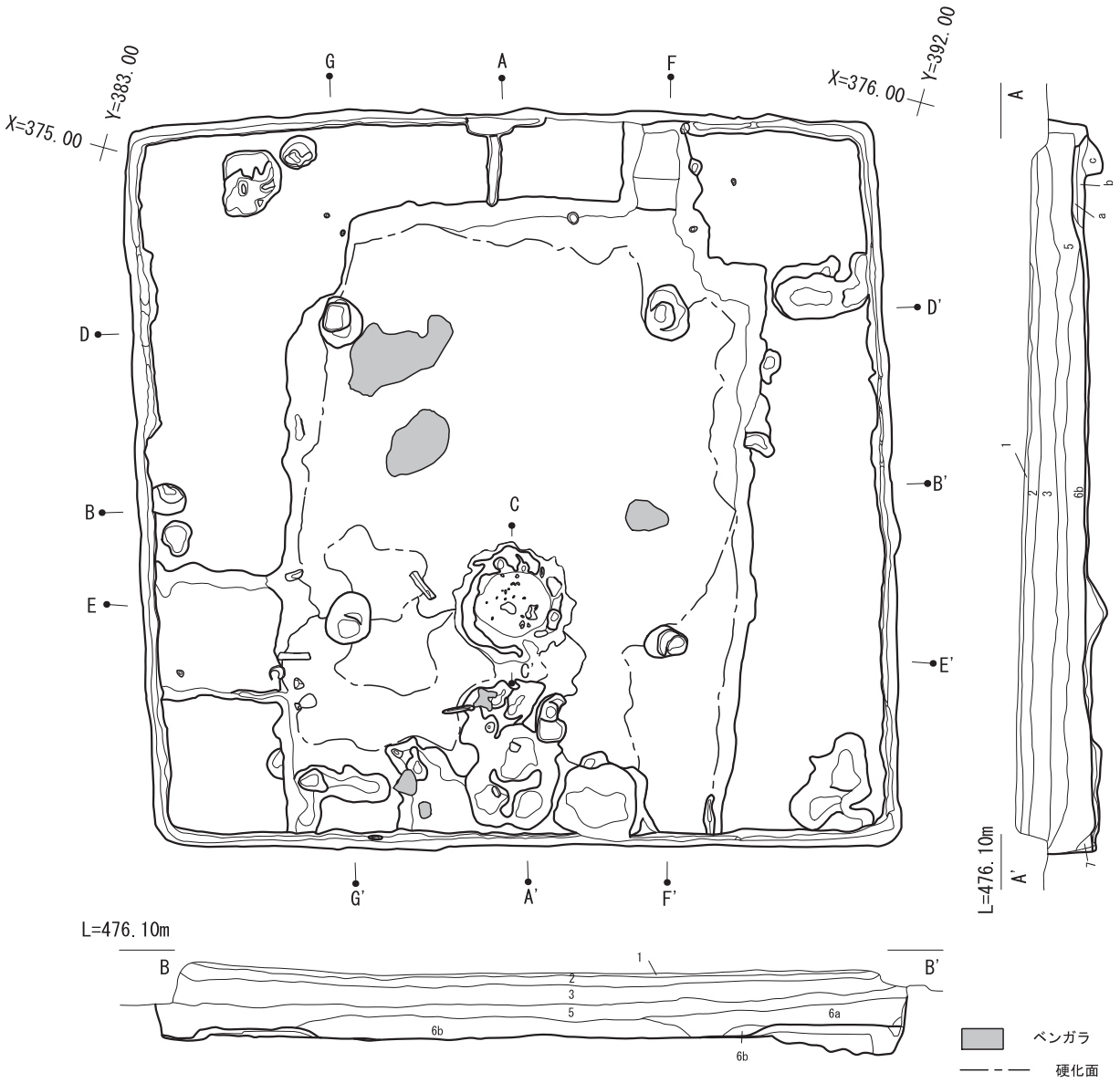
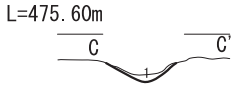


図 269　石器（RQ）実測図（SB108）

状遺構によって南西隅、北西隅のベッド状遺構と連接している。北西隅と北東隅のベッド状遺構の間は北西隅のベッド状遺構が東側に伸長して連接している。北東隅と南東隅のベッド状遺構の間には、1段低いベッド状遺構が設置され、両隅のベッド状遺構からスロープが伸び、連接している。なお、南西隅と南東隅のベッド状遺構の北側、内陣の南辺に相当する箇所は、1段狭くなり、複数のピットが整列配置されている。竪穴住居全体では、各ベッド状遺構がコ字形に連接した状況を呈している。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部で





(C 断面)

1　黒褐色炭化物層　現形をなさない炭が多量に混じる
φ2～3mm程度のロームブロックを若干含む

(A･B 断面)

(自然堆積)

1　埋1層　黒褐色シルト(10YR3/5)　締まり小　粘性中　黒ボク土　基本層埋2層か

2　埋2層　黒褐色シルト　締まり中　粘性中　埋1層よりも締まる。埋3層の漸位層　埋1層に比べ明るい

3　埋3層　暗褐色シルト　締まり中　粘性中　埋2層よりも明るく締まる。φ約1～3mm程度の炭を少量含む

4　埋4層　暗褐色シルト　締まり中　粘性中　埋3層よりも明るく締まる　ベルトでは確認できず
東辺ラインに沿って分布（特に南郷G）

(擬礫層)

5　埋5層　暗褐色シルト　締まり中　粘性中　埋3層と同程度締まる
φ約1～5mm程度のロームブロックを含む　φ約0.5～1.5cm程度の炭を少量含む

6a　埋6a層　暗褐色シルト　締まり中　粘性中
φ0.1～1cm程度のロームブロックを含む　φ1～2cm程度のロームブロックを含む　φ0.5～1.5cm程度の炭を含む

6b　埋6b層　暗褐色シルト　締まり中　粘性中
φ0.1～1cm程度のロームブロックを含む　φ1～2cm程度のロームブロックを含む　φ0.5～1.5cm程度の炭を含む
6a層よりも暗く、若干締まりに欠けている　埋6層は埋5層よりも暗く締まりに欠けるほか、ロームブロックの量が増加する

7　埋7層　黒褐色シルト　締まり中　粘性中　埋6層よりも暗く、締まりに欠ける　三角堆積

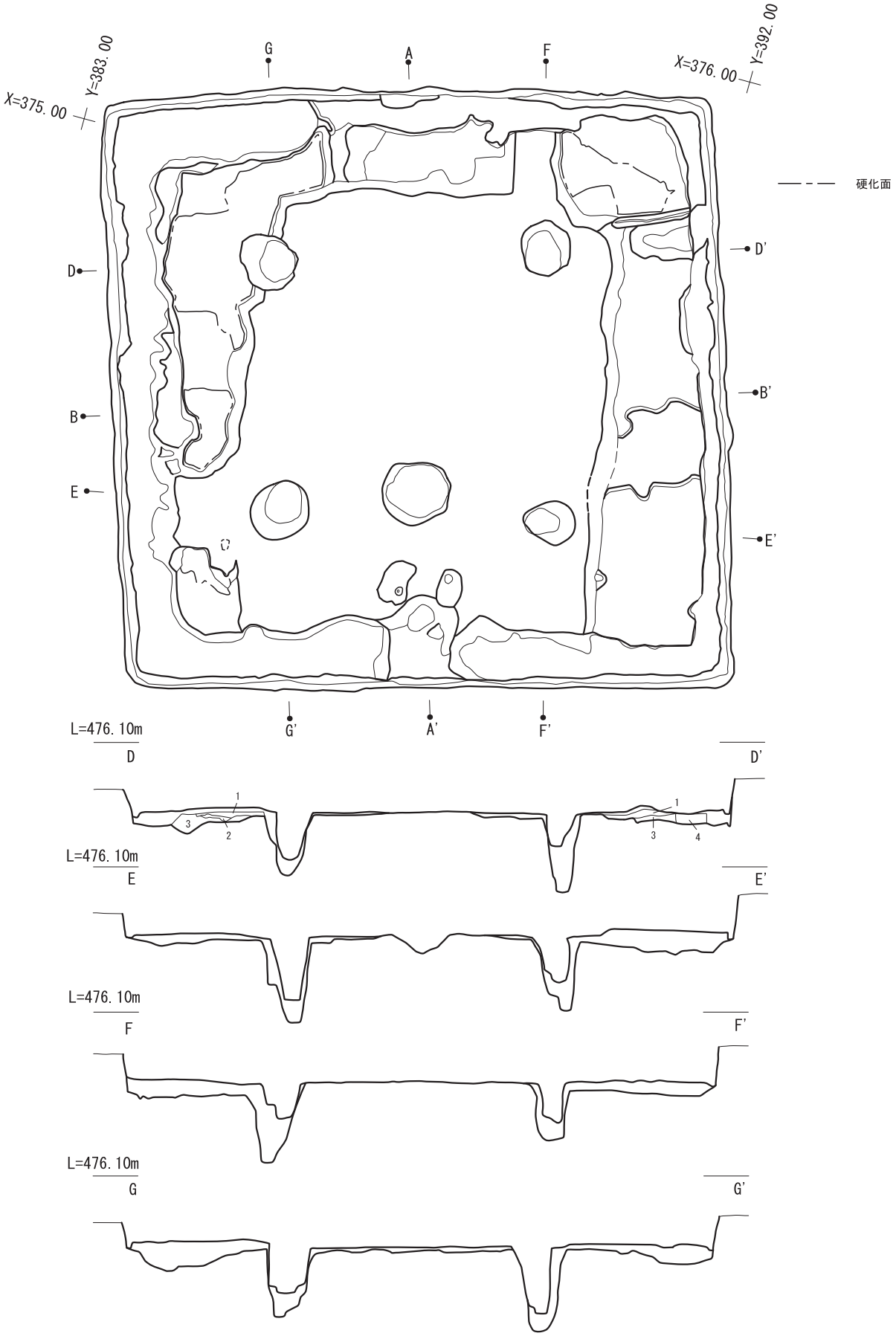
a　褐色シルト･黄褐色ロームブロックを多量に含む　締まり大

b　黒褐色シルト　締まり中

c　黒褐色シルト　灰オリーブローム･黄褐色ロームを含む　締まり小

0　2m

図 270　SB110　床面（1/80）



1　灰黄褐色シルト(10YR5/2)　締まり大　φ0.3～1cm大の黄褐色ロームブロック混
2　ベース1層に黄褐色ロームブロック集中層　締まり大
3　暗緑灰シルト(10GY3/1)　φ3～5大の灰オリーブ色ロームブロックを含む　締まり中
4　黒褐色シルト　締まり中　灰オリーブ(5Y4/2)ロームブロック・黄褐色ロームブロックを多く含む

図271　SB110　掘方（1/80）

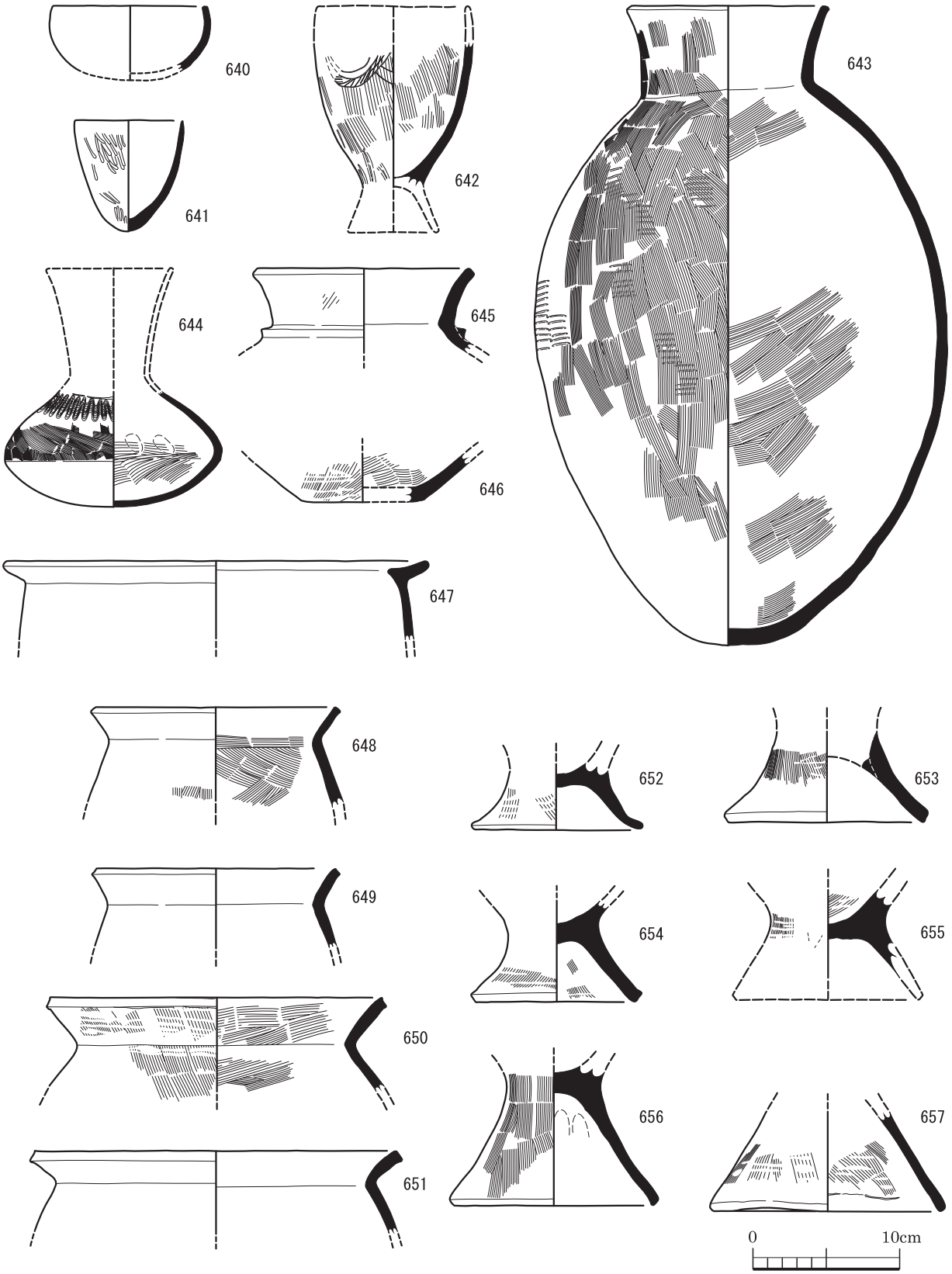


図 272　土器（RP）実測図（SB110）

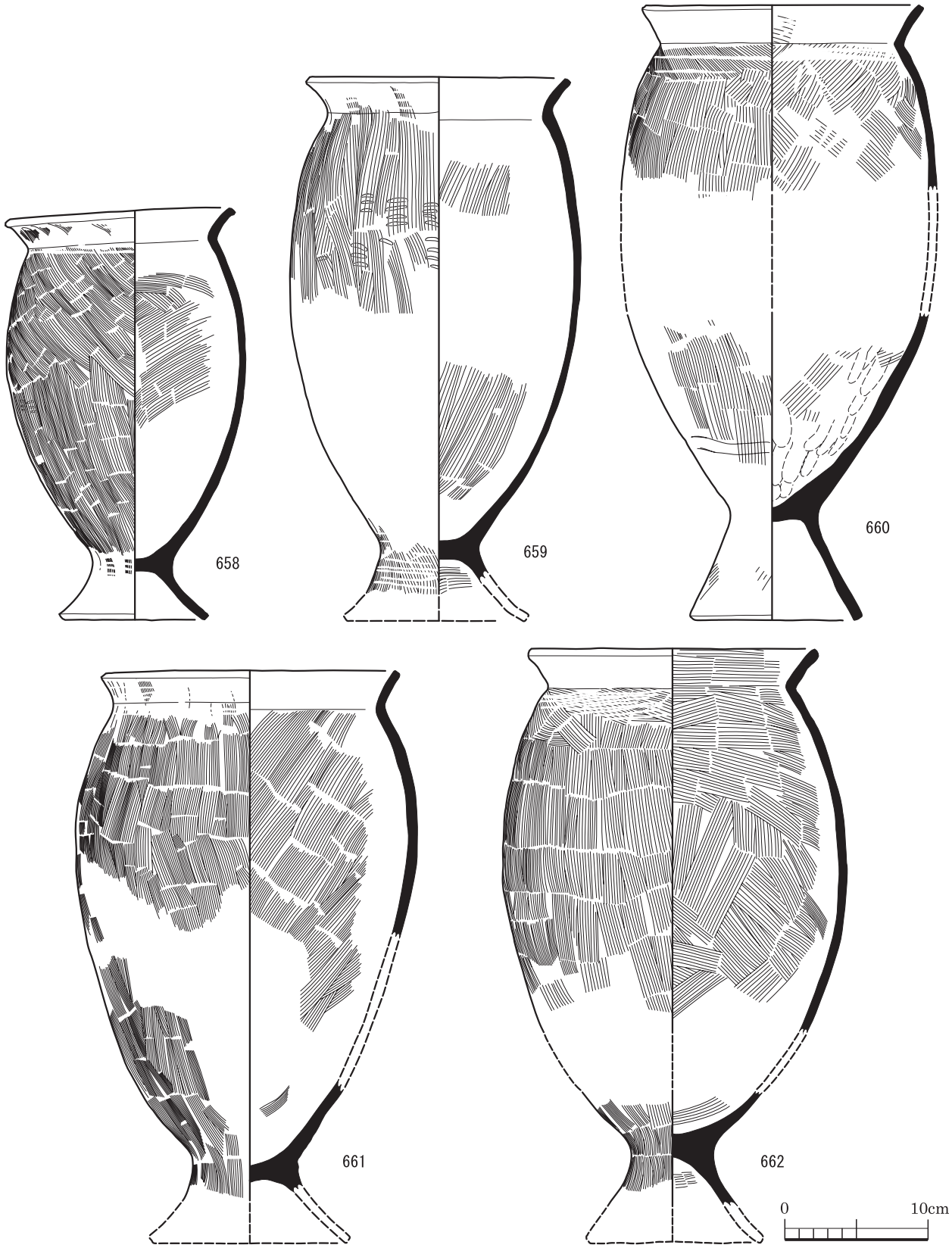


図 273　土器（RP）実測図（SB110）

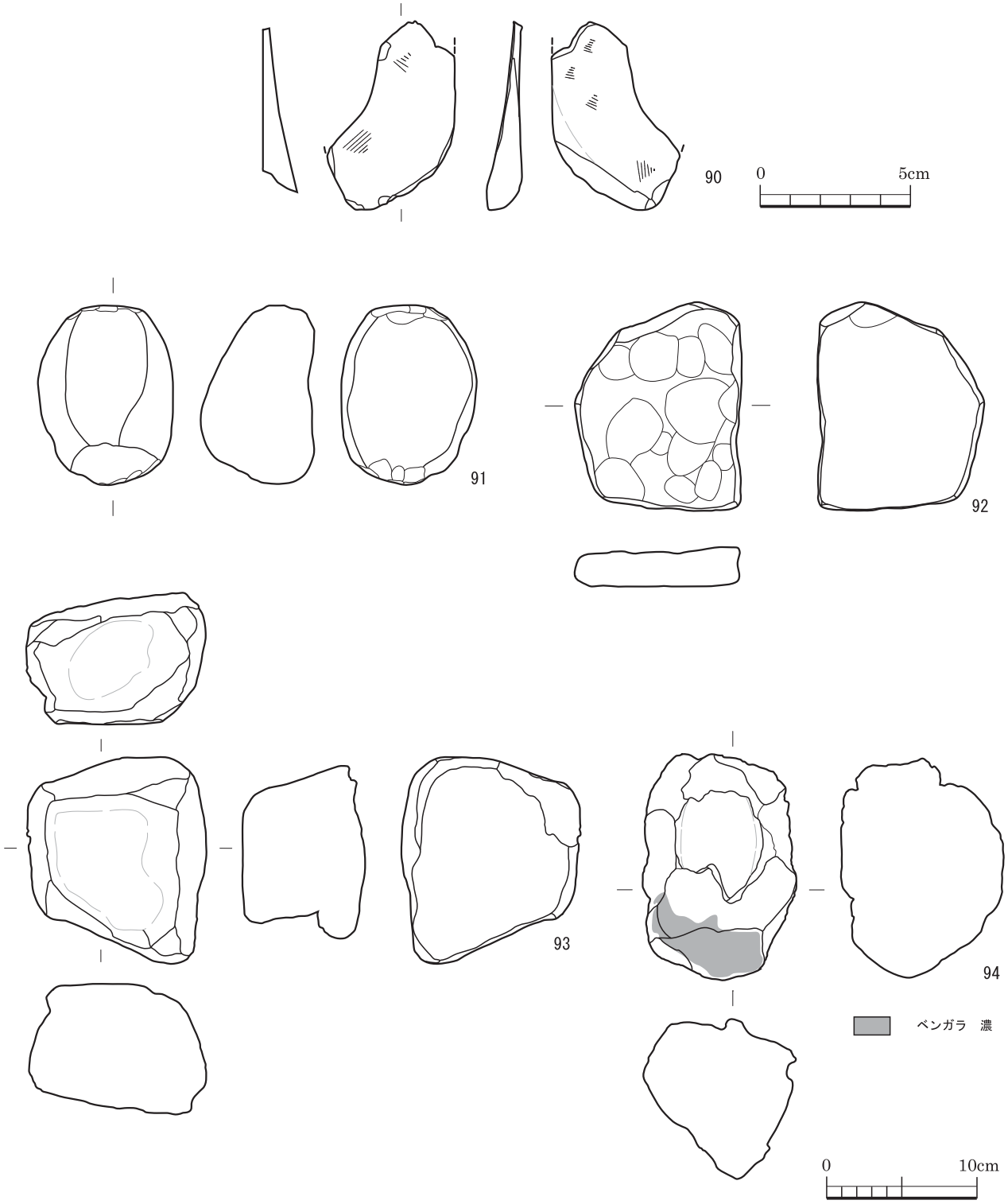


図 274　石器（RQ）実測図（SB110）

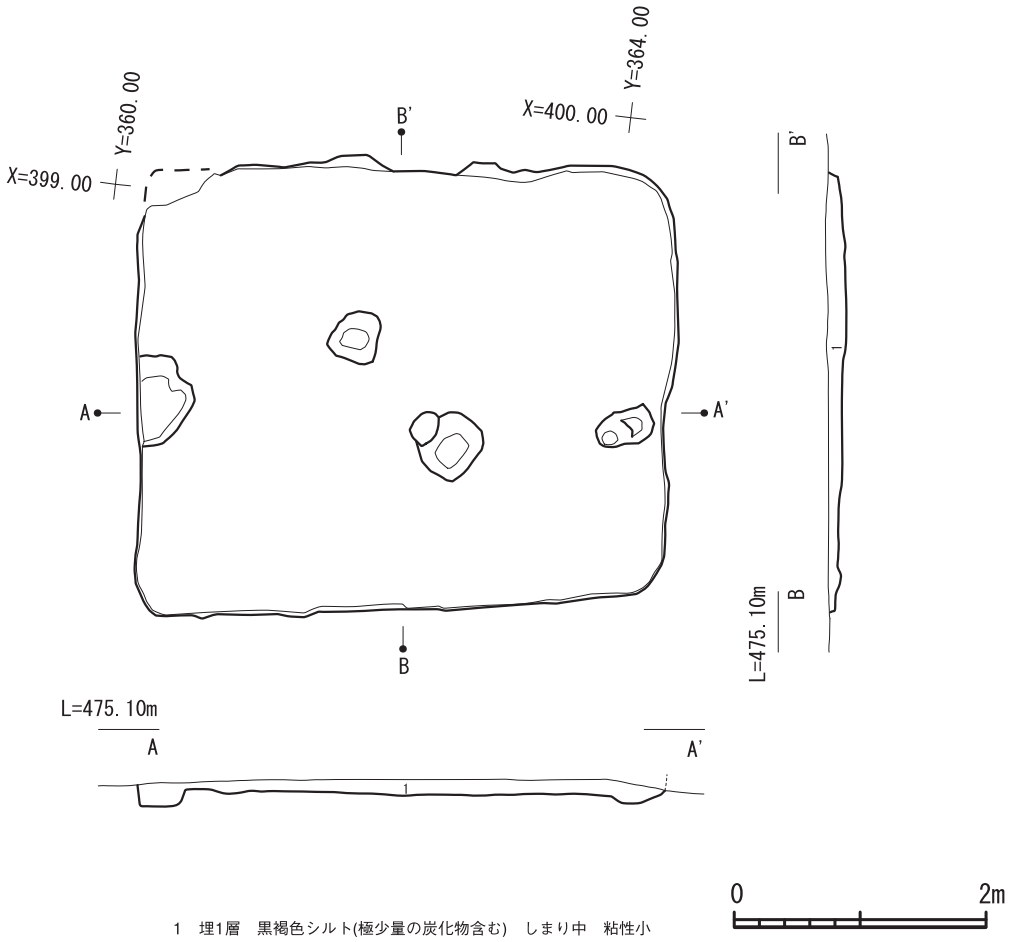


図275 SB112（1/60）

は厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、北辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。Kピットが配置される部分には南辺に接して長方形を呈する土壙が設置され、さらに溝が切られて南西隅、南東隅の土壙と連接させている。竪穴住居全体としては、ロ字形の掘方である。炉の南半部にも掘削が及ぶが、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SK107

SK107は、円形を呈する土壙である。

SK107の法量は、南北36cm、東西31cmを測る。

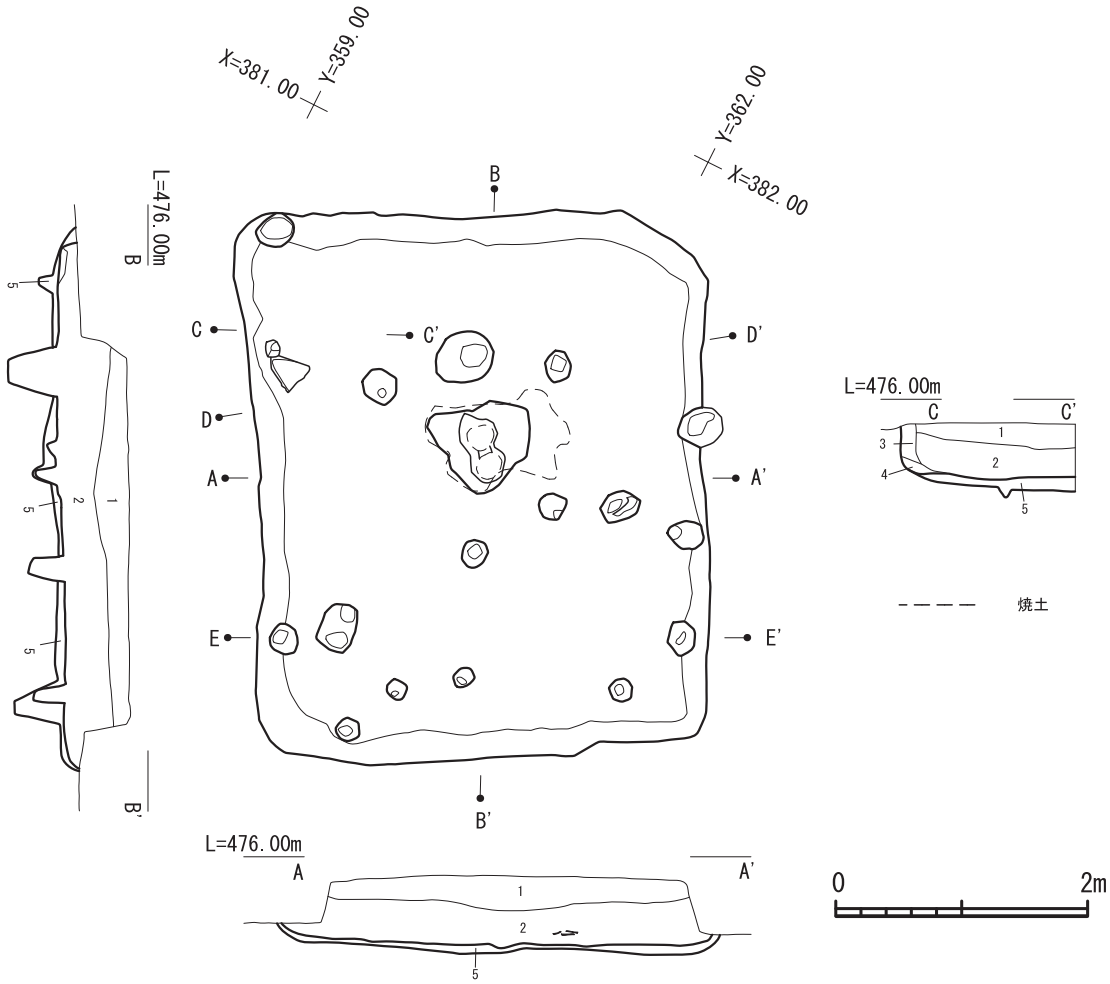
この土壙の上位では、軽石が集積された状態で検出された。軽石集石の最下部とSK107の検出面には約15cmの高低差があるが、往時の生活面はSK107検出面より上位であるため両者は関連すると判断した。なお、軽石集石と同質、同大の軽石がSK107の南側で複数検出されている。

SB108

SB108は、長方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。西側壁、東側壁に張出し部を備える。

SB108の法量は、南北6.9m、東西7.4m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴は、上端部の直径30cm、その中位からは直径15cm程度の規模となる。し



1　埋1層　暗褐色シルト　しまり中　粘性小
2　埋2層　黒褐色シルト　しまり中　粘性小　1は2に対し　やや明るく、ボソボソとした削り心地である
3　2a層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中
4　褐色シルト　しまり中　粘性中
5　掘方埋土

図276　SB113　床面（1/60）

かし、中位以下では埋土の締まりが失われ、底部の硬化面までほぼ抜けた状態となる。このことから、主柱は細い柱であり、主柱を抜き取る方途は、柱の上半部を掴み、螺旋回転を与えて抜き取った、と判断した。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。さらに、その範囲の外側には若干軟らかい硬化面が発達している。南東隅のベッド状遺構の上端面にも、同様の硬化面が形成されている。

炉は、南北90cm、東西100cmの円形を呈し、深さは40cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、下端部の直径1.2m程度の円形を呈し、幅10cm程の平坦部を上端に備えている。この上端面は、炉の西側から南側にかけてしっかりと形成され、東側、北側では稜線に変化する。炉の1段目は整った円形であるが、2段目は、炉内西側に形成されたテラス部の影響で、不整形な円形を呈している。なお、炉の内壁は、急角度で立ち上がっている。また、炉穴内では焼土が環状に検出された。木炭もこの環状を呈する焼土に沿う状態で出土している。焼土の環内には、上層の埋4a層が入っている。おって、

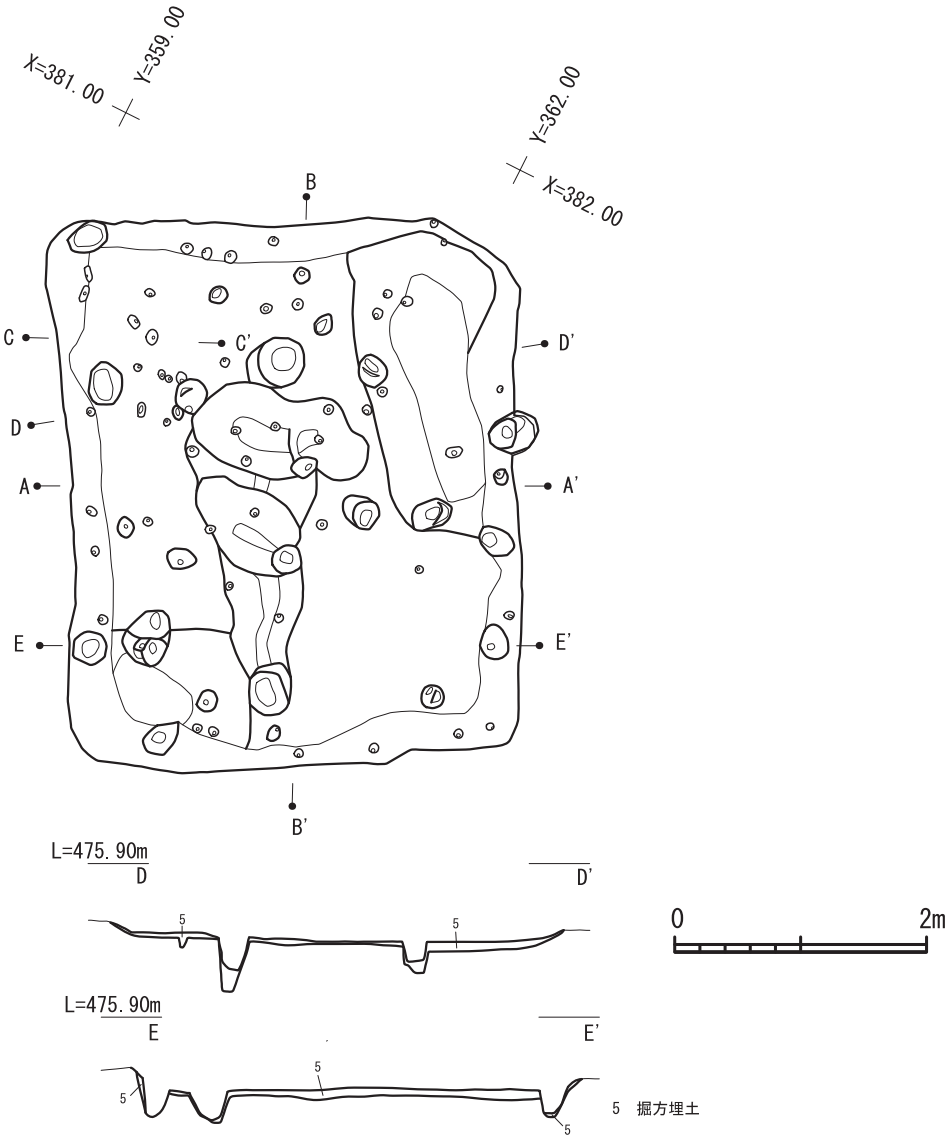


図277　SB113　掘方（1/60）

周堤の外縁部、南側から西方には高台が付設されている。この高台は2段構造を呈し、概ね長方形に形作られている。炉に関連する装置の設置痕跡となる可能性が高い。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、底面には2基のピットが炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられ、西側壁、東側壁には張出し部と複合して設置されている。北西隅、北東隅のベッド状遺構の間には幅の狭いベッド状遺構が2段構造を呈して設けられ、北側壁際ではベッド状遺構が連接する状態となっている。これ以外のベッド状遺構は、各自、独立した状況である。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。北辺では北西部に溝が切られていないため、凹字形の掘方である。炉南半部にも掘削が及ぶが、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB108は、その埋没過程が理解しやすい例である。竪

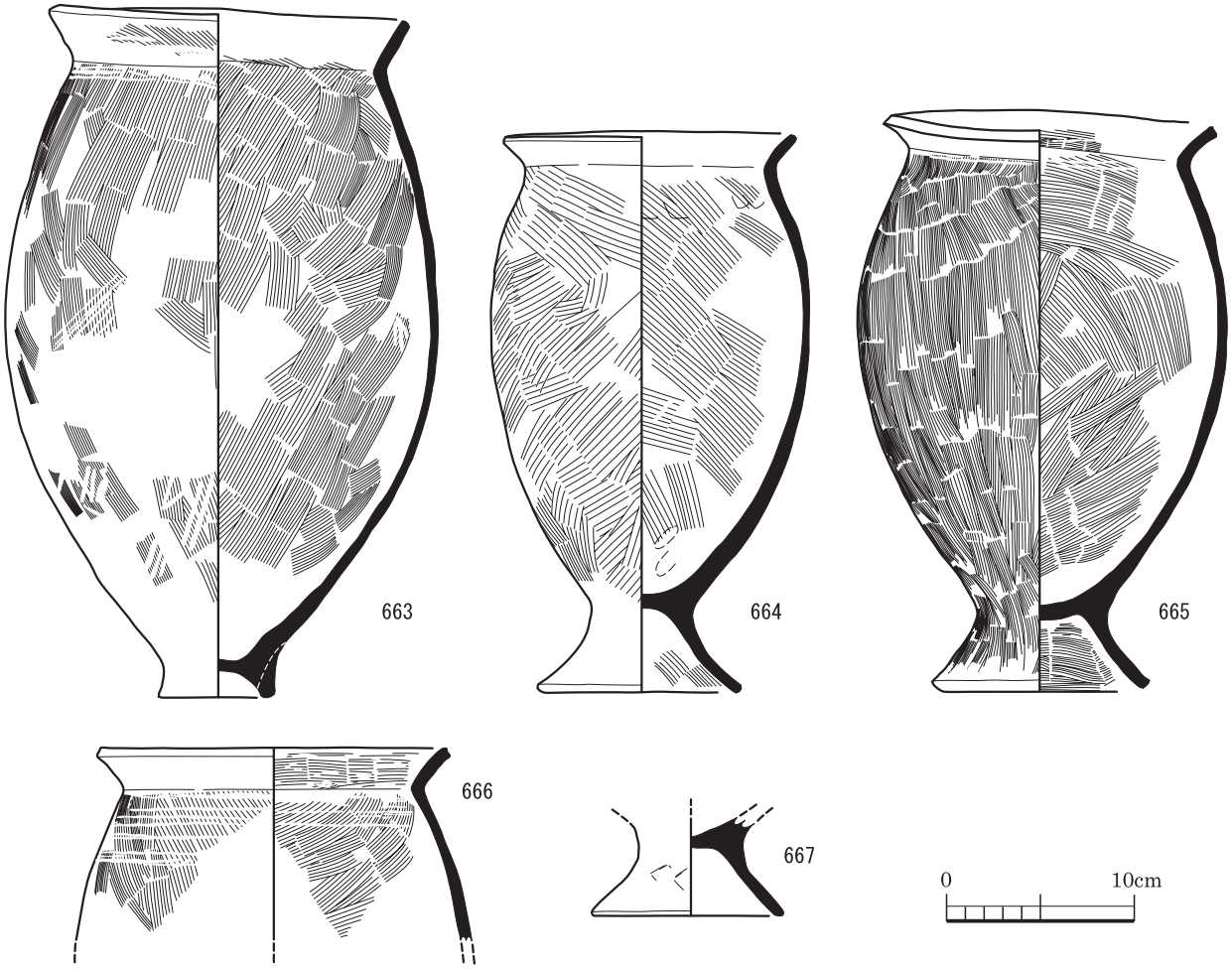


図 278　土器（RP）実測図（SB113）

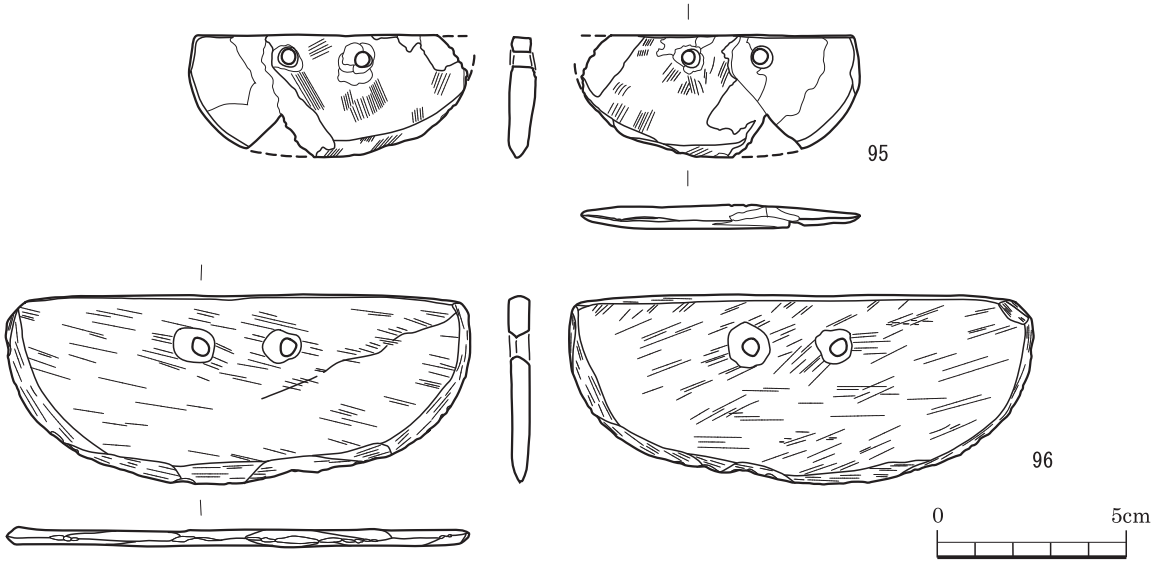


図 279　石器（RQ）実測図（SB113）

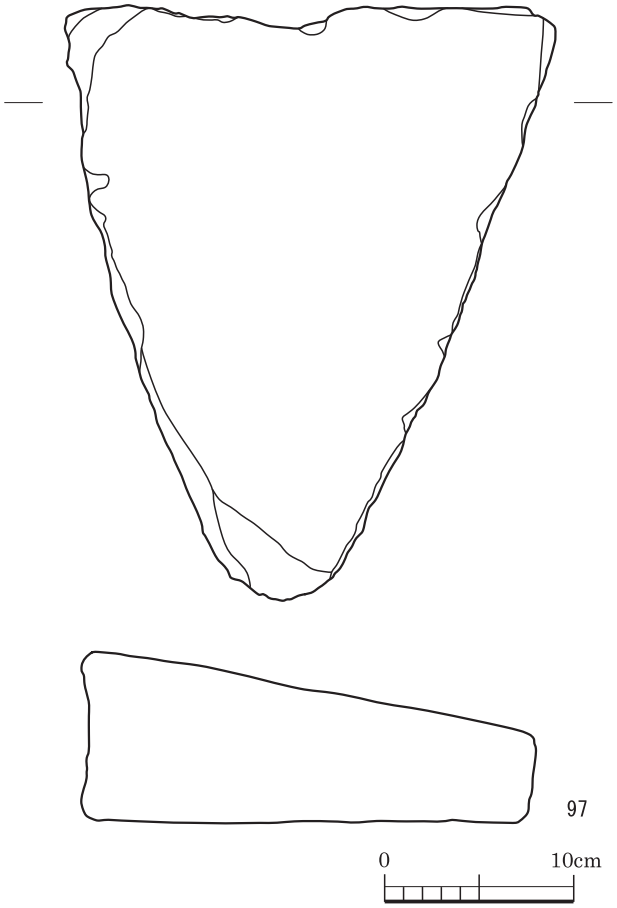


図280　石器（RQ）実測図（SB113）

穴住居跡の埋土は、埋1層は自然堆積と考えることができる。埋2層以下は、炭化物を含む人為的な埋め戻し層である。上層から順次掘削し埋3層を外すと、竪穴住居跡の内陣に相当する範囲には埋4a層が分布し、外陣に相当する範囲には埋4b層が分布した状況となった。埋4b層は、その上層と異なり、ロームブロックを多く含む擬礫層であり、竪穴住居跡廃絶に際しての埋め戻し層であると考えられる。一方、炉を中心とした内陣の西側には焼土が分布しており、その西端からは石皿が検出された。埋4a層はこの焼土範囲に一致する。以上から、埋4b層により一定程度埋め戻された竪穴住居跡中央には凹部が形成され、その凹部で火が焚かれ、後、埋4a層によって被覆された過程を観取することができる。

なお、焼土の下位には、竪穴住居跡の内陣と東西南北の主軸方向に沿ってベンガラが散布されていた。ベンガラのうち、特に明るい赤色を呈し最も精良な類のベンガラは、南西隅のベッド状遺構の上端面、Kピットの中央、南側壁沿い、東西の張出し部の前面中央等、12箇所で検出されている。共通点は、ベンガラ散布範囲の外縁部に位置すること、である。また、焼土範囲の西端に位置する石皿の上位には精良なベンガラが、下位にはベンガラが散布されている。さらに、南東グリッドの土層断面を観察したところ、埋5層上面ではベンガラ粒が確認されたが、その上層、埋4b層では確認されなかった。

以上を総合すると、竪穴住居跡の廃絶に際しては側壁際に三角堆積が形成された状況下において、まずベンガラが散布され、石皿、台石等の目印（ランドマーク）が内陣に据え置かれ、さらに、このランドマークやベンガラの散布範囲の外縁部に精良なベンガラが据え置かれる。次に、竪穴住居跡が埋め戻され、その中央の凹部では火が焚かれる。最後に、竪穴住居跡全体が埋められるという過程が抽出されよう。

SD109

SD109は、円形周溝である。溝内に1基のピットを備える。

SD109は、幅50cm、深さ20cmの溝が円形にめぐる。その直径は3.1 mである。溝底には平坦面が形成され、大きな段差を生じることなく、概ね同一深度でめぐっている。溝の側壁は、内外とも切り立っている。

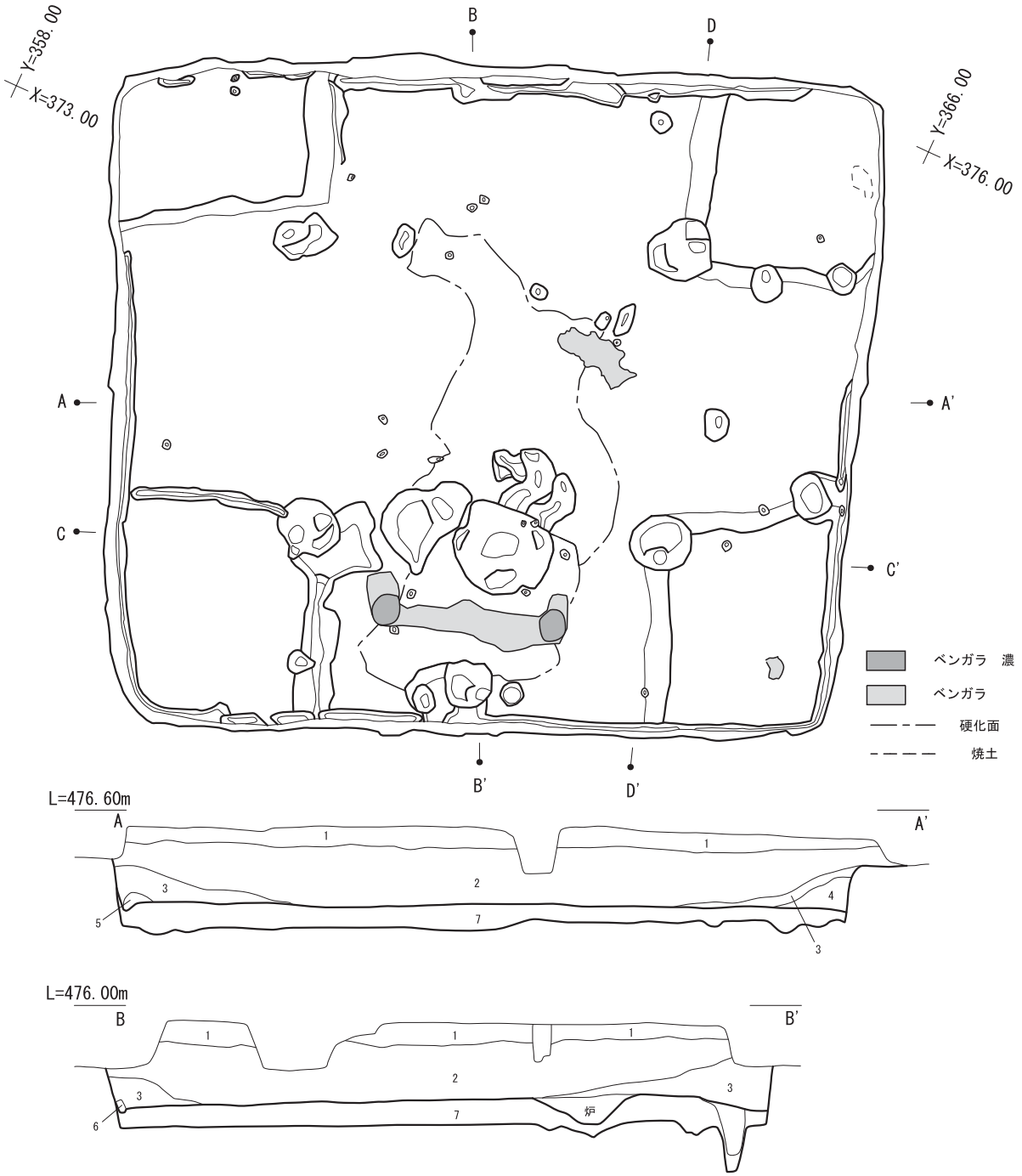
溝内には1基のピットが内側壁に接して南側に存在する。ピットの直径は約20cmを測る。

SB110

SB110は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB110の法量は、南北9.5 m、東西8.8 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴の脇には、主柱抜き取りに伴う排土が小山をなして検出された。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、南側で発達し、Kピット北端にまで形成されている。内陣内にはベンガラが散布された範囲が3ヶ



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中
2　埋2層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中
3　埋3層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(直径20mm以上)を含む　壁際に堆積
4　埋4層　黒褐色シルト　しまり弱　粘性中　黄褐色ロームブロック(直径10mm程)を含む　壁際の三角堆積
5　埋5層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ローム粒(直径10mm以下)を含む　一部側壁溝内に堆積
6　埋6層　黒褐色シルト　しまり弱　粘性大　側壁溝内とその上に堆積
7　掘方埋土

0　2m

図 281　SB114 床面（1/60）

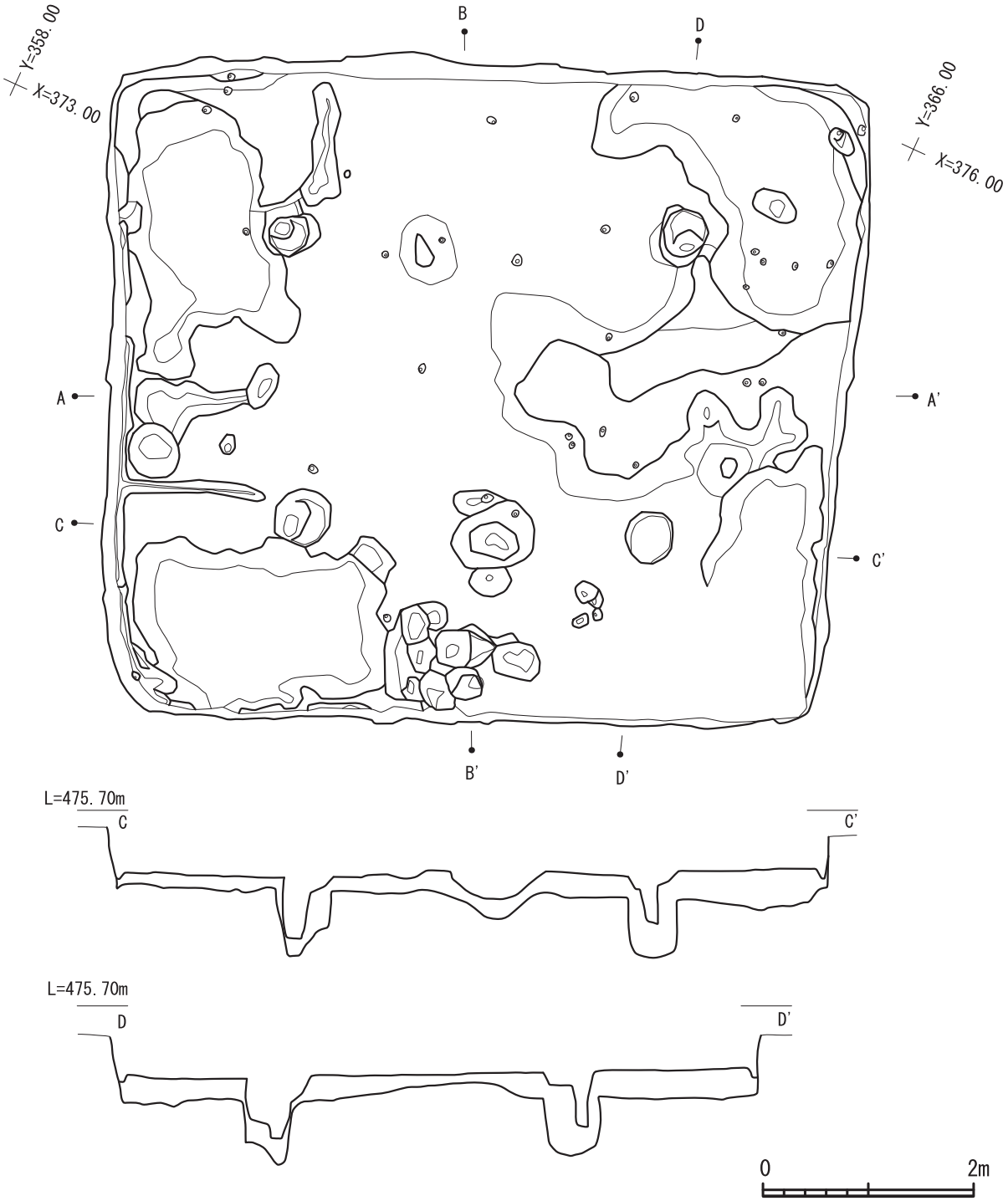


図 282　SB114 掘方（1/60）

所検出された。北西主柱穴を起点とする広い範囲と、内陣東端の中央である。

炉は、南北70cm、東西90cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に平坦面を有すほど幅広く形成される。ただし、南部分では周堤が低くなり、平坦部も途切れている。なお、周堤

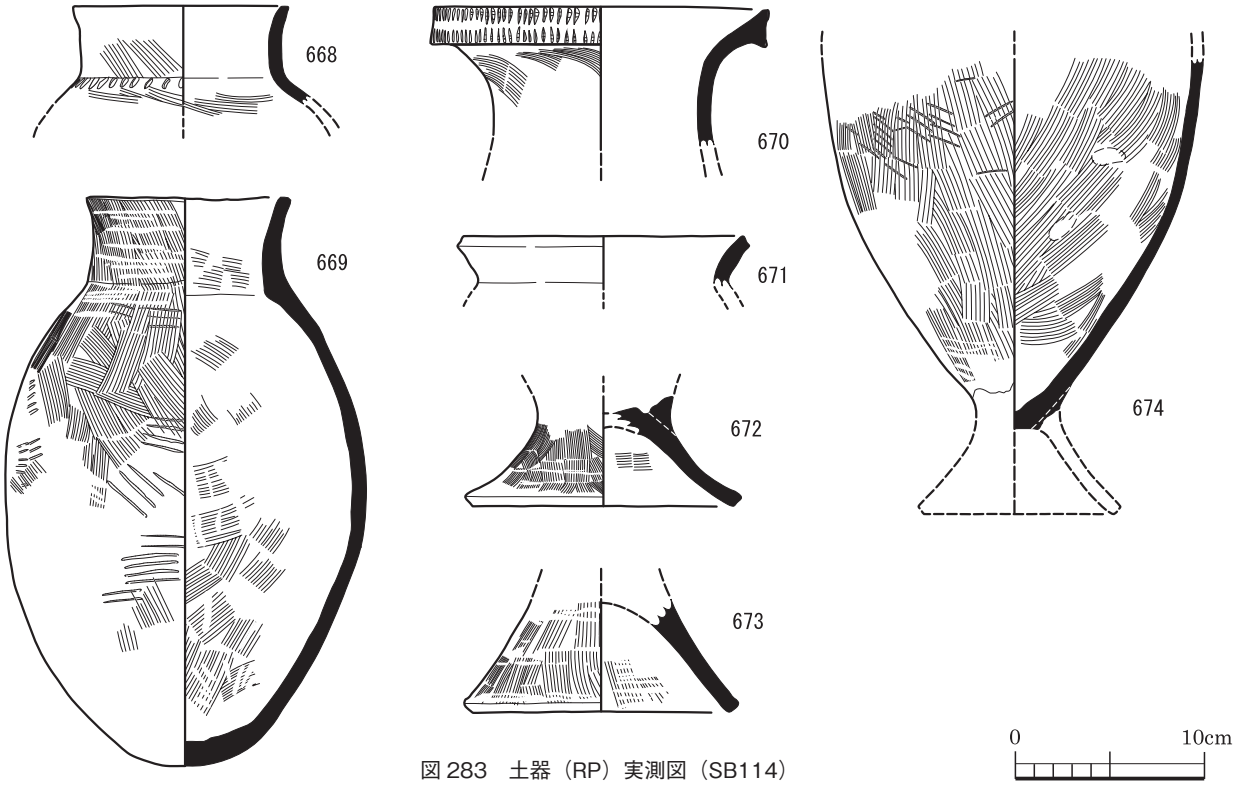


図 283　土器（RP）実測図（SB114）

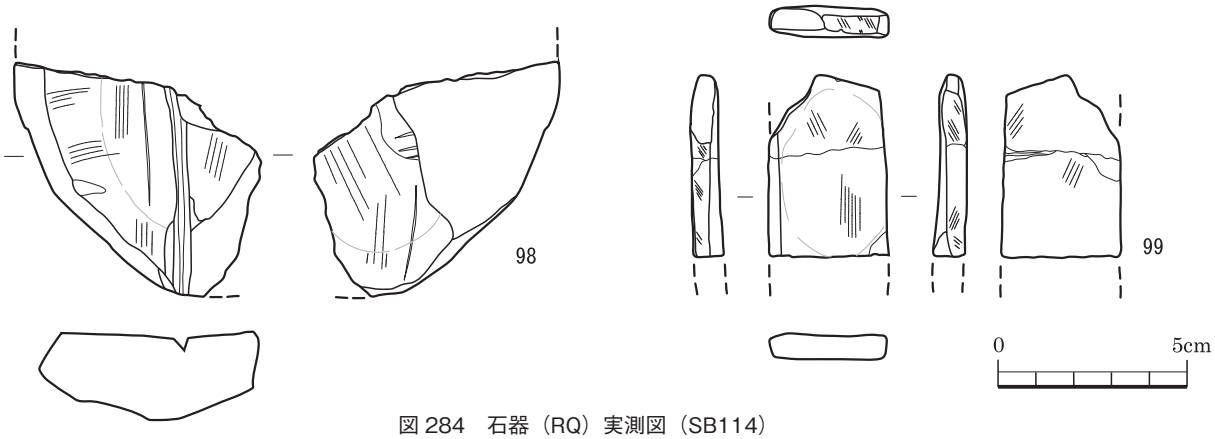


図 284　石器（RQ）実測図（SB114）

平坦部の北から東までの範囲には小ピットが弧状に並んで検出されている。また、炉の周囲では炭と灰が検出された。炉の内壁は、単調な立ち上がりである。

Kピットは方形を呈し、南側壁に近く、東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピットの底部は3つの平坦部が複合した様相を呈している。Kピットの西側には1段高くテラス部が付設されている。また、東側には正方形の土壙が隣接している。この隣接土壙とKピットのテラス部は、規模が概ね一致するため、Kピットの東西両端に副次的構造物が付加されたもの、と判断している。なお、西側のテラス部ではベンガラ滓10点が検出されている。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられている。南西隅のベッド状遺構は、その幅を狭めた状態で南側と西側に伸長している。南西隅のベッド状遺構

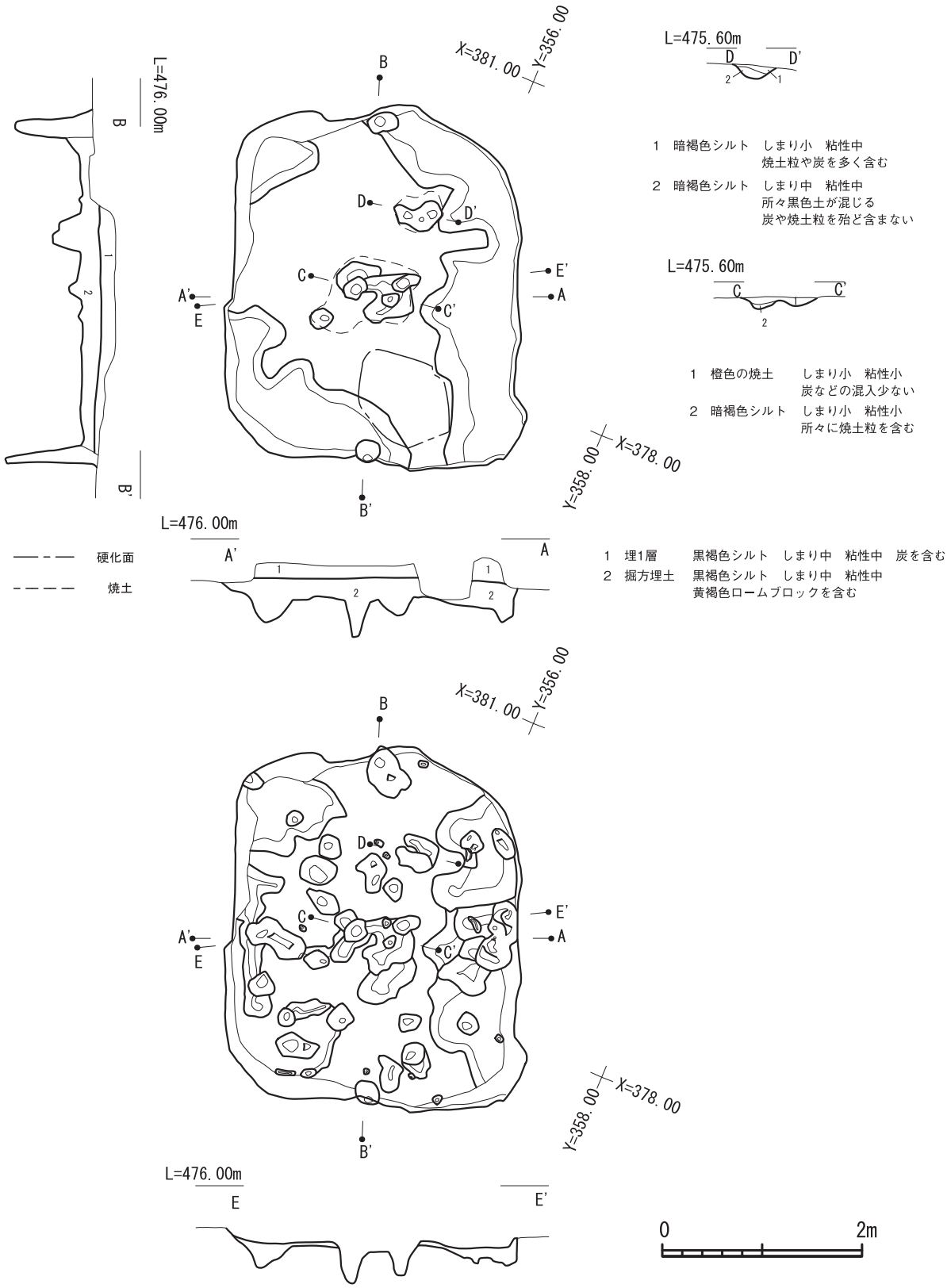


図285 SB115 (1/60)

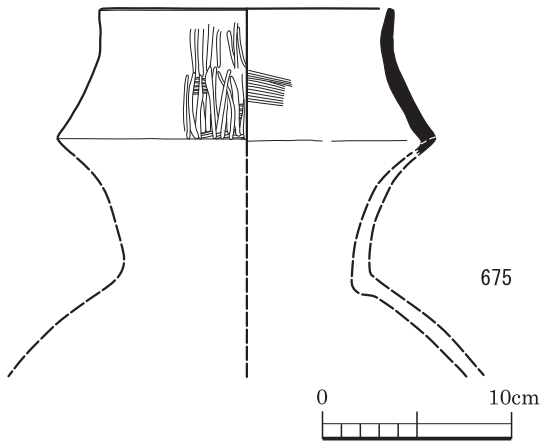


図286　土器（RP）実測図（SB115）

とは1段低いベッド状遺構を介して連接し、北東隅のベッド状遺構とは幅50cmの溝を挟んで連なっている。南東隅のベッド状遺構は、その幅を狭めた状態で北側に伸長し、幅50cm程度の長楕円形の土壙を挟んで北東隅のベッド状遺構に連接している。この状態は、北東隅のベッド状遺構は50cm幅の溝と土壙によって他のベッド状遺構から画されている、と表現することもできよう。ベッド状遺構の上端面には、北西隅、南東隅に土壙が配置され、西側壁際南北中央にピットが位置している。なお、ベッド状遺構の貼床は2層に大別することができた。これは竪穴住居の増改築を示唆する要素である。しかし、掘方段階の調査結果までを踏まえても、主柱穴の位置が変更されていない、掘方土壙が累重的に配置されていない様相であり、柱建て、規模等、竪穴住居の主要構造を変更する類の改変は認め難い。したがって、ベッド状遺構のみの貼替え等、小規模な設備の改修痕と捉えることが適切であろう。

竪穴住居の側壁際には、側壁溝がめぐる。唯一、側壁溝が途切れる箇所が北側壁中央に存在するが、出入口等、他の側壁部分とは異なる用途を備えた部分と評価することができる。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。なお、貼床は2種類に分類できた。まず、内陣からKピットの範囲では、ロームブロックのみを用いて床貼りをしている。これを貼床1とする。貼床1は色調が揃っており、かつ、硬度が最も高い床である。次に、黒褐色シルトとロームブロックの混和材を用いて床貼りをしている部分である。これを貼床2とする。貼床2は、貼床1の周辺部に作られ、部分的に硬化面を備える場合もある。床の使用状況の差異が硬化面の有無を規定している、と推定している。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、北辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。南辺には、中央にKピットを配置する方形の土壙が掘削され、さらに溝が切られている。竪穴住居全体としては、ロ字形の掘方である。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SK111

SK111は、楕円形を呈する土壙である。

SK111の法量は、東西0.6m、南北0.7m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙は皿状に掘りくぼめられ、その中央では焼土が検出された。焼土は、その中央部の最も焼けている部分から外側に向かって徐々に焼け具合が弱まっている。このような焼け方は、地表で焚火をした場合にしばしば観察することができる。この土壙は2a層で検出されたが、周辺には多量の土器が同じ高さで検出されており、旧地表面、弥生時代の生活面に該当する可能性が高い、と考えている。

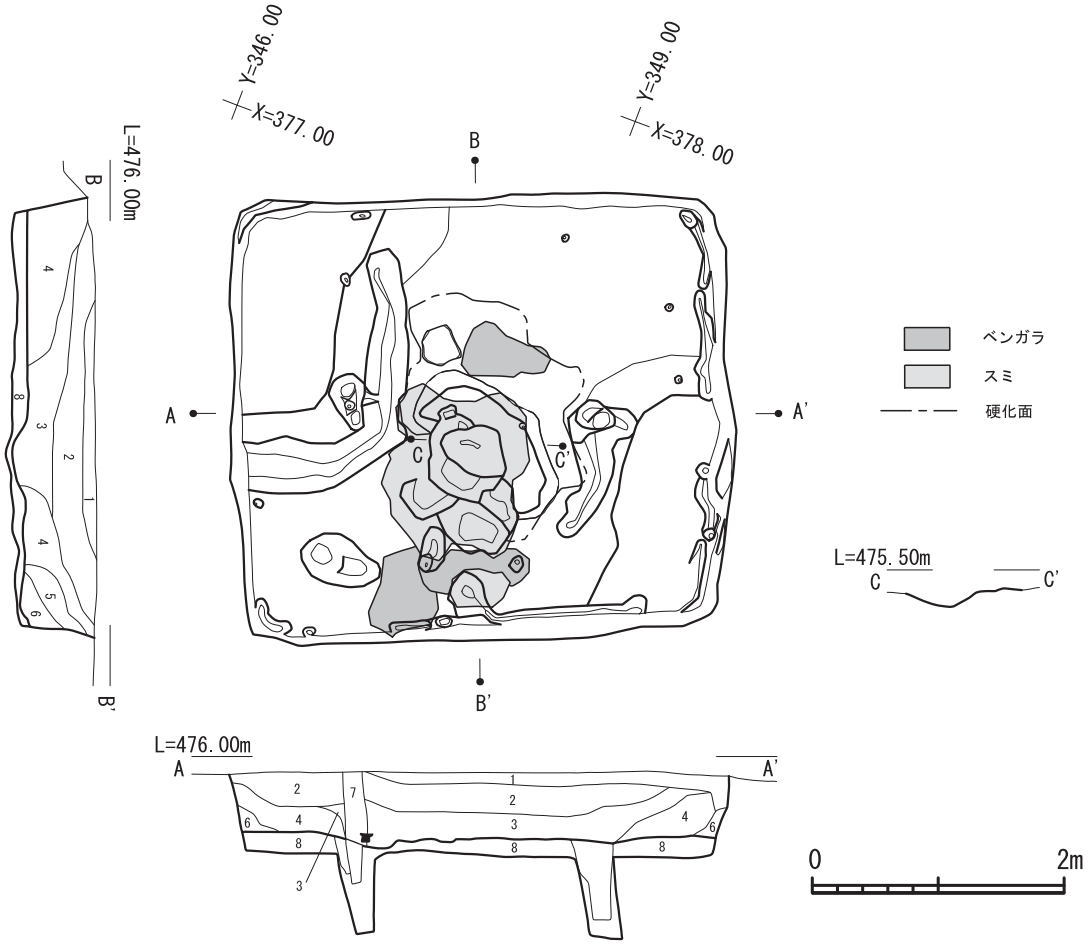
SB112

SB112は、長方形を呈する竪穴住居跡である。

SB112の法量は、南北3.5m、東西4.3m、遺構確認面からの深さ5cmを測る。

主柱穴は、確認していない。東側壁、西側壁の中央にピットを検出しているが、いずれも浅く、ピットの軸も竪穴住居の軸と一致しないため、柱穴とは判断していない。なお、竪穴住居の中央部分で2基のピットを検出しているが、焼土、炭化物、受熱痕跡が認められないため、炉とは判断していない。また、ベッド状遺構は、確認していない。北西隅の部分に、ベッド状遺構と同様、方形を呈した平坦面を確認しているが床の高まりがないため、ベッド状遺構とは判断していない。

床は、地山切り出しであり、硬化面は形成されていない。また、掘方は確認していない。



1　埋1層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中

2　埋2a層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロックを含む　炭を含む

3　埋2b層　極暗褐色シルト　しまり中　粘性中
黄褐色ロームブロックを含むが、埋2a層にくらべ非常に少なくわずかである
ところどころに層状に炭・灰粉のような黒色土(しまり弱　粘性大　埋3層に土質似る)が混じる　炭を含む

4　埋2c層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロックを含むが、一部焼土化したものもある
上面は非常にしまりが強く、硬床面状である　焼けしまったような感もある

5　埋2d層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロックを含むが、数が多く、
大きなかたまり(＝こぶし大以上)のものもある
SB南壁際ステップ？(ST2、ST3、ST4)部分、上面は非常にしまりが強く、硬床面状

6　埋3層(三角堆積)　黒色シルト　しまり弱　粘性大　SB壁際に堆積
暗褐色シルトに黄褐色ロームブロック混じりの土(埋2諸層)と混在している部分もある　SB埋め戻し時に混入か

7　暗褐色シルト　しまり中　粘性小　局所的に入る　西主柱痕である可能性あり

8　掘方埋土　暗褐色シルト　しまり強　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ1～5cm)、黒色シルトブロック(φ1～5cm)を含む

図287　SB116　床面（1/60）

SB113

SB113は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB113の法量は、南北4.3m、東西3.5m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。北主柱穴は北側壁から0.7m南側、南主柱穴は南側壁から0.2m北側の東西中央に位置する。北主柱穴の深さは40cm、南主柱穴の深さは30cmを測る。東西各側壁の際には、主柱穴の並びにあたる位置に深さ20cm程度のピットが各辺2基ずつ合計4基配置されている。主柱を補う柱穴であろう。硬化面は、形成されていない。

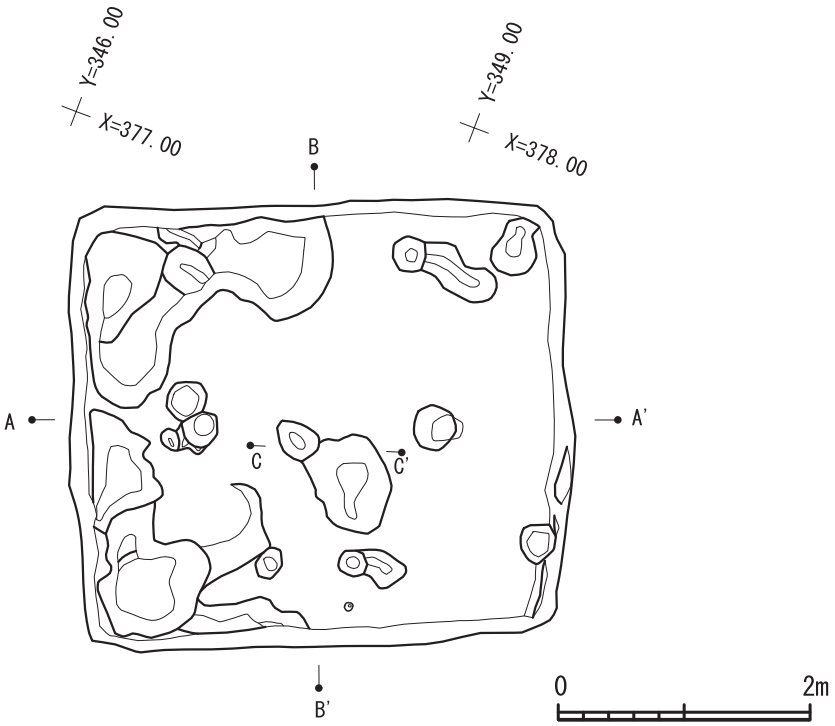


図288　SB116　掘方（1/60）

炉は、南北70cm、東西80cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、南北の主柱穴を結ぶライン上、竪穴住居の中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。なお、掘削作業中に周堤を掘りとばしてしまったため、詳細な記述が適わない。炉の上位には焼土が広がっていた。炉底は浅い皿形に掘りくぼめられ、底部には2基のピットが南北方向に並んで配置されている。このピット内にも焼土が詰まっていた。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居全体に概ね同じ厚さで貼られている。

掘方は、南西隅と北東隅に方形の土壙を掘削し、主柱穴間に溝を切り、北柱穴、炉の土壙、南柱穴を連接させている。小ピットが多数検出されたが樹痕の可能性が高い。他の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB114

SB114は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB114の法量は、南北6.3m、東西7.2m、遺構確認面からの深さ40cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には南北主軸に沿った形で硬化面が形成されている。硬化面は南半部で幅広く発達し、Kピット北端まで形成されている。なお、北東主柱穴の内陣側でベンガラが検出された。

炉は、南北90cm、東西95cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は周堤を備え、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、南西主柱穴、南東主柱穴の脇部分から高まり、炉全体が方形の台上に位置する様相を呈して設けられている。炉穴には、南、西、東の部分に小規模テラスが形成されている。このテラスが段を形成して2段掘りとなるが、段の上位、下位で異なる炉埋土が確認された。上層の炉1層は、当該位置の竪穴住居跡最下層である埋2層と同じ

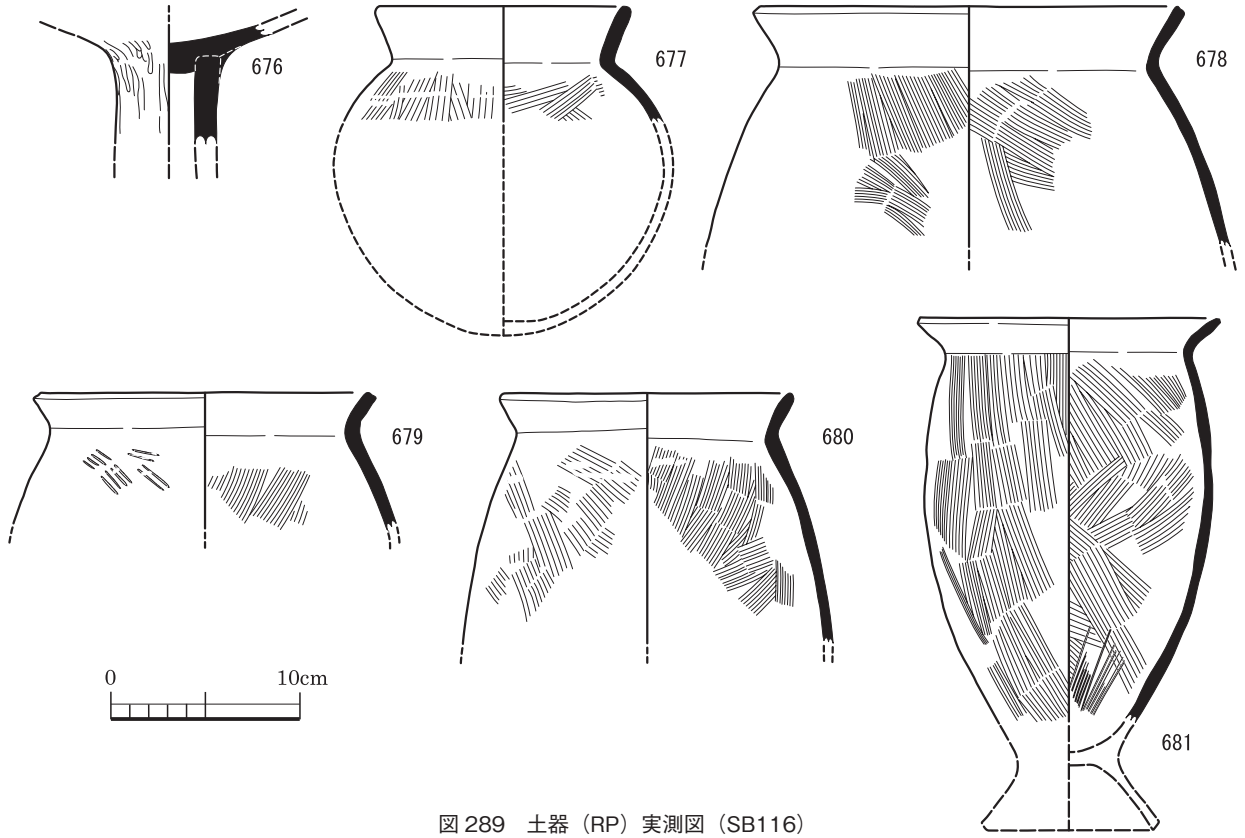


図289　土器（RP）実測図（SB116）

であるが、木炭他、炭化物を含んでいる。下層の炉2層は炭化物層である。この炭化物は、肉眼では藁灰に近似していると観察され、木質の炭化物を一切含んでいない。両層の層界は炉内の段に一致している。炉の外部には平面形が長方形を呈する台部が設えられている。台の南側面は平坦斜面であり、上面は平坦面が広がっている。上面には炉の東北部に連接する浅い溝、炉の西部に位置する浅いくぼみが形成され、その他の平坦面では特に固く締まった硬化面が形成されている。なお、台の南側面にはコ字形にベンガラが散布されていた。このベンガラの東西屈曲部では、特に鮮やかなベンガラがブロックとして検出されている。

Kピットは正方形を呈し、南側壁に接して主軸から西よりに位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北西角、北東角には2基の柱穴が設けられている。東側の柱穴は、掘方まで掘削してしまい、Kピットを半壊させてしまった。竪穴住居の東西中央に位置し、B－B’ラインが通る。なお、Kピット自体が小型であり、炉と整列していないところにSB114の特徴がある。

ベッド状遺構は北西隅、北東隅には概ね方形を呈して設けられている。南東隅のベッド状遺構の上端面ではベンガラが検出され、北東隅のベッド状遺構上端面では東側壁際で焼土が検出された。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。側壁溝は、東西南北の各側壁に沿ってめぐっている。北壁中央部分では、側壁溝の幅が広まっており、出入口等、他の部分とは異なる用途に付されていた可能性が高い。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削している。東半部と西半部とでは掘方の様相が異なり、西半部の掘方はベッド状遺構によく対応した掘削形状であるが、東半部では対応関係が弛緩している。この弛緩状況は、北東隅と南東隅の間に基本土層3層が掘り残され東側壁から竪穴住居中央に向かう帯状堤体となっている所に如実に表れている。この帯状堤体を土壙上端とした場合は、ベッド状遺構と対応した掘方土壙が認識される。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

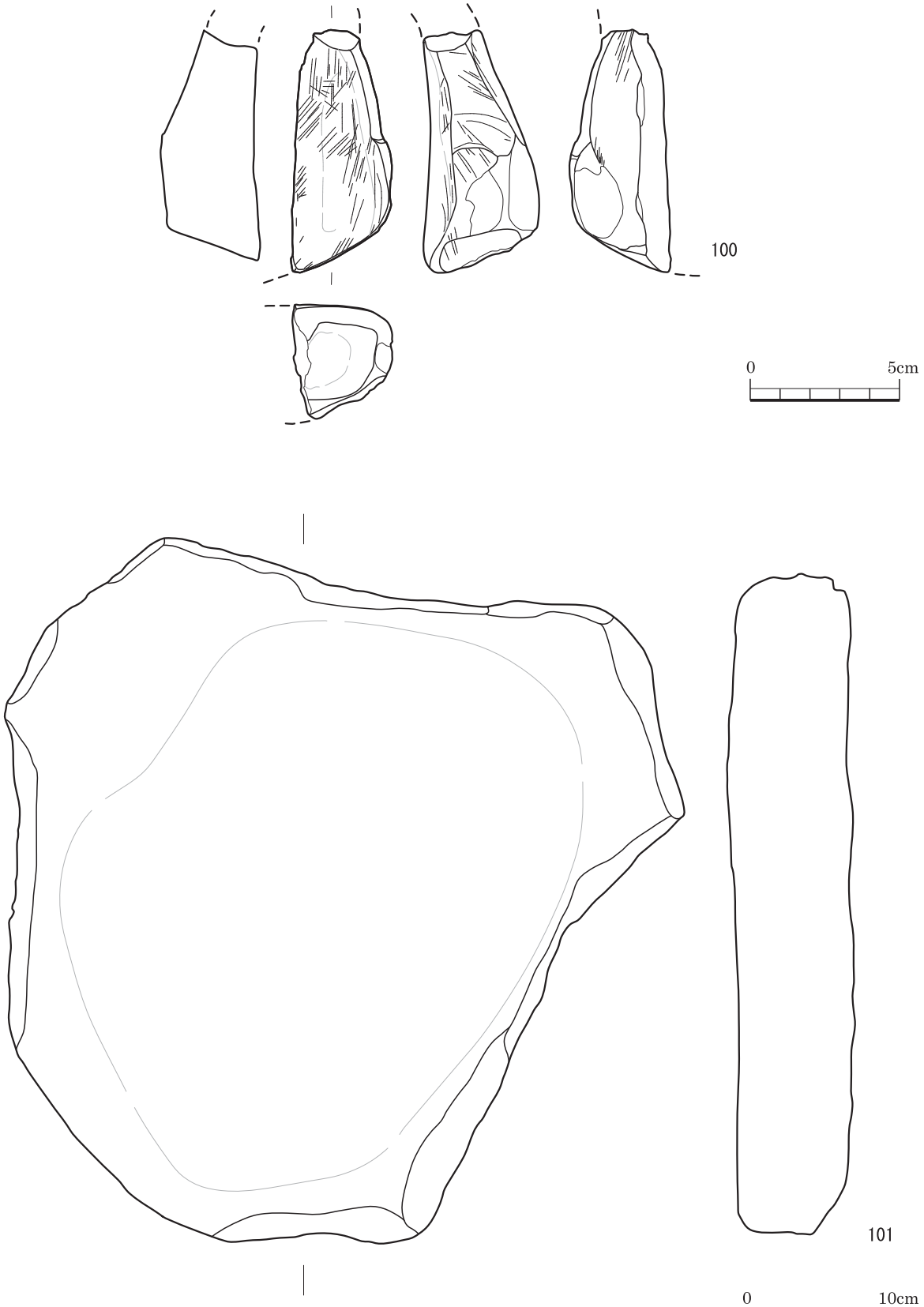


図 290　石器（RQ）実測図（SB116）

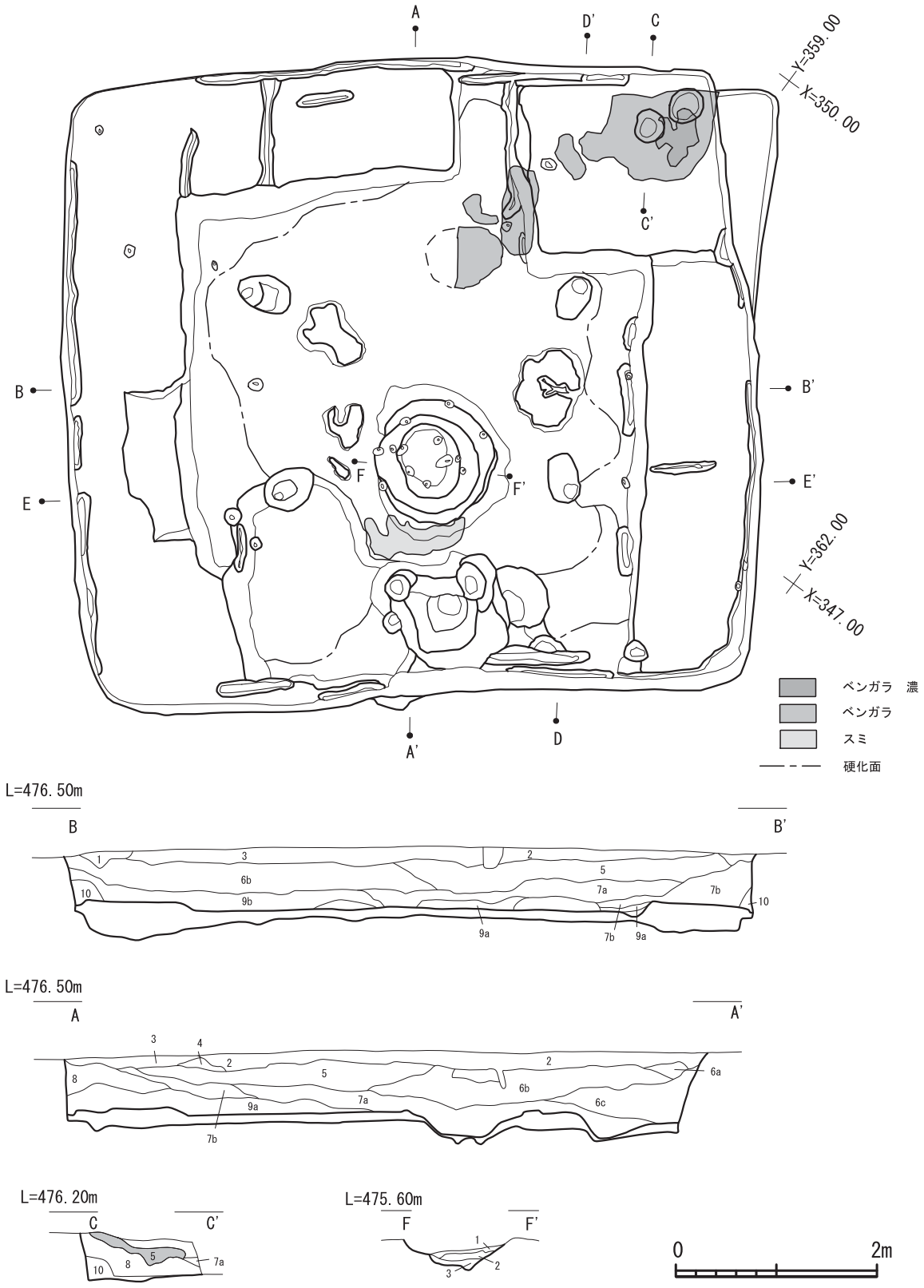
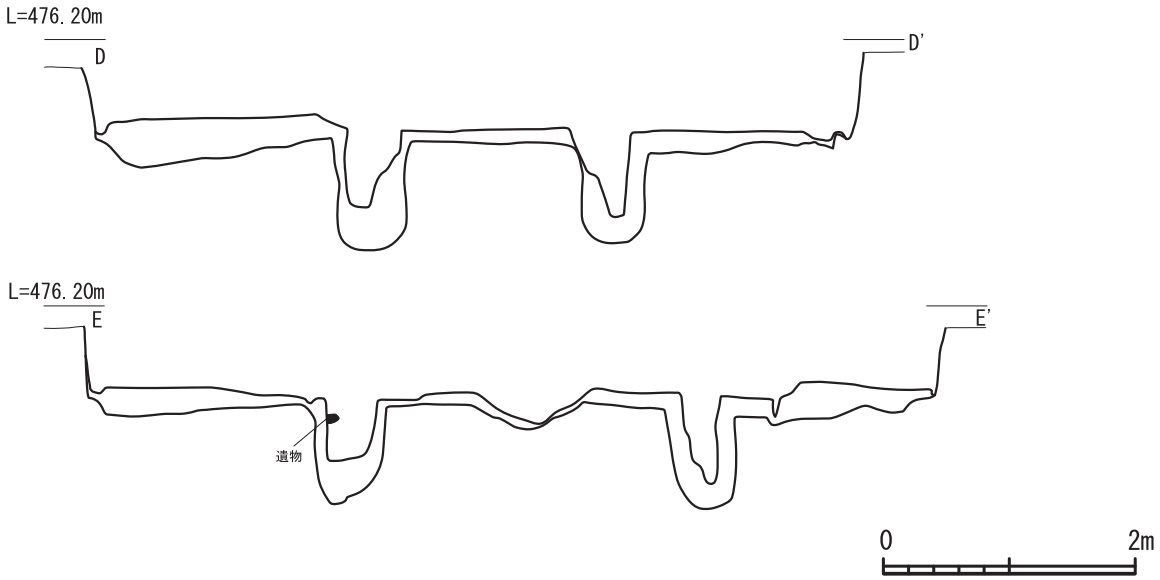


図291　SB117（1/60）



(A・B・C　断面)

1　埋1層　黒褐色シルト(7.5YR3/1)　締まり少　粘性中　埋5層・3層がまじる　基本層序2層(黒ボク)が主1本　部分的にしか見られない
2　埋2層　黒褐色シルト(7.5YR　3/1)埋1層に比べ緑が強い　締まり少　粘性少　φ約3～5mm程度のロームブロックを少量含む　1層よりも締まる
3　埋3層　暗褐色シルト(7.5YR3/5)　締まり少　粘性中　φ約0.5～1cm程度のロームブロックを少量含む
4　埋4層　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　締まり大　粘性中　約5cm程度のロームブロックを含む　半分はブロックで構成される
5　埋5層　暗褐色シルト(7.5YR3/3)　締まり中　粘性中　φ約0.3～3cm大のロームブロックを含む　φ約0.2～1mmのバミスをごく少量含む
北東Gから北ベルトにかけてベンガラが帯状に入り、面が数回形成される可能性がある
6a　埋6a層　暗褐色シルト(10YR3/3)　締まり中　粘性中　φ約0.5～1cm程度のロームブロックを含む
6b層に比べ、締まりに欠ける　6b層と2層の混じり合ったもの
6b　埋6b層　褐色シルト(10YR4/4)　締まり中　粘性小　φ0.5～3cm程度のロームブロックを混じる
埋6層のうちで最もスタンダード　平面で掘削時に基準とした　最も水を含まず、粘性が最も少ない
6c　埋6c層　褐色シルト(10YR3/3)　締まり中　粘性中　φ0.5～3cm程度、5cm以下のロームブロックが含まれる
6b層よりも量がふえる　9層と6b層の混合した土　南辺ラインのみの分布
7a　埋7a層　黒褐色シルト(10YR3/2)　締まり中　粘性中　埋5層より締まる　埋5層との層理面近くに暗い黒褐色土が断面で帯状にみられる
7b　埋7b層　暗褐色シルト(10YR3/3)6a・6c・5層よりも暗い　締まり中　粘性中　7a層に混じる暗い黒褐色土がない状況
φ0.5～1cm程度のロームブロックを含む
8　埋8層　暗褐色シルト(10YR3/4)　締まり中7b層と同程度　粘性中　φ0.5～2cm程度のロームブロックを含む　部分的に暗くきたない
9a　埋9a層　暗オリーブ褐色シルト(2.5YR3/3)　締まり大　粘性中　最も締まりロームっぽい
φ0.5～1cm程度のロームブロックを含む
9b　埋9b層　褐色シルト(10YR4/4)
10　埋10層　黒色(N2/0)　三角堆積

(F　断面)

1　埋1層　住居内埋土　7a層と炭の混じり合う
2　埋2層　炭、わらを焼いた様な細かいセンイ質の炭層
3　埋3層　暗青灰色シルト　火床　築造当初にしきつめられたと考えられる

図292　SB117　断面図（1/60）

SB115

SB115は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB115の法量は、南北3.6 m、東西2.9 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられ、ともに内傾している。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。硬化面は、南半部で発達し、南主柱穴と炉の間に形成されている。ただし、床面が遺存しているのは当該範囲に限られている。この硬化面の範囲を除く部分では床面が削平され掘方埋土が露出している状況であるため、本来の硬化面の範囲はこの範囲に限定されるものではない、と考えている。

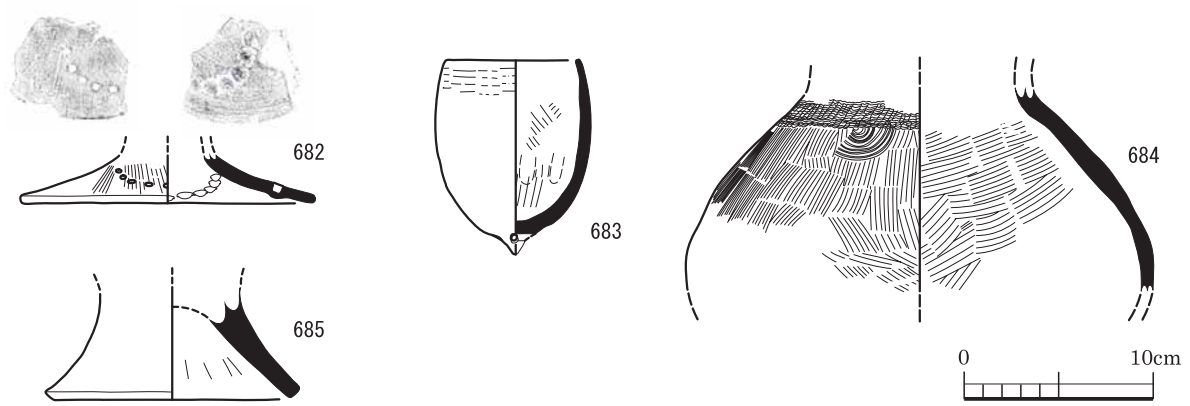


図293　土器（RP）実測図（SB117）

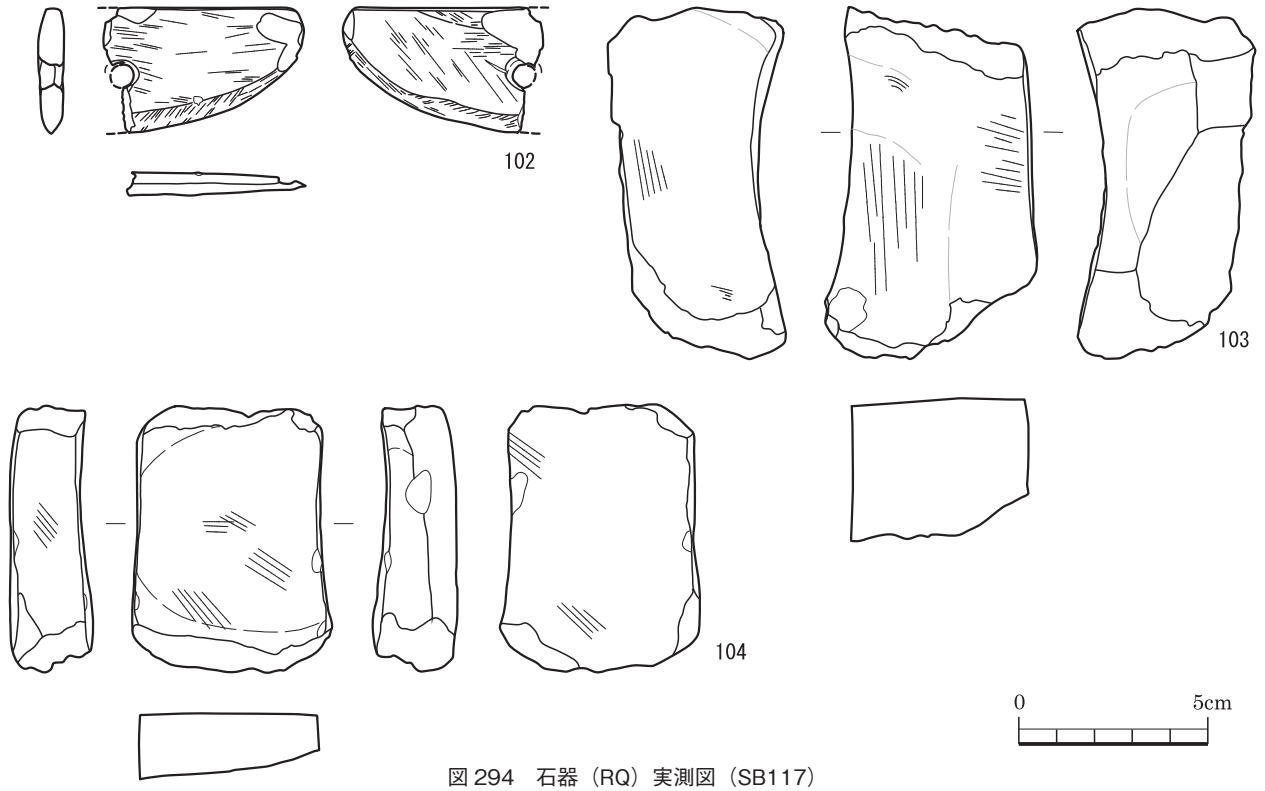


図294　石器（RQ）実測図（SB117）

炉は、南北60cm、東西70cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ主軸線の中央に位置している。炉は、小土壙が炉穴として掘削され、その東西両端部に小ピットが付設されている。炉はボウル形に掘り込まれ、その内壁は緩やかに上っている。炉の周辺では焼土が検出され、炉穴内にも炭化物、焼土が含まれていた。竪穴住居の北東部にも同規模、不整形の土壙が位置し、その周辺には焼土が分布し、土壙内にも炭化物、焼土が含まれていた。ただし、炉穴、土壙とも、その最下層には焼土、炭化物が然程含まれていない状況である。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床である。

掘方は、東西南北の各隅に不整形の土壙を掘削し、東辺、南辺に沿って土壙を延伸させている。炉が設けられる竪穴住居の中央部は、平らに整えられている。掘方の

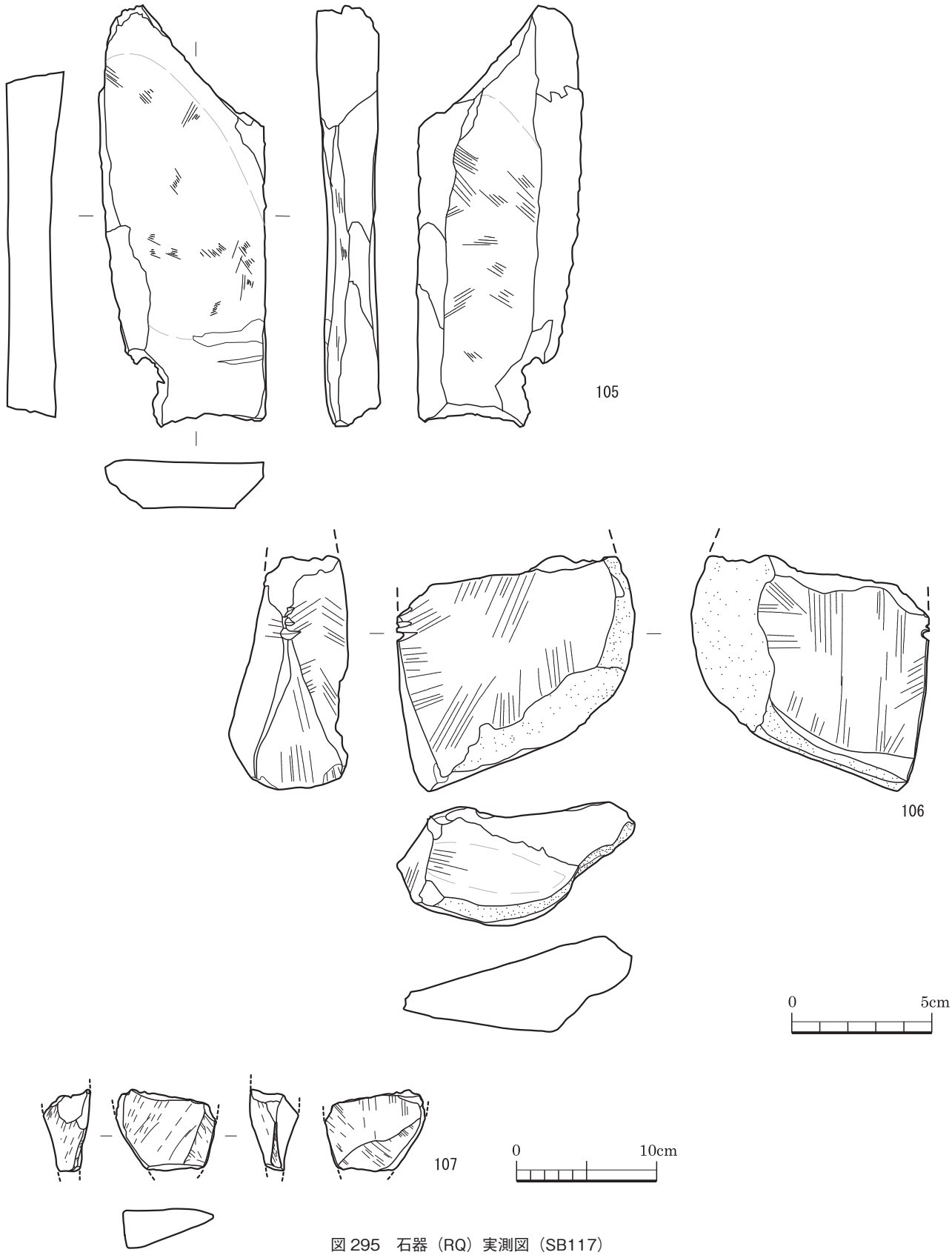


図 295　石器（RQ）実測図（SB117）

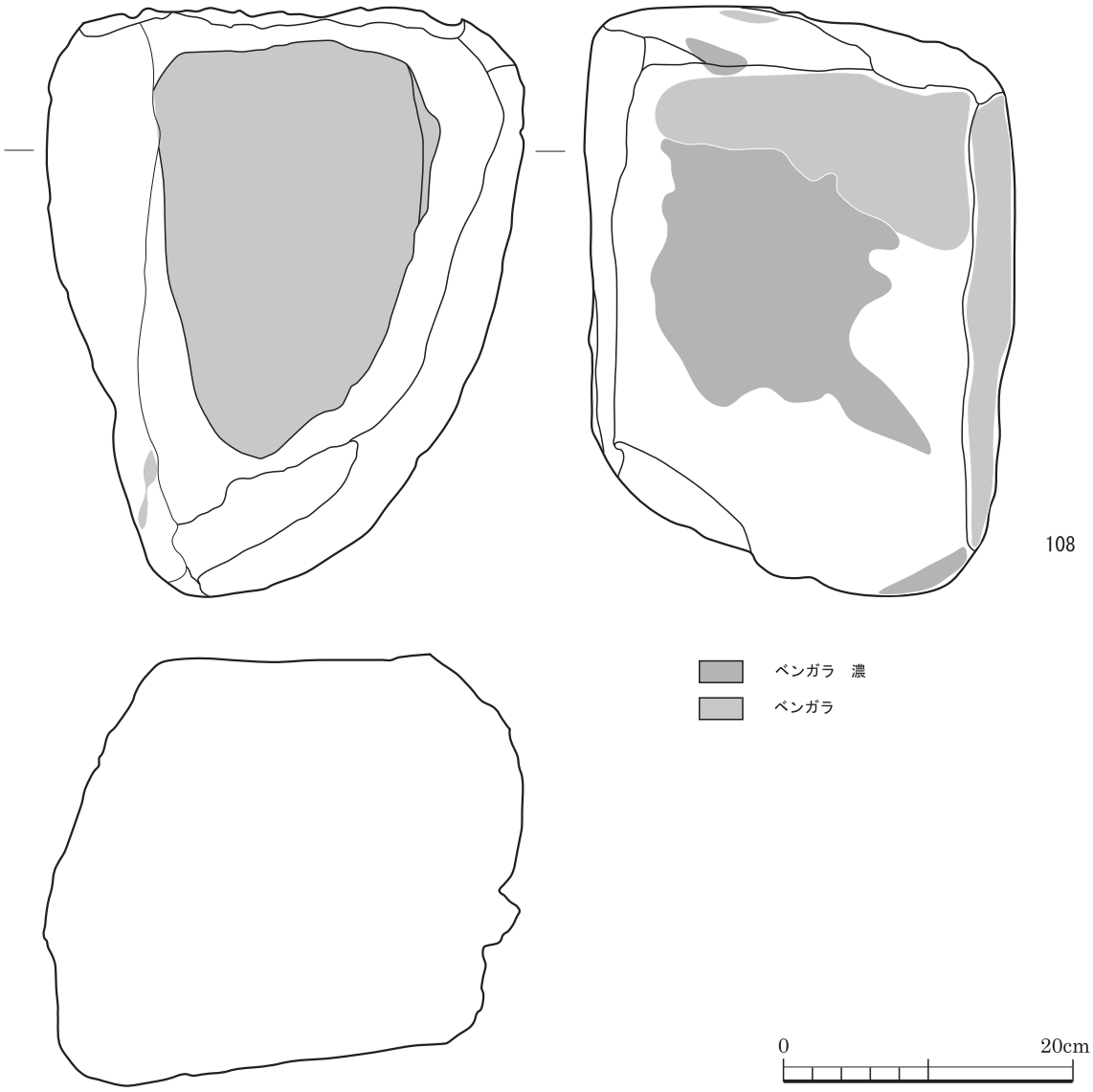


図296　石器（RQ）実測図（SB117）

最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB116

SB116は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB116の法量は、南北3.5 m、東西4.0 m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁から90cm程度内側の南北中央に設けられている。東主柱穴では、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。西主柱穴では、主柱が立てられたままの状態で竪穴住居跡が埋め戻された、と判断できる土層断面を確認した。各主柱穴を結ぶラインは竪穴住居の中央に位置し、主柱穴の間で硬化面が検出された。硬化面は、床上で火を焚いたため、床面が焼け、硬化した様相を呈していた。硬化面は、炉を中心として円状に発達しているが、南半部では形成されていない。この硬化面の大部分は焼けて赤く変色しており、受熱作用により床面が硬化したことを示していた。硬化面の範囲の北側中央部にはベンガラが散布され、その西側では石皿が出土した。石皿の下位には5mm程度の厚さの埋2c層が存在し、さらに当該部分から鉄器1点が出土

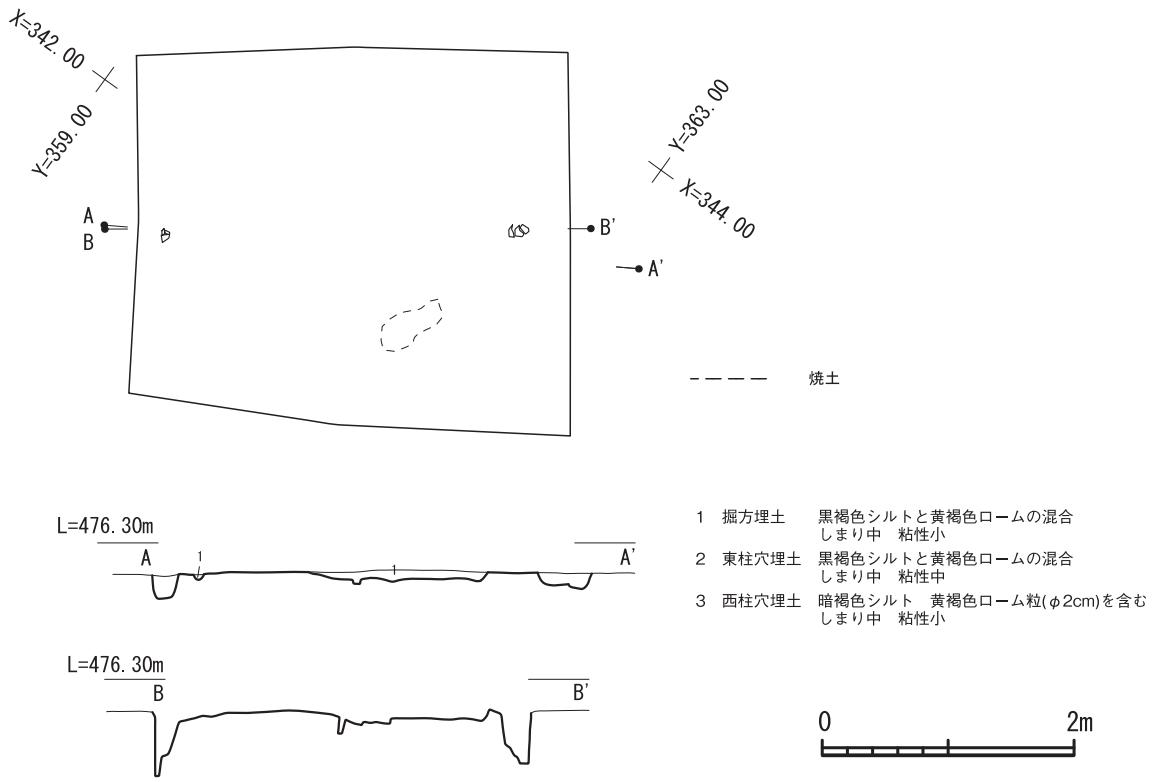


図297　SB118（1/60）

している。このことから、石皿は竪穴住居跡の埋め戻しに際して当該位置に据え置かれたもの、と判断する。

炉は、南北40cm、東西50cmの円形を呈し、深さは10cmである。主柱穴を結ぶラインに北接し、竪穴住居の中央に位置している。周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に20cm幅の平坦面を備え、炉の北西部から北、東をとおって南東部まで、最大直径1.4ｍの弧を描いてめぐらされている。上端面の最大幅は28cmを測り、平坦面際には小ピットが付設されている。周堤が設けられていない箇所、炉の南西部には方形の平坦部が位置し、炉の西側の平坦面に連接している。炉穴は、中位に半円形のテラス部が形成された2段構造である。炉の1段目は円形であるが、2段目はテラス部の影響で不整形となっている。炉の内壁は緩やかに上り、炉内北側には炉穴から周堤にかけて1条のくぼみが設けられている。炉の周辺には炭化物、焼土が分布していたが、これは炉内から掻きだされたものではなく、床面で火が焚かれた際に生成された層だと考えている。なお、その範囲は、埋2c層の分布しない範囲内に収まっている。

Ｋピットは不整形ながらも方形を呈し、南側壁に近い竪穴住居中央に位置する。なだらかに堀りくぼめられており、北側には2基の柱穴が炉の端部に対応する位置に設けられている。Ｋピット本体と2基の柱穴は、直接重複していない。

ベッド状遺構は北西隅、南東隅には概ね長方形を呈して設けられている。ベッド状遺構の床側の側面は緩やかな斜面となり、北西隅のベッド状遺構には側溝が付設されている。南西隅のベッド状遺構でも、同様の溝が主柱穴から南側に伸びているが、側壁斜面自体が緩やか過ぎてプランを認識し難いため、側溝と判断するには至っていない。

床は貼床であり、竪穴住居西半部では厚く、東半部では薄く床が貼られている。南側壁、東側壁の壁際では、側壁溝が検出された。

掘方は、北西隅、南西隅に方形の土壙を掘削し、各土壙を北辺、西辺、南辺に沿って伸長させている。この東側に掘削された土壙自体が浅いものであるが、竪穴住居

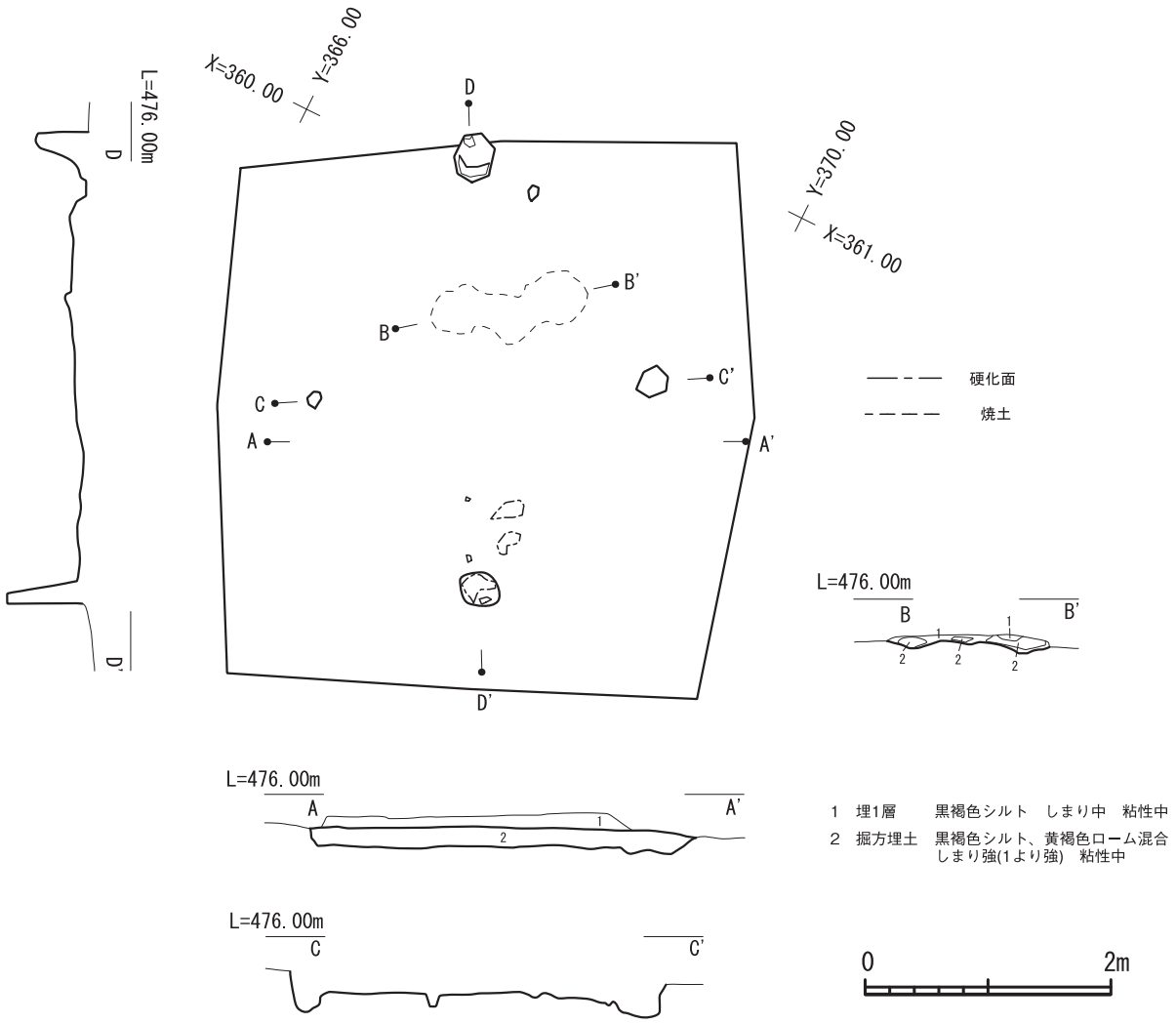


図298 SB119（1/60）

の東半部では掘削痕跡は確認されず、地山が高く残っている状態であった。この様相はSB114の様相に近似している。掘方の最深部は、床面から約15cmの深度である。

SB116では、竪穴住居跡の廃絶過程の一端を示す結果を得ている。

竪穴住居跡の埋2層を掘削する中、西側壁際中央部、南側壁際中央部で硬化面を検出した。いずれも竪穴住居床面のかなり上位にあり、埋土中にステップが形成された状況である。また、硬化面の上下は通常の埋土の固さと締まり具合であった。

西側壁際の硬化面は、土層断面図の埋2c層の上面に一致して形成されている。当該部分では埋2c層は、主に北西隅のベッド状遺構上に位置し、残存した西主柱に留められて丘崖を形成するように堆積している。以上から、柱をランドマークとして埋め戻された埋土の上に、ステップが形成された状況を呈している、と判断できよう。

南側壁際のステップにはベンガラが散布されており、さらに、竪穴住居跡中心部に向かい1段低まった箇所に新たなステップが形成されている。上段と下段の各ステップは、端の一部分が平面的に重複していた。上段のステップは、Kピットの位置の上位である。下段のステップは南側壁から離れている。下段のステップの下位には炭化物層を挟んで竪穴住居床面が存在しており、埋2層が踏み固められた結果形成された硬化面である。以上から、竪穴住居跡が埋め戻される際、階段状にステップが形成され、最上段にはベンガラが散布された、と判断で

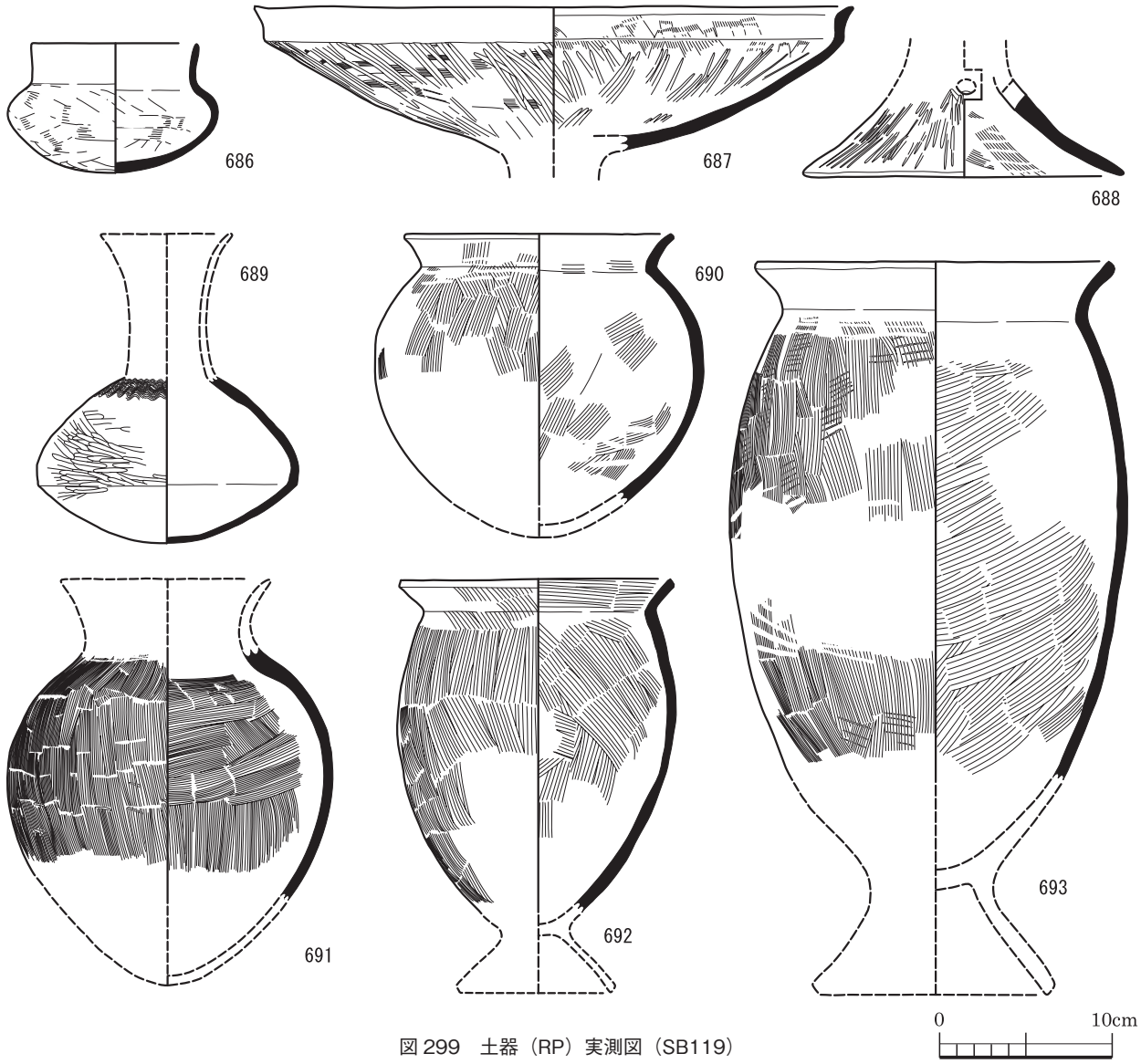


図 299　土器（RP）実測図（SB119）

きよう。

以上から、SB116の廃絶過程を記述すると、以下のとおりである。

まず、西主柱を除く柱等が撤去される。西主柱は立て置かれたままであり、これを指標として埋め戻しがなされる。次に、竪穴住居跡中央に土壙状に形成された埋め戻しされていない範囲で火が焚かれ、床面が焼かれる。この焚火の最中、または直後に、南側壁中央から焚火際まで昇り降りがなされ、階段状にステップが形成される。石皿は、このとき、据え置かれた可能性が高い。一方、西側壁際にも埋め戻しの上面にステップが形成され、側面は受熱作用により硬化する。最後に、南側壁中央のステップにベンガラが散布され、竪穴住居跡全体が埋められる。

主柱という立体的な構造物が指標として作用した過程が推定でき、空間的に廃絶過程を復元できたことがSB116の特徴である。

SB117

SB117は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北東隅東側にテラス部を備える。

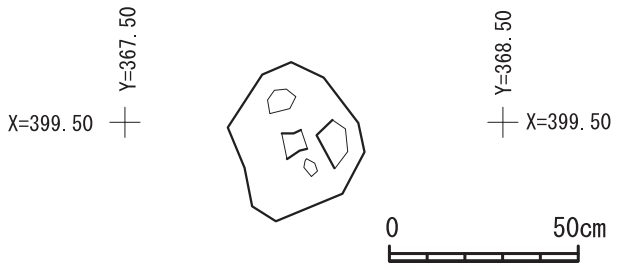
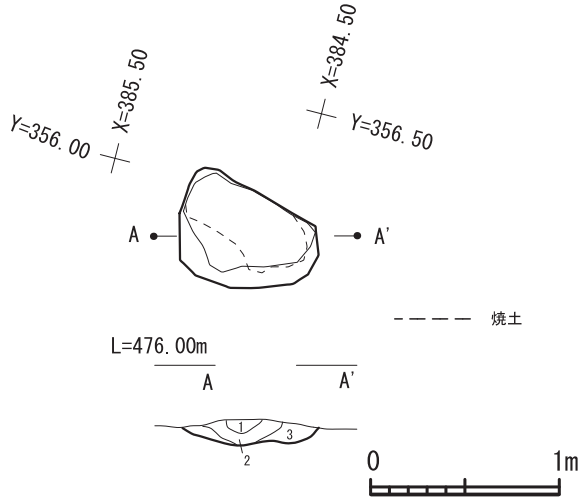


図300　SK107（1/20）



1　橙褐色シルト　しまり中　粘性大　炭を含む
2　橙褐色シルト　しまり中(1よりやや弱)　粘性中(1より弱)　炭を含む
3　暗褐色シルト　しまり弱(2より弱)　粘性中(2より弱)　炭を含む

図301　SK111（1/40）

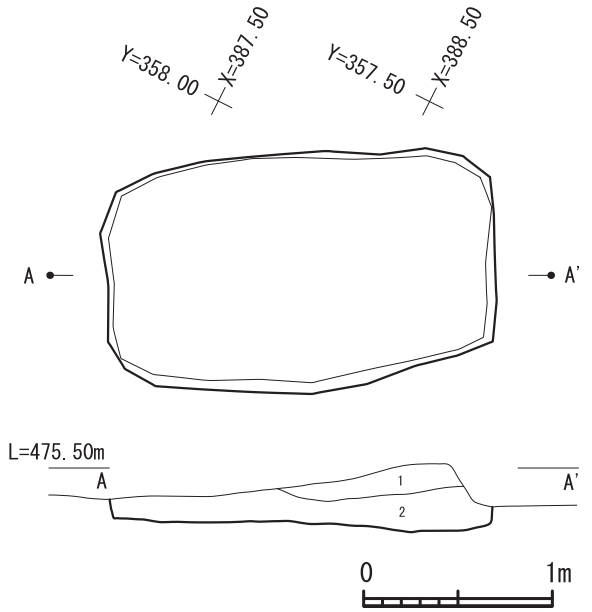
SB117の法量は、南北6.3ｍ、東西7.0ｍ、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計４基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。また、主柱抜き取りの際の排土が小山をなして検出されている。この排土は、北西主柱穴と南西主柱穴の間では3山、北東主柱穴と南東主柱穴の間では2つの小山を併せた状態で1山をなして位置していた。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、特に南北両端に向かい発達度が高く、床面全体に発達している。

炉は、南北80cm、東西80cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅20cm程度の平坦面を備え、床面との境界も明瞭に形成されている。ただし、周堤の西半部では平坦面が狭隘なものに変化し、西端では周堤が途切れている。この途切れた部分の両端には、小ピットが穿たれている。周堤の外端、平坦面際にも、小ピットが4基穿たれている。炉は、ボウル形の掘り込みが上下2段に重なり、平坦な炉底を設け、その周囲に5基の小ピットを穿っている。炉の内壁は、西側に向かう面は明瞭な2段構造を示すが、東側に向かう面は各段斜面が連接し、緩やかに上っている。炉の埋土は3層に分層した。炉1層は、直上の竪穴住居埋土と炭化物の混合層である。炉2層は炭化物層であるが、木材を起原とする炭は皆無で、藁灰のような細い繊維状の炭化物のみが検出された。炉3層はシルト層であり、焼土等を含んでいない。これは炉底形成に用いられた層である、と判断している。炉の外部、南側には、炭が掻き出されていた。

Ｋピットは正方形を呈し、南側壁に接して主軸から西よりに位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Ｋピットの土壙は3段に掘り込まれているが、1段目は傾斜も緩くテラス部と判断したほうが適切であろう。2段目は斜面で構成され、3段目が最も切り立った側壁をもつ部分である。2段目と3段目の北側壁は、ほぼ同様な斜度をもち、連接して切り立った側壁を呈している。このＫピットの土壙の東西には、さらに、浅い土壙が取り付き階段状のテラスが付設されたような状態である。なお、Ｋピットでは拳大の礫が組み合わさった状態で出土している。

ベッド状遺構は、東西南北の各隅には方形を呈して設置されている。南西隅のベッド状遺構は、北西隅のベッド状遺構と相互伸長し、連接している。途中、南西主柱に対応した部分から1.5ｍ程度の幅が1段斜めに低まっているが、伸長部の幅は概ね同じである。北西隅のベッド状遺構は東にも延伸するが、北東隅のベッド状遺構とは、幅0.5ｍ程度の溝状態の床部を挟むため、連接していない。南東隅のベッド状遺構は北に伸長し、北東隅のベッド状遺構に連接するが、1段低い状態である。なお、北東隅のベッド状遺構のみが一際大きな規模で設置され、他のベッド状遺構からも独立している、との印象が強い。



1　2a層(包含層)　黒褐色シルト　しまり中　粘性小
2　埋1層　黒褐色シルト(1より黒味強い)　しまり中　粘性中
暗黄褐色ロームをわずかに含む

図 302　SK120（1/40）

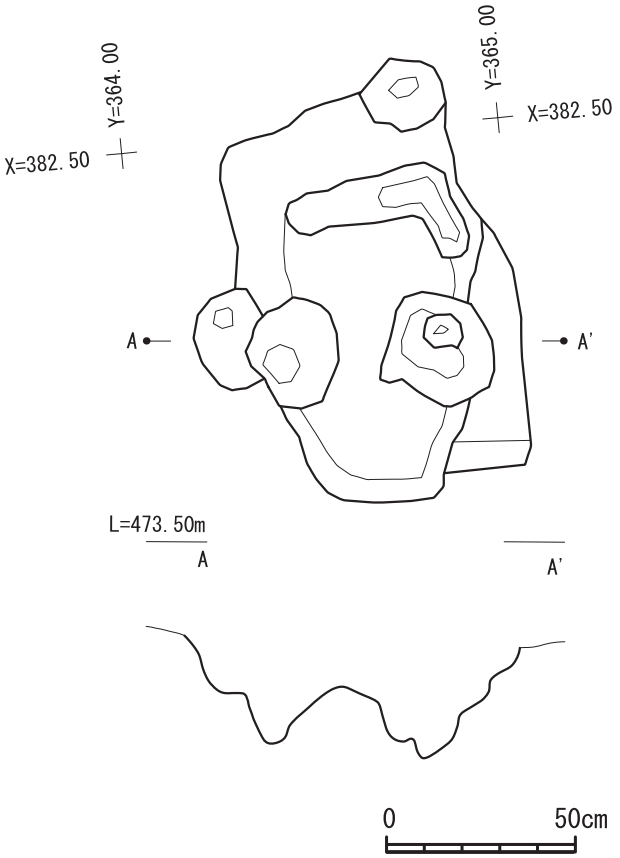


図 303　SK121（1/20）

SB117の北東隅には三角形を呈したテラス部が付設している。テラス部は平坦面で構成され、その壁も切り立った構造を有している。この部分において、テラスを除く平面プランは東側壁が西側に内傾した形態であるが、北東隅のベッド状遺構西側面はこの内傾したプランと平行である。以上から、竪穴住居の築造に際しては、当初の縄張りは整った長方形が用いられたものの、その掘削中に不整形の長方形へとプランが変更され、ベッド状遺構等、付帯設備は変更プランに整合したものとなった、と判断できる。なお、SB117は、旧地形では小高い丘陵の頂に位置している。ここにプラン変更の事由を求めることができる可能性が大きい、と考えている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

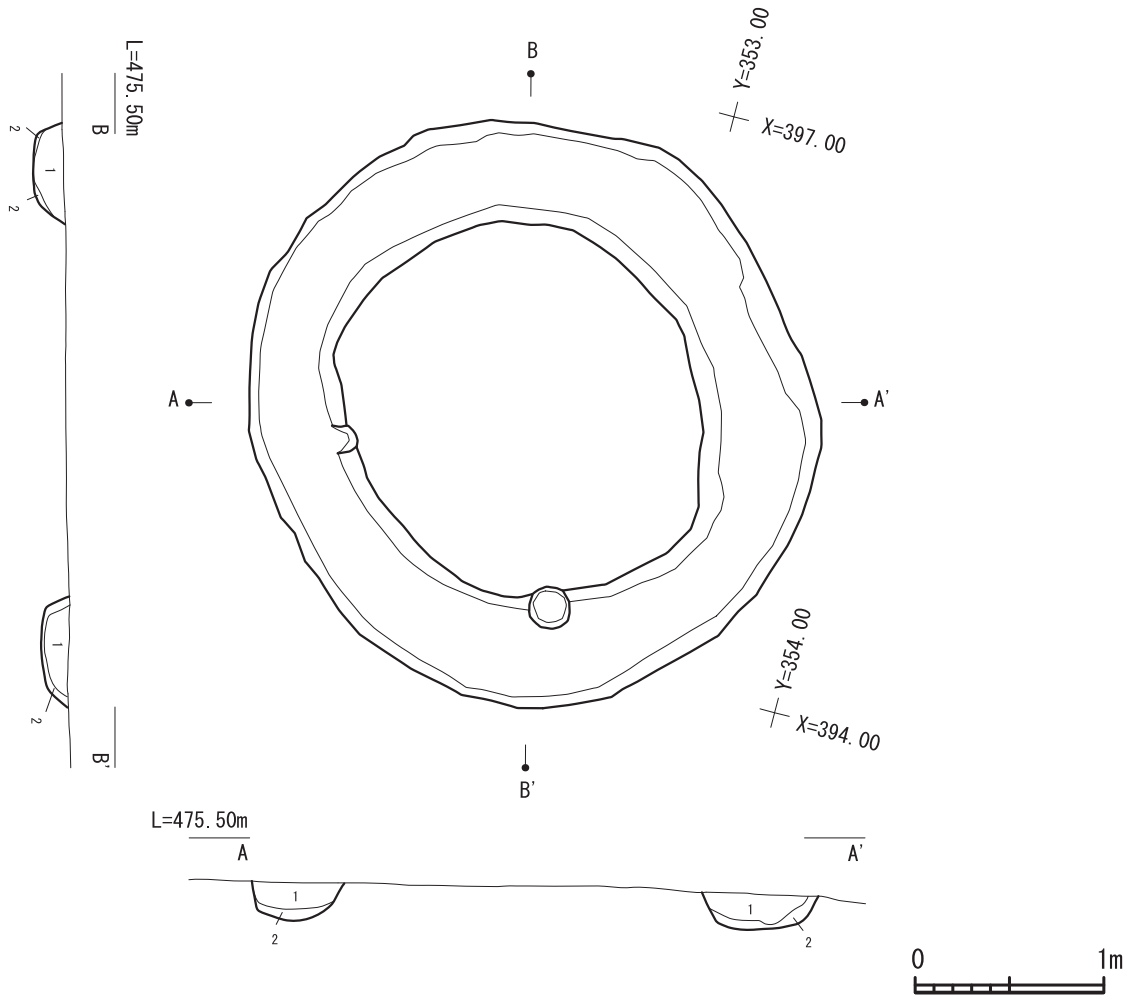
SB117には、ベンガラが散布されていた。ベンガラは竪穴住居跡の北東部に集中し、北東隅から内陣北端の中央に至るラインを形成した状態で検出された。検出されたベンガラは、竪穴住居の埋め戻し層に属し、一定範囲の平面を複数形成して、その平面が間層を挟んで累重した状態を呈している。さらに、最上位、北東隅の部分では、最も色鮮やかなベンガラが検出された。この状況は、北東隅から竪穴住居跡の中心部に降りるステップが存在することを推定させる。すなわち、埋め戻し土塊の中に住居跡中央部への下り道が形成され、その各ステップにはベンガラが散布され、最後に最上段のステップに精良なベンガラが散布され、竪穴住居跡が埋めたてられた様相を示す状況である、と判断している。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。北辺には溝が切られていないため、凹字形の掘方である。炉、張出しが設けられる部分にも掘削が及ぶが、炉は円形土壙が、張出し部は方形土壙に近い幅広の溝が掘削されており、各設備の完成形に対応している。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB118

SB118は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。

SB118の法量は、南北3.1ｍ、東西3.4ｍを測る。削平が激しく、埋土が僅かに残っている状態であった。



1　埋1層　黒褐色シルト(2b層上部相当の2cm以下のブロックを極少量含む)　しまり中　粘性小
2　埋2層　明黒褐色シルト(2b層下部の層と同様な色調であるが、2b層上部を全く含まないことにより弁別した)
しまり小　粘性小

図304　SD109（1/40）

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、東側壁、西側壁から30cm程内側の南北中央に設けられ、ともに内傾している。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶラインは、竪穴住居の北側壁と平行である。硬化面は、確認していない。

炉は、確認していない。浅い皿型の炉が存在したものと推定することができるが、痕跡を見出すことはできなかった。なお、竪穴住居跡の南東部で焼土を検出している。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は、貼床である。

掘方は、床から5cm以下の深度であった。

SB119

SB119は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB119の法量は、南北4.5m、東西4.4m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。北主柱穴は北側壁に接して設けられ、南主柱穴は南側壁から50cm内側に位置し、ともに内傾している。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶライン上では、疎らではあるが、

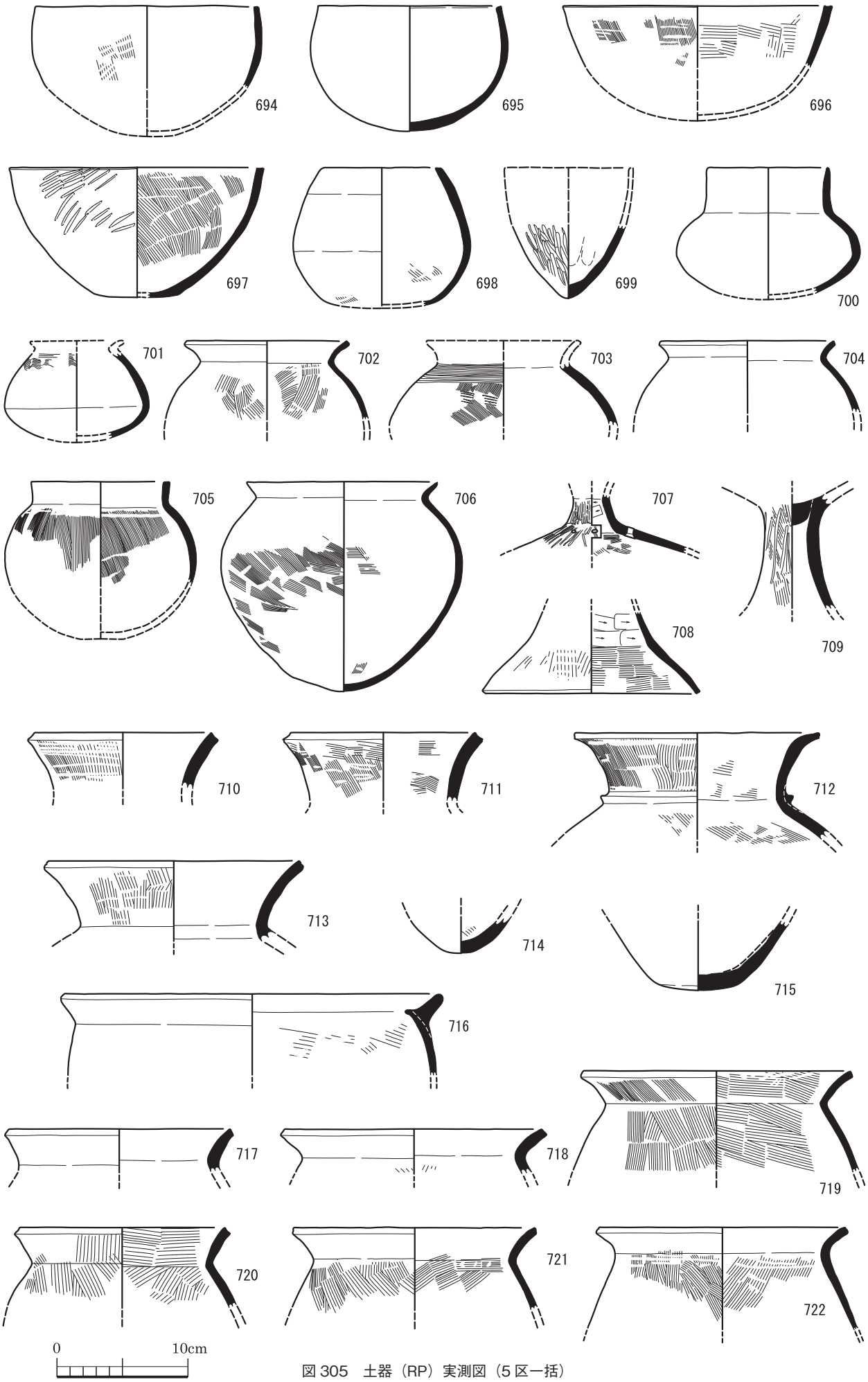


図 305　土器（RP）実測図（5 区一括）

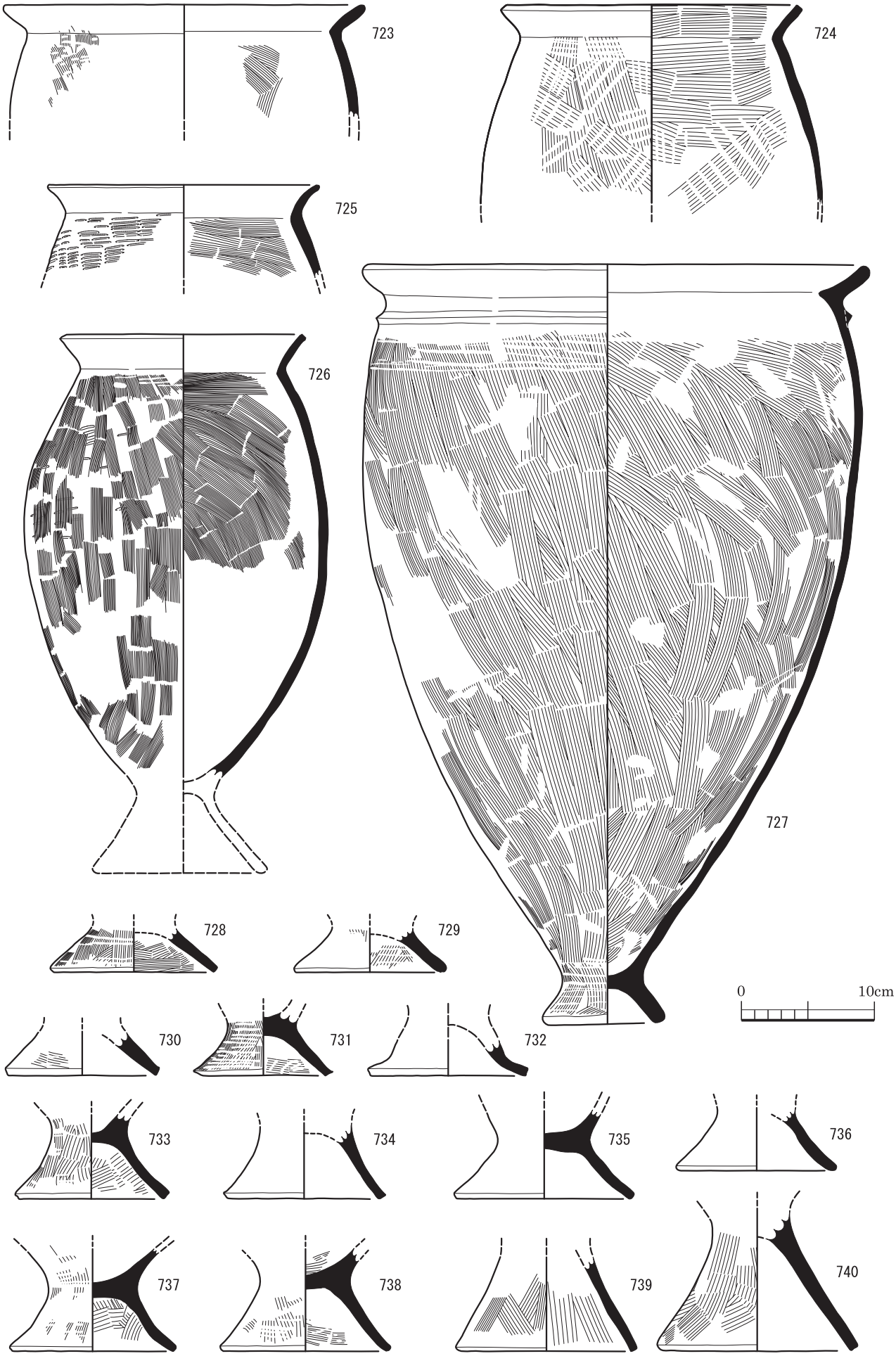


図 306　土器（RP）実測図（5 区一括）

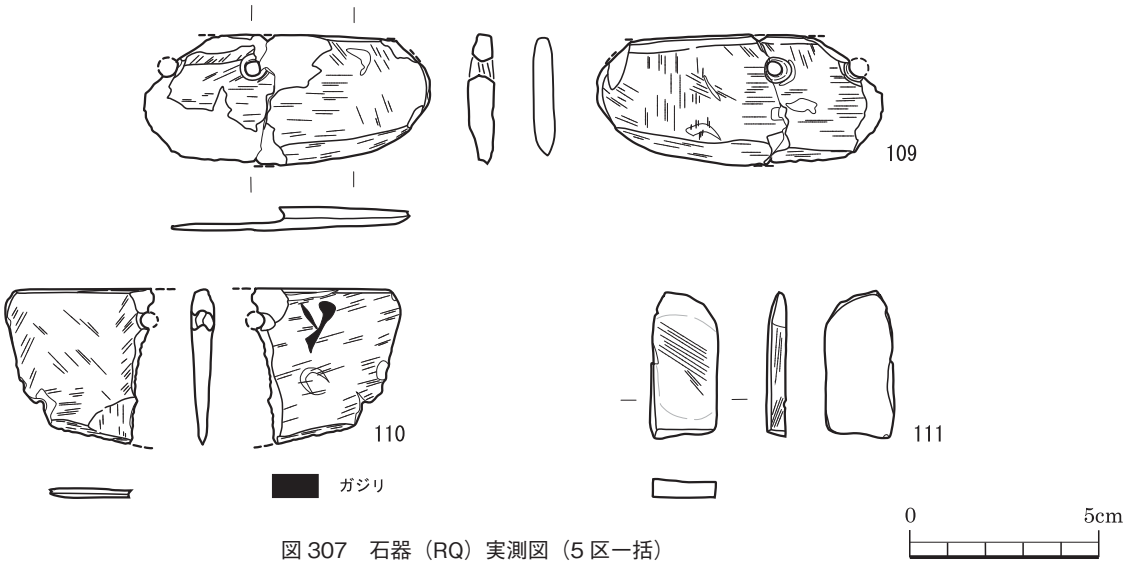


図 307　石器（RQ）実測図（5 区一括）

硬化面が形成されている。

炉は、浅い皿型土壙が3基連接した形を呈し、その上位には赤色を呈する焼土が分布していた。この焼土が床面に食い込んだ状況が、炉の実体である。なお、焼土はもう1箇所、南主柱穴の上位でも検出されているが、こちらは黄色を呈した焼土である。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居全体に同じ厚さの床が貼られている。

掘方は、竪穴住居の側辺がややくぼむが、特徴的な掘削痕跡を見出すには至らなかった。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SK120

SK120は、長方形を呈する土壙である。

SK120の法量は、南北2.1 m、東西1.2 m、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

土壙底部には平坦面が造り出され、側壁は切り立っている。

SK121

SK121は、長方形を呈する土壙である。

SK121の法量は、南北1.1 m、東西0.7 m、遺構確認面からの深さ20cmを測る。

土壙の南東部にはテラス部が形成され、北東隅にピットが付設されている。土壙の南半部にはピット3基が東西に整列し、最東端のピットには小ピットが穿たれている。北壁から東壁北端部にかけて、底部に側壁溝が設けられている。

その他

下扇原遺跡5区では、遺構番号に欠番はない。

なお、包含層等から出土した遺物を一括して掲載した。

２－６　下扇原遺跡６区の調査

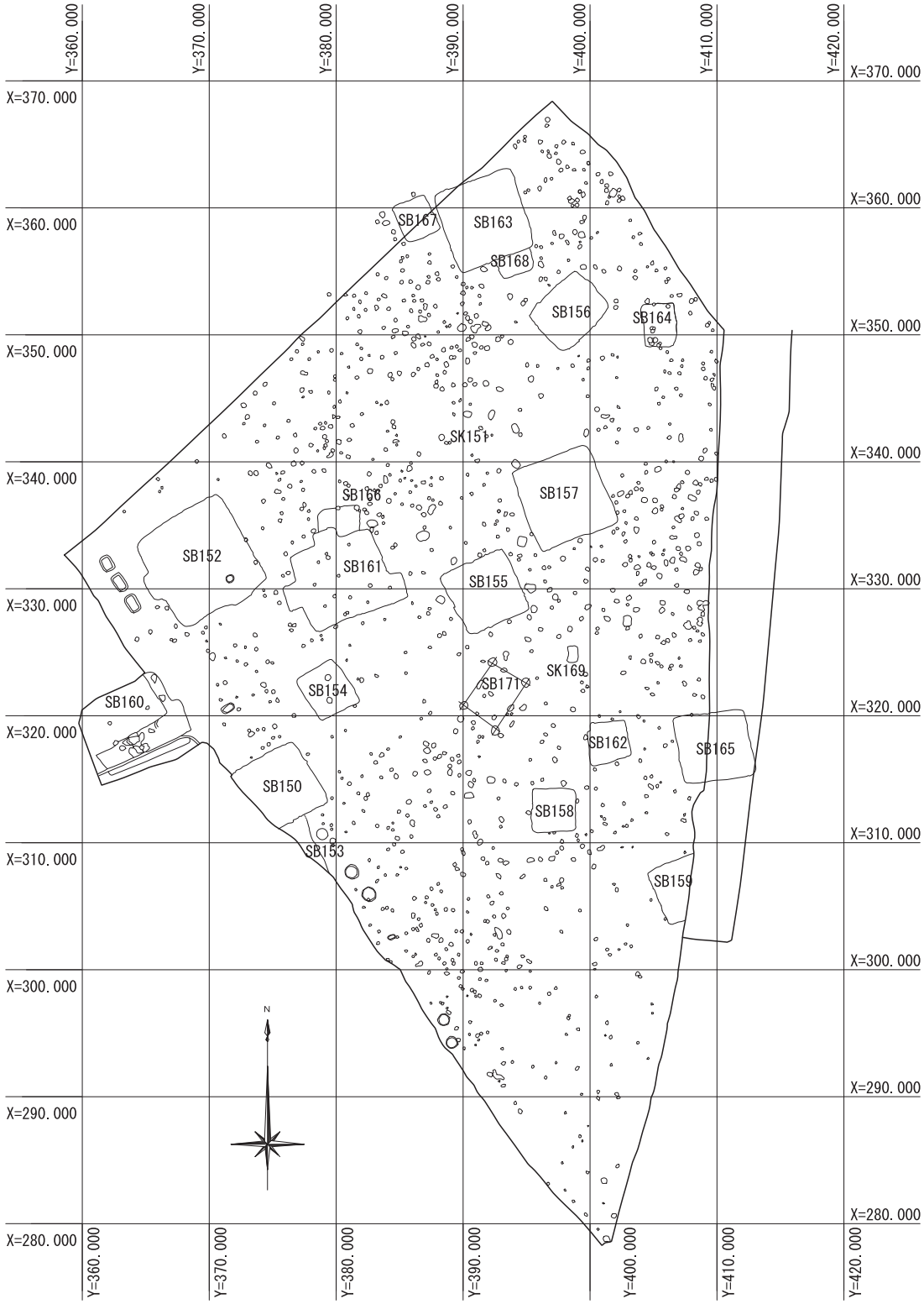


図 308　下扇原　６区遺構配置図 (1/500)

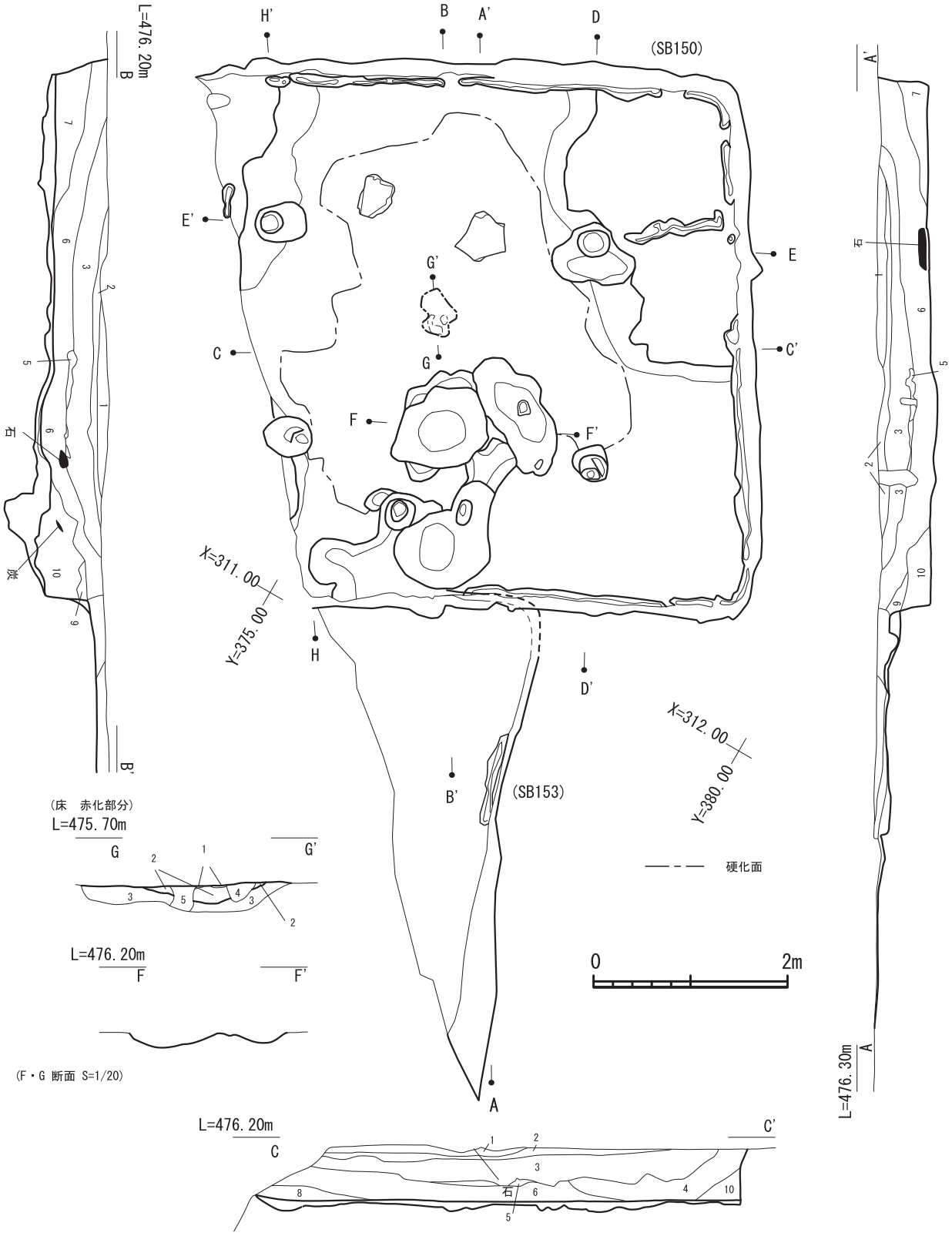


図 309　SB150・153　床面（ 1/60 ）

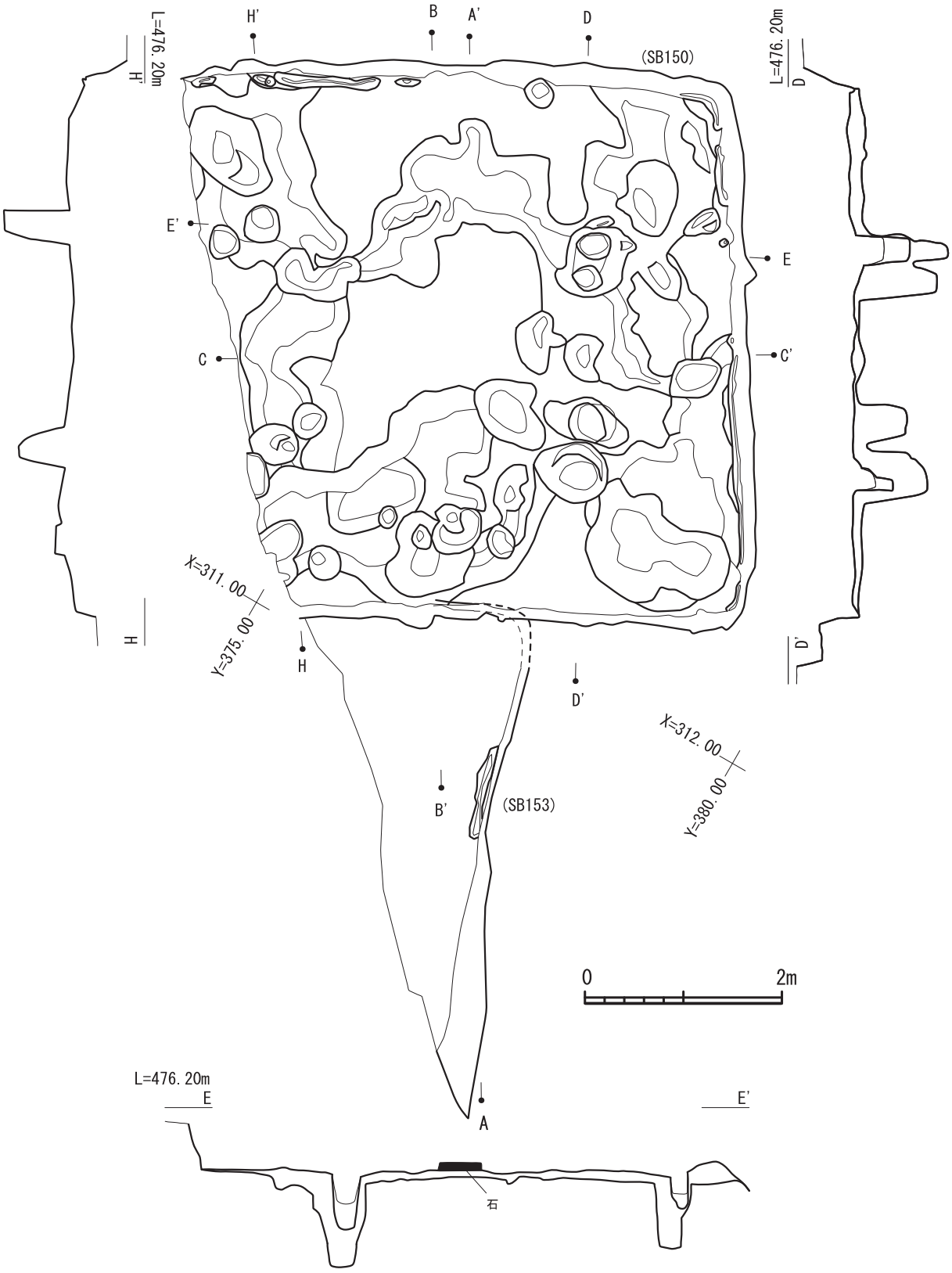


図 310　SB150・153　掘方（1/60）

（G　炉注記）

1　最も赤化している部分-明赤褐色(Hue2.5YR5/8)シルト

2　やや赤化が甘い部分-明褐色(Hve7.5YR5/8)シルト

3　黄褐色シルト(Hue2.5Y5/4)　しまり強　粘性中･･･地山（植物根等による攪乱を誤認して掘り下げた）

4　黒褐色シルト(Hue10YR2/2)　しまり中　粘性中　混入物は殆ど見られない

5　黒褐色シルト(Hue10YR3/2)　しまり強　粘性中　焼土ブロックが若干混じる

1･2が熱によって焼土化した部分(貼床)
4･5は焼土形成後、住居に伴う何らかの掘削と考えられる

（A・B・C　土層注記）

1　埋1a層　黒褐色シルト　粘性中　しまり中

2　埋1b層　黒褐色シルト　大量に黄褐色シルトブロック(10cm大)混
層全体が非常に明るい　粘性中　しまり中

3　埋1c層　黒褐色シルト　明橙色粘土ブロック(1cm程度)混　わずかに炭混

4　埋2a層　暗褐色シルトブロック　黄褐色シルトブロック混　粘性中　しまり中

5　埋2b層　最上層の焼土

6　埋2b層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(2cm弱)　明橙粘土ブロック混(3cm弱)
5より色調が明るい　炭を多く含むのが特徴　粘性中　しまり中

7　埋2c層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック　混(5cm弱)
6より色調が暗く、しまりが小さい　粘性中　しまり中(小)
埋4層とよく似ている

8　埋2d層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック混(2cm弱)
北東・南東Gではみられなかった埋土　褐色シルトといってよいほど色調が明るい
しまり大　粘性中

9　埋2e層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(5cm大)　黄褐色粘土ブロック(2cm弱)を大量に含む
ブロックの占める割合が大きいため、しまりが大きい　しまり大　粘性中

10　埋4層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(2cm弱)　明褐色粘土ブロック混(1cm弱)
炭を含む　しまり中(小)　粘性中　埋2c層とよく似ている

図311　SB150　注記

SB150

SB150は、長方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。SB153と切り合うが､SB150（古）→SB153（新）である。後代に、西側を削平されている。

SB150の法量は、南北5.7ｍ、東西は5.7ｍを確認し、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、南北方向に発達し、北側では北壁近辺にまで、南側ではKピット北端にまで形成されている。

炉は、南北80cm、東西90cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に掘りくぼめられている。周堤は僅かな高まりであり、炉底は広い底を備えたボウル形に掘りくぼめられている。炉の内壁は、緩やかに上っている。炉の北側には床が赤化した部分が検出され、その上位を中心として炭、焼土を検出した。焼土は炉からその北側の床が赤化した部分までの範囲の直上に分布し、炭は焼土の南端部を主とした焼土の周縁部で検出された。なお、炉穴内部には竪穴住居跡埋土が入り、炭、焼土は検出されていない。このことから、炉の使用停止後に炉内の炭等は掻きだされたもの、と判断できる。ただし、炉の上位で検出された炭と焼土のすべてが、炉から掻きだされた炭等と一致するわけではない。炉の北側の床が赤化した部分は、床面から下方に漸移的な色調変化を呈しており、床面の一部が激しく受熱し、その周辺に変化が及んだことを示している。なお、赤化した範囲は不整形な楕円を呈しているが、その中心部には小ピット2基が穿たれ、当該小ピット間の部分が最も強く赤化していた。この赤化現象は床面での焚き火に起因し、炉から赤化部分にまで分布する炭と焼土は焚き火に拠るものが多くを占める、と判断する。

Kピットは概ね円形を呈し、南側壁に近接して中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられ

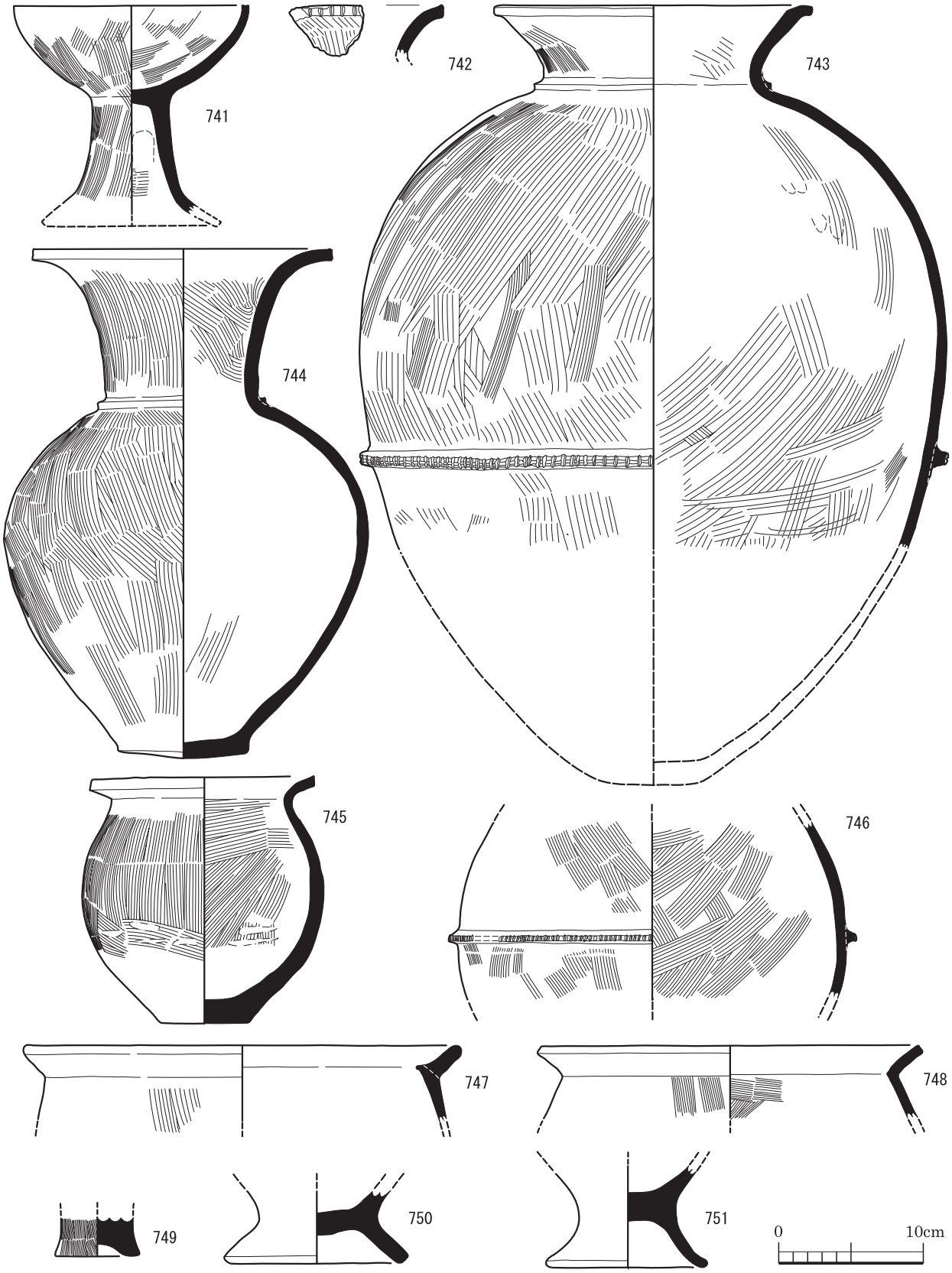


図 312　土器（RP）実測図（SB150）

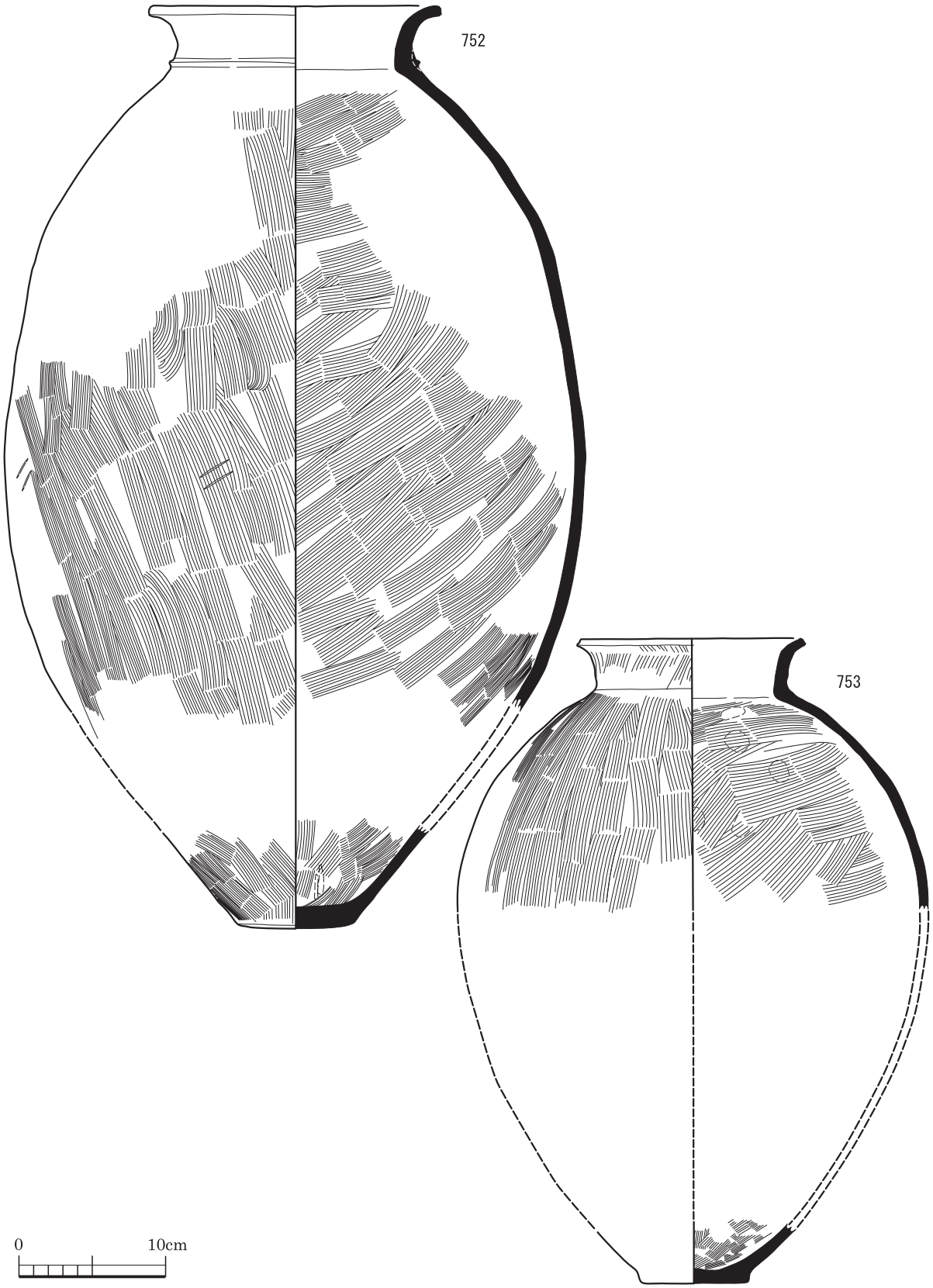


図 313　土器（RP）実測図（SB150）

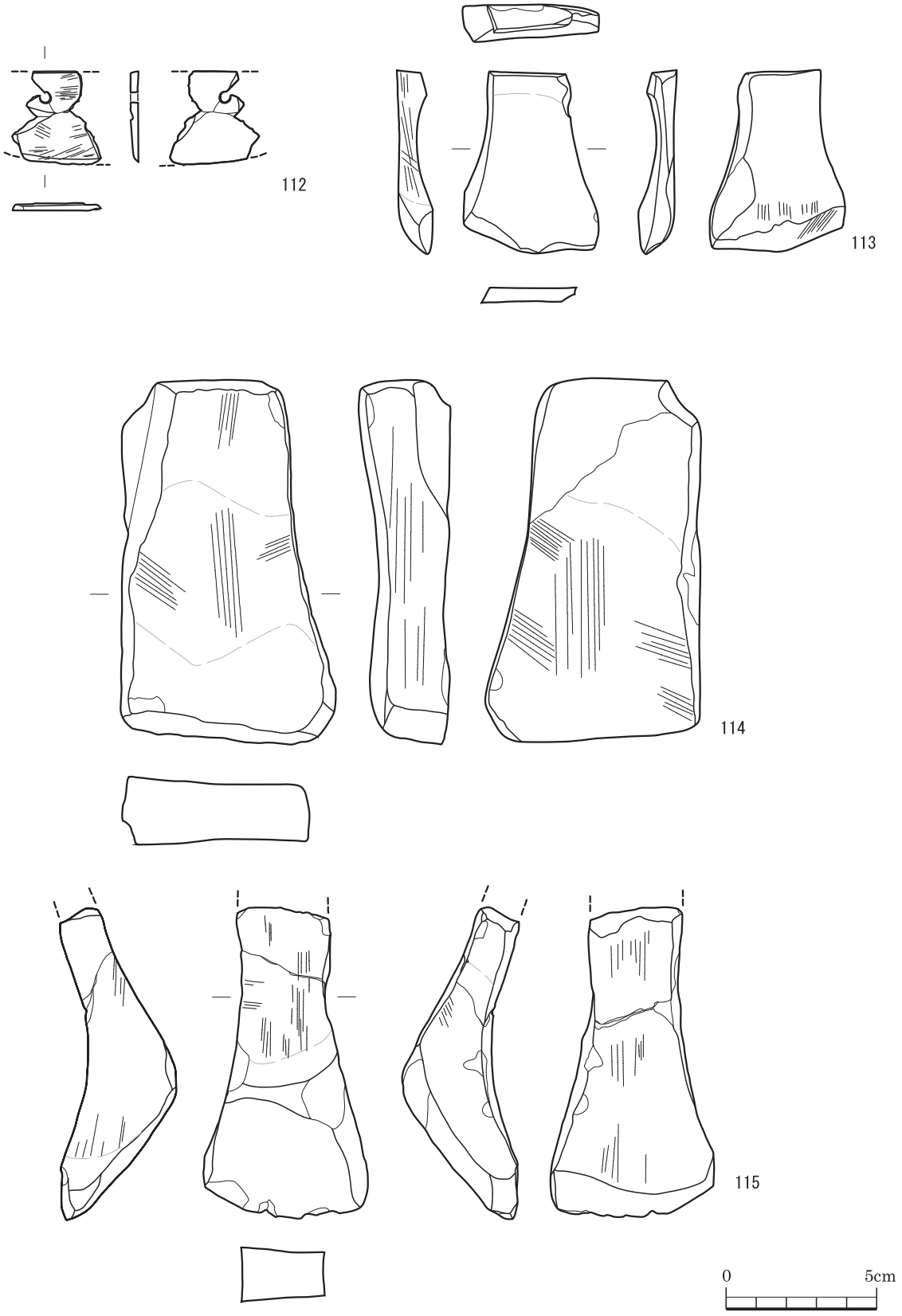


図 314　石器（RQ）実測図（SB150）

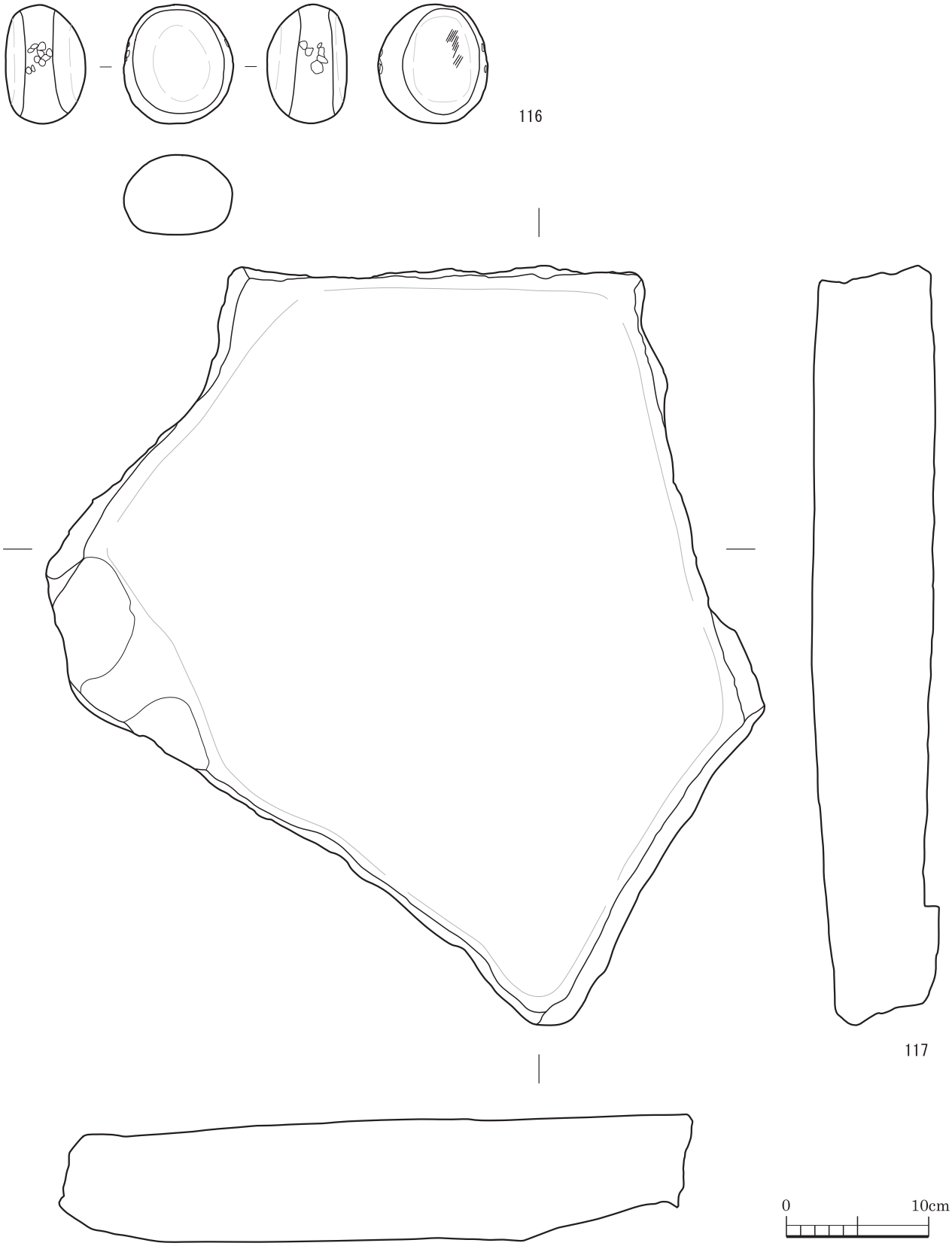
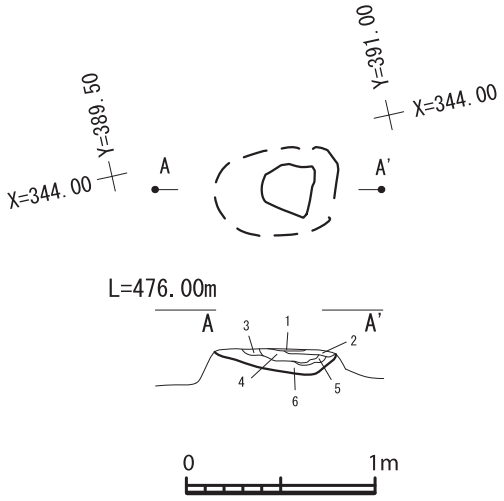


図 315　石器（RQ）実測図（SB150）



1　2a層(包含層)
2　埋1a層　褐色シルト層(Hue10YR　4/6)
　　橙色(Hue7.5YR　6/6)の焼土混　しまり中　粘性中
3　埋1b層　にぶい黄褐色シルト層(Hue10YR　4/3)
　　埋1a層と同様の橙色焼土をわずかに含む　しまり中　粘性中
4　埋1c層　にぶい黄褐色シルト層(Hue10YR　4/3)に橙色(Hue7.5YR　6/6)、
　　及び　黄橙(Hue7.5YR　7/8)の焼土を大量に含む
　　シルト層よりむしろ焼土主体の層である
　　炭化物はほとんどみられない　しまり中　粘性中
5　埋2層　にぶい黄褐色シルト層(Hue10YR　4/3)
　　直上の焼土が染みこんでいる地山である　しまり中　粘性中
6　地山　　2b層(包含層)

図316　SK151（1/60）

ている。Kピットの上位では、人頭大の礫が凝集して検出されている。いずれの礫も竪穴住居跡の埋め戻し層に属し、うち3点の礫はKピットと炉の中間で検出され、厳密にはKピットの範囲から外れている。礫は2群に分かつことができる、しかし、同程度の高さであり、ともに埋め戻し層に属することから、Kピットの使用停止後に当該位置に据え置かれた礫群として捉えたい。なお、この礫群に正対する位置、内陣の北辺上には2点の石皿が並置されている。各石皿は、床面から2cm程度上位に位置していたため、並置されたもの、と判断している。

ベッド状遺構は、北東隅には概ね方形を呈して設置されている。なお、竪穴住居跡の西部では、北西隅、南西隅のベッド状遺構の東端を確認している。また、このベッド状遺構の側面は、緩やかな斜面であり、上端、下端を明瞭に捉えることが困難であるため、南東隅にも設置されていたものを認識できていない可能性が高い。これは、硬化面の分布と掘方の形態から導いた反省点である。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。北辺では内側に溝が切られ、南辺ではKピット、炉と複合した溝となっているため、変形したロ字形の掘方である。炉の南西部まで掘削が及ぶが、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。なお、掘方段階の調査で北東主柱穴と南東主柱穴の内側に1対2基のピット、北西主柱穴の南西部分に1基のピットが新たに検出された。南西部分は削平されているため未確認であるが、以上のピットは竪穴住居の側壁に平行して位置しており、その深度も柱穴とするのに十分であることから、1段階前の主柱穴である、と判断している。すなわち、SB150は改築された竪穴住居である、と判断することができる。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SK151

SK151は、方形を呈する土壙である。

SK151の法量は、東西0.6m、南北0.5m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

土壙は、焼土を含み、炭化物をほとんど伴わない埋土で形成されている。当初、石庖丁が検出されたため、その周辺で竪穴住居跡とその炉が検出されるであろうと予測し調査を進めたが、焼土以外の遺構を認識するには至らなかった。なお、甕、石庖丁は、ともに土壙周辺からの出土であり、土壙内から出土した遺物ではない。

SB152

SB152は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。西側壁、南側壁に張出し部を備える。

SB152の法量は、南北8.0m、東西8.0m、遺構確認面からの深さ70cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、

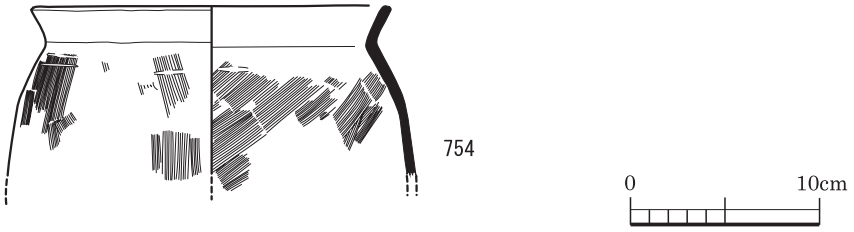


図 317　土器（RP）実測図（SK151 周辺）

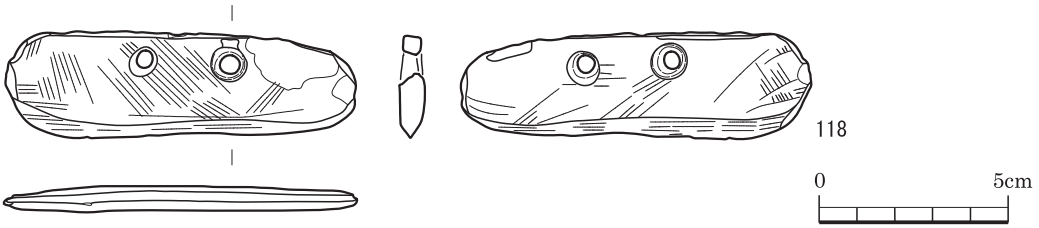


図 318　石器（RQ）実測図（SK151 周辺）

竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、内陣の南北でさらに発達し、北部ではベッド状遺構の際まで、南部ではKピット北端にまで形成されている。

炉は、南北100cm、東西100cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺にその中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に平坦面が幅広く形成されている。この周堤部の上部平坦面は、南東部で若干狭隘な幅に変化する。炉の周囲には、周堤外部に接した同心円状に、炭と灰が掻き出されていた。炉の1段目の中位には炉底を貼り直したような黄褐色粘土ブロック層が位置し、その下位には炭化物層が、上位には竪穴住居跡埋土が堆積している。炉の2段目は炭化物を主体とした層である。炉の内壁は、緩やかに上っている。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に接して主軸から東よりに位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピットの土壙の東西には、Kピット自体が2段掘りとなったような観を呈する斜面が形成されている。炉とKピットの間には、しっかりと床が貼られており、炉の周囲からKピット北端までは三和土台が設えられた様相を呈している。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられ、西側壁には張出し部と複合して設置されている。南側壁にも張出し部と平坦面が複合しているが、こちらの平坦面は床面として捉えることが適切である。南西隅のベッド状遺構は、西側壁に沿って北に伸長するが、張出し部の前面で延伸部は途切れ、2段のステップとなり床面に向かって低まっている。北西隅のベッド状遺構は、幅を減じながらも北側壁に沿って東に伸長し、北東隅のベッド状遺構との間に1段高いベッド状遺構を挟み、連接している。南東隅のベッド状遺構は、東側壁に沿って北に伸長し、北東隅のベッド状遺構に連接している。南東隅のベッド状遺構は南側壁から20cm程離れ、その間には低い床面が形成されているが、ベッド状遺構の南端はKピットより西部分の南側壁ラインに一致している。すなわち、南側壁の張出し部から東部分は、整った正方形プランの南西端に張出し部が付加された様相を示している。付加部分には、平坦な床面が形成され、側壁溝も他の部分と連なって設けられている。南壁が崩落した等の事由に因り、竪穴住居に極小規模な修改が加えられたもの、と判断することができよう。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

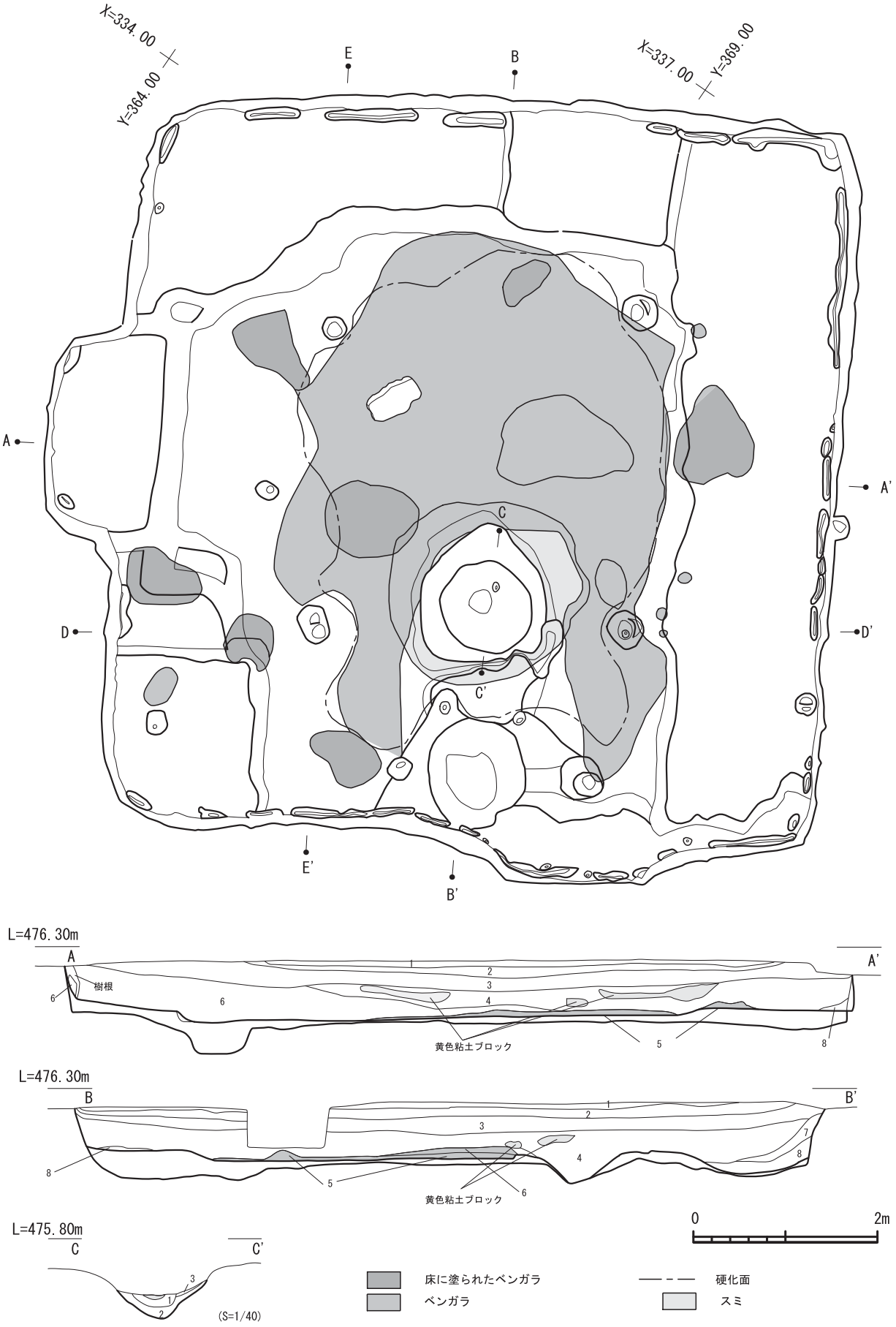
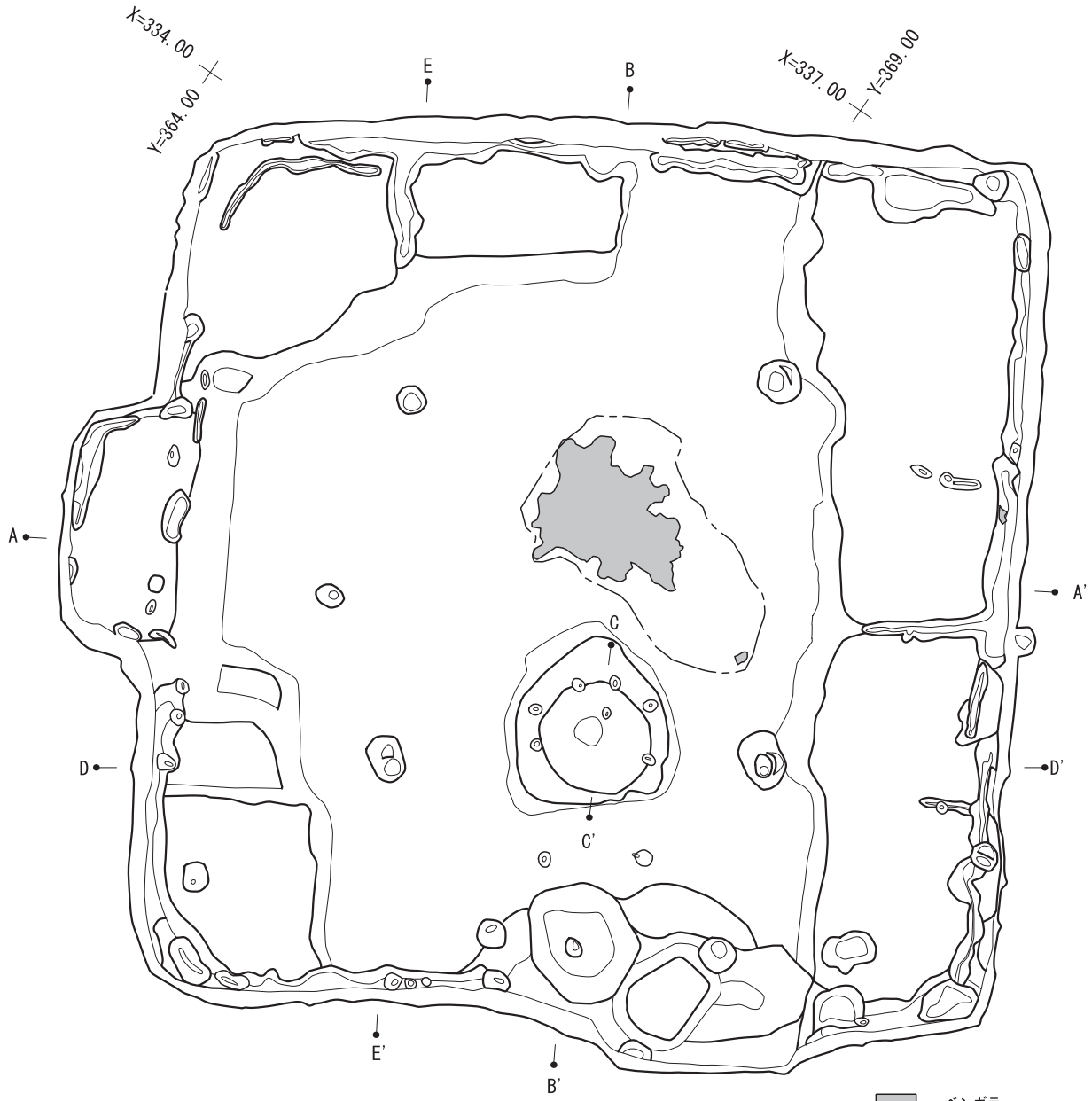


図319　SB152　床面２（1/60）



ベンガラ

硬化面

(A・B 断面)

1　埋1層　黒褐色シルト質　しまり小　粘性小

2　埋2層　暗褐色シルト質　粘土ブロックほとんど含まず　ベルトより中央部に炭化物混　しまり中　粘性小

3　埋3層　暗褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロック混　炭化物含　しまり中　粘性小

4　埋4層　暗褐色シルト質　大きな黄褐色粘土ブロック混　全体的に炭化物多く　黒い土(灰?)がしみのように所々入っている
しまり3より強めの中　粘性中　埋4層中のアミカケは黄色粘土ブロックが集中して入っているところ

5　埋6層　ベンガラで染まった赤い層　シルト質　粘土ブロックはあまり入っていない　しまり大

6　埋5層　褐色シルト質　住居西側に広がる地山(3層)に由来した土らしい。 西側から中央部まで入っていて、東側の
埋土と違う　黄褐色粘土ブロック(大小様々)混　炭化物含　しまり中　粘性中

7　埋7層　暗褐色シルト質　埋4層のような大きな粘土ブロックは入っていないが、数cm位の黄褐色粘土ブロックが全体的に入っており、
しまりは埋4層より弱い(中)が粘性は強い

8　埋8層　黒褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック混　しまり中　粘性大(三角堆積)

0　2m

(C 断面)

1　埋1層　炭と炭の粉々なった真っ黒な層　しまり小

2　埋2層　暗褐色シルト質に灰と炭化物が混ざった層　黄褐色粘土ブロックも少し入っている　しまり小　粘性中

3　貼直した面？　褐色シルト＋黄褐色粘土ブロックでかためてある　しまり中

図 320　SB152　床面 1（1/60）

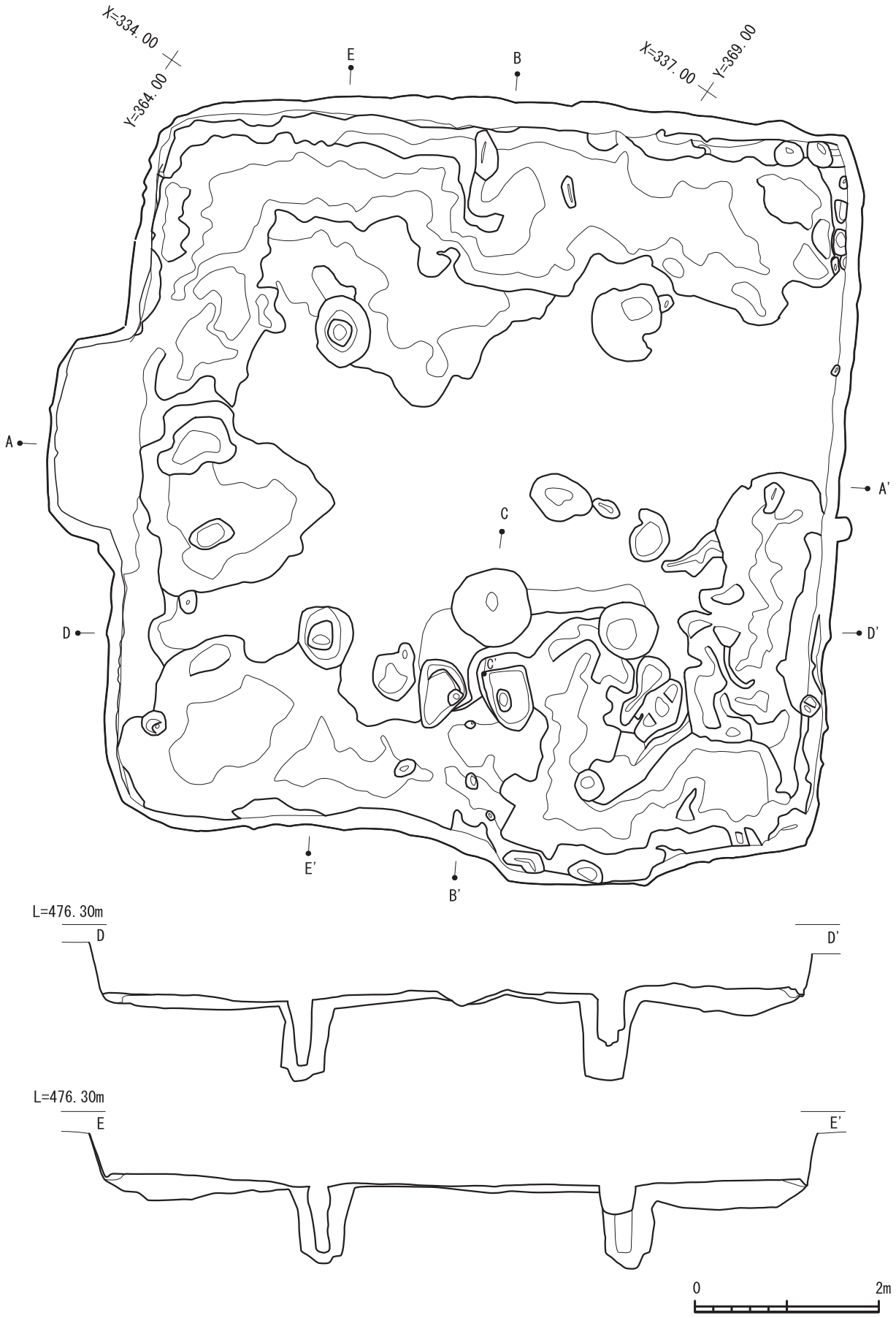


図 321　SB152　掘方（1/60）

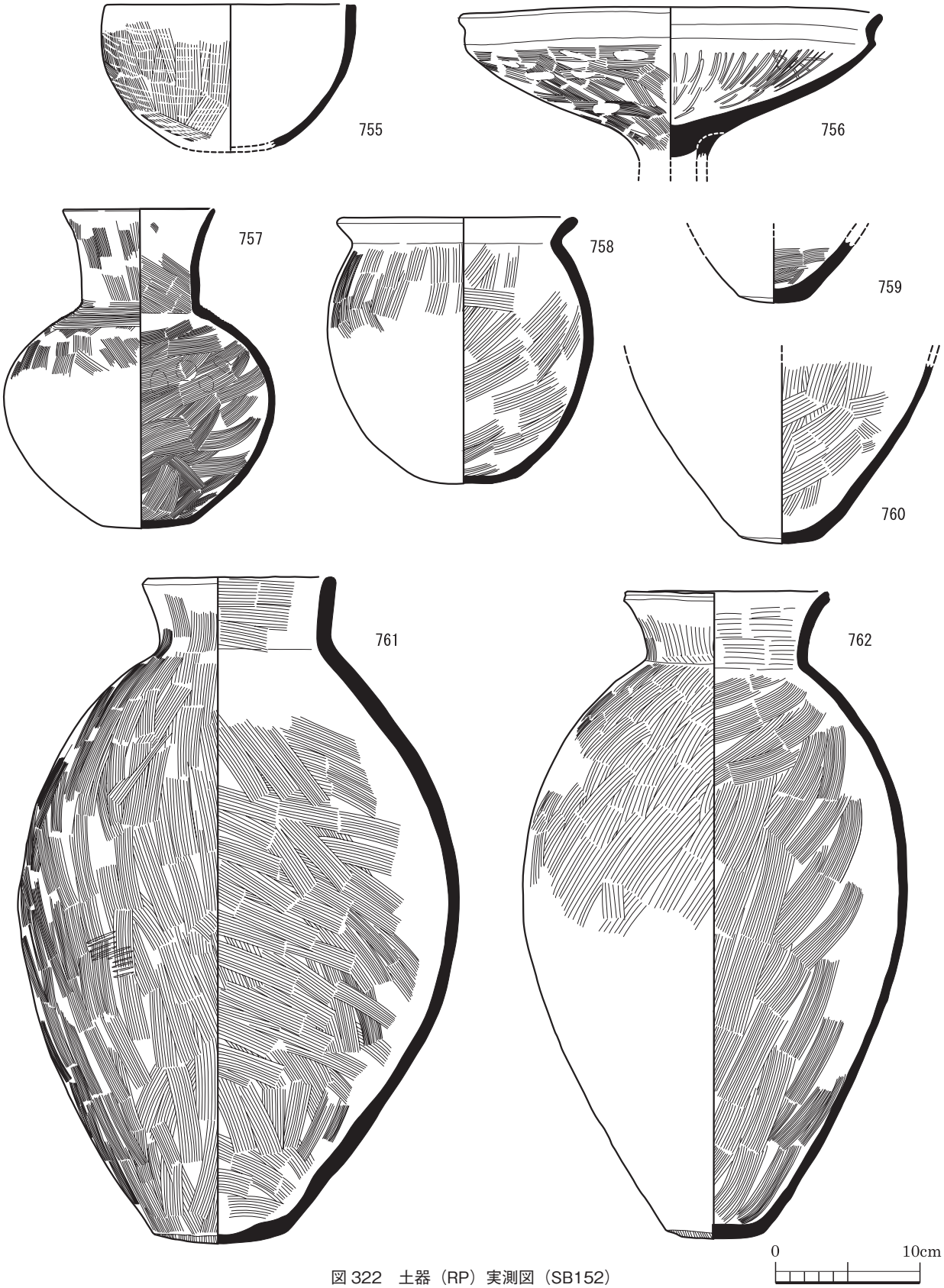


図 322　土器（RP）実測図（SB152）

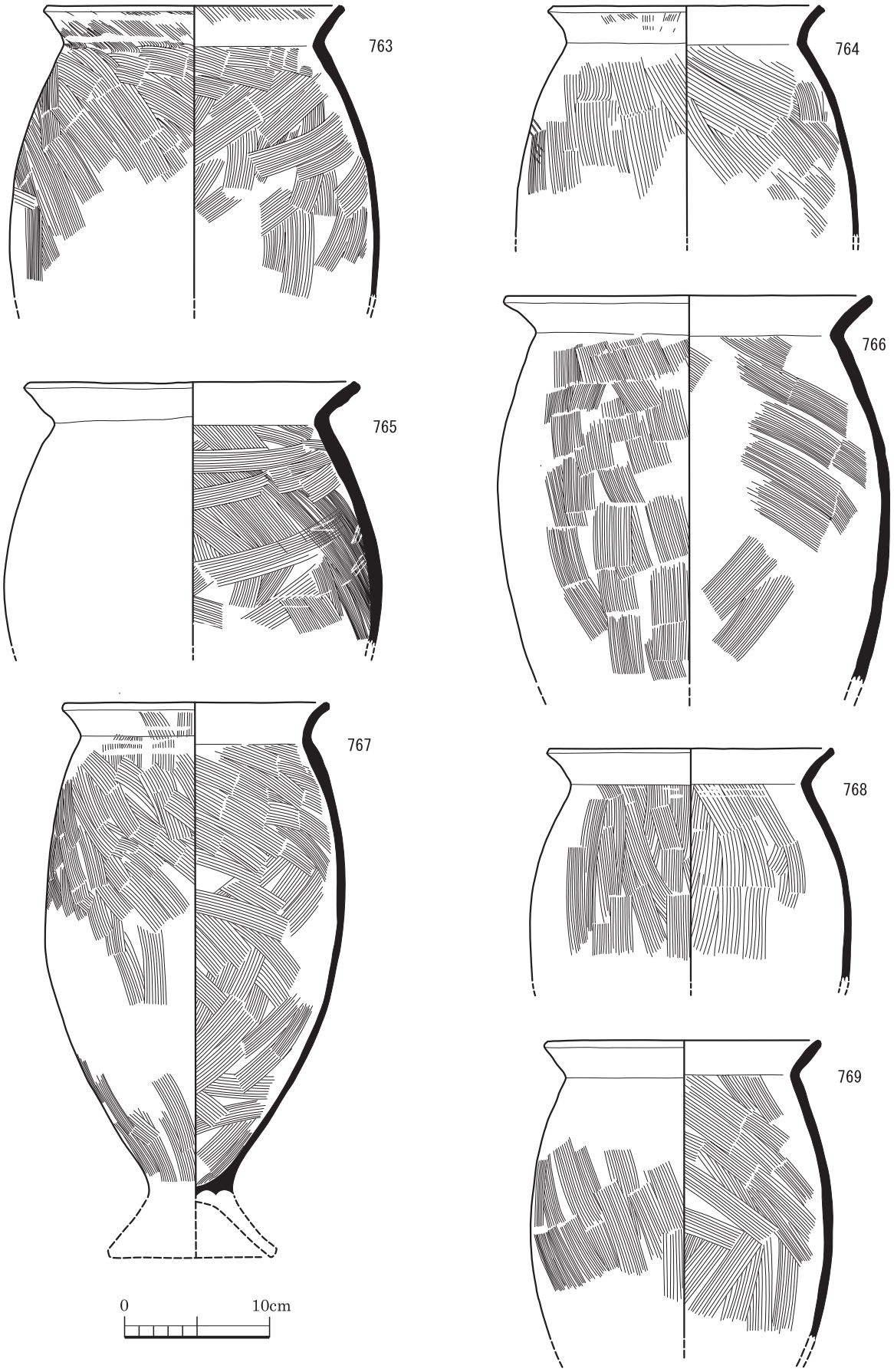


図 323　土器（RP）実測図（SB152）

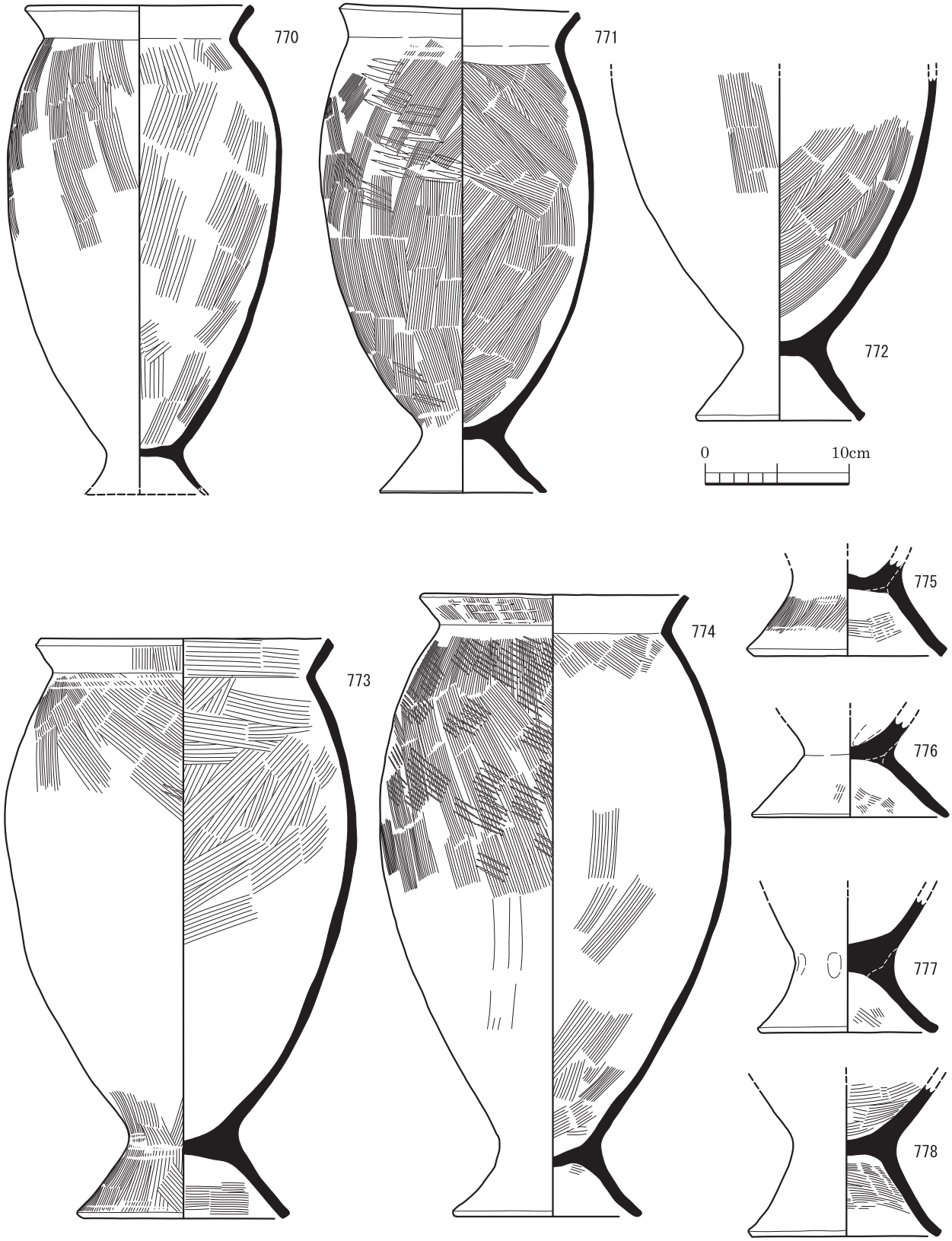


図 324　土器（RP）実測図（SB152）

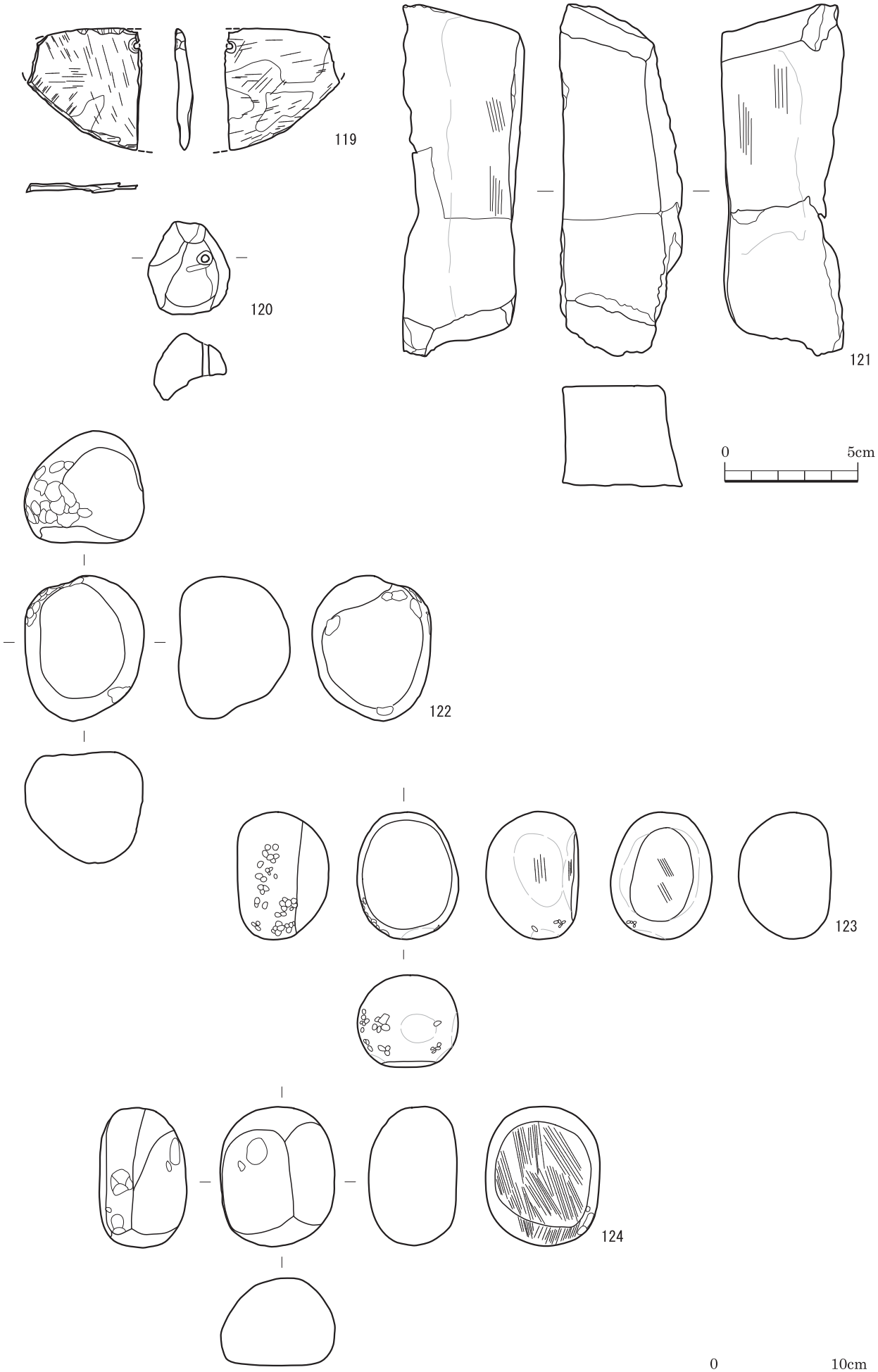


図 325　石器（RQ）実測図（SB152）

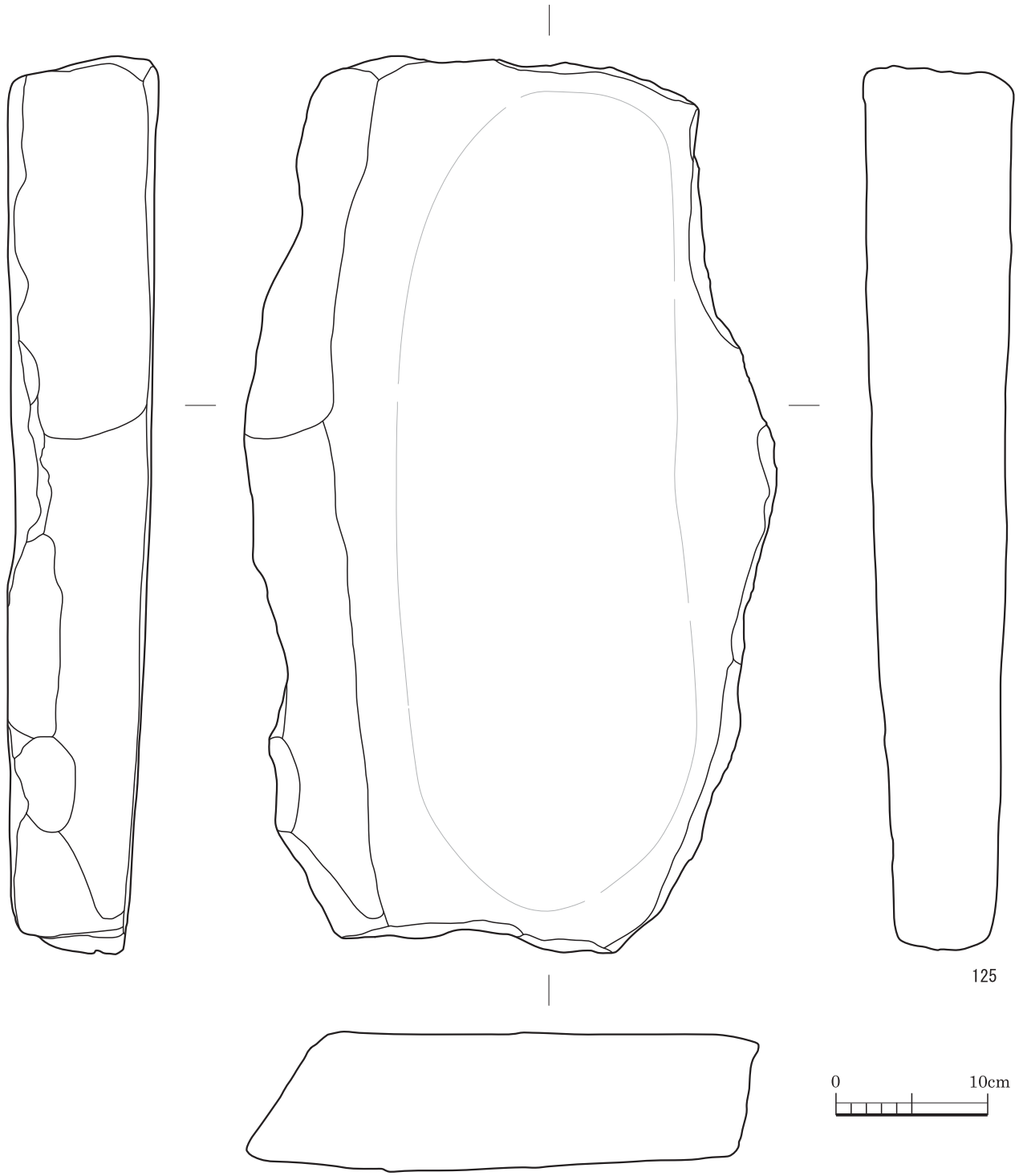


図 326　石器（RQ）実測図（SB152）

この竪穴住居跡は、その廃棄に際してベンガラを散布した状況が検出された。ベンガラは、埋6層に属し、概ね、竪穴住居跡の硬化面と範囲を同じくして分布している。炉の周りに炭、灰が掻きだされた後の堆積であり、内陣全体を包括した広範囲部分の他、東側ベッド状遺構の中央部付近、南西隅のベッド状遺構の上端

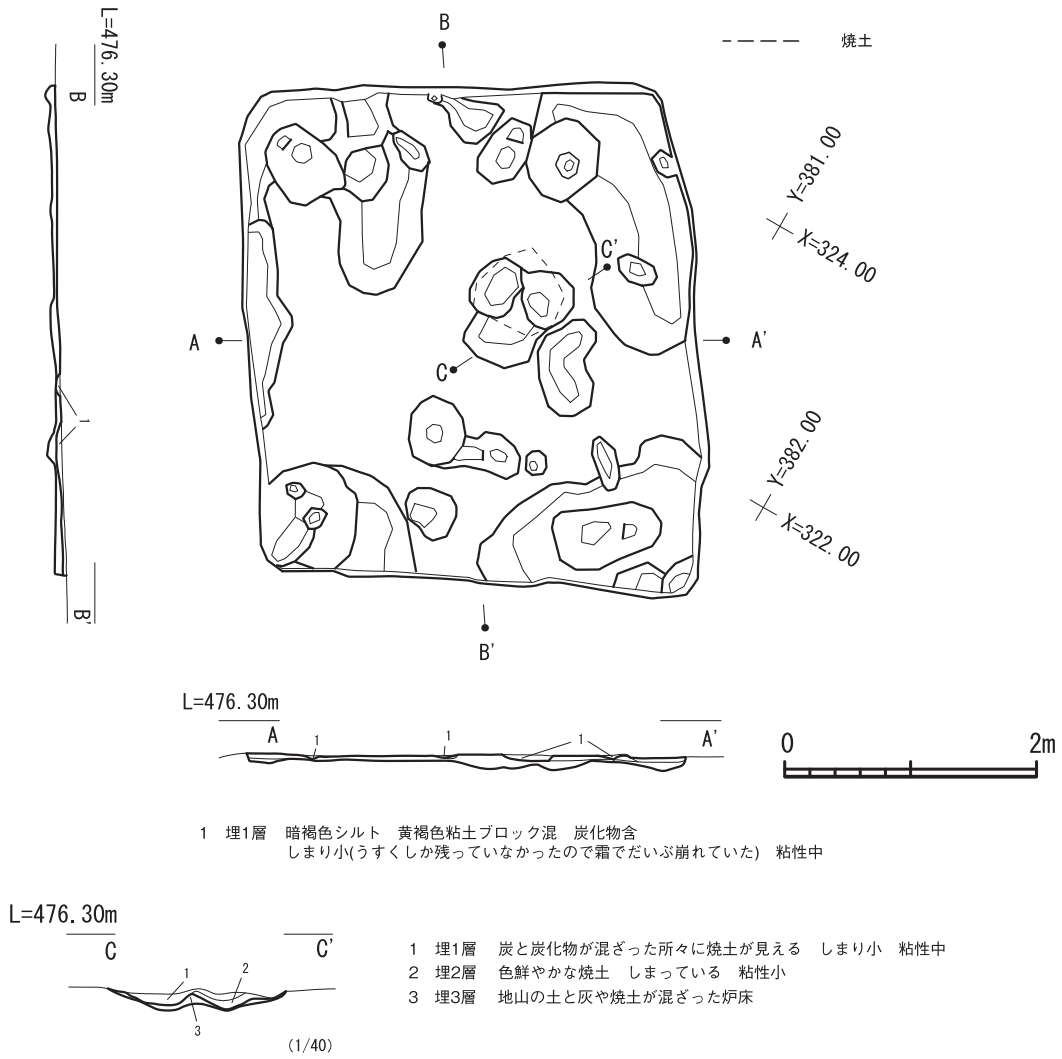


図327　SB154（1/60）

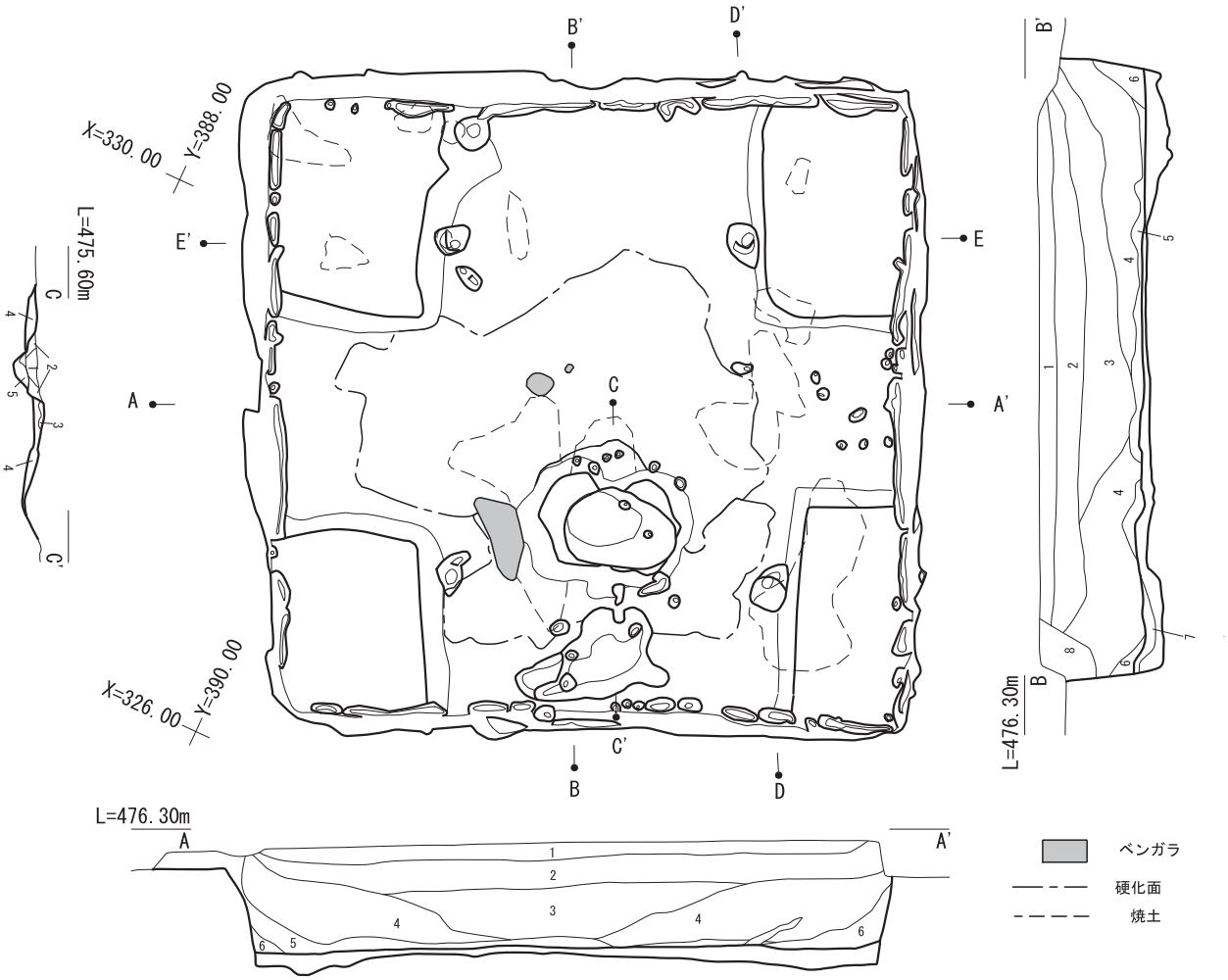
面、その伸長部のステップ部分等、狭い範囲にも部分的な散布がなされている。ベンガラは、床と接した埋土に染み出たような状態を呈しており、あたかも床に塗りつけられたような部分も存在した。なお、竪穴住居跡の内陣部分では、ベンガラ散布の後、焼土層が形成され、その上位には板材を多く含む炭化物が堆積していた。

以上は、SB152において最初に調査された使用と廃棄の状況である。この後、掘方の調査のため床土を除去する際に、その下位から別の床面を検出した。したがって、ここまでの内容を「床面2」としたい。また、以後に記述するSB152の使用と廃棄の状況は「床面1」と記述する。両者の切合関係は、床面1（古）→床面2（新）である。

SB152の床面1の法量は、床面2の計測値に等しく、竪穴住居の規模は同じである。ただし、側壁際では、新たな側壁溝が内側部分にめぐった状況が検出されており、各辺10cm程度縮小した規模と捉えるのがよい、と判断している。

主柱穴は、床面2と同じ2×2の計4基である。各主柱穴を結ぶ内陣には、炉の北東側に硬化面が形成されている。

炉は、床面2の炉と同じ土壙を使用している。周堤部は、貼土を除去することができ、その上端部に6基、炉穴内北側に1基の小ピットが穿たれた新たな状況が検出された。炉の周囲からKピット北端までに位置した三



1　埋1層　黒色シルト質　しまり弱めの中　粘性中
2　埋2層　明褐色シルト質　炭化物含　しまり中　粘性中
3　埋3層　暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック混　炭化物含　しまり強めの中　粘性大
4　埋4層　明褐色シルト質　黄褐色、黄土粘土ブロック多量混　炭化物も埋3層より多く含　しまり大　粘性大
5　埋5層　明褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック混　炭化物多量含　焼土もあり　しまり小　粘性大-シルト質
6　埋6層　黒褐色シルト質　黄過食粘土ブロック少量混　しまり中　粘性大
7　埋7層　貼床？
8　埋8層　明褐色シルト質

図 328　SB155　床面（1/60）

和土台は、貼床部分がはがされ、シンプルな床面となっている。

Kピットは、床面2と同じ土壙、柱穴を使用している。ただし、土壙は整った五角形を呈し、その底は方形平坦面に変化している。Kピットの東側には、平面形が方形を呈する台が南側壁の張出し部と複合して設置される。この上端面は硬化しており、ステップとして用いられたもの、と判断している。

ベッド状遺構は、床面2とは異なる様相を示している。北側壁に中央に存在した1段高いベッド状遺構は失われ、その範囲では新たな床面が検出された。南西隅、南東隅には小規模な土壙、溝が位置し、ベッド状遺構の規模が縮小している。北東隅、北西隅にも内側の側壁溝が検出され、同様にベッド状遺構の規模が縮小した状態である。さらに、北西隅のベッド状遺構の東端部、北東隅のベッド状遺構の南端部、南東隅のベッド状遺構の北端部に相当する各部分では、溝が検出され、各隅のベッド状遺構の原形が理解しやすい状況へと変化

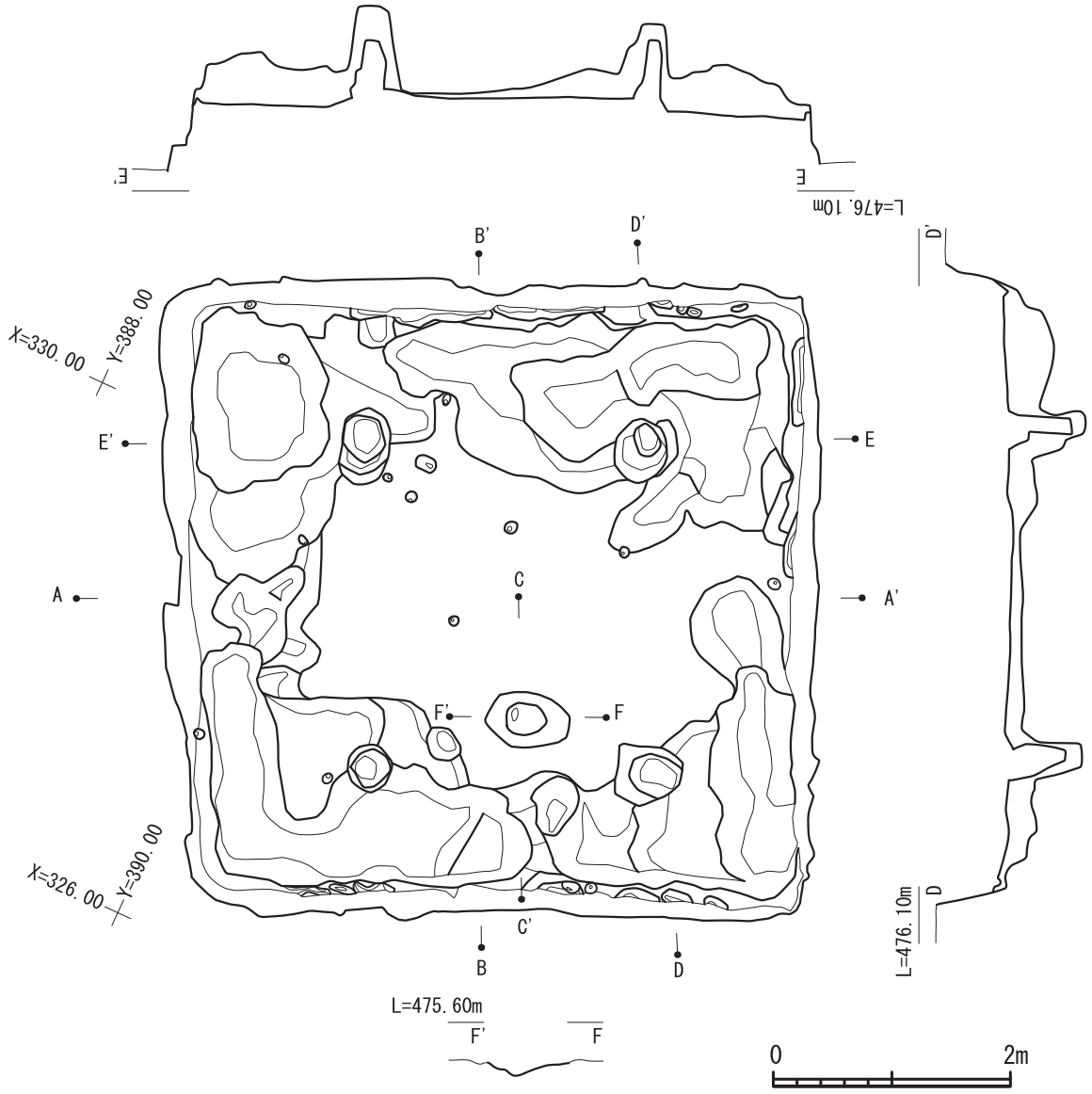


図 329　SB155　掘方（1/60）

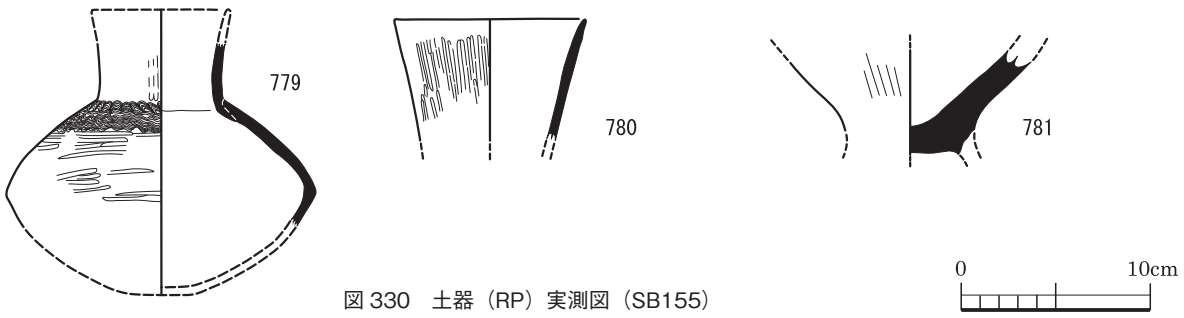


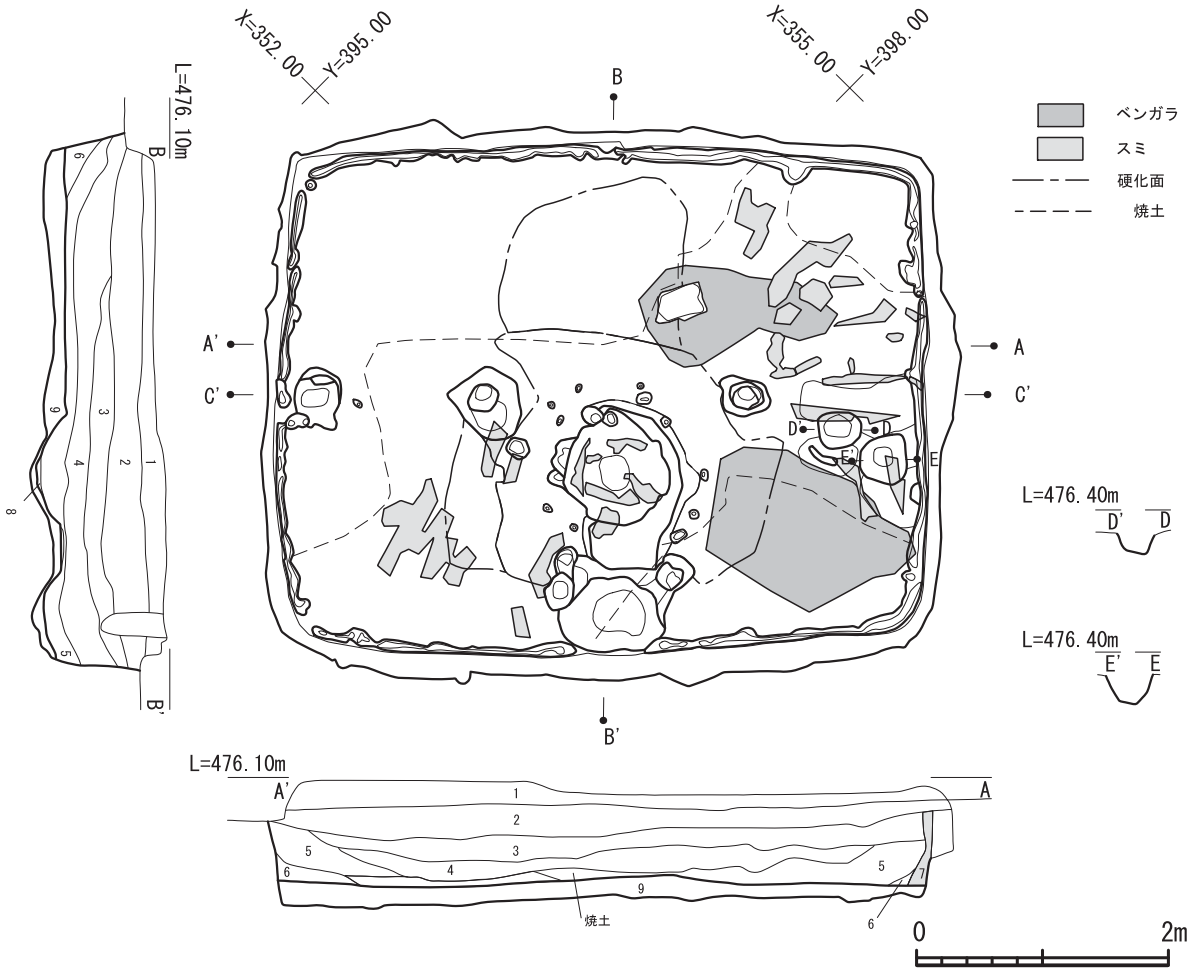
図 330　土器（RP）実測図（SB155）

した。

西側壁の張出し部では、西側壁南半部の側壁溝に連なる位置に、側壁溝が検出され、当該張出し部は床面1には伴わない可能性が高いことを示している。南側壁の張出し部では、前述のとおりステップとすることができる台部分が複合して存在しているため、床面1に伴うもの、と判断できよう。

炉の北側では、炉とほぼ同規模大の範囲で、鮮やかな色調のベンガラが検出された。ベンガラは硬化面の上に散布されており、硬化面の端部にも小範囲で位置している。

床面2の貼床は、竪穴住居中央部では全体的に薄く除



1　2a層　（包含層）
2　埋1層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　※同じ黒褐色シルトだが、1よりしまりあり　色調も明るい
3　埋2a層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(1cm大)混　小さい炭粒が時折含まれている　しまり中　粘性中
4　埋2b層　黒褐色シルト　黄褐色シルトブロック(0.5～3.4cm)混　小さい炭粒が入るが5のように層状に入ることはない　しまり中　粘性中
5　埋3層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(0.5～3.4cm)混　4と5の層境に炭を層状に含んでいる　床面直上には焼土層
焼土・暗褐色シルトが混じって入っているので焼土も埋3層となっている　しまり中　粘性中
6　埋4層　黒色シルト　黄褐色シルトブロック(0.5～2cm)混　シルト層の色は炭・灰に起因する黒色ではない　しまり中　粘性中
7　埋5層　暗褐色シルト　黒褐色シルトブロック(3cm大)混　側壁溝からそのまま立ち上がるように壁に沿って炭化物が入っている
炭化物は板、丸材などの判別ができない　しまり小　粘性中
8　炉埋土1層　黒色炭・炭化物層　炭化物層除去後、図面にならないほどの薄さで黄褐色シルトブロック混の黒褐色シルトが貼りついている
これはそのしまり具合からしても貼床ではない　しまり小　粘性中
9　貼床

図 331　SB156　床面（1/60）

去することができた。縁辺部では、ベッド状遺構、炉南側の三和土台等、設備部分の貼床が厚く除去され、ベッド状遺構の上端面等では、床面と同様に薄く除去することができた。

以上が床面2の使用と廃棄の状況である。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、北辺、南辺に沿って溝を切り、東西2基の土壙を連接させている。南東隅の土壙から北に向かい、北西隅の土壙からは南に向かい溝が伸びているが、対辺には至っていない。西側壁の張出し部の前面には、方形土壙が掘削されている。南側壁の張出し部には、方形土壙等、新たな掘削痕を認めることができない。強いて言ったとしても、その前面に幅の狭い溝が付加されている可能性が指摘できる程度であろう。炉の南半部にも掘削が及ぶが、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方における土壙、溝の複合体は、主なものは1組を見出すのみである。最深部は、床面から約30cmの深度である。

上部構造である、床面1、床面2と対比させると以下のとおりである。

床面1における炉、ベッド状遺構、Kピットを基本構造として、床面2は形成されている。側壁は外部に向か

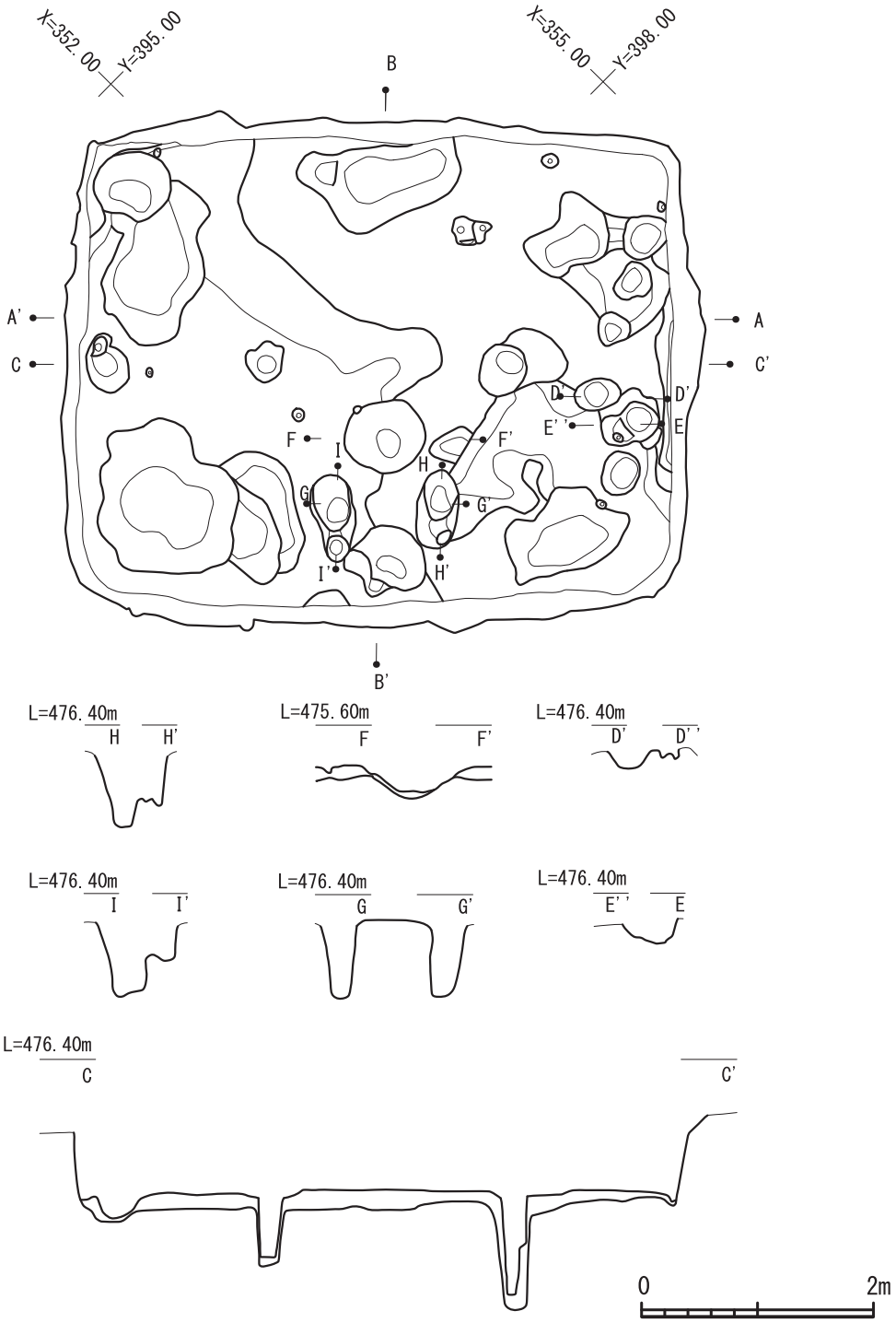


図 332　SB156　掘方（1/60）

い掘り進められ、炉、ベッド状遺構、床には貼土が重ねられる。中には三和土台、高いベッド状遺構、新設備が設けられる部分もあるが、基本は貼土を付加することに変わりない。新たな掘削を伴う竪穴住居の改変は、張出し部にのみ求めることができる。したがって、SB152における竪穴住居の改築は、基本的には内装更新の範囲に収まるもの、と判断することができる。

SB153

SB153は、方形を呈する竪穴住居跡である。SB150と切り合うが、SB150（古）→SB153（新）である。後代に削平され、北東隅のみ調査することができた。

SB153の法量は、南北は4.6ｍを、東西は2.2ｍを確認し、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴、炉、Kピット、ベッド状遺構等、竪穴住居の設備は確認していない。調査部分はベッド状遺構の

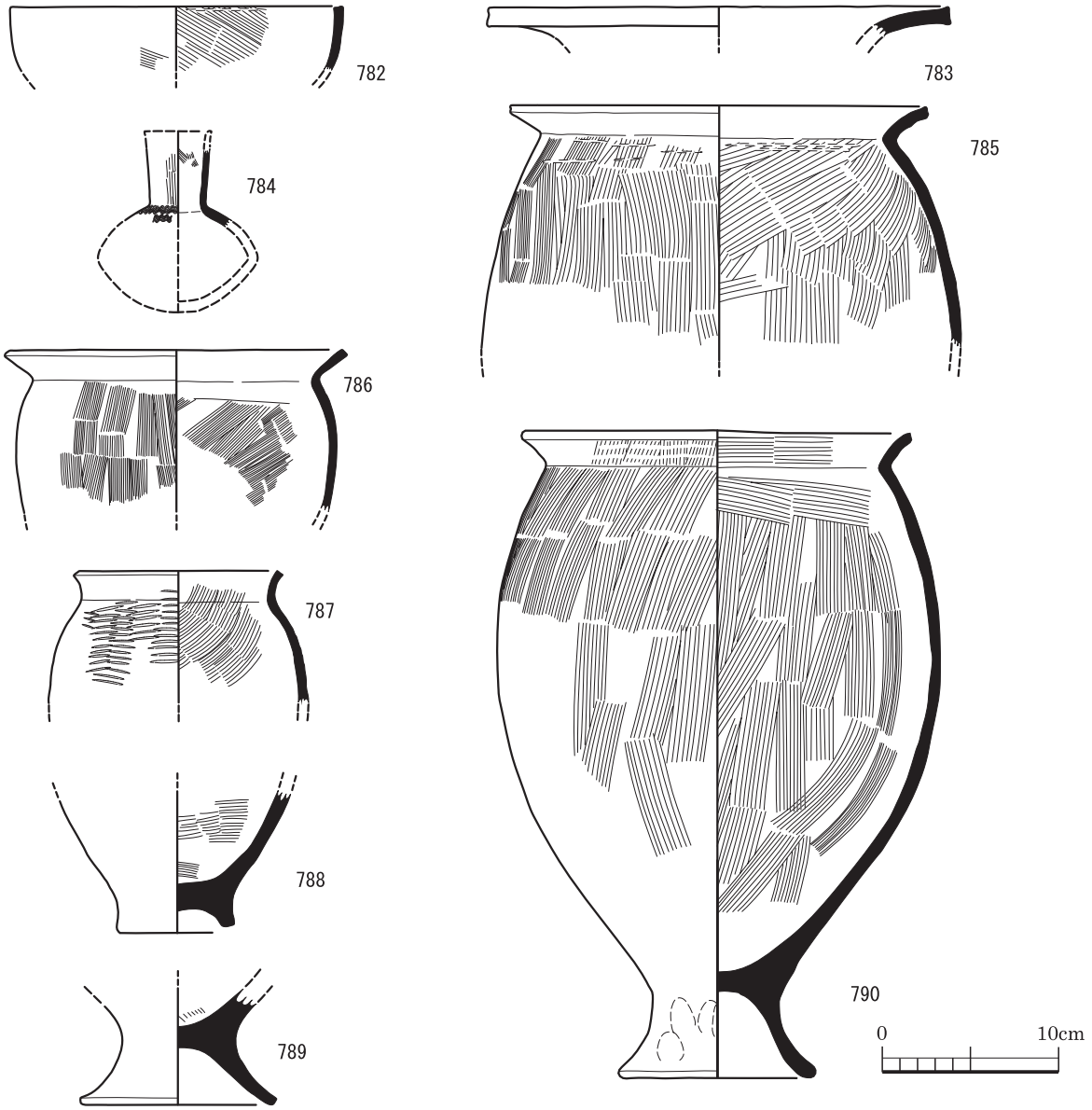


図 333　土器（RP）実測図（SB156）

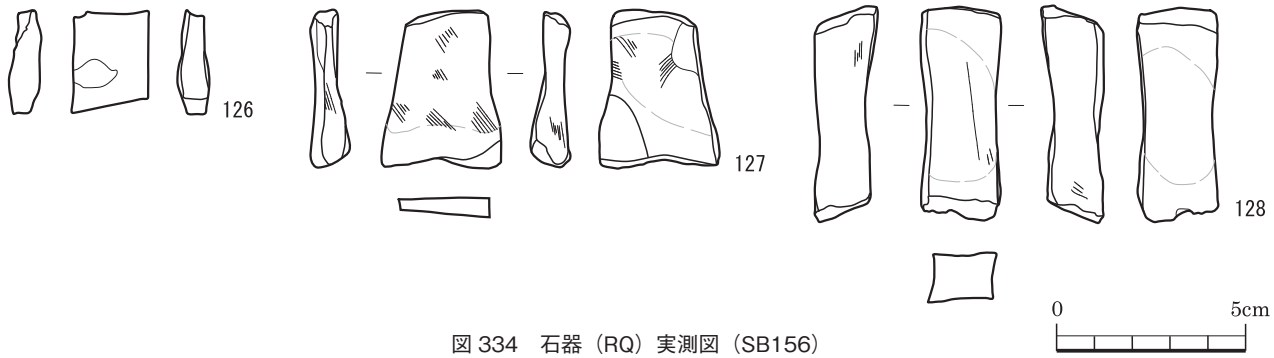


図 334　石器（RQ）実測図（SB156）

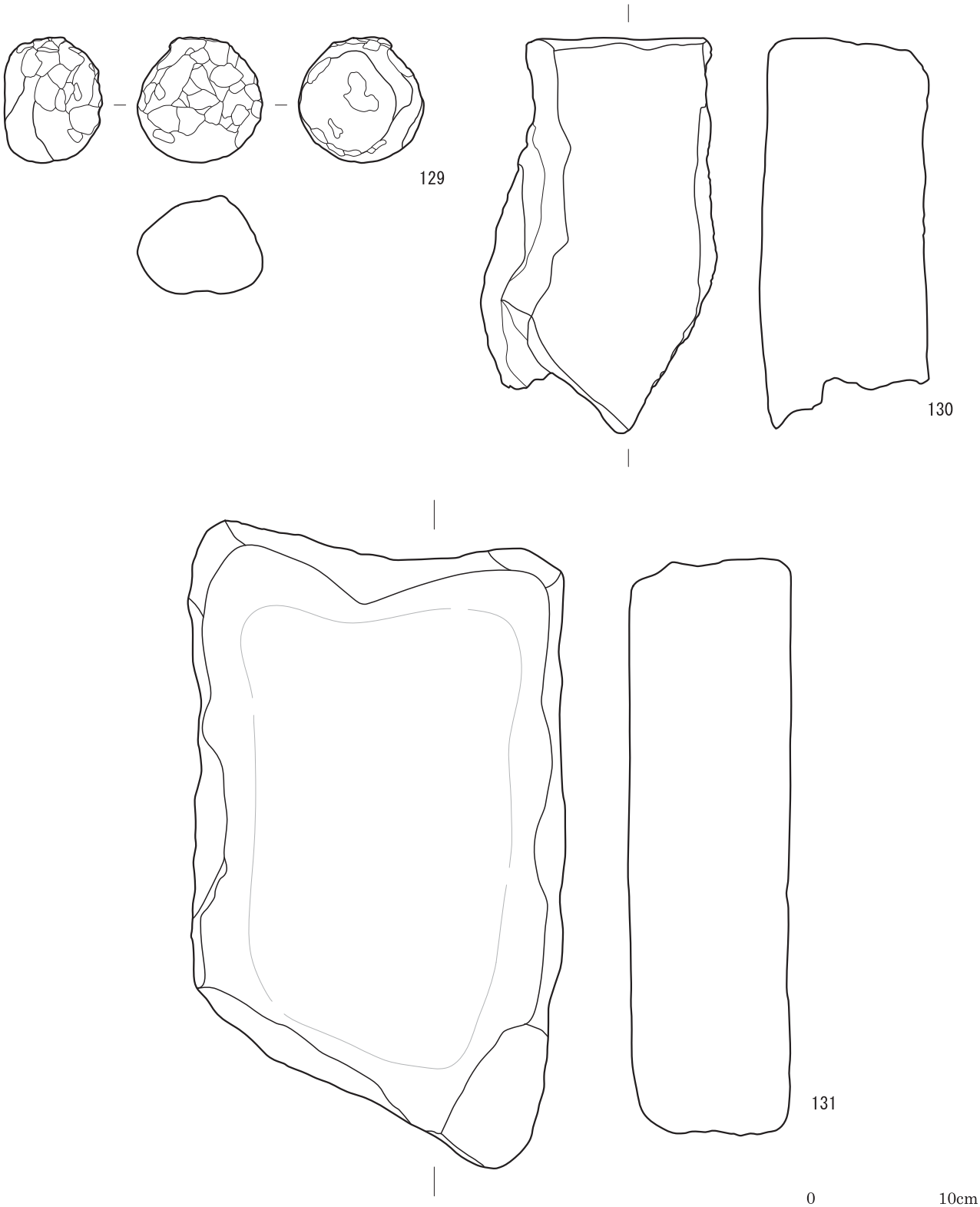
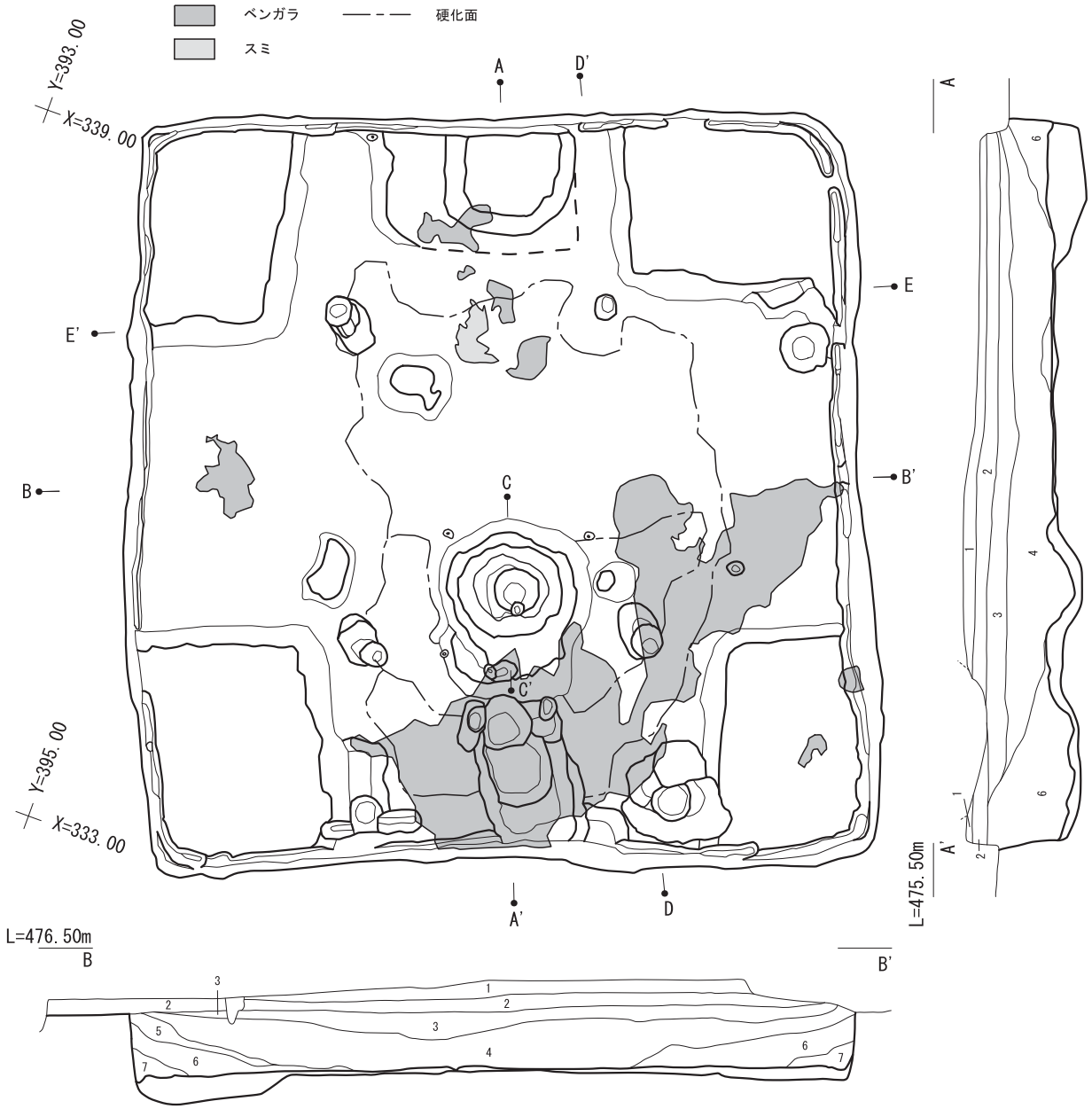


図 335　石器（RQ）実測図（SB156）



1　埋1層　黒褐色シルト　しまり小　粘性小　ボサボサしており耕作土と考える
2　埋2a層　暗褐色シルト　しまり中　粘性小　埋2b層と埋1層の混合層で深耕部分と考える
3　埋2b層　褐色シルト　しまり中　粘性小
4　埋3層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ2cm<)　炭を含む
5　埋4a層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ8cm>の大きいもの含む)含む
埋3層よりロームブロックの数多くなる
6　埋4b層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　黄褐色ロームブロック(φ2cm≒)含む
埋3層に似るが埋3層よりロームブロックの数が多い
7　埋5層　黒色シルト　しまり弱　粘性大　壁際の三角体積

1　炭の中に焼土を含む　炭：焼土=8：2程度
焼土は中心部より八方に広がり薄くなる
しまり弱　粘性小

図 336　SB157　床面（ 1/60 ）

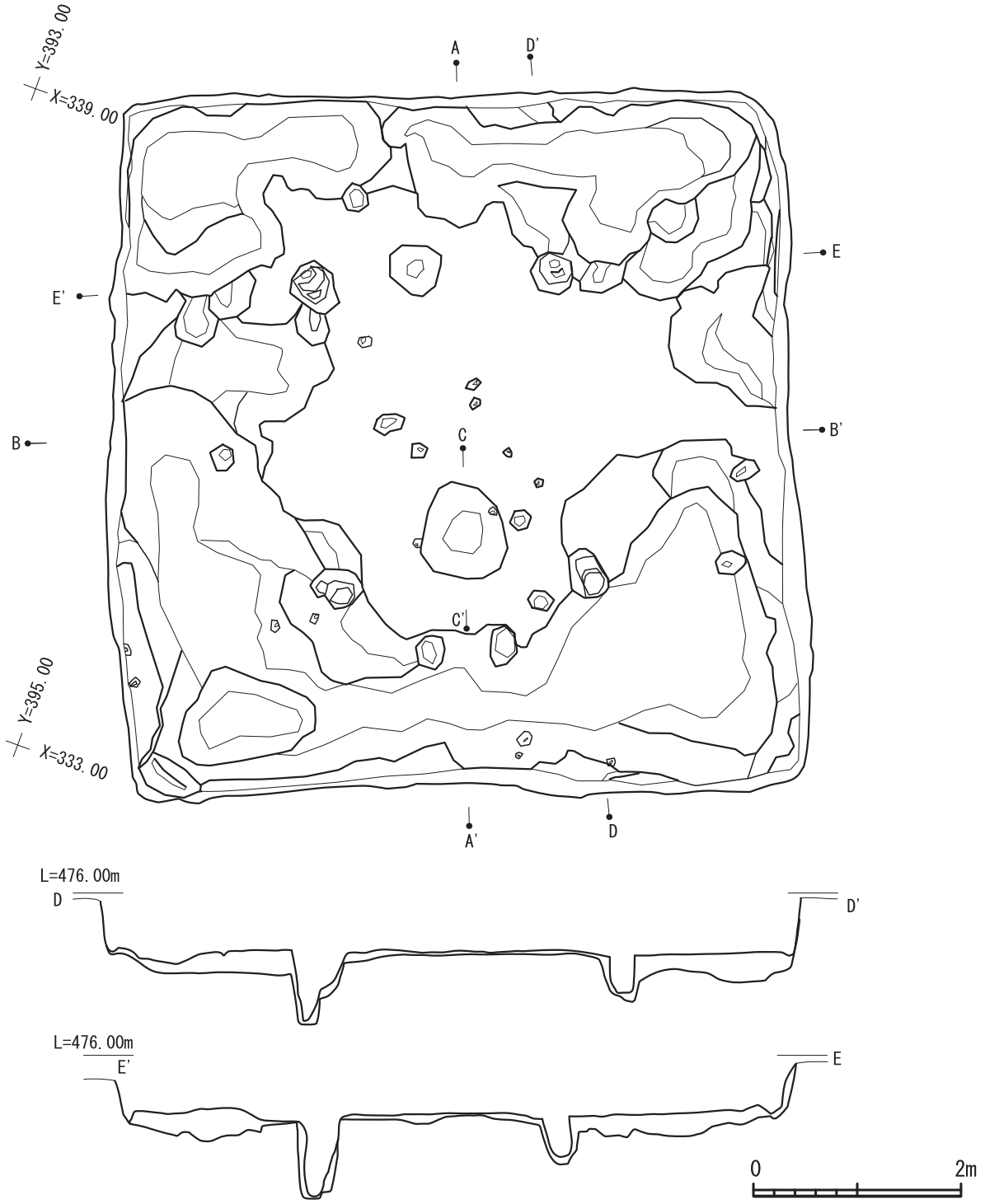


図 337　SB157　掘方（1/60）

上端面の可能性が高いが、その確証を得ていない。北側壁に側壁溝1条を確認したのみである。

床は、貼床である。

掘方は、底面が平らに整えられていた。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB154

SB154は、正方形を呈する竪穴住居跡である。炉を備える。

SB154の法量は、南北3.9 m、東西3.6 m、遺構確認面からの深さ3cmを測る。

主柱穴は、確認していない。硬化面は、竪穴住居の中央部付近に形成されている。

炉は、南北70cm、東西60cmの不整形を呈し、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の中央に位置し、3基の土壙が複合している。炉内とその周辺では焼土が検

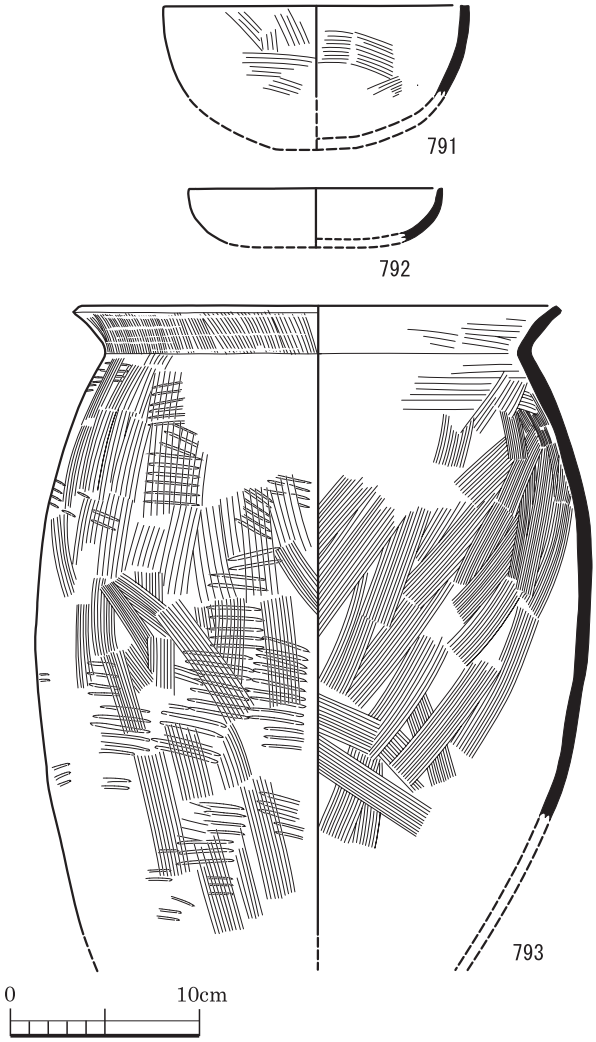


図 338　土器（RP）実測図（SB157）

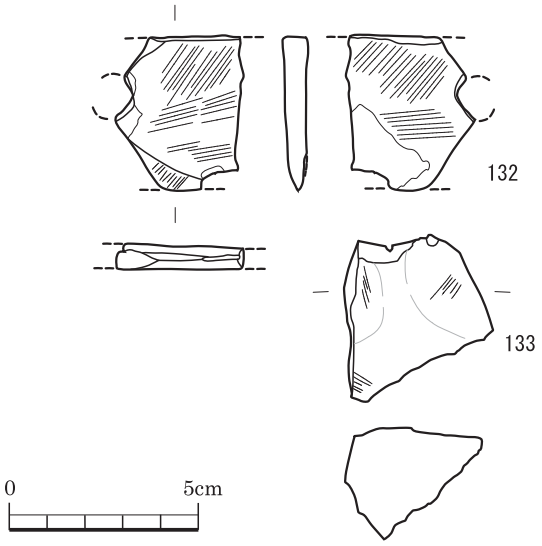


図 339　石器（RQ）実測図（SB157）

出された。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部の炉の周囲では厚く、その他の部分では均一に薄く貼られている。

SB155

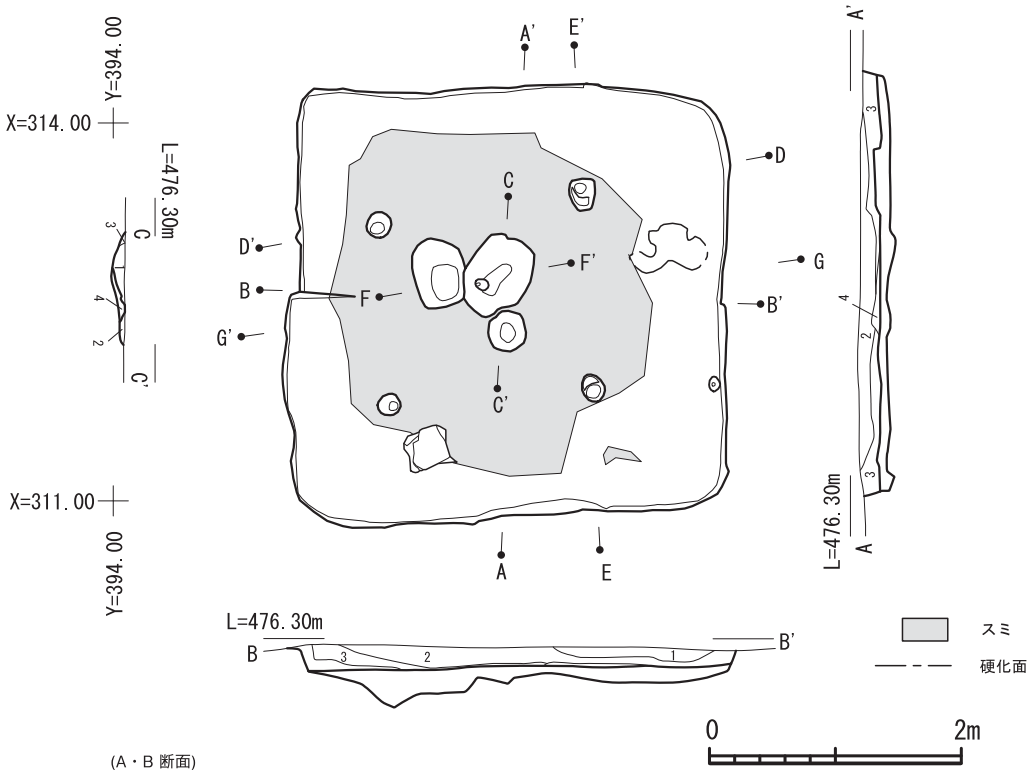
SB155は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。なお、「銅釧」が出土した。

SB155の法量は、南北5.3 m、東西5.3 m、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、西部で発達し、南部ではKピット北端にまで形成されている。

炉は、南北50cm、東西70cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅10cm程度の平坦面を備えて形成される。この平坦面部分は、基本土層4層の黄褐色粘土を用いて造られており、その厚さは5cm以上10cm未満である。周堤は、北部で平坦面が狭隘なものとなり、20cm程の幅が途切れている。炉の外部には、周堤に沿って炭が掻き出されていた。また、周堤外部には、周堤に接して小ピットが6基穿たれている。炉穴には、炉壁と炉底に各1基、合計2基の小ピットが穿たれ、2段目の炉穴内には炭化材が多量に包含されていた。炉の周囲、炉内上層にも炭化物は含まれるが、いずれも「材」と認識できるほど残存度が高くはない。炉の内外における炭化物のありようが対照的な例である。

Kピットは不整な方形を呈し、南側壁に近く、竪穴住居の東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。不整な方形は、Kピットの側壁が斜面となっているためであり、整理すれば正方形に近い方形が本来の形態として認識できる状況であっ



(A・B 断面)

1　埋1a層　暗褐色シルト　ごくわずかに炭を含んでいる　しまり中　粘性中

2　埋1b層　暗褐色シルト(1より暗い)　炭粒が入っているが層状ではない　しまり中　粘性中

3　埋2層　黒褐色シルト　黒色の炭・炭化物層が形成されているのが埋2層上面　しまり小(炭化物が多いため)　粘性中

4　焼土層　炉に起因する焼土層　橙色シルト層　焼土が層状に堆積している
炭混　しかし、住居址埋2層のほうがむしろ炭を多く含んでいる　しまり中　粘性中

(C 断面)

1　炉埋土1層　橙色シルト層　焼土が層状に堆積している　炭混
しかし、住居址埋2層のほうがむしろ炭を多く含んでいる　しまり中　粘性中

2　炉埋土2層　橙色シルト層　区切れているが炉埋土1層とほとんど同じ埋土で焼土が層状に堆積している
シルト、焼土、炭などが混じらず「層状」に堆積していることから、かき出しではない
しまり中　粘性中

3　炉埋土3層　黒褐色シルト　炭混　硬化しておらず、また、貼床ではない　流入土？
しまり中　粘性中

4　貼床　(焼土が凹部に入っていたり染みこんでいたため掘削)

図 340　SB158　床面（1/60）

た。なお、Kピットの西側には、浅い土壙が付設され、1段高いテラス部の様相を呈している。

ベッド状遺構は、東西南北の各隅に長方形を呈して設置されている。各ベッド状遺構は南北方向に長辺を置き、伸長、連接することなく、独立して設えられている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

SB155にはベンガラが散布されていた。ベンガラは、炉と南西主柱穴の間に散布され、内陣内中央部付近に、小規模なブロックが2箇所で検出されている。このベンガラは埋4層の上面に位置し、その直下からは焼土、炭化物が竪穴住居跡全体で検出されている。焼土、炭化物は、炉の周囲を中心として竪穴住居跡南半部に集中し、一部が北西隅、北東隅のベッド状遺構部分にも分布している状況である。この南半部の焼土、炭化物の集中範囲周端部にベンガラが位置する関係が読み取れよう。炭化物は2種を確認した。1種は炭化材であり、竪穴住居跡の中心部から縁辺部に向かい放射状に検出されている。この炭化材は、板材が多く、丸材は垂木

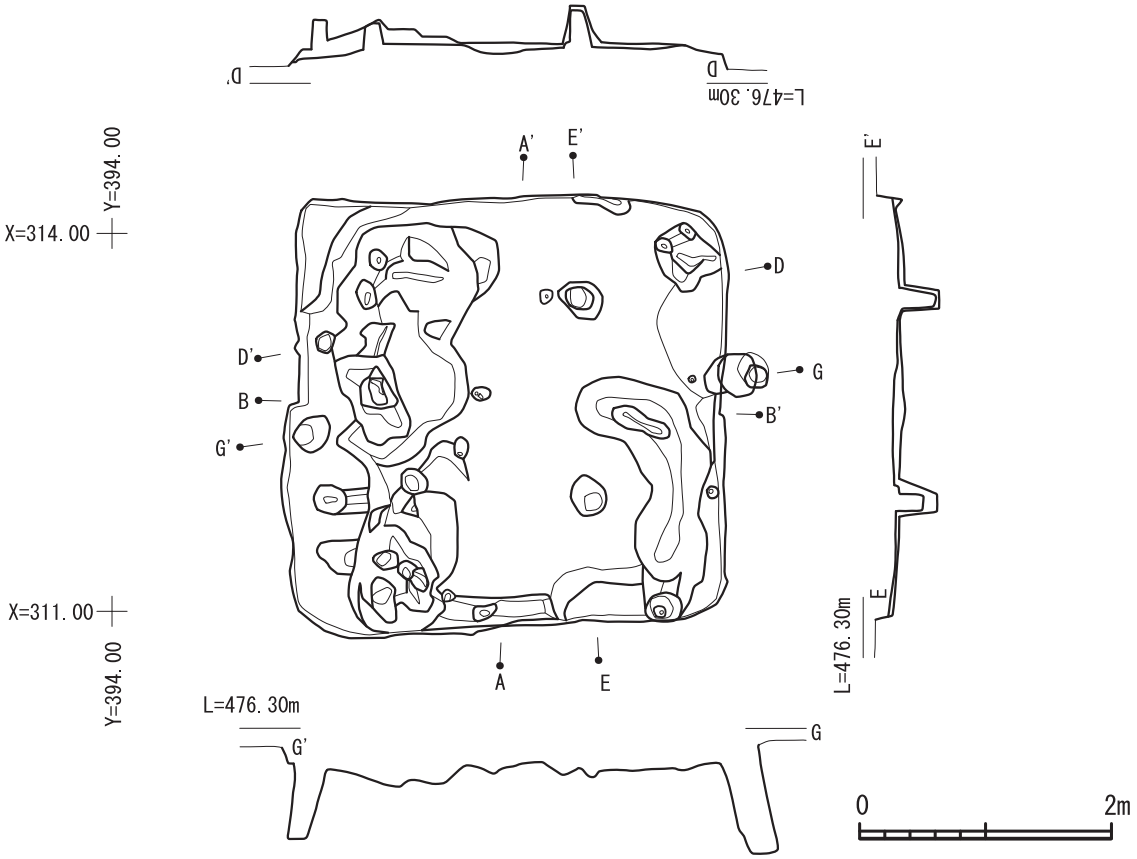


図341　SB158　掘方（1/60）

程度の太さに収まる。竪穴住居跡の西半部にのみ分布し、炭化材の直下には焼土が位置している。側壁付近の炭化材は、壁側が上位に、内陣側が下位を採る傾きであり、焼土を直下に伴う。また、その下位には壁際の三角堆積が位置している。炭化物の残り1種は、萱材に近似した炭化材である。調査員、作業員が肉眼観察し「萱と同じ」と判断した。これは竪穴住居跡の南西部、床面から南西隅のベッド状遺構にかかる範囲で検出された。20cm程度の長さの「萱」が、幅10cm程度を単位として茎部が束ねられ、その単位が様々な方向を向いて3層程度に積み重なっていた。各単位の厚さは、せいぜい3条程度であり、非常に薄いものである。以上2種の炭化物は、屋根とは判断していない。木材痕を留める種類は放射状の配置を採るが、横位を採る構造材を持たず、累重して風水を流す構造にも欠けるからである。また、「萱」は屋根を葺くには厚さに欠ける。仮に、土屋根が採られていたとしても、土屋根に相当する層が確認されておらず、焼土は炭化材の直下と上下反転した位置関係を示してしまうこととなる。むしろ、SB155の状況は、土壙内で焚き火をする際に周囲から薪をくべる状況に近似している、と判断している。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。東辺では溝が伸びきらず、土壙が連接していないものの、北東隅、南東隅の両土壙から対辺を指向した状況は確認できよう。不完全ではあるがロ字形の掘方である、と評価できる。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB156

SB156は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピットを備える。

SB156の法量は、南北4.4m、東西5.4m、遺構確認面

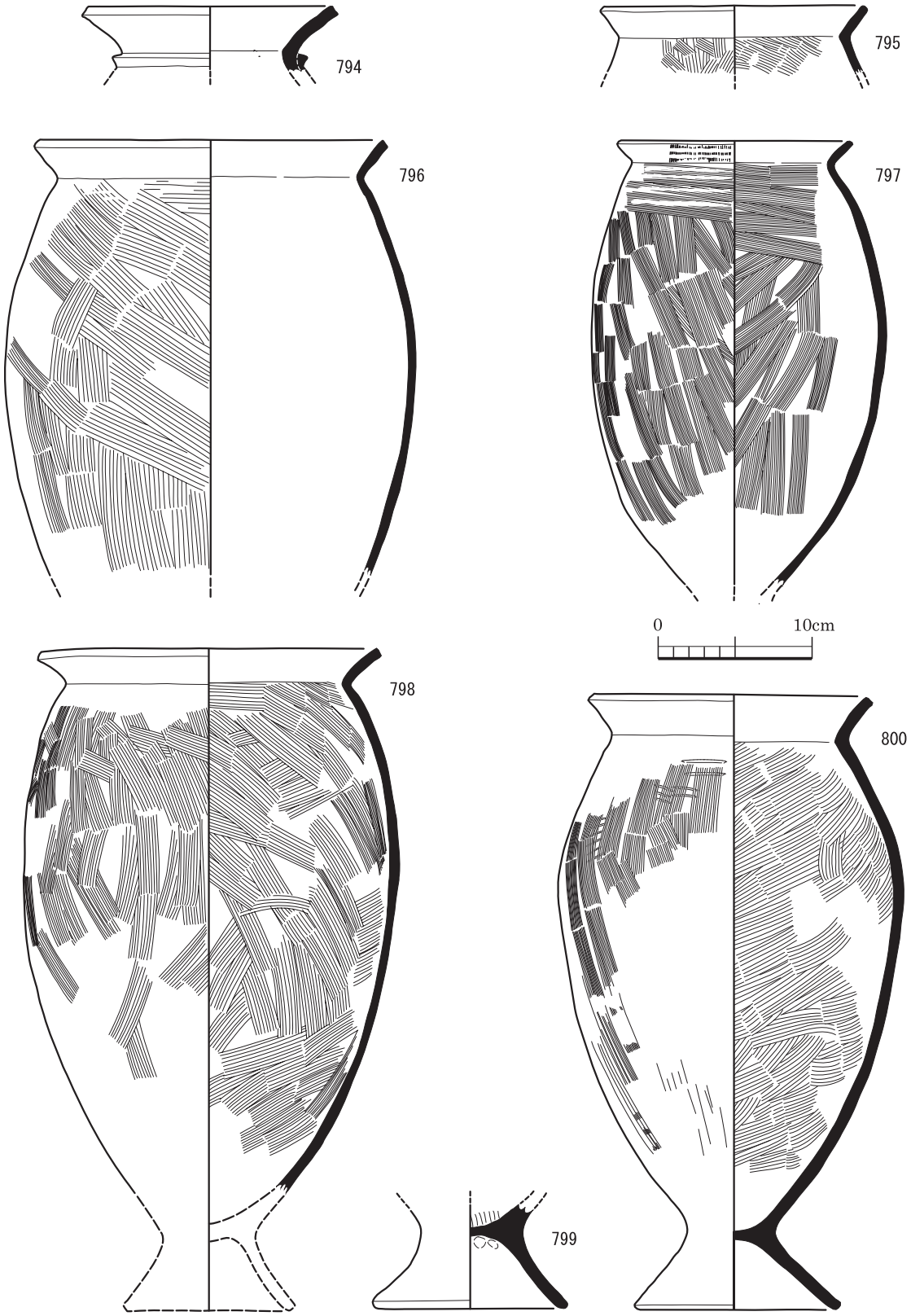


図 342　土器（RP）実測図（SB158）

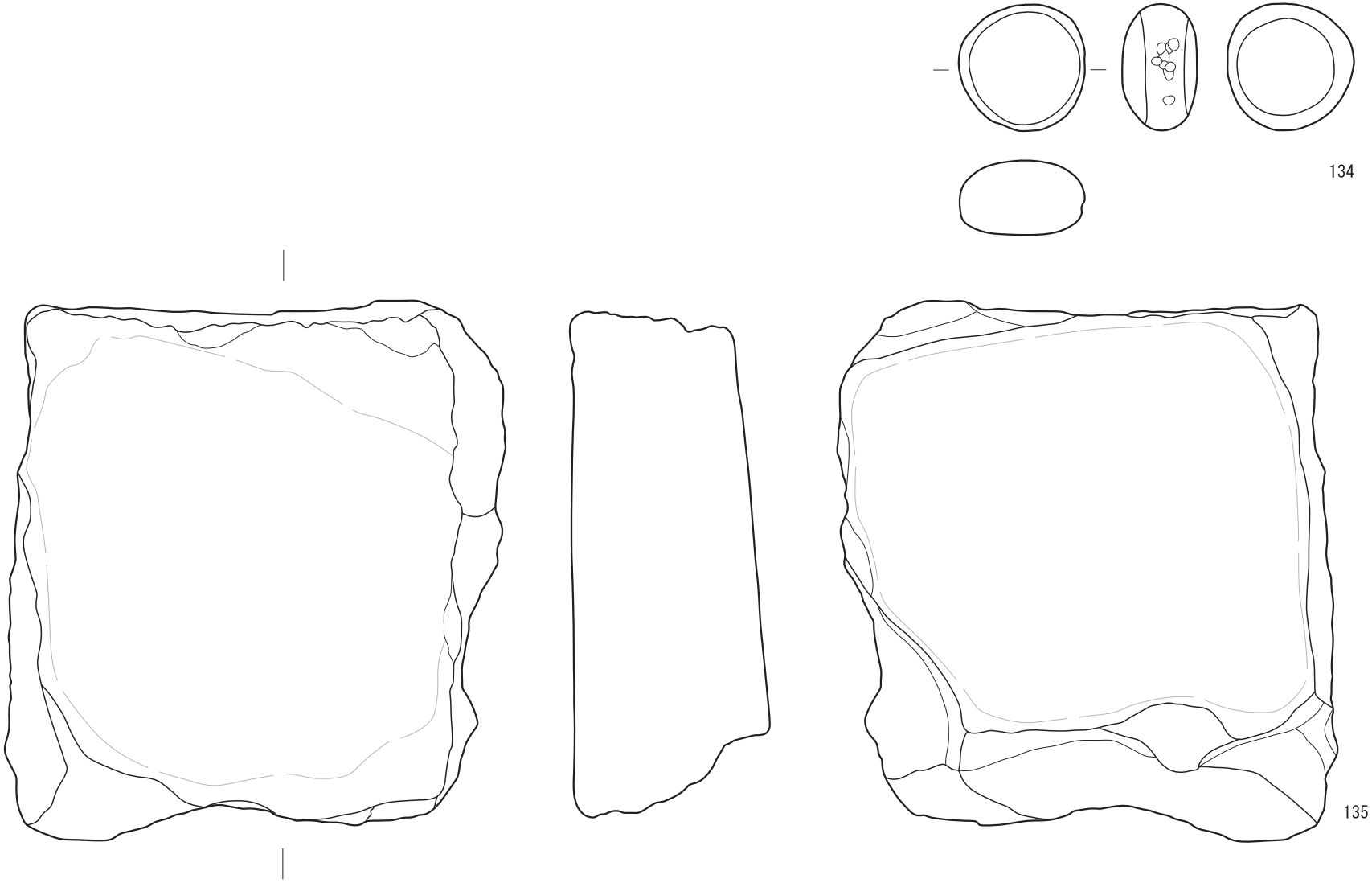
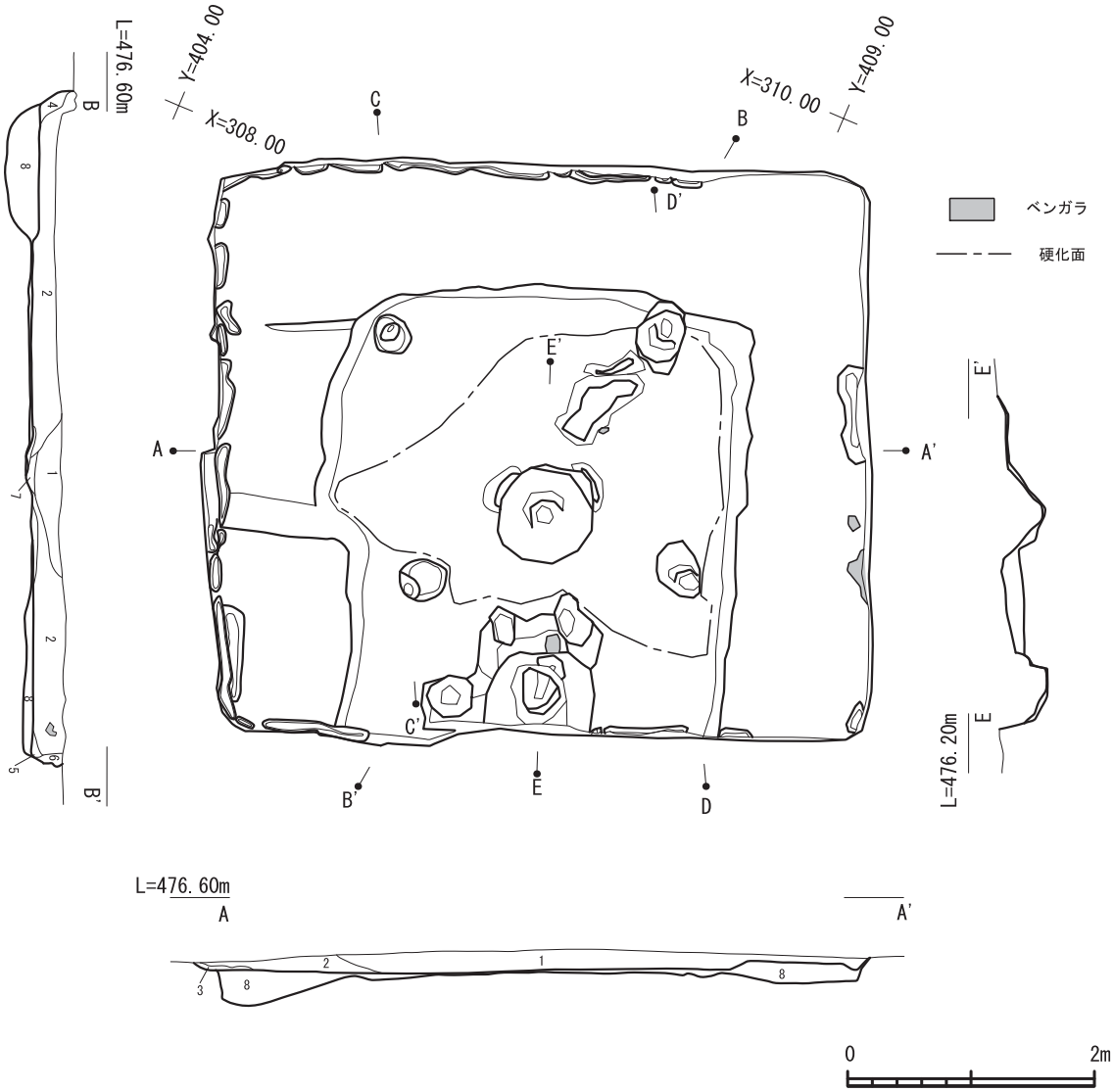


図 343　石器（RQ）実測図（SB158）



1　埋1層　黒褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック混　炭化物含　しまり中　粘性中
2　埋2層　黒褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック多く混　炭化物含　しまり埋1層より強めの中　粘性大
3　埋3層　黒色シルト質　黄褐色粘土ブロック混　しまり強めの中　粘性大
4　埋層　暗めの黒褐色シルト質　小さな黄褐色粘土ブロック混　しまり中　粘性大
5　埋層　暗めの黒褐色シルト質　埋4層より大きい黄褐色粘土ブロック混　しまり中　粘性大
6　埋層　明るめ暗褐色シルト質　黄褐色粘土ブロック混　ベンガラ滓含　しまり弱めの中　粘性中
7　埋層　暗褐色シルト質　とても小さな黄褐色粘土ブロックと小さな炭化物が　わずかに混ざってる　しまり小　粘性中
8　貼床埋土

図344　SB159　床面（1/60）

からの深さ70cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴は竪穴住居を東西方向に3分割した際の分割点に位置する。また、西側壁際に1基、東側壁際に2基、合計3基の柱穴を確認した。これらの柱穴は、深度が浅いため、補助的な柱の痕跡である、と判断している。主柱穴の内側には硬化面が形成されている。硬化面は、南北に発達し、北部では側壁際まで、南部ではKピット北端まで形成されている。ただし、北側の硬化面は、炉周辺の硬化面に比して硬化の度合いが低い。

炉は、南北60cm、東西70cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶラインに北接し、

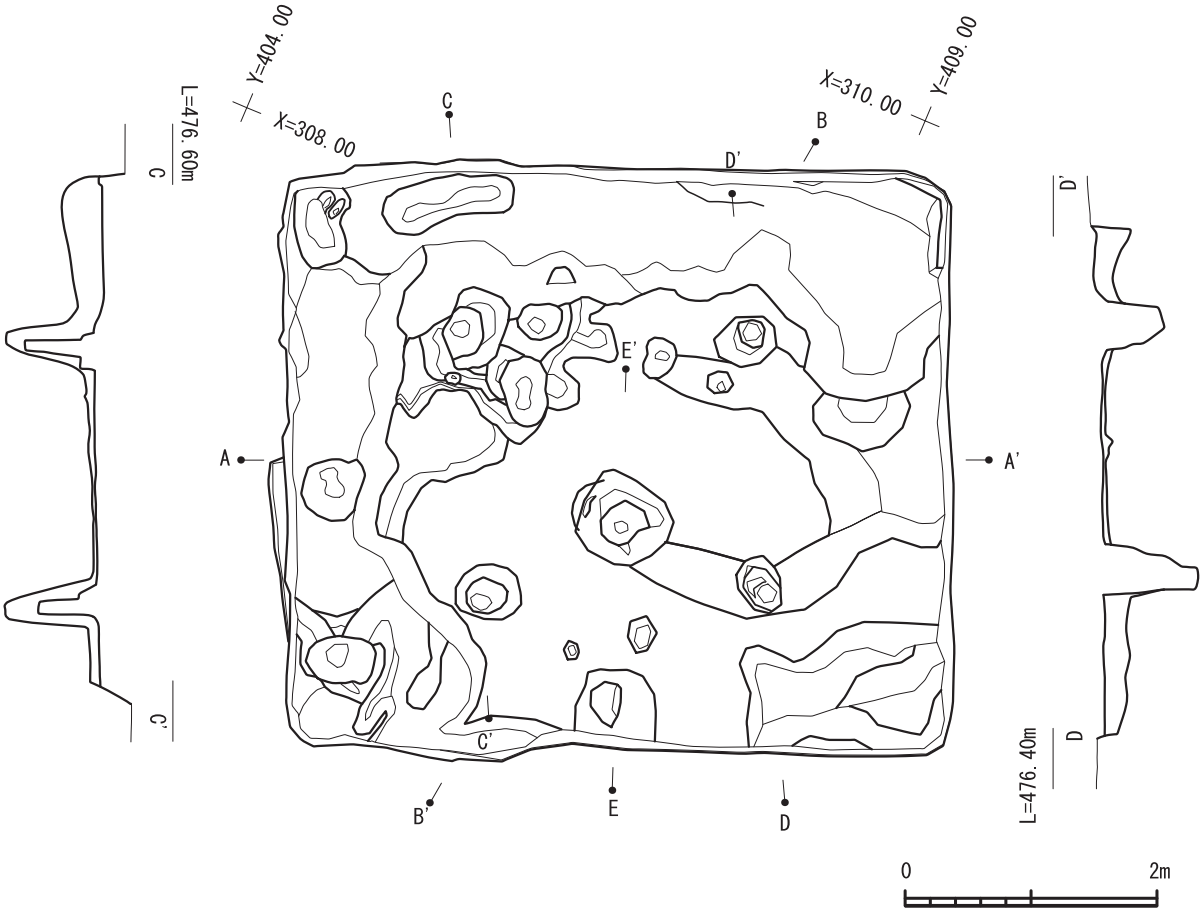


図 345　SB159　掘方（1/60）

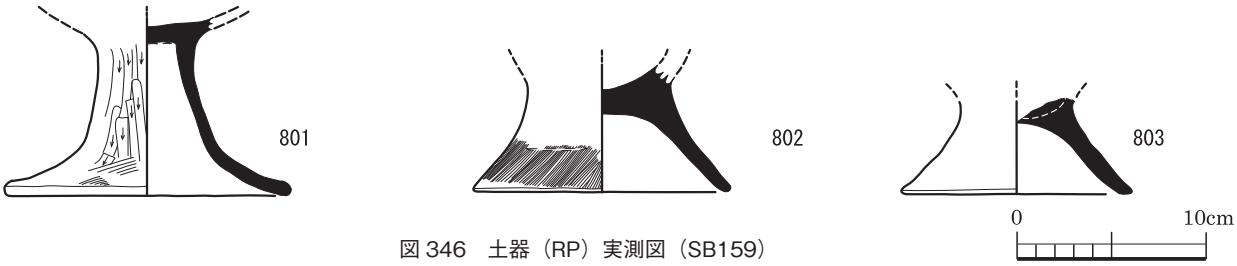


図 346　土器（RP）実測図（SB159）

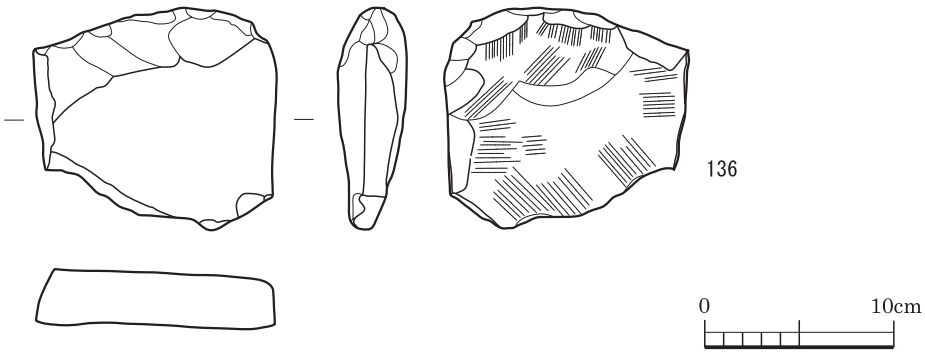
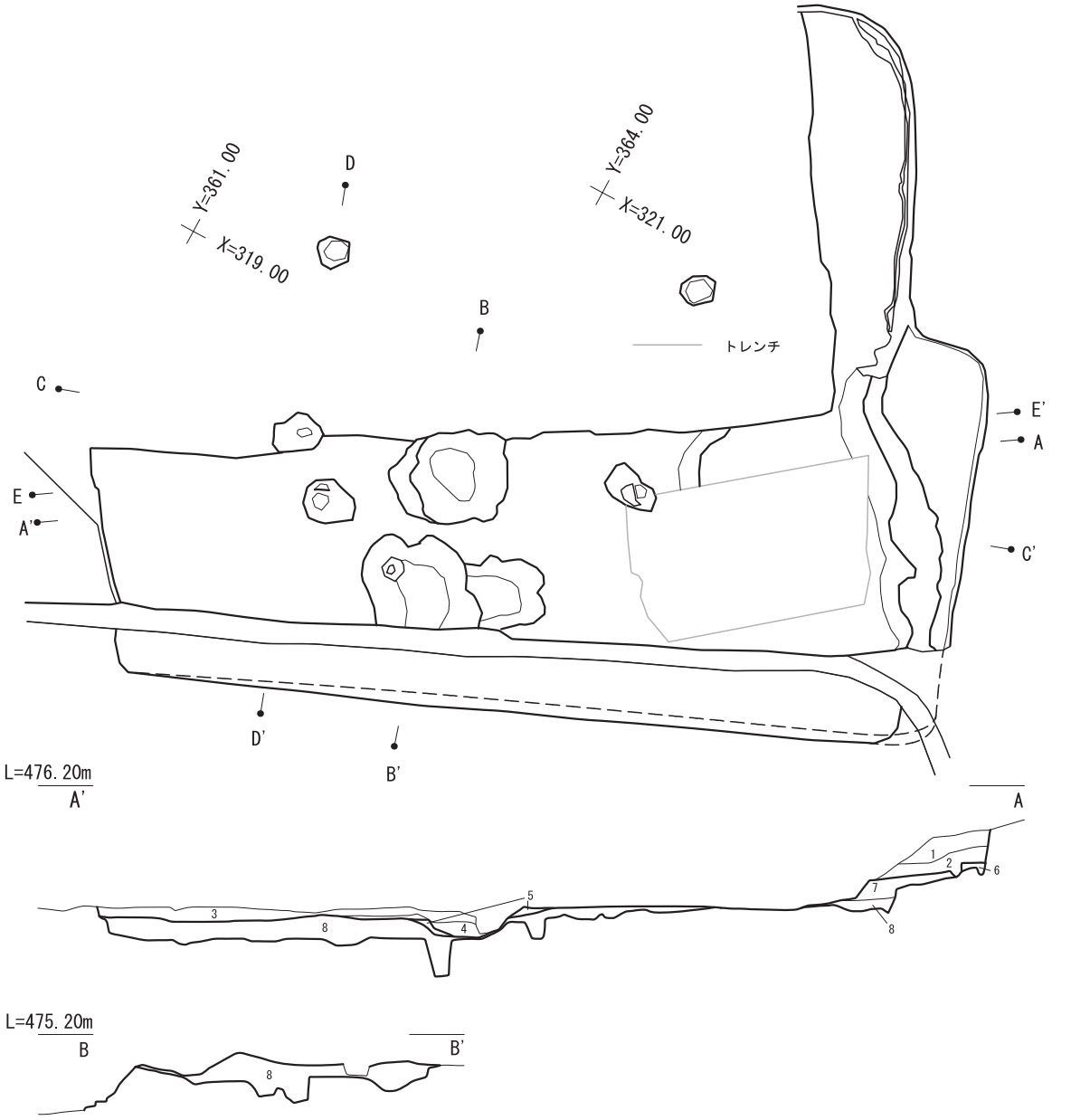


図 347　石器（RQ）実測図（SB159）



1　埋1層　暗褐色シルト　炭粒(5mm～2cm)混　しまり小　粘性中

2　埋2層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(2.3mm～2cm弱)、褐色シルトブロック(2cm大)混
しまり中　粘性中 1、2層境(張り出し部)で、ベンガラがある程度まとまって検出された

3　埋3層　暗褐色シルト　2より色調が明るく、黄褐色シルトブロック(2.3mm～2cm)を大量に含む
焼土、炭化物を多く含むが、北東G隅の埋3層には上記のブロックが焼土化している部分がみられる
張り出し部以外の埋3層は直上のカクラン土の影響を受けて鉄分が染み、硬化している
しまり大　粘性中

4　炉埋土1層　炭化物の層　シルトでなく灰・炭化物ばかりで炉が満たされている　しかし炭化物の入り方は層状にはなっておらず、分層はできない
しまり小　粘性中　カクランの影響を受けていたため、この炉埋土は取り上げていない

5　貼り床　炉内の貼り床埋土

6　張り出し部壁際でのみみられる貼床埋土　褐色シルト　地山の褐色シルトに黄褐色シルト(粘土)ブロック、暗褐色シルトが含まれるため、色調が極端に明るい
しまり中(大)　粘性中

7　張り出し部　貼床埋土　暗褐色シルト　黄褐色シルト(粘土)ブロック(2.3mm～5cm弱)を大量に含む
ブロックの粒の大きさが埋め戻し埋土に含まれるものよりは均一である
しまり中(大)　粘性中　2、7層境より土器片が数点出土

8　貼り床埋土　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(2.3mm～5cm弱)、橙色粘土ブロック(2.3mm～3cm)混
7より色調は暗い　しまり大　粘性中

0　2m

図 348　SB160　床面（ 1/60 ）

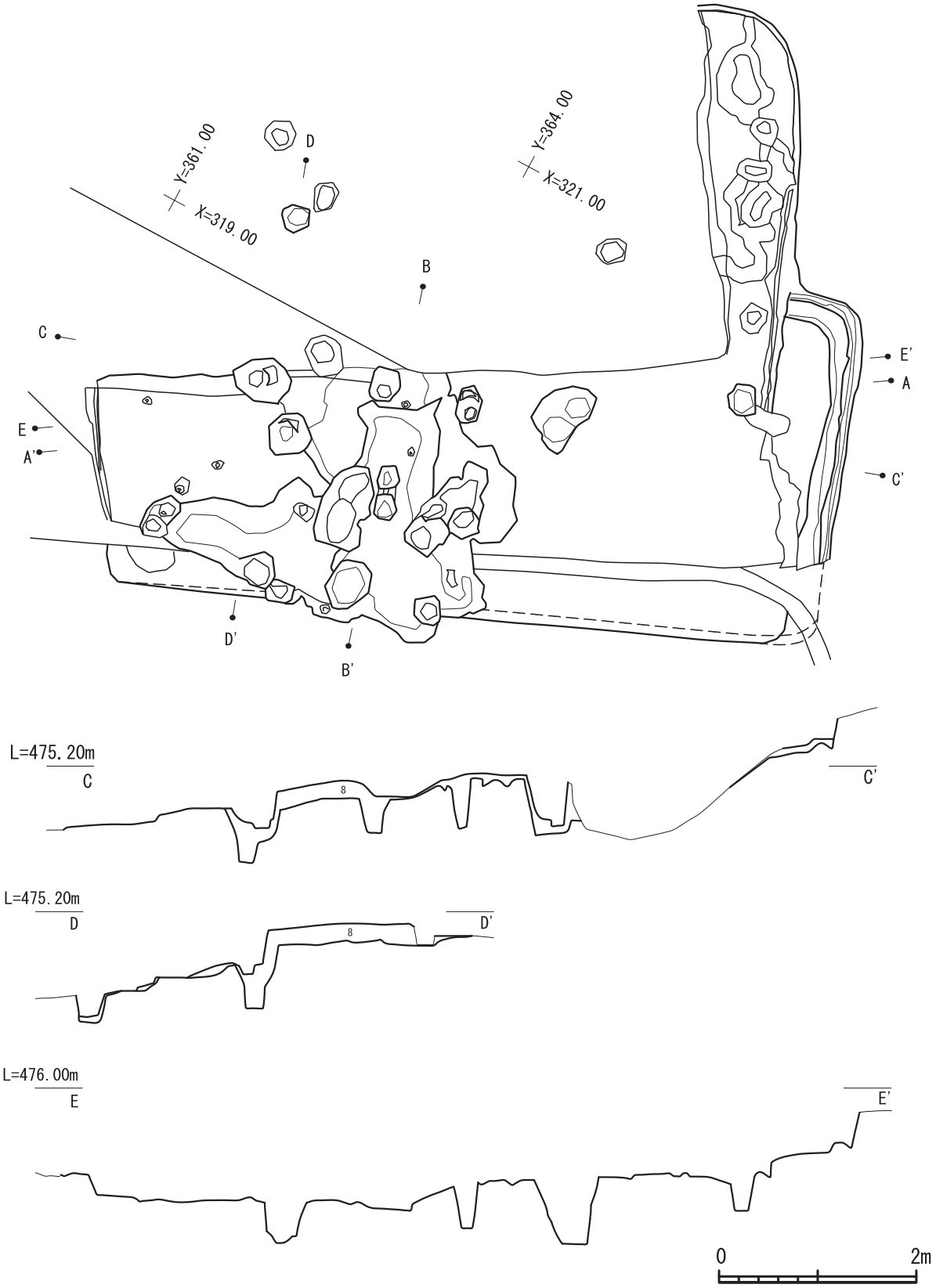
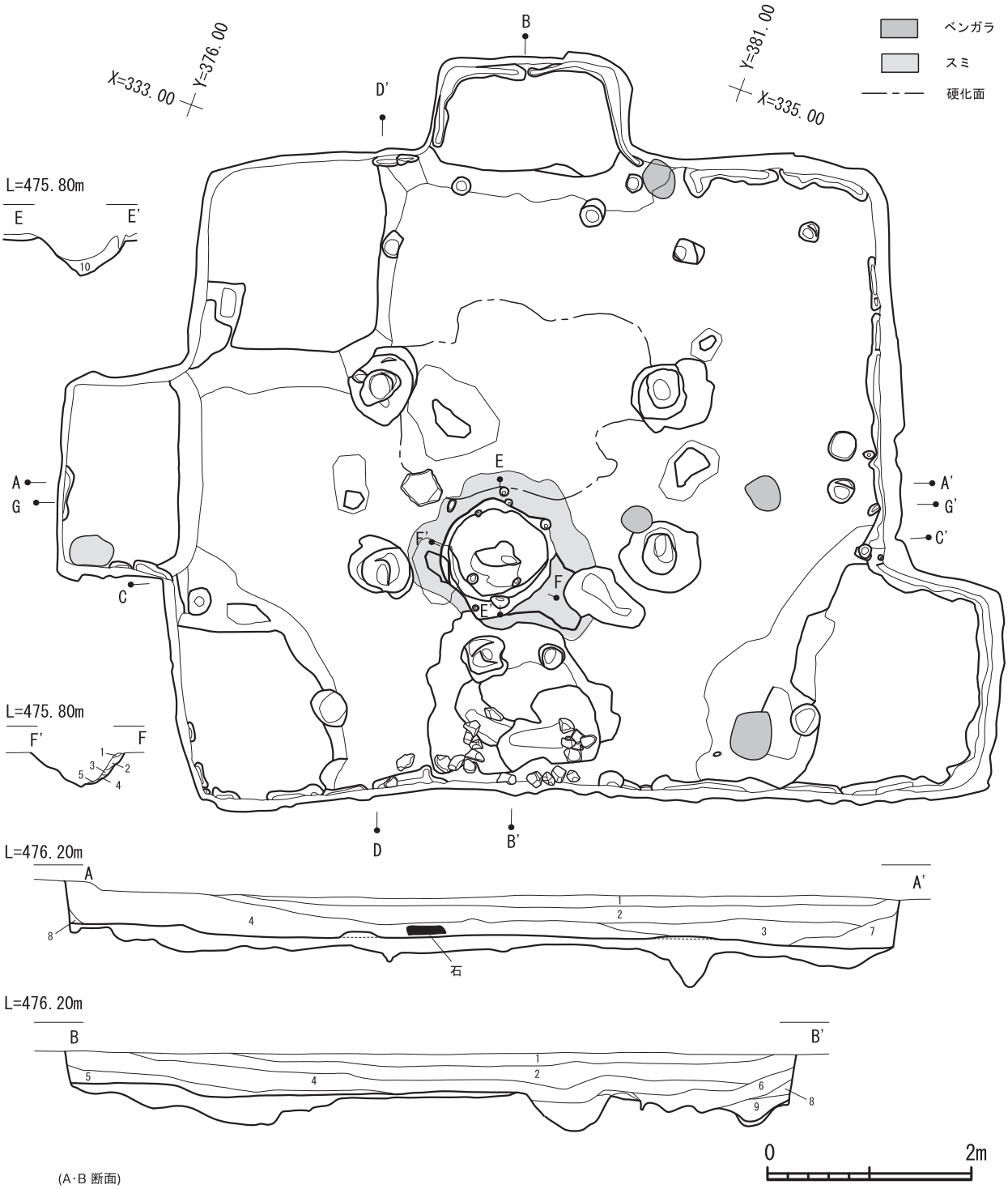


図 349　SB160　掘方（1/60）



(A･B 断面)

1　埋1層　暗褐色シルト　しまり中　粘性中　※北西Gで「投げこまれた」台石出土

2　埋2層　暗褐色シルト　黒色シルトブロック(5cm弱)、褐色シルトブロック(2.3mm～5cm弱)、黄褐色シルトブロック(1cm程度)混
ベルトにはかかっていないが、検出時よりSB161の四隅には褐色シルト、黄褐色シルトブロックがはっきり確認できていた
埋2層の特徴は上・下層よりブロックを多く含むことである　しまり中　粘性中

3　埋3a層　暗褐色シルト　2と同様の褐色シルトブロック、黄褐色シルトブロックをごく稀に、かつ小粒のもの(1cm程度)混
わずかに小粒の炭を含む　4の焼土層の上に「のっている層」である　しまり中　粘性中

4　埋3b層　暗褐色シルト　褐色シルトブロック(1cm弱)、明橙色シルトブロック(2.3mm～1cm大)混
西側張り出し部ベッド貼り床に用いられれいるものと同じ　明橙色シルトブロックを多く含む　2、4の層境で特に住居址中央部分に炭、焼土が
層状に堆積している　中央部以上では、層状の堆積ではないものの、炭を含んでいる　しまり中　粘性中

5　埋3c層　暗褐色シルト　ごくわずかに4と同様のブロックを含む　北側張り出し部で確認できる層であるが、張り出し部が終わり、
平坦面になるとベンガラを含んでくる　しまり中　粘性中　色調が1～4よりはるかに明るい

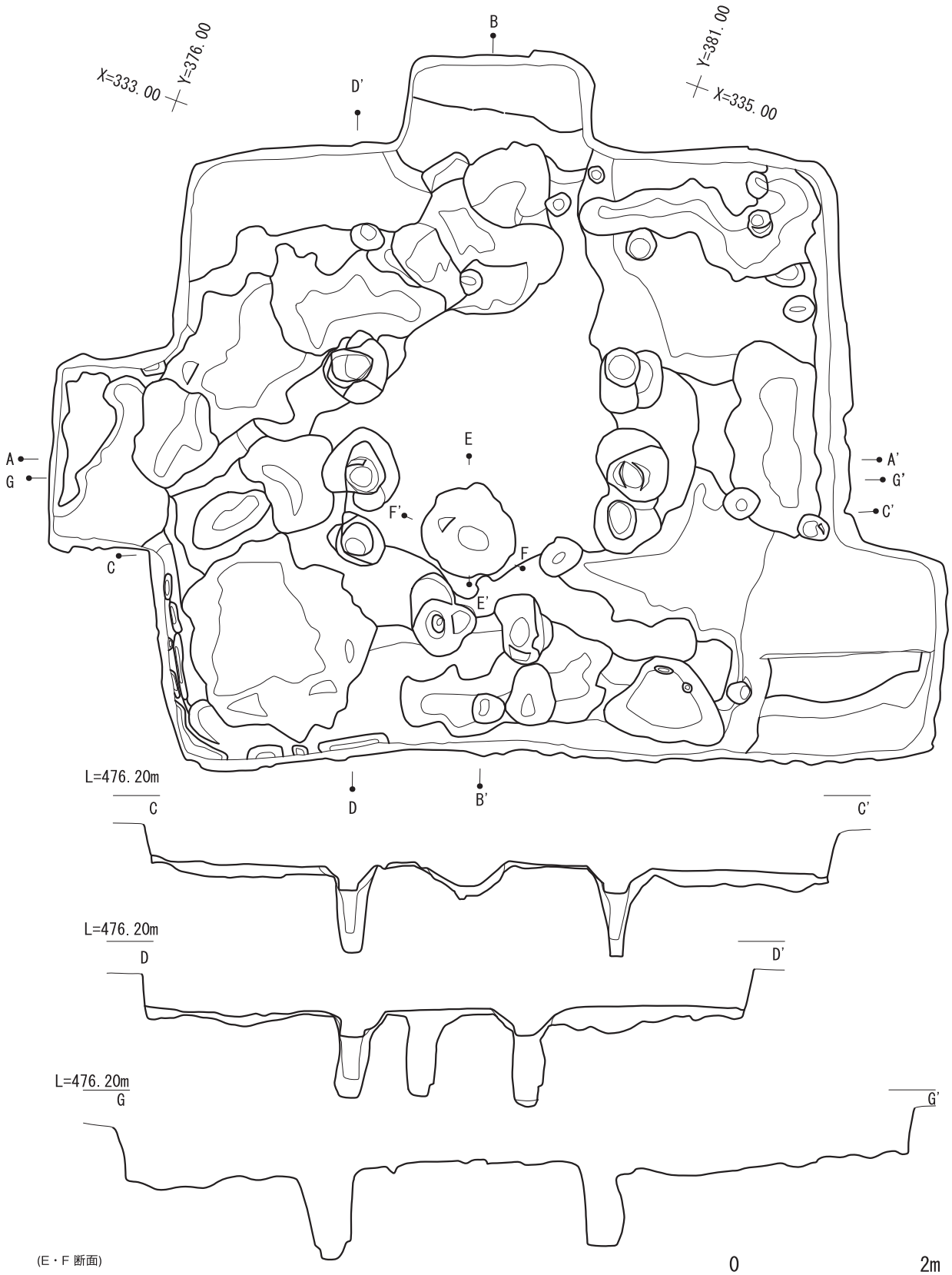
6　埋3d層　暗褐色シルト　明橙色シルトブロック(5mm弱)混　炭を含む　色調は5とよく似ているが、細かいブロックを多く含む　しまり中　粘性中

7　埋3e層　暗褐色シルト　ごくわずかに4と同様ではあるが、小粒(5mm弱)のブロック混　色調が1～4よりはるかに明るい　しまり中　粘性中

8　埋4層　黒色シルト　4と同様のブロックを含む　炭・灰に起因する黒さではない　しまり中(小)　粘性中　壁際のみでみられる三角堆積である

9　埋5層(Kpit埋土)　暗褐色シルト　褐色シルトブロック(2.3cm程度)、明橙色シルトブロック(1cm弱)、炭を含む　埋4層、Kpit内の石を取り上げて現れた層

図 350　SB161　床面（1/60）



(E・F 断面)

1　埋土3b層　暗褐色シルト(Hue10YR3/3)　褐色シルトブロック、黄橙色シルトのブロクを含む　しまり中　粘性中

2　炉埋土1a層　黒褐色シルト(Hue10YR2/1)　上部に炭化物、下部に0.5cm以下の明褐色シルトのブロックが混じる
しまり小　粘性中　10に相当すると考えられる

3　炉埋土1b層　黒褐色シルト(Hue10YR7/1)　炭化物、1～3cmの黄褐色シルトのブロックが混じる
しまり中　粘性中　この層の上面にガラス玉出土

4　炉埋土2層　明黄褐色シルト(Hue10YR6/8)　暗褐色シルトが少量混じる　しまり中　粘性中

5　炉埋土3層　暗褐色シルト(Hue10YR3/3)　0.5～1cmの明黄褐色シルトのブロック、微細炭化物が少量混じる

10　炉埋土1層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(5mm弱)混　黒色の炭、灰を大量に含んでいる　橙色の焼土は全くみとめられない　しまり小　粘性中

図 351　SB161　掘方（1/60）

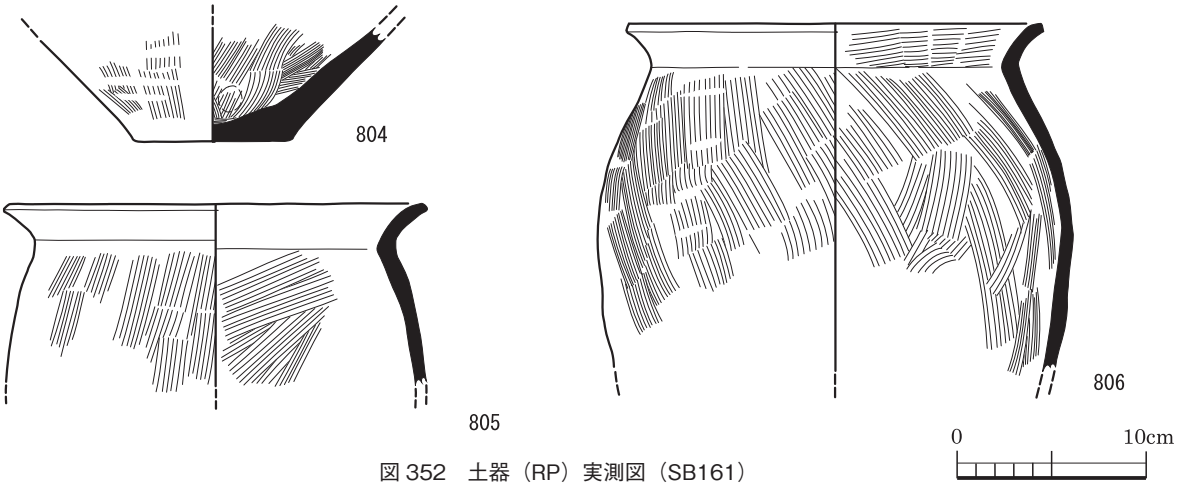


図352　土器（RP）実測図（SB161）

竪穴住居の中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅10cm程度の平坦面を備え、炉の東半部に形成されている。西半部には周堤が形成されない。周堤は、炉の南部ではKピット北端まで範囲で三和土の台と連接している。周堤外部には、周堤に接する部分に小ピットが穿たれているが、炉の形態と厳密な対応関係を有している、とは認めていない。炉底はボウル形に掘りくぼめられ、炉底中心部が浅い皿形に段堀りされている。炉の内壁は、緩やかに上っている。

Kピットは円形を呈し、南側壁に接して東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピットの北側には浅いテラス部が付設されている。

ベッド状遺構は、確認していない。

側壁際には、側壁溝がめぐる。なお、東西土層断面図東側壁に接して、垂直に上る暗褐色シルト層を記した。当該層は、側壁溝から立ち上がる炭化物層である。SB156の側壁際では、側壁垂直方向に沿って焼土が検出され、壁体に接した部分では炭化物が認められている。この状況は、擁壁材が炭化し、さらにその炭化した擁壁構造が崩壊する以前に埋没した、すなわち、擁壁構造が燃やされた直後に竪穴住居跡が埋め戻された状況である、と判断している。

床は貼床であり、竪穴住居全体に均一な厚さで床が貼られている。

SB156には、ベンガラが散布されていた。ベンガラは、東主柱穴を挟んで、竪穴住居跡の東半部で検出された。ベンガラは、床面に接し、壁際の三角堆積埋4層の上位にある。なお、北東部のベンガラの上には、石皿が据え置かれていた。また、焼土、炭化物層も竪穴住居跡の南西から北東にかけての範囲で検出されている。この焼土、炭化物層は、埋3層に属し、ベンガラの上位で検出された。炭化物は、炉の周辺に分布するものは炭粒となっているが、南西隅、北東隅に分布するものは板材と認識することができる。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削している。竪穴住居の西半部は浅く掘りこまれ、炉の西半部にも掘削が及ぶが、側壁に沿った溝は切られていない。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB157

SB157は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。

SB157の法量は、南北6.8m、東西6.6m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴抜取り痕の近くでは、主柱穴抜き取りの際の排土が小山をなして検出された。ただし、北東主柱穴には対応する排土を確認することができず、また、抜取り痕の規模も他例より小さい。以上から、北東主柱穴のみ抜き取られていない可能性も存在する。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、南半部で発達し、Kピット北端まで形成されている。炉の東西両脇には、特に硬い硬化面が形成されている。この特に硬い硬化面は、良質の黄褐色粘土（基本土層4層）を用いた三和土である。その他の部分の硬化面には、黒褐色シルトが混和され、粘土にも褐灰色のものが入る等、精良さの点で劣る感が否めない。このことから、特に硬い硬化面は作業場等、その用途をあらかじめ想

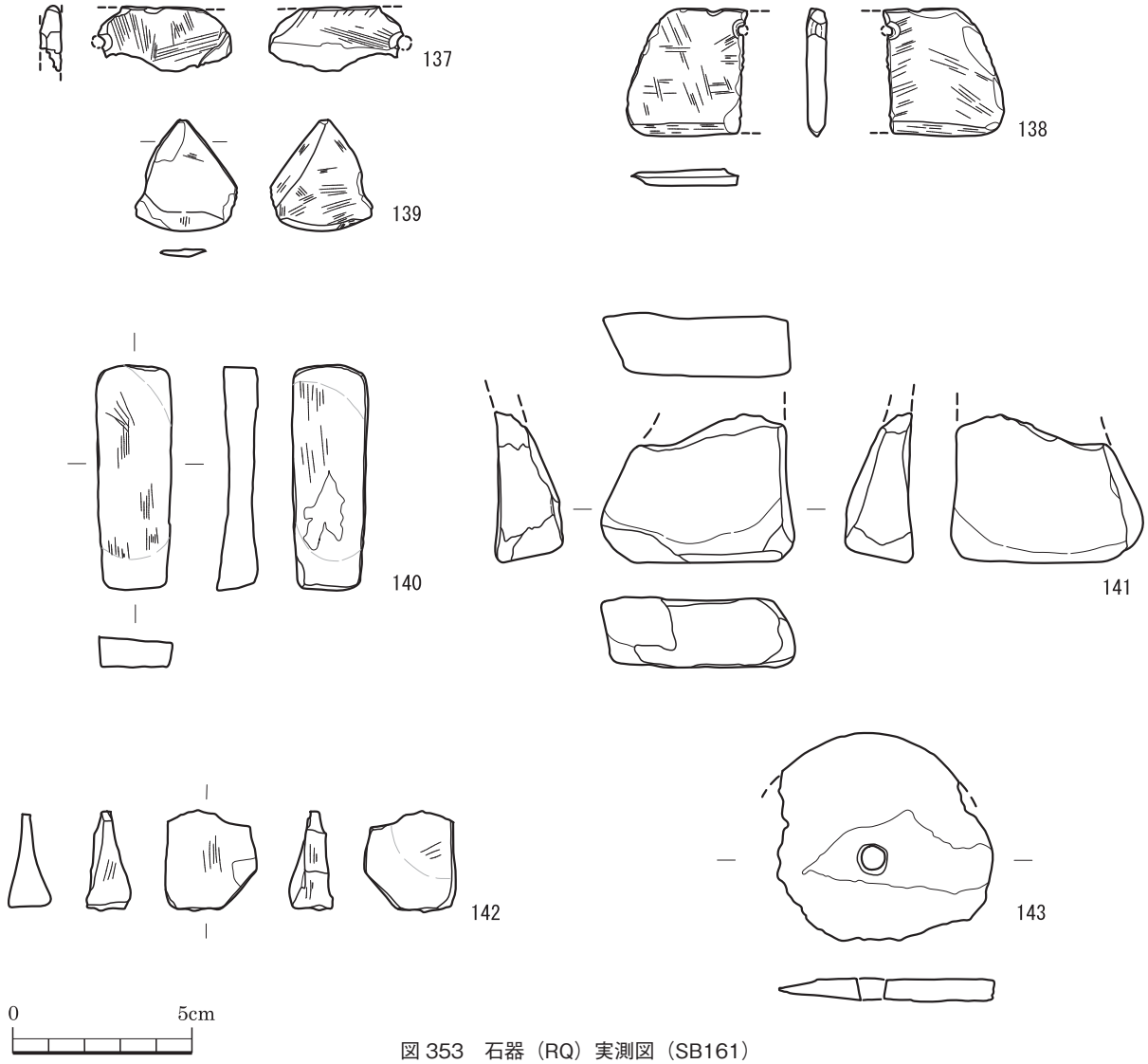


図 353　石器（RQ）実測図（SB161）

定して造成された設備である、と判断している。

炉は、南北90cm、東西80cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅10cm程度の平坦面を備え、炉の全周に形成されている。その南部には平面方形を呈する三和土の台が連接し、Kピット北端までの範囲に硬化した平坦面を形成している。周堤外部には、小ピットが2基、北側の東西両翼に穿たれている。炉穴は、西側にテラス部が設けられ、ボウル形に2段に掘りくぼめられている。炉の1段目、2段目とも平面形は円形を呈し、炉底の南端部には小ピット1基が穿たれている。炉の内壁は、切り立っている。

Kピットは円形を呈し、南側壁から1m程度離れ、竪穴住居の東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、東西両脇には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピットと南側壁の間には、方形の土壙2基が連接して収まり、壁際からKピット間に段構造を形成している。

ベッド状遺構は、東西南北の各隅に方形を呈して設けられ、北側壁中央には独立したベッド状遺構が設置されている。北側壁中央のベッド状遺構は炉の幅に対応した部分が1段高く作られており、ステップを形成し

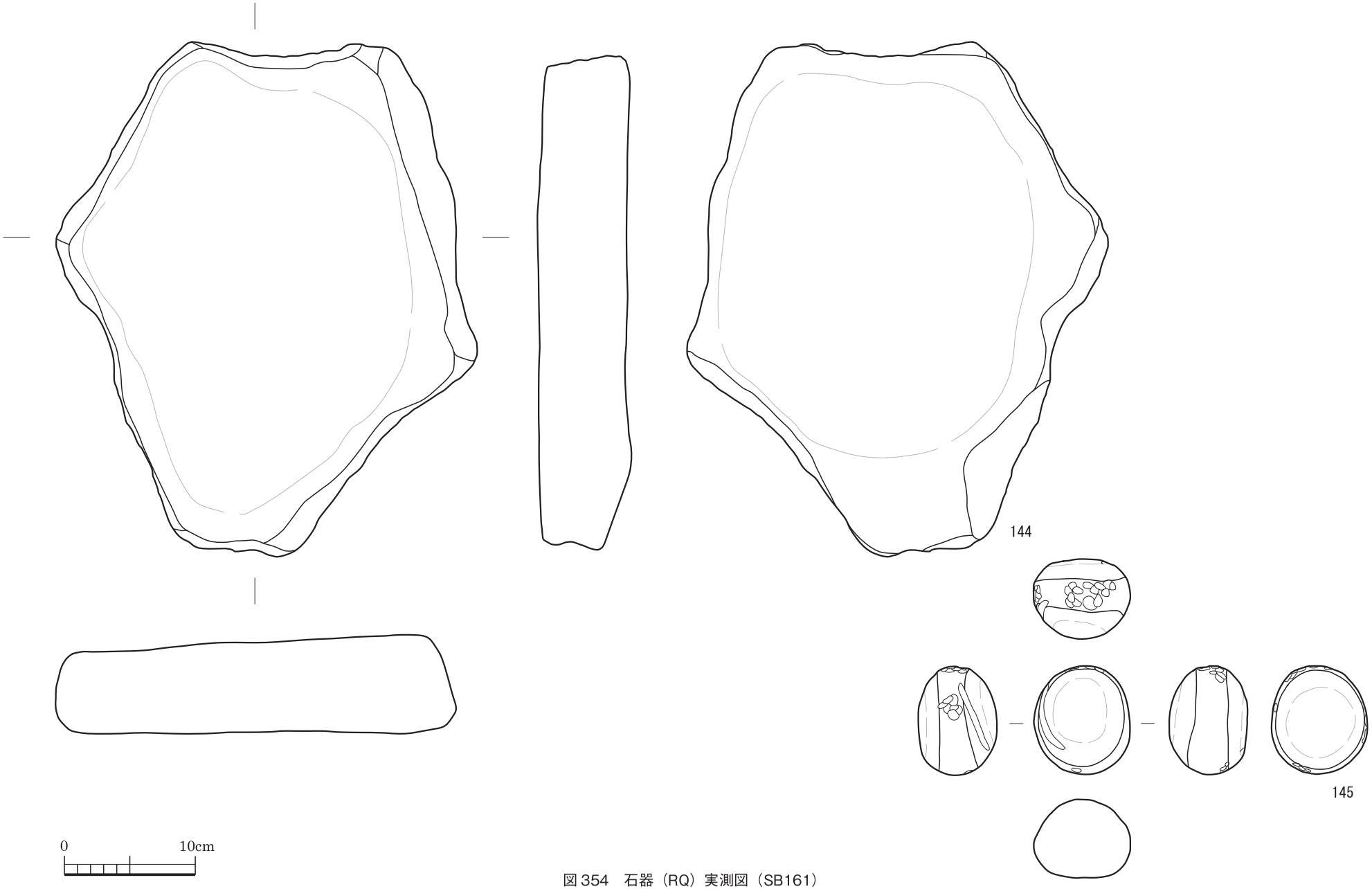
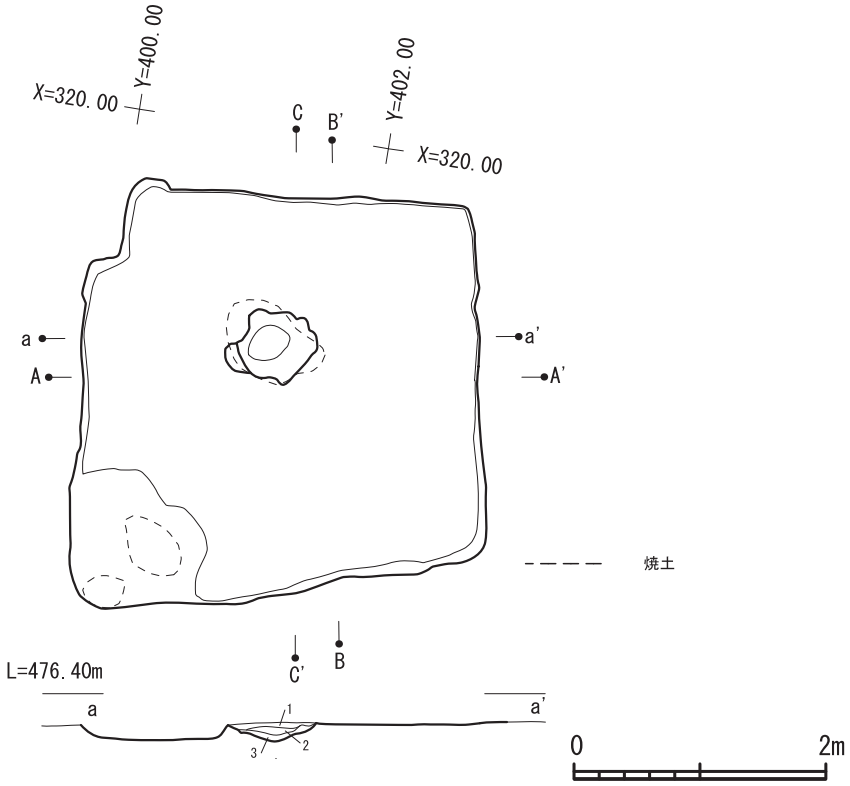
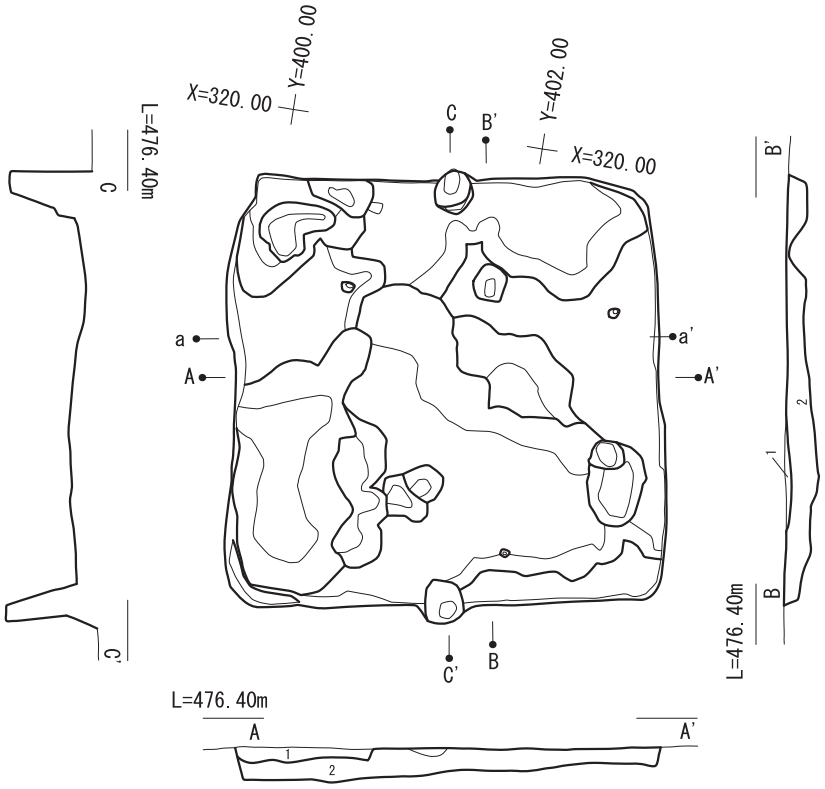


図354　石器（RQ）実測図（SB161）

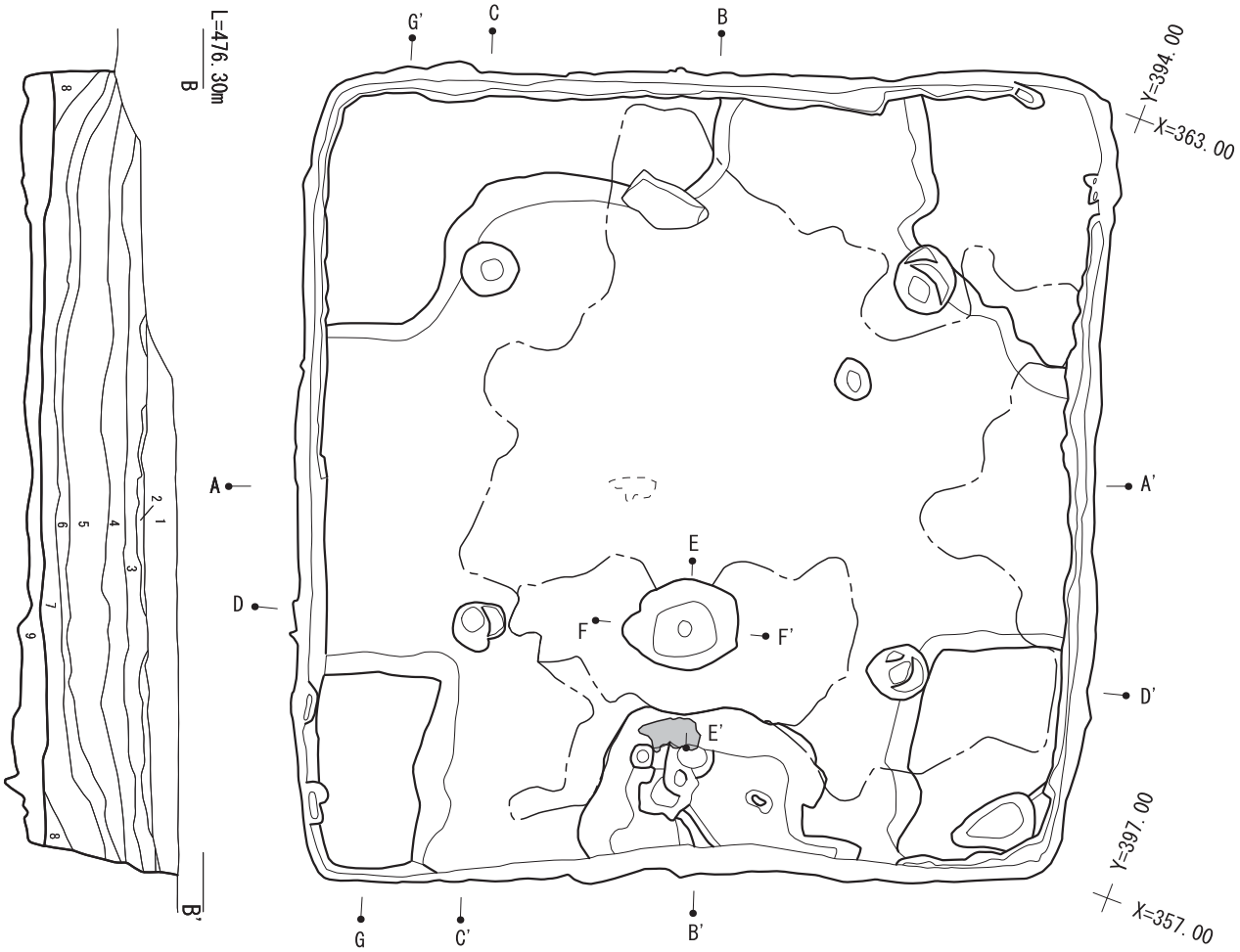


1　埋1層　焼土と炭を非常に多く含んだ暗褐色シルト質　しまり中　粘性中
2　埋2層　ほとんど焼土　しまり中　粘性極小
3　暗褐色砂質　火山灰のガラスが入っていてキラキラ光る　そのせいかシャリシャリした感じ
　　周りの床は粘性があるが、ここは小である　床が熱を受けて変成したのかもしれない　しまり大



1　埋1層　黒褐色シルト質　黄色粘土ブロック混　炭化物多く含む　しまり小　粘性中
2　貼床

図 355　SB162（1/60）



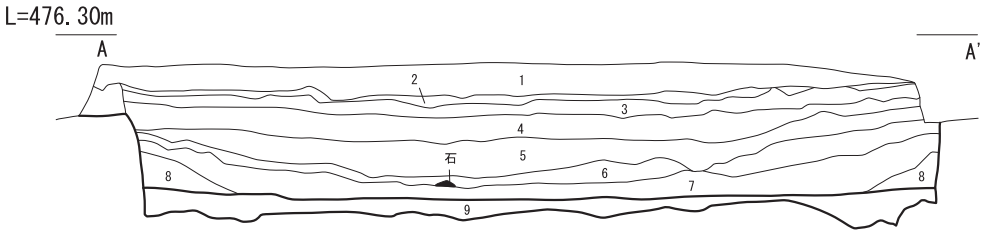
(E 断面)

1　炉内埋1層　黒シルト(7.5YR 2/1)　黒色が埋2層より強く、5mm以内の炭化物を多く含む
埋土中のロームブロックはφ2cm～5mmのものを主とする　しまり弱　粘性中の弱

2　炉内埋2層　黒褐色シルト(10YR 3/1)　埋1層よりは黄色が強く明るい　φ5mm～2cm程度の焼土が点在し、
φ3mm以内の小粒になったベンガラが混入
長さ5mm以内の炭化物を含む　ロームブロックは2cm～5mmのものを主とし、炉内埋土1層よりは多く含む

9　貼床埋土　黒褐色シルトをベースし、5mm～2cmのロームブロックを混入する　偽礫層　しまり強　粘性中
長さ1cm以内の炭化物を含む　φ1mm以内の微細スコリアを含む

0　2m



(A・B 断面)

1　包含層　2b層

2　埋1a層　黒褐色シルト(7.5YR 3/1)　埋1b層よりはやや明るい　部分的ではあるが腐植が混じる　部分的に焼土が混入　しまり弱　粘性中

3　埋1b層　黒褐色シルト(5YR 2/1)　埋1a層よりは暗く、埋2層よりも暗い　しまり弱　粘性中

4　埋2層　黒褐色シルト(7.5YR 3/2)　埋1a層より暗く、1b層より明るい　φ2mm程度(長さ1.0cm以内)の微細炭化物を含む
色調としては1層～4層の中では最も明るい色調をしている　しまり中　粘性は中

5　埋3a層　黒褐色シルト(10YR 2/2)で埋2層よりは暗い　φ5mm程度(長さ1～2cm)の微細炭化物が点在する
また、φ1mm程度のスコリアが点在する　しまり強　粘性中

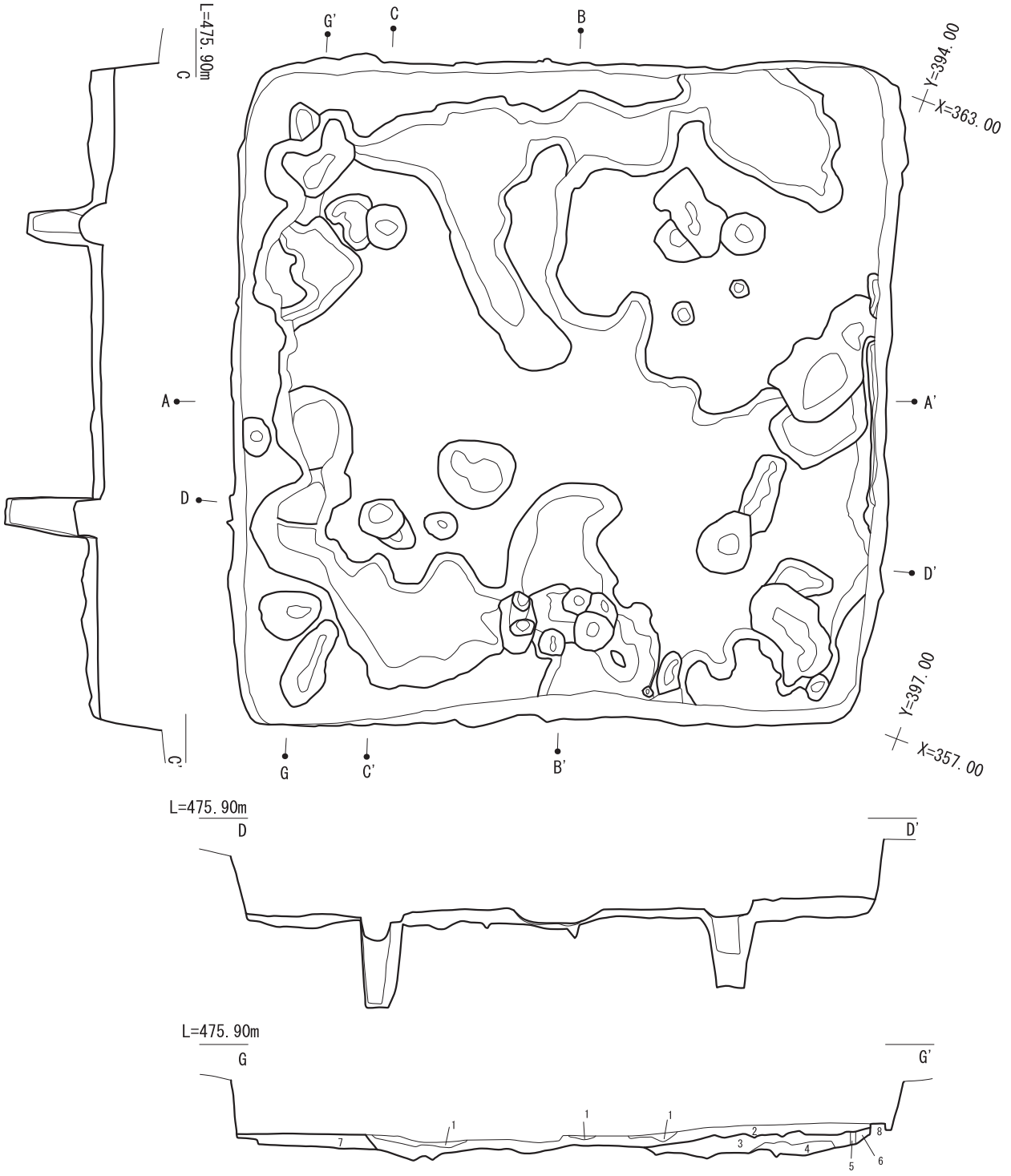
6　埋3b層　黒褐色シルト(7.5YR 2/2)　3a層よりはやや黄色が強く明るい色調を持つ
5.0cmグリッドでφ2mm以内のロームブロック(5個)が点在する　埋4層と比べて少ない　φ2mm以内の微細炭化物を含んでいる　しまり中の強　粘性大

7　埋4層　黒褐色シルト(10YR 3/1)　φ2～3mmのロームブロックを主とする　5cmグリッドで10個程度で混入し、埋3層の2倍程度となっている
ロームブロックの粒径はφ2.5cm以内である　偽礫層を呈する　また、長さ1cm以内の炭化物が点在する　しまり中の強　粘性大

8　埋4b層　黒シルト(10YR 2/1)で腐植を多量に含む　埋土の中での腐植の含存量が最も多い　長さ1cm以内の炭化物を含み　点在
5cmグリッドで6個程度のロームブロックを含む偽礫層である　ロームブロックはφ2mm以内である　しまり中の弱　粘性大

9　貼床埋土　黒褐色シルトをベースし、5mm～2cmのロームブロックを混入する　偽礫層　しまり強　粘性中
長さ1cm以内の炭化物を含む　φ1mm以内の微細スコリアを含む

図 356　SB163　床面（1/60）



1・2　壁を広げてその後貼り替えている　ロームブロックもφ2cm以内で腐植を多く含み、非常に柔らかい
　　この腐植は2a層のものであり、明らかに3、4のものとは異なる

3·4·6　旧住居床の貼床であり、黄色が強い黒褐色でφ10cmを超える黄褐色ロームブロックが入っており固い
　　※3、4の黒色土は2b層のものである

5　側壁孔である　旧住居の側壁孔であり　壁を削って北側は広げて新たに側壁孔を作っている

7　ほとんど地山のロームで作っており、かなり黄色が強く、一番最初に貼った床と考えられる

8　地山であり、基本土層の3層下位の黄褐色ロームで非常に固い

0　2m

図 357　SB163　掘方（1/60）

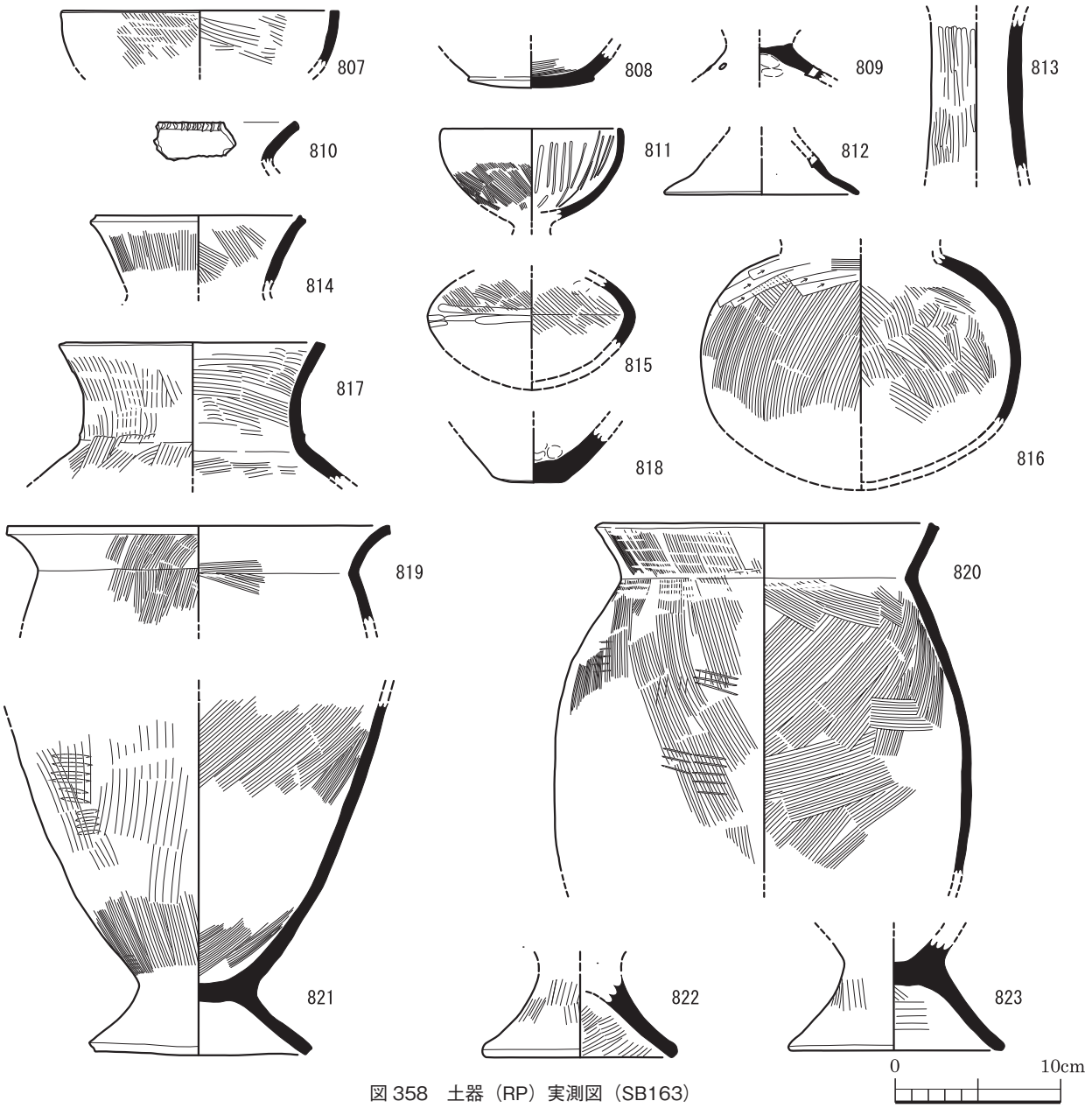


図358　土器（RP）実測図（SB163）

ている。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、東辺、西辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。東辺では溝が伸びきらず、土壙が連接していないものの、北東隅、南東隅の両土壙から対辺を指向した状況は確認できよう。不完全ではあるがロ字形の掘方である、と評価できる。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB158

SB158は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB158の法量は、南北3.5m、東西3.5m、遺構確認面からの深さ15cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱

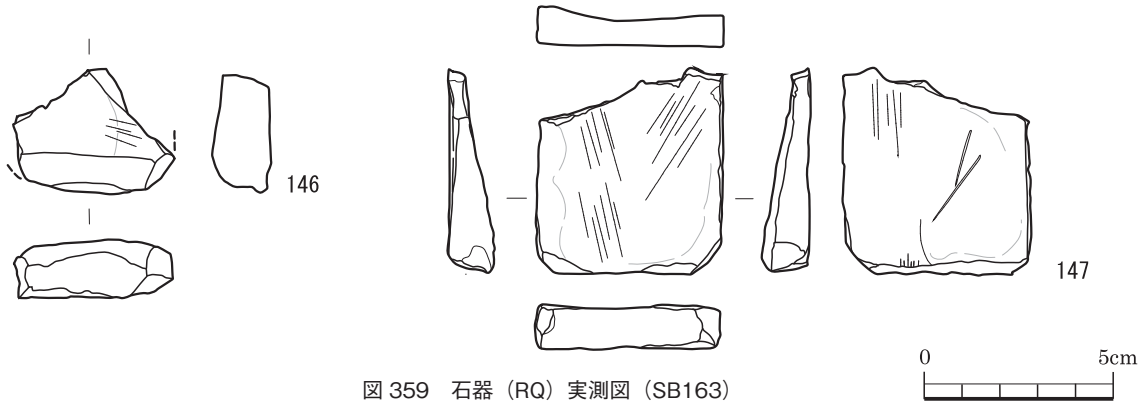


図 359　石器（RQ）実測図（SB163）

穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の西側壁、南側壁、東側壁と平行に位置している。硬化面は、東側壁付近に1箇所、狭い範囲に形成されていた。

炉は、南北65cm、東西55cmの円形土壙とこれに連接する2基の円形土壙が複合しており、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の中央に位置している。各土壙は皿形に浅く掘りくぼめられ、東側2基の土壙には焼土が葉理状に堆積し、西側の土壙では炭化物が検出された。このことから、南北に連接する2基の土壙が炉の主体であり、西側の土壙は炭掻きだし等、炉の副次的な設備である、と判断している。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

なお、内陣に概ね一致する範囲では、炭化物層が広く分布していた。また、炭化物層の周端部、南西隅には、石皿が炭化物層の上位に据え置かれていた。

掘方は、東辺、西辺に沿って土壙、溝が掘削され、竪穴住居の中央部分は平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約15cmの深度である。

SB159

SB159は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁及び西側壁に張出し部を備える。

SB159の法量は、南北4.6 m、東西5.3 m、遺構確認面からの深さ40cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。北東主柱穴抜取り痕の南西部には、抜き取りの際の排土が小山をなして検出された。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北西部にはあまり形成されていない。

炉は、南北80cm、東西70cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅6cm程度の平坦面を備え、炉の北西部、北東部に付設されている。炉穴には、北半部にテラス部がめぐり、1段目、2段目とも平面が円形で切り立った炉壁を有する土壙が掘り込まれている。なお、炉内の炭、焼土等は掻きだされていた。

Kピットは正方形を呈し、南側壁に接して東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピット北側にはテラス部が付設され、Kピット内には皿形に土壙がさらに穿たれており、3段掘りの様相を呈している。また、Kピット西側にもテラス部がピットと複合して付設されている。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に方形を呈して設けられ、西側壁、北側壁、東側壁では各隅のベッド状遺構が相互に伸長し、連接している。西側壁沿いでは伸長部分がベッド状遺構より1段低くなり、北側壁沿いでは伸長部分がベッド状遺構より若干幅狭い様相を呈し

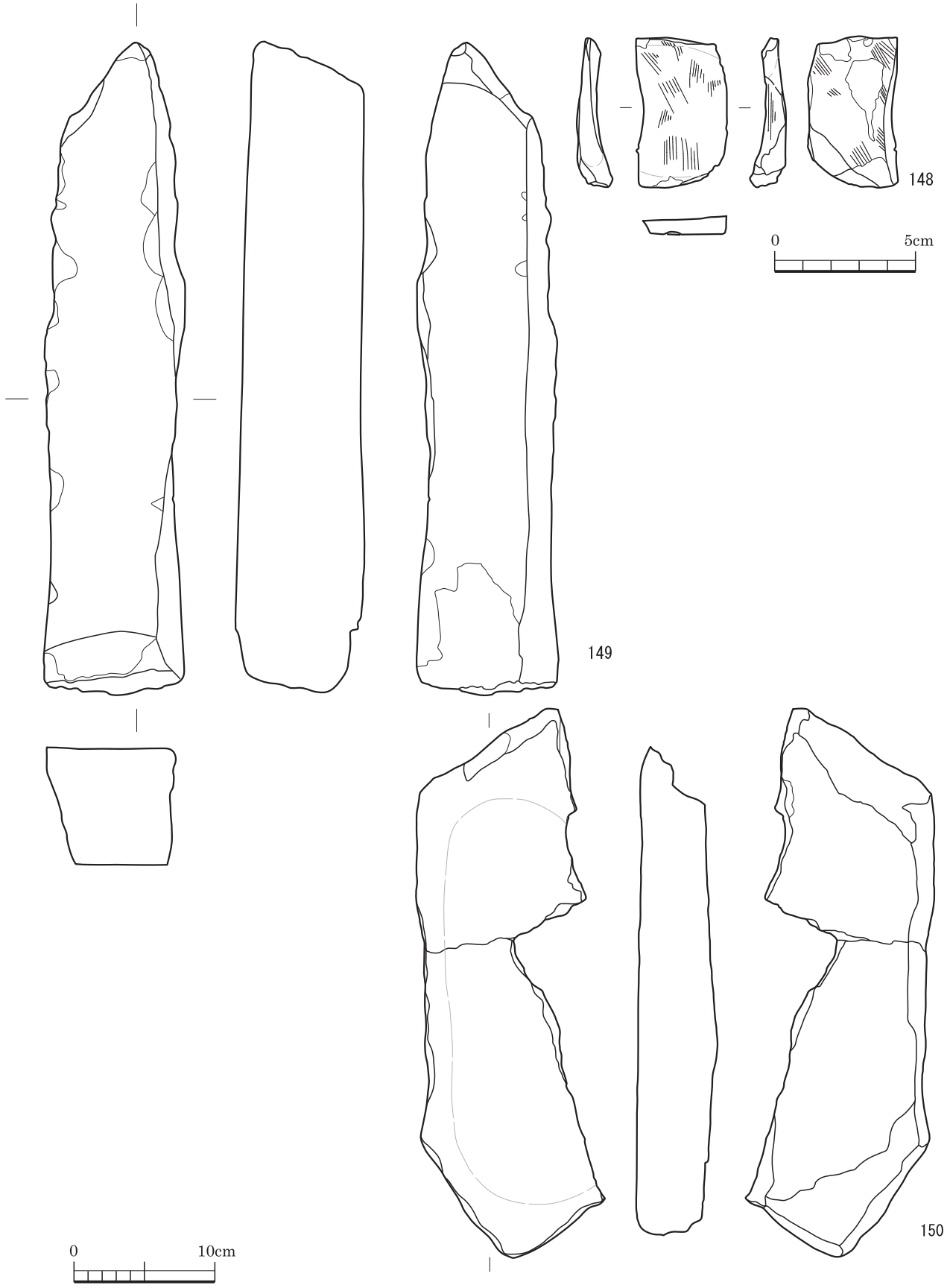


図 360　石器（RQ）実測図（SB163）

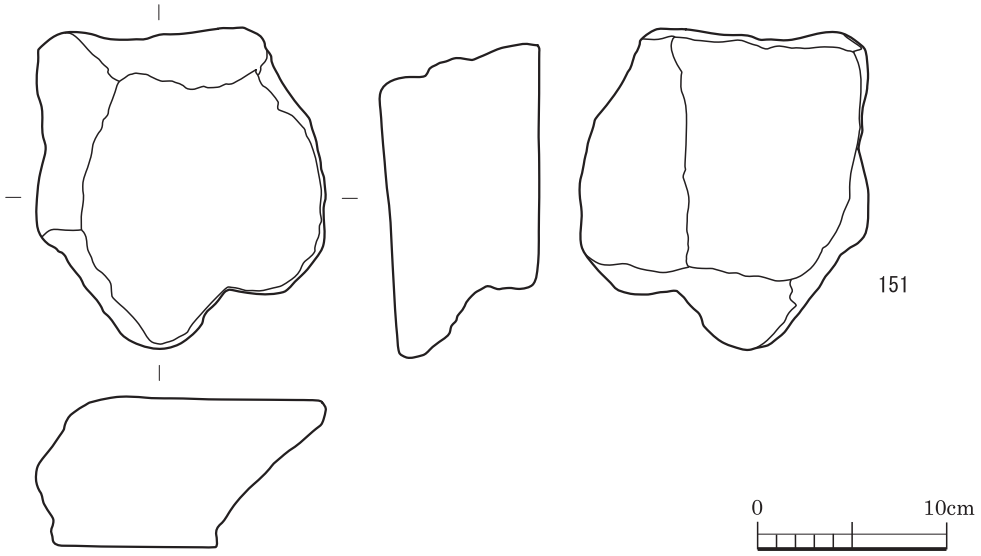


図 361　石器（RQ）実測図（SB163）

ている。

なお、西側壁の南半部は10cm程度外側に張り出し、側壁溝も2重に検出されている。当該部分は、壁体が崩落する等、竪穴住居が損壊し、その修復がなされた箇所、と判断している。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

Kピットの北側テラス部、東側壁沿い、内陣の北東部分ではベンガラが検出された。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、西辺、北辺、東辺に沿って溝を切り、南西隅、北西隅、北東隅の土壙を連接させている。南東隅の土壙が連接していないが、北東隅の土壙は南に向かって伸長しており、概ね凹字形の掘方である。各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、炉の部分を最高位として、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB160

SB160は、4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。東側壁に張出し部を備える。竪穴住居の大半が、現代の圃場整備に伴う削平により、破壊されている。

SB160の法量は、南北は5.3mを、東西は7.6mを確認し、遺構確認面からの深さ30cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。

炉は、南北40cm、東西40cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。

Kピットは方形を呈し、南側壁に近い位置にある。

ベッド状遺構は南東隅に方形のベッド状遺構が設置されている。このベッド状遺構は北東隅へベッド状遺構に連接した状態を呈している。

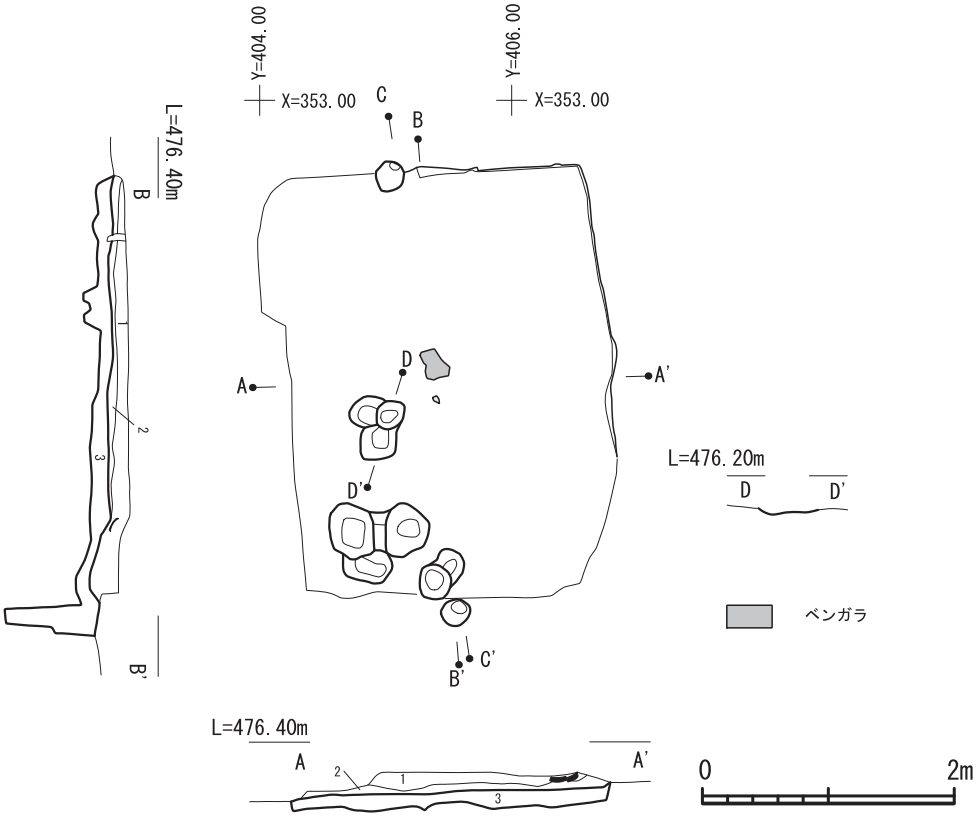
床は貼床である。

掘方段階の調査において、Kピット、主柱穴において複数のセット関係が認められる状況を検出したが、詳細は不明である。

SB161

SB161は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。西側壁、北側壁、東側壁に張出し部を備える。SB166と切り合うが、SB166（古）→SB161（新）である。

SB161の法量は、南北6.4m、東西7.0m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。



1　埋1層　黒褐色シルト　黄褐色シルトブロック(2cm弱)混　しまり中　粘性中　※土器を大量に含んでいる

2　埋2層　暗褐色シルト　埋1・埋2境界の埋2層直上(最上部)に炭化物を有する
　　1の埋1層には土器を大量に含んでいたが、埋2層にはほとんど何の遺物も含まれない　しまり中　粘性中

3　貼り床埋土

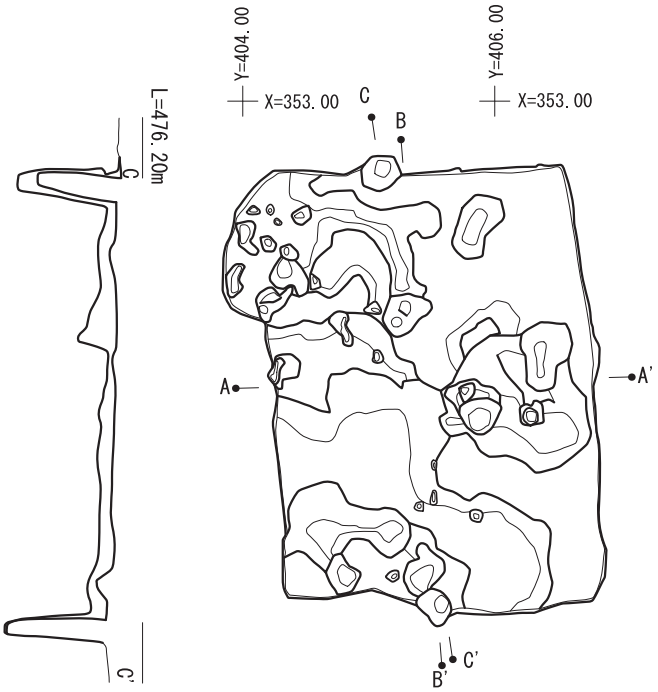


図 362　SB164（1/60）

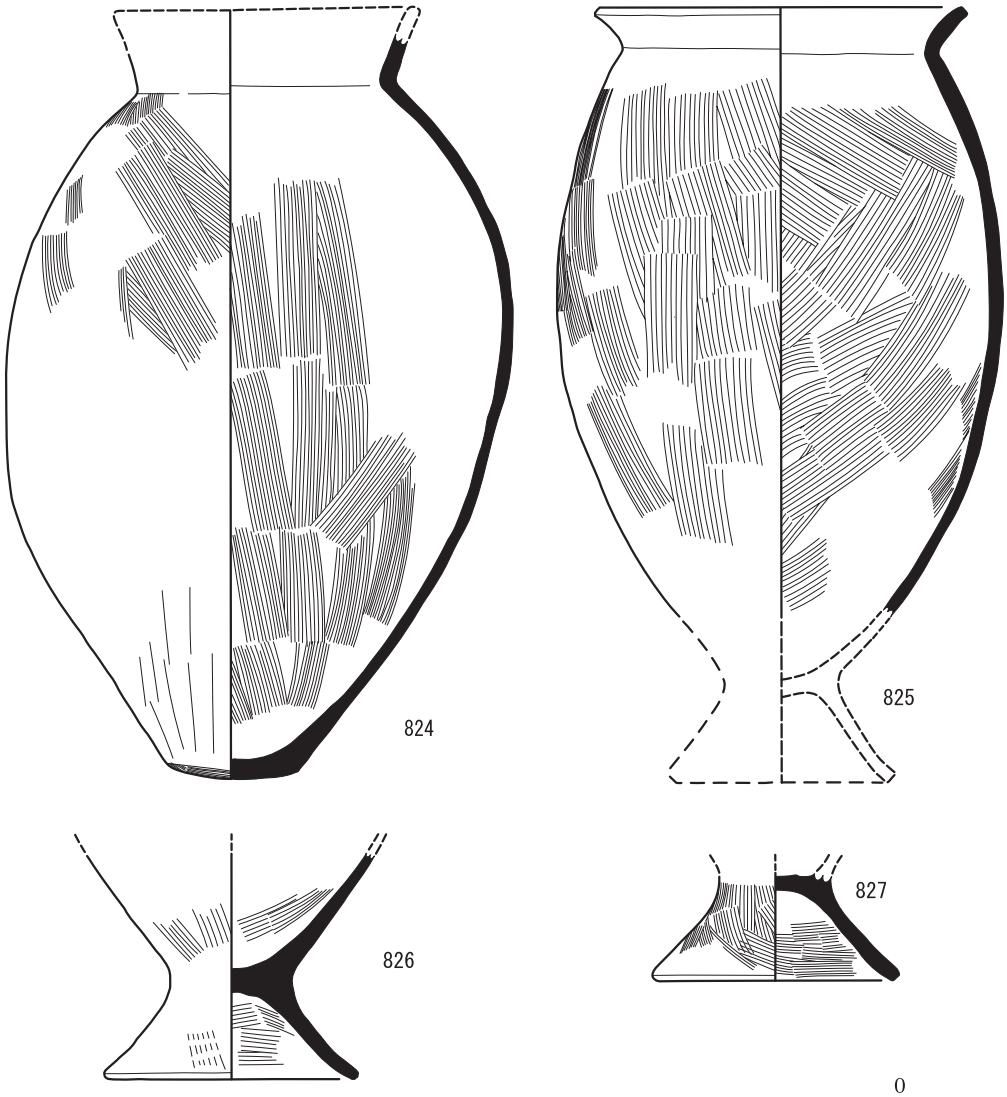
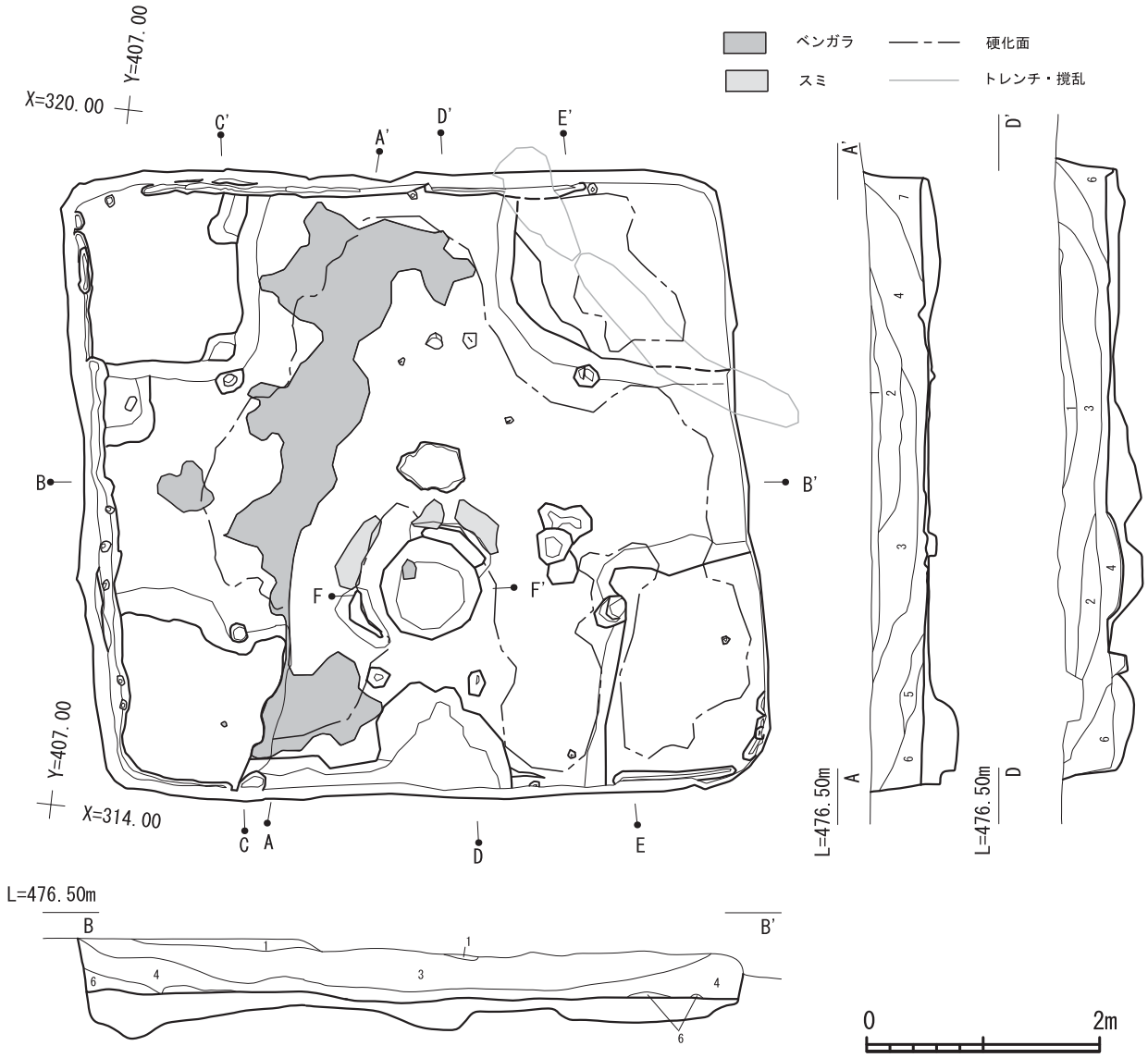


図 363　土器（RP）実測図（SB164）

主柱穴は、2×2の計４基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴の近くには、主柱抜き取りの際の排土が小山をなして検出された。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北半部で発達し、南半部では発達度が低く、炉より南側にはほとんど形成されていない。

炉は、南北100cm、東西100cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅10cm程度の平坦面を備え、炉穴の全周に形成されている。ただし、南東部では平坦面が狭隘なものとなっている。周堤の上端部周辺には小ピットが穿たれている。炉の外部には炭が掻き出されていた。なかでも炉とＫピットの間に炭の集中部分がある。周堤の北東部は、部分的に低くなっている。炉底はボウル形に2段に掘りくぼめられて、南半部の段境にはテラス部が付設されている。炉の1段目は皿形に近い断面形であるが、2段目は深いボウル形であり、併せて漏斗形に近似した形状を呈している。炉の内壁は、切り立っている。炉埋土の上位には拳大の礫が複数据え置かれ、



(A・B・D 断面)

1　埋1層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(1cm弱)混　しまり大　粘性中
(しまりが大きいのは、表土の鉄分を多く含んだ層(床土)の直下で、その影響を受けているためである)

2　埋2a層　暗褐色シルトブロック(数mm～2cm大)　明黄褐色シルトブロック(1cm弱)、黒褐色シルトブロック(5cm大)、
5mm程度のごく小さな炭粒混　しまり中　粘性中

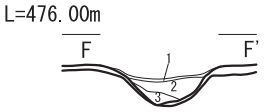
3　埋2b層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(数mm～2cm大)　明黄褐色シルトブロック(1cm弱)、黒褐色シルトブロック(5cm大)
含まれているブロックは2と変わらないが、黒褐色シルトブロックを含む割合が少ないので2より若干色調が明るい
2、3境界に炭化物がある程度まとまって層状に検出されている　しまり中　粘性中

4　埋3a層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(数mm～2cm大)混　5mm程度の小さな炭粒混
床面近くなってベンガラを含んでくるのもこの層である　しまり中　粘性中

5　埋3b層　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロック(数mm～2cm大)混　4に比べてブロックを多く含む　しまり中　粘性中

6　埋4a層　黒褐色シルト　黄褐色シルトブロック(数mm～5cm大)混　ブロックを大量に含んでいる
北西隅ベッド上に堆積していた埋4a層をベッドと間違えたほど、ブロックが多い　しまり中　粘性中　壁際の見事な三角堆積

7　埋4b層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中　壁際の見事な三角堆積



(F 断面)

1　炉埋土　黒色シルト　しまり中　粘性中　炉全体にわたり厚さ2cmくらいで存在している
SB埋3a層とかなり混ざった状態で存在　焼土の粒をわずかに含む

2　第1炉床埋土　褐色シルト　しまり中　粘性中
黒色シルト、黄褐色ロームブロックを多量に含む　炭を含む

3　第2炉床埋土　黒褐色シルト　しまり弱　粘性小　炭の粉のような黒い土を含む　炭を含む

図 364　SB165　床面（1/60）

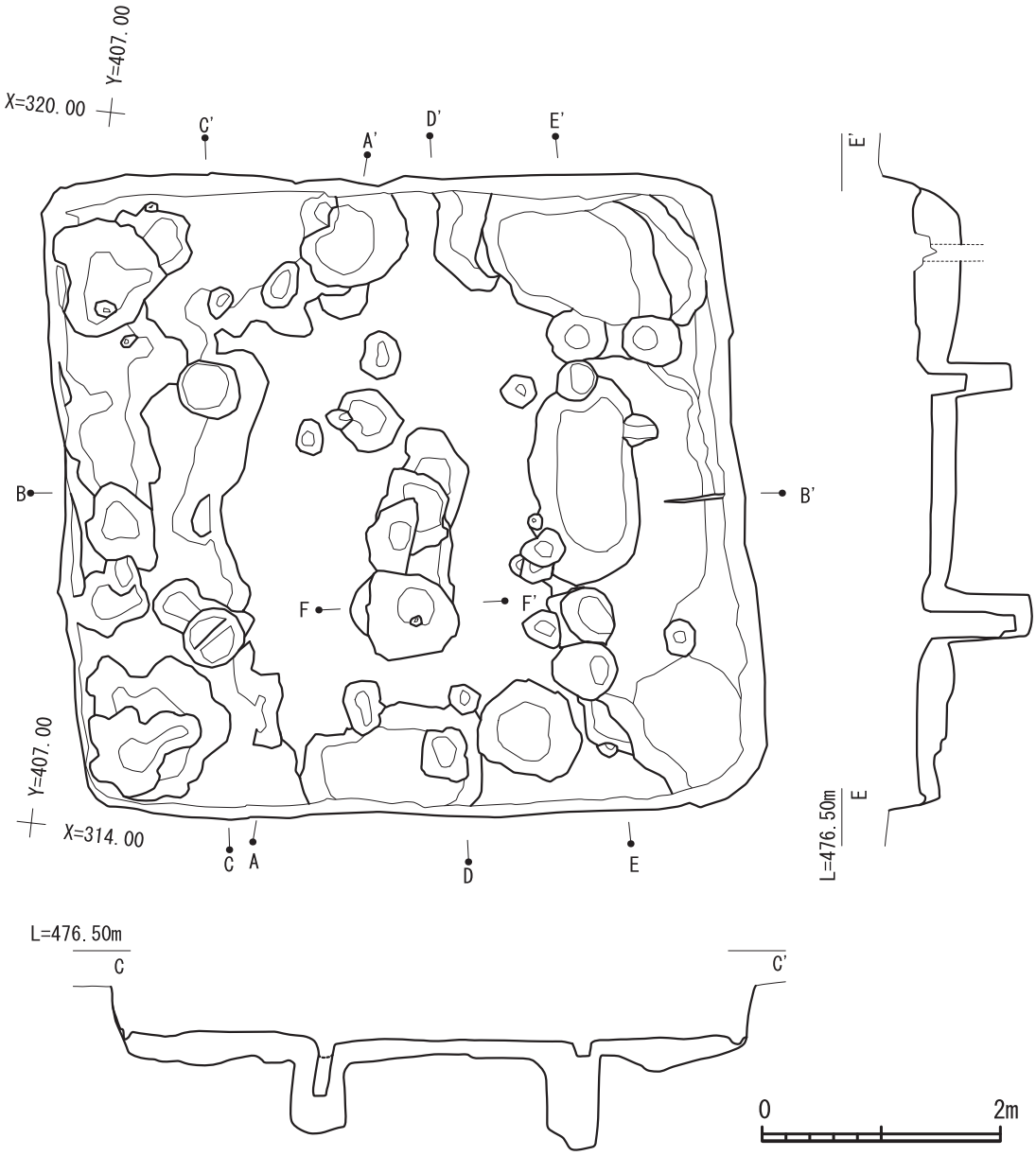


図365　SB165　掘方（1/60）

炉埋土からはガラス小玉が検出されている。

Kピットは長方形を呈し、南側壁に近く、竪穴住居の東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北辺には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピットの土壙は、その底面の西辺、南辺に細長い土壙が複合しており、当該部分を1段深く掘り込んだ形状を呈している。Kピット内には、拳大の礫が多数据え置かれていた。その配置は、概ねKピットの柱穴、炉の東西両端の範囲に収まり、南壁から凹字形を呈して列置されている。炉の上位で検出された礫群と併せると、礫群によって方形プランが形成されることとなる。

ベッド状遺構は南西隅、北西隅に概ね方形を呈して設けられ、西側壁、北側壁、東側壁には張出し部と複合して設置されている。南東隅のベッド状遺構は、通常のベッド状遺構と張出し部に複合したベッド状遺構との中間形態を採り、その側壁下端部は南東主柱穴のラインにまで至っている。南側にはステップとなった

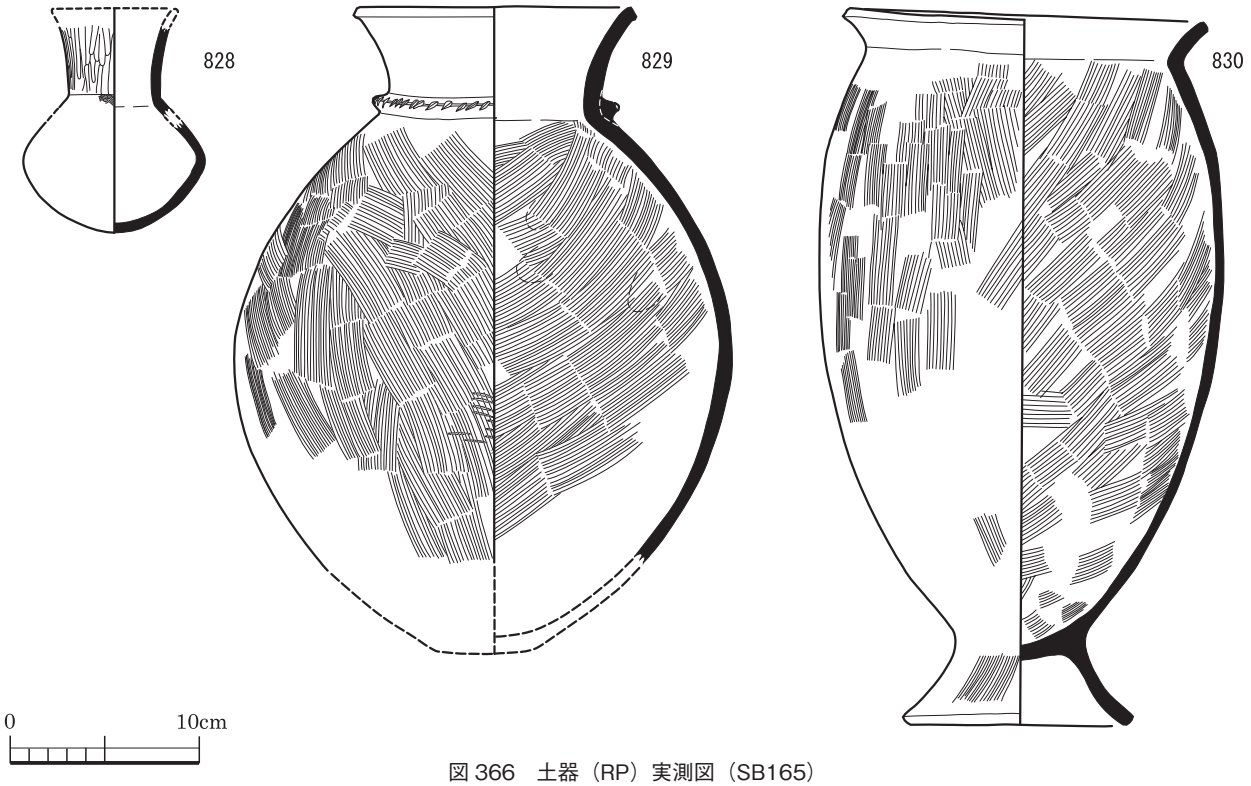


図 366　土器（RP）実測図（SB165）

部分も存在することから、南西隅にあったベッド状遺構が張出し部の増設に伴い形状変更がなされたもの、と判断している。北東隅でもベッド状遺構を確認していないが、同様に竪穴住居の形状変更の結果として、確認できなくなった可能性が高い。

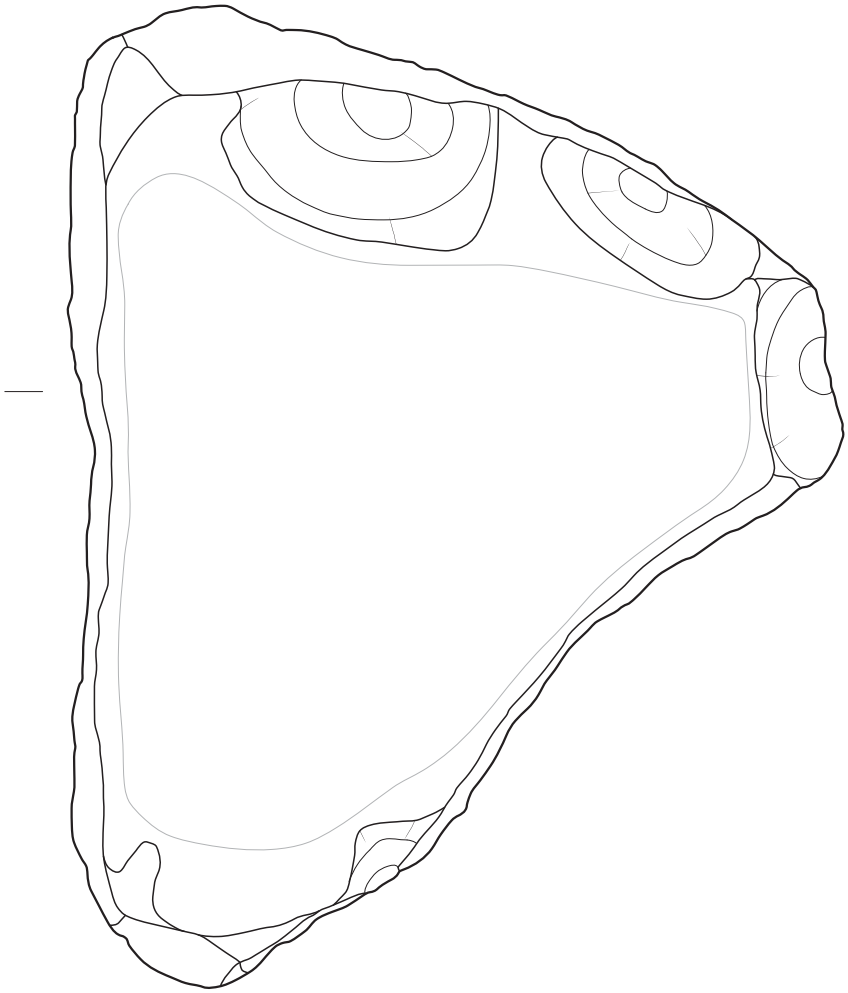
床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。なお、西側壁の張出し部、東側の主柱ラインの近辺では、ベンガラが検出された。また、南西主柱穴と北西主柱穴の間、硬化面と炉から掻きだされた炭の分布範囲の接点には、その上位に石皿が据え置かれていた。

SB161は、次のとおりの廃絶過程を経ている。まず、壁際に三角堆積である埋4層が形成される。次に、炉内の炭は掻きだされ、炉の周囲に散布される。後、主柱が抜き取られ、その排土は抜取り痕の近辺に小山を成す。礫群の据え置き、ベンガラの散布は、直接的な前後関係を把握していないもののKピット内、炉内に埋土が堆積した後の行為であるため、主柱穴抜き取り以後の段階であろう、と判断している。最後に、石皿が据え置かれ、SB161の廃絶は一連の段階を完了し、埋め戻される。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、西辺、北辺、東辺、南辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。張出し部の前面には方形、不整形の土壙が伴っている。竪穴住居全体としては、ロ字形の掘方である。これを掘方2としたい。

掘方段階の調査において、南西主柱穴と北西主柱穴、南東主柱穴と北東主柱穴の中間に新たな柱穴が検出された。また、先の掘方2より内側に、一回り小規模な土壙群の連接状況が観察できる。これを掘方1とする。

掘方1は掘方2の前段階に営まれており、その上部構造として2本柱建ての正方形を呈する竪穴住居を想定することができよう。炉、Kピットは新たに検出されなかったため、掘方1、掘方2の各段階で共用されていたもの、と判断できる。掘方2への移行時には、北に0.8 m、南に0.5 m、東西に欠く0.3 m程度、規模が拡大し、柱建ても2本柱から4本柱へと変化する。北西隅、南西隅のベッド状遺構は規模が拡大し、北東隅、南東隅のベッド状遺構の滅失、張出し部の付設もこの時になされた可能性が高い。



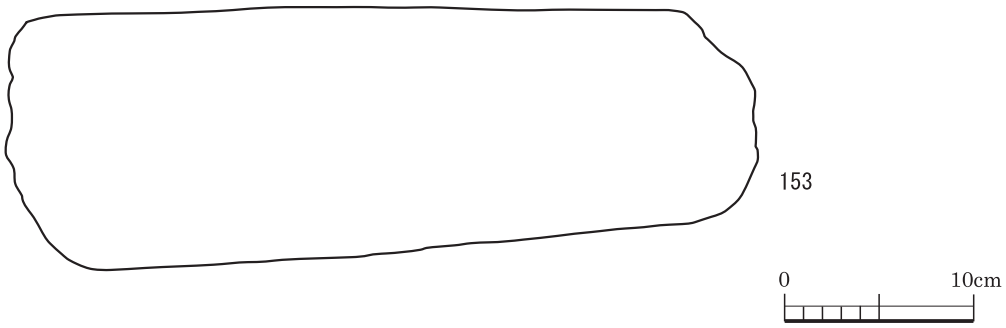
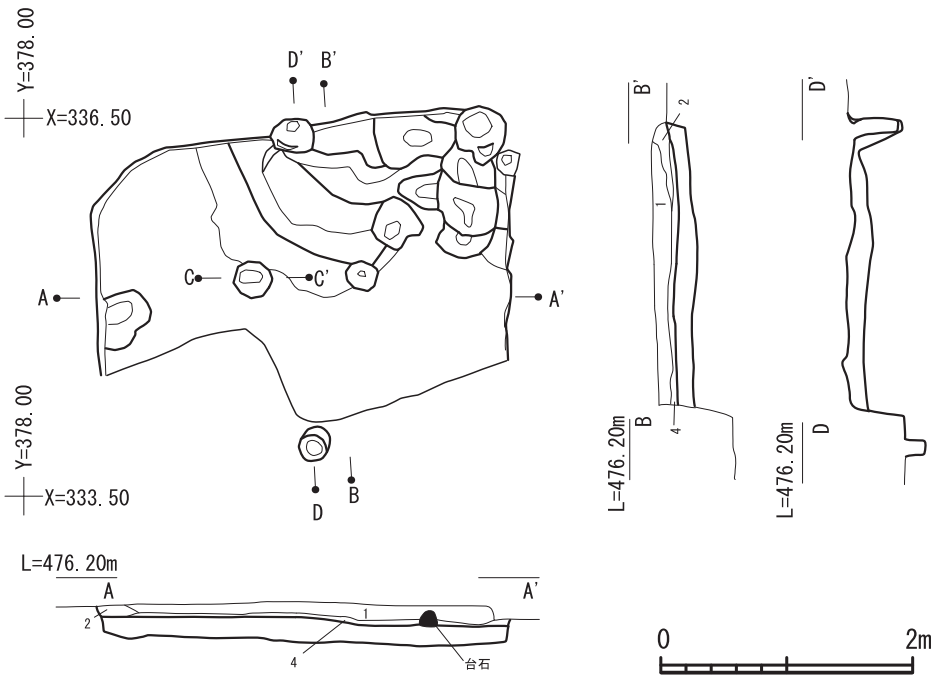
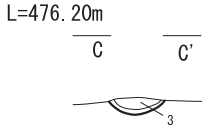


図 367　石器（RQ）実測図（SB165）





(C1/40)

3　炉内埋1層　明褐色～褐色(Hue7.5YR　5/8～4/4)の焼土中に黒褐色シルト(Hue7.5YR　3/2)の混じる層である　微細な炭化物を含む しまり中　粘性小(シルトは中)

1　埋1層　黒褐色シルト(Hue7.5YR　3/2)
0.5～3cmの明褐色ロームブロック、微細な炭化物、橙色の砂粒を少量含む しまり中　粘性中

2　埋2層　黒褐色シルト(Hue7.5YR　3/1)　1より暗めの色をしている　微細な炭化物、1cm以内の明褐色ロームブロックをごく少量含む
1よりややしまりがある　しまり中　粘性中

4　貼床　黒褐色シルト　埋土より明るめの色をしている　微細な炭化物、2cm以内の明褐色ロームブロック、同じく橙色の焼土ブロックを少量含む
2よりしまりがある　しまり中　粘性中

図368　SB166（1/60）

なお、掘方1、掘方2の両段階をつうじて、炉の南端部付近にまで掘削が及ぶが、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB162

SB162は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB162の法量は、南北3.4m、東西3.5m、遺構確認面からの深さ1cmを測る。

主柱穴は、掘方段階の調査で、2基検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えている。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられ、ともに内傾している。各主柱穴を結ぶラインは、竪穴住居の東西側壁と平行である。硬化面は、形成されていない。

炉は、南北50cm、東西70cmの円形を呈し、深さは20cmである。炉は、各主柱穴を結ぶライン上に中心を置き、竪穴住居の中央に位置している。炉はボウル形に掘りくぼめられている。炉の上位には焼土が分布し、炉1層は焼土、炭化物を多く含み、炉2層はほとんど焼土で構成されている。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居全体に均一な床が貼られている。

掘方は、南西隅、北西隅に方形の土壙を掘削し、南辺、西辺、北辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。東辺には溝が切られていないため凹字形の掘方であるが、竪穴住居のプランに対応したもの、と捉えている。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

SB163

SB163は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。SB168と

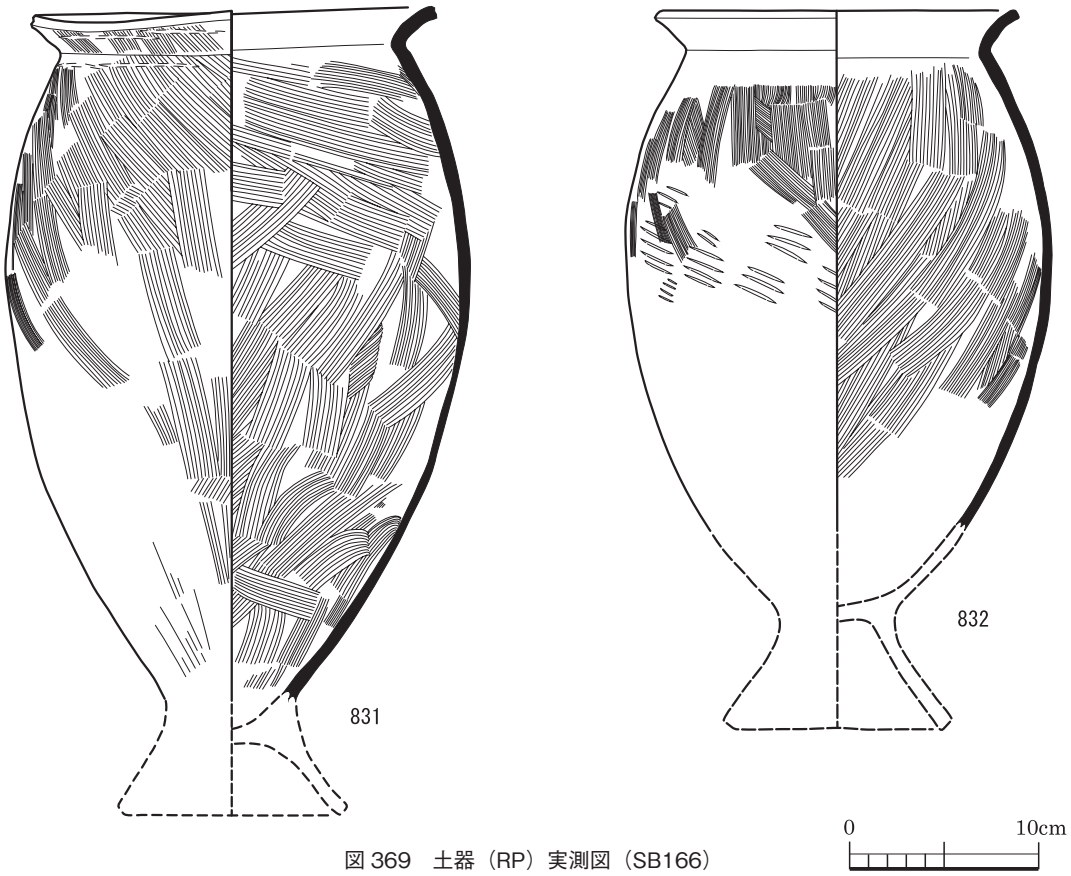


図369　土器（RP）実測図（SB166）

切り合うが、SB168（古）→SB163（新）である。

SB163の法量は、南北6.5ｍ、東西6.5ｍ、遺構確認面からの深さ60cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、西側以外の部分で発達し、南部ではKピット北端まで、東部、北部ではベッド状遺構の上端面にまで形成されている。炉の周囲には、特に硬い硬化面が検出された。その範囲は、炉の北端からKピットの北端まで、南西主柱穴から南東主柱穴までの間である。

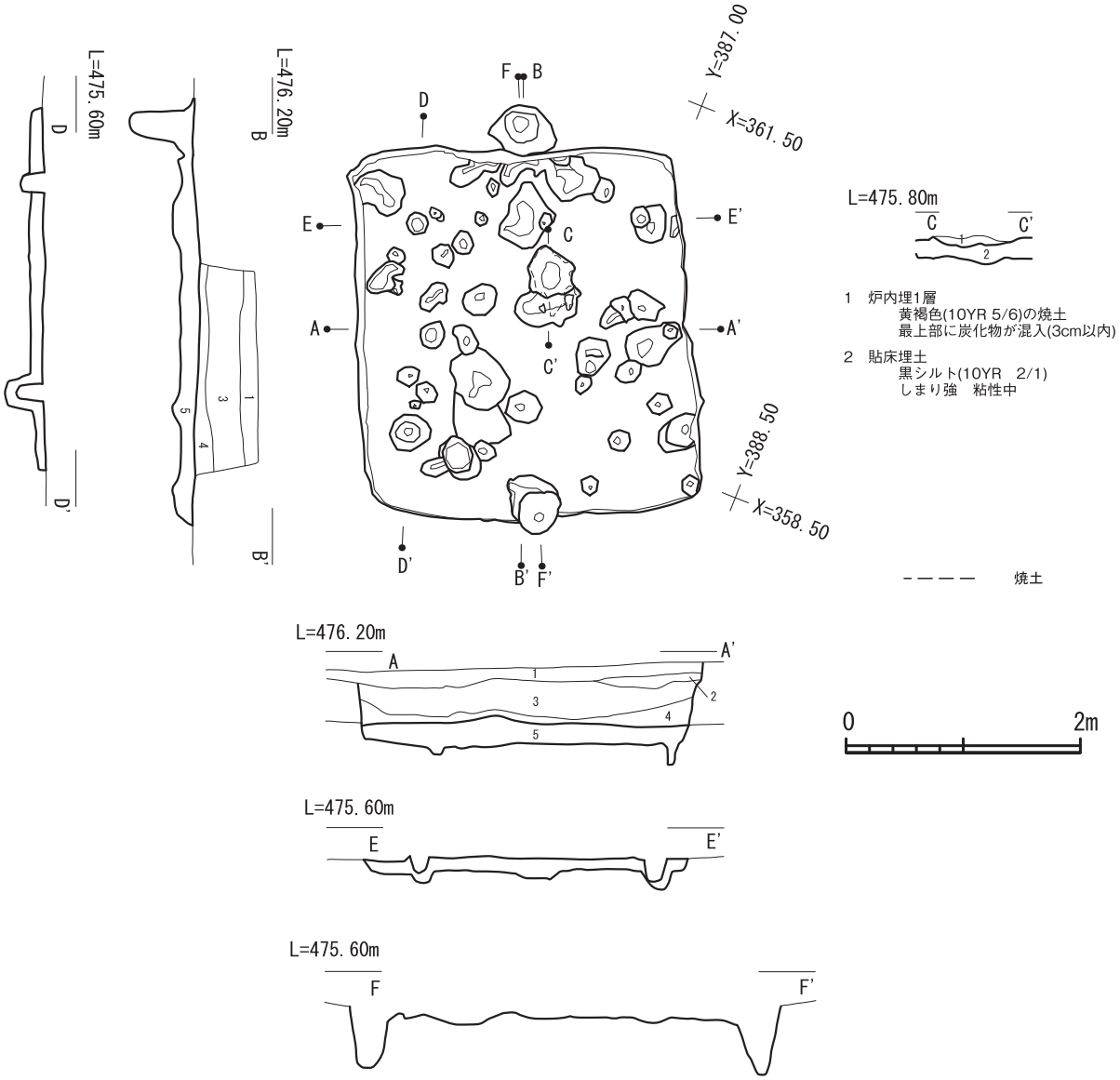
炉は、南北70cm、東西90cmの円形を呈し、深さは25cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に中心を置き、内陣内中央に位置している。炉は僅かな高まりの周堤を有し、炉底は皿形に掘りくぼめられている。炉底には平坦面が形成され、中心部分に小ピットが穿たれている。炉の内壁は、緩やかに上っている。

Kピットは方形を呈し、南側壁付近の竪穴住居中央に位置する。緩やかに掘りくぼめられており、土壙底部の北辺には2基の柱穴が炉の端部に対応する位置に設けられている。Kピットの周囲には、南側壁に接する大規模な方形土壙が、緩やかな斜面をもって形成されており、この土壙とKピットが複合して「Kピット」の位置と役割を担っている可能性を示す状況である。Kピットに備わる2基の柱穴の間では、ベンガラが検出された。

ベッド状遺構は東西南北の各隅に概ね方形を呈して設けられている。北西隅のベッド状遺構は東に伸長している。なお、この伸長部の端、炉とKピットを結ぶライン上の位置に石皿が据え置かれていた。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に方形の土壙を掘削し、竪穴住居の各辺に沿って溝、土壙を掘削して、連接させ

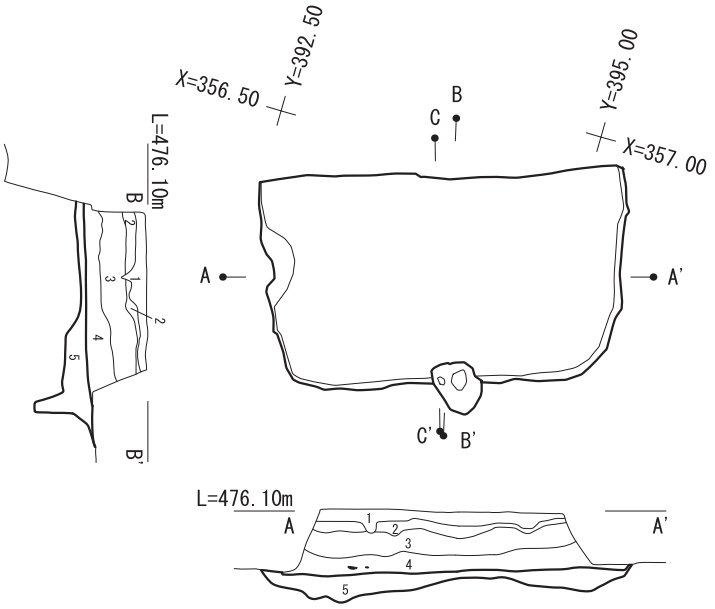


1 2a層 包含層
2 埋1a層 黒褐色シルト(7.5YR 3/1) 埋1b層より黄色を帯び明るい
長さ5mm以内の微細炭化物が混入する しまり弱 粘性小
3 埋1b層 黒シルト(10YR 2/2) 埋1a層より暗い 黄色の強い黒褐色シルトがパッチ状に点在する
長さ5mm～1cmの炭化物を含む しまり中 粘性大
4 埋2層 黒シルト(10YR 2/1) 埋1a層、埋1b層より暗く、黒い
長さ5mm以内の炭化物を最も多く含む シルトではあるが、かなり砂質感がある
φ1mm以内の微小スコリアが点在する しまり強 粘性大
5 貼床埋土 黒シルト(10YR 2/1) しまり強 粘性中

図370 SB167（1/60）

ている。掘方段階の調査では、北東部、南西部に新たな主柱穴が検出され、Kピットの柱穴も2基、新たに確認することができた。このことは、SB163が柱の建替えを伴う規模の改変を受けていることを示している。掘方自体が、竪穴住居の各側壁から内側に位置していることは、この掘方が古い柱建てに伴う掘方である可能性を有している。掘方の最深部は、床面から約10cmの深度である。

図 371　石器（RQ）実測図（SB167）



1　2a層　　包含層である　黒色シルト(Hue10YR　1.7/1)　しまり中　粘性小

2　埋1層　　黒褐色シルト(Hue5YR　2/1)　1より明るい色をしている
しまり中　粘性中　1よりややしまりがある

3　埋2a層　暗褐色シルト(Hue7.5YR　3/3)　最も明るく、赤みの強い色である
微細な(1.0cm弱の)炭化物を多く含み、ごく少量の焼土、砂、ベンガラを含む
しまり中　粘性中　2よりしまりが強い

4　埋2b層　黒褐色シルト(Hue7.5YR　2/2)　3より暗めの色をしているが2より明るい
2cm弱の炭化物を多く含み、ごく少量の焼土ベンガラを含む
しまり中　粘性中　しまりは3より大変強い

5　貼床　　黒褐色シルトに褐色シルトが混じっている　ごく少量、微細な炭化物、焼土粒、石粒を含む
しまり中　粘性中　最もしまりがある

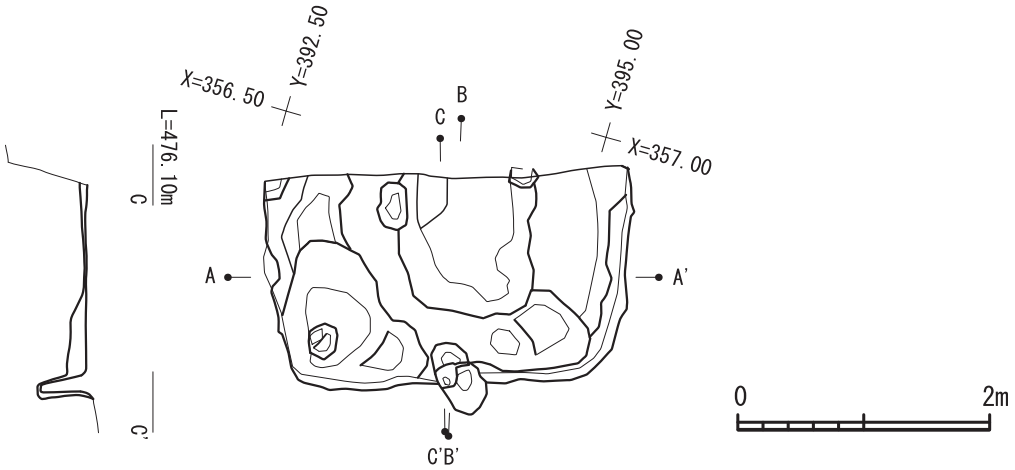


図 372　SB168（ 1/60 ）

SB164

SB164は、長方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB164の法量は、南北3.4 m、東西2.7 m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられ、ともに内傾している。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶラインは、竪穴住居の東西側壁と平行であり、そのライン上の中央にはベンガラが散布されていた。硬化面は、形成されていない。

炉は、ピット3基が複合して、竪穴住居の南西部中央寄りに位置している。主体となるピットは、南北30cm、東西30cmの円形を呈し、深さは10cmである。その北側に2基のピットが複合する。炉内には焼土が堆

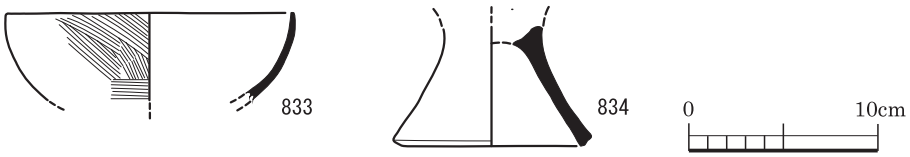


図373　土器（RP）実測図（SB168）

積し、炭化物も周辺に分布していた。炉底は浅いボウル形に掘りくぼめられている。なお、同様のピット群が、炉の南部に1組存在している。この部分においても炭、焼土が検出された。

Kピット、ベッド状遺構は、確認されていない。なお、西側壁北半部は、20cm程度の幅で張り出している。

床は貼床であり、竪穴住居全体に均一な床が貼られている。

掘方は、北西隅、南西隅に土壙を掘削し、西辺に沿って各土壙を延伸させ、連接させている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB165

SB165は、正方形を呈する4本柱建て竪穴住居跡である。炉、Kピット及びベッド状遺構を備える。北側壁、東側壁及び西側壁に張出し部を備える。

SB165の法量は、南北5.3m、東西5.8m、遺構確認面からの深さ50cmを測る。

主柱穴は、2×2の計4基を検出した。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。各主柱穴を結ぶ内陣は、竪穴住居の各側壁と平行に位置し、その内側には概ね内陣に一致する形で硬化面が形成されている。硬化面は、北部、東部で発達し、南部ではKピットを囲み込み南側壁際まで達している。西部では硬化面はあまり形成されていないが、東部ではベッド状遺構の上端面にまで及んでいる。なお、内陣の西端部と、南西隅、北西隅のベッド状遺構の間にはベンガラが散布されている。内陣西端部では、帯状のベンガラが南側壁から北側壁に至るまで散布され、その北端は竪穴住居痕の主軸部分まで屈折し広がっている。また、炉の北側、竪穴住居跡の中央部には、石皿が据え置かれていた。

炉は、南北70cm、東西85cmの円形を呈し、深さは30cmである。炉は、各主柱穴を結ぶ内陣の南辺に接し、内陣内中央に位置している。炉は周堤を有し、炉底は皿形に掘りくぼめられている。周堤は、その上端部に幅10cm程度の平坦面を備えた高まりが、炉の北東部と南西部に付設されている。炉の外部、北半部には、周堤端に沿って炭と焼土が掻きだされていた。

Kピットは不整形を呈し、南側壁に接して東西中央に位置する。しっかりと堀りくぼめられており、北側には2基の柱穴が、炉の端部に対応する位置に設けられている。

ベッド状遺構は、東西南北の各隅に概ね方形を呈して設けられている。整った方形を呈しているのは、北西隅のベッド状遺構のみである。この、ベッド状遺構が不整な方形であるという特徴は、主柱穴との関係に着目すると、一層、顕著なものとなる。北東隅のベッド状遺構は、その内角が曲線で構成され、さらに、内角の南側始点の位置に主柱穴が存在している。ベッド状遺構の内角は、通常、直角であり、その頂点に主柱穴が位置することと対比すると関係性に乱れが生じていることが理解できよう。南西隅、南東隅のベッド状遺構では内角部分には凸凹が生じ、主柱穴は側辺の中に位置しているため、この乱れは、一層、昂進している、と判断できる。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、東西南北の各隅に土壙を掘削し、東西南北の各辺に沿って溝を切り、各土壙を連接させている。ただし、東側壁の壁際には幅30cm程度の空隙が生じていることに留意しておきたい。北辺、南辺が一部途切れるものの、竪穴住居全体としてはロ字形の掘方である。以上を、掘方2とする。

掘方段階の調査では、北東主柱穴、南東主柱穴の西側30cmの位置に、それぞれ1基ずつ、合計2基の柱穴が検出された。これを、掘方1とする。炉、Kピット、西側の主柱穴には異同が認められないため、掘方1か

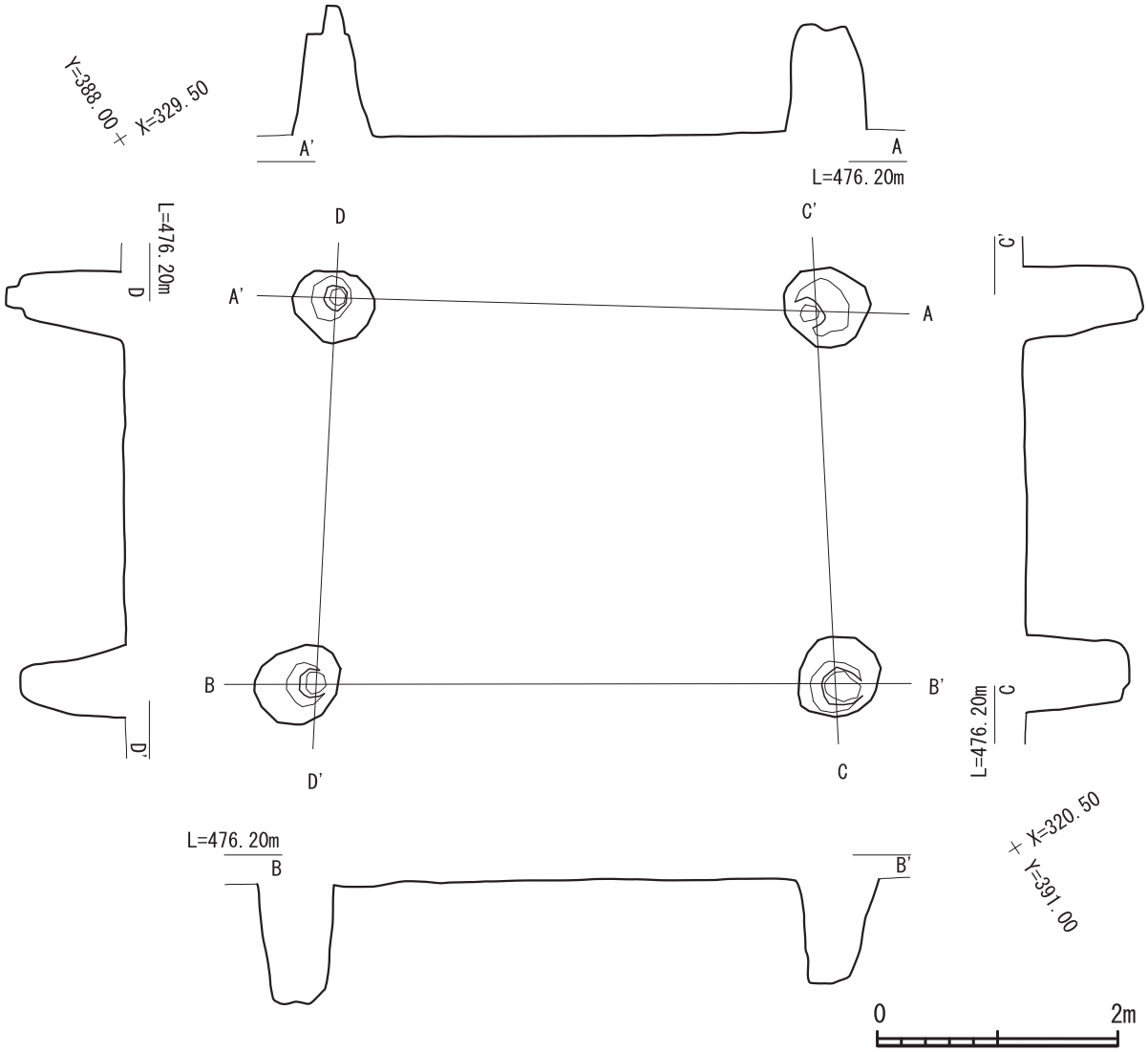


図374　SB171（1/60）

ら掘方2への変化は、東側主柱穴の建替えである。東側壁の壁際に認められた幅30cm程度の空隙は、この柱建ての変更に伴い、竪穴住居が東側へ向かって規模拡大した痕跡である、と判断することができよう。そして、竪穴住居の東半部においてベッド状遺構の形態、配置が不整な様相を呈していたことは、この改変に伴う設備改変の結果である、と判断する。

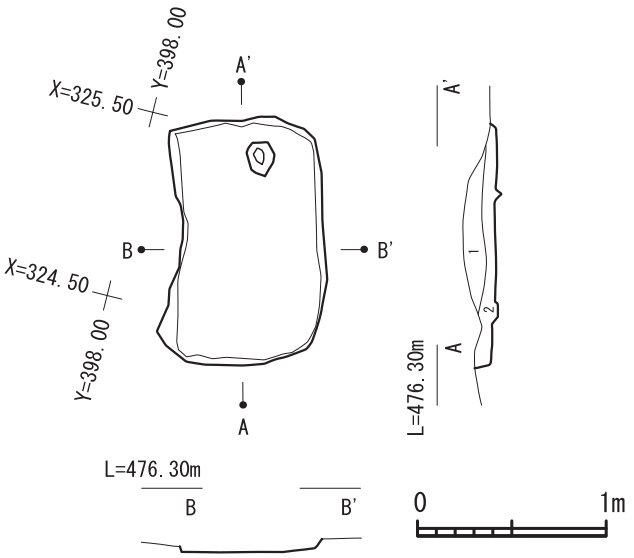
なお、各主柱穴を結んだ内陣に相当する部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約30cmの深度である。

SB166

SB166は、方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。SB161と切り合うが、SB166（古）→SB161（新）である。

SB166の法量は、南北は2.4ｍを確認し、東西3.4ｍ、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。北主柱穴では、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。南主柱穴は、SB161の調査時に対応関係を認め、主柱穴と判断したため、詳細不明である。硬化面は、形成されていない。



1　包含層　黒褐色シルト　しまり中　粘性中
(2a層)　樹根や虫による細かいカクランが入る
SK169そのものの埋土も含まれているが、カクランを受けている様子である
1cm前後の小石が出ている

2　埋1層　黒褐色シルト(1より暗い)　しまり中　粘性中
鉄器が数点出土した　1cm前後の小石が出ている

図375　SK169（1/40）

炉は、南北30cm、東西30cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、竪穴住居の北西部に位置し、炉穴内では焼土、炭化物を検出した。炉底は、ボウル形に掘りくぼめられている。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居全体にほぼ均一な厚さの床が貼られている。

掘方は、北東隅に土壙群を掘削している。その他の部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB167

SB167は、正方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。炉を備える。

SB167の法量は、南北3.2m、東西2.9m、遺構確認面からの深さ2cmを測る。

主柱穴は、2基検出した。各主柱穴は、北側壁、南側壁に接して設けられ、ともに内傾している。いずれの主柱穴も、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。両主柱穴を結ぶラインは、竪穴住居の東西側壁と平行である。なお、東西南北の各側壁から0.5m程度内側では、方形プランを呈する柱穴を4基、確認している。いずれの柱穴も浅く、規模も小さいため主柱穴と判断するには至らない。南北主柱穴を補助する柱であった、と判断する。また、硬化面は、形成されていない。

炉は、南北60cm、東西40cmの円形を呈し、深さは10cmである。炉は、各主柱穴を結ぶライン上、竪穴住居中央のやや北側に位置している。炉底は浅い皿形に掘りくぼめられている。炉穴からは、炭、焼土が検出された。焼土の上には、安山岩が4個、方形の四隅に配置された状況で検出されている。

Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居全体に均一な厚さで床が貼られている。

掘方は、竪穴住居全体を掘り下げ、底部に平坦面を造りだしている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SB168

SB168は、方形を呈する2本柱建て竪穴住居跡である。SB163と切り合うが、SB168（古）→SB163（新）である。

SB168の法量は、南北は1.7mを確認し、東西2.9m、遺構確認面からの深さ2cmを測る。

主柱穴は、1基を検出した。南主柱穴であり、南側壁に接して位置し、内傾している。南主柱穴では、竪穴住居の廃棄に際し柱を抜き取ったと考えられる土層断面を確認している。硬化面は、形成されていない。

炉、Kピット、ベッド状遺構は、確認していない。

床は貼床であり、竪穴住居中央部では薄く、縁辺部では厚く床が貼られている。

掘方は、南東隅、南西隅に土壙を掘削し、東辺、西辺に沿って溝を切り、各土壙を伸長させている。掘方の全体像は不明である。竪穴住居の中央部分は、平らに整えられている。掘方の最深部は、床面から約20cmの深度である。

SK169

SK169は、長方形を呈する土壙である。

SK169の法量は、東西0.8m、南北1.3m、遺構確認面からの深さ10cmを測る。

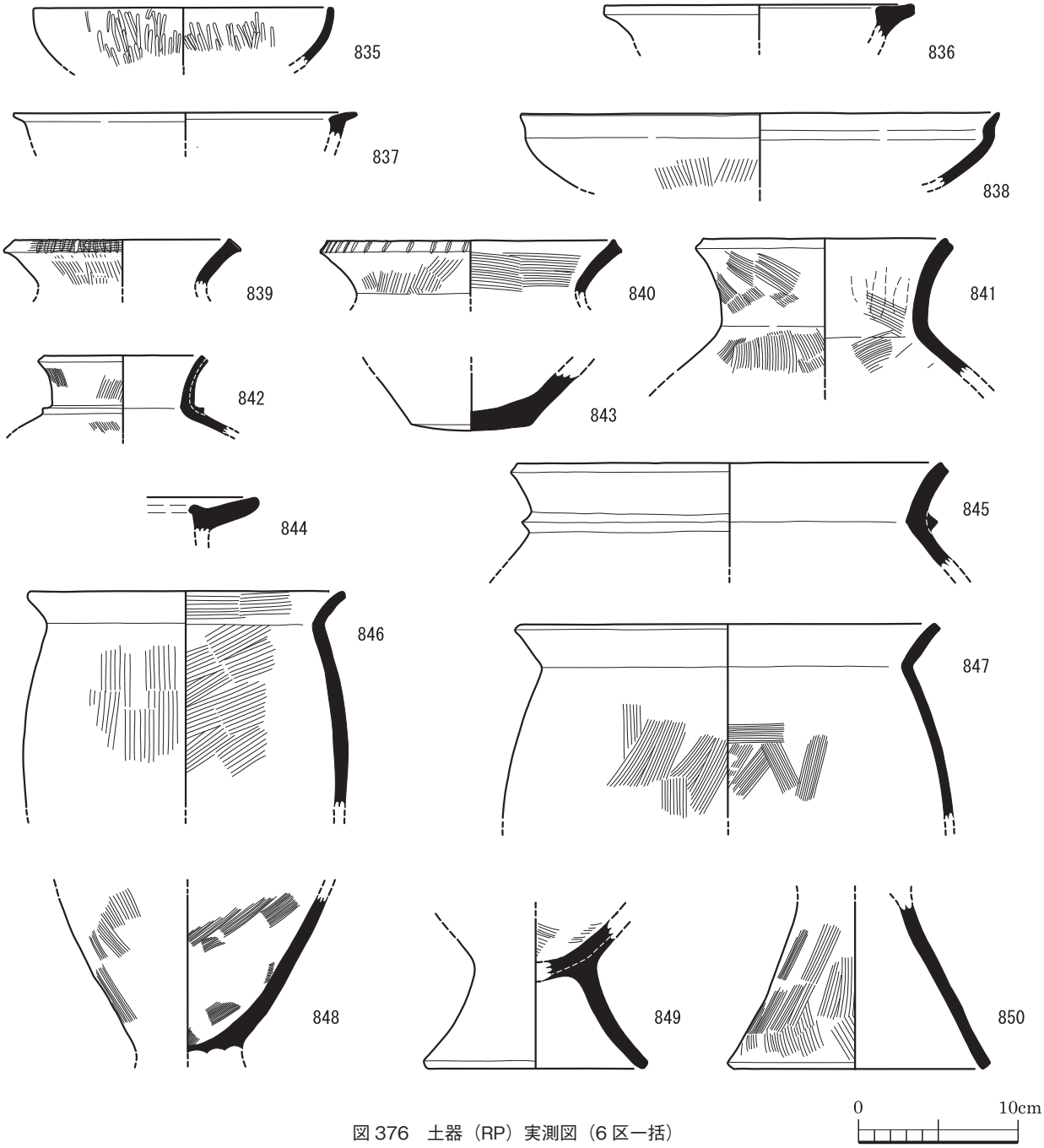


図 376　土器（RP）実測図（6 区一括）

底部は平らに整えられ、北側中央にはピットが穿たれている。

SB171

SB171 は、1 × 1 間の掘立柱建物である。

各柱穴の直径は約 70cm、遺構確認面からの深さ 1m 程度を測り、東西柱間は北側 4.0 m、南側 4.3 m、南北柱間は 3.2 mである。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕跡を確認することはできなかったため、柱抜き取りが行われているものと判断する。なお、各柱穴の底面では直径 15cm 程度の圧痕が検出されており、柱の太さを推測することができる。

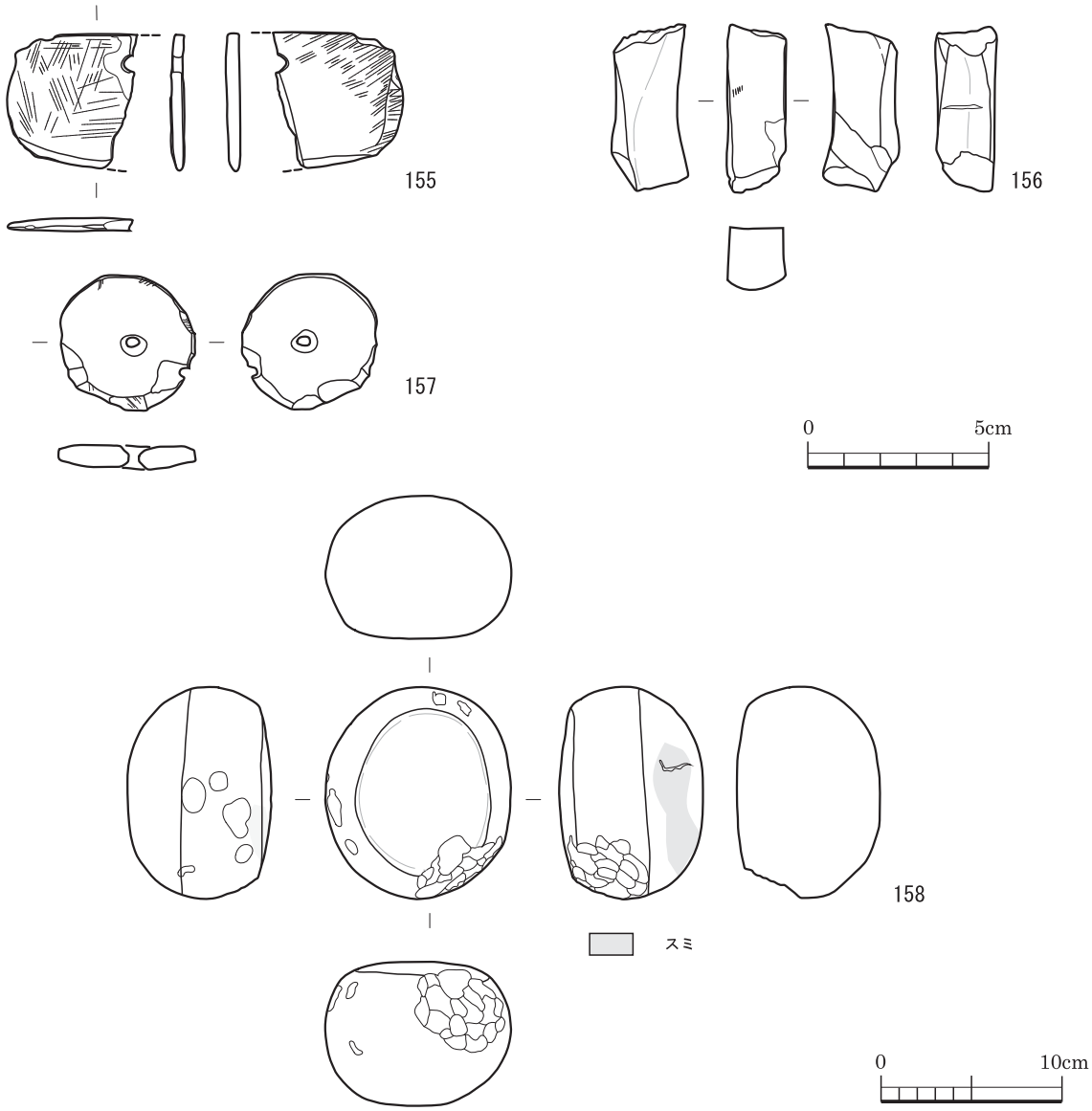


図 377　石器（RQ）実測図（6 区一括）

その他

下扇原遺跡 6 区では、遺構番号 170 を欠番とした。

なお、包含層等から出土した遺物を一括して掲載した。

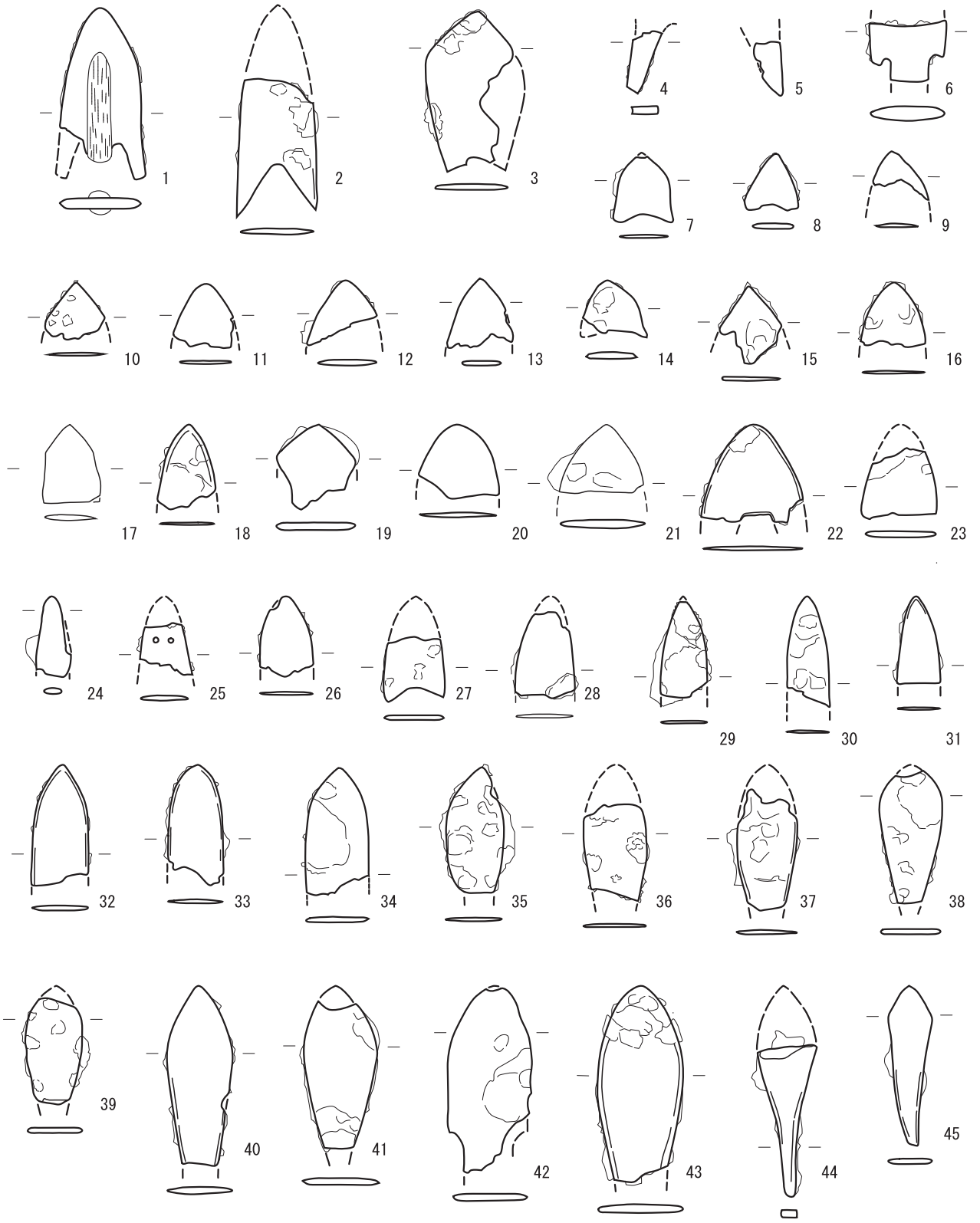


図 378　鉄器（RM）実測図

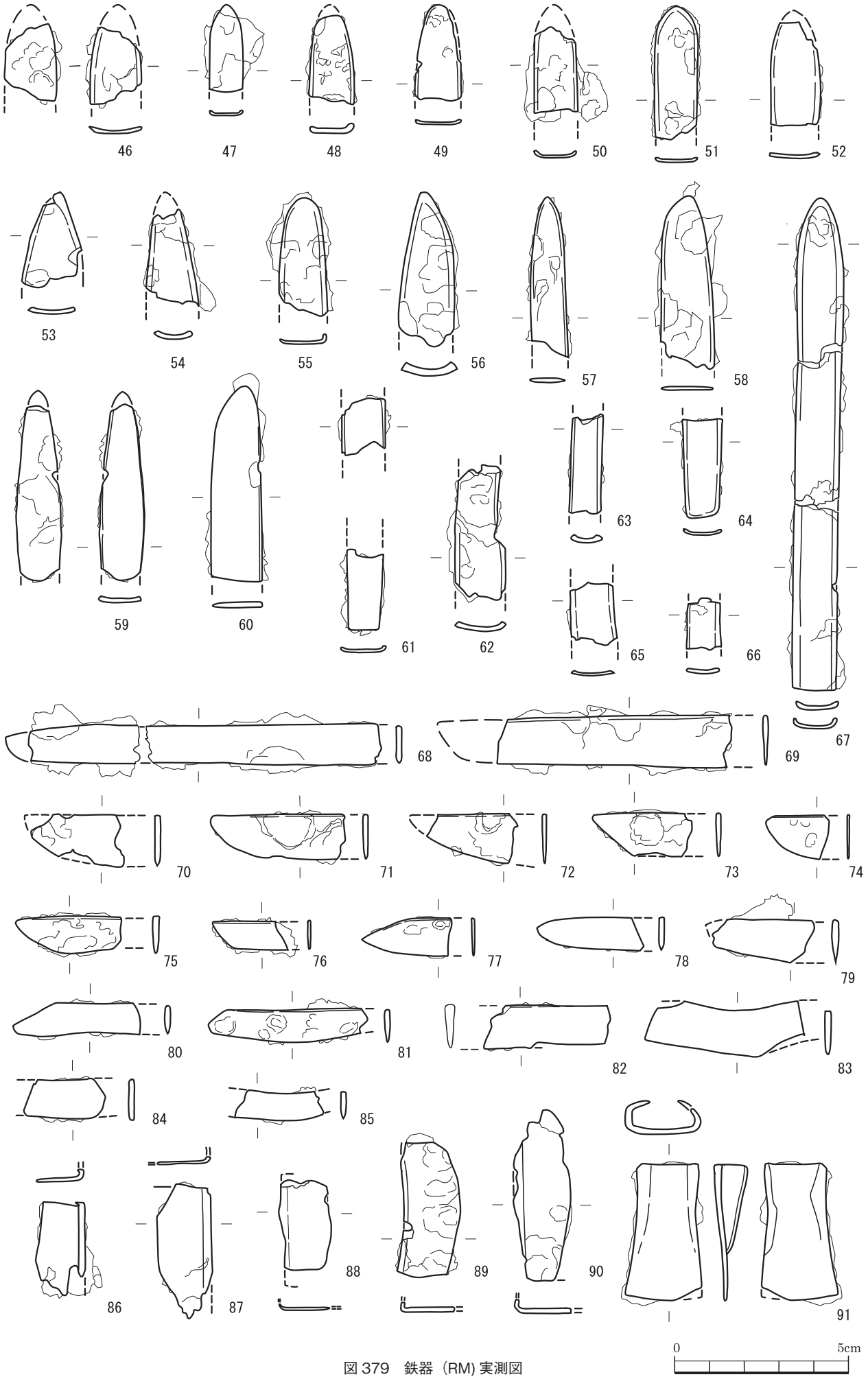


図 379　鉄器（RM）実測図

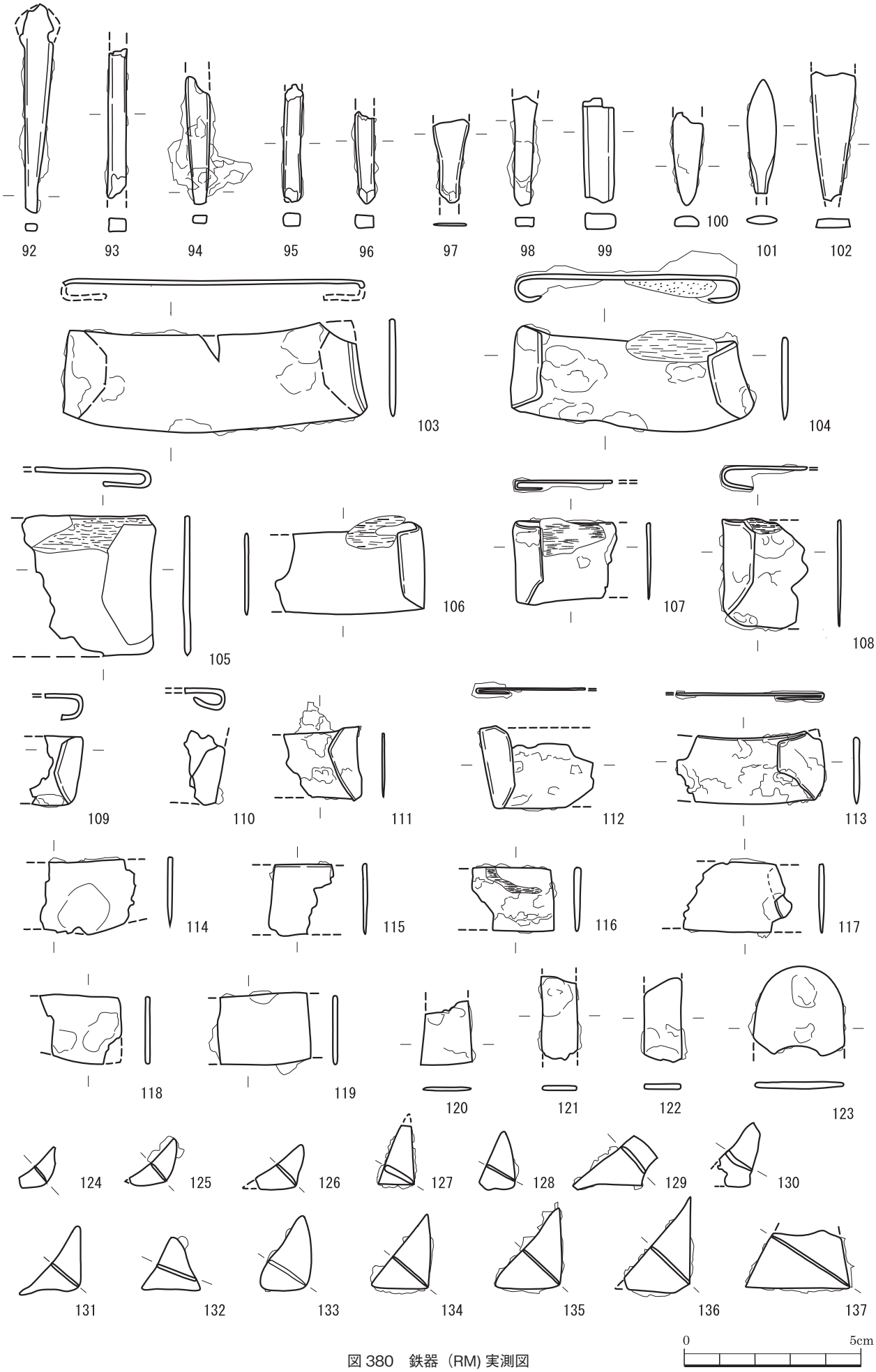


図 380　鉄器（RM）実測図

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
1	1	SB1	埋１層	鉢	20.8		(4.3)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
2	1	SB1	埋１層	壺	17.6		(4.2)	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
3	1	SB1	埋２層	壺	12.6		(3.4)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	口縁の一部のみ残存　反転復元
4	1	SB1		壺	15.0		(9.1)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR5/2	灰黄橙	
5	1	SB1	埋1b層	壺	14.0		(5.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
6	1	SB1	埋２層	壺	16.1		(19.2)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	RP13と同一？
7	1	SB1	埋２層	壺	15.3		(15.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	内器面の腐触が著しい　反転復元
8	1	SB1	埋１層	高坏			(9.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	
9	1	SB1	埋２層	壺		7.8	(3.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR7/6	橙	スス付着
10	1	SB1	2	壺		7.7	(5.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR3/1	黒褐	内器面に黒変
11	1	SB1	埋２層	壺		4.4	(4.4	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
12	1	SB1		壺		6.2	(7.1)	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	スス付着
13	1	SB1	埋２層	壺		7.2	(17.0)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR4/1	褐灰	胴部中心に穿孔あり外面に化粧土 RP6と同一？
14	1	SB1	埋１層	壺		8.2	(18.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
15	1	SB1	1.2 埋1.2層	壺			(17.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/1	褐灰	
16	1	SB1	埋2.3層	甕	22.8		(21.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　口縁端部に工具痕あり
17	1	SB1	埋１層	甕	22.6		4.4	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
18	1	SB1	埋2a層	甕	20.0		(6.1)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	口縁端部に工具痕
19	1	SB1	埋２層	甕	23.0		(6.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
20	1	SB1	埋１層	甕	22.8		(4.2	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
21	1	SB1	埋１層	甕	25.0		(8.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
22	1	SB1	埋２層	甕	21.4		(5.8)	10YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい橙	反転復元
23	1	SB1	埋２層	甕	18.6		(21.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面スス付着に炊きに使用 胴部に指で押さえた凸凹
24	1	SB1	埋２層	甕	17.0		(7.3)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
25	1	SB1	埋２層	甕	15.2		(15.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
26	1	SB1	埋1b層	甕	15.1		(11.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	スス付着　煮炊き痕
27	1	SB1	埋1.2層	甕	20.8		(7.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
28	1	SB1	埋２層	甕			(11.5)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	外面にスス付着内面に煮炊き痕 反転復元
29	1	SB1		甕			14.3	5YR6/6	橙	7.5YR5/3	にぶい褐	反転復元
30	1	SB1	埋１層	甕		11.2	(2.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	胴部と脚部の接合から外れた部分
31	1	SB1	17	甕		10.9	(2.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/2	灰褐	胴部と脚部の接合面に接合強化の為、 刻目が施してある
32	1	SB1	埋２層	甕		12.6	(3.7)	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外凹面に砂付着　反転復元
33	1	SB1	埋１ａ層	甕		15.2	(4.5	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
34	1	SB1	埋２層	甕		13.2	(6.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部の一部のみ残存　反転復元
35	1	SB1	埋２層	甕		12.0	(5.8)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
36	1	SB1	2.6. 埋1.2層	甕	15.6	11.0	29.4	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着 脚部より上に11㎝の位置まで 埋まっていた跡
37	1	SB1	埋２層	甕	18.8	11.1	35.4	10YR7/3	にぶい黄橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　反転復元
38	1	SB1	13.18 埋2.1b層	甕	20.0	12.2	(35.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	脚部欠損　内外面にスス付着 粘土のつなぎ痕
39	1	SB2	埋１層	壺	15.2		(5.5)	5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	反転復元
40	1	SB2	埋２層	壺	14.0		(5.0)	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	反転復元
41	1	SB2	埋１層	甕	24.0		(3.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
42	1	SB2	埋１層	甕		13.0	(23.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	口縁・脚部欠損
43	1	SB2	埋２層	甕		16.6	(10.0)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部一部欠損
44	1	SB3	埋１層	鉢		7.1	(1.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR6/3	にぶい黄橙	反転復元
45	1	SB3	埋１層	鉢	16.6	2.0	(9.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	反転復元
46	1	SB3 SB11	Kpit埋２層	壺	10.2		(3.6)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
47	1	SB3	埋１層	甕	18.2		(3.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	スス付着
48	1	SB3	埋１層	甕	16.6		(3.5)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
49	1	SB3	埋１層	甕	22.3		(2.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
50	1	SB3		甕	21.8		(4.8	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
51	1	SB3	埋１層	甕	21.8		(2.8)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
52	1	SB3	埋１層	甕			(2.7)	10YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい橙	外凹面に砂付着
53	1	SB3	埋１層	甕	12.3		(6.6)	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	スス付着　外凹面に砂付着
54	1	SB3	埋１層	甕	19.3	13.1	(34.7)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部一部欠損　スス付着 粘土のつなぎ目
55	1	SB4	108.149	ジョッキ形	10.9	11.0	(7.9)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	貼付把手
56	1	SB4		鉢	10.0		(9.6)	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部に黒班
57	1	SB4	埋１層	鉢	18.9	3.7	9.5	5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	施文具痕
58	1	SB4		鉢	12.8	14.0	24.5	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	脚部一部欠損
59	1	SB4	埋２層	高坏	23.6		(10.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	内底面に敲打痕
60	1	SB4	埋２層	高坏	24.7		(4.5)	5YR5/6	明赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐	内器面に放射線状の暗文
61	1	SB4		高坏	31.4		(3.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
62	1	SB4	埋２層	高坏	23.7	15.6	22.9	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい黄橙	頸部欠損　脚部に穿孔４箇所穿孔 内器面暗文
63	1	SB4	28	高坏	22.6		(3.8)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	放射線状の暗文　黒変あり
64	1	SB4	埋１層	高坏	23.3		(3.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	内器面に放射線状の暗文
65	1	SB4	埋２層	高坏	25.0		(3.5)	7.5YR5/6	明赤褐	5YR6/8	橙	V 字状暗文　反転復元
66	1	SB4	60.68.69 77.83	高坏	27.2		(17.9)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR6/6	橙	口唇部に V 字型暗文　脚部欠損
67	1	SB4	埋２層	高坏	32.3	17.8	26.0	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部穿孔４箇所　口唇部に V 字型暗文 内器面に放射線状の暗文
68	1	SB4	埋２層	壺	16.2		(2.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	刻目文
69	1	SB4	埋２層	壺	15.6		(3.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
70	1	SB4		壺	15.9		(4.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
71	1	SB4	埋２層	壺	19.2		(2.5)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外面にスス付着
72	1	SB4		壺	16.1		(10.1)	5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	反転復元
73	1	SB4	14	壺			(6.2)	7,5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	櫛描直線文・櫛描波状文　反転復元
74	1	SB4	2a 層	壺		5.0	(44.6)	7.5YR5/6	明褐	10YR6/6	橙	口縁欠損
75	1	SB4	埋 2.2b 層	壺		5.2	(16.1)	5YR4/4	にぶい赤褐	5YR5/6	明赤褐	外面に薄い黒班
76	1	SB4	埋 2b 層 SB11	壺		7.5	(6.3)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	内面の一部黒変　外面にスス付着
77	1	SB4	15	壺		7.2	(7.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
78	1	SB4	45	壺		5.3	(4.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/3	にぶい褐	スス付着　内器に黒変
79	1	SB4	30.31	甕	17.8		(6.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
80	1	SB4	埋２層	甕	16.2		(6.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	口唇端部に施文具痕
81	1	SB4	42	甕	14.6		(6.8)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	スス付着
82	1	SB4	44	甕	14.2		(6.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着 煮炊きに使用されたと思われる
83	1	SB4	埋１層	甕	19.6		(6.7)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	口縁端部に工具痕
84	1	SB4	埋 2.2a 層	甕	18.4		(7.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着
85	1	SB4	18 . 埋４層	甕	19.0		(9.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄褐	反転復元
86	1	SB4	埋２層	甕	17.4		(8.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外面にスス付着
87	1	SB4	埋２層	甕	18.6		(11.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	スス付着
88	1	SB4	137	甕	16.8		(4.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
89	1	SB4	埋 2.2a 層	甕	15.2		(16.6)	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
90	1	SB4	埋１層	甕	19.8		(3.6)	7.5YR7/6	橙	10YR7/6	橙	反転復元
91	1	SB4	埋２層	甕	17.0		(20.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
92	1	SB4	埋２層	甕			(24.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	スス付着　粘土痕
93	1	SB4	埋２層	甕		11.4	(6.9)	10YR8/4	浅黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	
94	1	SB4	埋１層	甕		11.0	(6.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/2	灰褐	外凹面に重ね土砂
95	1	SB4	埋２層	甕		14.7	(4.1)	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/6	橙	反転復元
96	1	SB4	埋２層	甕		11.3	(15.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外面スス付着　指頭圧痕
97	1	SB4	埋２層	甕		13.2	(5.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
98	1	SB4	埋１層	甕		14.0	(4.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外凹面に砂付着
99	1	SB4	埋 1.2 層	甕		13.2	(3.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
100	1	SB4	埋２層	甕		14.0	(5.9)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部一部残存
101	1	SB4	1	甕		14.8	(7.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
102	1	SB4	66	甕		11.4	(6.3)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
103	1	SB4	3.7.57.130 埋 1.2 層	甕	19.3	11.8	36.2	10YR6/3	にぶい黄橙	7.5YR6/6	橙	

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
104	1	SB4	埋２層	甕	17.7	11.6	32.7	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外面にスス付着 外凹面に砂付着指頭圧痕
105	1	SB5	埋１層	甕	19.2		(6.5)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
106	1	SB5	埋１層	甕	17.0		(6.9)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	外面にスス付着　反転復元
107	1	SB5	埋１層	甕			(4.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部外凹面に砂粒付着
108	1	SB5.6 SK93	埋１層	壺	20.2		(4.6)	5YR6/6	橙	5YR7/6	橙	複合口縁壷（安国寺）　櫛描波状文
109	1	SB6	埋２層	壺	15.4	2.4	(14.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/6	明黄褐	口縁欠損　ベンガラ　スス付着
110	1	SB6	埋１層	高坏	21.4		(3.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR2/1	黒	暗文　黒色土器？黒班？
111	1	SB6	埋２層	高坏		22.4	(3.3)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
112	1	SB6	埋２ｃ層	壺			(7.5)	7.5YR6/6	橙	10YR6/4	にぶい黄橙	貼付突帯文　貼付浮文刻目
113	1	SB6	埋１層	壺		7.6	(4.6)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
114	1	SB6	埋2.2a 層	甕	23.6		(2.8)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	刻目文　反転復元
115	1	SB6	埋１層	甕	23.0		(3.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
116	1	SB6	埋２層	甕	21.4		(7.9)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
117	1	SB6	埋２層	甕		13.8	(3.5)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	反転復元
118	1	SB6	埋２層	甕		12.0	(6.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
119	1	SB7	埋２層	壺	9.5		27.5	7.5YR6/6	橙	10YR7/4	にぶい黄橙	ベンガラ付着　スス付着 凹線文　重弧文　指頭痕
120	1	SB7	129.130 131 他	壺	13.1	6.6	39.8	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	一部に黒班　口唇部に工具よるナデ
121	1	SB7	84.146 147.191	壺	14.6	6.0	23.1	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	胴部外面に黒班　内器面に指頭痕
122	1	SB7		壺	15.6	8.0	46.9	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	ベンガラ付着 ヘラ工具による掻き上げ
123	1	SB7	埋 1.2 層	ジョッキ形	10.8		(7.4)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
124	1	SB7	埋２層	壺	13.7		(4.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	貼付突帯キザメ目文
125	1	SB7	埋２層	壺	6.9		(5.8)	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	櫛描波状文
126	1	SB7	埋２層	壺	20.0		(5.2)	10YR7/6	明黄褐	10YR7/4	にぶい黄橙	口唇部に刻目文　反転復元
127	1	SB7	埋１層	壺	14.6		(2.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	口唇部に刻目文　反転復元
128	1	SB7	埋２層	鉢	12.0		(3.7)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	口縁端部を指でつまみ出し　反転復元
129	1	SB7	134.187	鉢	20.0	10.9	(10.0)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/6	明褐	片口あり　反転復元
130	1	SB7 SB11	埋 1.2 層	高坏	34.2		(4.1)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
131	1	SB7	埋１層	高坏			(2.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	口縁部の一部（破片）
132	1	SB7		甕	17.5		(18.6)	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR7/4	にぶい橙	スス付着
133	1	SB7	埋１層	甕	22.00		(4.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
134	1	SB7	埋２層 炉２層	甕	12.6		(7.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	外面にスス付着　反転復元
135	1	SB7	85.117 123 他	甕	21.3		(27.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	内外面全体にスス付着
136	1	SB7		甕	20.8		(35.8)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着
137	1	SB7	205.209	甕	14.5	10.7		10YR6/3	にぶい黄橙	10YR3/4	暗褐	
138	1	SB7	埋２層	甕		10.9	(8.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR6/3	にぶい褐	外面にスス付着
139	1	SB7		甕		13.4	(9.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	5YR6/6	橙	スス付着　底部外凹面砂付着
140	1	SB7	埋２層	甕		12.0	(9.0)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙等	スス付着
141	1	SB7	埋２層	甕	21.0	13.0	42.6	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	スス付着　底部外凹面に砂付着
142	1	SB7	34.35.49 他	甕	19.8	11.9	45.0	7.5YR7/6	橙	5YR6/6	橙	外面にベンガラが付着　スス付着
143	1	SB7	4.10.14 他 埋２層	甕	22.3	13.6	50.8	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	黒班あり外面にベンガラ付着
144	1	SB7	埋２層	甕	19.8	12.1	40.9	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	内外面にスス付着 ベンガラ所どころ付着
145	1	SB7		甕	20.4	12.7	44.8	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部以外はスス付着
146	1	SB7	16.88.76 他	甕	21.9	13.7	42.8	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面に煮炊き痕　スス付着
147	1	SB7	埋２層	甕	20.3	12.7	49.3	5YR6/6	橙	5YR7/6	橙	スス付着　外凹面に砂付着 脚部にベンガラ付着
148	1	SB7	埋２層 5.8.12.32 他	甕	21.0	12.8	41.5	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	内器面にベンガラ付着　反転復元
149	1	SB7	90 100 ～ 106	甕	18.0	11.2	34.9	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　内器面粘土痕 ふきこぼれの様な痕跡

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
150	1	SB7	柱抜取痕内	甕	13.7	9.8	24.9	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着
151	1	SB8	埋２層	甕			(5.7)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	スス付着・底部外凹面に砂付
152	1	SB9	埋１層	壺	12.6		(8.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/4	褐	反転復元
153	1	SB9	埋１層	甕	19.2		(16.7)	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	スス付着
154	1	SB10	埋１層	甕	18.2		(2.7)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
155	1	SB10	埋１層	甕	23.2		(3.0)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	反転復元
156	1	SB11	埋１層	尖底土器			(3.5)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
157	1	SB11		ミニチュア		2.5	(6.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	つまみ出し高台　一部復元　黒班あり
158	1	SB11	埋２層	高坏			(6.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部のみ残存　内面ヘラで描き出し
159	1	SB11	埋1.2層	高坏	32.2		(5.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内口唇部に刻目文　放射線状のミガキ
160	1	SB11		高坏	28.2		(2.2)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	反転復元
161	1	SB11	埋２層	高坏	25.8		(4.1)	5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	反転復元
162	1	SB11	埋1.2層	高坏			(9.0)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	しぼり痕　黒班あり　反転復元
163	1	SB11	埋２層	壺	11.2		10.9	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着　指頭圧痕
164	1	SB11	埋２層	壺	10.2		(6.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	内器面指頭圧痕　反転復元
165	1	SB11	埋１層	壺	12.2		(3.1)	7.5YR6/2	灰褐	7.5YR6/2	灰褐	反転復元
166	1	SB11	埋１層	壺	7.3		(6.0)	5YR5/6	明赤褐	5YR6/4	にぶい橙	櫛描波状文　反転復元
167	1	SB11	埋２層	壺	13.0		(9.8)	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	内面に指頭圧痕
168	1	SB11	埋１層	壺	12.4		(4.1)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	反転復元
169	1	SB11	埋１層	壺	16.0		(3.9)	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	口縁端部に２条の刻目文
170	1	SB11	埋２層	壺	15.6		(5.9)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口縁端部につまみ出し　反転復元
171	1	SB11	埋２層	壺			(3.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	櫛描波状文　櫛描直線文　反転復元
172	1	SB11	埋１層	壺	14.5	5.7	28.2	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
173	1	SB11	7	壺		4.0	(6.8)	5YR5/4	にぶい赤褐	10YR5/2	灰黄褐	重弧文　刻目文　スス付着
174	1	SB11	埋２層	壺			(14.5)	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	櫛描波状文　櫛描直線文　反転復元
175	1	SB11	埋2a層	壺	13.7		(19.9)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	スス付着　反転復元
176	1	SB11	2a層	壺	20.0	8.0	51.7	5YR6/6	橙	5.7YR6/6	橙	貼付突帯刻目文
177	1	SB11	埋１層	甕	28.0		(4.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	口縁端部に刻目文　反転復元
178	1	SB11	埋２層	甕	22.2		(4.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
179	1	SB11	埋１層	甕	18.8		(6.2)	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい橙	反転復元
180	1	SB11	埋２層	甕	20.4		(10.4)	7.5YR7/8	黄橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
181	1	SB11	埋２層	壺		5.0	(3.1)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
182	1	SB11	埋１層	壺		4.8	(1.9)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
183	1	SB11	埋１層	壺		9.6	(2.8)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	反転復元
184	1	SB11	埋2.2a層	甕	19.0		(6.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　反転復元
185	1	SB11	140	甕	16.6		(4.6)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	廃棄後に黒変？　反転復元
186	1	SB11	埋2.2a層	甕			(10.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
187	1	SB11	埋２層	甕			(20.5)	7.5YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
188	1	SB11	埋１層	甕		8.3	(2.9)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
189	1	SB11	埋１層	甕		15.6	(3.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
190	1	SB11	埋１層	甕		12.4	(6.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	外凹面に砂粒付着　反転復元
191	1	SB11	埋２層	甕		13.4	(7.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	外凹面に砂粒付着
192	1	SB11	埋２層	甕		12.7	(6.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂粒付着
193	1	SB11	埋２層	甕		11.7	(6.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
194	1	SB11	埋２層	甕		13.4	(7.3)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	橙	外凹面に砂付着　内器面に指頭圧痕
195	1	SB11	埋1.2a層	甕		13.0	(8.5)	5YR4/4	にぶい赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐	反転復元
196	1	SB11	埋２層	甕		14.5	(9.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/3	にぶい黄橙	
197	1	SB11	埋２層	甕		14.4	(7.4)	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
198	1	SB12	埋１層	壺	13.4		(2.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
199	1	SB13	埋1.2層	高坏	24.2		3.4	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
200	1	SB15	埋１層	高坏			(11.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	掻きだし
201	1	SB17	埋１層	甕			(20.8)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR5/4	にぶい赤褐	ベンガラ付着　反転復元
202	1	SB17	埋１層	甕		12.5	(23.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	スス付着　反転復元
203	1	SB17	埋１層	甕	23.5		(35.0)	5YR5/3	にぶい赤褐	o	明赤褐	スス付着　反転復元
204	1	SB17	埋１層	甕		14.8	(21.0)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
205	1	SB18		甕	22.6		(8.0)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
206	1	SB18	埋１層	甕	20.6		(8.5)	10YR8/4	浅黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	反転復元
207	1	SB18	埋1.2層	甕	19.1	12.1	41.9	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR2/1	黒	
208	1	SB19	埋1.3層	ジョッキ形	13.0	14.0	(9.2)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	把手～底部にかけて残存　全体を復元
209	1	SB19	58	壺	14.8		(22.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR5/4	にぶい褐	外面内面に黒変あり　反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
210	1	SB19	埋２層	鉢	19.8		(1.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
211	1	SB19	26 埋２層	壺	11.2		(3.7)	7.5YR7/4	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
212	1	SB19	埋２層	高坏	24.4		(3.9)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	反転復元
213	1	SB19	埋 1b 層	高坏	26.0		(1.8)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
214	1	SB19	埋３層	高坏		16.2	(4.3)	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元　穿孔一箇所残存する
215	1	SB19	埋３層	甕	16.8	10.5	(30.6)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	反転復元
216	1	SB19	埋 1b 層	甕	20.6		(5.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
217	1	SB19	71	甕	21.6		(3.1)	10YR5/3	にぶい黄褐	7.5YR7/6	橙	外面に黒変あり　反転復元
218	1	SB19	埋３層	甕	18.4		(7.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
219	1	SB19	46.48.68 埋２層	甕	18.6		(8.6)	7.5YR4/6	褐	7.5YR6/6	橙	反転復元
220	1	SB19	12.32 埋２層	甕	19.4		(14.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	口縁端部に施文具痕　反転復元
221	1	SB19	埋３層	甕	18.8		(6.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　反転復元
222	1	SB19	73	甕	18.4		(6.0)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	反転復元
223	1	SB19	埋３層	甕	26.2		(9.5)	7.5YR6/6	橙	10YR5/2	灰黄褐	反転復元
224	1	SB19	埋２層	甕		12.2	(4.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
225	1	SB19	埋３層	甕		13.4	(7.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
226	1	SB19	埋３層	甕	17.0	11.7	(29.6)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外面に煤スス付着
227	1	SB19	66.67.69	甕			(17.8)	10YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	外面に黒班あり　反転復元
228	1	SB19	82	甕			(12.0)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR3/1	黒褐	
229	1	SB20		甕	24.1	14.5	46.0	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	胴部全体にスス付着
230	2	SB20 SB28		甕	22.8		(5.8)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
231	1	SB20	6.7.11 他	甕	18.9	11.1	36.9	10YR7/3	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	煮炊き痕　スス付着　脚部に指圧痕
232	1	SB20	23.28 30.33 他	甕	21.1	15.0	49.9	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部から 30㎝位まで土中に埋めてあり 外面ににスス付着
233	1	SB22	4	甕	20.7		(17.9)	7.5YR6/6	橙	7.5YR5/6	明赤褐	内外面に黒班　反転復元
234	1	SB22	5	甕	19.4		(2.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
235	1	SB22	3	甕		12.4	(4.2)	10YR7/6	明黄褐	5YR5/4	にぶい赤褐	外凹面に砂付着　反転復元　黒変
236	1	SX16	埋１層	甕	21.2		(12.0)	7.5YR 6/4	にぶい橙	7.5YR 6/4	にぶい橙	反転復元
237	1	SX16	埋１層	甕		14.4	(7.1)	10YR7/5	にぶい黄橙	10YR5/2	灰褐	外凹面に砂付着　反転復元
238	1	SX16	埋１層	高坏		20.4	(6.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚の一部のみ残存　反転復元
239	1	G4378	２層	ジョッキ形		7.2	(5.7)	7.5YR5/3	にぶい褐	10YR6/3	にぶい黄褐	把手は欠損黒班
240	1	包含層	埋１層	ジョッキ形	9.8		(3.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
241	1	G4442	２層	鉢？		10.0	(6.9)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	指頭圧痕　反転復元
242	1	G4491	２層	壺	12.6		(27.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/3	にぶい褐	反転復元
243	1	G4442	２層	壺		3.8	(28.4)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	口縁と底部欠損　櫛描波状文 櫛描直線文
244	1	G4491	２層	高坏		16.5	(6.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部に４箇所穿孔あり
245	1	G4481	２層	甕	19.6		(9.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　反転復元
246	1	G4440	２層	甕	18.2		(7.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/2	灰褐	スス付着　反転復元
247	1	G4430	２層	甕	25.0		(4.1)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	施文具痕あり　反転復元
248	1	G4440	2a 層	甕	21.6		(15.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
249	1	P7111		甕	24.0		(15.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい黄橙	外面に黒班
250	1	G4491	２層	甕	19.4		(36.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部欠損
251	2	SB27	埋１層	甕	19.0		(6.0)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	
252	2	SB28		壺	11.1		(14.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	底部欠損　頸部に櫛描波状文
253	2	SB28 G4348	107. 埋４層	壺	10.0		(12.6)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	櫛描波状文　ミガキ
254	2	SB28	245.171 埋４層	壺	14.8	8.2	42.3	7.5YR7/6	橙	10YR7/4	にぶい黄橙	頸部に摘み出し突帯文
255	2	SB28 SB30	埋１層 炉１層	壺		5.0	(14.2)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口縁部欠損
256	2	SB28 G4314 G4334 G4345	埋３層	壺			(4.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	櫛描波状文　櫛描横線（刺突）
257	2	SB28	埋４層	高坏	21.0		(3.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	坏部のみ

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
258	2	SB28	埋１層	高坏		19.2	(5.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	穿孔あり（8 mm） 脚部のみ残存黒斑あり
259	2	SB28	埋４層	高坏			(7.6)	7.5YR6/6	橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
260	2	SB28	2	高坏			(5.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内面ヘラ描き出し
261	2	SB28	107 埋４層	高坏			(12.0)	10YR7/3	にぶい橙	10YR6/4	にぶい橙	穿孔の痕跡あり
262	2	SB28		壺		10.6	(41.3)	7.5YR5/3	にぶい褐	10YR6/3	にぶい黄褐	外面の一部に黒斑　スス付着
263	2	SB28	埋４層	甕	14.0		(13.6)	5YR6/6	橙	7.5YR6/2	灰褐	表面にタタキ　ハケ目　脚部欠損 内外面にスス付着
264	2	SB28	92.150.157 他	甕	20.6		(20.7)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	表面にタタキ　スス付着
265	2	SB28	２層	甕	21.1		(9.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/6	橙	
266	2	SB28	30.105.106 他	甕	19.1	9.7	(34.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	脚部欠損　スス付着
267	2	SB28	33.110.111 他	甕	22.6	13.3	42.3	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着　平行タタキ（右廻り）
268	2	SB28 SB30	5	甕		10.7	(4.9)	7.5YR6/6	橙	7.5YR3/1	黒褐	
269	2	SB28	37.46	甕		13.9	(6.7)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
270	2	SB29	埋１層	甕	17.5	12.2	35.8	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR8/4	浅黄橙	外凹面に砂付着　スス付着
271	2	SB29	埋１層	甕	22.1		(13.5)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	タタキ痕　反転復元
272	2	SB29	埋 1.2 層	高坏			(8.8)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
273	2	SB30	64	高坏			(10.5)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部のみ残存
274	2	SB30	埋 1.2 層	壺	15.5		(8.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口縁部のみ残存
275	2	SB30	4.41.48.75.85 埋２層	壺	23.6		(22.5)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR6/6	橙	頸部に貼付突帯文　口縁に刻目文 外面一部に黒斑
276	2	SB30	52.6	甕		13.7	(5.2)	5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着　脚部のみ残存
277	2	SB30	66	甕		14.1	(7.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部のみ残存で反転復元
278	2	SB30	29. 埋２層	甕	20.0		(14.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外面スス付着　反転復元
279	2	SB30	埋１層	甕	20.2		(4.7)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
280	2	SB30	埋３層	甕	16.6		(9.0)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	反転復元
281	2	SB30	埋２層	甕	20.1	12.7	40.6	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR8/6	浅黄橙	外面にススと思われる黒変有　タタキ痕
282	2	SB30	22.68.69.70 埋３層	甕	21.3	11.5	37.0	5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	タタキ
283	2	SB31	埋１層	甕	20.2		(38.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着　内面に煮炊き 脚部欠損
284	2	SB31	埋１層	甕	21.6	12.6	(40.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	脚部欠損　スス付着　タタキ痕
285	2	SB31	埋１層	甕	19.1	12.2	39.4	5YR5/6	明赤褐	5YR6/4	にぶい橙	タタキ　指頭圧痕
286	2	SB31	埋１層	甕	20.0	13.6	37.9	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	タタキ　廃棄後に付いた黒変
287	2	SK26	埋１層	甕	18.4		(15.5)	7.5YR4/2	灰褐	10YR6/3	にぶい黄橙	
288	2	SK26	埋１層	甕		11.3	(6.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	脚と胴の一部のみ残存
289	2	SK32		甕		18.8	(7.5)	10YR4/2	灰黄褐	10YR6/4	にぶい黄橙	脚部のみ残存
290	2	SK33	埋２層	高坏		14.3	(17.0)	5YR6/6	橙	10YR6/4	にぶい黄橙	４箇所穿孔あり　坏部欠損
291	2	SK33	埋１層	甕	21.0		(10.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
292	2	SK33	埋１層	甕	24.2		(5.3)	10YR8/3	浅黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
293	2	SK33	埋１層	甕		13.8	(6.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部のみほぼ完形
294	2	SK33	埋１層	甕		12.6	(6.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	外凹面に砂付着　脚部のみ残存
295	2	SK34	埋１層	甕	17.8		(25.1)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	脚部欠損　外面は剥離が激しい
296	2	SK40		鉢		3.2	(6.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	一部黒斑
297	2	G4354	2a 層	鉢	18.4		(8.2)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	反転復元
298	2	G4334 G4326	2a 層	鉢	9.0		(6.5)	7.5YR4/2	灰褐	7.5YR5/3	にぶい橙	底部欠損
299	2	G4327 G4348	2a 層	鉢	14.4		(5.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
300	2	G4337	2a 層	ミニチュア	3.4		(4.5)	7.5YR6/3	にぶい褐	10YR7/3	にぶい黄橙	口縁欠損　手捏ね
301	2	G4325	2a 層	高坏	23.2		(2.7)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	一部黒斑
302	2	G4327 G4328 G4317	2a 層	高坏		16.8	(2.5)	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐	
303	2	G4346	2a 層	皿	8.2	6.6	1.4	7.5YR7/5	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	糸きり痕　拓本あり
304	2	G4317 G2388		壺	15.4	6.4	(29.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	穿孔あり　赤色顔料（2.5YR4/8）赤褐

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
305	2	G4327	2a 層	壺	10.8		(13.7)	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐	表面にミガキ 頸部接合面ではずれている
306	2	G4335	2 層	壺	2.0		(2.6)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	頸部に櫛描波状文（反時計廻り）
307	2	G4355	2a 層	壺	13.8		(22.3)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	口縁端部に刻目（列点文） 平行文タタキ　黒斑あり
308	2	G4326	2a 層	壺	16.2		(6.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	口縁端部欠損　貼付突帯
309	2	G4338	2a 層	壺	18.8		(6.2)	7.5YR3/1	黒褐	7.5YR4/1	灰褐	貼付突帯　刻目文
310	2	G4327	2a 層	壺	16.8		(9.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR5/4	にぶい黄褐	刻目文　張付突帯
311	2	G4308 G4327	2a 層	壺			(3.3)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	頸部に櫛描波状文
312	2	G4327	2a 層 .1 層	壺			(4.3)	7.5YR3/1	黒褐	7.5YR4/2	灰褐	貼付突帯刻目文
313	2	G4317 G4327 G4328	2a 層	壺			(5.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	貼付突帯刻目文
314	2	G4316	2a 層	壺		7.0	(9.7)	5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
315	2	G4326		壺		4.8	(3.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/1	褐灰	
316	2	G4334	2a 層	甕	23.6		(3.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
317	2	G4334 G4335	2a 層	甕	23.2		(10.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	
318	2	G4368	2a 層	甕	20.4		(13.3)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	RP327 と同一個体？
319	2	G4326	2a 層	甕	20.8		(5.7)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
320	2	G4344	2a 層	甕	21.6		(20.8)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
321	2	G4347	2a 層	甕	20.4		(26.1)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外面にスス付着　脚部欠損
322	2	G4347	2b 層	甕	21.0		(17.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
323	2	G4338	2 層	甕	19.8		(24.0)	10YR7/3	にぶい黄橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
324	2	G4338	2a 層	甕	22.0	13.4	(42.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/6	にぶい橙	脚部欠損 外面スス付着内面に煮炊き痕
325	2	G4337		甕	21.8	13.0	(28.0)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部欠損 外面にスス付着　内器面に煮炊き痕
326	2	G4368	2a 層	甕	20.9	13.2	(35.8)	7.5YR7/6	橙	7.5YR 7 /4	にぶい橙	脚部欠損　スス付着
327	2	G4368	2a 層	甕		12.7	(33.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	RP318 と同一個体
328	2	G4345	2a 層	甕		11.7	(5.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着
329	2	G4346	2a 層	甕		12.1	(7.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	脚部のみ完形
330	2	G4366		甕		9.6	(7.4)	7.5YR6/6	橙	10YR6/3	にぶい黄橙	
331	2	G4347	2b 層	甕		12.6	(6.5)	7.5YR5/4	にぶい赤褐	10YR5/3	にぶい褐	外凹面に砂付着
332	2	G4326	2a 層	甕		12.8	(7.4)	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/6	橙	脚部完形　外凹面に砂付着
333	3	SB45	埋 2 層	鉢	15.4		(6.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
334	3	SB45	KN トレンチ	壺	6.9		(5.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/3	にぶい黄橙	器厚が厚い
335	3	SB45	埋 3 層	壺	11.0		(5.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	一部黒斑あり
336	3	SB45	埋 2 層	壺	11.2		(8.4)	5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
337	3	SB45	埋 3 層	壺	15.2		(2.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	多量のスス付着
338	3	SB45	埋 3 層	壺			(4.7)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	貼付突帯　刻目文
339	3	SB45	埋 1 層	壺		1.8	(3.8)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR6/4	にぶい橙	底部のみ残存
340	3	SB45	埋 1 層	壺		7.2	(2.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	底部のみ残存で器種不明
341	3	SB45	埋 3 層	甕	10.5		(5.2)	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい褐	スス付着　反転復元
342	3	SB45		甕	19.8		(8.0)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	スス付着
343	3	SB45	埋 2 層	甕	21.4		(3.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
344	3	SB45	埋 2 層	甕	21.6		(4.4)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
345	3	SB45	埋 3 層	甕		14.6	(5.8)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	脚部のみ残存　スス付着
346	3	SB45	埋 1.2 層	甕		12.0	(7.3)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	脚部のみ残存
347	3	SB45		甕		13.8	(7.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部外凹面に砂粒付着
348	3	SB45	埋 2 層	甕		14.5	(10.0)	5YR5/3	にぶい赤褐	5YR6/3	にぶい赤褐	脚部のみ残存
349	3	SB46	埋 2 層	壺	16.0		(2.8)	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	口縁端部に刻目文
350	3	SB46	埋 1 層	壺	18.6		(3.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	口縁のみ残存　反転復元
351	3	SB47	埋 3 層	鉢		6.4	(2.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	底部のみ残存
352	3	SB47		甕		11.8	(4.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	底部外凹面に砂粒付着
353	3	SB48	埋 2 層	鉢	9.6		(4.1)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
354	3	SB48	埋 1 層	尖底土器			(5.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	黒斑あり
355	3	SB48	埋 1 層	尖底土器			(3.7)	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	尖底部分を指で整形　黒斑
356	3	SB48	埋 3 層	壺	11.6		(6.0)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
357	3	SB48		壺	8.8		(3.7)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
358	3	SB48	埋 1.2.3 層	壺			(8.8)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	櫛描波状文
359	3	SB48	埋 1 層	壺			(13.1)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR3/1	黒褐	櫛描波状文　櫛描直線文 外面に黒斑あり
360	3	SB48	埋 1 層	壺	15.0		(3.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
361	3	SB48	埋 2 層	壺	17.2		(2.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口唇端部に刻目文 その刻目に櫛目あり
362	3	SB48	埋 2.3 層	壺	17.6		(6.3)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	刻目文　反転復元
363	3	SB48 SB51	埋 2.1 層	壺	19.8		(7.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	（安国寺）　櫛描波状文　櫛描直線文
364	3	SB48		壺		6.8	(3.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
365	3	SB48	埋 1 層	壺		6.6	(3.1)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
366	3	SB48	埋 1.3 層	壺		6.2	(7.9)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR3/1	黒褐	外面にスス付着
367	3	SB48	埋 3 層	甕	15.4		(1.8)	5YR6/6	橙	7.5YR5/4	にぶい褐	外面にスス付着
368	3	SB48	埋 2 層	甕	15.4		(5.9)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい褐	反転復元
369	3	SB48	埋 2 層	甕	18.2		(6.2)	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	反転復元
370	3	SB48	埋 2 層	甕	22.8		(7.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
371	3	SB48	埋 2 層	甕	23.6		(3.6)	10YR8/4	浅黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	口縁のみ残存　反転復元
372	3	SB48	埋 2 層	甕		13.8	(4.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	底部のみ残存
373	3	SB48	埋 2 層	甕		14.8	(4.5)	7.5YR7/6	橙	10YR7/4	にぶい橙	砂付着 胴部との接合面にナデ調整あり
374	3	SB48	埋 2 層	甕		11.2	(4.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR8/4	浅黄橙	底部外凹面に砂付着　スス付着
375	3	SB48	埋 3 層	甕		15.0	(6.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
376	3	SB48	埋 2 層	甕		14.0	(5.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	底部外凹面に砂付着
377	3	SB48	埋 2 層	甕		14.0	(5.1)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	脚部のみ残存　黒斑あり
378	3	SB48	埋 3 層	甕		14.6	(7.5)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	底部外凹面に砂付着
379	3	SB48	埋 2 層	甕		12.4	(6.5)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR8/3	浅黄橙	4303G　外面にスス付着
380	3	SB48	埋 3 層	甕		14.6	(6.9)	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部外凹面に砂付着
381	3	SB48 SB97	97	甕	15.2	11.2	30.3	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	スス付着
382	3	SB49	埋 1 層	甕	18.8		(2.1)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
383	3	SB50	埋 1 層	壺	16.8		(8.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
384	3	SB50	埋 1 層	壺	11.8		(5.3)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	反転復元
385	3	SB50	埋 1 層	甕		14.0	(6.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
386	3	SB50	埋 1 層一括	甕			(18.9)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	外面にスス付着
387	3	SB51	埋 1 層	壺	9.8		(7.8)	2.5YR5/6	明赤褐	7.5YR4/1	灰褐	反転復元
388	3	SB52	埋 1 層	壺	18		(11.9)	5YR7/3	にぶい橙	5YR7/3	にぶい橙	貼付突帯　櫛描列点文
389	3	SB52	埋 1 層	甕	18.4		(16.7)	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	外面にスス付着
390	3	SB53	埋 2 層	鉢	15.4		(3.9)	5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	反転復元
391	3	SB53	埋 3 層	鉢	15.2	4.0	(4.3)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	
392	3	SB53	埋 2.3 層	高坏	21.8		(4.3)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR4/1	褐灰	内面全体還元焔焼成？
393	3	SB53		高坏		17.4	(6.4)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	３ヶ所の穿孔と思われる
394	3	SB53	埋 3 層	壺	18		(2.9)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	刻目文
395	3	SB53	埋 3 層	壺	18		(5.1)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	内器面に還元焔焼成見られる 黒斑あり
396	3	SB53	埋 3 層	壺	16.2		(6.1)	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
397	3	SB53	埋 2.3 層	壺	6		(3.3)	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR4/1	褐灰	反転復元
398	3	SB53	埋 1.2.3 層	壺	12.8		(4.9)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
399	3	SB53	埋 2 層	壺			(6.2)	5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	刻目列点文
400	3	SB53	埋 1.2.3 層 ３ａ層	壺		5.4	(12.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
401	3	SB53	埋 3d 層	甕	19.2		(12.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
402	3	SB53	埋 2.3 層	甕	27.8		(4.7)	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
403	3	SB53	埋 3 層	甕			(21.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　胴部のみ残存
404	3	SB53	埋 3 層	甕		8.2	(4.7)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR5/2	灰褐	
405	3	SB53	埋 3 層	甕		14.4	(6.6)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	反転復元
406	3	SB53	埋 1.3 層	甕			(7.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/2	灰褐	
407	3	SB56	埋 1 層	甕	23		(8.7)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
408	3	SB56	埋 2 層	甕		17.8	(6.0)	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
409	3	SB56	埋 2 層	甕		16.4	(11.3)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚上部にスス付着

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
410	3	SB56	埋１層	コップ形	8.7		(6.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
411	3	SB59	埋1a層	壺	10.2		(9.9)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	スス付着 頸部の欠損部分に波状文痕有
412	3	SB59	埋１層	壺	15.0		(7.2)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
413	3	SB59	埋2c層	壺		9.0	(3.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
414	3	SB59	埋１層	壺		9.0	(3.6)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
415	3	SB59	埋１層	甕	24.8		(5.6)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR7/4	にぶい橙	口唇端部に刻目文　反転復元
416	3	SB59	埋1.2層	甕	17.8		(6.1)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
417	3	SB59	埋２層	甕	18.0		(17.1)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	スス付着
418	3	SB59	埋１層	甕	24.2		(7.9)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
419	3	SB59	埋３層	甕		11.2	(4.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	砂付着　反転復元
420	3	SB59	埋１層	甕		13.2	(5.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR5/1	褐灰	反転復元
421	3	SB60	掘り方１層	甕		11.0	(4.0)	5YR7/6	橙	7.5YR6/2	灰褐	脚の接合部に接合強化の為凹凸あり
422	3	SK58	埋１層	壺			(3.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	黒変あり
423	3	SK58	南西柱穴	甕	18.4		(5.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
424	3	SK58	埋１層	甕	15.o		(23.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	外面にスス付着
425	3	SK65	2a層	甕		12.7	(5.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
426	3	SK66	埋１層	壺	16.3		(5.4)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	反転復元
427	3	G4341 G4332	2a層	鉢	13.2		(3.1)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	黒班
428	3	G4315	2a層	鉢	16.7		(3.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
429	3	G4303 G4306 G4341	2a層	鉢	12		(5.7)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	
430	3	G4340	1.2a層	鉢		9.4	(2.2)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	糸切痕
431	3	G4331	2a層	高坏	16.7		(1.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
432	3	G4334	2a層	高坏		13.7	(4.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	焼成前の穿孔４ヶ所
433	3	G4304 G4315	2a層	高坏		13.2	(5.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/6	橙	穿孔痕　黒斑あり
434	3	G3394 G3393 G4669	2a層	ジョッキ形	10	10.3	19.7	5YR5/6	明赤褐	7.5YR6/4	にぶい橙	把手欠損　反転復元
435	3	G4322 G4320 G4333	2a層	高坏		18.0	(7.8)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	穿孔（3ヶ所）
436	3	G3394 G4304 G4314	2a層	高坏		18.6	(5.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
437	3	G4305	2a層	壺	13.2		(3.0)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
438	3	G4304	2a層	壺	15.4		(4.6)	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	黒斑あり
439	3	G4314	2a層	壺	10.4		(4.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR7/3	にぶい黄橙	
440	3	G4331	撹乱	壺	13.1		(6.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
441	3	G4304	2a層	壺	13.8		(2.3)	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	反転復元
442	3	G4304 G4314	2a層	壺	14.8		(6.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
443	3	G4312	2a層	壺	14.8		(7.0)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR6/4	にぶい橙	廃棄後にスス付着
444	3	G4304	2a層	壺	14.8		(10.2)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	一部黒斑あり　反転復元
445	3	G4306	2a層	壺			(2.5)	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	内面に櫛描き文
446	3	G4334	2a層	壺	19.8		(2.6)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	反転復元
447	3	G4330	2a層	壺			(2.0)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口唇部に刻目文
448	3	G4332 G4333	2a層	壺	14.2		(4.1)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
449	3	G4315 G4316	2a層	壺	17.0		(6.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	口唇部に刻目文
450	3	G4324 G4325 G4334	1.2a層	壺	15.7		(6.7)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/6	にぶい橙	口唇部に刻目文
451	3	G4302 G4331	2a層	壺			(4.3)	5YR5/6	明赤褐	10YR6/4	にぶい黄橙	黒班
452	3	G4302	1層	壺		5.0	(14.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
453	3	G4333	2a 層	壺		7.6	(5.1)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR4/1	褐灰	スス付着　黒変
454	3	G4304	2a 層	壺		8.2	(3.7)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	反転復元
455	3	G4303	2a 層	壺		6.8	(4.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	反転復元
456	3	G4305	2a 層	壺		7.4	(3.7)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	反転復元
457	3	G3394 G4305	2a 層	壺		7.8	(3.3)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	外面に黒班
458	3	G4315	2a 層	甕	33.6		(2.0)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/3	にぶい褐	大型甕と思われる
459	3	G4303	2a 層	甕	27.2		(2.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	反転復元
460	3	G4333	2a 層	甕	16.6		(2.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	反転復元
461	3	G4324	2a 層	甕	19.2		(8.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
462	3	G4302	1 層	甕	13.8		(7.9)	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR4/3	灰黄褐	スス付着
463	3	G4342	2a 層	甕	16.4		(7.8)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
464	3	G4303	2a 層	甕	21.0		(3.0)	2.5YR7/3	浅黄	2.5YR7/3	浅黄	口縁のみ残存　反転復元
465	3	G4333	2a 層	甕	22.0		(3.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
466	3	G4313	2a 層	甕	22.4		(3.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
467	3	G4304	2a 層	甕	22.8		(6.0)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
468	3	G4303	2a 層	甕	23.8		(7.5)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
469	3	G3394	2a 層	甕	23.3		(10.6)	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	黒変あり　反転復元
470	3	G4304	2a 層	甕	21.4		(4.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
471	3	G4314 G4315	2a 層	甕	19.8		(7.0)	7.5YR6/3	にぶい褐	10YR6/3	にぶい黄橙	口唇部に工具痕あり
472	3	G4306 G4315	2a 層	甕	18.2		(6.5)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/2	灰褐	平行文叩き　スス付着 ふきこぼれ跡有
473	3	G4315	2a 層	甕	13.8		(7.0)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	黒変あり
474	3	G4303		甕	22.0		(6.3)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい褐	黒変あり
475	3	G4315	2a 層	甕	21.2		(3.9)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	反転復元
476	3	G4324 G4325 G4323	2a 層	甕	20.2		(18.1)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着
477	3	G4303 G4305	2a 層	甕	22.4		(6.8)	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	反転復元
478	3	G4303	2a 層	甕	15.8		(3.7)	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	反転復元
479	3	G4304	2a 層	甕	21.2		(3.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	口縁のみ残存
480	3	G4324	2a 層	甕	23.6		(9.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
481	3	G4305	2b 層	甕	20.8		(10.0)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
482	3	G4323	2a 層	甕	21.0		(5.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	タタキ痕あり
483	3	G3394 G3395	1.2a 層	甕	22.6		(6.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　タタキ痕あり
484	3	G4315		甕	17.0		(7.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　タタキ痕あり
485	3	G4323	2a 層	甕		12.5	(11.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	外面にスス付着、内面に煮炊き痕
486	3	G4315	2a 層	甕		12.0	(12.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	外面にスス付着　内面に厚めのスス こげ付着
487	3	G4323 G4333	2a 層	甕		8.3	(3.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/4	にぶい褐	黒変 . 外凹面に砂付着
488	3	G4323	1 層	甕		7.8	(4.5)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/4	にぶい褐	脚部のみ残存
489	3	G4333	2a 層	甕		12.4	(3.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
490	3	G4303	2a 層	甕		10.6	(5.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
491	3	G4341 G4343	2a 層	甕		10.4	(6.3)	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	
492	3	G4313	1 層	甕		12.0	(5.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
493	3	G4303	2a 層	甕		12.3	(5.1)	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外凹面に砂付着
494	3	G4304	2a 層	甕		14.6	(6.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着
495	3	G4324	2a 層	甕		11.2	(4.9)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	黒変あり　反転復元
496	3	G4323	2a 層	甕		14.2	(4.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
497	3	G4304	2a 層	甕		12.6	(6.7)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
498	3	G4333 G4334	2a 層	甕		12.8	(7.3)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	外凹面に砂付着
499	4	SB80	埋 2 層 . 掘方	壺	24.0		(2.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
500	4	SB81	埋 2.2a 層	甕	22.8		(19.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　内面に煮炊き痕　反転復元
501	4	SB83	埋 1 層	壺	11.2	2.8	(14.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	5YR5/6	明赤褐	スス付着　反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
502	4	SB83	埋１層	甕	12.4	11.6	21.5	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/6	橙	スス付着
503	4	SB84	埋２層	鉢	11.0		5.3	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	全体の 1/2 ほど残存
504	4	SB84	821.839.485 埋 2.2a 層	鉢	14.9		(10.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/6	明褐	スス付着　反転復元
505	4	SB84	674.773.775 777.858.884 埋２層	壺	17.2		(12.7)	5YR5/6	明赤褐	5YR3/2	黒褐	内外面に黒班　反転復元
506	4	SB84		壺	23.9		(9.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口縁の 1/5 程度の残存　反転復元
507	4	SB84 SB91	381 埋２層	壺			(17.2)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	平行沈線文　刻目文
508	4	SB84	埋２層	壺			(4.9)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	頸部に刻目突帯文　反転復元
509	4	SB84	埋１層	壺			(3.2)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	櫛描沈線
510	4	SB84	780.517 埋２層 2a 層	壺			(5.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	刻目文　反転復元
511	4	SB84	865.766.768 埋２層	壺			(7.2)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR4/2	灰褐	頸部に列点文　反転復元
512	4	SB84	7G33	壺	19.6		(2.5)	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR4/2	灰黄褐	刻目文
513	4	SB84	588.18 埋２層	壺	16.4		(7.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
514	4	SB84	埋２層	壺	18.0		(4.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
515	4	SB84	554.666 埋２層	壺	14.4		(3.9)	7.5YR5/6	明褐	5YR5/6	明赤褐	反転復元
516	4	SB84	846 埋２層	壺		8.4	(5.3)	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR6/6	橙	外底面にハケメ調整
517	4	SB84	10 埋１層	壺		6.4	(13.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
518	4	SB84	埋１層	壺		9.0	(2.6)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着
519	4	SB84		高坏	28.9		(8.9)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
520	4	SB84	626 埋１層	高坏			(12.7)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚内部に指頭圧痕
521	4	SB84	21 埋２層	甕	19.8		(8.7)	10YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい橙	反転復元
522	4	SB84	884.902.904 845.906 他	甕	17.4	12.2	(25.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	スス付着　反転復元
523	4	SB84	894 埋２層	甕		11.0	(5.0)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR6/4	にぶい橙	
524	4	SB84	埋２層	甕		11.7	(5.7)	7.5YR6/6	橙	10YR7/3	にぶい黄橙	外凹面に砂付着
525	4	SB84	61.960.98 埋 2a 層 .	甕		13.4	(7.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着
526	4	SB84	1024 埋 2a 層	甕		12.9	(7.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR3/1	黒褐	外凹面に砂付着
527	4	SB85	埋１層	高坏	30.0		(2.6)	10YR2/1	黒	10YR8/4	浅黄橙	反転復元
528	4	SB85	埋２層	壺	18.0		(7.1)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR7/4	にぶい橙	貼付突帯　内面に黒変　反転復元
529	4	SB85	埋２層	壺	9.2		(8.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	内面に指頭圧痕　反転復元
530	4	SB85	埋２層	壺			(7.0)	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	横位沈線文キザメ目文　重弧文
531	4	SB85	埋２層	甕	28.4		(5.4)	7.5Yr6/6	橙	7.5YR6/6	橙	スス付着　反転復元
532	4	SB85.SB86	埋 1.2 層	甕	27.0		(9.3)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
533	4	SB85	埋２層	甕		9.2	(4.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
534	4	SB85	埋２層	甕		13.0	(6.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	スス付着
535	4	SB85	埋２層	甕		13.2	(8.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元　スス付着
536	4	SB86	埋２層	ジョッキ形	9.4	10.0	(8.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	把手一部あり
537	4	SB86	埋 4b 層	尖底土器			(6.9)	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	黒斑あり
538	4	SB86	埋２層	壺	7.6		(3.7)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR6/6	橙	反転復元
539	4	SB86	４ｂ層	壺			(4.7)	5YR5/8	明赤褐	10YR4/2	灰黄褐	
540	4	SB86	埋４層	壺	8.2		(7.6)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
541	4	SB86	埋 3.4 層	壺			(6.1)	2.5YR4/8	赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	反転復元　櫛描波状文
542	4	SB86	埋４ 6 層北西住居柱穴	甕	23.7		(7.7)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
543	4	SB86	埋１層	甕	19.4		(3.9)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
544	4	SB86	埋２層	甕	16.2		(7.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	黒斑あり　スス付着　反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
545	4	SB86	埋２層	甕	22.0		(11.0)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR6/4	にぶい橙	反転復元
546	4	SB86	埋３層	甕		13.8	(5.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	外凹面に砂付着　反転復元
547	4	SB86	埋３層２	甕		11.2	(7.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面に黒斑あり
548	4	SB86	埋１層	甕		12.4	(5.8)	5YR6/6	橙	5YR4/1	褐灰	底端部を復元
549	4	SB86	2.3.4 層	甕		11.8	(8.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
550	4	SB86		甕		11.8	(9.9)	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR4/2	灰褐	外凹面に砂付着
551	4	SB86	北西主柱穴	甕		13.4	(9.8)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面にスス付着
552	4	SB88	埋１層	甕	20.0		(12.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	指頭圧痕　反転復元
553	4	SB88	埋１層	甕	18.4		(9.2)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい褐	反転復元
554	4	SB89	823 埋２層	甕		11.2	(6.6)	5YR5/6	明赤褐	7.5YR6/6	橙	
555	4	SB90	埋１層	甕	19.5		(25.2)	10YR7/3	にぶい橙	10YR7/4	にぶい橙	胴部復元
556	4	SB90	埋１層	甕		12.2	(15.1)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着　内面に煮炊き痕
557	4	SB90	一括	甕		6.6	(6.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
558	4	SB90	埋２層	甕		14.4	(8.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	外凹面にハケメ
559	4	SB91	埋２ａ層	高坏			(11.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	内面に放射線状ミガキ
560	4	SB91	埋２層	高坏		14.4	(1.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元　黒斑あり
561	4	SB91	埋２層	壺	10.4		(6.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR7/4	にぶい橙	内外面に黒班　反転復元
562	4	SB91	埋２ａ層	甕		12.8	(7.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
563	4	SB91	埋 1.2 層	壺			(7.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	貼付突帯刻目文
564	4	SB95	埋１層	甕	17.9	6.0	26.1	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　指頭痕
565	4	SK93	埋１層	甕	21.0		(6.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
566	4	SK93	埋１層	甕	20.2		(3.9)	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	反転復元
567	4	SK93	埋１層 １層一括	甕	21.8	12.5	(23.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面に黒班　反転復元
568	4	SK93	埋１層	甕	20.8		(22.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	外面にスス付着　反転復元
569	4	SK93	埋１層	甕	19.0	10.9	G33.4	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
570	4	SK93	埋１層	甕		11.5	G34.6	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/3	にぶい黄橙	内外面にスス付着
571	4	SK93	埋１層	甕		14.8	(6.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/3	にぶい褐	反転復元
572	4	SK98	埋１層	壺			(5.8)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
573	4	SD87	埋２層	甕		13.7	(5.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	
574	4	SD87	埋２層	甕		13.8	(7.6)	5YR5/4	にぶい橙	5YR5/4	にぶい橙	反転復元
575	4	G4308	2a 層	鉢	23.0		(5.8)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
576	4	G3460	2a 層	鉢	12.2		(8.4)	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
577	4	G3398	２層	鉢		10.8	(4.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
578	4	G4309	2a 層	高坏	36.0		(2.9)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
579	4	G3308	2a 層	高坏	22.4		(3.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
580	4	G3398	2a 層	器台			(2.4)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	２個対の穿孔あり
581	4	G3398	2a 層	高坏		16.6	(4.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	４箇所の穿孔あり　反転復元
582	4	G4318	2a 層	高坏		13.4	(4.9)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	穿孔４箇所あり　反転復元
583	4	G4318	2a 層	壺	14.9		(13.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
584	4	G4309	2a 層	壺	11.5		(3.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
585	4	G4318	2a 層	壺	16.2		(3.7)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	刻目文
586	4	G3398	２層	壺	24.8		(2.5)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	刻目列点文　反転復元
587	4	G3398	2a 層	壺	19.4		(3.9)	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
588	4	G4318 G4308	2a 層	壺	6.0		(5.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	櫛描波状文　反転復元
589	4	G4401	2a 層	壺	14.5		(8.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/5	にぶい橙	櫛描波状文　反転復元
590	4	G4318	2a 層	壺	14.9		(5.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
591	4	G3398 G4329	2a 層	壺	9.0	4.5	(6.2)	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	櫛描波状文　反転復元
592	4	G4317 G4308	2a 層	壺	10.0		(5.1)	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR6/6	橙	反転復元
593	4	G4318	2a 層	壺	21.2		(2.9)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
594	4	G4317	2a 層	壺		4.4	(5.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
595	4	G4328	2a 層	壺		7.4	(2.1)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
596	4	G3398	2a 層	甕	25.0		(3.5)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
597	4	G4327	2a 層	甕	29.3		(3.4)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
598	4	G3398	2a 層	甕	26.6		(3.2)	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR5/2	灰黄褐	反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
599	4	G3398	2a 層	甕	26.0		(4.5)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	鋤先型口縁　外面にスス付着 反転復元
600	4	G4309	2a 層	甕	21.4		(4.2)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	反転復元
601	4	G4318	2a 層	甕	20.2		(3.1)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
602	4	G4318	2a 層	甕	17.0		(5.1)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
603	4	G4309	2a 層	甕	23.8		(5.4)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
604	4	G4318	2a 層	甕	18.2		(5.3)	10YR5/2	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	内面にスス付着
605	4	G4308	2a 層	甕	20.6		(10.1)	10YR6/3	にぶい橙	10YR6/3	にぶい橙	反転復元
606	4	G4318	1 層	甕		12.4	(5.5)	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	
607	4	G4318	2a 層	甕		12.7	(6.0)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	内外面にスス付着
608	4	G4318	2a 層	甕		11.6	(5.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	外凹面に砂付着
609	4	G4318	2a 層	甕		11.8	(6.1)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	外凹面に砂付着　スス付着
610	4	G4308	2a 層	甕		11.4	(6.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	外凹面に砂付着　反転復元
611	4	G3398	2a 層	甕		12.9	(6.3)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/6	明褐	外凹面に砂付着
612	5	SB105	埋 2 層	高坏			(2.9)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	坏底部のみ残存
613	5	SB105	埋 3 層	甕	14.0		(3.7)	7.5YR5/3	にぶい褐	10YR3/1	黒褐	
614	5	SB105	埋 2.3 層	甕	22.0		(9.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
615	5	SB106	埋 1 層	高坏		15.6	(3.2)	5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	脚部のみ残存　粘土のはみ出し痕あり
616	5	SB106	埋 3 層	甕	21.7		(31.1)	10YR5/6	黄褐	10YR5/6	黄褐	
617	5	SB108	埋 3 層	鉢	8.4		(6.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR7/3	にぶい黄橙	櫛描波状文
618	5	SB108 SB110	埋 2.4.5 層	鉢	13.4		(5.3)	5YR5/6	明赤褐	10YR6/4	にぶい黄橙	外面に黒変
619	5	SB108	埋 2.3.4 層	鉢	11.4	11.8	(5.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
620	5	SB108	埋 3 層 トレンチ内	ジョッキ形	10	10.0	(8.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
621	5	SB108	埋 1.3.4 層	高坏	30.8		(4.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
622	5	SB108	床上焼土	高坏			(9.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
623	5	SB108	埋 4 層	高坏			(10.2)	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR7/3	にぶい橙	
624	5	SB108	埋 4b 層	器台		13.2	(5.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
625	5	SB108	埋 3 層	壺			(6.9)	5YR6/8	橙	7.5YR6/6	橙	櫛描波状文　反転復元
626	5	SB108	埋 3 層	壺	19.2		(9.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	貼付突帯
627	5	SB108	埋 4a 層	壺	15.6		(8.5)	10YR8/4	浅黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	貼付突帯、列点文
628	5	SB108	埋 1 層	壺			(4.0)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR6/6	橙	櫛描波状文
629	5	SB108	埋 3 層	壺			(5.7)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
630	5	SB108	埋 4 層	甕	24.6		(2.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
631	5	SB108	埋 2.3.4 層	甕	19.6		(4.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	反転復元
632	5	SB108	埋 4 層	甕	21.8		(5.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR7/2	にぶい黄橙	スス付着
633	5	SB108	埋 3 層	甕	24.4		(14.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
634	5	SB108	埋 3 層	甕		5.5	6.3	7.5YR6/4	にぶい橙	5YR6/6	橙	
635	5	SB108	埋 3 層	甕	22.2	3.7	40.2	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	外面全体にスス付着 当初は　台付甕として使われていた
636	5	SB108	埋 3 層	甕	15.3	12.8	31.2	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい黄橙	内外面にスス付着
637	5	SB108	埋 3 層	甕	16.1		(32.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	スス付着　脚部欠損
638	5	SB108	埋3層トレンチ内	甕	16.2	11.5	(30.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
639	5	SB108	埋 4 層	甕		14.8	(5.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
640	5	SB110	埋 3.5 層	鉢	10.6		(4.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
641	5	SB110	埋 5 層	鉢形土器	7.5		7.6	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	底部に黒斑あり
642	5	SB110	531. 埋 5.6 層	鉢形土器	10.4	6.2	(9.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	黒斑あり　重弧文に似た線刻あり
643	5	SB110	531. 埋 5.6 層	壺	13.8		43.6	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	胴部に黒斑あり
644	5	SB110	埋 5 層	壺	9.0		(7.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	櫛描波状文 外面にススと思われる黒変あり
645	5	SB110	埋 3 層	壺	15.1		(5.7)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	頸部に貼り付け突帯
646	5	SB110		壺		8.4	(3.3)	10YR4/1	褐灰	10YR5/2	灰黄褐	スス付着
647	5	SB110	埋 6 層	甕	29.0		(5.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
648	5	SB110	埋 6 層 .5G33	甕	17.0		(6.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
649	5	SB110	埋 4 層	甕	16.8		(5.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
650	5	SB110	埋 5 層	甕	23.2		(6.4)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	口唇端部に粘土のはみ出し痕あり
651	5	SB110	埋 5 層	甕	25.4		(5.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	口唇端部に平らな面を施す
652	5	SB110		甕		11.7	(4.5)	5YR6/6	橙	10YR6/3	にぶい黄橙	脚部のみ残存 . ススと思われる黒変あり
653	5	SB110	埋 5 層 .548	甕		13.9	(6.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
654	5	SB110	埋6b層	甕		11.7	(6.8)	5YR5/6	明赤褐	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部のみ残存　スス付着
655	5	SB110		甕		13.0	(6.0)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	ススと思われる黒変あり
656	5	SB110	埋4.5層521	甕		14.2	(9.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
657	5	SB110	埋2.3層	甕		16.0	(5.8)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	脚内面下部に石による溝痕あり
658	5	SB110	埋5層	甕	16.1	10.5	28.8	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	ススと思われる黒変あり 一部反転復元あり
659	5	SB110	埋6層.536	甕	18.5		(36.1)	7.5YR6/3	にぶい橙	7.5YR8/4	浅黄橙	脚端部欠損　外面にスス付着
660	5	SB110	埋5.6層北東柱穴 504.638.640	甕	20.3		41.5	5YR5/6	明赤褐	7.5YR5/6	褐	スス付着　二個体接合
661	5	SB110	埋5層498.526	甕	19.7	12.0	41.5	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	口縁部と脚部の別々の物を図面上で 復元 スス付着
662	5	SB110	埋3層	甕	20.9	14.0	(37.0)	5YR6/6	橙	5YR7/4	にぶい橙	脚部欠損　スス付着
663	5	SB113	埋2層	甕	19.2	6.3	(36.9)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	スス付着
664	5	SB113	埋2層	甕	15.6	10.8	29.9	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
665	5	SB113	埋2層	甕	17.8	11.7	(31.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/3	にぶい褐	スス付着
666	5	SB113	埋2層	甕	18.8		(10.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	
667	5	SB113	埋2層	甕		10.2	(5.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内面に煮炊き痕
668	5	SB114	埋1.3層	壺	11.4		(5.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	刻目文
669	5	SB114	埋2.3層 北東主柱穴	壺	10.8		30.1	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	三個体を図面上で　復元
670	5	SB114	埋3層	壺	17.8		(7.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	刻目文
671	5	SB114	埋1.3層	甕	15.4		(2.8)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	
672	5	SB114	埋3層	甕		14.6	(5.8)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR5/2	灰黄橙	
673	5	SB114	埋2層	甕		14.6	(6.0)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	外凹面に砂付着
674	5	SB114	埋2層	甕			(19.6)	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
675	5	SB115	埋2層	壺	15.8		(7.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	二重口縁壷
676	5	SB116	埋2層	高坏			(6.3)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	
677	5	SB116	埋2b層	壺	13.6		(6.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
678	5	SB116	埋2層	甕	22.8		(12.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着
679	5	SB116	埋2.2a.2b層	甕	18.1		(7.2)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	スス付着
680	5	SB116	埋2b層	甕	15.6		(13.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外面にスス付着　内面に煮炊き痕
681	5	SB116	埋2.2b層	甕	16	9.3	(21.4)	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄橙	外面にスス付着
682	5	SB117	2a層	高坏		15.6	(2.5)	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	刺突凹凸文 （外面に５個内面に６個のイボ状）
683	5	SB117	埋5層42.86	尖底土器	7		10.3	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐	尖底部に穿孔（孔径3.5 mm）
684	5	SB117	埋5.7.8層41	壺			(10.7)	5YR5/4	赤褐	5YR6/4	にぶい橙	櫛描波状文　、半円文
685	5	SB117	埋5層	甕		12.5	(5.9)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着、スス付着
686	5	SB119	埋1層	鉢	9.6		7.5	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	
687	5	SB119	埋1層	高坏	34.8		(8.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR8/4	浅黄橙	脚部欠損
688	5	SB119	埋1層柱穴埋土	高坏		18.7	(4.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	（3～4個）の穿孔
689	5	SB119	埋1層	壺			(9.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	櫛描波状文　黒変
690	5	SB119	埋1層	壺	15.3		(15.7)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	スス付着　反転復元
691	5	SB119	埋1層	壺	12.2		(14.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/3	にぶい褐	黒変あり
692	5	SB119	埋1層	甕	16.1		(19.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面全体にスス付着
693	5	SB119	埋1層	甕	20.9	14.0	(30.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	外面全体にスス付着　煮炊き痕
694	5	G3368	2a層	鉢	17.0		(6.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
695	5	G3385	2a層	鉢	14.0		9.6	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	外面に煤付着
696	5	G3367	2a層	鉢	20.6		(4.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	口縁端部が施文具による調整 反転復元
697	5	G3368 G3377	2a層	鉢	19.4	6.4	(9.9)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
698	5	G3395	2a層	鉢	9.0	10.8	(10.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
699	5	G3367	2a層	尖底土器	9.8	0.8	(5.6)	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄橙	黒斑あり　内面に指頭圧痕　反転復元
700	5	G3357	2a層	鉢	9.4		(9.6)	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	反転復元
701	5	不明　G？		鉢	7.2		(6.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR3/1	黒褐	肩部に櫛描直線文　波状文
702	5	G3397	2a層	鉢	22.6		(5.9)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい褐	反転復元
703	5	G3396 G4307	2a層	鉢	11.8		(4.8)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	肩部に櫛描直線文　黒斑あり
704	5	G3386	2a層	鉢	13.2		(5.5)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
705	5	G3386	2a層	鉢	10.6	3.5	(8.0)	5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
706	5	G3386	埋2a層	鉢	14.4		15.8	5YR7/6	橙	5YR5/4	にぶい赤褐	全体の1/4程残存　ハケ目　反転復元
707	5	G	1.2層	高坏			(4.5)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR5/2	灰褐	2個対になった穿孔あり
708	5	G3356	2a層	高坏		16.6	(6.2)	7.5YR6/3	にぶい褐	10YR6/3	にぶい黄橙	反転復元　黒斑
709	5	G3377	2a層	高坏			(8.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	一部反転復元　外面にミガキ
710	5	G3386	2a層	壺	14.4		(4.3)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
711	5	G3385	2a層	壺	15.2		(5.2)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/6	明褐	口唇部にヘラによる調整　反転復元
712	5	包含層	2a層	壺	18.8		(7.6)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	貼付突帯
713	5	G3396	2a層	壺	19.8		(6.1)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	
714	5	G3357	2a層	壺			(2.8)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	丸底の底部のみ残存
715	5	G3397	2a層	壺		6.0	(5.3)	7.5YR6/6	橙	10YR7/3	にぶい黄橙	底部のみ残存　スス付着
716	5	G3395	2a層	甕	29.2		(6.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
717	5	G3357	2a層	甕	17.4		(3.3)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
718	5	G3356	2a層	甕	20.3		(3.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
719	5	G3385	2a層	甕	20.7		(7.6)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	反転復元
720	5	G3397	2a層	甕	16.4		(6.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
721	5	G3356	埋2a層	甕	18.6		(6.3)	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい褐	反転復元
722	5	G3357	2層	甕	19.2		(7.7)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	反転復元
723	5	G3356	埋2a層	甕	27.2		(8.6)	10YR4/2	灰黄褐	10YR6/3	にぶい黄橙	スス付着　反転復元
724	5	G3377	2a層	甕	22.6		(14.9)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　煮炊き痕あり　反転復元
725	5	不明G	2a層	甕	20.4		(7.0)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	煤付着　反転復元
726	5	G3385	2a層	甕	18.5	13.1	G33.3	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	体部の1/3と脚部欠損 ハケ目　煤付着　反転復元
727	5	G3395	2a層	甕	38.2	9.2	57.3	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR2/1	黒	頸部に貼付突帯　内黒　スス付着
728	5	G3377	2a層	甕		12.6	(3.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
729	5	G3356	2a層	甕		11.5	(3.3)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	反転復元
730	5	G3367	2a層	甕		11.6	(3.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
731	5	G3356	2a層	甕		10.5	(4.8)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	脚部完形　外凹面に砂付着
732	5	G3375	2a層	甕		12.0	(2.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着　反転復元
733	5	G3377	2a層	甕		11.6	(5.7)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	胴部との接合面で離れている
734	5	G3368		甕		12.1	(6.7)	5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	外凹面に砂付着　反転復元
735	5	G3356	2a層	甕		13.6	(5.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	外凹面に砂付着　反転復元
736	5	G3356	2a層	甕		13.2	(7.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外凹面に砂付着　反転復元
737	5	G3368	2a層	甕		12.5	(7.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着　反転復元
738	5	G3376	2a層	甕		12.8	(7.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR5/3	にぶい橙	反転復元
739	5	G3385	2a層	甕		13.6	(10.6)	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
740	5	G3356	2a層	甕		15.1	(6.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部完形
741	6	SB150	埋2.2b層	高坏	16.2	12.4	(14.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
742	6	SB150	埋2層	壺			(3.5)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	口縁に刻目文
743	6	SB150	埋2層 西端落ち込み	壺	22.0		(37.7)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/6	橙	刻目文　貼付突帯　黒変
744	6	SB150	埋2層	壺	20.8	8.9	35.3	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	貼付突帯　黒斑あり
745	6	SB150	埋2b層	壺	15.5	6.2	17.1	10YR6/6	明黄褐	10YR6/6	明黄褐	
746	6	SB150	埋2.2b層	壺			(12.2)	5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	貼付突帯刻目文　黒班　反転復元
747	6	SB150	埋2層	甕	30.3		(4.2)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
748	6	SB150	埋2層	甕	26.6		(5.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
749	6	SB150	2a層	甕		5.8	(2.7)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
750	6	SB150	埋2層	甕		12.7	(5.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着
751	6	SB150	埋2層	甕		11.2	(7.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内底面にスス付着
752	6	SB150	埋2層.34.35.36	壺	20.0	8.0	63.0	5YR6/6	橙	5YR2/1	黒褐	貼付突帯　黒斑
753	6	SB150	埋2層.41	壺	15.0	7.3	(18.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	反転復元
754	6	SB151	埋1層	甕	19.0		(8.9)	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	反転復元
755	6	SB152	埋4.7.8層.337.323	鉢	17.5	4.2	(9.9)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	
756	6	SB152	埋4層.224	高坏	29.4		(10.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	内面は放射線状に暗文
757	6	SB152	埋4層. 144.130.135	壺	10.5	6.5	22.1	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着　櫛描直線文 指頭圧痕
758	6	SB152	埋6層.302.306	壺	16.6	7.2	18.4	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	全体にスス付着
759	6	SB152	埋4層.215	壺		4.7	(4.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着
760	6	SB152	埋4層.63	壺		5.7	(12.5)	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄橙	
761	6	SB152	埋4.5層. 134.135.136.他	壺	13.4	9.3	46.2	5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	黒斑あり

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
762	6	SB152	試掘 15	壺	14.3	7.1	44.9	5YR6/6	橙	5YR5/4	にぶい赤褐	外面にスス付着　内面に黒変
763	6	SB152	埋 4 層 .63	甕	20.7		(20.0)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	スス付着　煮たき痕　反転復元
764	6	SB152	埋 4 層	甕	19.0		(15.9)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
765	6	SB152	埋 4.5 層 . 135.204.211. 他	甕	23.2		(18.2)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	工具痕あり
766	6	SB152	埋 4 層 . 152.291 299.208 他	甕	25.4		(26.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着　反転復元
767	6	SB152	埋 4 層	甕	18.4	11.5	(33.6)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	スス付着
768	6	SB152	埋 4 層 .115	甕	19.8		(16.0)	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/4	橙	スス付着　反転復元
769	6	SB152	埋 6 層 . 埋 6b 層 . 315.316.317.319	甕	19.0	11.4	(20.6)	10YR8/4	浅黄褐	10YR7/6	明黄褐	外面全体にスス付着
770	6	SB152	埋 6 層 .309 310.311 他	甕	15.9		(33.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着
771	6	SB152	埋 4 層	甕	18.6	12.9	37.9	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	スス付着
772	6	SB152	埋 4 層 .112 113.114 123.180	甕		11.7	(23.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
773	6	SB152	埋 4 層 .237 249.246.282 他	甕	20.6	14.8	40.3	10YR7/6	明黄褐	10YR7/4	にぶい黄橙	スス付着　外凹面にスス付着
774	6	SB152	埋 4.5 層 .166.169	甕	18.1	12.8	43.2	7.5YR7/6	橙	7.5YR5/4	にぶい褐	外面全体にスス付着　内面に煮炊き痕で変色
775	6	SB152	埋 3.6 層 .55	甕		13.9	(6.7)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	外凹面に砂付着
776	6	SB152	埋 6 層 .307.309	甕		13.7	(7.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/3	にぶい褐	外凹面に砂付着　スス付着　指頭圧痕
777	6	SB152	埋 4 層 .116 160.298	甕		12.6	(9.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/3	にぶい褐	外凹面に砂付着　スス付着　指頭圧痕
778	6	SB152	埋 4 層 73	甕		13.4	(10.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YTR6/3	にぶい褐	
779	6	SB155 SB156	埋 1 ～ 6 層	壺	7.4	3.4	(9.6)	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	櫛描波状文
780	6	SB155 SB157	埋 2.3.4 層 . 埋 2 b 層	壺	10.2		(6.4)	5YR6/8	橙	5 YR6/6	橙	
781	6	SB155	埋 2 層	甕			(4.5)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
782	6	SB156	埋 2 層	鉢	19.0		(3.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい橙	
783	6	SB156	埋 1 層	壺	26.3		(1.7)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	口縁端部につまみ出し痕
784	6	SB156 SB163	埋 2a 層 . 埋 3 層	壺	3.8		(4.4)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	櫛描波状文
785	6	SB156 SB161	埋 1.2.3 層	甕	23.7		(13.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着
786	6	SB156	埋 2 層	甕	19.4		(9.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
787	6	SB156	埋 2.3 層	甕	16.0		(10.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
788	6	SB156	埋 1.2 層	甕		6.7	(8.1)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/2	灰褐	内面にスス付着　底部外凹面に砂粒付着
789	6	SB156	埋 2 層	甕		11.2	(6.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内面にスス付着　底部外凹面に砂粒付着
790	6	SB156	埋 2.3.3b 層	甕	22.1	11.2	36.7	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	G3340　底部外凹面に砂粒付着 外面と脚部にスス付着
791	6	SB157	埋 1 層	鉢	16.2		(4.8)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい橙	
792	6	SB157	埋 4 層	鉢	13.4		(2.9)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
793	6	SB157	埋 1.2.2 a 層	甕	27.3		(35.3)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着 .
794	6	SB158	埋 1 層	壺	20.0		(5.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	貼付突帯
795	6	SB158	埋 1b 層	甕	17.2		(4.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面共に黒変している
796	6	SB158	埋 1 層	甕	22.8		(28.3)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
797	6	SB158	埋 1.1b 層	甕	16.4	10.9	(33.9)	10YR7/6	明黄褐	10YR7/4	にぶい黄橙	外面に黒斑あり
798	6	SB158	埋 1.1b 層埋 2 層	甕	22.2	11.1	(35.3)	7YR7/4	にぶい橙	7YR7/4	にぶい橙	外面にスス付着
799	6	SB158	埋 1 層	甕		14.1	(7.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	脚部のみ完形
800	6	SB158	埋 1.1b 層	甕	18.4		40.0	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	底部外凹面に砂付着
801	6	SB159	埋 1 層	高坏		15.1	(9.4)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
802	6	SB159	埋 1 層	甕		13.6	(6.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外凹面に砂付着
803	6	SB159	埋 1 層	甕		12.2	(4.9)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
804	6	SB161	埋 2 層	壺		8.4	(6.0)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
805	6	SB161	埋 3 層	甕	22.4		(9.6)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
806	6	SB161	埋 3 層	甕	22.1		(18.3)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	スス付着
807	6	SB163	埋 2.4 層	鉢	16.8		(3.3)	5YR6/8	橙	7.5YR7/6	橙	反転復元

RP番号	区	遺構	層位	器種	口径	底径	器高（残存高）	色調（外）	土色名	色調（内）	土色名	備考
808	6	SB163	埋３層	鉢		7.6	(2.2)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/2	灰褐	スス付着　内面が黒い　反転復元
809	6	SB163	埋３層	鉢			(2.3)	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	穿孔２個対で計４個の穿孔有り
810	6	SB163	埋３層	壺			(2.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	口唇端部に刻文
811	6	SB163	埋3.4層	鉢	12.3		(6.3)	2.5YR6/8	橙	5YR6/6	橙	内面に放射状暗文　黒変
812	6	SB163	埋２層	高坏		13.2	(2.4)	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	穿孔１箇所残存　反転復元
813	6	SB163	埋2.4層	高坏			(8.9)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	反転復元
814	6	SB163	埋３層	壺	13.8		(4.4)	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	反転復元
815	6	SB163	埋１層	壺			(4.5)	5YR6/6	橙	10YR3/1	黒褐	指頭圧痕　反転復元
816	6	SB163	埋２層	壺			(10.2)	7.5YR7/6	橙	10YR7/4	にぶい黄橙	反転復元
817	6	SB163	埋４層	壺	16.0		(8.3)	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	反転復元
818	6	SB163	埋３層	壺		4.3	(3.2)	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	器厚が 1cm もある指頭圧痕
819	6	SB163	埋1.2.3層	甕	23.2		(5.8)	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	反転復元
820	6	SB163	埋1.2.3.4層	甕	20.8		(21.1)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	スス付着
821	6	SB163	埋3.4層	甕		13.4	(21.3)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	内面にスス付着砂粒沈殿
822	6	SB163	埋1.2.3層	甕		11.8	(5.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	外凹面に砂付着　反転復元
823	6	SB163	埋３層	甕		13.5	(6.9)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	外凹面に砂付着　反転復元
824	6	SB164	埋１層	壺	16.0	7.0	(39.4)	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙	スス付着
825	6	SB164	埋１層	甕	19.7	13.0	(32.2)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	スス付着
826	6	SB164	埋1.2層	甕		13.5	(11.9)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/3	にぶい褐	
827	6	SB164	埋１層	甕		13.0	(5.5)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
828	7	SB165	埋３a層埋２b層	壺	6.8		(4.7)	5YR5/8	明赤褐	5YR6/6	橙	櫛描波状文　反転復元
829	6	SB165	埋3.4層	壺	14.9	5.1	(29.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR8/4	浅黄橙	貼付突帯刻目文　外面にスス付着
830	7	SB165	埋４ａ層	甕	19.2	11.6	38.0	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	外面全体にスス付着
831	6	SB166	埋1.2層	甕	21.4	12.1	(36.8)	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	外面にスス付着　内面に煮炊き痕
832	6	SB166	埋1.2層	甕	19.2	12.0	(27.5)	2.5YR7/4	浅黄	2.5YR7/4	浅黄	スス付着
833	6	SB168	埋２ｂ層	鉢	15.2		(4.6)	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
834	6	SB168	埋2b層	甕		10.5	(6.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	脚部のみ残存
835	6	G3400	２層	鉢	18.8		(3.6)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
836	6	G3348	2a層	高坏	19.4		(2.2)	7.5YR4/2	灰褐	7.5YR4/2	灰褐	
837	6	G3319	２層一括	高坏	21.6		(1.7)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
838	6	G3348	2a層	高坏	30.0		(4.6)	10YR7/4	にぶい黄褐	10YR7/4	にぶい黄褐	
839	6	G3348	３層	壺	14.8		(2.9)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	口唇端部に刻目文
840	6	トレンチ	トレンチ一括	壺	18.8		(3.5)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	刻目文
841	6	G3348		壺	16.2		(8.7)	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	
842	6	G3368	2a層	壺	13.6		(6.2)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	突帯　粘土重ね痕
843	6	G3308	１層	壺		7.5	(3.6)	7.5YR5/8	明褐	7.5YR4/3	褐	
844	6	G3440	トレンチ	甕	不明		(2.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	残りが少ないため詳細不明
845	6	G3348	2a層	甕	27.4		(6.5)	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	貼付突帯
846	6	G3368	2a層	甕	20.0		(13.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面にスス付着
847	6	G3358	2a層	甕	26.6		(12.1)	5YR5/6	明赤褐	7.5YR6/6	橙	外面にスス付着
848	6	G3359 Pit7112	pit7112	甕			(9.8)	10YR6/3	にぶい黄褐	10YR6/2	灰黄褐	
849	6	G3348	2a層	甕		14.0	(9.3)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
850	6	G3348	2a層	甕		16.5	(10.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	

RQ番号	区	遺構No.	層位	注意事項	器種	石材	長さ	幅	厚み	重さ (g)	備考
1	1	SB1	2a		石皿	凝灰岩	42.5	29.3	16.0	30.7kg	表面に石皿として使用した為か円形状の広がりを持ったすり痕がある
2	1	SB2	1	南北SECベルト　G	その他	片岩	2.7	4.2	0.4	5.4	
3	1	SB4	2・2a・2b	南東G 4316G・4430G(2区)	砥石	砂岩					3個体を接合したもの　使用面3箇所　裏面欠損
4	1	SB4			台石	輝石安山岩	10.4	10.3	3.5	474.3	廃棄後に他の石と大きさを揃える為に割ったものか？
5	1	SB6	2c	Kpit内	磨製石斧	頁岩	6.3	5.9	2.55	122.8	両端欠損　表面を丁寧に磨いて成形している
6	1	SB6	2	南東G　南側壁近く RQ292	砥石	リソイダイト（天草陶石）	7.1	3.0	1.9	35.1	両端は欠損、4面使用
7	1	SB6		南東Gベッド上	砥石	凝灰岩	10.0	6.8	3.8	361.4	4面使用　表面は滑らか使い込まれている
8	1	SB7			砥石	安山岩	9.7	7.2	4.0	338.0	中砥　先端部は欠損　5面使用
9	1	SB7			砥石	リソイダイト（天草陶石）	13.8	5.8	2.4	167.9	仕上げ砥　　接合箇所に段差あり、割れた後で個別に使用された？
10	1	SB7			砥石	砂岩	6.75	8.8	2.65	133.6	半分は剥離している
11	1	SB7			敲石	輝石安山岩	8.5	7.7	3.3	292.7	敲きに使用された打点が2箇所、側面の一部に擦痕あり
12	1	SB9	1		砥石	頁岩	12.5	8.65	3.0	346.1	SB6埋2層と接合　2個体の接合　仕上げ砥石
13	1	SB11	2	南東G	砥石	リソイダイト（天草陶石）	5.8	5.9	1.2	52.7	砥石片　表は滑らかに凹み、裏は粗い
14	1	SB11	2	南西G	砥石	砂岩	8.2	8.8	2.3	202.6	欠損面以外全て使用
15	1	SB11	2・2b	北西G 南北SEC・ベルト南西G	砥石	砂岩	11.2	8.2	6.8	629.3	荒砥用　　4面使用　両端欠損　No.11と接合したため再実測する
16	1	SB13	3	砥石（S4）	砥石	頁岩	6.4	2.6	1.1	18.1	砥石片　使用面1面以外剥落
17	1	SB13			砥石	泥岩	10.7	9.55	5.1	644.3	中砥用　　4面使用
18	1	SB18	1	南西G	敲石	輝石安山岩	8.1	7.6	5.9	552.7	敲打痕3箇所
19	1	SB19	3		台石	安山岩	18.3	7.6	3.2	862.4	表面に鉄分付着　表裏面共に、丁寧な敲打痕により面を平らにしている
20	1	SB19			石皿	凝灰岩	68.8	57.0	12.6	78.8kg	表面に使用痕あり
21	1	SB20			石皿	凝灰岩	42.9	35.5	14.8	35.9kg	表、裏面
22	1	SB21	1	南西G　床直	敲石	輝石安山岩	11.2	8.5	6.8	742.4	敲打痕が2箇所
23	1	SB23	1	南東G	石皿	輝石安山岩	12.7	13.4	4.0	923.2	表面に敲痕、裏面に磨り痕
24	1	G4440	2・2a	4323G・4326G・4337G・4347G(2区)	砥石	砂岩	9.9	8.9	3.0	253.4	裏面欠損　使用面は2箇所　表面の角に刃先が当たったような磨り痕あり　5個体を接合
25	1		撹乱		連盃	滑石	4.3	2.6	2.9	50.7	連盃　　全体にヘラ削りの後磨きが施される
26	1	G4442	2		磨石	安山岩	7.6	7.1	1.6（1.9）	158.9	廃棄後に付いたものか、全体に煤付着　ベンガラも付着
27	1	G4441	2		台石	輝石安山岩	11.5	7.8	2.3	315.1	
28	2	SB28			敲石	輝石安山岩	13.1	11.3	9.1	1643.9	敲打痕あり
29	2	SB28		北東G 北東主柱穴	石皿	凝灰岩	47.7	41.5	12.6	29.6kg	表面に多数のタタキ痕が確認できる　裏面は使用されていないので，表と断面を実測
30	2	SB29	1		石庖丁	頁岩	3.2	2.9	0.45	6.1	長方形を呈する　穿孔箇所から穴は2穴と推定　刃部は下辺のみ、黒褐色で煤付着か？
31	2	SB30			砥石	リソイダイト（天草陶石）	7.4	4.0	2.5	107.8	6面を使用している
32	2	SB30			砥石	砂岩	7.6	10.7	3.6	376.1	6面に使用痕あり
33	2	SB30			敲石	輝石安山岩	11.9	8.9	7.9	1196.2	磨り面は、よく使い込んである
34	2	SB30	2	北東G	敲石	輝石安山岩	9.7	7.8	9.2	1011.4	側面に敲打痕あり、打点から欠損している　被熱か敲きの衝撃で2個体に分離したもの　2個体を接合
35	2	SB30			石皿	凝灰岩	42.7	35.5	13.2	32.5kg	石皿の片方の側面にベンガラ付着
36	2	SB30			石皿	凝灰岩	44.4	40.9	10.5	29.8kg	表、裏とも使用痕　敲打痕（どんぐりを潰した）
37	2	SB31	1	南東G	石皿	輝石安山岩	11.0	9.3	5.9	688.3	煤付着、被熱で変色している面がある
38	2				石庖丁	頁岩	11.3	4.7	0.7	48.6	穿孔は両面から　穿孔に角度がある　刃部付近は丁寧な磨き
39	2	G4368	撹乱		砥石	砂岩	2.8	4.5	2.8	29.4	残存が少ない　擦痕もわずか
40	2		表土		砥石	リソイダイト（天草陶石）	6.0	3.5	1.6	50.2	6面に使用痕あり
41	2	G4326	2a	一括	敲石	輝石安山岩	10.2	7.4	9.2	1089.5	敲打痕あり

RQ番号	区	遺構No.	層位	注意事項	器種	石材	長さ	幅	厚み	重さ (g)	備考
42	3	SB45			石庖丁	頁岩	4.5	1.6	0.6	4.3	刃部の破片　全体は半月状と推測される　丁寧な作り
43	3	SB45	3		石皿	凝灰岩	59.1	40.6	10.8	34.0kg	表面のみ使用痕あり
44	3	SB48			石庖丁	砂岩	2.0	2.2	0.5	2.6	かまぼこ型を呈する　石庖丁端部片
45	3	SB48			砥石	砂岩	10.1	6.5	4.5	456.8	5面に使用痕
46	3	SB48			ハンマー	輝石安山岩	11.2	9.8	8.1	1433.2	ハンマー　全面を使用磨り痕あり　欠損部はハンマーとして叩いた打点から欠けたものと推測される
47	3	SB48			敲石	輝石安山岩	9.8	9.0	4.3	609.7	側面に磨り痕と敲き痕あり　煤付着と思われる箇所あり
48	3	SB48	3		石皿	凝灰岩	43.7	40.1	14.9	34.7kg	表面のみ使用痕あり
49	3	SB53	3		石庖丁	頁岩	6.5	4.4	0.7	25.8	半円形を成す中型の石庖丁　穿孔はほぼ中央に穿たれ、両刃を丁寧に形成している　刃こぼれが著しい
50	3	SB53		住居外？北側	砥石	砂岩	5.9	5.2	3.2	126.1	4面に使用痕
51	3	SB59		北西主柱穴内	砥石	リソイダイト（天草陶石）	9.3	5.3	3.9	255.2	4面に使用痕　先端部欠損後も使用していたと思われる
52	3	SB59			石皿	凝灰岩	53.9	43.2	15.3	48.0kg	表面に使用痕はないが、ベンガラ（質の悪い）が付着している　欠損している部分で比較的に新しい所は廃棄時に打ち欠いたものか？
53	3	SB60	1		敲石	輝石安山岩	11.4	11.8	6.7	1271.8	側面に敲き痕あり
54	3	SB60	1			凝灰岩	55.3	15.4	8.9	9.0kg	
55	3	G4343	2a		砥石	リソイダイト（天草陶石）	5.3	4.9	1.1	21.0	5面に使用痕あり
56	3	G4324	2a		砥石	砂岩	7.0	7.8	2.2	112.2	3面に使用痕あり
57	3	G4341	2a		砥石	リソイダイト（天草陶石）	8.05	6.0	1.7	100.8	4面に使用痕　元は小判型？
58	3	G4304	2a		砥石	リソイダイト（天草陶石）	2.8	1.8	1.1	8.1	鉈（やりがんな）を研ぐ砥石
59	3	G4340	撹乱		砥石	リソイダイト（天草陶石）	11.8	6.8	3.5	397.1	表裏面を使用
60	3	G4306	2a		敲石	輝石安山岩	9.1	7.2	7.6	678.2	敲きによる衝撃で剥離、被熱による剥落が見られる　丸みのある箇所は磨り石として使用か？
61	3	SB68		礎石	台石	凝灰岩	25.4	24.2	8.8	3.7kg	一か所打ちかいて台石として使用　ワラ打ちに作っていたと思われる
62	3	SB68		東	礎石	輝石安山岩	23.6	18.0	6.5	3807.4	礎石　浅久野掘立柱東側礎石　西側にも同様の石がある
63	4	SB78			磨石	輝石安山岩	10.4	8.2	7.1	1007.7	
64	4	SB82	2b	Kpit内	台石	輝石安山岩	10.0	10.8	7.0	1315.2	廃棄後に他の石と大きさを揃える為に割ったものか？
65	4	SB84	2a	南東G	砥石	リソイダイト（天草陶石）	3.2	2.5	6.0	6.6	表裏面に使用痕　裏面は欠損が広い
66	4	SB84	2a	Kpit内	砥石	砂岩	9.8	3.8	4.1	229.6	仕上げ用　4面に使用痕　表面に形成する為の打痕が残る
67	4	SB85			磨石	輝石安山岩	10.8	9.9	5.7	919.7	炉の近くにあった為か被熱により焼け爆ぜたと推測される
68	4	SB85			石皿	凝灰岩	39.8	31.5	9.6	20.1kg	表面には全体に使用痕が見られる　裏面は半分程度剥落し側面に向けて大きく欠損　中央から広くベンガラの付着と思われる赤が確認できる　特に薄いベンガラの部位がほぼ真ん中に見られる　（ベンガラの固まりが当たっていた？）
69	4	SB86	4	南東G	石庖丁	安山岩	3.4	4.2	0.7	12.0	片面に広い刃面を持つ両刃　片側に被熱痕の煤付着
70	4	SB86	掘方埋土		砥石	砂岩	4.8	2.6	9.5	20.0	表裏面に使用痕
71	4	SB86	4b		砥石	リソイダイト（天草陶石）	9.0	4.2	3.4	222.4	6面に使用痕あり
72	4	SB88	1		砥石	砂岩	11.9	3.0	8.65	386.1	5面に使用痕　　側面に小刀を研いだような痕が見られる
73	4	SB89	2		敲石	輝石安山岩	9.3	7.9	6.7	775.4	全面使用磨り痕あり　敲きによる打点も数箇所見受けられる
74	4	SB91			砥石	砂岩	11.8	8.6	6.6	550.9	3面に使用痕あり
75	4	SK93	1		砥石	輝石安山岩	5.9	3.95	2.0	75.8	中砥用砥石
76	4	SD77		大柱穴内№2	台石	輝石安山岩	14.0	11.2	3.4	826.0	表裏面2箇所使用

RQ番号	区	遺構No.	層位	注意事項	器種	石材	長さ	幅	厚み	重さ (g)	備考
77	4	G4319	1		石庖丁	片岩	7.7	3.0	0.7	25.0	穿孔は２穴　外孔径 A1.0　B1.2　裏 A1.2 B1.1、 内孔径 A0.35　B0.4　長方形を呈する　1/4 程を欠損　裏面剥離　幅広く両刃を形成
78	4	G3470	2a		磨石	輝石安山岩	9.1	7.7	5.8	673.3	ほぼ全面使用　欠損部は敲きによるものか？
79	4	G3388	2b		敲石	輝石安山岩	11.15	8.4	7.9	908.1	
80	5	SB105	3		砥石	砂岩	3.4	4.3	1.6	34.9	両端部に欠損　４面を使用
81	5	SB105		Kpit	磨石	輝石安山岩	13.5	11.35	8.3	1629.7	全体を使用　1/4 ほど欠損
82	5	SB105	3・4	３層焼土中	敲石	輝石安山岩	9.7	7.7	6.7	798.7	４層 No.28 と接合　別の層中から出土した個体を接合 敲打痕から剥離したものと推測される
83	5	SB105	3		石皿	凝灰岩	39.0	35.3	13.8	31.1kg	表面はツルツルして全体的に使用痕が見られる
84	5	SB106			台石	輝石安山岩	11.3	10.0	14.5	1909.6	土中に埋めて台石として使用
85	5	SB106	4	南西 G	その他	安山岩	3.0	2.3	1.55	10.9	用途不明　ベンガラ付着
86	5	SB108	5	北東 G	砥石	リソイダイト（天草陶石）	9.6	4.0	1.4	68.7	被熱による欠損（焼き割れ）　赤く変色
87	5	SB108	4	北東 G	磨石	輝石安山岩	8.0	7.6	4.8	451.4	表裏面を使用
88	5	SB108	4b		石皿	輝石安山岩	23.9	24.5	12.9	10.89kg	表裏面を使用　敲打痕　磨り痕
89	5	SB108	4b		石皿	凝灰岩	48.4	41.3	17.5	59.2kg	表面だけ使用したと思われる　使用痕があり、石の表面がツルツルしている
90	5	SB110	2	南西 G	砥石	頁岩	6.3	4.3	1.2	20.4	３面を使用
91	5	SB110	6		敲石	輝石安山岩	11.9	9.0	7.55	919.1	使用面（灰色）と剥離面（茶色）の色が著しく違うので、使用していた時点で割れたと思われる 茶色の変色は、被熱か鉄分の多い土中の影響？
92	5	SB110			台石	角閃石安山岩	13.9	11.1	2.6	723.1	
93	5	SB110	6	南西 G	台石	輝石安山岩	13.2	11.95	8.7	1858.6	表裏面を使用　表面にベンガラ付着
94	5	SB110	6	南東 G	台石	輝石安山岩	15.0	10.25	10.85	2065.6	側面にベンガラ付着
95	5	SB113	2		石庖丁	頁岩	2.3	2.9	0.4	5.1	内孔径 0.4、外孔径 0.6　かまぼこ型を呈する 剥落が著しい　紐部の穿孔は表側より行ったと推定　刃面幅表 : 裏＝ 2:1 で両刃を成形　No.196 と接合
96	5	SB113	2		石庖丁	片岩	12.2	5.05	0.6	66.0	刃部幅 0.6　穿孔は両面から　刃こぼれが著しい
97	5	SB113	2		台石	凝灰岩	31.6	25.8	9.1	9.3kg	表面の一部にすり痕があり、ツルツルしている 裏面に目立った使用痕はない
98	5	SB114	2	南東 G	砥石	砂岩	6.2	5.5	2.3	96.9	鋭利な刃先を研いだと思われる
99	5	SB114	1	北東 G・3377G 埋 2a	砥石	泥岩	4.8	3.2	0.9	22.2	3377G 埋 2a と接合　２個体の接合　５面使用
100	5	SB116	2		砥石	安山岩	8.2	4.0	3.8	120.4	中砥の砥石片　使い込まれるうちに上下両側面が凹み割れたと思われる
101	5	SB116	2c		台石	凝灰岩	48.2	45.7	8.6	27.4kg	表面と断面のみ実測　裏面は使用痕なし
102	5	SB117	1	南西 G	石庖丁	頁岩	5.3	3.3	0.7	15.8	穿孔は両面から、孔は２段になっている　表面は横方向に擦痕
103	5	SB117			砥石	リソイダイト（天草陶石）	9.3	5.6	4.7	281.8	仕上げ用砥石　３面に使用痕
104	5	SB117			砥石	リソイダイト（天草陶石）	7.0	5.3	2.2	123.8	３面に使用痕
105	5	SB117	10	北西 G	砥石	泥岩	15.0	5.9	2.2	237.4	４面に使用痕があるが、顕著なのは１面のみ
106	5	SB117	9a	南西 G	砥石	砂岩	8.3	8.5	3.4	286.8	４面使用　鋭利な刃先などを研いだと思われる
107	5	SB117	7	南東 G	砥石	砂岩	5.8	7.2	2.8	135.4	両端を欠いた荒砥　使い込むうちに割れたものか？
108	5	SB117	9a	南西 G	台石	安山岩	11.5	7.45	8.25	864.2	表裏面に薄いベンガラ付着　側面のベンガラが濃い
109	5	G3357	2a		石庖丁	頁岩	7.5	3.5	0.7	25.3	穿孔径 0.4　No.144 と接合　穿孔は両側から 全体に黒いが被熱して外側が白っぽい
110	5		2a		石庖丁	頁岩	3.9	4.1	0.6	10.7	穿孔は両面から、刃部は両面共に幅が狭い
111	5	G3386	2a		砥石	リソイダイト（天草陶石）	3.9	1.8	0.5	4.1	３面に使用痕あり
112	6	SB150	2	南西 G	石庖丁	片岩	0.7	1.1	0.2	0.2	No.155 と接合　石庖丁の破片　穿孔部に擦痕
113	6	SB150			砥石	リソイダイト（天草陶石）	6.1	4.5	1.2	27.6	５面に使用痕
114	6	SB150	2		砥石	砂岩	12.1	7.1	3.1	351.0	３面に使用痕

RQ番号	区	遺構No.	層位	注意事項	器種	石材	長さ	幅	厚み	重さ (g)	備考
115	6	SB150	2b		砥石	リソイダイト（天草陶石）	10.3	5.5	3.8	148.8	4 面に使用痕（磨り面あり）
116	6	SB150	2		敲石	輝石安山岩	8.35	7.7	5.6	555.0	敲打痕 2 箇所　底面に磨り痕
117	6	SB150		床直	台皿	凝灰岩	53.5	50.6	8.95	32.4kg	表面に広く、すり痕が見られる　また、一部に煤か？と思われる黒い付着ヶ所がある　裏面に目立った使用痕はない
118	6	SB151			石庖丁	頁岩	9.3	2.8	0.7	27.7	穿孔 2 穴　外孔径 A1 0.8　A2 0.9、裏 A1　0.9　裏 A2　0.95、内孔径 A1　0.5　A2 0.45　長方形を呈する　穿孔に紐擦れの痕が見られる　刃は両刃、表面 A に擦痕が顕著
119	6	SB152	3	北西 G	石庖丁	不明	4.3	4.6	0.7	13.7	孔径 0.2　穿孔は両側から　両刃と推定されるが、磨きが粗雑なために本体と刃部の境目が判別しにくい　石材は馬場先生が見ても不明でした
120	6	SB152	1	南東 G	その他	凝灰岩	3.5	3.1	2.5	12.6	阿蘇黄土か？（ベンガラの原料）人為的な穴のように見える植物の茎様の穴が空いている
121	6	SB152	4		砥石	頁岩	13.2	4.6	4.6	432.3	3 面に使用痕
122	6	SB162	4		敲石	輝石安山岩	10.9	9.95	8.35	1155.6	炉の側にあったのか煤付着、茶褐色～黒褐色の変色が見られる
123	6	SB152	4		磨石	輝石安山岩	9.6	7.6	6.9	717.2	底部と側面に磨り痕　僅かに敲打痕も確認できる
124	6	SB152	5		磨石	輝石安山岩	10.4	8.5	6.6	960.0	敲石に転用した敲打痕あり
125	6	SB152	5		石皿	凝灰岩	59.1	35.2	10.1	33.5kg	裏面は土の中に入っていたのか、赤土が全体に付着している
126	6	SB156	1	南西 G	砥石	頁岩	2.7	2.0	0.8	7.3	2 面使用痕　剥離が大きい
127	6	SB156	3	南東 G	砥石	安山岩	4.2	3.2	1.0	14.8	4 面に使用痕あり　仕上げ用砥石
128	6	SB156	3		砥石	リソイダイト（天草陶石）	5.7	2.1	1.7	29.5	4 面使用　小型砥石
129	6	SB156	2b		敲石	輝石安山岩	8.65	8.60	6.75	669.3	鉄ハンマー　使用面が黒く変色している
130	6	SB156	2a		石皿	凝灰岩	26.8	16.8	11.7	7.4kg	裏面と側面は欠損しており、全体像は不明　表面と断面のみ実測　欠損部分の面が比較的新しいので廃棄時に打ち欠いたのか？
131	6	SB156			石皿	凝灰岩	44.4	26.0	11.3	29.8kg	表面、全面を使用したと思われツルツルしている
132	6	SB157	2	北東 G	石庖丁	輝石安山岩	3.4	4.1	0.7	13.4	磨製石庖丁の一部　欠損しているが穿孔も確認できる
133	6	SB157	4	北西 G	砥石	砂岩	4.4	3.9	2.9	47.8	1 面のみ使用痕あり　砥石の破片
134	6	SB158	1b		敲石	輝石安山岩	8.3	8.3	4.9	422.3	側面に敲き痕あり
135	6	SB158			石皿	凝灰岩	35.6	33.0	12.9	27.4kg	ツルツルして使用された痕跡あり　一か所金属が当たって削れたような部分がある　裏面も使用痕あり
136	6	SB159			砥石	砂岩	5.8	6.5	1.8	89.6	仕上げ砥石　3 面に使用痕
137	6	SB161			石庖丁	頁岩	3.7	1.8	0.6	4.7	全体の 6/1 程度残存、刃部欠損のため両刃か分からず　背部は煤で黒く光沢を持つ
138	6	SB161	2		石庖丁	凝灰岩	3.3	3.6	0.6	10.2	孔径 0.3（復元値）　穿孔は両側から　紐で擦れた痕がある
139	6	SB161	3		その他	蛇紋岩	3.1	2.85	0.2	3.2	一部欠損　表裏共に丁寧な磨き
140	6	SB161	2		砥石	リソイダイト（天草陶石）	6.3	2.1	1.1	21.9	表裏に使用痕　携帯用の小型砥石
141	6	SB161	3		砥石	砂岩	4.2	5.4	1.9	52.4	5 面に使用痕
142	6	SB161	3	南西 G	砥石	リソイダイト（天草陶石）	2.8	2.6	1.15	6.5	仕上げ用砥石
143	6	SB161	2		紡錘車	片岩	半径3.5			27.7	
144	6	SB161			石皿	凝灰岩	39.4	32.2	7.2	13.4kg	表、裏使用痕あり
145	6	SB161	3		敲石	輝石安山岩	8.3	7.3	6.0	503.8	楕円形で使用面以外凹凸が無く丸い
146	6	SB163	3	ベルト　北東 G	砥石	砂岩	3.3	2.15	1.5	2.57	中砥用砥石
147	6	SB163	4	北西 G	砥石	頁岩	5.4	4.9	1.3	37.2	3 面に使用痕
148	6	SB163	3	北東 G	砥石	頁岩	5.3	3.2	1.3	23.6	仕上げ用砥石　4 面に使用痕
149	6	SB163	4		台石	凝灰岩	46.4	10.0	8.5	6.8kg	住居内から出土したが、使った痕跡はなく使用目的は不明である
150	6	SB163	3・4		台石	輝石安山岩	39.0	13.4	5.8	3796.8	SB163030（3 層）と SB163037（4 層）の 2 個体の接合
151	6	SB163			台石	輝石安山岩	17.0	15.3	8.4	2931.8	
152	6	SB165	Kpit		その他	砂岩	4.5	4.0	2.1	27.2	酸化鉄を多く含んだ土壌にあった為か、被熱の為か、黒変が見られる

RQ番号	区	遺構No.	層位	注意事項	器種	石材	長さ	幅	厚み	重さ (g)	備考
153	6	SB165	3a		石皿	凝灰岩	52.0	41.1	14.0	38.3kg	表面だけ使用痕あり
154	6	SB167	2	貼床上	石皿	凝灰岩	68.3	34.4	16.7	59.8kg	どんぐりを潰した痕があり、刃物のような物で削ったような痕が残っている　表面のみ使用痕あり
155	6		2a		石庖丁	凝灰岩	3.7	3.7	0.5	7.7	長方形を呈する　やや薄めの刃で緩やかな両刃
156	6		2a		砥石	リソイダイト（天草陶石）	4.6	1.7	2.1	21.3	4 面に使用痕
157	6		2a		紡錘車	滑石	3.75	3.7	0.7	12.2	滑石製の紡錘車　縁に僅かな面が残っているのは、形成した際の面取りの痕
158	6		Pit	地点消失 P7111 周辺	磨石	輝石安山岩	10.75	10.25	7.95	1432.4	磨り痕、敲打痕あり　表面の一部に煤付着　側面はベンガラにより褐色がかっている

RM番号	器種	長さ(mm)	幅（mm）	厚さ(mm)	推定(mm)	調査区	グリッド	層	X	Y	H	備考
1	鏃	44.5	21.5	3.0		4区	4308G	2層	-	-	-	RM774
2	鏃	36.0	19.0	1.5	55.0	6区	-	2層	340.341	382.880	475.849	RM1330
3	鏃	41.5	22.5	1.5	25.5	4区	4309G	2層	-	-	-	RM775
4	鏃	16.0	7.5	2.0		3区	4321G	2層	429.107	312.583	475.002	RM510
5	鏃	14.0	7.0			6区	3348G	2層	-	-	-	RM2500
6	鏃	15.5	20.0	4.0		3区	3395G	2層	-	-	-	RM422
7	鏃	17.0	16.0	1.0	18.5	3区	4304G	2層	-	-	-	RM479
8	鏃	14.0	1.5			3区	4332G	2層	430.208	320.203	474.954	RM506
9	鏃	12.5	14.0	1.0		3区	4314G	2層	413.537	343.408	475.099	RM450
10	鏃	14.5	15.0	1.0		2区	4344G	2層	-	-	-	RM338
11	鏃	16.5	16.0	1.0		3区	4324G	2層	-	-	-	RM370
12	鏃	17.0	19.5	2.0		2区	4356G	1層	457.134	362.809	474.880	RM171
13	鏃	21.0	9.0	1.5		3区	4304G	2層	-	-	-	RM562
14	鏃	14.0	17.5	2.0		3区	4314G	2層	416.002	340.195	475.147	RM452
15	鏃	20.0	16.0	1.0		5区	3386G	2層	-	-	-	RM2713
16	鏃	21.0	14.0	1.0		4区	4308G	2層	-	-	-	RM761
17	鏃	20.0	15.0	1.5		3区	4305G	2層	-	-	-	RM481
18	鏃	22.0	15.5	1.0		3区	4313G	2層	-	-	-	RM496
19	鏃	19.0	20.0	2.0		7区	-	埋3層	-	-	-	RM2863、遺構出土？
20	鏃	19.5	20.0	1.5		4区	4318G	2層	419.758	387.039	475.628	RM649
21	鏃	17.5	21.5	2.0		1区	4480G	2層	-	-	-	RM208
22	鏃	25.0	25.0	1.0		6区	3358G	2層	-	-	-	RM1999
23	鏃	18.5	19.5	1.5	23.5	5区	3367G	2層	-	-	-	RM2411
24	鏃	21.0	9.0	1.5		3区	4304G	2層	-	-	-	RM562
25	鏃	13.5	13.0	1.0		3区	4304G	2層	-	-	-	RM573
26	鏃	16.5	17.0	0.5		4区	4308G	2層	-	-	-	RM761
27	鏃	16.5	11.0	1.0	27.0	3区	4333G	2層	-	-	-	RM419
28	鏃	23.0	15.0	1.0		6区	3339G	2層	-	-	-	RM2443
29	鏃	24.5	12.0	0.5		4区	4329G	2層	-	-	-	RM909
30	鏃	28.5	11.0	1.0		4区	4317G	2層	-	-	-	RM924
31	鏃	22.5	11.5	0.5		4区	3398G	2層	-	-	-	RM1192
32	鏃	31.0	14.5	1.5		4区	3379G	2層	-	-	-	RM745
33	鏃	31.0	14.0	1.0		2区	4346G	2層	448.528	369.288	475.161	RM145
34	鏃	33.0	16.0	1.5		5区	3386G	2層	388.074	363.259	475.519	RM1255
35	鏃	32.5	15.0	1.0		3区	4304G	2層	-	-	-	RM479
36	鏃	25.0	16.0	0.5		4区	撹乱	1層	-	-	-	RM747
37	鏃	31.5	15.5	1.0	38.0	2区	4356G	2層	-	-	-	RM238
38	鏃	33.5	16.5	1.5		3区	4315G	2層	-	-	-	RM378
39	鏃	27.5	14.5	1.5	31.0	2区	4357G	2層	451.576	371.900	475.034	RM72
40	鏃	46.0	17.0	2.0		2区	4327G	2層	-	-	-	RM151
41	鏃	37.5	19.0	2.0		4区	3460G	2層	-	-	-	RM743
42	鏃	47.5	21.5	2.0		3区	4304G	2層	-	-	-	RM562
43	鏃	51.0	22.5	2.5		3区	4331G	2層	436.678	313.507	474.929	RM1114
44	鏃	39.0	15.0	2.0	54.5	3区	4306G	2層	408.592	362.846	475.389	RM314
45	鏃	41.0	11.5	1.5		5区	-	2層	351.018	370.793	475.827	RM1308
46	ヤリガンナ	22.0	15.0	1.5		5区	3357G	2層	-	-	-	RM2004
47	ヤリガンナ	25.0	10.0	1.0		3区	4341G	2層	-	-	-	RM561
48	ヤリガンナ	25.5	13.0	1.5		2区	4334G	1層	-	-	-	RM321
49	ヤリガンナ	28.0	13.5	1.0		5区	-	1層	-	-	-	RM1459
50	ヤリガンナ	25.0	12.5	0.5		5区	3395G	2層	391.491	357.810	475.423	RM1247
51	ヤリガンナ	38.5	12.5	1.0		5区	-	2層	362.182	383.882	475.780	RM1280
52	ヤリガンナ	29.8	14.5	1.0		5区	-	2層	355.144	375.592	475.924	RM1311
53	ヤリガンナ	27.5	17.5	1.0		2区	4347G	2層	-	-	-	RM241
54	ヤリガンナ	27.0	15.5	1.5		3区	4315G	2層	-	-	-	RM379
55	ヤリガンナ	33.5	13.5	1.0		3区	4333G	2層	-	-	-	RM427
56	ヤリガンナ	44.5	15.5	2.0		2区	4357G	2層	-	-	-	RM69
57	ヤリガンナ	46.0	10.0	1.0		6区	-	2層	354.158	395.173	476.113	RM1315
58	ヤリガンナ	49.0	15.5	1.0		3区	4305G	2層	-	-	-	RM585
59	ヤリガンナ	50.5	13.0	1.5		4区	3460G	2層	361.419	402.788	476.197	RM668
60	ヤリガンナ	56.0	15.0	2.0		3区	4263G	3層	-	-	-	RM1446

RM番号	器種	長さ(mm)	幅（mm）	厚さ(mm)	推定(mm)	調査区	グリッド	層	X	Y	H	備考
61	ヤリガンナ	39.0	12.5	1.0		5区	3347G	2層	-	-	-	RM2494
62	ヤリガンナ	38.5	14.5	1.5		2区	4347G	2層	-	-	-	RM67
63	ヤリガンナ	25.0	9.5	1.5		2区	4337G	2層	-	-	-	RM231
64	ヤリガンナ	28.5	12.0	1.0		3区	3395G	2層	-	-	-	RM422
65	ヤリガンナ	18.0	13.0	0.5		5区	3369G	2層	-	-	-	RM2813
66	ヤリガンナ	15.0	10.0	1.0		2区	4338G	2層	-	-	-	RM196
67	ヤリガンナ	142.0	13.5	1.5	142.0	4区	4309G	2層	-	-	-	RM787
68	刀子	99.0	12.0	1.5	109.0	3区	4315G	2層	417.820	356.362	475.354	RM307
69	刀子	68.0	15.5	1.5		4区	4318G	2層	416.279	383.950	475.669	RM652
70	刀子	19.0	10.5	1.0		2区	4356G	1層	459.746	365.551	474.897	RM173
71	刀子	39.0	13.0	1.5		4区	4308G	2層	408.319	386.844	475.704	RM656
72	刀子	26.0	14.5	1.0		5区	3376G	2層	-	-	-	RM2492
73	刀子	28.5	13.5	1.5		4区	4307G	2層	409.230	376.246	475.579	RM662
74	刀子	13.0	13.0	0.5		2区	4326G	2層	426.715	362.157	475.321	RM139
75	刀子	31.0	11.0	1.5		3区	4314G	2層	411.698	343.633	475.375	RM449
76	刀子	21.5	8.5	1.0		3区	4305G	2層	-	-	-	RM596
77	刀子	26.5	11.0	1.0		3区	4305G	2層	401.825	354.468	475.440	RM436
78	刀子	31.0	9.5	2.0		3区	4315G	2層	411.152	358.297	475.386	RM306
79	刀子	29.0	12.5	2.0		5区	3376G	2層	-	-	-	RM2502
80	刀子	36.5	9.5	1.5		5区	3367G	2層	368.523	373.269	475.742	RM1289
81	刀子	46.5	9.0	2.0		2区	4347G	2層	441.407	376.022	475.235	RM74
82	刀子	36.5	12.5	3.0		1区	4480G	2層	-	-	-	RM10
83	刀子	46.5	13.5	2.0		4区	4309G	2層	-	-	-	RM775
84	刀子	23.5	11.5	1.5		5区	3358G	2層	-	-	-	RM1996
85	刀子	25.5	8.0	1.5		5区	-	1層	-	-	-	RM1437
86	斧	37.0	14.5	3.0		3区	4303G	2層	407.975	337.438	475.407	RM459
87	斧	38.5	15.5	2.0		4区	4308G	2層	-	-	-	RM761
88	斧	26.5	14.0	1.5		3区	4313G	2層	412.785	332.022	475.479	RM461
89	斧	39.0	16.0	3.0		2区	4367G	1層	469.810	373.136	474.832	RM178
90	斧	49.5	17.0	4.0		5区	-	2層	352.317	377.197	475.984	RM1310
91	斧	39.5	22.0	10.0		5区	3367G	2層	-	-	-	RM2471
92	中茎	59.0	9.5	2.0		4区	4370G	2層	370.352	401.030	476.048	RM667
93	中茎	43.5	5.0	4.0		5区	-	1層	-	-	-	RM1450
94	中茎	36.5	7.0	2.0		3区	4314G	2層	410.687	342.834	475.414	RM448
95	中茎	33.5	5.0	4.0		5区	-	2層	357.118	368.200	475.673	RM1306
96	中茎	26.0	5.0	4.0		6区	3326G	1層	-	-	-	RM2480
97	中茎	24.0	10.0	0.8		5区	-	1層	-	-	-	RM1437、トレンチ内
98	中茎	31.5	7.0	2.5		3区	4324G	2層	-	-	-	RM474
99	中茎	30.0	8.8	4.5		6区	3326G	1層	-	-	-	RM2480
100	中茎	26.0	8.5	3.0		5区	-	1層	-	-	-	RM1450
101	中茎	12.5	8.0	2.5		4区	4309G	2層	408.072	396.398	475.813	RM659
102	中茎	36.5	12.5	2.0		5区	3386G	2層	-	-	-	RM1256
103	摘鎌	87.0	28.0	6.0		5区	-	2層	357.118	368.200	475.673	RM1306、ＳＢ内？
104	摘鎌	69.5	28.5	8.0		4区	4309G	2層	402.204	392.678	475.557	RM665
105	摘鎌	38.0	49.5	5.0		5区	3356G	2層	-	-	-	RM2497
106	摘鎌	42.5	25.5	1.0		5区	3396G	2層	398.158	366.475	474.740	RM1251
107	摘鎌	29.5	24.0	2.5		5区	3396G	2層	-	-	-	RM2474
108	摘鎌	23.0	30.0	6.5		2区	4328G	2層	429.533	387.272	475.578	RM77
109	摘鎌	14.0	20.0	7.0		4区	4318G	2層	-	-	-	RM764
110	摘鎌	21.0	11.0	6.0		5区	3386G	2層	-	-	-	RM2804
111	摘鎌	21.5	21.0	0.5		5区	3387G	2層	-	-	-	RM2392
112	摘鎌	32.0	23.5	1.5		2区	4326G	2層	428.777	363.678	475.210	RM137
113	摘鎌	41.5	19.5	2.0		4区	4328G	2層	-	-	-	RM762
114	摘鎌	27.0	21.0	1.0		5区	3387G	2層	380.592	375.806	475.673	RM1262
115	摘鎌	18.0	20.0	1.5		1区	4379G	2層	-	-	-	RM211
116	摘鎌	25.5	14.5	3.0		2区	4354G	2層	-	-	-	RM252、地点消失
117	摘鎌	31.0	25.0	1.5		1区	4470G	2層	-	-	-	RM2896、SB17?
118	鉄片	22.0	19.0	1.5		6区	3347G	2層	-	-	-	RM2501
119	鉄片	26.5	20.5	1.5		3区	4303G	2層	408.356	335.881	475.473	RM458
120	鉄片	18.5	14.0	1.0		3区	4342G	2層	-	-	-	RM558

RM番号	器種	長さ(mm)	幅（mm）	厚さ(mm)	推定(mm)	調査区	グリッド	層	X	Y	H	備考
121	鉄片	24.0	10.5	1.5		6区	3359G	2層	-	-	-	RM2763、住居跡検出時
122	鉄片	23.0	10.0	1.0		6区	3359G	2層	-	-	-	RM2763、住居跡検出時
123	鉄片	25.5	26.0	2.0		2区	4336G	2層	430.884	366.164	475.239	RM136
124	三角鉄片	11.5	9.0	0.5		5区	3396G	2層	-	-	-	RM2719
125	三角鉄片	13.0	10.0	1.0		6区	3359G	2層	-	-	-	RM2886
126	三角鉄片	11.5	12.0	1.0		3区	4343G	2層	-	-	-	RM571
127	三角鉄片	16.5	10.0	2.0	20.0	5区	-	-	363.000	386.587	475.603	RM1278
128	三角鉄片	16.5	10.0	1.0		5区	3367G	2層	-	-	-	RM2471
129	三角鉄片	14.0	19.5	1.5		3区	4305G	2層	-	-	-	RM486
130	三角鉄片	18.0	10.0	1.5		5区	3394G	2層	-	-	-	RM1451
131	三角鉄片	19.5	17.5	1.0		5区	-	2層	370.117	374.848	475.590	RM1288
132	三角鉄片	15.0	16.5	1.5		5区	4306G	2層	-	-	-	RM1463
133	三角鉄片	21.5	14.5	1.5		4区	4329G	2層	420.983	395.963	475.758	RM646
134	三角鉄片	21.0	16.5	1.0		3区	4313G	2層	-	-	-	RM496
135	三角鉄片	22.5	18.5	1.0		3区	4314G	2層	410.422	343.209	475.442	RM447
136	三角鉄片	27.0	18.5	1.0		5区	-	2層	363.471	382.148	475.904	RM1281
137	三角鉄片	16.5	29.5	1.0		3区	4313G	2層	-	-	-	RM612

熊本県文化財調査報告　第 257 集
小野原遺跡群　黒川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告
2010 年 3 月 31 日　第 1 刷発行
編集　熊本県教育庁文化課
発行　熊本県教育委員会
〒 862-8609　熊本市水前寺 6-18-1
印刷　株式会社　河田印刷
〒 861-4101　熊本市近見 8-5-105
Printed in Japan.

２１　教委　教文

②　００８

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 257 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 小野原遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日